

京都府遺跡調査報告集

第150冊

1. 野条遺跡第17・19次
2. 京都第二外環状道路関係遺跡
 - (1)長岡京跡右京第970・1007・1024次・下海印寺遺跡
 - (2)長岡京跡右京第1024次・伊賀寺遺跡
 - (3)長岡京跡右京第1024次・奥海印寺遺跡
3. 上狛北遺跡第2次

2012

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



調査地遠景(南東から)



長岡京跡右京第970・1007・1024次、下海印寺遺跡調査地全景(合成：右上が北)



B地区奈良時代遺構面全景(南から)



土坑 S X96出土木簡・削屑

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは昭和56年4月に設立され、昨年度で創立30年を迎えました。また、昨年4月1日には公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターと法人名を変更いたしました。この間、当調査研究センターでは京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本書は『京都府遺跡調査報告集』として、平成22年度に京都府建設交通部の依頼を受けて実施した上狛北遺跡、平成22・23年度に国土交通省近畿地方整備局、京都府南丹広域振興局の依頼を受けて実施した長岡京跡、奥海印寺遺跡、下海印寺遺跡、伊賀寺遺跡、野条遺跡の発掘調査報告を収録したものです。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深めるうえで、ご活用いただければ幸いです。

発掘調査を依頼された各機関をはじめ、京都府教育委員会、南丹市教育委員会、長岡京市教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センター、木津川市教育委員会などの各関係機関、ならびに調査にご参加、ご協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成24年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 上 田 正 昭

例 言

1. 本書に収めた報告は下記のとおりである。

1)野条遺跡第17・19次

2)京都第二外環状道路関係遺跡

(1)長岡京跡右京第970・1007・1024次・下海印寺遺跡

(2)長岡京跡右京第1024次・伊賀寺遺跡

(3)長岡京跡右京第1024次・奥海印寺遺跡

3)上狛北遺跡第2次

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および報告の執筆者は下表のとおりである。

	遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
1.	野条遺跡第17・19次	南丹市八木町野条	平成22年7月5日 ～12月3日、 平成23年8月17日 ～12月22日	京都府南丹広域振 興局	高野陽子・ 古川 匠・ 大高義寛
2.	京都第二外環状道路 関係遺跡 長岡京跡 右京第970・1007・ 1024次・奥海印寺遺 跡・下海印寺遺跡・ 伊賀寺遺跡	長岡京市下海印寺西 条・川向井・奥海印 寺	平成21年4月8日 ～平成22年2月19日、 平成22年9月2日 ～平成23年2月3日、 平成23年4月6日、	国土交通省近畿地 方整備局	岡崎研一・ 増田孝彦・ 戸原和人・ 高野陽子・ 引原茂治
3.	上狛北遺跡第2次	木津川市山城町上狛 宝本・西浦代	平成22年8月24日 ～平成23年3月9日	京都府山城南土木 事務所	筒井崇史・ 松尾史子

3. 本書で使用している座標は、原則として世界測地系国土座標第Ⅵ座標系によっており、方位は座標の北をさす。なお、現地調査及び過去の調査との整合性のため日本測地系を使用している場合もある。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。

4. 本書の編集は、調査第2課調査担当者の編集原案をもとに、調査第1課資料係が行った。

5. 現場写真は主として調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査第1課資料係主任調査員田中彰が行った。

本文目次

1. 野条遺跡第17・19次発掘調査報告	1
2. 京都第二外環状道路関係遺跡発掘調査報告	67
(1)長岡京跡右京第970・1007・1024次・下海印寺遺跡	67
(2)長岡京跡右京第1024次・伊賀寺遺跡	153
(3)長岡京跡右京第1024次・奥海印寺遺跡	157
3. 上狛北遺跡第2次	159

挿図目次

1. 野条遺跡第17・19次

第1図 周辺遺跡分布図	2
第2図 各年度の調査地位置図	4
第3図 第17次調査地位置図	5
第4図 第17次調査区配置図	6
第5図 第17次調査1区土層断面図	7
第6図 第17次調査2区土層断面図	8
第7図 第17次調査3区土層断面図	9
第8図 第17次1区平面図	10
第9図 第17次2・3区平面図	11
第10図 溝SD1・2・13・14平面・断面図	12
第11図 溝SD1・2(1区)平面・断面図・土器出土状況図	13
第12図 溝SD1(2・3区)平面図、柱列SA18平面・断面図	14
第13図 溝SD2(1区)平面・断面図・土器出土状況図	15
第14図 溝SD2(1区)土器出土状況図	16
第15図 溝SD5・6・15平面・断面図	17
第16図 溝SD5平面図	18
第17図 1区南部平面図、落ち込みSX9断面図	19
第18図 落ち込みSX19、土坑SK12平面・断面図	20
第19図 掘立柱建物跡SB20平面・断面図	20
第20図 掘立柱建物跡SB7・24、柵列SA8平面・断面図	21

第21図	1区上層遺構平面図、溝SD16・17平面・断面図	22
第22図	出土遺物実測図(1)	24
第23図	出土遺物実測図(2)	26
第24図	出土遺物実測図(3)	27
第25図	出土遺物実測図(4)	29
第26図	第19次調査トレンチ配置図	30
第27図	第1トレンチ平面図	31
第28図	第1トレンチ東壁土層断面図	32
第29図	第2トレンチ平面図	34
第30図	第2トレンチ北壁土層断面図	36
第31図	第2トレンチ断ち割り土層断面図	37
第32図	第3トレンチ平面図	39
第33図	第3トレンチ北壁土層断面図	39
第34図	第4-1・4-2・4-3トレンチ平面図	40
第35図	第4-1トレンチ平面図	41
第36図	第4-1トレンチ土層断面図	41
第37図	第4-2トレンチ平面図	42
第38図	第4-2トレンチ土層断面図	42
第39図	第4-3トレンチ平面図	43
第40図	第4-3トレンチ南壁土層図	43
第41図	第4-3トレンチ柱穴列SA405平面・断面図	44
第42図	第5トレンチ平面図	46
第43図	第5トレンチ北壁土層断面図	46
第44図	第6トレンチ平面図	48
第45図	第6トレンチ北壁土層断面図	49
第46図	溝SD601平面・断面図	50
第47図	溝SD602平面・断面図	50
第48図	出土遺物実測図(5)	52
第49図	出土遺物実測図(6)	54
第50図	出土遺物実測図(7)	57
第51図	野条遺跡の弥生集落の推定範囲	59
第52図	野条遺跡主要遺構検出地点	60
第53図	府営ほ場整備関連事業に伴う過去の調査地	62
第54図	野条・室橋遺跡の水路群と大堰川・文覚池との位置関係	63
第55図	平安～鎌倉時代の検出遺構と現在の新庄用水	65

2. 京都第二外環状道路関係遺跡

(1) 長岡京跡右京第970・1007・1024次・下海印寺遺跡

第1図	調査地ならびに周辺主要遺跡分布図	69
第2図	調査地位置図	71
第3図	A地区遺構配置図	72
第4図	A地区土層断面図	73
第5図	C地区遺構配置図	74
第6図	C地区土層断面図	75
第7図	B・D地区遺構配置図	76
第8図	B地区土層断面図	76
第9図	E地区遺構配置図	77
第10図	E地区土層断面図	77
第11図	F地区遺構配置図・土層断面図	78
第12図	G・H・I地区遺構配置図	79
第13図	H地区土層断面図	80
第14図	J地区遺構配置図	81
第15図	J地区土層断面図	81
第16図	A地区竪穴式住居跡S H121実測図	83
第17図	A地区竪穴式住居跡S H121内遺物出土状況図	84
第18図	J地区竪穴式住居跡S H82実測図・遺物出土状況図	85
第19図	A地区土坑S K123実測図	85
第20図	A地区土坑S K149実測図	86
第21図	C地区竪穴式住居跡S H127実測図	86
第22図	A地区竪穴式住居跡S H156・C地区S H351実測図	87
第23図	A地区竪穴式住居跡S H127・156・351遺物出土状況図	88
第24図	C地区竪穴式住居跡S H350実測図	89
第25図	E地区竪穴式住居跡S H101・102実測図	91
第26図	E地区竪穴式住居跡S H103・J地区竪穴式住居跡S H79実測図	92
第27図	J地区竪穴式住居跡S H80実測図	93
第28図	J地区竪穴式住居跡S H81実測図	94
第29図	B地区竪穴式住居跡S H26実測図	94
第30図	C地区土坑S K394実測図	94
第31図	C地区土坑S K128・A地区溝S D144実測図	95
第32図	B地区土坑S K125実測図	95
第33図	A地区溝S D119・132実測図	96

第34図	B地区溝 S D 79・112実測図	97
第35図	A地区土坑 S K 158・D地区溝 S D 366実測図	98
第36図	平安時代末期屋敷跡全体図	100
第37図	J地区堀 S D 50・C地区 S D 111断面図	101
第38図	C地区堀 S D 266断面図	101
第39図	H地区堀 S D 50断面図	102
第40図	C地区土橋 S X 133実測図	103
第41図	J地区柵列 S A 84実測図	105
第42図	H地区柵列 S A 24実測図	105
第43図	C地区柵列 S A 362・388・389実測図	106
第44図	H地区掘立柱建物跡 SB01実測図	107
第45図	C地区掘立柱建物跡 S B 414実測図	108
第46図	H地区埋納土坑 S X 46実測図	108
第47図	H地区掘立柱建物跡 S B 74・土坑 S X 80実測図	109
第48図	E地区土壙墓 S K 34実測図	109
第49図	C地区掘立柱建物跡 S B 406実測図	110
第50図	C地区掘立柱建物跡 S B 385、柵列 S A 386・387実測図	110
第51図	E地区掘立柱建物跡 S B 12・15実測図	111
第52図	E地区掘立柱建物跡 S B 30・46実測図	112
第53図	J地区掘立柱建物跡 S B 58実測図	113
第54図	J地区掘立柱建物跡 S B 30実測図	113
第55図	J地区掘立柱建物跡 S B 49実測図	114
第56図	B地区掘立柱建物跡 S B 08実測図	114
第57図	E地区柱穴内遺物出土状況図	115
第58図	J地区溝 S D 19・22・36・54実測図	116
第59図	H地区土坑 S K 44・86、B地区土坑 S K 42実測図	117
第60図	C・G・H・J地区江戸時代遺構配置図	118
第61図	C地区不明遺構 S X 440実測図	118
第62図	出土遺物実測図(1)	119
第63図	出土遺物実測図(2)	121
第64図	出土遺物実測図(3)	122
第65図	出土遺物実測図(4)	123
第66図	出土遺物実測図(5)	125
第67図	出土遺物実測図(6)	126
第68図	出土遺物実測図(7)	127

第69図	出土遺物実測図(8)	128
第70図	出土遺物実測図(9)	129
第71図	出土遺物実測図(10)	130
第72図	出土遺物実測図(11)	130
第73図	出土遺物実測図(12)	131
第74図	出土遺物実測図(13)	133
第75図	出土遺物実測図(14)	134
第76図	出土遺物実測図(15)	135
第77図	出土遺物実測図(16)	136
第78図	出土遺物実測図(17)	139
第79図	出土遺物実測図(18)	140
第80図	出土遺物実測図(19)	141
第81図	出土遺物実測図(20)	142
第82図	出土遺物実測図(21)	143
第83図	出土遺物実測図(22)	145
第84図	下海印寺遺跡遺構配置図(1)	147
第85図	下海印寺遺跡遺構配置図(2)	148
第86図	屋敷跡規格図	149
(2)長岡京跡右京第1024次・伊賀寺遺跡		
第87図	調査地位置図	153
第88図	周辺調査トレンチ配置図	154
第89図	調査地南壁土層断面図	155
第90図	調査地平面図	155
(3)長岡京跡右京第1024次・奥海印寺遺跡		
第91図	調査地位置図	157
第92図	トレンチ配置図	158
第93図	奥海印寺地区土層柱状図	158
3. 上狛北遺跡第2次		
第1図	調査地位置図および周辺主要遺跡分布図	160
第2図	第1・2次調査区配置図	163
第3図	土層柱状図	164
第4図	A1地区遺構配置図	165
第5図	A2地区遺構配置図	167
第6図	A2地区遺構配置図(古墳時代遺構面)	168

第7図	B地区遺構配置図	169
第8図	竪穴式住居跡 S H50・63実測図	170
第9図	竪穴式住居跡 S H60実測図	171
第10図	土器溜まり S X15実測図	171
第11図	竪穴式住居跡 S H281実測図	172
第12図	竪穴式住居跡 S H282実測図	173
第13図	竪穴式住居跡 S H283実測図	174
第14図	竪穴式住居跡 S H330実測図	175
第15図	土器溜まり S X199実測図	175
第16図	土坑 S K280実測図	176
第17図	竪穴式住居跡 S H99実測図	176
第18図	竪穴式住居跡 S H100・111実測図	177
第19図	竪穴式住居跡 S H105実測図	178
第20図	土坑 S X126実測図	179
第21図	土坑 S K91実測図	179
第22図	土坑 S K102実測図	180
第23図	井戸 S E215実測図	180
第24図	土坑 S X96実測図	182
第25図	土坑 S X96遺物出土状況	183
第26図	掘立柱建物跡 S B01実測図	184
第27図	掘立柱建物跡 S B02実測図	185
第28図	掘立柱建物跡 S B03実測図	185
第29図	掘立柱建物跡 S B04実測図および柱穴 S P58遺物出土状況図	186
第30図	溝 S D21実測図(1)	188
第31図	溝 S D21実測図(2)	189
第32図	溝 S D21実測図(3)	190
第33図	溝 S D21実測図(4)	191
第34図	土坑 S K106実測図	192
第35図	土坑143実測図	192
第36図	大溝状遺構 S X1・土坑 S K401土層断面図	193
第37図	竪穴式住居跡 S H50出土土器実測図(1)	194
第38図	竪穴式住居跡 S H50出土土器実測図(2)	195
第39図	土器溜まり S X15・柱穴 S P57出土土器実測図	195
第40図	竪穴式住居跡 S H281・282・330出土土器実測図	196
第41図	竪穴式住居跡 S H283出土土器実測図(1)	198

第42図	竪穴式住居跡 S H283出土土器実測図(2)	199
第43図	土器溜まり S X199・321出土土器実測図	200
第44図	土坑 S K280出土土器実測図	200
第45図	竪穴式住居跡 S H99・100・105・111出土土器実測図	201
第46図	玉類・鉄製品・埴輪実測図	202
第47図	土器溜まり S X126出土土器実測図(1)	203
第48図	土器溜まり S X126出土土器実測図(2)	204
第49図	土坑 S K91・102出土土器実測図	205
第50図	木簡実測図	207
第51図	軒瓦実測図	209
第52図	丸瓦実測図	211
第53図	平瓦実測図(1)	213
第54図	平瓦実測図(2)	214
第55図	平瓦実測図(3)	215
第56図	平瓦実測図(4)	216
第57図	瓦塼実測図	217
第58図	A2地区下層遺構出土土器実測図	219
第59図	土坑 S X96出土土器実測図(1)	220
第60図	土坑 S X96出土土器実測図(2)	221
第61図	土坑 S X96出土土器実測図(3)	222
第62図	土坑 S X96出土土器実測図(4)	223
第63図	土坑 S X96出土土器実測図(5)	224
第64図	土坑 S X96出土土器実測図(6)	225
第65図	土坑 S X96出土土器実測図(7)	227
第66図	土坑 S X96出土土器実測図(8)	228
第67図	土坑 S X96出土土器実測図(9)	229
第68図	土坑 S X96出土墨書土器実測図(1)	230
第69図	土坑 S X96出土墨書土器実測図(2)	231
第70図	土坑 S X96出土墨書土器実測図(3)	232
第71図	土坑 S X96出土製塩土器実測図	238
第72図	溝 S D21出土土器実測図(1)	235
第73図	溝 S D21出土土器実測図(2)	236
第74図	溝 S D21出土土器実測図(3)	237
第75図	溝 S D21出土土器実測図(4)	238
第76図	溝 S D21出土土器実測図(5)	239

第77図	溝 S D 21出土土器実測図(6)	240
第78図	B地区奈良時代遺構出土土器実測図	241
第79図	土製品実測図	241
第80図	木製品・銅製品・鉄製品実測図	242
第81図	A 2地区中世遺構出土土器実測図(1)	243
第82図	A 2地区中世遺構出土土器実測図(2)	244
第83図	遺物包含層出土遺物実測図	247
第84図	恭仁京域と上粕北遺跡	250

付 表 目 次

1. 野条遺跡第17・19次	
付表 1	野条遺跡調査次数一覧 3
付表 2	「刑部郷」と「吉富荘」を巡る関連年表 64
2. 京都第二外環状道路関係遺跡	
付表	下海印寺遺跡内主要遺構一覧表 150
3. 上粕北遺跡第2次	
付表 1	土坑 S X 96出土削屑一覧表 253
付表 2	土坑 S X 96出土墨書土器一覧表 254

図 版 目 次

巻頭図版 1	野条遺跡第17次 調査地遠景(南東から)
巻頭図版 2	京都第二外環状道路関係遺跡 長岡京跡右京第970・1007・1024・下海印寺遺跡調査地全景(合成：右上が北)
巻頭図版 3	上粕北遺跡第2次B地区奈良時代遺構面全景(南から)
巻頭図版 4	上粕北遺跡第2次土坑 S X 96出土木簡・削屑

1. 野条遺跡第17・19次	
(1)野条遺跡第17次	

- 図版第1 第17次調査区遠景(左後方に池上遺跡・多国山、北西から)
- 図版第2 (1)第17次調査区遠景(北から)
(2)第17次調査区遠景(南東から)
- 図版第3 (1)第17次調査区近景(東から)
(2)第17次調査区近景(西から)
- 図版第4 (1)第17次調査区全景(南東から)
(2)第17次調査区全景(上が北)
- 図版第5 (1)第17次調査前全景(北西から)
(2)第17次掘立柱建物跡S B 7(北から)
(3)第17次掘立柱建物跡S B 24(東から)
- 図版第6 (1)第17次掘立柱建物跡S B 20(南西から)
(2)第17次掘立柱建物跡S B 20柱穴P 6(南から)
(3)第17次掘立柱建物跡S B 20柱穴P 7(南から)
- 図版第7 (1)第17次溝S D 1・2(西部)検出状況(南東から)
(2)第17次溝S D 2遺物出土状況(南から)
(3)第17次溝S D 2土器出土状況(上が南西)
- 図版第8 (1)第17次1区溝S D 1・2土器出土状況(北東から)
(2)第17次1区北壁北部土層断面(溝S D 5・6・15検出部、東から)
(3)第17次1区南壁土層断面(北から)
- 図版第9 (1)第17次1区北部溝群完掘状況(北から)
(2)第17次1区完掘状況(北から)
- 図版第10 (1)第17次北部溝群検出状況(上が西)
(2)第17次北部溝群検出状況(北東から)
- 図版第11 (1)第17次溝S D 1検出状況(南東から)
(2)第17次溝S D 1検出状況(南西から)
- 図版第12 (1)第17次溝S D 1検出状況(東から)
(2)第17次溝S D 1中央部検出状況(南東から)
(3)第17次溝S D 1畦②土層断面(東から)
- 図版第13 (1)第17次溝S D 1・2合流部検出状況(東から)
(2)第17次溝S D 2土器出土状況(上が北)
(3)第17次溝S D 1完掘状況(東から)
- 図版第14 (1)第17次溝S D 5・6・10・15検出状況(東から)
(2)第17次溝S D 5・6・15全景(南東から)
(3)第17次溝S D 5工具掘削痕検出状況(南東から)
- 図版第15 (1)第17次溝S D 5・6・10土層断面⑩(東から)

- (2) 第17次溝 S D 5・6 土層断面⑧(南東から)
- (3) 第17次溝 S D 14 検出状況(南西から)
- 図版第16 (1) 第17次溝 S D 13 検出状況(南東から)
- (2) 第17次溝 S D 13 土層断面⑦(南東から)
- (3) 第17次作業風景(西から)
- 図版第17 (1) 第17次 2・3 区全景(北から)
- (2) 第17次 2・3 区全景(南から)
- 図版第18 第17次出土遺物 1
- 図版第19 (1) 第17次出土遺物 2
- (2) 第17次出土遺物 3
- 図版第20 (1) 第17次出土遺物 4
- (2) 第17次出土遺物 5
- 図版第21 (1) 第17次出土遺物 6
- (2) 第17次出土遺物 7
- (2) 野条遺跡第19次
- 図版第22 (1) 第19次第 1・第 3 トレンチ空中写真(上が北)
- (2) 第19次第 2 トレンチ空中写真(上が北)
- 図版第23 (1) 第19次第 4・第 5 トレンチ空中写真(上が北)
- (2) 第19次第 4 - 3 トレンチ完掘状況(上が西)
- 図版第24 (1) 第19次第 2 トレンチ S D 201 完掘状況(上が東)
- (2) 第19次第 6 トレンチ完掘状況(上が西)
- 図版第25 (1) 第19次第 6 トレンチ S D 601 土層(南から)
- (2) 第19次第 1 トレンチ完掘状況(南から)
- (3) 第19次第 1 トレンチ完掘状況(北から)
- 図版第26 (1) 第19次第 2 トレンチ S D 201 遺物出土状況(南から)
- (2) 第19次第 2 トレンチ S D 203 遺物出土状況(北から)
- (3) 第19次第 2 トレンチ S D 202・203 完掘状況(東から)
- 図版第27 (1) 第19次第 2 トレンチ S D 208 完掘状況(西から)
- (2) 第19次第 2 トレンチ S D 210 遺物出土状況(西から)
- (3) 第19次第 2 トレンチ S D 210 遺物出土状況(東から)
- 図版第28 (1) 第19次第 2 トレンチ調査区西壁土層(東から)
- (2) 第19次第 2 トレンチ調査区東壁土層(西から)
- (3) 第19次第 2 トレンチ調査区北壁東部土層(南から)
- 図版第29 (1) 第19次第 3 トレンチ完掘状況(南西から)
- (2) 第19次第 4 - 1 トレンチ完掘状況(北西から)

- (3) 第19次第4-3トレンチ S A 405 半裁状況(西から)
- 図版第30 (1) 第19次第4-3トレンチ S A 405 a 半裁土層(北から)
- (2) 第19次第4-3トレンチ S A 405 b 半裁土層(北から)
- (3) 第19次第4-3トレンチ S A 405 c 半裁土層(北から)
- 図版第31 (1) 第19次第4-3トレンチ S A 405 d 半裁土層(北から)
- (2) 第19次第4-3トレンチ S A 405 e 半裁土層(北から)
- (3) 第19次第4-3トレンチ南壁中央部土層(北西から)
- 図版第32 (1) 第19次第4-3トレンチ南壁東部土層(北から)
- (2) 第19次第5トレンチ完掘状況(東から)
- (3) 第19次第5トレンチ北壁東部土層(南から)
- 図版第33 (1) 第19次第6トレンチ東部遺構検出状況(西から)
- (2) 第19次第6トレンチ S D 601 完掘状況(南から)
- (3) 第19次第6トレンチ S D 602 土層(南から)
- 図版第34 (1) 第19次第6トレンチ北壁④土層(南から)
- (2) 第19次第6トレンチ北壁⑤土層(南から)
- (3) 第19次第6トレンチ北壁⑥土層(南から)
- 図版第35 (1) 第19次出土遺物 1
- (2) 第19次出土遺物 2
- 図版第36 (1) 第19次出土遺物 3 (外面)
- (2) 第19次出土遺物 3 (内面)
- 図版第37 (1) 第19次出土遺物 4 (内面)
- (2) 第19次出土遺物 4 (外面)
- 図版第38 (1) 第19次出土遺物 5 (内面)
- (2) 第19次出土遺物 5 (外面)

2. 京都第二外環状道路関係遺跡

(1) 長岡京跡右京第970・1007・1024次・下海印寺遺跡

- 図版第1 (1) A 地区全景(上空から、上が北)
- (2) A 地区全景(南から)
- 図版第2 (1) B 地区全景(上空から、上が北)
- (2) B 地区全景(南から)
- 図版第3 (1) C 地区(上層遺構)全景(上空から、上が北)
- (2) C 地区(下層遺構)全景(上空から、上が北)
- 図版第4 (1) E 地区(上層遺構)全景(上空から、上が北)
- (2) E 地区(下層遺構)全景(上空から、上が北)

- 図版第5 (1) G・H地区全景(上空から、上が北)
(2) G・H地区全景(東から)
- 図版第6 (1) J地区全景(上空から、上が北)
(2) J地区全景(南から)
- 図版第7 (1) A地区竪穴式住居跡S H121近景(南西から)
(2) A地区竪穴式住居跡S H121内遺物出土状況
(3) A地区竪穴式住居跡S H121内遺物出土状況
- 図版第8 (1) A地区竪穴式住居跡S H121内遺物出土状況
(2) A地区竪穴式住居跡S H121内遺物出土状況
(3) A地区竪穴式住居跡S H121内遺物出土状況
- 図版第9 (1) A地区竪穴式住居跡S H156近景(南から)
(2) A地区溝跡S D144近景(東から)
(3) A地区溝跡S D119・132、土坑S K123近景(西から)
- 図版第10 (1) B地区全景(西から)
(2) B地区溝跡S D79近景(西から)
(3) B地区溝跡S D79内(上層)遺物出土状況
- 図版第11 (1) B地区溝跡S D79堆積状況(A-A' 西から)
(2) B地区溝跡S D79堆積状況(B-B' 西から)
(3) B地区溝跡S D79堆積状況(B-B' 東から)
- 図版第12 (1) B地区溝跡S D79堆積状況(C-C' 北から)
(2) B地区溝跡S D79内(下層)遺物出土状況
(3) B地区溝跡S D79内(下層)遺物出土状況
- 図版第13 (1) B地区土坑S K125近景(東から)
(2) B地区土坑S K125近景(西から)
(3) B地区焼土坑S K42近景(南西から)
- 図版第14 (1) C地区竪穴式住居跡S H127近景(南から)
(2) C地区竪穴式住居跡S H127竈近景(南から)
(3) C地区竪穴式住居跡S H350近景(北西から)
- 図版第15 (1) C地区屋敷跡全景(南西から)
(2) C地区屋敷跡全景(西から)
- 図版第16 (1) C地区土橋S X133近景(南東から)
(2) C地区土橋S X133近景(東から)
(3) C地区堀跡S D111堆積状況(北から)
- 図版第17 (1) C地区土橋S X133北石組み近景(北から)
(2) C地区土橋S X133南石組み近景(南から)

- (3) C 地区堀跡 S D 111暗渠排水近景(南から)
- 図版第18 (1) C 地区堀跡 S D 111暗渠排水近景(北東から)
 (2) C 地区土橋 S X 133内堆積状況(西から)
 (3) C 地区土橋 S X 133内堆積状況(南から)
- 図版第19 (1) C 地区堀跡 S D 111テラス部近景(南から)
 (2) C 地区堀跡 S D 111テラス部近景(北東から)
 (3) C 地区堀跡 S D 111テラス部遺物出土状況
- 図版第20 (1) C 地区掘立柱建物跡 S B 414近景(北から)
 (2) C 地区近世墓 S X 440近景(南東から)
 (3) C 地区土坑 S K 394近景(北から)
- 図版第21 (1) E 地区竪穴式住居跡 S H 101近景(北東から)
 (2) E 地区竪穴式住居跡 S H 102近景(南から)
 (3) E 地区竪穴式住居跡 S H 103近景(南西から)
- 図版第22 (1) E 地区掘立柱建物跡 S B 30近景(南西から)
 (2) E 地区掘立柱建物跡 S B 46・12近景(北西から)
 (3) E 地区掘立柱建物跡 S B 15近景(北から)
- 図版第23 (1) E 地区土壙墓 S K 34堆積状況(西から)
 (2) E 地区土壙墓 S K 34近景(北から)
 (3) E 地区土壙墓 S K 34近景(西から)
- 図版第24 E 地区柱穴内遺物出土状況
- 図版第25 (1) H 地区堀跡 S D 50・掘立柱建物跡 S B 01・柵列 S A 24近景(東から)
 (2) H 地区掘立柱建物跡 S B 01・柵列 S A 24近景(東から)
 (3) H 地区堀跡掘立柱建物跡 S B 01近景(東から)
- 図版第26 (1) H 地区堀跡 S D 50近景(西から)
 (2) H 地区埋納土坑 S K 46近景(南から)
 (3) H 地区土坑 S K 44近景(東から)
- 図版第27 (1) H 地区堀跡 S D 50堆積状況(南から)
 (2) H 地区堀跡 S D 50堆積状況(南から)
 (3) H 地区堀跡 S D 50堆積状況(西から)
- 図版第28 (1) H 地区溝跡 S D 51近景(南から)
 (2) H 地区溝跡 S D 52近景(南から)
 (3) H 地区紡錘車出土状況(東から)
- 図版第29 (1) J 地区竪穴式住居跡 S H 80近景(東から)
 (2) J 地区竪穴式住居跡 S H 79～81近景(東から)
 (3) J 地区竪穴式住居跡 S H 81近景(東から)

- 図版第30 (1) J 地区竪穴式住居跡 S H82近景(北から)
 (2) J 地区竪穴式住居跡 S H82内遺物出土状況(北西から)
 (3) J 地区堀跡 S D50・掘立柱建物跡 S B30近景(東から)
- 図版第31 (1) J 地区掘立柱建物跡 S B58・柵列 S A84近景(西から)
 (2) J 地区堀跡 S D50暗渠排水近景(南から)
 (3) J 地区堀跡 S D50暗渠排水近景(南から)
- 図版第32 (1) J 地区堀跡 S D50堆積状況(南から)
 (2) J 地区堀跡 S D50堆積状況(北から)
 (3) J 地区溝跡 S D21近景(南から)
- 図版第33 (1) I 地区全景(南から)
 (2) G 地区石列近景(東から)
 (3) G 地区堀跡 S D50近景(北西から)
- 図版第34 (1) F 地区近景(南から)
 (2) F 地区近景(南から)
 (3) F 地区近景(北から)
- 図版第35 出土遺物 1
- 図版第36 出土遺物 2
- 図版第37 出土遺物 3
- 図版第38 出土遺物 4
- 図版第39 出土遺物 5
- 図版第40 (1) 出土遺物 6
 (2) 出土遺物 7
- 図版第41 出土遺物 8
- 図版第42 出土遺物 9
- (2) 長岡京跡右京第1024次・伊賀寺遺跡
- 図版第43 (1) トレンチ全景(南東から)
 (2) トレンチ全景(西から)
- 図版第44 (1) トレンチ断ち割り内土層(東から)
 (2) 南側調査区トレンチ掘削状況(東から)
 (3) 南側調査区土層(東から)
- (3) 長岡京跡右京第1024次・奥海印寺遺跡
- 図版第45 (1) 調査区遠景(北東から)
 (2) 調査区近景(北東から)
- 図版第46 (1) C トレンチ掘削状況(北東から)
 (2) A トレンチ土層 1 (北から)

(3) B トレンチ土層 2 (北から)

3. 上狛北遺跡第 2 次

- 図版第 1 (1) 第 1 次調査 1 トレンチ全景(東から)
(2) 第 1 次調査 2 トレンチ全景(北から)
(3) 第 1 次調査 3 トレンチ全景(南から)
- 図版第 2 (1) 調査前風景(東から)
(2) 調査前風景(南東から)
(3) A 2 地区重機掘削作業(南から)
- 図版第 3 (1) A 2 地区中世遺構面精査作業(東から)
(2) 現地説明会風景(北西から)
(3) B 地区西壁土層断面(東から)
- 図版第 4 (1) A 1 地区中世第 2 遺構面、古墳時代遺構面全景(北から)
(2) A 1 地区中世第 1 面全景(北東から)
- 図版第 5 (1) A 1 地区竪穴式住居跡 S H50 全景(北から)
(2) A 1 地区竪穴式住居跡 S H60 全景(東から)
(3) A 1 地区竪穴式住居跡 S H63 全景(南西から)
- 図版第 6 (1) A 1 地区土器だまり S X15(西から)
(2) A 1 地区中世第 2 面全景(東から)
(3) A 1 地区掘立柱建物跡 S B06 全景(南から)
- 図版第 7 (1) A 2 地区古墳時代遺構面全景(東から)
(2) A 2 地区古墳時代遺構面全景(北東から)
- 図版第 8 (1) A 2 地区竪穴式住居跡 S H281 全景(南西から)
(2) A 2 地区竪穴式住居跡 S H281 カマド 全景(南西から)
(3) A 2 地区竪穴式住居跡 S H281 遺物出土状況(南東から)
- 図版第 9 (1) A 2 地区竪穴式住居跡 S H282 全景(南から)
(2) A 2 地区竪穴式住居跡 S H282 カマド 全景(北東から)
(3) A 2 地区竪穴式住居跡 S H282 カマド 全景(南東から)
- 図版第 10 (1) A 2 地区竪穴式住居跡 S H282 カマド 前面遺物出土状況(東から)
(2) A 2 地区竪穴式住居跡 S H282 鉄器出土状況(東から)
(3) A 2 地区竪穴式住居跡 S H283 全景(南西から)
- 図版第 11 (1) A 2 地区竪穴式住居跡 S H283 貯蔵穴 1 遺物出土状況(東から)
(2) A 2 地区竪穴式住居跡 S H283 焼土除去後遺物出土状況(南から)
(3) A 2 地区竪穴式住居跡 S H330 全景(南から)
- 図版第 12 (1) A 2 地区竪穴式住居跡 S H330 カマド 全景(南から)

- (2) A 2 地区土坑 S K 280 遺物出土状況(東から)
- (3) A 2 地区土器だまり S X 199 下層遺物出土状況(南から)
- 図版第13 (1) A 2 地区井戸 S E 215 遺物出土状況(南から)
- (2) A 2 地区井戸 S E 215 断ち割り状況(南西から)
- (3) A 2 地区中世遺構第 1 面全景(西から)
- 図版第14 (1) A 2 地区土坑 S K 143 全景(東から)
- (2) A 2 地区中世第 2 面全景(南西から)
- (3) A 2 地区溝 S D 24 遺物出土状況(南から)
- 図版第15 (1) B 地区古墳時代遺構面(北半部)全景(東から)
- (2) B 地区古墳時代遺構面(南半部)全景(東から)
- (3) B 地区古墳時代遺構面断ち割り状況(南から)
- 図版第16 (1) B 地区竪穴式住居跡 S H 99 全景(北から)
- (2) B 地区竪穴式住居跡 S H 100・111 全景(南から)
- (3) B 地区竪穴式住居跡 S H 105 全景(西から)
- 図版第17 (1) B 地区土坑 S K 126 遺物出土状況(北から)
- (2) B 地区土坑 S K 126 遺物出土状況(南から)
- (3) B 地区土坑 S K 91 遺物出土状況(北から)
- 図版第18 (1) B 地区土坑 S X 96 全景(南から)
- (2) B 地区土坑 S X 96 土層断面状況(南から)
- 図版第19 (1) B 地区土坑 S X 96 遺物出土状況(南から)
- (2) B 地区土坑 S X 96 漆塗り不明製品出土状況(南から)
- (3) B 地区土坑 S X 96 完掘状況(南東から)
- 図版第20 (1) B 地区奈良時代遺構面全景(東から)
- (2) B 地区奈良時代遺構面全景(南西から)
- 図版第21 (1) B 地区奈良時代遺構面全景(北から)
- (2) B 地区奈良時代遺構面全景(南から)
- 図版第22 (1) B 地区溝 S D 21 全景(南から)
- (2) B 地区溝 S D 21 北部遺物出土状況(北から)
- (3) B 地区溝 S D 21 北部遺物出土状況(西から)
- 図版第23 (1) B 地区溝 S D 21 中部遺物出土状況(南から)
- (2) B 地区溝 S D 21 南部遺物出土状況(東から)
- (3) B 地区溝 S D 21 南部遺物出土状況(北西から)
- 図版第24 (1) B 地区溝 S D 21 南部最上層遺物出土状況(南東から)
- (2) B 地区溝 S D 21 北部土層断面(南から)
- (3) B 地区溝 S D 21 南部土層断面(北から)

- 図版第25 (1) B地区土坑 S K 102全景(西から)
 (2) B地区掘立柱建物群全景(北から)
 (3) B地区掘立柱建物跡 S B 01全景(北から)
- 図版第26 (1) B地区掘立柱建物跡 S B 01柱穴 S P 65遺物出土状況(東から)
 (2) B地区掘立柱建物跡 S B 02全景(北から)
 (3) B地区掘立柱建物跡 S B 03全景(北から)
- 図版第27 (1) B地区掘立柱建物跡 S B 04全景(北から)
 (2) B地区掘立柱建物跡 S B 04柱穴 S P 58遺物出土状況(西から)
 (3) B地区軒平瓦出土状況(北から)
- 図版第28 (1) B地区土坑 S K 32全景(東から)
 (2) B地区中世遺構面(北半部)全景(南から)
 (3) B地区中世遺構面(南半部)全景(南から)
- 図版第29 出土遺物 1
- 図版第30 出土遺物 2
- 図版第31 出土遺物 3
- 図版第32 出土遺物 4 木簡
- 図版第33 (1) 出土遺物 5 削屑
 (2) 出土遺物 6 削屑
 (3) 出土遺物 7 削屑
 (4) 出土遺物 8 削屑
- 図版第34 出土遺物 9 瓦磚類
- 図版第35 出土遺物 10 瓦磚類
- 図版第36 出土遺物 11 土坑 S X 96出土土師器
- 図版第37 出土遺物 12 土坑 S X 96出土土師器
- 図版第38 出土遺物 13 土坑 S X 96出土土師器
- 図版第39 出土遺物 14 土坑 S X 96出土土師器
- 図版第40 出土遺物 15 土坑 S X 96出土須恵器
- 図版第41 出土遺物 16 土坑 S X 96出土須恵器
- 図版第42 出土遺物 17 土坑 S X 96出土墨書土器
- 図版第43 出土遺物 18 溝 S D 21出土土器
- 図版第44 出土遺物 19 溝 S D 21出土土器・土坑 S X 96出土木製品
- 図版第45 (1) 出土遺物 20 竪穴式住居跡 S H 50出土製塩土器
 (2) 出土遺物 21 竪穴式住居跡 S H 283出土製塩土器
- 図版第46 (1) 出土遺物 22 土坑 S K 280出土製塩土器
 (2) 出土遺物 23 各遺構出土玉類・銅製品・鉄製品

- 図版第47 (1)出土遺物24 土坑S X96出土製塩土器
(2)出土遺物25 土坑S X96出土漆塗り不明製品
- 図版第48 (1)出土遺物26 各遺構出土土馬・鞆羽口
(2)出土遺物27 各遺構出土埴輪ほか

1.野条遺跡第17・19次発掘調査報告

はじめに

野条遺跡は、京都府南丹市八木町野条に所在する弥生時代から中世にかけての複合集落遺跡である。当遺跡は、府営ほ場整備事業および府道亀岡園部線改良工事の実施に先立ち、平成6年度から八木町教育委員会(現南丹市教育委員会)が実施した町内遺跡詳細分布調査報告によって新たに周知された遺跡である。平成10年度以降の19次にわたる調査を経て、遺跡の概要が明らかになり、これまでに弥生時代後期の竪穴式住居跡や、平安時代後期の掘立柱建物跡群、さらに奈良～平安時代にかけての主に灌漑用とみられる溝群等、各時代の多くの遺構が確認されている。

今回の調査は、府営経営体育成基盤整備事業「川東地区」に伴い、京都府農林水産部の依頼を受けて実施した。野条遺跡第17次調査(平成22年度)、第19次調査(平成23年度)の調査体制は、以下に示すとおりである。本報告は、第17次調査・第19次調査の成果をあわせたものである。執筆の分担は、〔2〕を古川・大高、〔3〕を高野と古川が執筆し、ほかを高野が担当した。調査に際しては、京都府土木建築部や南丹市教育委員会、京都府教育委員会のほか、地元の方々から多くのご指導・ご協力を得た。記して深く感謝したい。なお、今回の調査に係る経費は、全額、南丹広域振興局が負担した。

〔調査体制等〕

野条遺跡第17次(平成22年度)

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

調査担当者 調査第2課主幹第3係長事務取扱 石井清司

同 調査員 高野陽子・村田和弘

調査場所 南丹市八木町野条

現地調査期間 平成22年7月5日～12月3日

調査面積 1,950㎡

野条遺跡第19次(平成23年度)

現地調査責任者 調査第2課長 水谷壽克

調査担当者 調査第2課第2係長 岩松 保

同 調査員 古川 匠・大高義寛

調査場所 南丹市八木町野条

調査期間 平成23年8月17日～12月22日

調査面積 1,130㎡

周辺の遺跡と過去の調査

野条遺跡の周辺は、亀岡盆地北部の中でも各時代にわたる多くの遺跡が分布する地域である。旧石器時代～縄文時代には、池上遺跡の国府型ナイフ形石器の出土や、縄文時代後期の土壌を検出した大谷口遺跡、室橋遺跡にみるメノウ製の打製石鏃が知られる。本格的な集落が確認できるのは弥生時代中期であり、野条遺跡の南東約1kmには、亀岡盆地北部の拠点集落である池上遺跡が形成される。池上遺跡では、碧玉製玉作り関連遺物が出土した竪穴式住居跡や多数の方形周溝墓群が確認されている。丹波帯に属するこの地域は、良好な石器素材となる粘板岩を産出し、



- | | | | | | |
|----------|------------|------------|------------|-----------|----------|
| 1. 野条遺跡 | 2. 室橋遺跡 | 3. 新庄城跡 | 4. 新庄遺跡 | 5. 船枝遺跡 | 6. 清谷古墳群 |
| 7. 大谷口遺跡 | 8. 諸畑遺跡 | 9. 八木田遺跡 | 10. 日置遺跡 | 11. 幡日佐遺跡 | 12. 如城寺 |
| 13. 野条城跡 | 14. 池上院 | 15. 篠森山古墳群 | 16. 城谷口古墳群 | | |
| 17. 池上遺跡 | 18. 池上古里遺跡 | 19. 刑部城跡 | 20. 多国山古墳群 | | |

第1図 周辺遺跡分布図(国土地理院 1/25000殿田・亀岡)

石材産地であることがこうした中期集落の大規模化の背景にあったと考えられる。弥生時代後期の集落は、北部の諸木山裾部に後期前葉～後葉の諸畑遺跡や大谷口遺跡を中心に小規模な集落が点在するが、後期後葉には平野部に広がり、野条遺跡南部を中心に展開するとみられる。野条遺跡の過去の調査では、旧八木町教育委員会による第5次調査で、野条遺跡南東部において弥生時代後期中葉の竪穴式住居跡2基を検出し、当センターによる第7次調査では後期後葉の焼失住居等が確認されている。また室橋遺跡では、弥生時代の灌漑用の水路と推定される大規模な溝が検出され、後世にもみられる水利灌漑の工夫が早くからなされたことが知られる資料となっている。

古墳時代には、中期前半において、導入期の竈をもつ諸畑遺跡や大谷口遺跡などを核とする集落が出現し、室橋遺跡では大規模な溝や、竪穴式住居跡群の広がりがみられるようになる。特に諸畑遺跡では、近畿地方でも最古式の造り付け竈をもつ竪穴式住居跡群が検出され、これらのなかには初期須恵器を出土する住居跡が含まれることから、渡来系の技術系譜のもとに一带の開墾が開始されたと推定される。古墳時代中期の竪穴式住居跡は、室橋遺跡や野条遺跡でも検出され、野条遺跡第14次調査では、中期前半の竪穴式住居跡を検出し、中期の居住域が南部の平野部にも部分的に広がることを確認された。

奈良時代には、室橋遺跡の北部～西部では奈良時代後期の大形掘立柱建物跡群や大小の溝群が

付表1 野条遺跡の調査回数一覧

調査名	調査主体	調査年度	面積	主要遺構	備考
野条遺跡第1次	八木町教育委員会	平成7年度	12㎡	—	試掘
野条遺跡第2次	八木町教育委員会	平成10年度	112㎡	柱穴・土坑・溝（古代～中世）	試掘
野条遺跡第3次	八木町教育委員会	平成11年度	68㎡	溝（奈良）	試掘
野条遺跡第4次	当センター	平成14年度	450㎡	掘立柱建物跡（鎌倉～室町）	
野条遺跡第5次	八木町教育委員会	平成14年度	308㎡	竪穴式住居跡（弥生後期）	
野条遺跡第6次	八木町教育委員会	平成14年度	185㎡	柱穴・溝	
野条遺跡第7次	当センター	平成15年度	1,200㎡	焼失竪穴式住居跡1基（弥生後期）	
野条遺跡第8次	八木町教育委員会	平成15年度	80㎡	溝・土坑	
野条遺跡第9次	当センター	平成15年度	130㎡	溝（平安後期）	
野条遺跡第10次	当センター	平成17年度	700㎡	掘立柱建物跡・井戸・溝（平安）	
野条遺跡第11次	当センター	平成18年度	600㎡	柱穴・溝（奈良・平安）	
野条遺跡第12次	当センター	平成18年度	570㎡	掘立柱建物跡・溝（奈良・平安）	
野条遺跡第13次	当センター	平成19年度	200㎡	溝	
野条遺跡第14次	京都府教育委員会	平成21年度	340㎡	竪穴式住居跡（古墳中期）・土坑・溝（中世）	
野条遺跡第15次	南丹市教育委員会	平成21年度	170㎡	落ち込み状遺構（弥生後期）・溝（奈良）・柱穴	
野条遺跡第16次	南丹市教育委員会	平成22年度	135㎡	溝（奈良）・柱穴	
野条遺跡第17次	当センター	平成22年度	1950㎡	溝（弥生後期後葉～古墳初）・掘立柱建物跡（奈良～鎌倉）	
野条遺跡第18次	京都府教育委員会	平成22年度	300㎡	溝（弥生後期末～古墳初）	
野条遺跡第19次	当センター	平成23年度	1,130㎡	溝（弥生後期末～古墳初）、溝（平安～鎌倉）、柱穴	



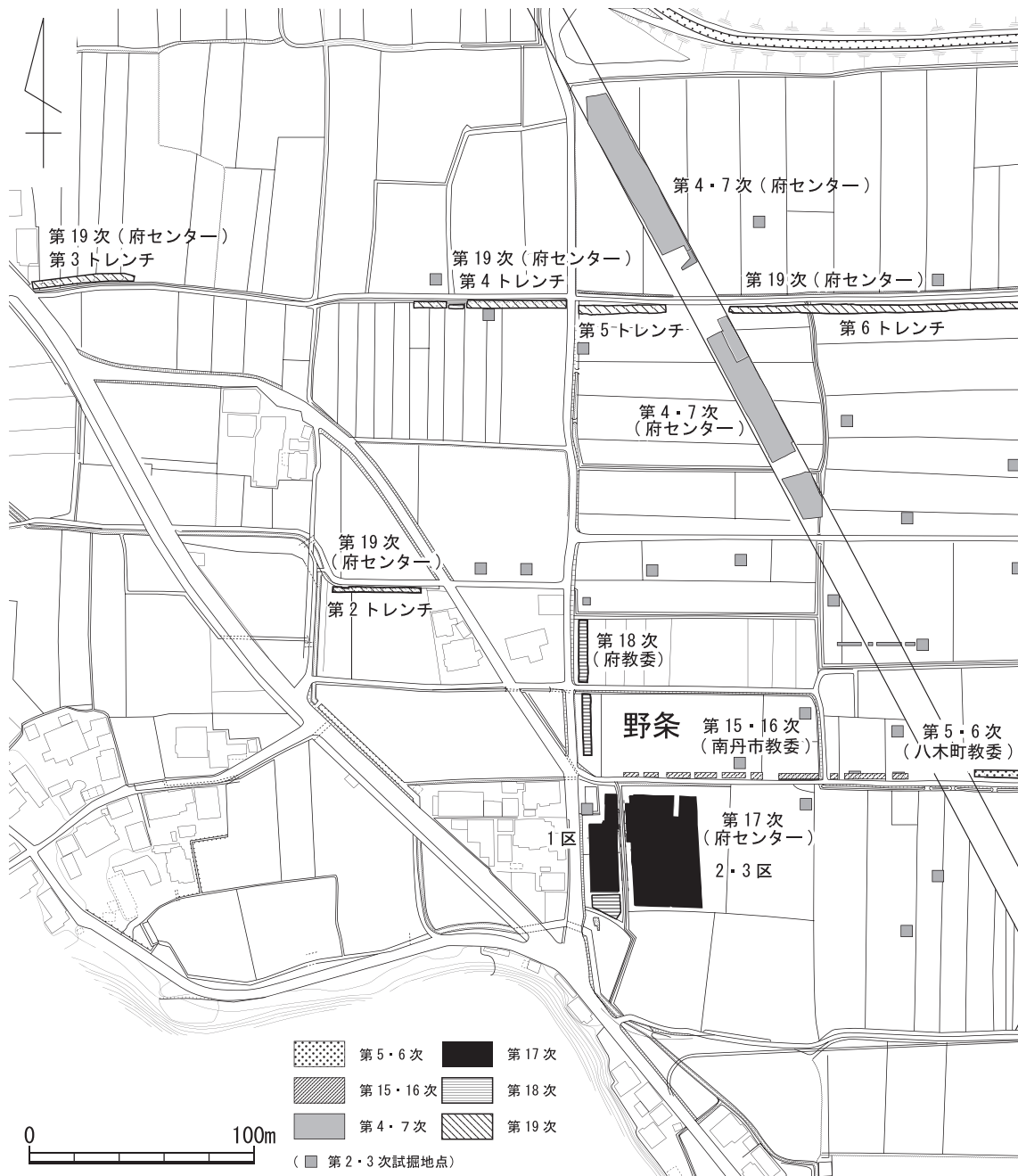
第2図 各年度の調査地位位置図

確認され、墨書土器が出土している。この地では、平安時代中期には、野条遺跡の南方に、天台宗の僧皇慶が、のちに池上寺となる「池上房」(現池上院)を造営したとされ、一帯は、亀岡市池尻・南丹市屋賀に所在したとされる丹波国府の北部域に形成された国衙領であったと推定される。平安時代末期には、室橋遺跡北部で堀によって区画された屋敷地とみられる遺構が検出され、現在の新庄用水の下層の調査では、灌漑用とみられる溝が確認されている。周辺では発掘調査で奈良～平安時代の多数の溝群が検出され、神護寺の僧文覚が改修したとする伝承が残る新庄用水の開削時期を考える上で重要な遺構群となった。野条遺跡では、当センターによる第4・10・12次調査で、奈良～平安時代の溝、平安時代の掘立柱建物跡群、井戸などを検出している。特に平安時代末期(12世紀後半)の建物群は正方位にのり、溝も東西方向に掘削されていることから、条里型地割に基づいた地割の改変を伴う大規模な土地開発が行われたと推定される。

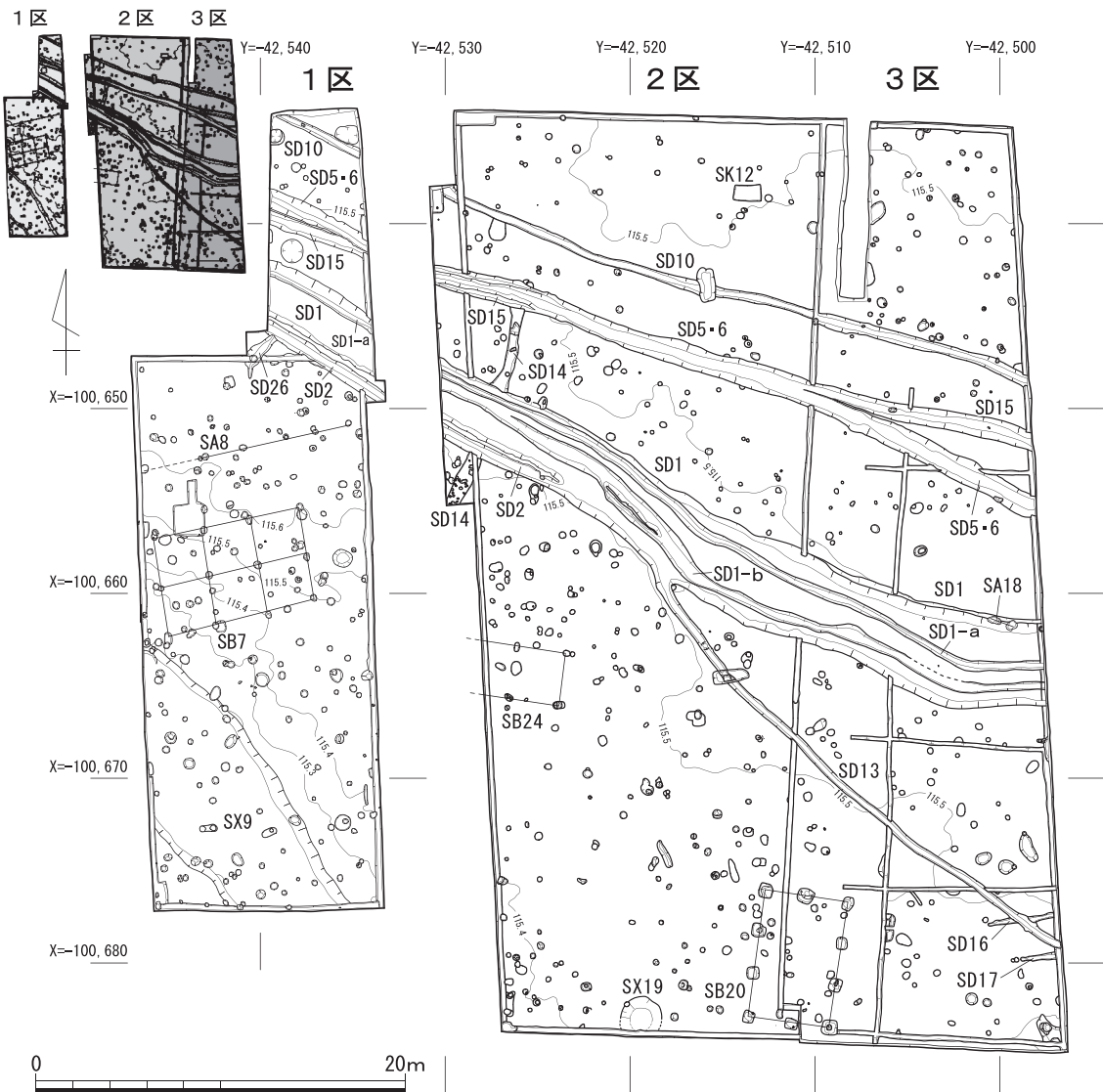
〔1〕野条遺跡第17次(平成22年度)

1. 調査経過

第17次調査の調査地は、野条遺跡の南西部において3か所の調査区を設定した。調査地点は、ほ場整備予定地内における平成21年度の試掘調査を受け、ほ場整備工事による耕作面の掘削レベルを検討したうえで、京都府教育委員会・南丹市教育委員会との協議のもとに調査範囲を決定したものである。調査は、まず機械掘削により現代の耕作土およびその下層の床土を除去した。床土下層の堆積状況は、旧地形に起伏があり一様でなく、部分的に古墳時代～近世の遺物包含層が



第3図 第17次調査地位置図

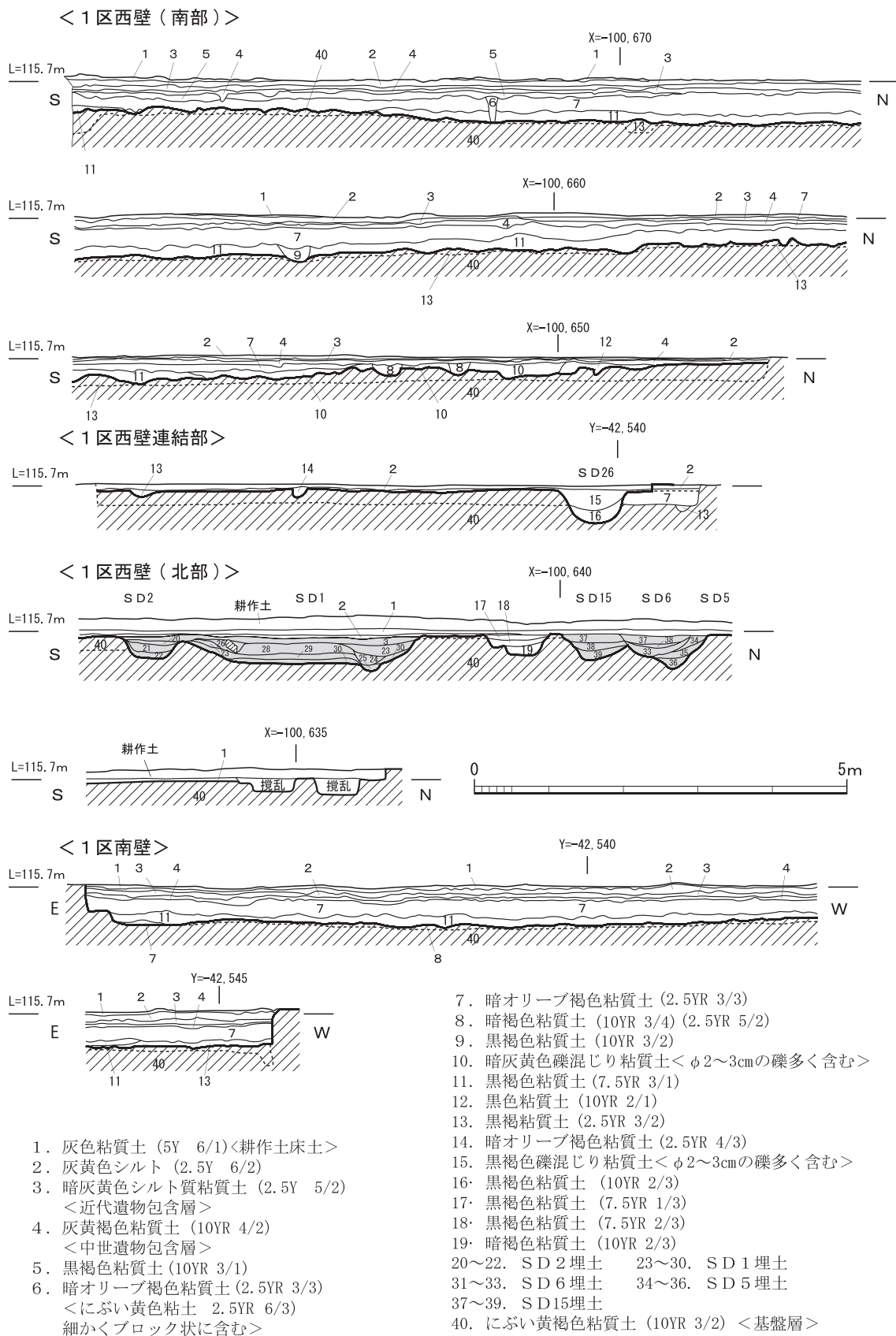


第4図 第17次調査区配置図

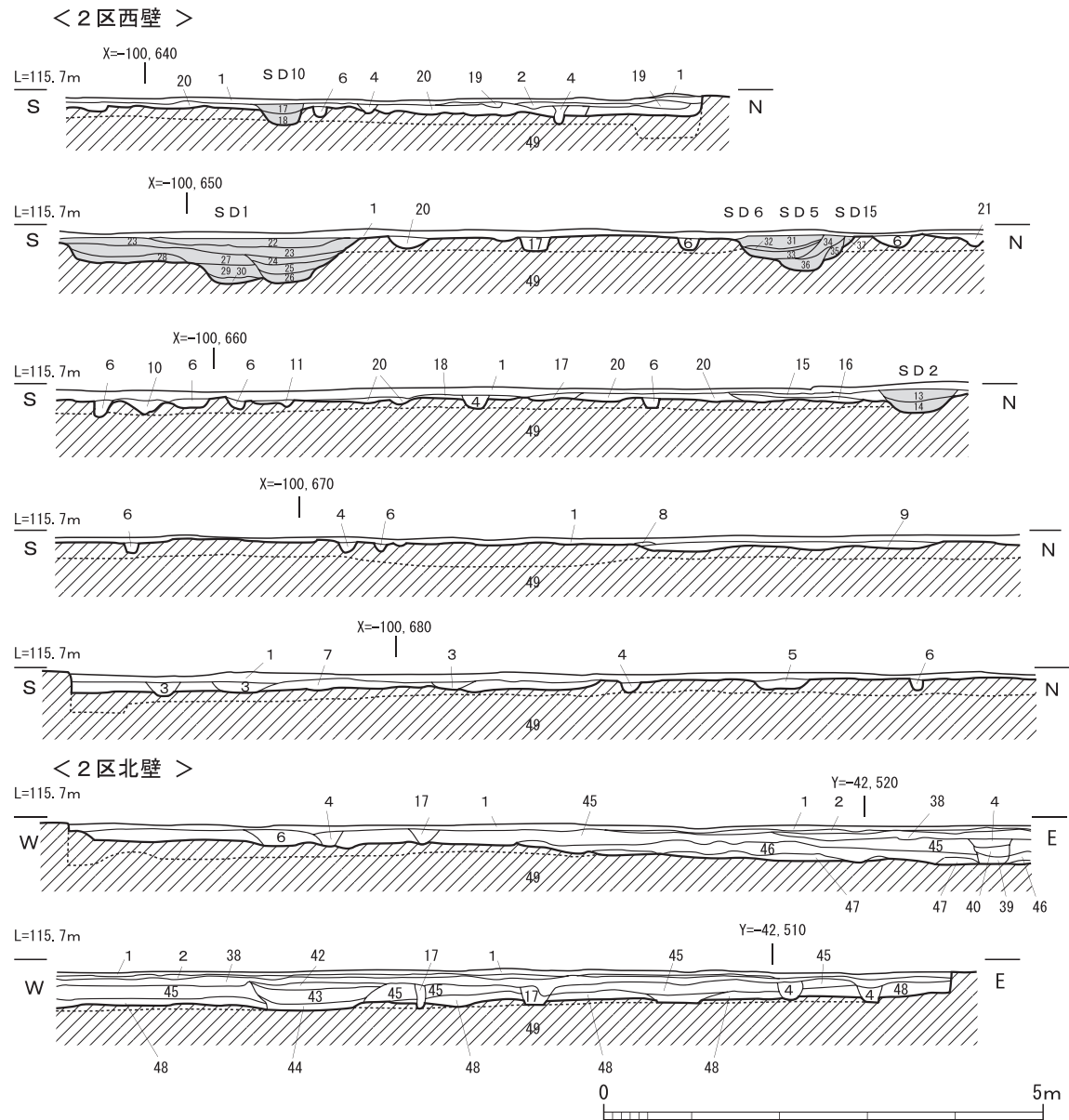
残る地点や、床土直下で遺構面が検出される地点があった。部分的に残る近世遺物包含層を機械掘削により除去したのち、人力により調査を進めた。調査面積は、当初1,800㎡の予定で調査を開始したが、遺構の広がりやを部分的に確認する必要が生じたことから一部を拡張し、全体で1,950㎡の調査を実施した。調査区は、西から順に1～3区としたが(第4図)、2区と3区の調査区の間を拡張したため、最終的には2・3区として連結する形となった。各調査面積は、1区は449㎡、2・3区は1,501㎡を測る。

2. 基本層序

調査地周辺は、耕作地として平坦な地形が広がるが、調査地の南西に現在の新庄用水が流れており、北東から南西にかけて徐々に傾斜する地形となっている。現地表面となる耕作地の標高はおおよそ115.9mである。

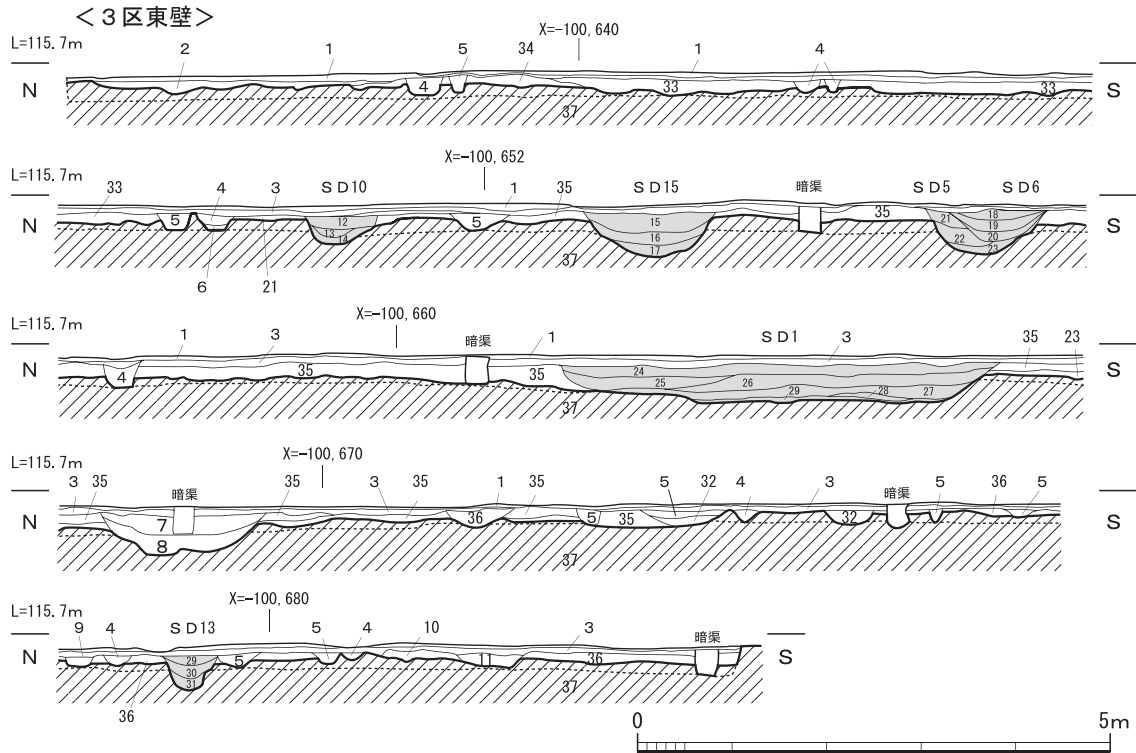


第5図 第17次調査1区土層断面図



- | | |
|---|--|
| <p>1. 灰黄色シルト (2.5Y 6/2) <耕作土床土></p> <p>2. 灰黄褐色シルト質粘質土 (10YR 4/2)</p> <p>3. 黒褐色粘質土 (10YR 3/2)</p> <p>4. 黒褐色粘質土 (7.5YR 3/2)</p> <p>5. 灰黄褐色粘質土 (10YR 4/2)</p> <p>6. 暗褐色粘質土 (10YR 3/3) <にぶい黄褐色粘質土 (10YR 5/4) ブロック状に含む></p> <p>7. 黒褐色粘質土 (2.5YR 3/2)</p> <p>8. 褐灰色砂質土 (10YR 4/1)</p> <p>9. 暗灰黄色粘質土<にぶい黄褐色土粒含む></p> <p>10. 黒褐色粘質土 (10YR 3/2)</p> <p>11. 暗オリーブ褐色粘質土 (2.5Y 3/3)</p> <p>12. 暗褐色粘質土 (10YR 3/4)</p> <p>13・14. SD2埋土</p> <p>15. 黒褐色粘質土 (10YR 3/1)</p> <p>16. 黒褐色粘質土 (10YR 3/2) <にぶい黄褐色粘質土ブロック状に含む></p> <p>17. 暗オリーブ褐色粘質土 (2.5Y 3/3)</p> <p>18. SD10埋土</p> | <p>19. オリーブ褐色砂質土 (2.5Y 4/3)</p> <p>20. 暗褐色粘質土 (10YR 3/3)</p> <p>21~30. SD1埋土</p> <p>31~33. SD6埋土</p> <p>34~36. SD5埋土</p> <p>37. SD15埋土</p> <p>38. 暗褐色粘質土 (10YR 3/3)</p> <p>39. 黒褐色粘質土 (10YR 3/2)</p> <p>40. 黒褐色シルト質粘質土 (7.5YR 3/1)</p> <p>41. 黒褐色礫混じり粘質土 (10YR 3/2) <黄褐色粘質土粒 (10YR 5/6) φ2~3cm大の礫多く含む></p> <p>42. 黒褐色シルト質粘質土 (7.5YR 3/1)</p> <p>43. 暗褐色粘質土 (10YR 3/3)</p> <p>44. 暗オリーブ褐色粘質土 (2.5Y 3/3)</p> <p>45. 暗褐色粘質土 (10YR 3/4)</p> <p>46. オリーブ黒色粘質土 (7.5Y 3/2)</p> <p>47. 黒褐色礫混じり粘質土 (10YR 2/2)</p> <p>48. 暗灰黄色粘質土 (2.5Y 2/4)</p> <p>49. にぶい黄褐色粘質土 (10YR 2/3)</p> |
|---|--|

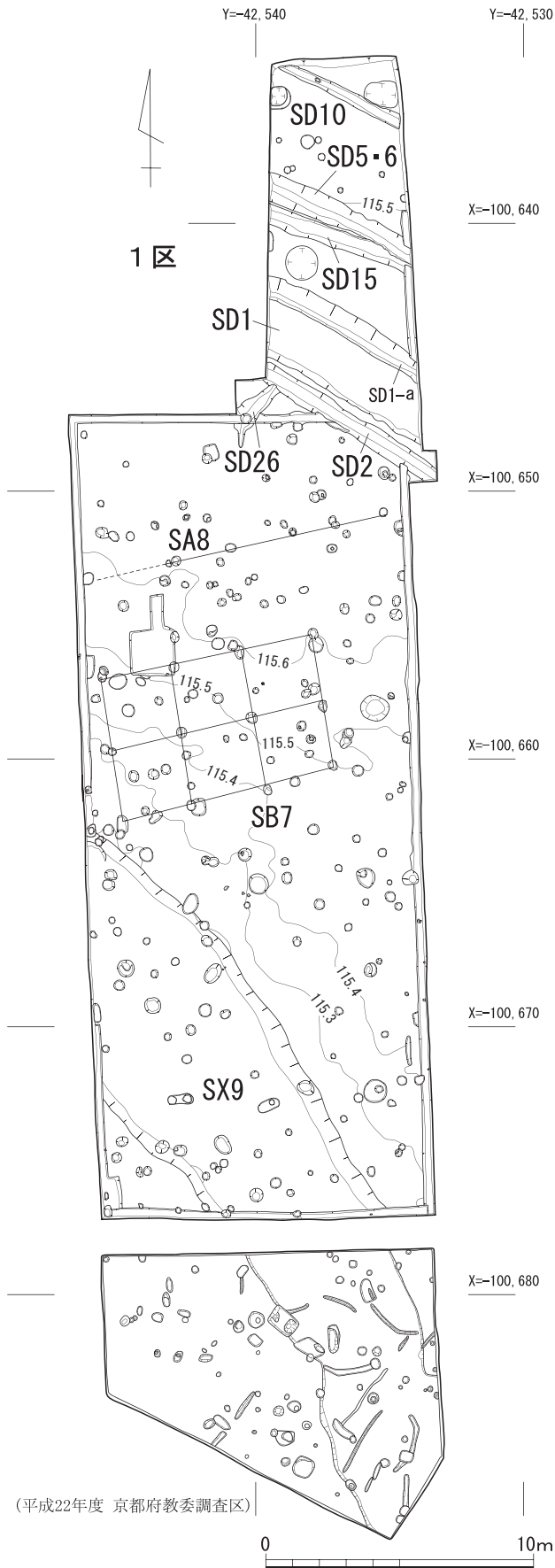
第6図 第17次調査2区土層断面図



- | | |
|---------------------------|------------------------------------|
| 1. 灰色粘質土 (5Y 6/1) <耕作土床土> | 11. 暗褐色礫混じり粘質土 (10YR 3/3) |
| 2. 暗灰黄色砂質土 (2.5Y 5/2) | + 褐色粘質土 (10YR 4/4) |
| 3. 暗褐色粘質土 (10YR 3/3) | 12~14. S D10埋土 |
| 4. 黒褐色粘質土 (10YR 3/1) | 15~17. S D15埋土 |
| 5. オリーブ褐色粘質土 (2.5Y 4/3) | 18~23. S D5・6埋土 |
| 6. 暗褐色粘質土 (10YR 3/4) | 24~28. S D1埋土 |
| 7. 暗オリーブ褐色粘質土 (2.5Y 3/3) | 29~31. S D13埋土 |
| 8. 黒褐色粘質土 (10YR 3/4) | 32. 暗オリーブ褐色粘質土 (2.5Y 3/3) |
| 9. 黒褐色礫混じり粘質土 (10YR 3/2) | 33. 暗褐色礫混じり粘質土 (10YR 3/3) |
| < φ 2~5cm大の礫含む > | < φ 1~3cm大の礫多く含む > |
| 10. 暗褐色礫混じり粘質土 (10YR 3/3) | 34. 黒褐色粘質土 (10YR 2/2) |
| < φ 1~2cm大の礫含む > | 35. 黒褐色粘質土 (2.5Y 3/2) |
| | 36. 灰黄褐色礫混じり粘質土 < φ 2~5cm大の礫多く含む > |
| | 37. にぶい黄褐色粘質土 (10YR 2/3) <基盤層> |

第7図 第17次調査3区土層断面図

1区では、南部で旧地形が低くなり、古墳時代～近世にいたる各時期の遺物包含層を確認した。この地点は、調査対象地のなかでも包含層が最も厚い地点で、層序は上層から順に、近世遺物を包含する暗灰黄色シルト質粘質土層(第5図第3層)、中世遺物包含層である灰黄褐色粘質土層(同第4層)、古墳時代～平安時代の堆積層とみられる黒褐色粘質土層(同第5層)を確認した。第5層の検出面において、素掘り溝群を中心とした上層遺構を検出している。さらに、その下層にはいわゆる黒ボクの漸移層とみられる暗オリーブ褐色粘質土が堆積し(同第6層)、この層位の検出面で弥生時代の遺構面を検出した。基盤層(同第40層)の検出レベルは標高115.2mである。北部では、床土の直下で基盤層としたにぶい黄褐色粘質土を検出し、弥生時代～古墳時代の遺構群を確認した。標高は約115.6mを測る。また2・3区では、中央から南部にかけて、床土直下の標高約115.5m前後で基盤層(第6図第49層・第7図第37層)を確認し、弥生～古墳時代、奈良時代の遺構を検出した。2・3区北部では、西側で耕作土・床土直下で遺構が検出され、北部中央は弥生時代の堆積層と推定される暗褐色粘質土層(第6図第45層)を確認し、いわゆる黒ボク層のオリーブ黒色粘質土層(同第46層)を挟んだ下層の標高約115.3～115.4mで基盤層を検出した。



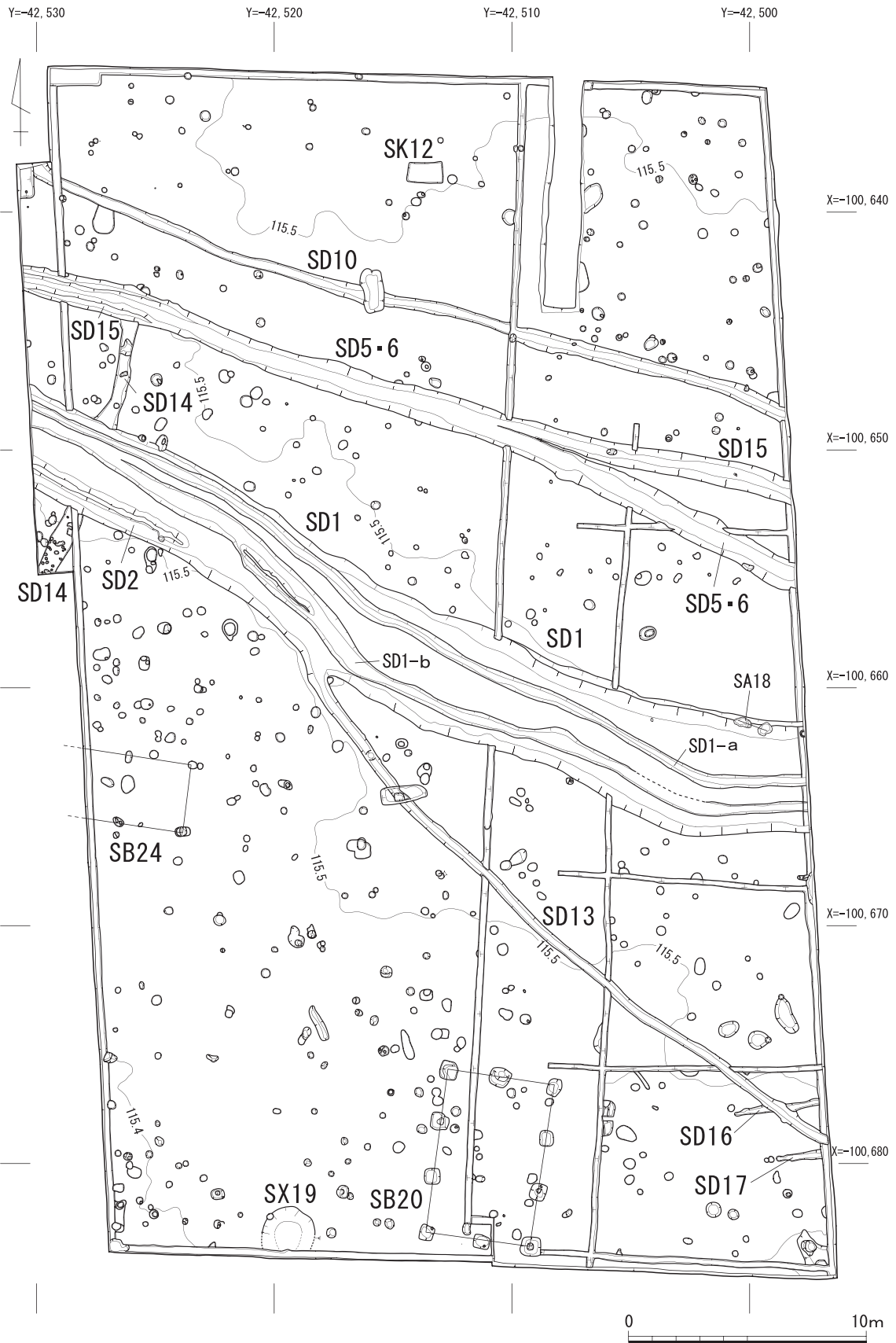
第8図 第17次1区平面図

3. 検出遺構

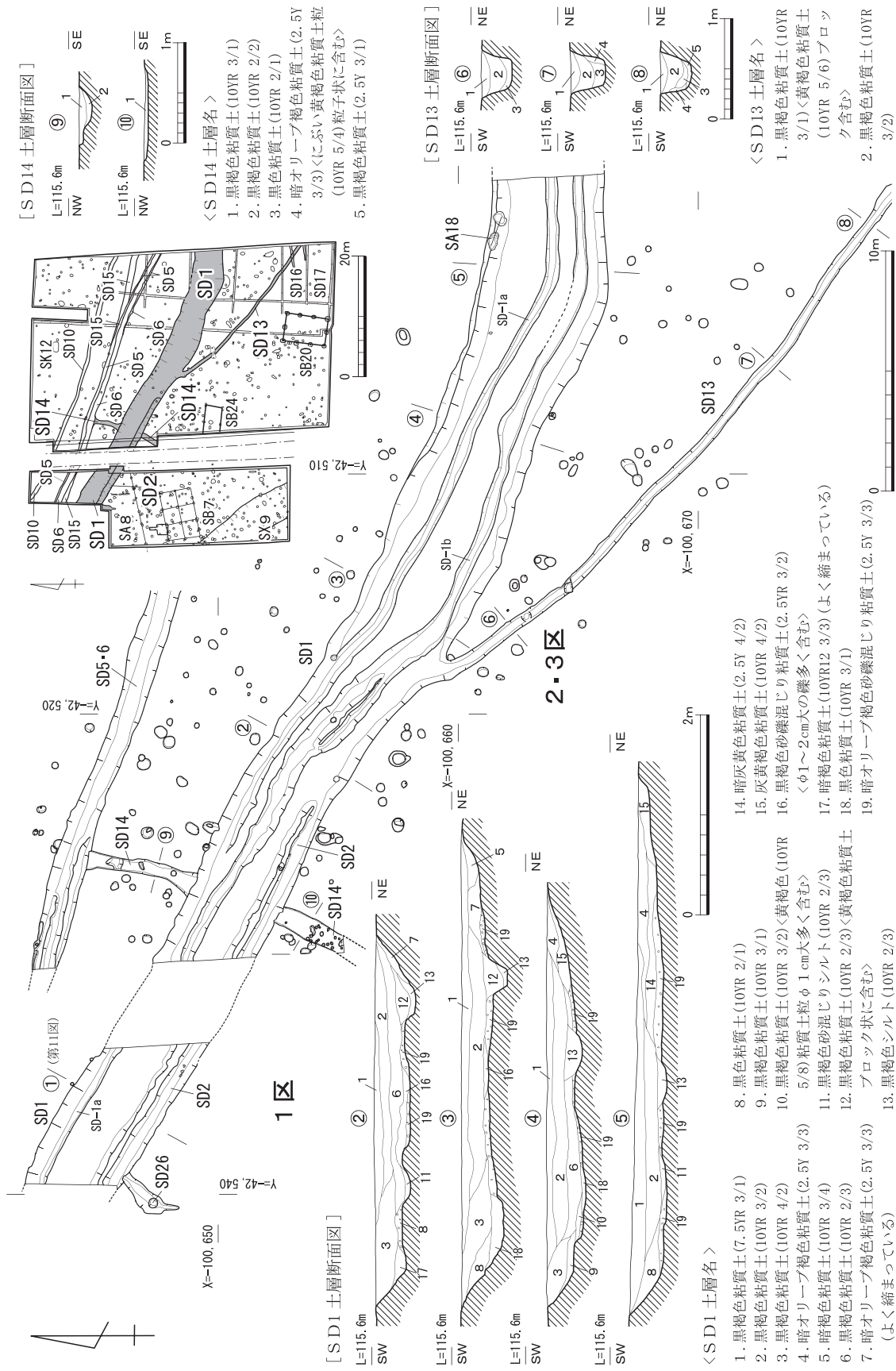
今回の調査では、弥生時代後期～古墳時代にかけての溝群や土坑、奈良時代～平安時代にかけての掘立柱建物跡や柵列、中世～近世の素掘り溝群等、各時代の遺構を検出した(第8・9図)。弥生時代後期末～古墳時代初頭の遺構としては、調査区の北西から南東にかけて、大小7条以上の溝群を確認した。溝SD1は、幅4～5mの規模をもち、再掘削を伴う大規模な溝である。調査区南西では溝SD1に平行して溝SD2が掘削され、2・3区中央では溝SD1から南西方向に分岐する溝SD13を検出した。また溝SD1の北側では、溝SD5・6・15を一部重複して検出し、さらにその北で溝SD10を検出した。いずれも北西から南東へと掘られた溝であり、弥生時代後期末～古墳時代初頭の溝とみられる。

奈良～平安時代の遺構は、掘立柱建物跡や柵列を検出した。2・3区南部で検出した掘立柱建物跡SB20は、方形の掘形の柱穴群で構成される奈良時代後期の建物跡である。2区西部ではこれと主軸を同じくする掘立柱建物跡SB24を検出した。また1区では平安時代～鎌倉時代と推定される掘立柱建物跡SB7と、北側に平行する柵列SA8を確認した。いずれも奈良～平安時代の建物跡や柵列と推定される。

また上層遺構として、1区で南北方向やや東に斜行する素掘り溝群を検出し、2区南東では東西方向の2条の素掘り溝を検出した。いずれも土器を出土していないが、検出状況から時期はおおよそ中



第9図 第17次2・3区平面図

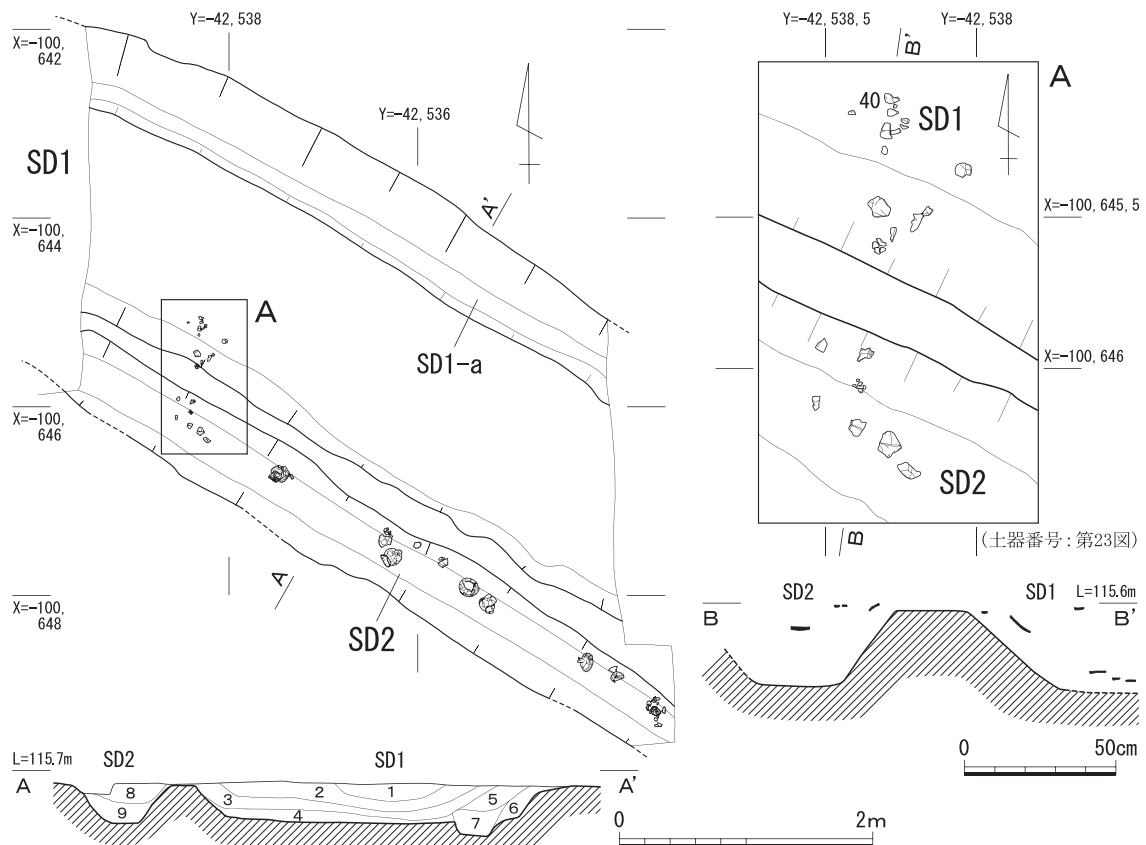


第10図 溝SD1・2・13・14平面・断面図

期～近世にかけての遺構群と推定される。

以下、時期を追って、各遺構について詳述する。

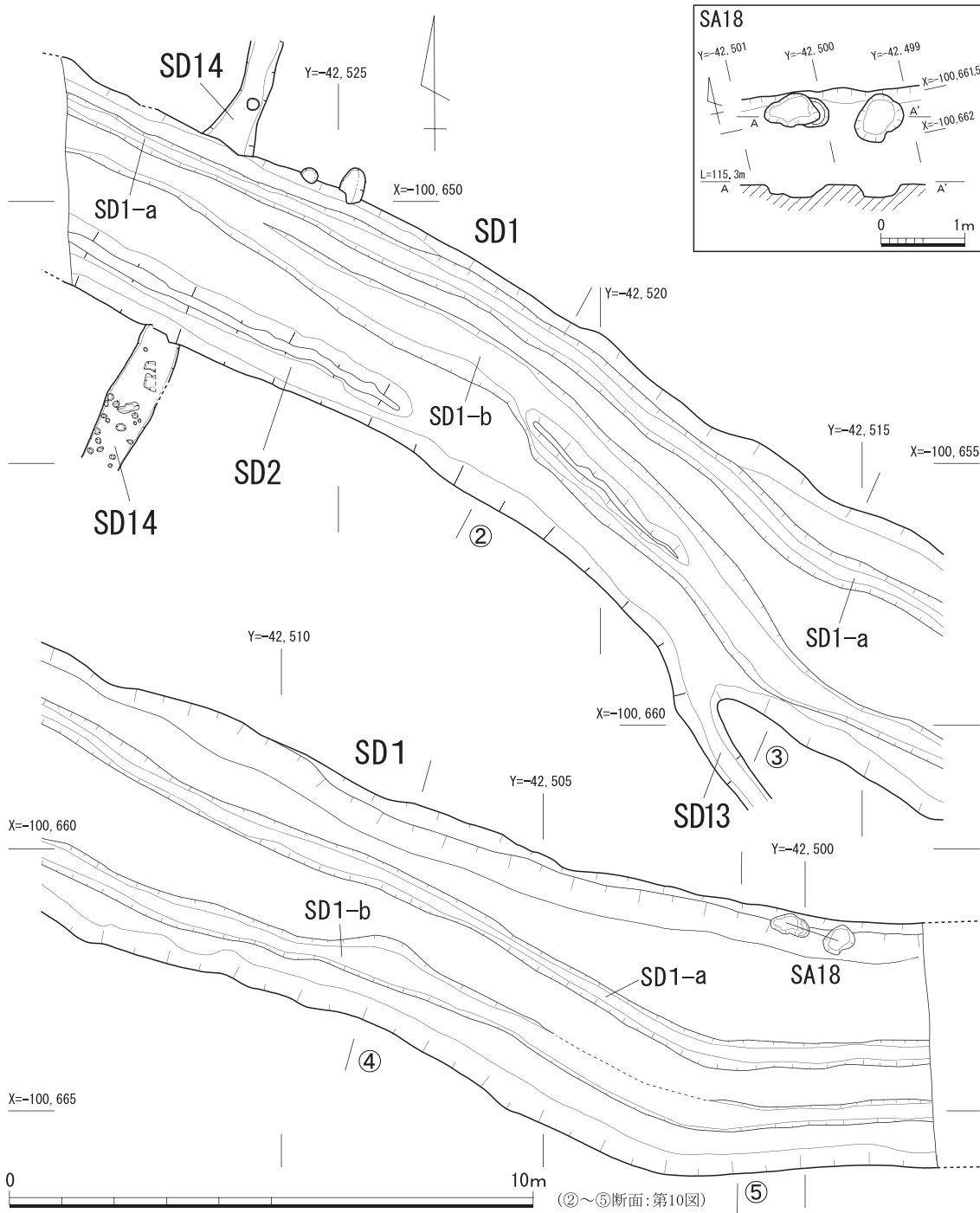
溝SD1 (第10～12図) 調査区北西から南東へ向けて掘削された大規模な溝である。1区北西隅から3区東端まで、約50mにわたって検出した。溝の断面形は、逆台形状をなす。溝の幅は北西ほど狭く、南東へ向けて徐々に広がる。西部(1区)では幅約2.8～3.0mを、中央部(2区)では約3.6～4.0mを、東部(3区)では約4.0～5.5mを測る。検出面での深さは約0.3～0.4mを測る。溝の埋土は、上層は黒褐色粘質土(第11図第2層)、中層は暗褐色粘質土(同第3層)、下層は暗褐色砂礫混じり粘質土(同第4層)からなる。最下層となる第4層の下面では、2～3cm大の礫を集中して検出した。この層は中央部から東部で特によく残存しており、この層位を断ち切って、SD1-a、SD1-bとした2条の小規模な溝が掘削されている。SD1-aは、西部ではSD1の北辺に掘削され、中央部で北辺から南辺へと流れを変え、さらに東部では徐々に浅くなり消滅する。また、SD1-bは、中央部では北辺に沿って掘削され、東部では溝の中央部へと流れを変えている。これらの溝は、SD1の流量が低下した際に、流量を確保するために再掘削された溝と推定される。SD1の東端では、北辺肩部で東西に並列して穿たれた2基の柱穴を検出した。径0.3～0.4m、深さ0.4mを測る。架橋に伴う支柱痕の可能性はある。出土遺物は、溝底を中心



<SD1・2土層名>

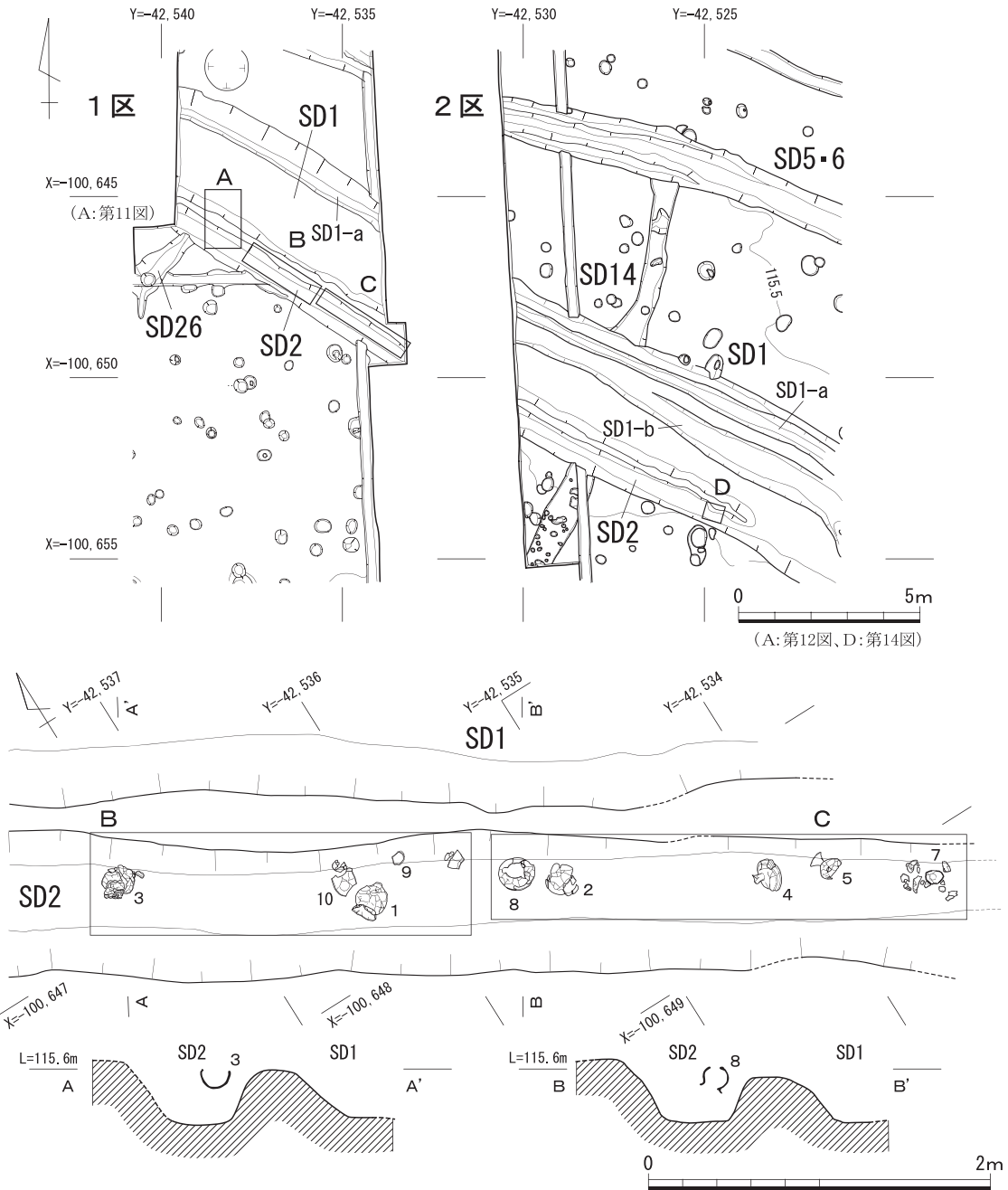
- | | | |
|---|---|------------------------|
| 1. 暗灰黄褐色粘質土(2.5Y 4/2)
〈黄褐色ブロック細粒多く含む 10YR 5/6〉 | 4. 暗褐色砂礫混り粘質土(10YR 3/4)
(φ 2～3 cm以下の礫含む) | 7. 黒褐色礫混り粘質土(10YR 2/2) |
| 2. 黒褐色粘質土(10YR 3/2)(上層) | 5. 黒褐色粘質土(2.5Y 3/2) | 8. 暗褐色粘質土(10YR 3/4) |
| 3. 暗褐色粘質土(10YR 3/3)(中層) | 6. 黒褐色粘質土(10YR 3/1) | 9. 黒褐色粘質土(10YR 2/2) |

第11図 溝SD1・2(1区)平面・談面図・土器出土状況図



第12図 溝SD1(2・3区)平面図、柱列SA18平面・断面図

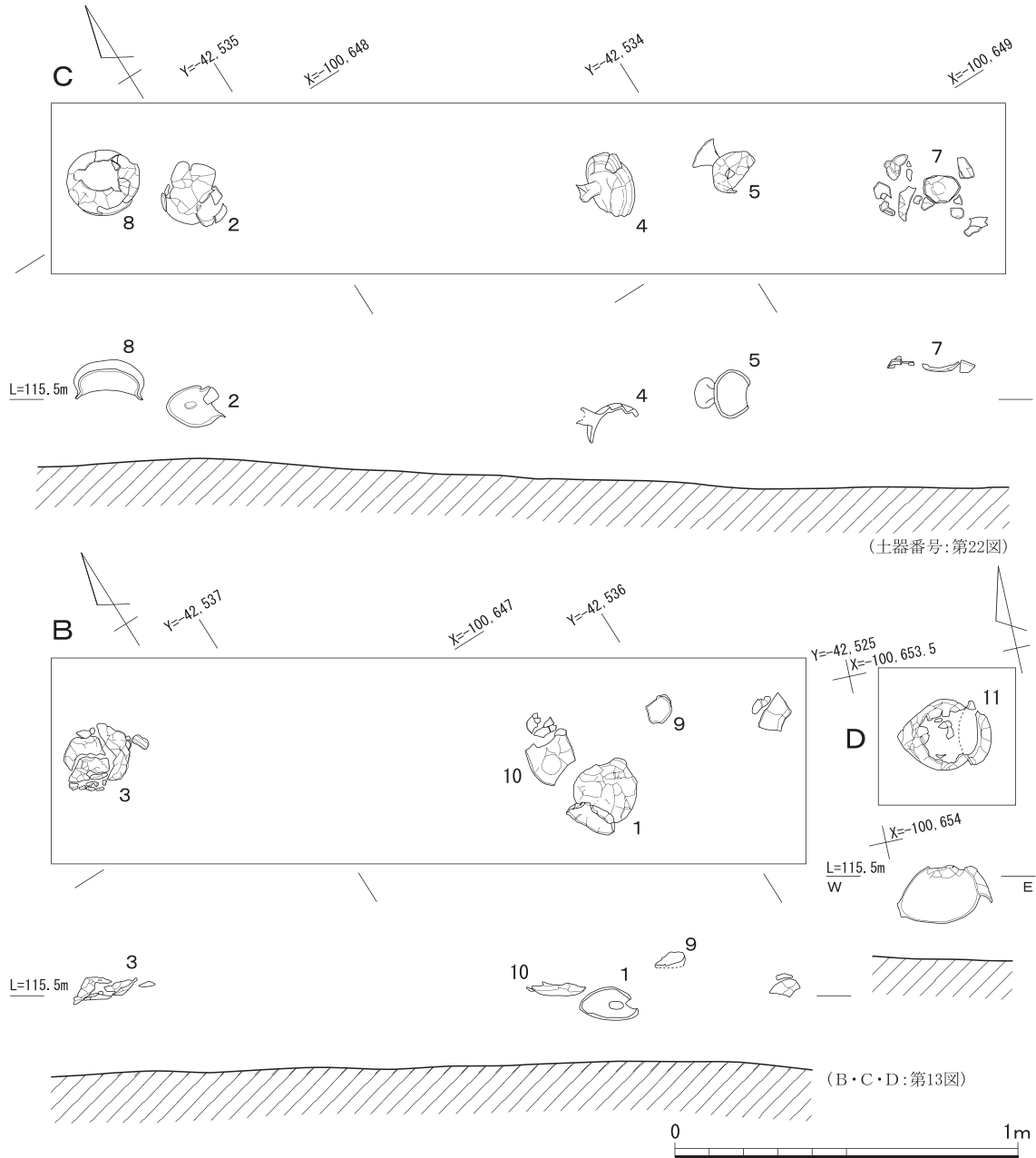
に土器が出土しているが、いずれも摩耗し細片化している。土器にはやや時期幅があり、弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器を主体とするが、一部に後期後葉に遡るものがある。SD1は、耕作土・床土の直下で検出されたことから、上層は後世の削平を受けているとみられる。溝の下層には砂礫を多く含むことから、流路としての機能が主体であり、灌漑を目的に掘削された溝と推定される。過去の調査で確認された野条遺跡の竪穴式住居跡群は、SD1の北部から東部かけて展開することから、SD1は集落の南西の境界を画する溝と考えられる。出土土器から、SD1は弥生時代後期後葉に掘削が始まり、再掘削を繰り返し、古墳時代初頭(庄内併行期古相)まで



第13図 溝SD2(1区)平面・断面図・土器出土状況図

存続したと推定される。

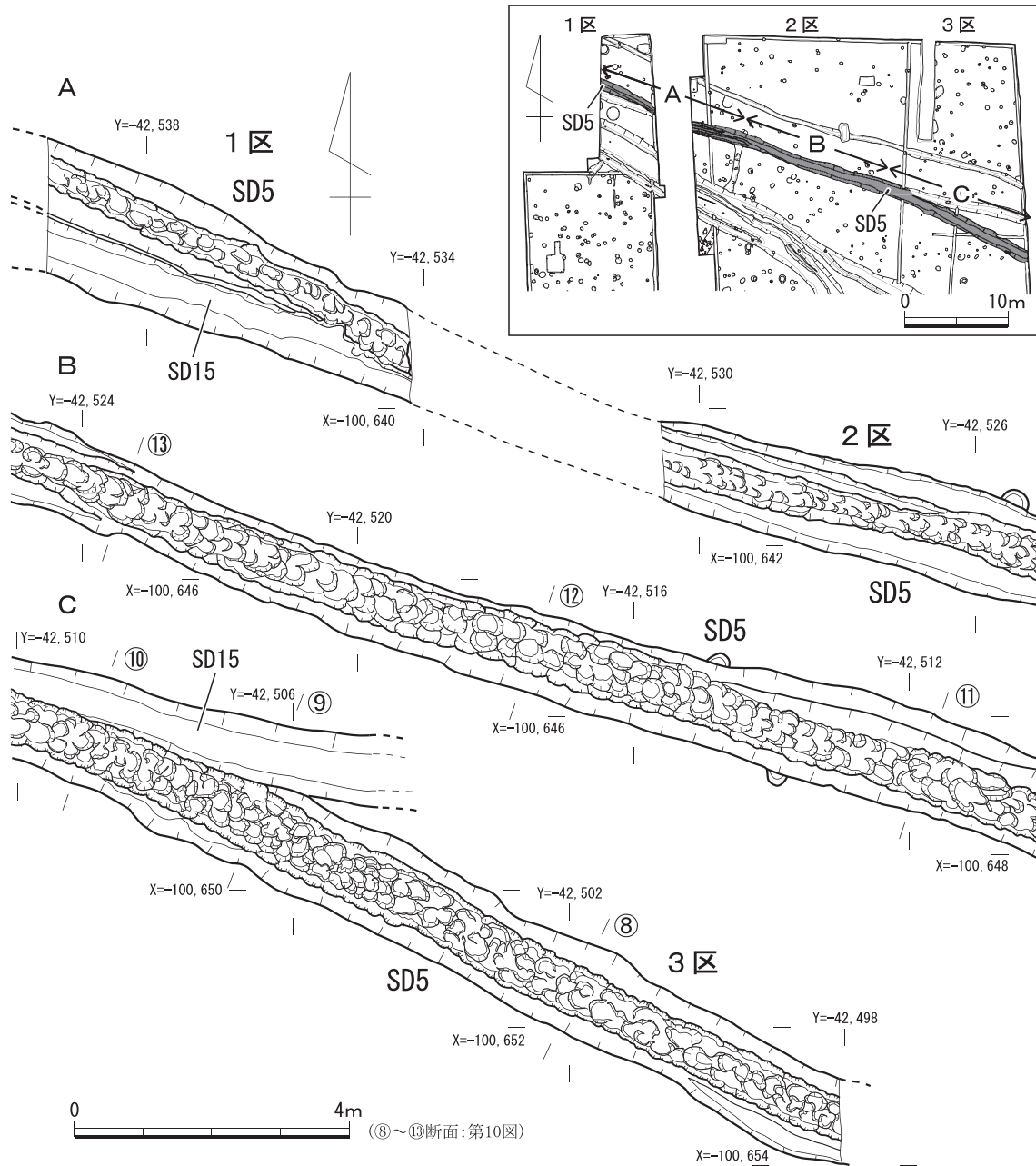
溝SD2(第11・13・14図) 調査区西部において、SD1の南辺に接して検出した溝で、2区西部でSD1に合流する。1区北西隅から2区西部まで、約18mにわたって検出した。断面形は台形をなし、溝の幅は約0.6m、深さ約0.4mを測る。SD2とSD1との間には、基盤層を土手状の高まりとして検出した。出土遺物は、1区において土器がまとめて出土した(第13・14図)。器種は、壺・甕・高杯・台付鉢・鉢などを含み、約10点が出土した。これらの土器は、底部から約5～10cm程度上層のレベルで、溝の北寄りで口縁部を下方にして出土した土器が多く、SD1およびその間の土手状の高まり側から投棄あるいは転落したとみられる。土器の多くがほぼ完



第14図 溝SD 2(1区)土器出土状況図

形に復元でき、列状に出土したことから、一括して廃棄、または土手上に置かれ、転落したものである。SD 1とともに集落の南西を画する溝とみられ、集落の境界域において、土器を伴う何らかの祭祀あるいは儀礼的な行為が行われたと推定される。また、土手状の高まりを中心にSD 2とSD 1の双方に土器片が広がり(第11図)、一部接合関係を確認したことから、2条の溝は併存することが明らかである。先述のように、SD 1が集落の南西隅を画する溝とみられることから、SD 1の外側に新たにSD 2が掘削されたとみられる。出土土器から、時期は弥生時代後期末～古墳時代初頭(庄内併行期古相)と推定される。

溝SD 26(第8図・第13図) SD 2の西端で検出した南西方向に掘削された溝である。幅約0.5～0.8m、深さ約0.4mを測る。遺物は出土していないが、埋土の状況からSD 1・2と同時



第16図 溝SD5平面図

期の溝と推定される。SD2にむけて浅く終息し、完全に連結した状況にはない。

溝SD5・6(第15・16図) SD1の北側に平行して検出した溝で、北西から南東にむけて掘削された溝群である。2条の溝は、ほぼ重複して検出した。断面の観察から、SD5の埋没後、SD6が再掘削されたことが判明した。SD5は、幅1.2～1.4m、検出面での深さ約0.3～0.4mを測り、SD6は、幅0.6～0.8m、深さ約0.2mを測る。SD5は、逆台形状の断面をなし、SD6は「U」字形の断面をなす。SD5・6の埋土には砂礫層は認められず、SD1のように常に水流がある状況ではなかったと推定される。溝の底部で、鋤鍬等の耕作具によるとみられる鱗状の連続する掘削痕を検出した(第16図)。溝底面の整形がなされていないことから、SD5もまた再掘削による溝の可能性はある。出土遺物はわずかながらあり、時期は古墳時代初頭(庄内併

行期新相)と推定される。

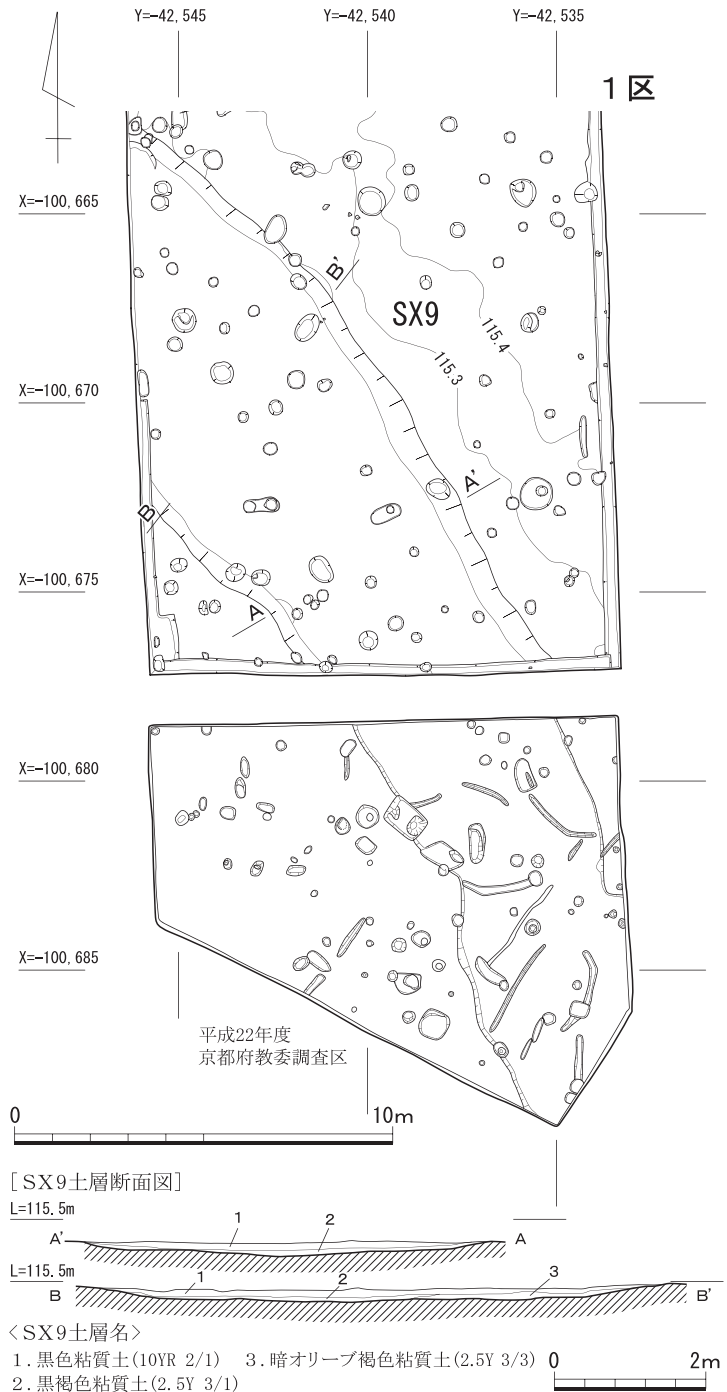
溝SD15(第15図) SD5・6と一部を重複して検出した溝である。SD5に先行して掘削された溝である。西部(1区)では、SD5よりも南で検出し、東部(3区)では、SD5よりも北で検出した。断面形は台形状をなし、規模は幅1.0m、深さ約0.3mを測る。出土土器から、時期は弥生時代後期末～古墳時代初頭(庄内併行期古相)と推定される。

溝SD14(第13図) 2区西辺でSD15と接し、南へ分岐するように掘削された溝である。幅0.5～0.9m、深さ0.1mを測る。南部でSD1と直交するが、土層観察から、SD1に先行して掘削された溝とみられる。時期を確定できる土器資料はみられないが、SD15と連結することからほぼ同時期の溝と推定される。

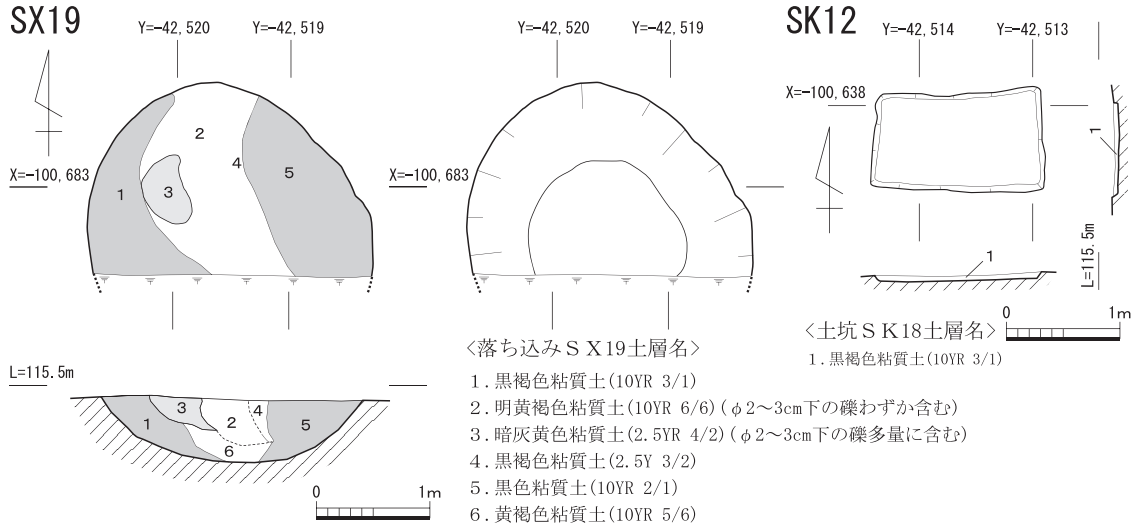
溝SD10(第15図) 調査区の最も北で検出した溝である。幅0.4～0.7m、深さ0.2～0.3mを測り、断面形は台形状をなす。土器は出土していないが、埋土の状況から弥生時代後期末～古墳時代初頭の溝と推定される。

溝SD13(第10図) SD1の中央部から南へ派生する溝である。幅約0.4m、深さ約0.35mを測り、断面形は台形状をなす。出土遺物から、時期は弥生時代後期末～古墳時代初頭(庄内併行期古相)と推定される。

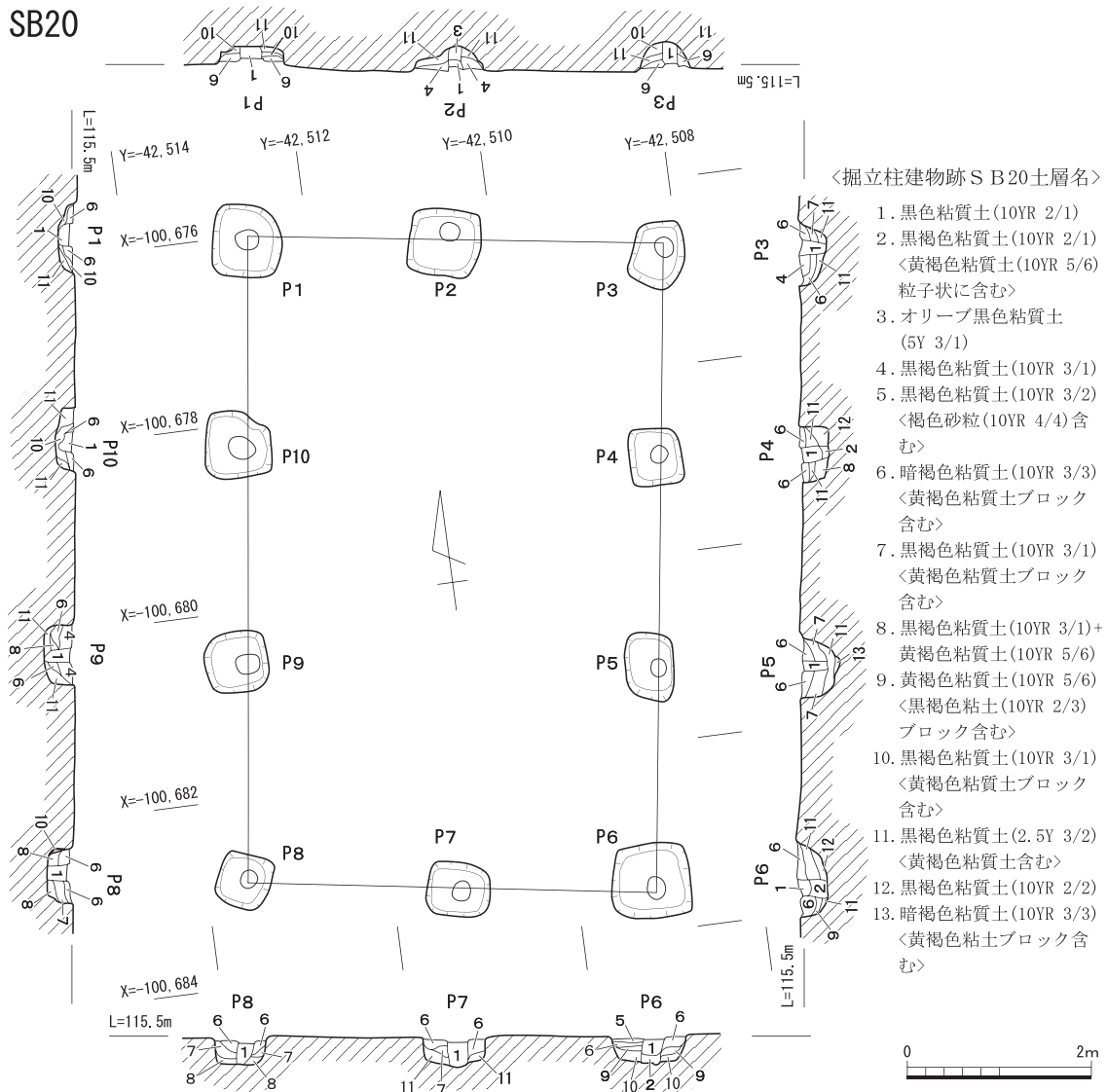
落ち込みSX19(第18図) 調査区中央南端で検出した楕円形状の落ち込みである。基盤土の黄褐色粘質土の外側に外輪状に黒褐色粘質土を検出しており、風倒木痕の可能性が高い。これまで野条遺跡周辺では、こうした落ち込みがしばしば検出され、災害との関連が



第17図 1区南部平面図、落ち込みSX9断面図



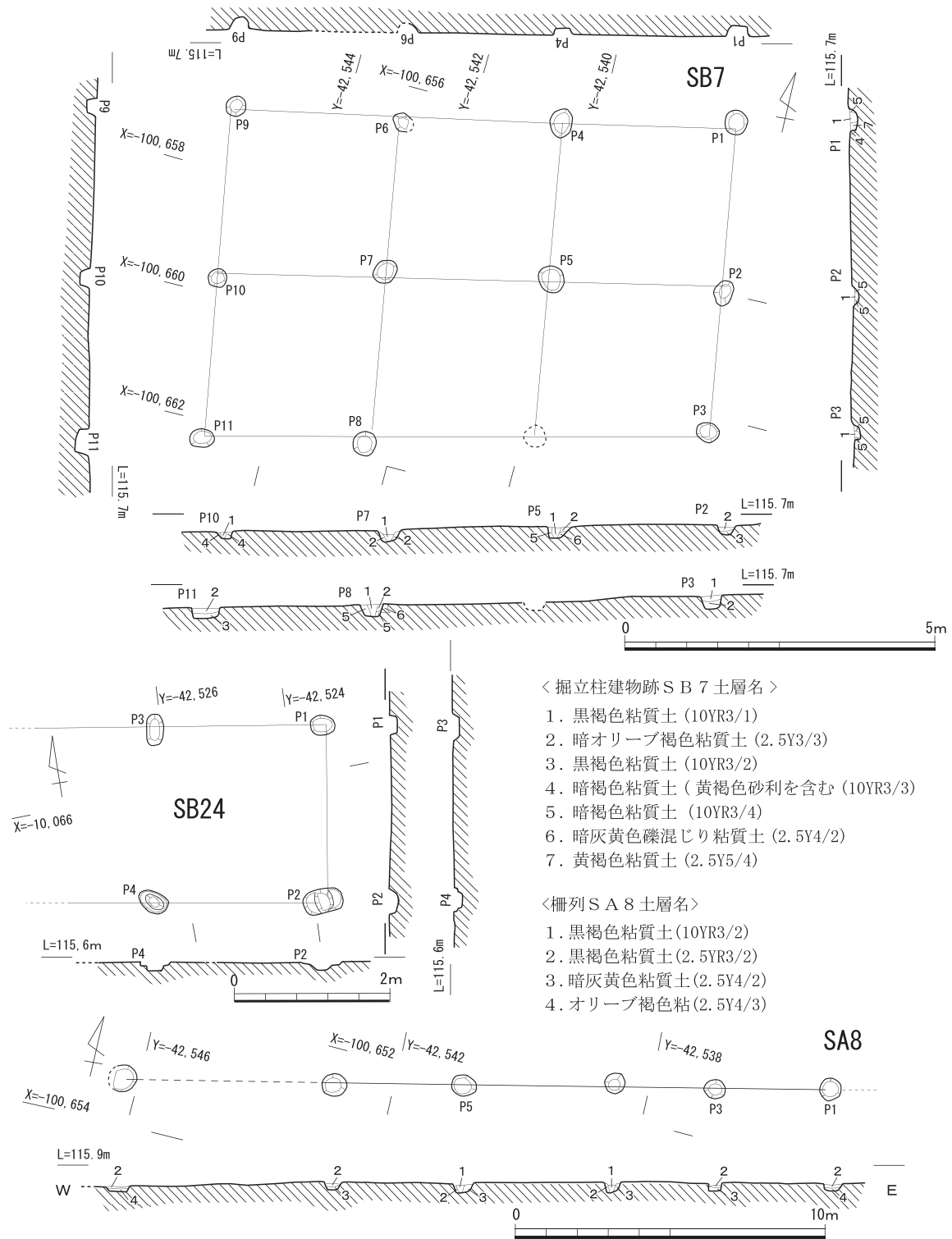
第18図 落ち込みS X19、土坑S K12平面・断面図



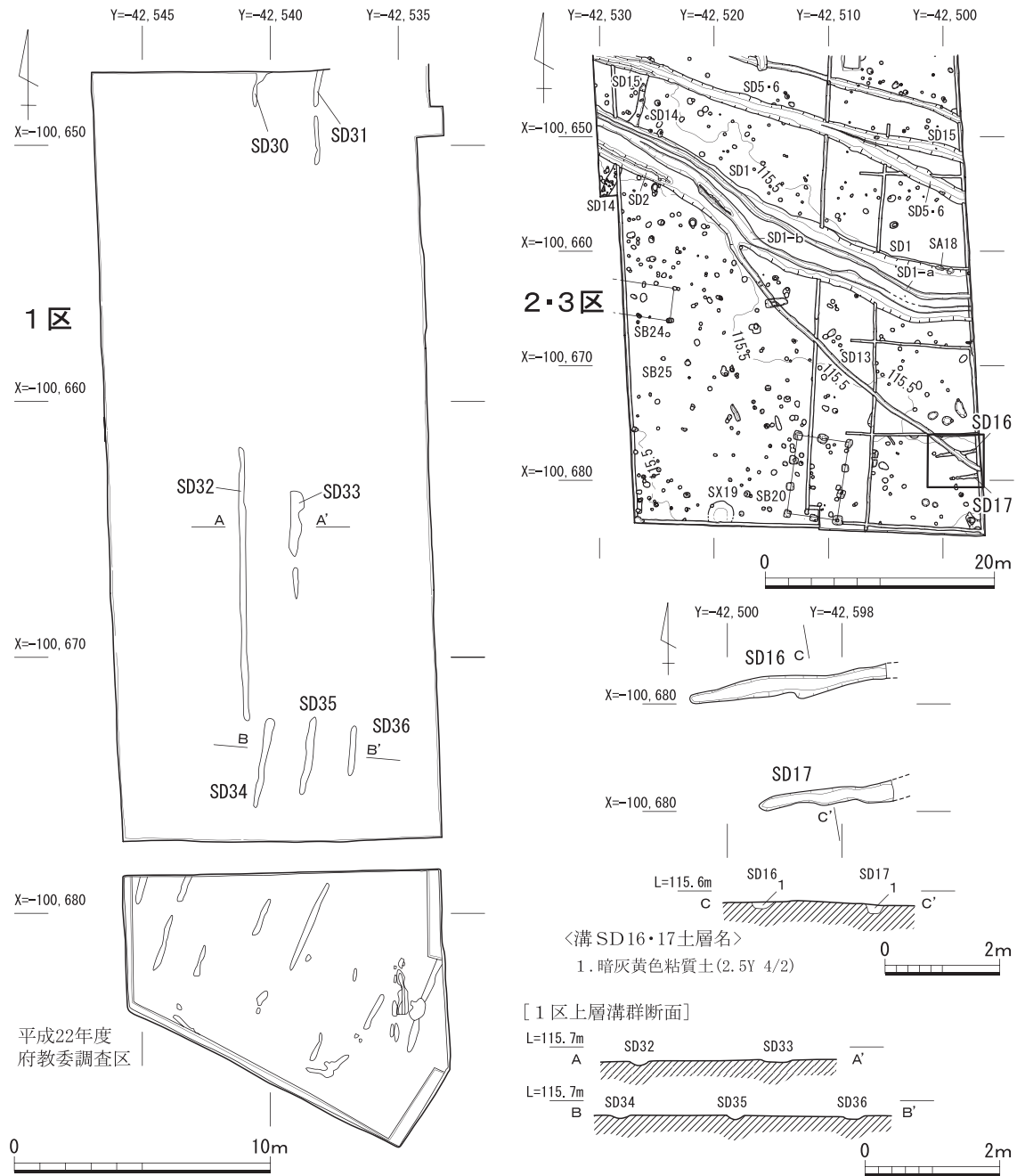
第19図 掘立柱建物跡S B20平面・断面図

指摘される場所であった。古環境の復原のため、加速器質量分析法(AMS)による土壌の放射性炭素年代測定を行った結果、5770±40年BPの年代値が得られた。^(注1)

土坑SK12(第18図) 調査区北部で検出した方形の土坑である。規模は、1.5×0.8m、深さ約5cmを測る。遺物は出土しておらず、時期は不明である。



第20図 掘立柱建物跡SB7・24、柵列SA8平面・断面図



第21図 1区上層遺構平面図、溝SD16・17平面・断面図

掘立柱建物跡SB20(第19図) 調査地中央南部で検出した2間×3間の建物跡である。梁間約4.4m、桁行約7.2mを測る。柱間は、約2.3～2.4mを測り、方形掘形の柱穴から構成される。主軸は、北から東へ7度振る。柱穴の規模は一辺0.6～0.8m、深さ約0.2～0.4mを測る。柱穴P4から須恵器杯Bの一部が出土したことから、奈良時代後半に帰属する建物跡と推定される。

掘立柱建物跡SB24(第20図) 2区西部で一部を検出した1間×2間以上の建物跡である。柱間は2.7～2.8mを測る。主軸は、北から東へ6度振る。柱穴から遺物は出土していないが、SB20と主軸をほぼ同じくし、奈良時代の建物跡と推定される。

掘立柱建物跡SB7(第20図) 1区で検出した建物跡である。東西3間(約8.0m)以上、南北2間(約5.0m)の規模をもつ。主軸は、北から西へ10度振る。柱間の距離は、2.4～2.5mを測る。

柱穴は、直径約0.3m、深さ約0.2mを測る。柱穴から土器は出土していないが、主軸が正方位にのり、この一帯では12世紀後半以降、地割や建物の主軸が正方位に変化することから、平安時代末以降の建物跡と推定される。

柵列S A 8(第20図) 1区北部で検出した東西方向の柵列である。4間以上の規模をもち、柱間は1.8～2.3mを測る。S B 7と主軸を揃えることから、S B 7に伴う柵列の可能性はある。

溝S D 30～33(第21図) 1区上層で検出した南北方向の溝で、北のS D 30・31と南のS D 32・33は同一の2条の溝とみられる。2条の溝が併走することから、道路の側溝の可能性はある。遺物は出土していないが、埋土の色調等から、中世～近世の遺構と推定される。

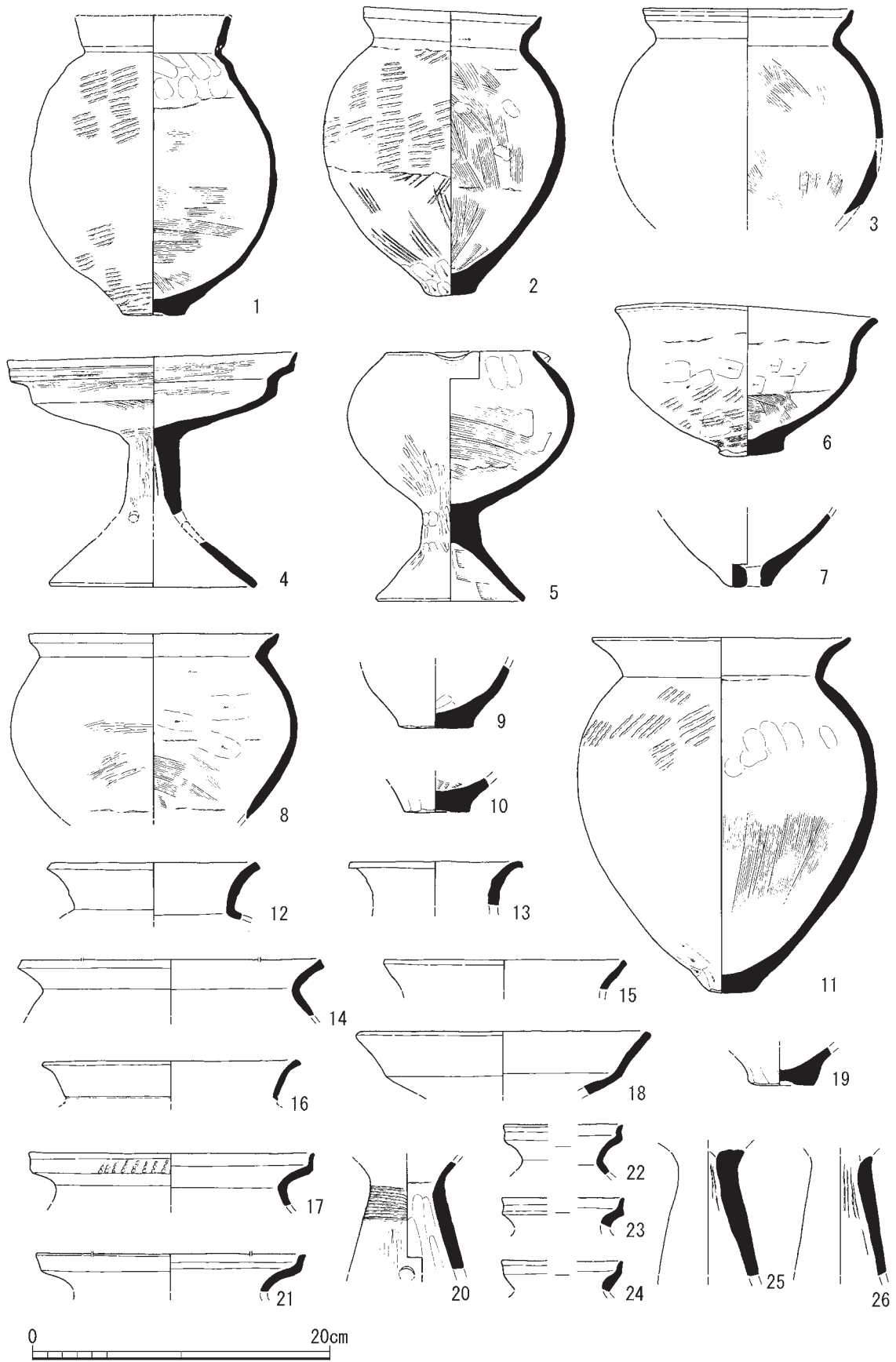
溝34～36(第21図) S D 32・33の南部で検出した素掘り溝で、北東から北西にむけて掘削された溝群である。幅0.2～0.3m、深さ0.1mを測る。遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、現在の地割と斜行するもので、中世から近世の耕作に伴う素掘り溝群とみられる。

溝16・17(第21図) 3区南東端で検出した東西方向の溝である。幅約0.3m、深さ0.1mを測り、溝間の距離は約2.2mを測る。埋土の色調等から、中世～近世の遺構と推定される。

4. 出土遺物

第17次調査で出土した土器は、整理箱20箱を数える。出土遺物は、弥生時代から近世の遺物を含むが、出土土器の約9割が溝S D 1・2から出土したものであり、弥生後期後葉～古墳時代初頭の土器である。これらに加え、古墳時代中期、奈良時代、中世～近世にかけての若干の土器や、石製品を含む。以下、遺構ごとに出土遺物の詳細を述べたい。

溝S D 2(第22図1～11) 1～10はS D 2の1区から、11は2区から出土した。1区から出土した1～8は、完形に復元できるものを多く含む一括性の高い土器群である。1は、短頸壺である。体部のプロポーシオンは、最大径を中位よりやや下部にもち、いわゆる底部輪台技法による窪み底をなす。体部外面はタタキ成形により、内面にハケを施す。色調は、にぶい橙色を呈する。胎土にみる混和材は、石英・長石のほか、チャート・泥岩等の堆積岩類を基調とする在地の組成である。2・3の「く」字口縁甕は、口縁端部に面をなし、摘みあげる特徴をもつ。2は、体部中位下半に分割成形痕を残し、外面をタタキ成形、内面をハケ調整によって仕上げる。底部は厚みのある平底で、底部周辺部に一部ケズリを施し、器壁の厚みを薄くする調整が施されている。口径10.8cm、器高19.1cmを測り、色調はにぶい橙色を呈する。3は、体部外面は剝離が著しく、外面をハケ調整のちナデ、内面にハケを施す。口径14.0cmを測り、色調はにぶい橙色を呈する。4は、北近畿系の長脚の有段高杯である。杯部がやや湾曲する。杯部口縁部外面に、退化した擬凹線文が施され、内外面に横方向の細かなミガキを施す。脚部は、3方向に透かしを穿ち、外面に丁寧な縦方向のミガキを施す。北近畿系土器の範疇で捉えられるが、杯部に明瞭な屈曲をもつ特徴は、丹後地域では一般にみられず、胎土もまた灰褐色砂粒や泥岩など堆積岩類を含むことから、丹波帯に属する北丹波地域からの搬入品かもしくは在地の模倣土器と推定される。口径は17.6cmを測り、色調はにぶい黄橙褐色を呈する。5は、片口の台付鉢である。ワイングラス形

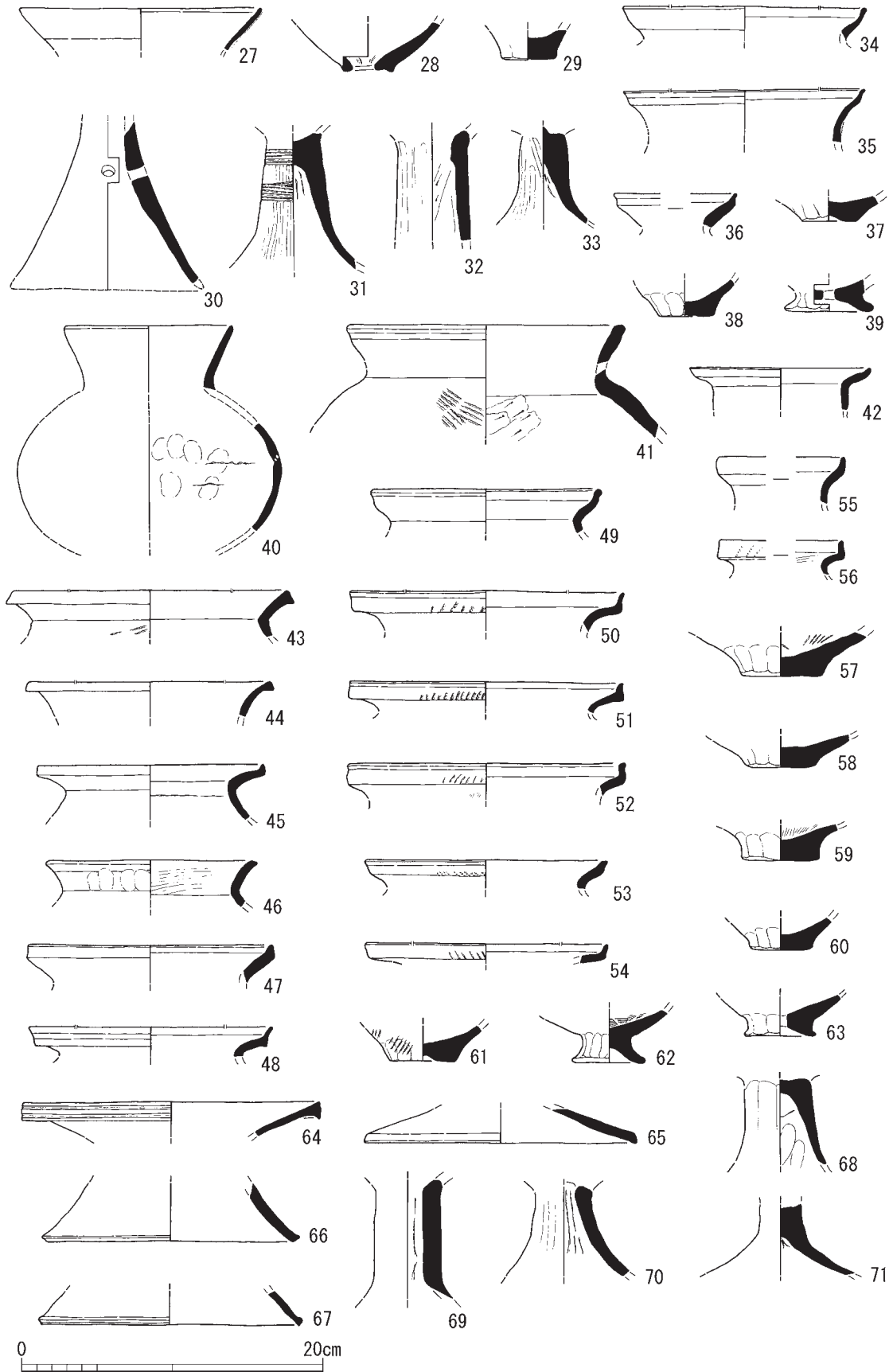


第22図 出土遺物実測図(1)

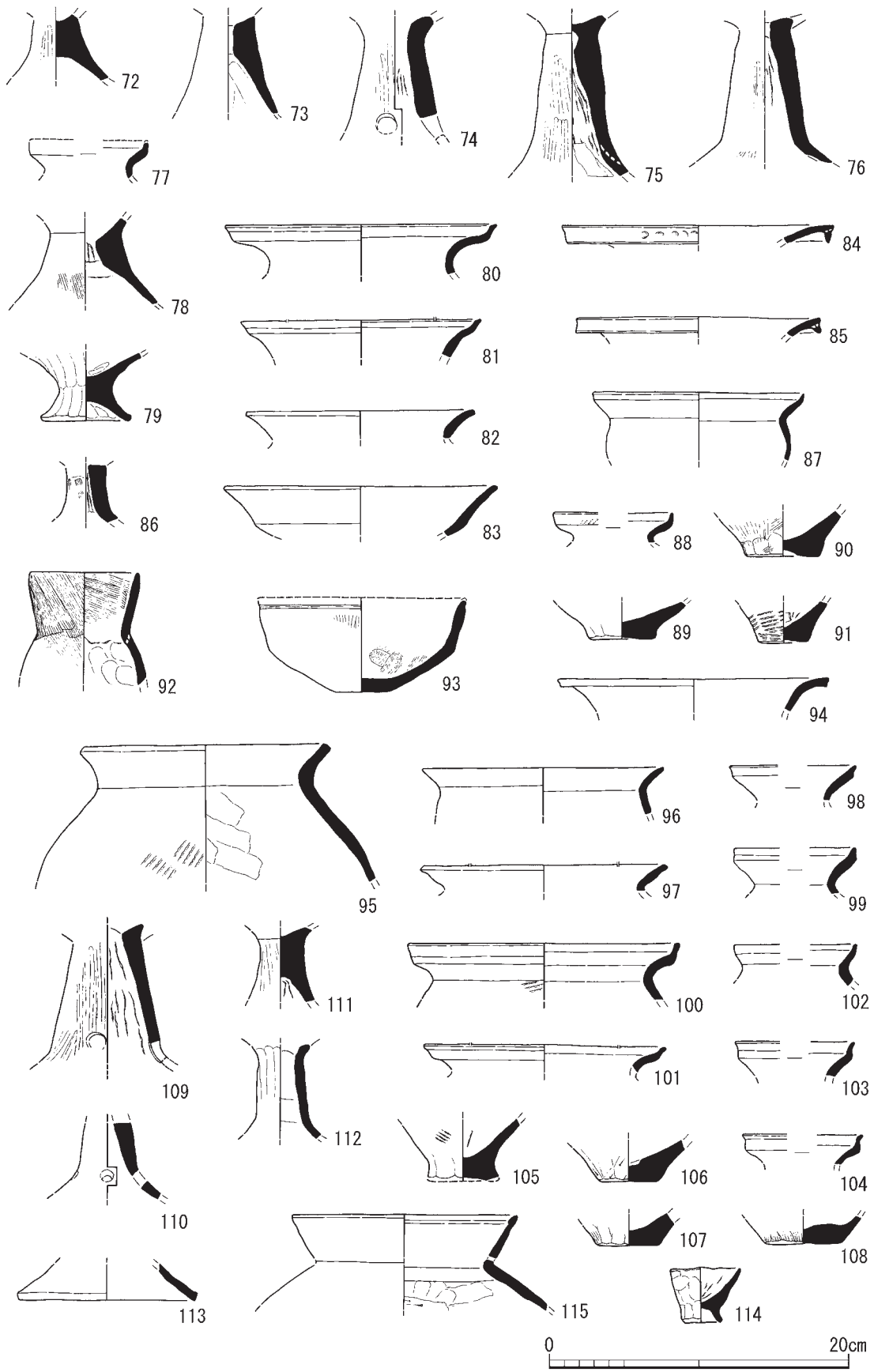
の大ぶりの鉢部を特徴とする。鉢部外面はナデ調整を、内面はハケ調整後に一部ナデが施される。脚部は、鉢部との接合部が中実となり、「ハ」字状に開く短脚の裾部をもつ。完形で出土したもので、口径9.9cm、器高15.9cmを測り、色調はにぶい橙色を呈する。胎土の混和材は、石英・長石など花崗岩起源の砂粒と、チャートなど堆積岩類を基調とする。6は、緩やかに外反する口縁部をなす鉢である。口縁部は湾曲し、器体全体のバランスを欠いている。外面には、タタキ成形を、内面にハケを施し、内面上半にはケズリのちナデ調整を施す。口径約17.0cm、器高約9.5～10.5cmを測る。7は、鉢形の甑の一部とみられ、底部に穿孔をもつ。8は、「く」字口縁をなす甕で、体部肩部が張る。外面は、器壁の剝離が著しいが一部にミガキが認められる。また内面はハケ調整ののち、上半部にはケズリが施される。口径は、16.6cmを測る。9は、小形の平底の鉢底部で、10は壺の底部とみられる。11は、「く」字口縁をなすタタキ成形による甕である。口縁部は立ち上がり角度が大きく、端部に向けて大きく外反する。底部は平底の底部をなすが、底部に向け外面の一部にケズリを施している。こうした底部周辺における外面調整は、2の甕にもみられ、底部の小形化傾向として時期的に新しい要素とみることができる。口径17.4cm、器高24cmを測り、色調は淡黄褐色を呈する。時期は、弥生系甕の面をなす口縁部や小形化した底部の形状から、古墳時代初頭(庄内併行期古相)とみることができる。

溝SD1(第22～24図1～115) 12～26(第22図)、27～71(第23図)、72～113・115(第24図)は、SD1から出土した。SD1は東西約40mにわたるため、以下、出土地点および層位ごとに詳述する。12～27は、SD1の1区から出土した。このうち12～20は、1区埋土として取り上げたものである。12・13は、広口壺の口縁部である。14～27の甕は、「く」字口縁をもつ甕(14～16)と、近江系の受口状口縁甕(17)がある。18は、高杯口縁部で、20は、脚部に櫛描文をもつ東海系高杯である。3方向に透かしをもつ。色調は灰白色をなし、搬入土器とみられる。21～23は、1区下層から出土したものである。21は受口状口縁甕、22・23は端部に面をなす甕である。24・25は、1区最下層から出土した。端部に面をなす甕(24)と、高杯脚(25)がある。26は、SD1を再掘削したSD1-aから出土した。27は、1区上層から出土した甕の口縁だが、器壁の摩耗が著しく、混入資料とみられる。SD1の時期よりも新しい布留式古相と推定される。

28～76は、SD1の2区から出土した。このうち28～31は、SD1の2区最下層から出土したものである。28は、甑の底部で、30は緩やかに大きく広がる高杯脚部、31は2条の櫛描文をもつ高杯脚部である。32～39は、2区下層から出土した。32は、柱状の脚部をなす高杯である。34・35は、端部が受口状をなす甕、36は端部を摘みあげ、面をもつ甕である。37・38は甕あるいは壺の底部、39は、穿孔をもつ甑底部である。40～71、72～76は、2区から出土した。40は口縁部と肩部の接合面を欠損するが、長頸壺とみられる。41もまた口縁部と頸部の接合面が確認できないが、タタキ成形を施す短頸壺とみられる。42は筒状の頸部に、口縁部が屈曲して開く広口壺である。43～54はいずれも甕の口縁部であり、「く」字口縁をなすもの(43～47)、短く立ち上がり面をなすもの(48)、受口状口縁(49～56)をなすものがある。50～54の受口状口縁甕の口縁部外面に施される列点文には、櫛状工具によるもの(50・53)や、板状工具によるもの(51・



第23図 出土遺物実測図(2)

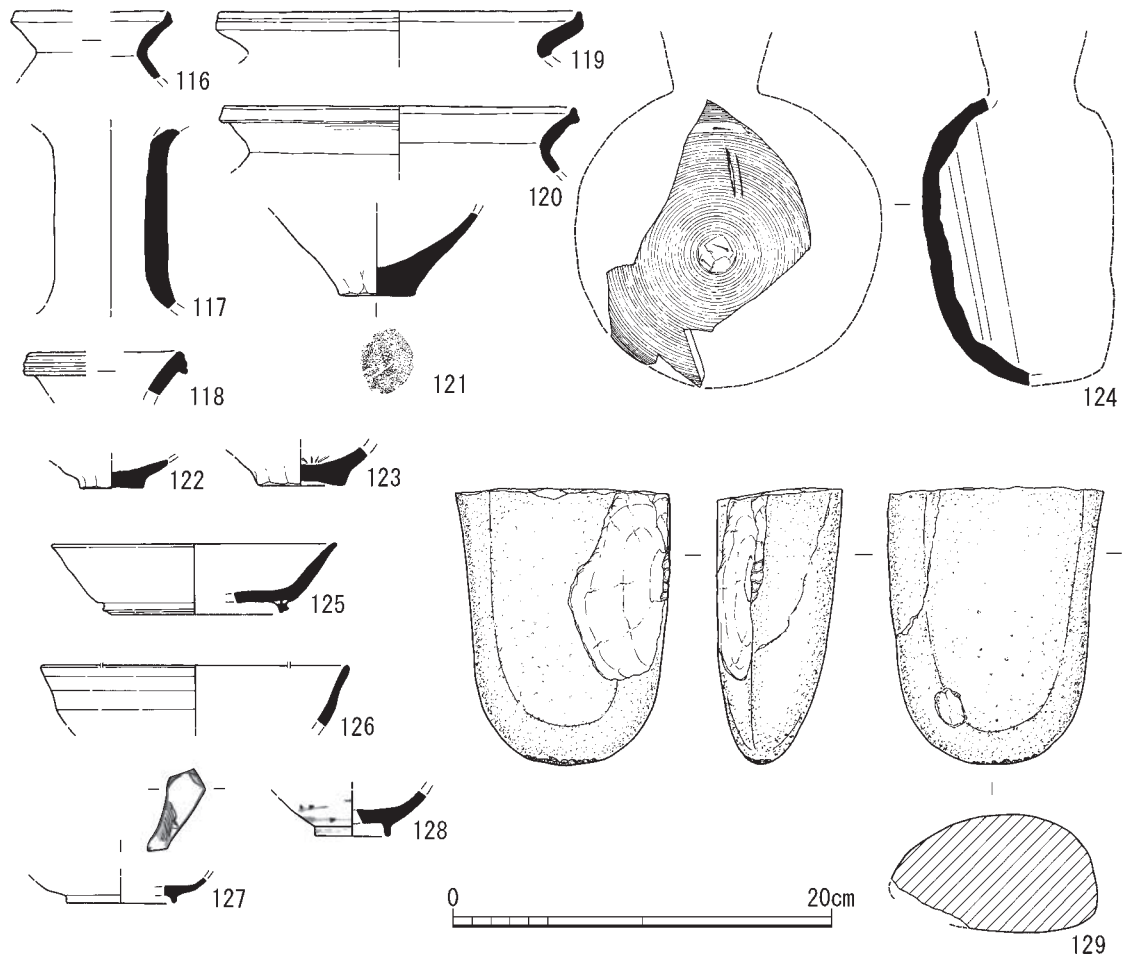


第24図 出土遺物実測図(3)

52・54)がある。57～61は、壺または甕の底部とみられ、平底(57～60)と窪み底(61)がある。62・63は、鉢の底部である。64は、器台の口縁部で、口縁部外面に2条の沈線をもつ。65～67は、器台あるいは高杯の裾部である。68～71は、高杯脚部である。68は、脚の軸部径が大きなものである。69は柱状脚であり、70は緩やかに広がる脚をなす。71は緩やかに「ハ」字状に開く高杯脚部である。72～76(第24図)は、いずれも2区から出土した。72は高杯脚で、脚上半は中実をなし、裾部は緩やかに広がる。74は3方向に透かしを穿つ高杯脚部である。75は外面に縦方向の丁寧なミガキを施し、内面に絞り痕を明瞭に残す。76は屈曲して「ハ」字状に開く高杯である。

77～115は、溝SD1の3区から出土した。このうち77・78は、3区最下層から出土した。77は細片であるが、端部を短く立ち上げる甕口縁部である。78は、中空の器台の脚部とみられる。脚部に傾斜変換点をもつことから、東海系器台の系統を引くものとみられる。79～91は、3区下層から出土した。79は、台付鉢の脚部とみられる。80・81は受口状口縁甕で、82は「く」字口縁甕である。83は、高杯の口縁部とみられる。84・85は、垂下する口縁をなす器台の受部である。84には、一部竹管文が施文される。87は、口縁端部に面をなす鉢である。88は、受口状口縁甕の一部で、端部に櫛描列点文を施す。89は平底の壺底部で、90は壺底部はいわゆる底部輪台技法による窪み底をなす。91は、タタキ甕の底部である。92～114は、3区埋土および3区上層として取り上げたものである。92は小形の長頸壺で、体部内外面にハケを施す粗製品である。93は、小さな平底をなす鉢で、鉢体部が屈曲して立ち上がり、明瞭な稜線をもつ。口縁端部に1条の沈線が認められる。94は、大きく外反する高杯の口縁部とみられる。95は、「く」字口縁をなす甕で、頸部が緩やかに屈曲する特徴をもつ。体部はタタキ成形により、内面はナデ調整によって仕上げられる。96は、器壁の摩耗が著しいが、緩やかに屈曲する「く」字口縁をなす甕の一部である。また97も、「く」字口縁甕の一部であるが、頸部に明瞭な屈曲をなすタイプとみられる。98・99は、口縁端部が立ち上がり、面をなす甕の一部で、古墳時代初頭に特徴的な口縁部形態である。また102は、受口状口縁の系譜にある甕の口縁部である。103・104は、いずれも受口状を呈する甕の口縁部であるが、特に104は、端部の引き出しが明瞭で、近江系受口状口縁甕の特徴をよく残している。105～108は、壺あるいは甕の底部である。109～112は、高杯の脚部である。109は3方向に透かしを穿ち、外面に丁寧なミガキが施されるもので、101は4方向に透かしがみられる。111は脚上半が中実となり、112は柱状の脚柱部をなす。113は、高杯あるいは器台の裾部である。114は、手づくね土器の鉢である。全体(図化資料数49)に、SD1の甕の組成は、「く」字口縁甕31% (うち摘みあげ口縁4%)、受口状口縁甕35%、口縁端部が立ち上がり、面をなす受口状口縁甕との折衷的な要素をもつ甕20%、有段口縁甕などその他14%である。SD1は時期幅があり、脚径の大きい高杯や甕にみる近江系および折衷系の比率が50%を超えるなど古い要素を示す一方、摘みあげ口縁の甕などに新しい要素が見え、おおそ弥生時代後期後葉～古墳時代初頭(庄内併行期古相)に位置づけることができる。なお、115の布留式甕は、SD1の精査中に出土したものである。布留3式新相に位置づけられるもので、古墳時代中期前葉の資料である。

溝SD5(第25図116・117) 116・117は、ともに口縁端部に面をなし、端部を摘みあげる「く」



第25図 出土遺物実測図(4)

字口縁甕である。119は、口縁端面に1条の沈線を施す。

溝SD6(第25図118～120) 118は、垂下口縁の壺で、口縁部外面に擬凹線文を施す。119・120はいずれも甕で、119は口縁端部外面に一条の沈線をもち、120は端部に面をなす。

溝SD15(第25図121・122) 121は、端部に面をなす「く」字口縁甕である。口径は、18.4cmを測る。122は平底の壺底部で、木葉痕が認められる。弥生時代後期後葉の資料である。

溝SD1・13合流部(第25図123) 123は、弥生土器の壺の底部である。平底をなす。

溝SD1上層精査(第25図124) 124は、溝SD1-1区において、最上層から出土した須恵器提瓶の体部である。今回の調査における古墳時代後期の土器は、本資料のみである。

掘立柱建物跡SB20(第25図125) 125は、須恵器杯Bである。口径14.8cm、器高3.7cmを測る。杯部の立ち上がりがやや浅く、口縁部が外方に開くことから、奈良時代後半の資料とみられる。

包含層等(第25図126～129) 126は、1区北部精査中に出土した須恵器杯の一部である。127・128は、2区西拡張部で出土した染付である。また129は、攪乱土中から出土した石製品である。弥生時代中期の石斧の未製品の可能性があるが、自然面を残す小口側に敲打痕が認められることから、敲石として使用されたとみられる。(高野陽子)

〔2〕野条遺跡第19次(平成23年度)

1. 調査の概要

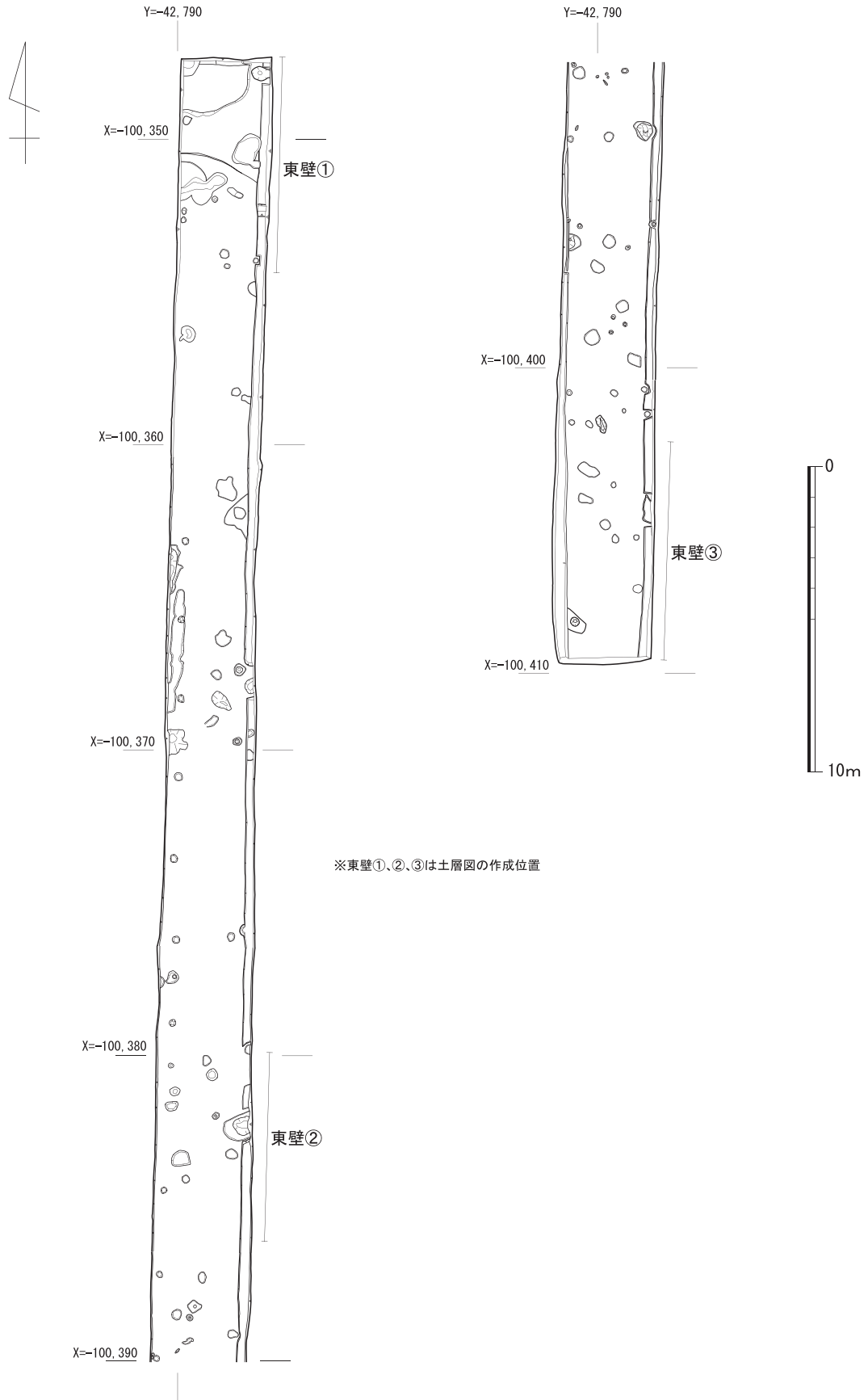
調査対象地は、盆地内の低地部で、現在は水田地帯である。東西に伸びる2本の排水路に対して設定したトレンチは計6か所で、北側の排水路部分には第1・3・6トレンチを西から順に設定した。南側の排水路部分には第2トレンチを設定した。第4トレンチのみ3つの小トレンチに細分し、調査を実施した。各トレンチの配置については、第26図のとおりである。なお、今年度は、当センターの調査と併行し、南丹市教育委員会(第20次調査)および京都府教育委員会(第21次調査)による、同排水路部分の発掘調査が実施されている。両機関による調査区は、当センターの第3トレンチと第4-1トレンチの間に設置された。

(1)第1トレンチ(第27・28図)

第1トレンチは、今回の調査区の中では、唯一南北方向に長い調査区で、面積は180㎡である。発掘調査着手前の現状は畑であった。遺構面は、表土(現代の耕作土)、水田床土の直下の東壁第29～34層の上面である。遺構面の深度は、トレンチ中央部および南部では、表土面から20～30cmであるが、トレンチ北部ではやや深く、表土面から約50cmを測る。遺構面は1面で、小ピ

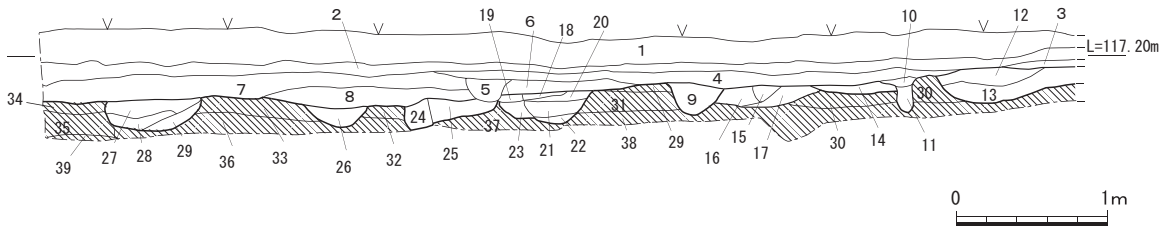


第26図 第19次調査トレンチ配置図



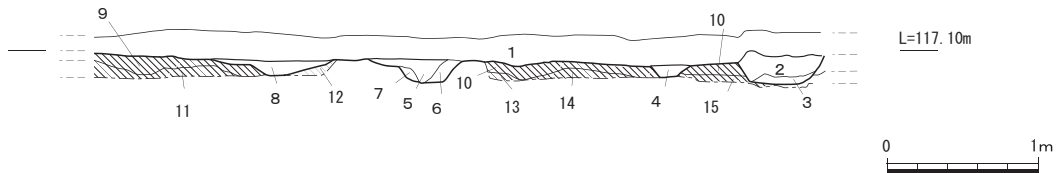
第27図 第1トレンチ平面図

東壁①



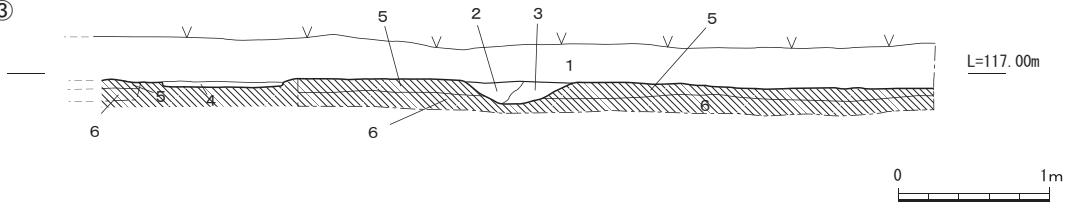
- | | | |
|--------------------------------------|---------------------------------------|------------------------------------|
| 1. 表土 (耕作土) | 14. 褐色粘質シルト (10YR4/4) | 27. 黒褐色シルト (10YR3/2) |
| 2. 灰褐色シルト質粘土 (7.5YR4/2) (固く締まる。水田床土) | 15. 黒褐色粘質シルト (10YR3/2) | 28. 暗褐色粘質シルト (10YR3/4) |
| 3. 極暗褐色粘質シルト (7.5YR2/3) | 16. にぶい黄褐色シルト質粘土 (10YR5/4) | 29. 暗褐色粘質シルト (10YR3/4) (29より粘質が弱い) |
| 4. 極暗褐色粘質シルト (7.5YR2/3) | 17. 褐色シルト質粘土 (10YR4/4) | 30. 暗灰黄色粘質シルト (2.5Y 4/2) |
| 5. 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) | 18. 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) | 31. にぶい黄褐色シルト質粘土 (10YR5/4) |
| 6. 暗灰黄色シルト質粘土 (2.5Y4/2) | 19. 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/3) | 32. にぶい黄褐色粘質シルト (10YR3/1) |
| 7. 黒褐色シルト質粘土 (2.5Y3/1) | 20. 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/2) | 33. 黒褐色粘質シルト (10YR3/1) |
| 8. 灰黄褐色シルト質粘土 (10YR4/2) | 21. 暗オリーブ褐色粘土 (2.5Y3/3) | 34. 黒褐色粘質シルト (10YR3/1) |
| 9. 黒褐色シルト質粘土 (2.5Y3/1) (12より明るい) | 22. 暗褐色粘質シルト (10YR3/4) (黄褐色ブロック含む) | 35. 暗褐色シルト (10YR3/3) |
| 10. 灰黄褐色シルト (10YR4/2) | 23. 暗褐色粘質シルト (10YR3/4) | 36. 黄褐色粘質シルト (10YR5/6) (地山) |
| 11. にぶい黄褐色粘質シルト (10YR4/3) | 24. 褐色ブロック質シルト (10YR4/4) (黄褐色ブロック混じり) | 37. 明黄褐色シルト質粘土 (10YR5/8) (地山) |
| 12. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) | 25. 暗褐色シルト (10YR3/4) | 38. 明黄褐色シルト質粘土 (10YR5/8) (地山) |
| 13. にぶい黄褐色シルト (10YR5/3) | 26. 暗褐色粘質シルト (10YR3/4) | 39. 黄褐色粘質シルト (10YR5/6) (地山) |

東壁②



- | | | |
|------------------------|---------------------------------|-------------------------|
| 1. 表土 (耕作土) | 7. 褐色粘質シルト (10YR4/4) | 12. 褐色シルト質粘土層 (10YR4/4) |
| 2. 暗褐色粘質シルト (10YR3/4) | 8. にぶい黄褐色シルト (10YR4/3) | 13. 12と同一層 |
| 3. 褐色粘質シルト (10YR4/6) | 9. 褐色粘質シルト (10YR4/4) | 14. 12と同一層 |
| 4. 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/3) | 10. にぶい黄褐色シルト質粘土 (10YR4/3) (地山) | 15. 12と同一層 |
| 5. 暗褐色シルト (10YR3/3) | 11. 黄褐色粘質シルト (2.5YR5/4) | |
| 6. 褐色粘質シルト (10YR4/4) | | |

東壁③



- | | |
|------------------------|--------------------------|
| 1. 表土 (耕作土) | 4. 暗灰黄色粘土 (2.5Y4/2) |
| 2. 暗灰黄色粘土 (2.5Y4/2) | 5. にぶい黄色シルト質粘土 (2.5Y6/4) |
| 3. 黄褐色シルト質粘土 (2.5Y5/4) | 6. 暗黄褐色シルト質粘土 (2.5Y7/6) |

第28図 第1トレンチ東壁土層断面図

ット・土坑・溝状遺構などを検出した。トレンチ中央部以南ではピット・小土坑が密に分布し、中央部以北には溝状遺構・土坑などがやや疎らに分布する。遺構埋土の土色は暗褐色～黒褐色を呈する。また、埋土の土色が緑灰色を呈するピットをトレンチ中央部以南で検出したが、現代の耕作に伴う稲木などの痕跡と考えられる。遺構の深度は概して浅く、平面プランの不明確なものが多い。

トレンチの土層については、特に調査区中央部から南部にかけて、ほぼ同一の堆積層が単純な水平堆積を示すことから、記録を取る地点を選択し、調査区北部、中央部、南部の3地点で、各々約5m分の長さに限定して東壁の土層堆積状況を記録した。遺構面の上層からは、庄内式期～布留式古段階の遺物が1点出土したが、堆積状況、土質から近世以降の堆積層と考えられる。そして、各地点における遺構面の土層を観察すると、トレンチの北部では暗褐色、黒褐色シルト層で遺構が検出されるが、調査区の中央部および南部ではこれらの土層が確認されず、にぶい黄褐色、にぶい黄色シルト層で遺構が検出される。遺構面を断ち割ると最下層で黄褐色～明黄褐色の堅緻な粘土質シルト層あるいはシルト質粘土層が検出されるが、遺構検出面からこの層に至るまでの深度は、調査区北部で20cm、中央部および南部で10cmを測る。既往の調査成果や周辺のトレンチの堆積状況から推定される堆積層序は、最下層から上層に向かって明黄褐色～黄褐色、にぶい黄褐色～にぶい黄色、暗褐色、黒褐色、黒色となり、土色は明から暗へ漸移的に変化する。トレンチの北部では、黒色土層が部分的に残存するのに対し、中央部、南部ではほとんど残存しないことから、特に中央部、南部では後世の削平の影響を強く受けているようである。

北部では削平の影響がやや少ないようであるが、旧地形が北に向かって下がるためであろう。

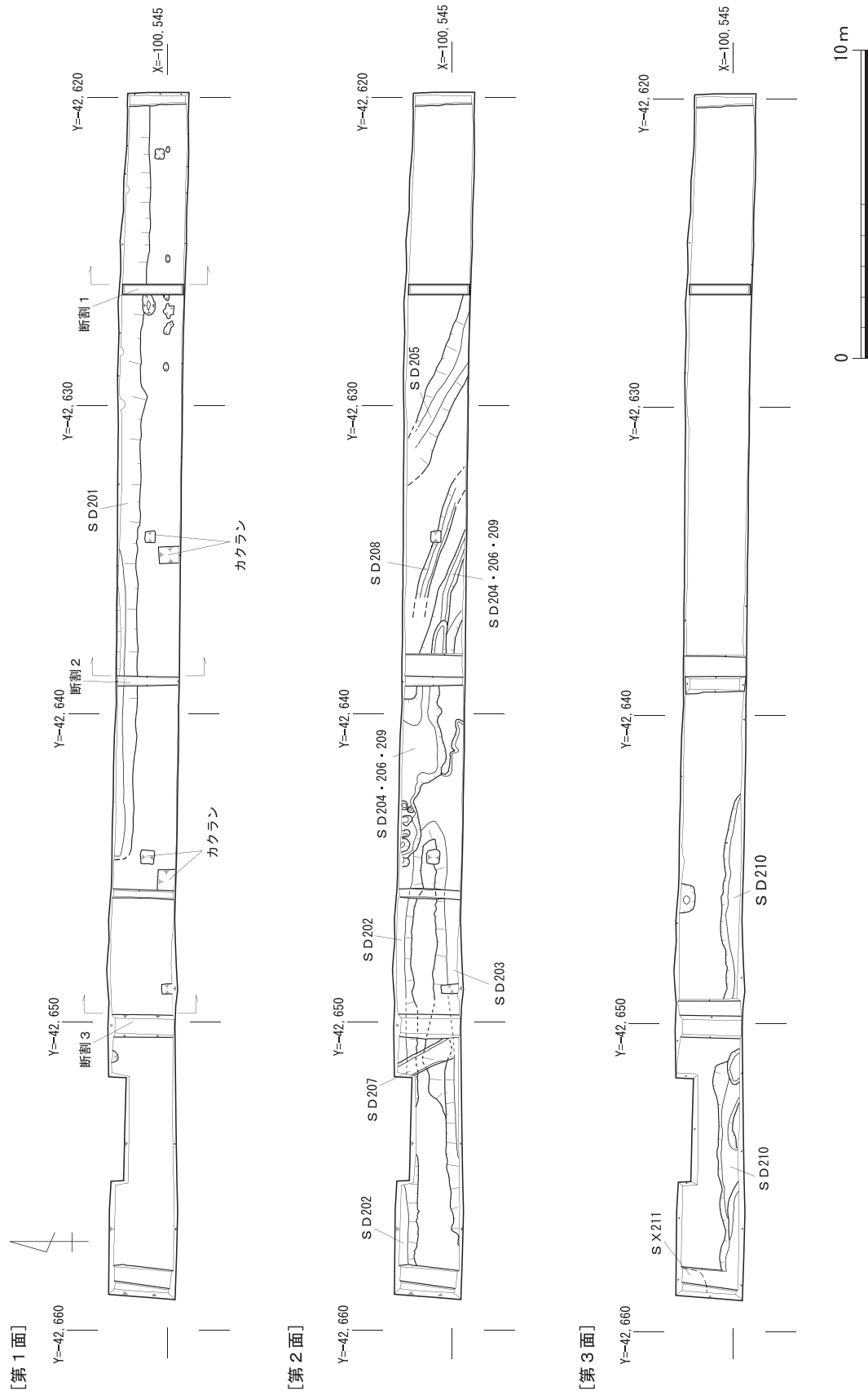
本トレンチでは、遺構検出面の上層以外は、遺物が出土しなかったため、遺構の時期は不明である。また、調査区が狭長なため、ピット、土坑などの遺構についても、有意の配置が看取できなかった。遺構検出面の堆積状況や標高から見ると、この地点は後世の削平を被るまで遺跡全体の中で標高の高い平坦面あるいは西から東へ下がる緩斜面だったようである。

(古川 匠)

(2)第2トレンチ(第29～31図)

第1トレンチから南へ約140m、東へ120mに位置する。調査面積は80㎡である。調査区北隣には、新庄用水の支線である東西方向の現行水路が通る。調査区南側の隣接地では、平成21年度に南丹市教育委員会が実施した第18次調査で弥生時代の遺構・遺物が出検されている。

1)第1遺構面 第1遺構面は、地表面下0.4mの東壁第6層・断ち割り1の第4層上面である。遺構検出面からは弥生土器片、奈良時代の須恵器杯蓋片、11世紀後半～12世紀の白磁壺底部等が出土している。第1遺構面では、東西方向の溝SD201のほか、攪乱数基を検出した。SD201はトレンチ中ほどから東端までの北壁に沿って検出した溝である。調査区中央付近から西では検出できなかったが、徐々に浅くなって検出されなくなることから、削平を受けているようである。検出した幅は南肩から中心部付近までで全長24.5m以上、最大幅0.8m以上、深さは検出範囲内で最大16cmを測る。埋土は暗褐色粘質土で、出土遺物の多くは弥生土器片であるが、12世紀後半



第29図 第2トレンチ平面図

の瓦器碗が1点出土しており、遺構の時期を示す遺物と考えられる。現行の水路と位置がほぼ重複し、主軸方向も一致している。

2)第2遺構面 第2遺構面は地表下0.5mで確認した。土層断面でみると断ち割り2の第4層の上面に相当する。調査区北壁では堆積していないが、第2遺構面の構成層はトレンチ全体に広がっており、多くの弥生土器片が出土している。検出した主な遺構は、東西方向の溝2条(S D 202・203)と、北西から南東方向の軸をやや異にする溝4条(S D 204～208)である。S D 203・204・206から出土した須恵器の時期から、遺構の時期は6世紀後半～7世紀初頭を中心とするようである。

溝S D 202 トレンチ西端から北壁に沿って検出した溝である。西壁からおおよそ7mの地点でS D 207に、12mの地点でS D 204に切られ、トレンチ東部では検出できなかった。遺構の南肩部のみ検出したが、全長13.5m以上、全幅0.75m以上、深さは検出範囲で最大12cmを測る。暗褐色粘質土を中心とする埋土からは弥生土器片が出土した。S D 204・206よりも古い遺構であることから、6世紀末以前の遺構と考えられる。

溝S D 203 トレンチ西端部から南壁に沿って検出した溝である。S D 202とほぼ平行し、調査区中央でS D 202と合流するようである。西壁からおおよそ8mの地点でS D 207に切られ、おおよそ17mの地点でS D 204に切られる。S D 202とは逆に北肩部のみ検出しており全長13m以上、全幅1.2m以上、深さは検出範囲で最大17cmを測る。埋土は暗褐色粘質土で、弥生土器片のほか古墳時代後期の須恵器片1点が出土した。出土遺物の時期と遺構の切り合い関係からS D 203は6世紀後半～末頃に埋没するようである。

溝S D 204・206 トレンチ中央部で検出した溝状の遺構で、幅3m、深さ30cmを測る。当初、別の遺構と認識していたが、調査の結果、同一遺構と判断した。埋土は暗褐色粘質シルトと黒褐色シルトからなり、弥生土器片のほか須恵器杯身が出土した。須恵器の形態から、6世紀末～7世紀初頭頃の遺構と考えられる。

溝S D 205 トレンチ東部で検出した溝状の遺構で、全長4m以上、幅1m、深さ10cmを測る。埋土は黒褐色シルトで、弥生時代後期の土器片が出土した。

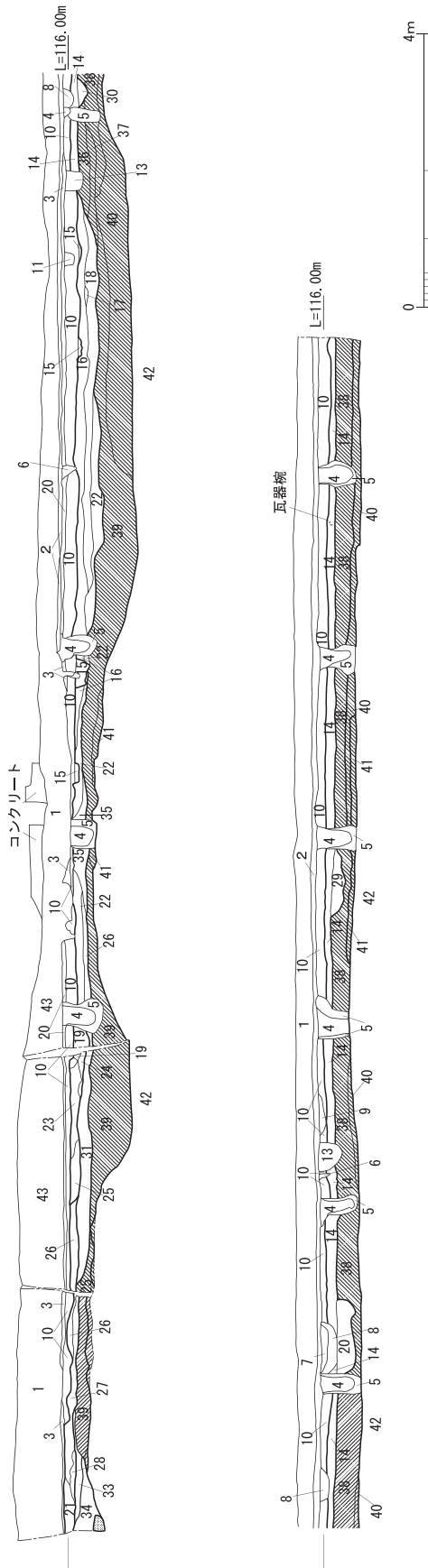
溝S D 207 トレンチ西部で検出した。全長2m以上、幅0.6m、深さ22cmを測る。埋土は暗褐色粘質シルトで、弥生時代後期の土器片が出土した。S D 203との重複関係から6世紀後半以降に比定される。

溝S D 208 トレンチ東部で検出した。全長4m以上、幅0.4m、深さ15cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルトで、弥生時代後期の土器片が出土した。

不明遺構S X 209 S D 204・206と重複する不定形の遺構である。南北0.6m以上、東西2mの規模である。掘形が不整形で、底の凹凸が顕著である。

3)第3遺構面 第3遺構面は地表下0.7mの黒褐色粘土層および粘質シルト層(北壁第5・18・25層)の上面である。検出した遺構は東西方向の溝1条(S D 210)と不明遺構(S X 211)である。

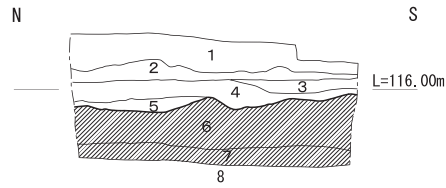
S D 210 上層のS D 203のほぼ真下に位置し、蛇行しながらわずかに南東～北西を向く溝状



1. 褐灰色粘質シルト(5YR5/1)
(水田畔土、表土)
2. 明褐色粘質シルト(7.5YR5/8)
3. 黒褐色粘質シルト(5YR3/1)(西壁第2層)
4. 中世以降の杭痕
5. 中世以降の杭痕
(褐灰色粘質土(10YR5/1)
(黄褐色混じり、第3～5層が、第8層の形成に伴って下に押されている)
6. 根痕
7. 灰黄褐色粘質シルト(10YR4/2)
8. 暗褐色粘質シルト(10YR3/3)
9. 暗赤褐色粘質シルト(5YR3/2)
10. 褐色粘質シルト(7.5YR4/4)
(東壁第4層)
11. 灰褐色粘質シルト(7.5YR4/2)
12. 暗栗埋土
13. 暗褐色粘質シルト(7.5YR3/3)
14. 暗褐色粘質シルト(7.5YR3/4)
(SD201埋土。東壁第4層)
15. 黒色粘質シルト(7.5YR2/1)
16. 黒褐色粘質シルト(7.5YR3/1)(SD206埋土)
17. 黒褐色粘質シルト(5YR2/2)
18. 黒褐色シルト(10YR2/2)
19. 暗褐色粘質シルト(7.5YR3/3)(SD207埋土)
20. 黒色粘質シルト(10R2/1)(SD208埋土)
21. 黒褐色粘質シルト(5YR2/2)(SD202埋土。西壁第5層)
22. 暗褐色粘質シルト(10YR3/3)
(SD202埋土。断割り3の第2層)
23. 暗褐色粘質シルト(7.5YR3/4)(SD202埋土)
24. 暗赤褐色粘質シルト(5YR3/3)(SD202埋土)
25. 黒褐色粘質シルト(7.5YR3/2)(SD202埋土)
26. 黒褐色粘質シルト(7.5YR3/1)(SD202埋土)
にふい、赤褐色粘質シルト(5YR4/4)(SD202埋土)
27. 褐色(粘質シルト10YR4/6)(西壁第4層)
28. 黒褐色粘質シルト(10YR2/2)
(SD205埋土。土器片含む)
29. 暗赤褐色粘質シルト(2.5YR3/2)
30. 褐色粘質シルト(10YR4/6)
31. (第2遺構面検出層。断割り3の第4層)
32. 黒褐色粘質シルト(5YR2/2)
33. 褐色粘質シルト(10YR4/4)(西壁第6層)
34. 極暗赤褐色粘質シルト(2.5YR2/2)(暗褐色混じり)
(SX211埋土。西壁第8層)
35. 極暗赤褐色シルト(2.5YR2/2)
(細砂混じり。第2遺構面検出層)
36. 黒褐色粘質シルト(10YR2/2)
(地山)か。断割り2の第6層
37. 黒褐色粘質シルト(10YR2/2)に赤褐色粘質シルト(5YR4/8)が混じる(地山)
38. 黒褐色粘質シルト(10YR2/2)
(地山。東壁第6層)
39. 黒褐色粘土(10YR2/1)
(地山。断割り3の第6層)
40. 褐灰色粘土(10YR4/1)
(地山。東壁第7層)
41. 明黄褐色粘土(10YR7/6)
(地山。東壁第8層)
42. 明黄褐色粘土(10YR7/6)(地山)

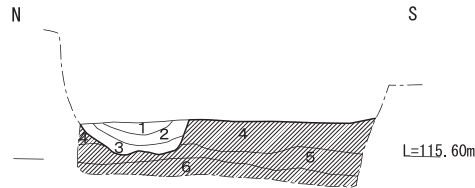
第30図 第2トレンチ北壁土層断面図

トレンチ東壁



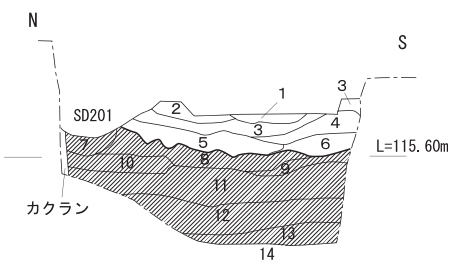
1. 褐灰色粘質シルト (5YR5/1) (表土)
2. 明褐色粘質シルト (7.5YR5/8) (表土)
3. 灰褐色粘質シルト (7.5YR5/2) (表土)
4. 褐色粘質シルト (7.5YR5/2)
5. 暗褐色粘質シルト (7.5YR3/4) (SD201埋土)
6. 褐灰色粘土 (10YR4/1) (地山。断割2の第4層)
7. 褐灰色粘土 (10YR4/1) (断割2の第5層)
8. 明黄褐色粘土 (10YR7/6) (断割2の第6層)

断割1



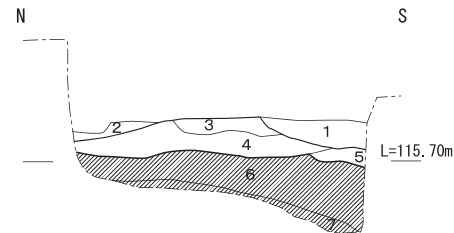
- | | |
|-------------------------------------|--------------------------------------|
| 1. 黒褐色粘質シルト (2.5Y3/1)
(SD201埋土) | 4. 黒褐色粘質シルト (10YR2/2)
(地山。暗褐色まじり) |
| 2. 灰褐色粘質シルト (7.5YR4/2)
(SD201埋土) | 5. 褐灰色粘土 (10YR4/1)
(地山) |
| 3. 黒褐色粘質シルト (2.5Y3/1)
(SD201埋土) | 6. 明黄褐色粘土 (10YR7/6)
(地山) |

断割2



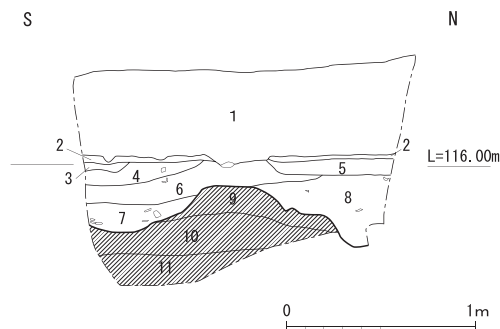
- | | | |
|---|----------|-----------------------------------|
| 1. 黒褐色粘質シルト (10YR5/1)
(SD202、SD203の埋土) | (褐灰色混じり) | 8. 暗褐色粘質シルト (10YR3/4)
(黒褐色混じり) |
| 2. 黒色粘質シルト (7.5YR2/1)
(SD202、SD203の埋土) | | 9. 褐色粘質シルト (10YR4/6)
(黒褐色混じり) |
| 3. 暗褐色粘質シルト (10YR3/3)
(SD204・206埋土) | | 10. 黒色粘質シルト (10YR2/1) |
| 4. 黒褐色粘質シルト (7.5YR3/1)
(SD204・206埋土) | | 11. 黒褐色粘土 (10YR3/1)
(褐色混じり) |
| 5. 黒褐色砂混じり粘質シルト (10YR2/2) | | 12. 黒褐色粘土 (10YR3/1) |
| 6. 褐色粘質シルト (10YR4/6)
(SD204・206埋土) | | 13. 黒褐粘砂質土 (10YR2/1) |
| 7. 黒褐色粘質シルト (10YR2/2) | | 14. 明黄褐色粘土 (10YR7/6) |

断割3



- | | |
|-------------------------------------|-----------------------------------|
| 1. 暗褐色粘質シルト (10YR3/3)
(SD203埋土) | (褐灰色粘土少量混じる。
第2遺構面検出層) |
| 2. 暗褐色粘質シルト (10YR3/3)
(SD202埋土) | 5. 黒褐色粘砂質土 (10YR3/2)
(SD210埋土) |
| 3. 褐灰色粘質シルト (10YR4/1)
(第1遺構面検出層) | 6. 黒褐色粘土 (10YR2/1) |
| 4. 褐色粘質シルト (10YR4/6) | 7. 明黄褐色粘土 (10YR7/6) |

トレンチ西壁



- | | |
|--|--|
| 1. 表土 | 9. 褐灰色粘質シルト (5YR4/1)
(地山。暗褐色粘質シルト混じり) |
| 2. 黒褐色粘質シルト (5YR3/1) | 10. 黒褐色粘土 (10YR2/1)
(地山。断割り3の第6層) |
| 3. 黒褐色粘質シルト (7.5YR3/2) | 11. 黒褐色シルト (10YR2/1)
(地山。断割り2の第13層) |
| 4. 褐色粘質シルト (10YR4/6) | |
| 5. 黒褐色粘質シルト (5YR2/2) | |
| 6. 褐色粘質シルト (10YR4/4) | |
| 7. 黒褐色シルト (10YR3/2) | |
| 8. 極暗赤褐色粘質シルト (2.5YR2/2)
(暗褐色粘質シルト混じり。土器片混じる) | |

第31図 第2トレンチ断ち割り土層断面図

遺構である。S D210とS D203は位置がほぼ重複し、主軸方向も同一であるが、土質の異なる第2遺構面構成層(断ち割り3の第4層)がS D203とS D210の間に確認できることから、下層の別遺構と判断した。トレンチ西端から南壁に沿って検出した。西壁からおおよそ8mの地点でS D207に切られ、おおよそ16mの地点でトレンチ南方へ外れる。S D203と同様に北肩部のみ検出しており、全長16m以上、幅0.6m以上、深さは検出範囲内では最大40cmを測る。埋土である黒褐色粘砂質土から弥生時代後期末～古墳時代初頭の遺物が出土している。S D210はS D203・207に切られることから、遺物の出土位置が遺構の底部付近と考えられる。

不明遺構S X211 トレンチ北西隅で検出した遺構である。トレンチ西壁の土層から、南北0.9m以上、東西2.2m、深さは最大48cmと推定される。弥生土器の甕口縁部が出土している。

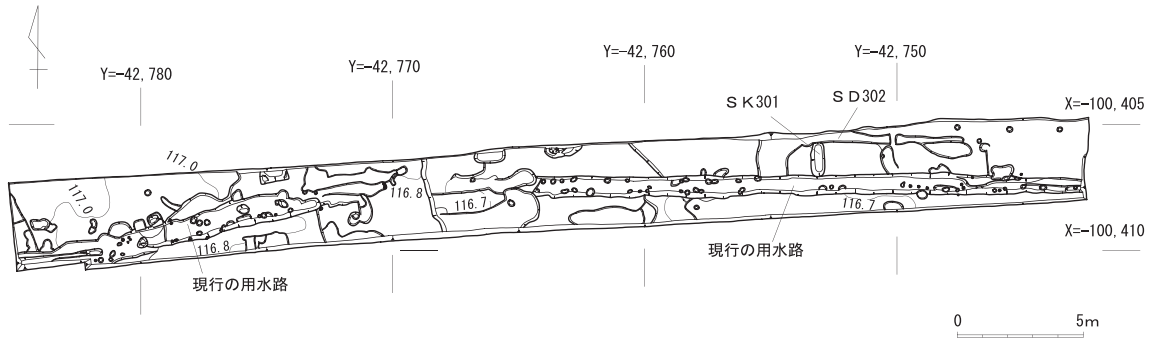
4)第3遺構面下層 第3遺構面下層では、褐灰色～黒褐色の粘質土及び粘土が堆積し、地表面下0.95m～1.6mで、トレンチ全面に明黄褐色粘土層を確認した。トレンチ西端、西部、中央部西側の3か所には谷状の落ち込み地形があり、その最深部で地表下1.6mを測る。いずれの層においても遺構・遺物は確認できなかった。

第2トレンチでは弥生時代後期末～古墳時代初頭、古墳時代後期～終末期、中世の遺構を検出した。トレンチ幅が狭小のため全容が明らかでないものが多いが、第2・3面の遺構は、概ね北西から南東方向を志向しており一定の方向性がうかがえる。これは調査区の西に位置する筏森山からの自然地形に由来するものと考えられる。S D201は出土遺物から平安時代末の水路跡と考えられる。新庄用水の原形とみられる水路が開削されたとされる時期と近く、支線であった可能性が高い。また、これが北接する現行水路の前身であるならば、周辺の現行水路及び地割りの出現は平安時代末まで遡る可能性を帯びる。出土遺物に古墳時代後期～終末期の須恵器片が含まれるが、S D204からも同時期の須恵器片が出土しており、この時期に流路の画期がうかがえる。S D210から出土する弥生土器片が溝底部の粘質土に張り付くようにして出土する様相は、第17次調査の溝S D1の遺物出土状況とよく似ている。また、S D210はトレンチ中央部で南側調査区外へ伸びており、その延長方向に第17次調査の溝S D1が伸びていることから、同一の溝である可能性がある。しかし、第17次調査の溝S D1と比べS D210は浅く、後世に削平を受けているようである。上層の遺構・包含層から出土した多くの弥生土器片は、本来S D210に伴う遺物であろう。

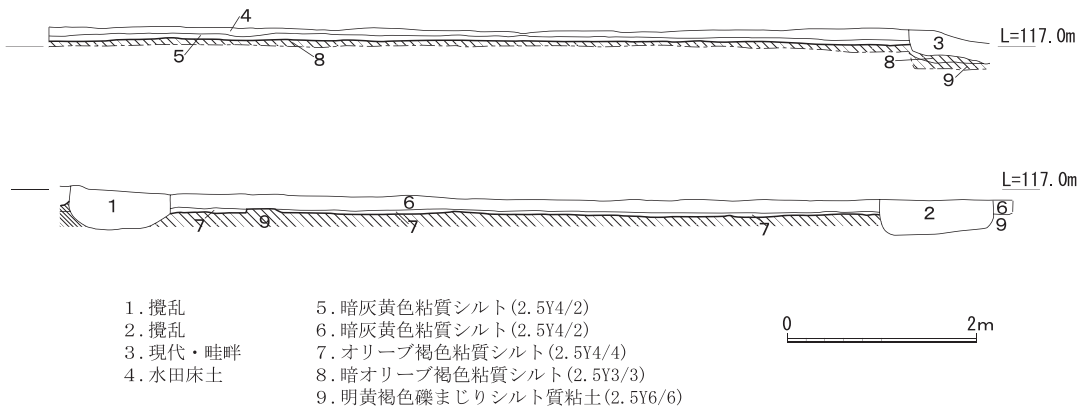
(大高義寛)

(3)第3トレンチ(第32・33図)

第3トレンチは、第1トレンチの南東端に接するように設定した東西方向のトレンチで、面積は130㎡である。本トレンチの東には南丹市教育委員会による第20次調査のトレンチが隣接する。地表面から順に、現代の水田耕作土、水田床土、暗灰黄色粘質シルトが堆積しており、この下位で遺構面を確認した。遺構面の深度は、水田床土上面から15～20cmを測る。第1トレンチに近いトレンチ西端から約9mの地点までは暗オリーブ褐色土層の上面が遺構検出面で、標高は117.0mである。しかし、この地点から東では、暗オリーブ褐色土層が確認されず、代わりに、そ



第32図 第3トレンチ平面図



第33図 第3トレンチ北壁土層断面図

の下層と考えられる明黄褐色土層が遺構検出面を形成している。この面の標高は116.8mである。遺構検出面の変化地点は現況の水田の畦畔と一致しており、段状の水田形成による削平を受けているようである。

遺構の分布状況もこの地点を境に大きく異なっており、この地点以西の標高の高い遺構面では、掘形が隅丸方形の柱穴や溝状遺構が検出されている。遺物は出土しなかったが、野条遺跡の既往の調査で古代の掘立柱建物跡が複数検出されていることから、柱穴の帰属時期は古代の可能性はある。ただし、古代の遺構は第3トレンチから離れた地点で検出されているため、直接的に関連づけることはできない。調査区中央部～東部では、削平の影響を受けたためか、遺構の残存状況は悪い。また、第3トレンチは西から東に向かって次第に現代の農道・用水路と重複するようになるため、これらの施設の造成に伴う削平も受けている。

第3トレンチの中央部からやや南寄りの地点には、調査着手前まで利用されていた用水路が存在する。この用水路は、調査対象地の西隣で北から南に流れる新庄用水に接続している。周辺の調査成果から、野条遺跡の地割が古代・中世まで遡ることが判明しており、この用水路の時期についても注目される場所である。しかし、用水路の埋土から、昭和10年代の1銭銅貨が出土したことから、現在の位置を流れるようになったのは比較的最近のようである。

第3トレンチでは、小ピット、隅丸方形の柱穴、土坑、溝状遺構などを検出した。このトレン

チからはほとんど遺物が出土しなかったため、遺構の時期は不明である。また、調査区が狭いため、遺構についても有意の配置が看取できなかった。遺構検出面の堆積状況や標高から見ると、この地点は第1トレンチと同様に、野条遺跡の中では比較的標高の高い平坦面、あるいは西から東へ下がる緩斜面であったようである。中世に水田となる以前は、建物あるいは塀などが建っていた可能性がある。

土壌 S K 301 調査区中央部東寄りで検出した。南北に長い隅丸方形で、平面規模は1.3×0.6m、深さは20cmを測る。埋土は黒褐色から暗褐色を呈する。形状から土壌墓の可能性があるので、土層の確認を併行しながら慎重に掘り下げたが、副葬品は出土せず、木棺の痕跡等も確認されなかった。

溝状遺構 S D 302 トレンチの中央部から東部にかけて検出した東西方向の溝状遺構である。時期は不明であるが、前述の用水路と平行しており、現行水路の前の用水路はこの地点を流れていた可能性がある。

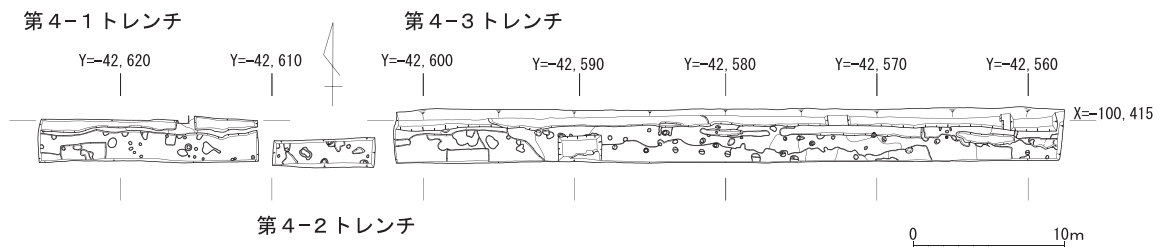
(4)第4トレンチ(第34図)

第4トレンチは、第3トレンチから約120m東に設定した調査区である。本トレンチの西には、京都府教育委員会が実施した第21次調査のトレンチが隣接する。第4トレンチでは、3つの小地区に細分して発掘調査を実施した。各トレンチの位置は第34図のとおりである。

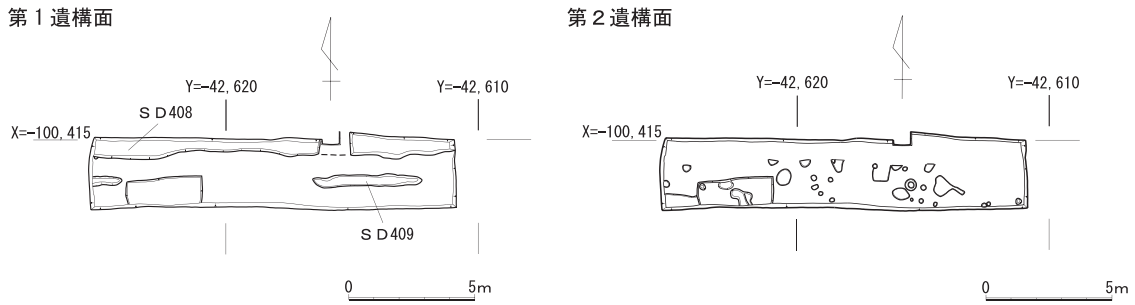
1)第4-1トレンチ(第35・36図) 第4トレンチの中で最も西に設定したトレンチで、面積は45㎡である。調査着手前の現況は、水田および東西方向の用水路である。本トレンチの遺構面は2面存在する。第1遺構面は表土直下で、表土から深度約15cmの西壁第2層および南壁第3層の上面である。第1遺構面で検出した遺構は、溝 S D 408・409である。

溝 S D 408 現行の用水路と重複し、主軸方向が一致する東西方向の溝である。遺構の南肩は本トレンチ内で検出されるが、北肩は調査区外になる。S D 408の規模は、幅0.7m以上で、深さは0.6～0.7mである。埋土は黒灰色の粘土で、部分的に礫が混じる。流水および滞水環境を示す。本トレンチ内では遺物が出土していないため時期は不明であるが、検出位置と標高から、後述する第4-3トレンチの溝 S D 401と同一遺構と考えられる。

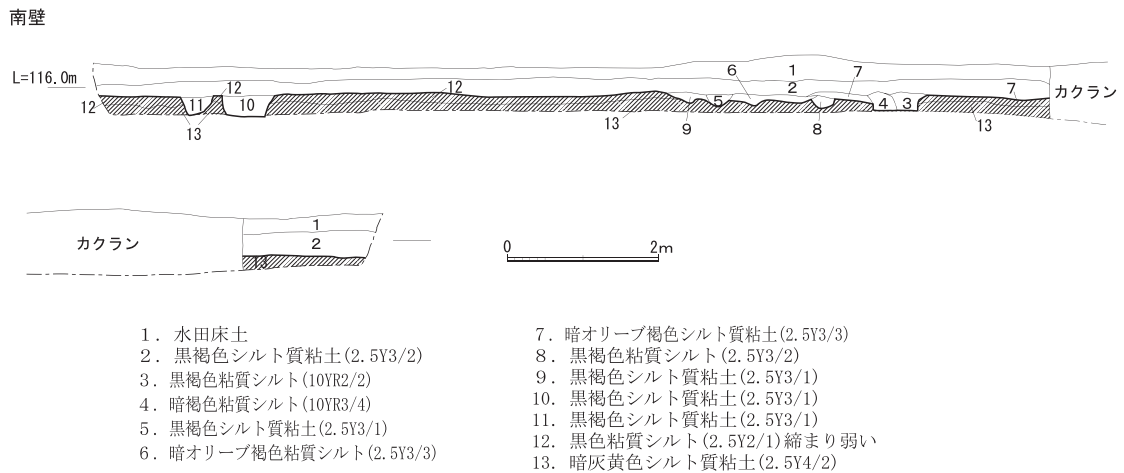
溝 S D 409 調査区中央部で検出した幅約0.5m、深さ約30cmの小規模な東西方向の溝である。埋土の土色は褐色を呈する。東西に延伸するようで、第4-2トレンチの S D 410と第4-3トレンチで検出された S D 407は同一遺構の可能性があるのである。また、西隣の第21次調査トレンチでも



第34図 第4-1・4-2・4-3トレンチ平面図



第35図 第4-1トレンチ平面図



第36図 第4-1トレンチ土層断面図

埋土、規模の近似する溝状遺構が検出されている。

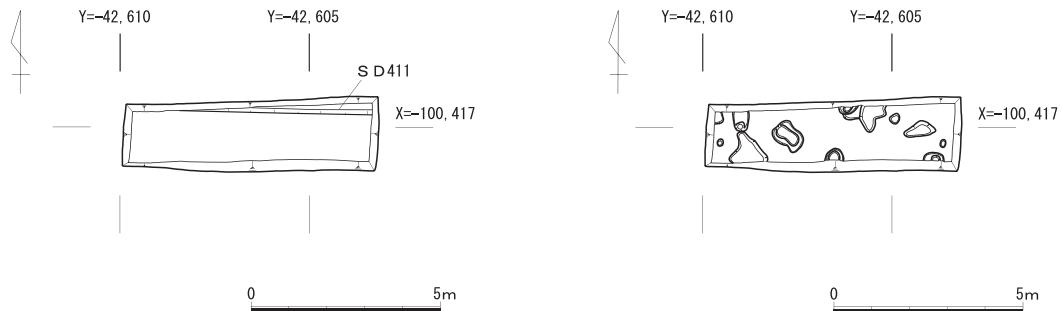
第2遺構面は、第1遺構面から下に約15cm下の第12層上面である。ピットを20基以上検出したが、埋土の色調・土質が第12層とよく似ているため第12層上面では検出できず、ほとんどのピットは下層の第13層上面で遺構と認識した。各ピットから遺物は出土しなかったが、第12層の掘削中に、土師器片が数点出土した。遺物の帰属時期は明確にできなかったが、ピット群あるいは第12層に包含される遺物と考えられる。

2) 第4-2トレンチ(第37・38図) 第4-1~3トレンチの間に設定したトレンチである。調査前の現状は水田で、面積は11㎡である。第4-1トレンチと同様に遺構面が2面存在する。

第1遺構面は、表土面(コンクリート舗装直下)から約0.3m下の、北壁第7層および東壁第5層の上面である。第1遺構面で検出された遺構は、溝S D 411である。ただし、この溝は平面的にプランを確認できず、断面観察で確認したのみである。溝S D 411は、後述する第4-3ト

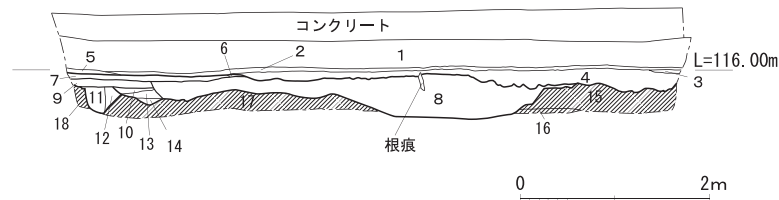
第1遺構面

第2遺構面



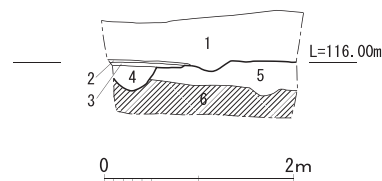
第37図 第4-2トレンチ平面図

北壁



- | | |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 攪乱 (現代の水路石垣裏込め) 2. 酸化マンガン層 3. 黄灰色シルト (2.5Y4/1) 4. 極暗褐色シルト (7.5YR2/3) (S D411埋土) 5. 灰黄褐色粘質シルト (10YR4/2) (縮まり強い) 6. 黒色砂質シルト (10YR1/1) 7. 黒褐色シルト (10YR3/2) (縮まり強い) 8. 黒色シルト (10YR2/1) (やや砂質。) 9. 黒褐色粘質シルト (10YR3/2) (縮まり強い) 10. 黒色シルト (10YR2/1) (やや縮まり強い) | <ol style="list-style-type: none"> 11. 黒褐色シルト (7.5YR2/2) 12. 暗赤褐色粘質シルト (5YR3/2) 13. 黒色粘質シルト (10YR2/1) 14. 黒色粘質シルト (10YR2/1) (13より色調暗い) 15. 暗褐色砂質シルト (10YR3/4) 16. にぶい褐色粘質シルト (7.5YR5/4) 17. 暗褐色砂質シルト (10YR3/4) 18. 暗褐色粘質シルト (10YR3/4) |
|--|---|

東壁

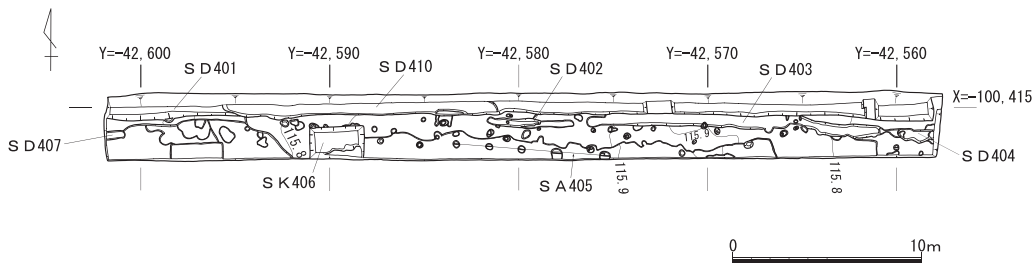


1. 北壁第1層と同一
2. 北壁第2層と同一
3. 北壁第3層と同一
4. 北壁第4層と同一
5. 黒褐色粘質シルト (10YR3/2)
6. 北壁第15層と同一

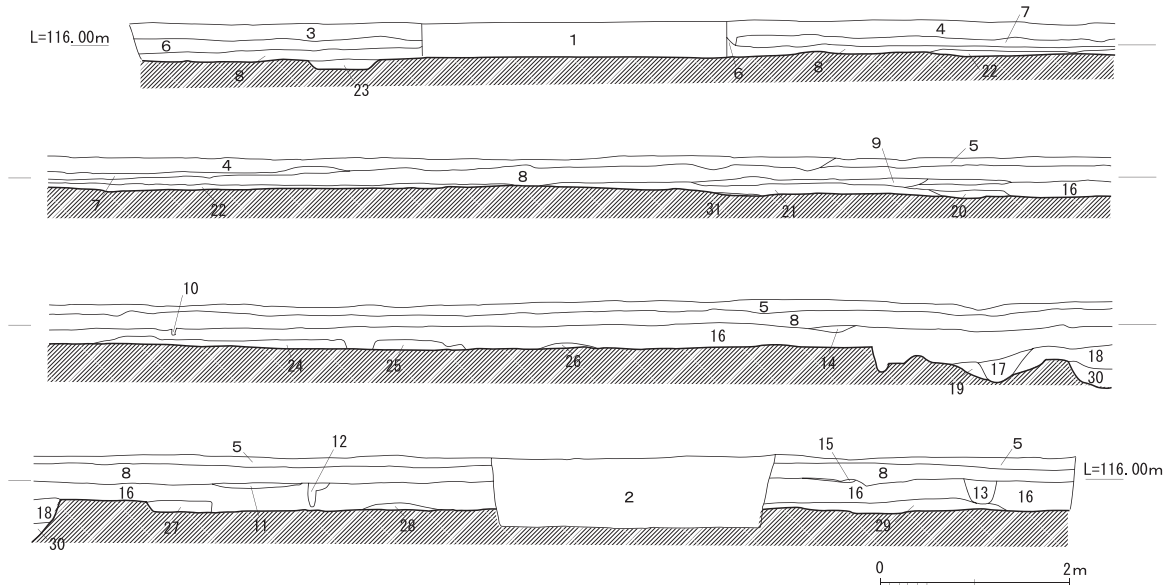
第38図 第4-2トレンチ土層断面図

ンチの溝 S D409と同一遺構である。

第2遺構面は、表土面から約0.4m下の北壁第15・17層および東壁第6層の上面である。この面では、ピット、土坑が点在している。平面的に検出できたのは、ピット9基、土坑7基である。なお、第1遺構面と第2遺構面の間では、第9層上面に落ち込み状の遺構が存在するようである。埋土の色・質がほとんど区別がつかないため、平面プランは確認できなかったが、断面図の北壁第8層がこの落ち込みの埋土に相当する。この落ち込みによって、第2遺構面の遺構は削平を受



第39図 第4-3トレンチ平面図



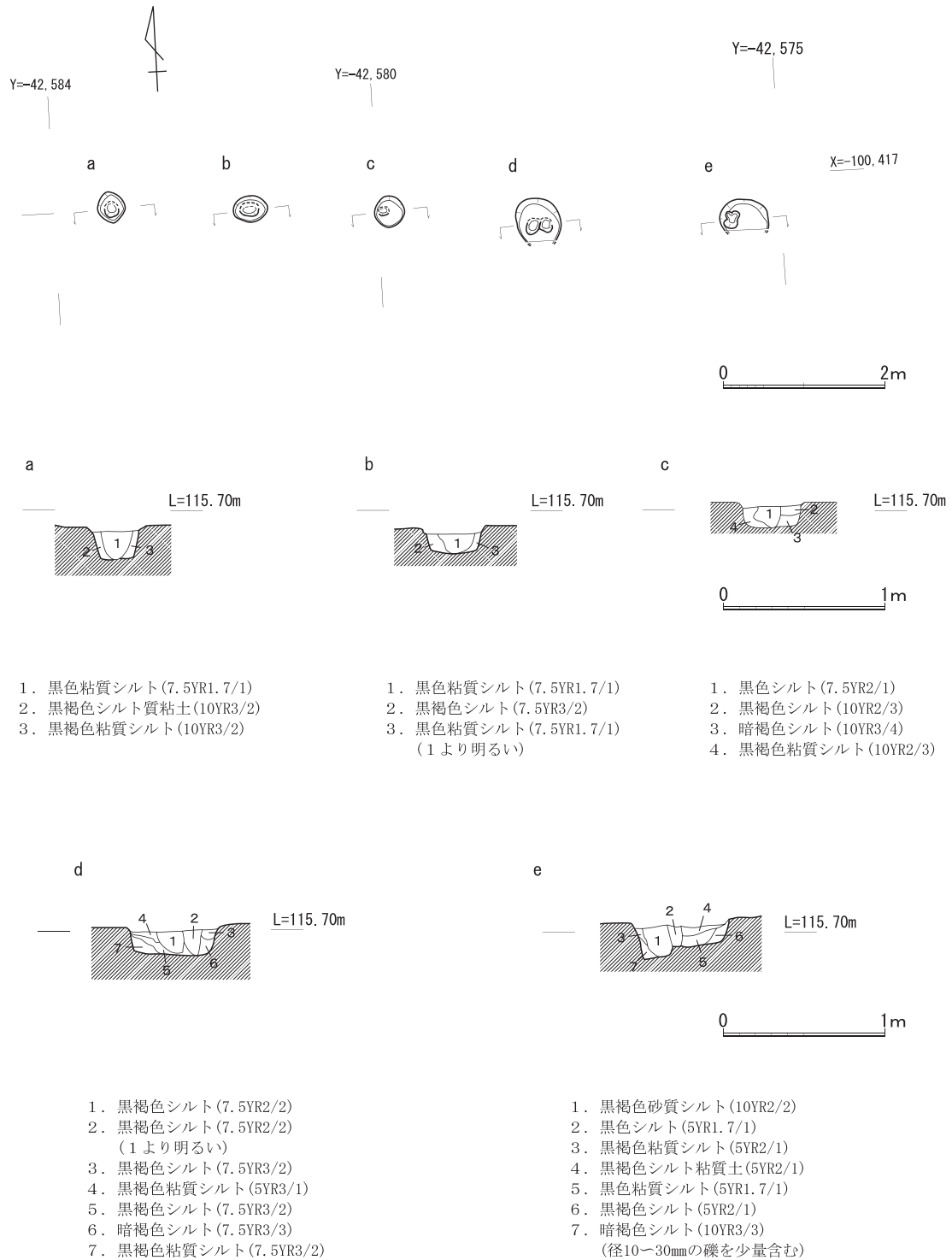
- | | | |
|--------------------------|-------------------------|----------------------------|
| 1. トレンチ埋土(H21年度調査分) | 13. 黒褐色シルト質粘土(7.5YR3/2) | 21. にぶい黄褐色粘質シルト(10YR4/3) |
| 2. トレンチ埋土(H21年度調査分) | 14. 灰黄褐色シルト(10YR5/2) | 22. オリーブ黒色シルト質粘土(5Y3/1) |
| 3. 水田床土 | 15. 暗褐色シルト質粘土(7.5YR3/3) | 23. オリーブ黒色シルト質粘土(5Y3/1) |
| 4. 水田床土 | 16. オリーブ黒色粘質シルト(5Y3/1) | 24. オリーブ黒色シルト質粘土(5Y3/1) |
| 5. 水田床土 | 17. 暗褐色シルト質粘土(7.5YR3/3) | 25. 暗褐色粘質シルト(10YR3/3) |
| 6. 灰オリーブ色粘質シルト(5Y5/2) | (礫混じり。S K 406埋土) | 26. オリーブ黒色シルト質粘土(5Y3/1) |
| 7. 灰オリーブ色シルト(5Y5/2) | 18. 黒褐色粘質シルト(7.5YR3/2) | 27. 暗褐色粘質シルト(10YR3/3) |
| 8. 黒褐色粘質シルト(2.5Y3/2) | (S K 406埋土) | 28. オリーブ褐色シルト質粘土(2.5Y4/3) |
| 9. 黒褐色シルト質粘土(2.5Y3/2) | 19. オリーブ黒色粘土(5Y3/2) | 29. 暗オリーブ褐色シルト質粘土(2.5Y3/3) |
| 10. 灰黄褐色シルト(10YR4/2) | (S K 406埋土) | 30. 灰色ブロック質粘土(5Y5/1) |
| 11. にぶい黄褐色 | 20. 暗褐色粘質シルト(10YR3/3) | 31. 暗褐色粘質シルト(10YR3/3) |
| 12. にぶい黄褐色粘質シルト(10YR4/3) | (S A 405埋土) | (S A 405埋土) |

第40図 第4-3トレンチ南壁土層断面図

けている。これらの遺構面の遺構からは遺物が出土しなかったため、帰属時期は不明であるが、隣接する第4-1トレンチの第2遺構面と同一面であることから、古墳時代～古代と考えられる。

3)第4-3トレンチ(第39～41図) 第4トレンチの中で最も東に設定したトレンチで、面積は140㎡である。調査着手前の現況は、水田および東西方向の用水路である。第4-3トレンチの遺構検出面は1面で、現代の水田の床土上面から0.3～0.4m下の第31層上面に相当する。

溝S D 401・410 現在の水路の直下で検出した。S D 401・410は重複関係があり、S D 410がS D 401よりも新しい。しかし、平面プランの形状から、S D 401・410は同一の溝と推定される。おそらく、S D 410はS D 401再掘削の平面プランであろう。S D 401・410は本トレンチを貫き、調査区の東及び西に延伸するものとする。調査区内で検出した限りでは、幅0.8m以上、深さ約35～50cmの規模である。肥前産の陶器瓶口縁部が出土しており、少なくとも近世後半には機



第41図 第4-3トレンチ柱穴列S A 405平面・断面図

能していたようである。埋土は緑灰色粘土を主体とするが、黒灰色粘土、緑灰色礫も含んでいる。そして、主軸方向がほぼ座標の東西方向を指向し、現代の用水路と一致することから、S D 401・410は現代の用水路の直近の前身水路と考えられる。また、埋土の特徴と位置、主軸方向から第4-1トレンチのS D 408と同一遺構と考えられる。

溝S D 402・403・404 S D 401・410の南側で検出した東西方向の溝群である。S D 402～

404は西から東へ一列に並んでいる。どの遺構も深度が浅く、後世の削平を被っているようである。埋土の色・質はいずれも褐色の砂礫層で共通していることから、S D 402～404は本来、同一の溝であったと考えられる。S D 403からは中国製青磁椀、白磁壺、瓦質土器などが出土しており、中世前半に比定される。S D 402～404は、東端でやや南に軸がずれるが、ほぼ真東西を指向する。

溝状遺構 S D 407 S D 402の約20m西で検出した。削平を受けているために途切れているが、S D 407を延長するとS D 402～404に接続する可能性がある。

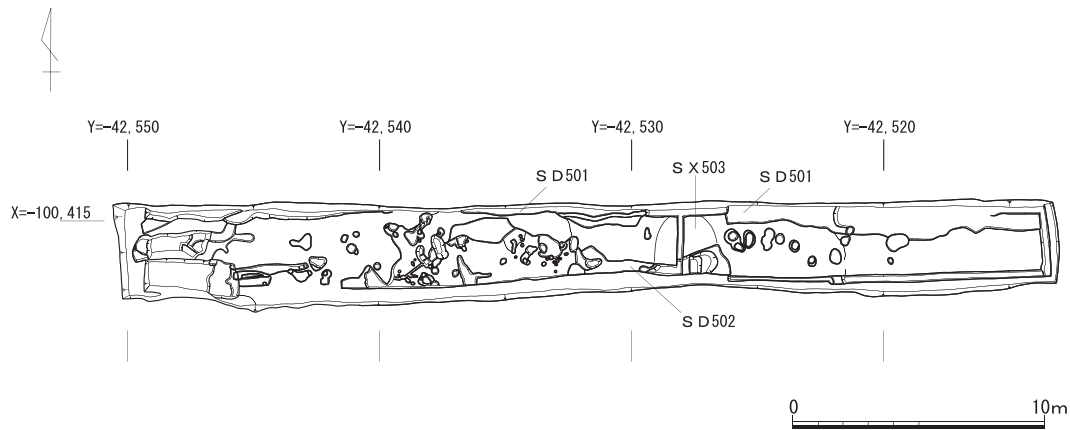
また、前述の通り第4-1・4-2トレンチでは、現代の水路と平行する東西方向の溝が検出されているが、いずれの溝も断面「U」字形の浅い溝で、溝幅も同規模である。したがって、細い溝ではあるが、各トレンチにわたり長く伸びる同一の溝である可能性がある。

土坑 S K 406 調査区中央西寄りで検出した方形の土坑である。東西2.9m、南北1.7m以上、深さ0.8～0.9mを測り、他の遺構と比べ規模が突出している。S K 406の埋土は、暗褐色・黒褐色・灰色の粘土層で構成され、S D 401・410の埋土と近似した特徴を有する。遺物が出土しなかったため時期は不明だが、埋土の特徴と位置関係から、S K 406とS D 401・410は、同時期の一連の遺構であろう。S K 406の機能としては、井戸等が想定される。

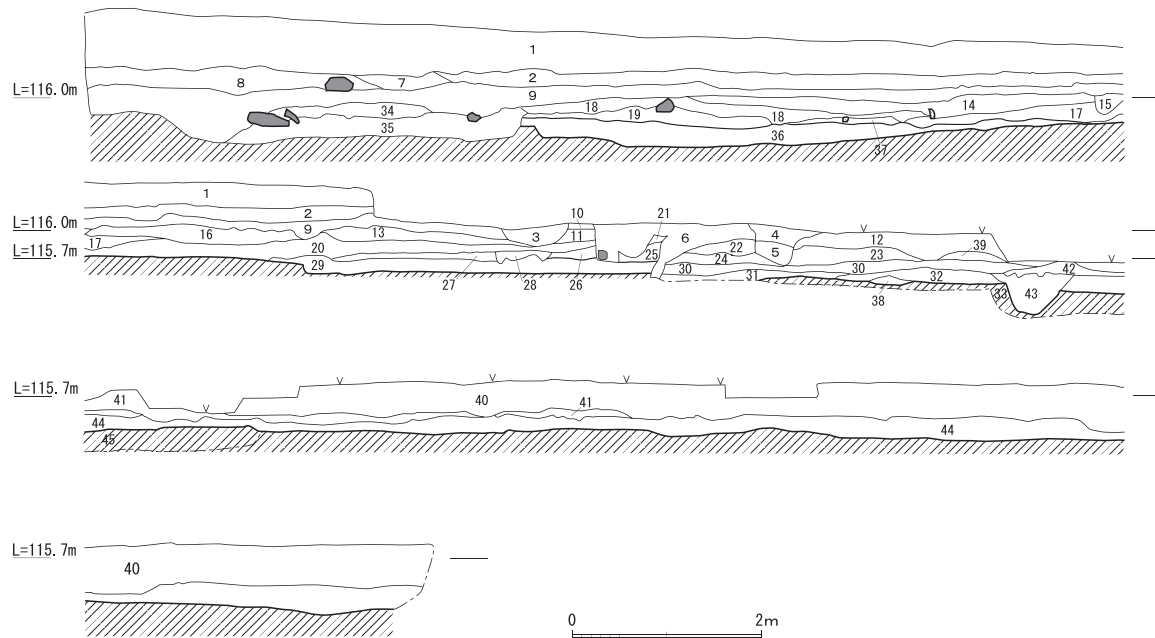
調査区の南部ではピット、土坑が一面に分布する。ピットには柱痕が検出されるものもあるが、遺物は出土せず時期は不明である。調査区が東西に狭長であるため、検出したピット、土坑の配置にはほとんど有意性が認められなかったが、唯一、柱穴列 S A 405のみを検出した。

柱穴列 S A 405 4間の柱穴列で、各々の柱穴に柱抜取痕が確認された。柱穴の規模は、西の3基がほぼ同規模で、径0.4mのいびつな円形を呈す。東の2基はやや規模が大きく、復元径0.6mのいびつな円形である。各柱穴の柱抜取痕の直径は0.1～0.2mを測る。東から2基目の柱穴では、柱痕を2本分確認した。この柱穴での柱痕の切り合い関係は不明瞭である。柱間距離は、西から3間は1.65～1.75mでほぼ均一であるが、東端の1間のみ2.5mを測り、離れている。調査範囲内では確定は不可能であるが、西の3間と東の1間は、別の遺構とも想定されうる。主軸方向は、座標東から南へ3度振っている。中世以降になると、この一帯は水田が形成されることから、柱穴列 S A 405は中世以前の遺構と考えられる。中世以前の建物としては、既往の野条遺跡の発掘調査で奈良～平安時代、12世紀代の掘立柱建物跡が確認されている。奈良時代～平安時代の建物の主軸方向は、座標北から西に数度振るか、東に数度振る2通りがある。対照的に12世紀代の建物の主軸方向は座標北を指向する。主軸方向から見ると、当トレンチの S A 405は奈良～平安時代に帰属する可能性が高い。

第4-1～4-3トレンチの遺構検出面の堆積層は、いずれも黒色土層を主体とする。第4-2トレンチでは断ち割りを行ったが、黒色土層の上面から0.3mの深度でにぶい褐色土層を確認した。第4-1・4-3トレンチと比べ、堆積層の残存状況は良好と言える。第4トレンチでは、古代～中世の土地利用の変遷を示す遺構・遺物を確認した。第4-3トレンチで検出した中世の溝 S D 402～404は第4-1・4-2トレンチにまたがる可能性がある東西方向の溝であるが、水田地割との位置関係から、平安時代末期～鎌倉時代初頭に開削された新庄用水に接続する溝と



第42図 第5トレンチ平面図



- | | | |
|--|--|-------------------------------------|
| 1. パラス層(農道舗装) | 18. 褐灰色(7.5YR5/1)粘質シルト | 33. オリーブ黄色(7.5Y6/3)粘土
(締まり強い、地山) |
| 2. にぶい黄橙色(10YR2/3)シルト | 19. 褐灰色(7.5YR5/1)シルト質粘土 | 34. 褐灰色(7.5YR5/1)粘質シルト |
| 3. 崩落土 | 20. 褐灰色(10YR5/1)シルト質粘土 | 35. 褐灰色(7.5YR5/1)粘土 |
| 4. 崩落土 | 21. 第20層と同一層 | 36. 褐灰色(7.5YR5/1)粘土 |
| 5. 崩落土 | 22. 第20層と同一層 | 37. 第20層と同一層 |
| 6. 灰オリーブ色(5Y6/2)シルト質極細砂
(杭跡) | 23. 第20層と同一層 | 38. オリーブ灰色(10Y5/2)粘土 |
| 7. にぶい黄橙色(10YR2/3)シルト
(砂礫混じり) | 24. 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質粘土
(第24層と同一層) | 39. オリーブ灰色(2.5GY6/1)粘土 |
| 8. にぶい黄橙色(10YR2/3)シルト | 25. 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質粘土
(第24層と同一層) | 40. 灰黄褐色(10YR5/2)シルト質粘土 |
| 9. 灰黄褐色(10YR5/2)ブロック質土
(径50~150mmの礫を含む) | 26. 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質粘土
(第24・25層と同一層) | 41. 灰色(7.5Y5/1)粘質シルト |
| 10. 第2層と同一層 | 27. 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質粘土
(第24~26層と同一層) | 42. 灰色(7.5Y6/1)シルト質粘土 |
| 11. 第9層と同一層 | 28. 黄灰色(2.5Y4/1)粘土ブロック | 43. オリーブ黒色(10Y3/2)シルト質粘土
(倒木痕跡) |
| 12. 第9・11層と同一層 | 29. 褐灰色(10YR5/1)粘土 | 44. 暗青灰色(5B4/1)粘土(S D 501埋土) |
| 13. 黄灰色(2.5Y4/1)シルト質粘土 | 30. 褐灰色(10YR5/1)粘土(第29層と同一層) | 45. オリーブ灰色(7.5Y6/3)粘土(地山) |
| 14. 黄灰色(2.5Y4/1)シルト | 31. 褐灰色(10YR4/1)極細砂
(粘土、径5~10mmの亜円礫を少量含む) | ※第38~第43層は時期不明の溝埋土
(S D 501の上層) |
| 15. 黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト | 32. 灰色(10Y4/1)粘土
(5~10mmの亜円礫を少量含む) | |
| 16. にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質シルト | | |
| 17. 褐灰色(10YR5/1)粘質シルト | | |

第43図 第5トレンチ北壁土層断面図

推測される。この水路は現代まで受け継がれて利用されているが、S D 402～404は、その最古段階に近い遺構と考えられる。また、第4-3トレンチS D 401・410は、現代の水路とほぼ重複する水路で、これも新庄用水から取水した水路跡と考えられる。出土遺物から近世以降と考えられ、現代の水路の直近の水路の遺構と考えられる。

(5)第5トレンチ(第42～43図)

第5トレンチは、第4トレンチの東側に設定したトレンチで、調査面積は110㎡である。調査地の現況は畑、農道、用水路である。遺構面の残存状況は不良である。調査トレンチの大部分が現代の農道の直下であるため、削平を受けている。表土面から約0.65～1.1mの深度(第33・45層上面)で遺構面を検出した。遺構面は1面である。

溝S D 501 第4トレンチと同様に、現在の水路の下層で検出した溝である。調査区の北端近くで検出されたため、幅は不明である。トレンチ内での深度は約15～25cmである。埋土は灰色の粘土で、第4トレンチの近世後半の溝と似ている。遺物は出土していない。位置関係と埋土の質から現行の水路の前身である可能性がある。

溝S D 502 調査区東部で検出した、溝S D 501と平行する小規模な溝である。長さ約0.6m、幅約0.5m、深さ約10cmである。遺物は出土しなかった。

倒木痕S X 503 S D 501・S D 502にまたがって検出した。各遺構の形成順序は、S D 501→S X 503→S D 502の順のようである。

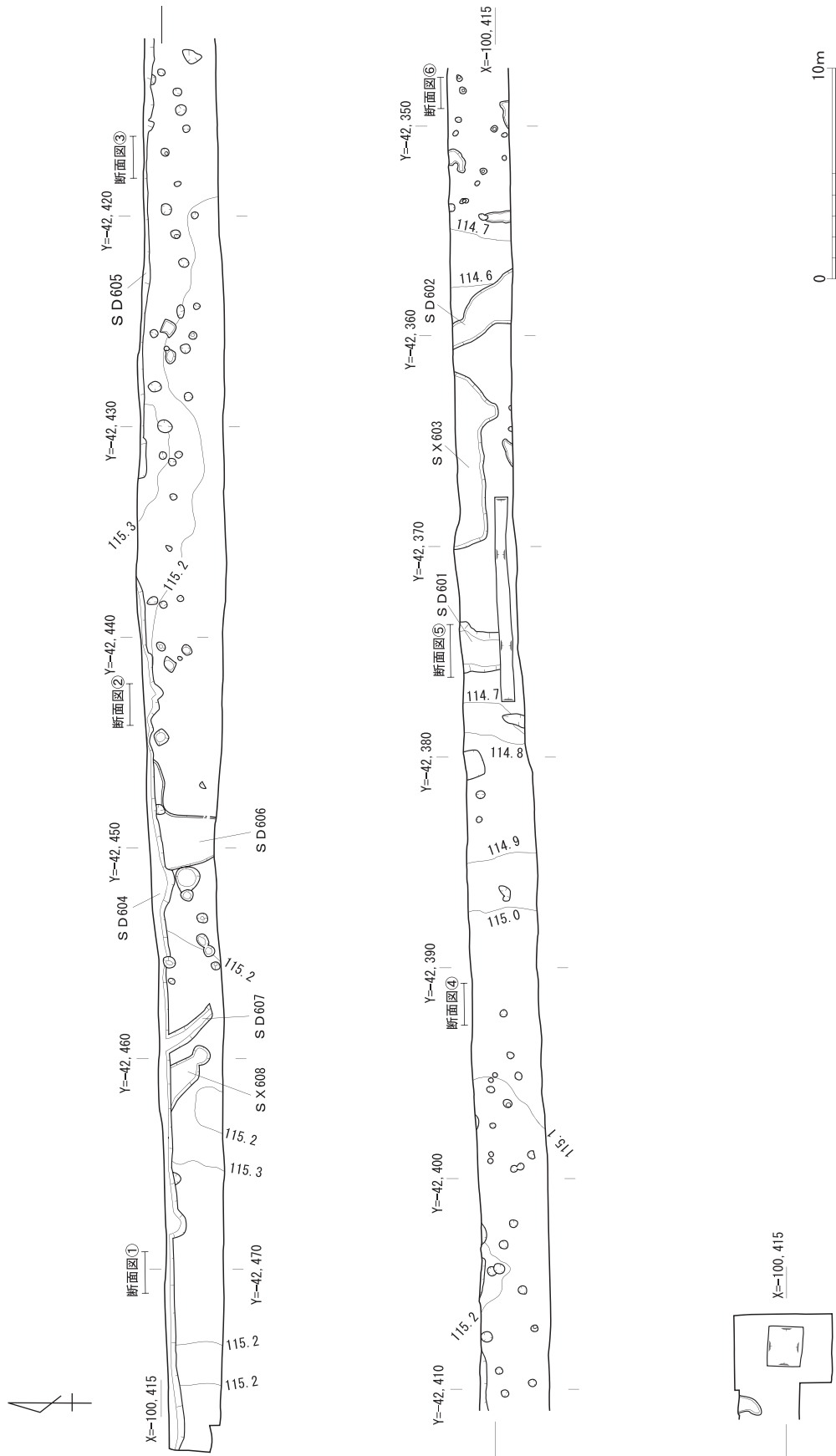
上記の遺構の他に、ピット、土坑を数基検出したが、いずれの遺構からも遺物は出土しなかった。ピットについては柱痕を検出したものが数基存在するが、有意の配置は見出されなかった。第5トレンチの遺構面は、明らかに西から東へ傾斜し、調査区西端では標高115.8m、東端では115.3mである。地山はオリーブ黄色～オリーブ灰色の粘土で、第4トレンチで見られる黒ボク層は検出されなかった。

(6)第6トレンチ(第44～47図)

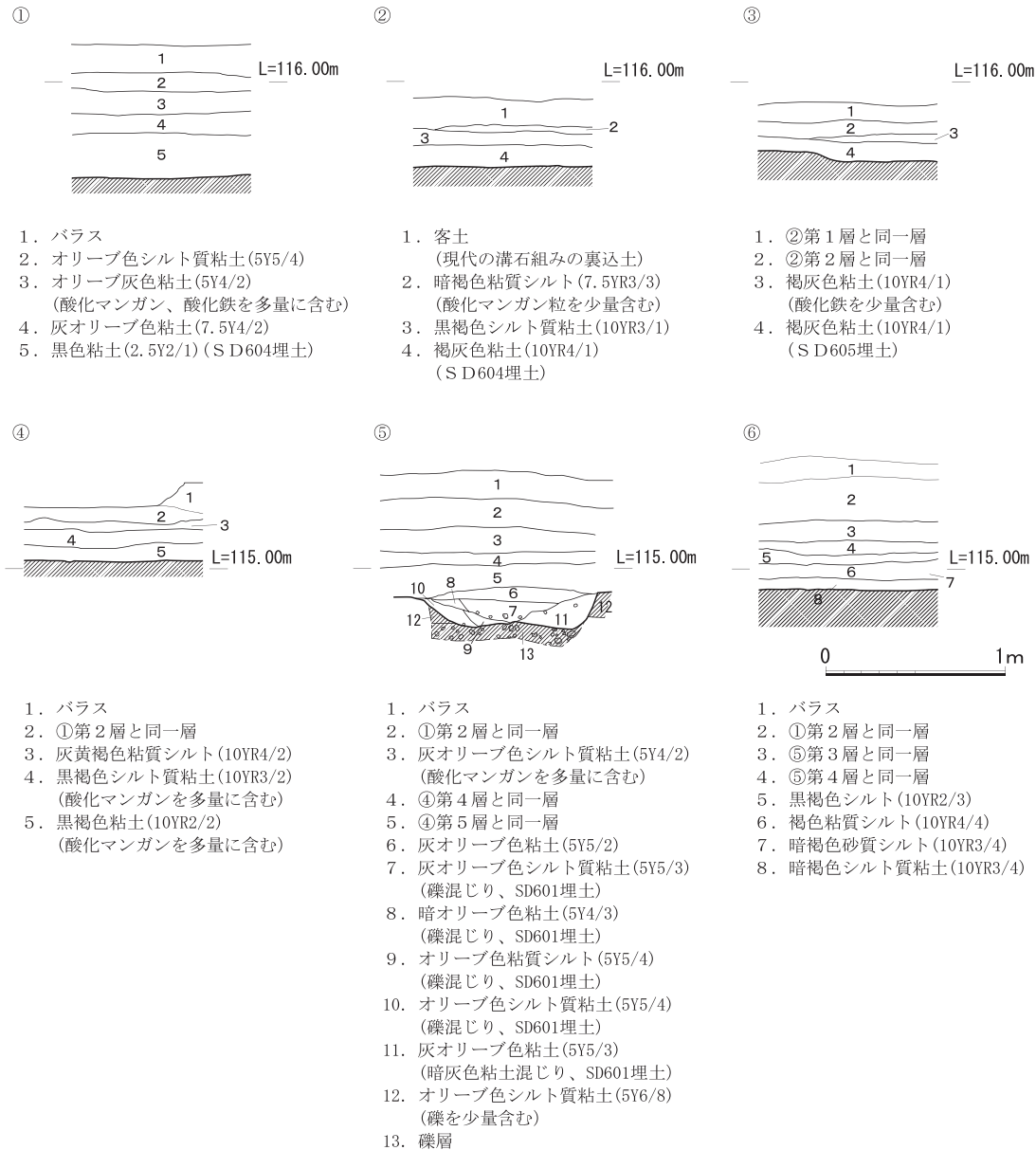
第6トレンチは、最も東に設定したトレンチである。調査面積は434㎡である。調査前の現状は、水田、農道及び東西方向の用水路である。遺構面は1面で、西から東に向かって緩やかに下がる地形を示す。堆積土は粘土が主体で、湿地性の堆積環境だったようである。

溝S D 604・605 調査区北端部で検出した東西方向の溝で、東西に並んでいる。S D 604・605間がトレンチ内では途切れるため、遺構番号を個別に付与したが、同一遺構と考えられる。S D 604・605は現代の用水路と重複する位置にあたり、主軸方向も平行する。調査区中央部以東では検出されないが、これはトレンチが現代の用水路から少し離れるためである。幅0.6m以上、深さ30cm以上、全長65m以上の溝と考えられる。埋土は青灰色の粘土である。以上の状況から、現在の水路の前身と推定される。遺物は出土していない。

溝S D 606 調査区西端から約30m東の地点で検出したS D 604と直交する南北方向の溝である。幅2.5m、深さ10cmを測る。遺構の重複関係から、S D 606はS D 604よりも新しい。S D 606は、埋土の質がS D 604とほぼ同一で、また、現在の地表面で、S D 606と重複する位置に用水路



第44図 第6トレンチ平面図



第45図 第6トレンチ北壁土層断面図

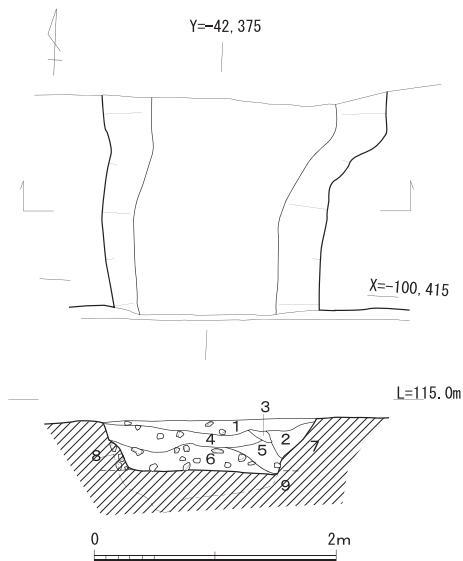
が存在することから、S D 606はこの用水路の前身の水路と推定される。遺物は出土していない。

溝S D607 S D606から約8m西で検出した北西～南東方向の溝である。S D604に斜交する。S D604との新旧関係は不明である。現在の地割にはこの溝は踏襲されていない。

その他の遺構 S D607の西隣で倒木痕S X608を検出した。また、S D606・607の間ではピットが数基点在する。いずれの遺構からも遺物は出土していない。

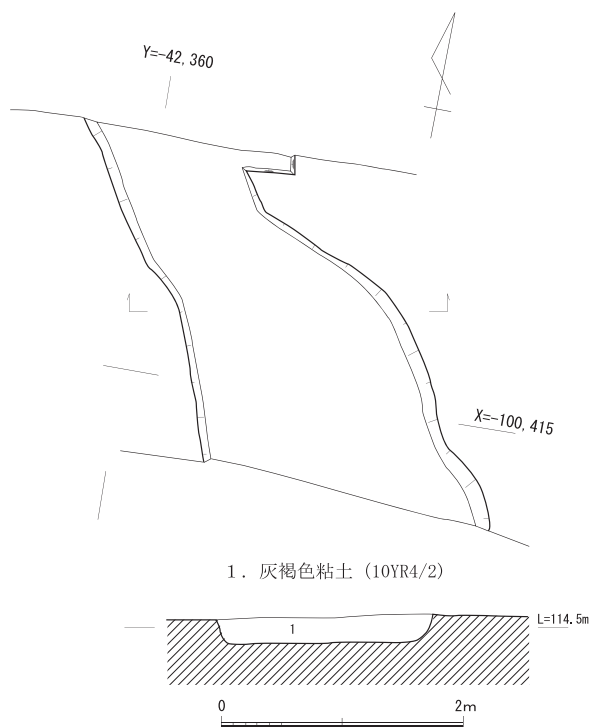
S D605周辺の調査区中央部は、本トレンチの中で最も遺構が集中しており、ピットが60基以上分布する。しかし、各ピットの深さは10cm以下で、柱痕が検出されるピットも深度は浅い。遺構の配置にも特段の傾向は見出されない。

中央部以東は次第に遺構の密度が薄くなる。明確な遺構は南北方向の溝S D601・602のみである。不定形の落ち込みS X603は泥湿地における自然堆積と考えられる。



1. 黄褐色シルト質粘土(2.5Y5/3) (礫を少量含む)
2. オリーブ色シルト質粘土(5Y5/6)
3. オリーブ色シルト粘土(5Y5/6)
4. オリーブ黄色砂質シルト(5Y6/4) (礫を少量含む)
5. オリーブ色礫混じり粘土(5Y6/6)
6. オリーブ色粘土混じり礫層(5Y6/6)
7. オリーブ色礫混じり粘土(5Y6/6)
8. 礫層
9. 礫層

第46図 溝S D 601平面・断面図



第47図 溝S D 602平面・断面図

溝S D 601(第46図) 溝S D 601は、幅 1.7～1.9m、深さ40cmを測り、主軸方向はほぼ座標北を向く。埋土は黄褐色、オリーブ色、オリーブ黄色の粘土・シルトから構成され、各層には礫が含まれている。礫の量は上層で少なく、下層が多い。埋土と遺構面構成層との見分けが付きがたく、断ち割り状に深掘りしたところ、遺構面下層の礫層(第9層)との境界が検出され、遺構の深さが確認できた。遺物は出土していない。埋土の堆積状況から、流水環境下で機能した溝と想定され、水路の可能性が高い。

溝S D 602(第47図) 溝S D 602は幅1.1～1.9m、深さ20cmで、主軸方向は北西～南東を向く。埋土は灰黄褐色の粘土で、遺構検出面の土質とよく似ている。溝状に検出されたが、埋土の堆積状況がS D 601のような流水環境を示さないことから、積極的に溝あるいは水路と評価する根拠はやや薄い。

本トレンチの遺構面の標高は、溝S D 601・602の地点で最も低くなるが、両遺構から東に向かって地形が隆起する。官山川との位置関係から自然堤防が存在するのかもしれない。この地形的特徴と対応するように、トレンチ東端付近ではピットが14基、散在的に分布する。ピットの配置に規則性はないが、明確に柱痕が確認できたピットが4基含まれる。ただし、いずれの遺構からも遺物は出土しなかった。

第6トレンチでは、遺構からは遺物が出土しなかったが、この地点の土地利用の時期を示す資料として、遺構面上層から出土したごく少量の土師器片、陶器片が挙げられる。

小破片であるため正確な時期は特定できないが、中世から近世に比定できる。

2. 出土遺物

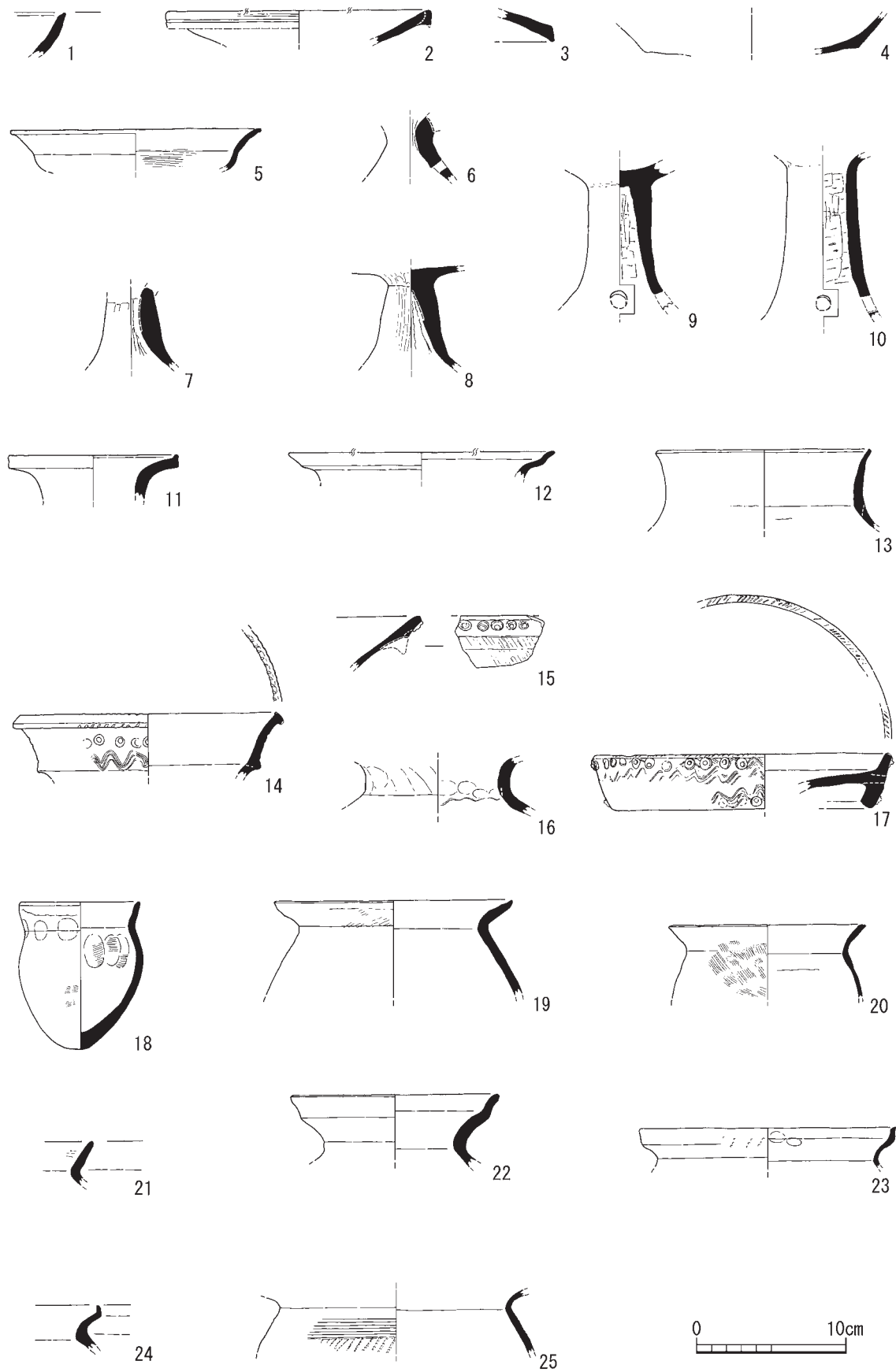
本調査で出土した遺物についてトレンチ順に記述する。調査範囲の制約上、トレンチ内で完結する遺構が少ないため、出土遺物は破片資料が大部分を占めた。また、ほとんどの遺物は、第2・4トレンチの遺構から出土している。以下、各トレンチ、遺構、包含層毎の出土遺物について記述する。

第1トレンチ(第48図1) 1は第1トレンチから唯一出土した遺物である。遺構面直上の堆積層から出土した。古式土師器の口縁部片で、鉢もしくは壺である。残存高3.8cmを測る。胎土が密で、焼成は良好である。色調はにぶい黄橙色を呈す。

第2トレンチ

溝SD210(第48図2～25) 2～10は高杯および器台である。2は器台の口縁部である。復元径17.4cm、残存高2.2cmである。胎土がやや粗く、1～1.5mmの茶色、灰色、黒色砂粒を含む。焼成は良好で、色調は橙色を呈す。口縁部外面に擬凹線文を施す。凹線は2条のみ確認される。3は高杯もしくは器台の脚部である。残存高2.1cmを測り、胎土は密で、1～3mmの褐色、赤茶色の砂粒を含む。焼成は良好で、色調は橙色を呈す。端部に横ナデ調整が施され、内外面にはナデ調整が観察される。4は高杯の杯部である。最大径17.6cm、残存高2.8cmを測る。胎土は密で、2mm以下の白色、灰褐色砂粒を含む。焼成はやや不足し、色調は灰白色を呈す。5は高杯の杯部である。復元口径16.8cm、残存高2.8cmを測る。2mm以下の白色・灰褐色・半透明・褐色砂粒を含む。焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈す。外面調整は摩滅のため不明であるが、内面はハケ調整が観察される。6は小型の高杯の脚柱部である。残存高2.9cmを測る。胎土はやや密で、3mm以下の灰褐色・白色・褐色砂粒を含む。焼成は良好で、色調は橙色を呈す。脚部に円形の透かし孔がある。7は高杯脚柱部である。残存高5.3cmを測る。胎土はやや粗く、1mm以下の茶色・灰色・白色・黒色砂粒を含む。外面にミガキ調整の痕跡が認められる。8は古式土師器の高杯柱状部である。残存高6.9cmを測る。胎土はやや粗く、1mm以下の茶色・灰色・白色・黒色砂粒を多く含む。焼成はやや軟質で、色調は淡橙色～灰白色を呈す。杯部内面には赤色顔料が付着する。本来、全面に彩色されていたのであろう。9は高杯杯部下部～脚柱部である。胴部最小径4.2cm、残存高9.6cmを測る。胎土は密で、1～3mmの白色・灰色・透明・褐色の砂粒を含む。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈す。内面にケズリ調整が施される。裾部に円形の透かし孔がある。四方向に穿孔されたようである。10は高杯柱状部である。胴部最小径4.7cm、残存高11.0cmを測る。胎土はやや粗く、2～3mmの白色・茶色・灰色砂粒を含む。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈す。内面にケズリ調整が認められ、裾部には円形の透かし孔がある。透かし孔は四方向に穿孔されたようである。

11～17は壺と考えられる資料である。11は広口壺の口縁部か。復元口径17.5cm、残存高3.0cmを測る。4mm以下の赤褐色砂粒、2mm以下の白色・灰褐色砂粒を含む。焼成は良好で、色調は橙色を呈す。12は壺口縁部である。復元口径17.5cm、残存高1.9cmを測る。胎土はやや密で、0.5～1mmの灰白色砂粒を含む。焼成は良好で、色調は外面が暗灰色、内面が橙色を呈す。内外

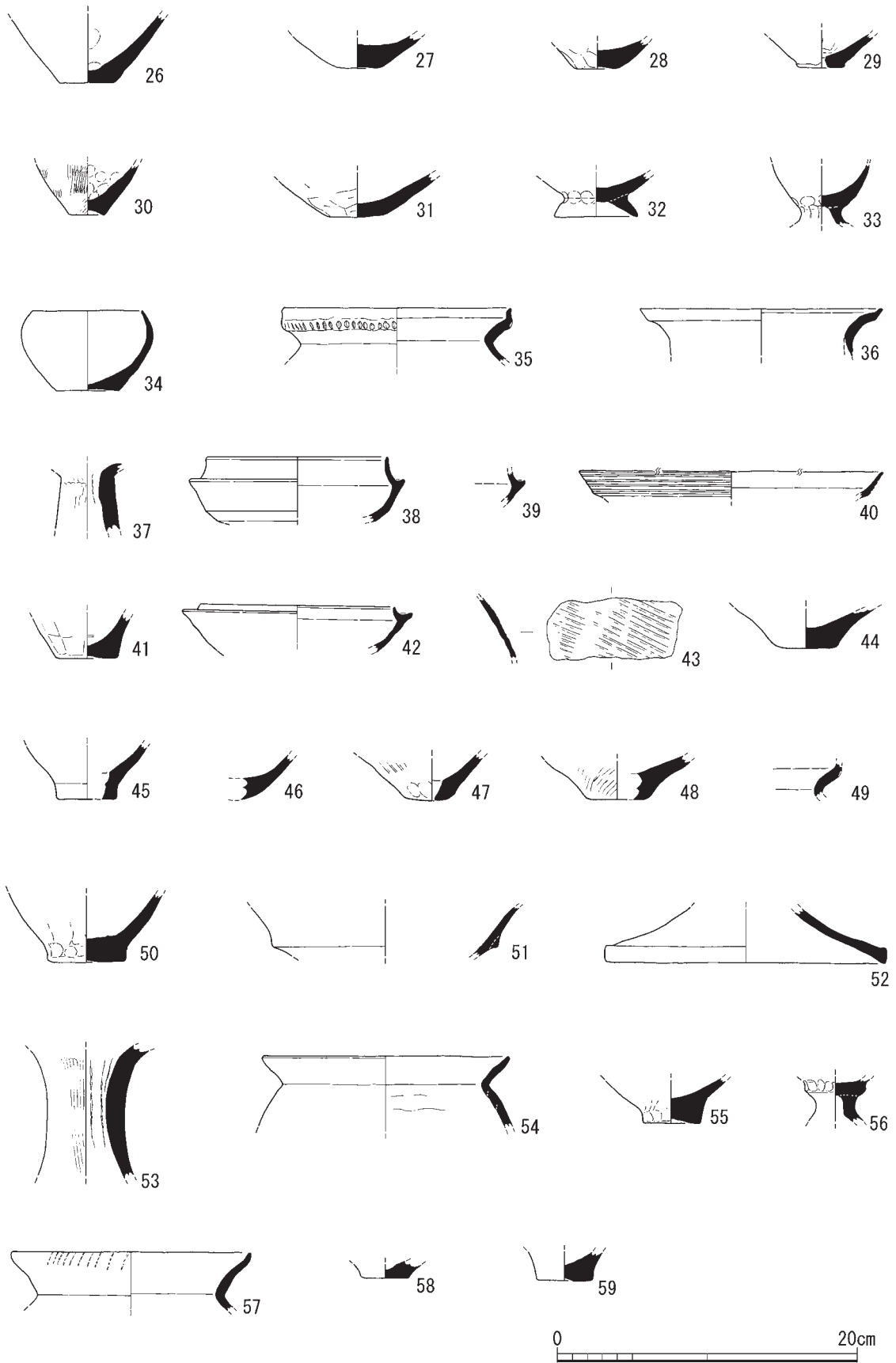


第48図 出土遺物実測図(5)

面が丁寧にナデ調整されている。13は直口壺の口縁部である。復元口径14.1cm、残存高5.1cmを測る。胎土はやや密で、1～2mmの灰色・白色・茶色・半透明砂粒を含む。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈すが、外面が彩色されており、彩色部の色調は淡橙色を呈す。内外面は横ナデ調整される。14は二重口縁壺の口縁部である。復元口径17.0cm、残存高4.3cmを測る。胎土は密で、1mm以下の黒色・褐色・灰色砂粒を含む。焼成は良好で、色調は橙色を呈す。口唇部の内外面にキザミ目、口縁部文様帯に竹管文、波状文が施される。15は二重口縁壺の口縁部である。残存高3.45cmを測る。胎土はやや粗く、1～2mmの白色・灰色砂粒および、1～1.5mmの茶色・黒色砂粒を含む。焼成は良好で、色調は基本的ににぶい橙色であるが、外面のみ着色されるようで、橙色を呈している。口縁下垂部は剥落している。口縁部外面上面には円形浮文が施される。16は二重口縁壺の頸部である。屈曲部の復元径10.0cm、残存高3.7cmを測る。胎土はやや密で、1～2mmの半透明・白色砂粒、1～1.5mmの青灰色砂粒、0.5～1.5mmの茶色砂粒を含む。焼成は良好で、色調は橙色を呈す。外面に強い横ナデが施されている。頸部の粘土で、体部の端を包み込むように継ぎ足しているようである。17は二重口縁壺の口縁部である。復元口径19.6cm、残存高3.7cmを測る。胎土はやや密で、1.5mm以下の黒色・灰色・白色・褐色の砂粒を含む。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈す。口縁端部上面にキザミ目が施される。口縁部文様帯では、櫛描波状文を施した後で、貼付け円形浮文の上に竹管文が施される。

18は小型の甕で、ほぼ完形である。口径7.9cm、器高9.95cmを測る。胎土はやや粗く、0.5～1mmの白色砂粒、1.5～2mm大の薄茶色砂粒を多く含む。焼成はやや軟質で、色調はにぶい黄橙色を呈す。内外面にハケ調整が観察される。

19～21は、「く」字口縁甕である。19は口縁部～胴部上半部で、復元口径16.0cm、残存高6.3cmを測る。胎土が粗く、0.5～2mmの白色砂粒、2mmの赤色斑粒、2mmの青灰色砂粒を含む。焼成は良好で、色調は橙色を呈す。摩滅が著しいが、内面にナデ、屈曲部外面にハケ目が残っている。20は口縁部～胴部上半部で、復元口径12.8cm、残存高4.95cmを測る。胎土はやや密で、1～1.5mmの白色・灰色・黒色・茶色砂粒を含む。焼成は堅緻で、色調はにぶい橙色を呈す。外面にハケ調整が認められる。内面はナデ調整か。21は口縁部の破片である。口径不明、残存高2.5cmを測る。胎土は密で、2mm前後の黒色・褐色・白色砂粒を含む。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈す。外面はナデ調整、内面は横ナデが施される。22は二重口縁壺の口縁部である。ほぼ全周し、口径13.6cm、残存高4.4cmを測る。胎土は密で、1～3mmの黒色・白色・半透明・褐色の砂粒を含む。焼成は良好で、色調はにぶい橙色～橙色を呈す。外面に横ナデが認められるが、内面調整は不明である。23は受口状の甕口縁部である。復元径17.2cm、残存高2.55cmを測る。胎土はやや密で、1～2mmの茶色・白色・灰色砂粒を含む。焼成は堅緻で、色調はにぶい黄橙色を呈す。口縁部外面に、櫛原体による刺突が施される。24は受口状の甕口縁部である。口径不明、残存高2.8cmを測る。1mm前後の半透明・白色・青灰色および茶色砂粒を含む。焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈す。25は甕の口縁部下半部～胴部上部である。復元頸部径15.6cm、残存高3.7cmを測る。胎土は粗く、1～2mmの白色・茶色・灰色砂粒を含む。



第49図 出土遺物実測図(6)

焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈す。胴部外面には、櫛描文が横方向に直線的に施され、その下に櫛原体によるキザミ目が施される。加飾の特徴から、受口状口縁甕と考えられる。

溝SD210(第49図26～33) 26～31は土器底部である。26は復元底径3.6cm、残存高4.6cmを測る。胎土はやや粗く、焼成はやや軟質で、色調はにぶい橙色を呈す。27は底径2.4cm、残存高2.1cmを測る。胎土は粗く、焼成は良好で、色調は橙色を呈す。28は底径2.8cm、残存高1.8cmを測る。胎土は密で、焼成は良好で、色調は褐灰色を呈す。29は底径3.15cm、残存高2.2cmを測る。胎土は密、焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈す。30は復元径2.45cm、残存高3.4cmを測る。胎土は粗く、焼成は軟質で、色調はにぶい黄橙色を呈す。31は底部最小径3.2cm、最大径3.9cm、残存高2.9cmを測る。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈す。32・33は台付甕もしくは鉢の底部である。32は全周し、底径5.6cm、残存高3.0cmを測る。胎土はやや密、焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈す。33は底径不明、残存高4.0cmである。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は外面が橙～にぶい黄橙色、内面が橙～にぶい橙色を呈す。

断ち割り4(第49図34) 34は無頸壺である。出土位置の関係からSD210に伴う遺物と考えられる。ほぼ完形で口径7.3cm、器高5.4cmを測る。胎土はやや密、焼成は良好で、色調は橙色を呈す。

不明遺構SX211(第49図35) 35は受口状口縁甕である。復元径15.2cm、残存高3.6cmを測る。胎土は粗く、焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈す。

溝SD203(第49図36～38) 36は壺口縁部か。復元口径16.2cm、残存高3.2cmを測る。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈す。37は高杯の脚柱部である。くびれ部径3.5cm、残存高4.6cmを測る。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は灰白色を呈す。38は須恵器杯身である。復元口径12.0cm、残存高4.4cmを測る。焼成は良好で、色調は灰白色を呈す。39は須恵器杯身である。径不明、残存高2.7cmを測る。焼成はやや軟質で、色調は灰白色を呈す。

溝SD204・206(第49図40～42) 40は北近畿系の甕口縁部か。復元口径20.2cm、残存高1.8cmを測る。胎土はやや密、焼成は良好で、色調は外面暗灰色、内面は浅黄橙色を呈す。口縁部外面に擬凹線文を施す。41は甕底部である。底径4.1cm、残存高2.7cmを測る。胎土は粗く、焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈す。内外面にナデ調整が施される。42は須恵器杯身である。復元口径12.8cm、残存高3.1cmを測る。焼成は良好で、色調は灰色を呈す。TK43～TK209型式期であろう。

溝SD207(第49図43～45) 43は弥生土器甕の体部である。残存高4.8cmを測る。胎土は密、焼成は良好で、色調は灰白色を呈す。外面には左上がりのタタキが観察される。内面はハケ調整の後、丁寧にナデ消すようである。44は底部である。底径4.0cm、残存高2.7cmを測る。胎土はやや粗く、焼成はやや軟質で、色調はにぶい橙色を呈す。内外面にナデ調整が施される。

溝SD208(第49図45) 45は弥生土器底部である。底径3.5cm、残存高3.7cmを測る。胎土はやや粗く、焼成はやや軟質で、色調は外面が浅黄橙色、内面が暗い灰色を呈す。底部が穿孔されている。

不明遺構 S X 209(第49図46) 46は弥生土器底部である。残存高3.1cmを測る。胎土はやや粗く、1～2mmの灰白色砂粒を含む。焼成はやや軟質で、焼成は内面が浅黄色、外面がオリーブ黒色を呈す。底部形態がレンズ状である。

第2トレンチ断ち割り3(第49図47) 47は弥生土器底部である。底径2.7cm、残存高2.9cmを測る。胎土は密で、1.5mmの青灰色、褐色砂粒を含む。焼成はやや良好で、色調は外面が浅黄橙色、内面が橙色を呈す。内外面がナデ調整され、底部が穿孔されている。

第2トレンチ断ち割り4(第49図48～50) 48は弥生土器底部である。底径4.0cm、残存高2.6cmを測る。胎土はやや密、焼成は良好で、色調は橙色を呈す。外面にはハケ、内面にはナデ調整が施される。49は甕の口縁部である。復元底径3.4cm、残存高2.45cmを測る。胎土はやや粗く、1～3mmの灰色、褐色砂粒を多く含む。焼成はやや軟質で、色調はにぶい橙色を呈す。屈曲部外面に横1列の刻み目が施される。50は弥生土器底部である。復元底径5.2cm、残存高4.5cmを測る。胎土はやや密、焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈す。内外面にナデ調整が施される。

第2トレンチ第2遺構面(第49図51～55) 51は高杯の杯部である。胎土は密で、焼成は不足し、色調は灰白色を呈す。摩耗のため調整は不明である。52は高杯の裾部か。復元底径18.6cm、残存高3.7cmを測る。胎土は密、焼成は良好で、色調は赤橙色を呈す。外面にミガキの痕跡が残る。53は高杯脚部である。残存高9.0cmを測る。胎土は粗く、焼成は良好で、色調は淡橙色を呈す。外面は粗い縦ハケの後にナデ調整を加えるようである。54は弥生土器の甕である。復元口径16.2cm、残存高4.75cmを測る。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈す。口縁形態がく字形を描く。内外面にナデ調整されるようである。55は底部である。復元底径2.8cm、残存高3.8cmを測る。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は外面がにぶい橙色、内面が浅黄橙色を呈す。

第2トレンチ第1遺構面(第49図56～60) 56は小型高杯の脚部か。残存高2.8cmを測る。胎土は密、焼成は良好で、色調は外面がにぶい橙色、内面が浅黄橙色を呈す。外面調整は、ハケの後にナデを加える。57は甕である。復元口径15.9cm、残存高2.9cmを測る。胎土はやや粗く、焼成は良好で、外面は明黄褐色、内面は褐灰色～にぶい黄橙色を呈す。口縁部上部外面にキザミ目が施される。口縁端部が不明瞭に屈曲する。58は底部である。底径3.0cm、残存高1.0cmを測る。胎土は2mm以下の白色を含む。焼成は良好で、色調は外面が灰白色、内面が橙色を呈す。調整は不明瞭である。59は底部である。底径3.6cm、残存高1.9cmを測る。焼成はやや良好で、色調は灰白色を呈す。60は須恵器蓋である。復元径11.6cm、残存高1.2cmを測る。焼成は堅緻で、色調は灰色を呈す。

溝 S D 201(第50図61) 61は丹波型瓦器椀である。復元口径14.0cm、復元器高5.0cm、復元底径6.0cmを測る。胎土は精良で、焼成は良好である。色調は灰白色を呈す。口径が大きく、丸みのある形態から、12世期後半に比定される。

第2トレンチ断ち割り2(第50図62) 62は白磁壺である。S D 201に伴う可能性がある。復元底径4.5cm、残存高3.0cmを測る。全面に施釉し、高台畳付部のみ露胎である。高台端部外面に

面取りのケズリが施される。11世紀後半～12世紀代に比定される。

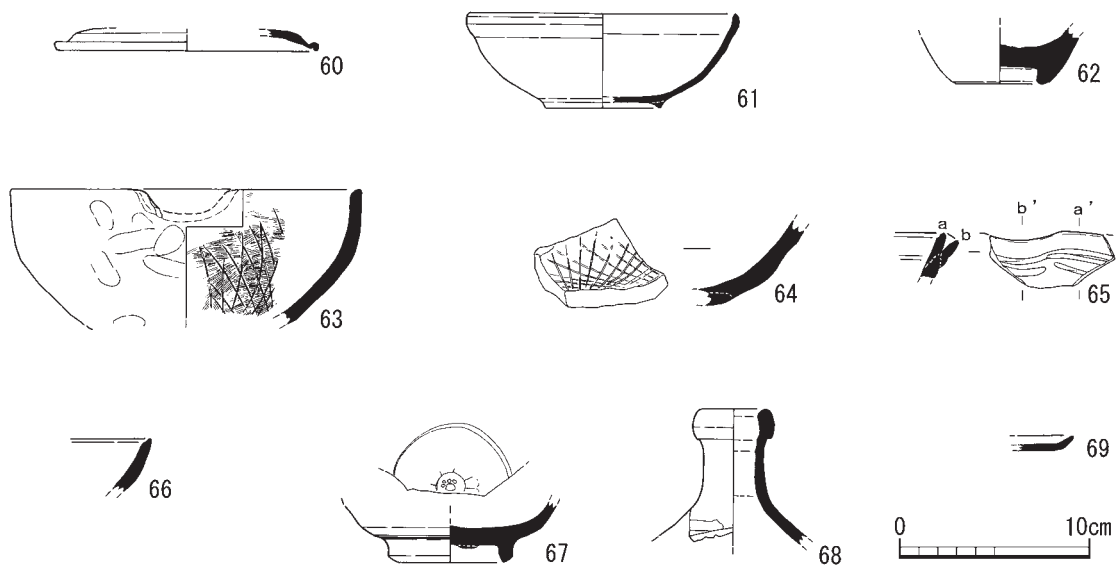
第4トレンチ

溝S D 402(第50図63～65) 63～65は瓦質土器鉢である。63は体部で、復元口径18.4cm、残存高7.2cmを測る。胎土は密で、焼成は良好である。色調は黒色で、外面調整はナデ、内面はハケ調整の後に斜格子状カキ目を施す。14世紀代か。64は体部の下部で、残存高2.25cmを測る。63と同一個体であろう。65は注口部の破片である。残存高2.9cmを測る。胎土は密で、焼成はやや軟質である。色調は暗灰色を呈す。内外面に横方向の凹線がほぼ平行に引かれる。15世紀代に比定される。

溝S D 401～404(第50図66～68) 66はS D 404出土の瓦質土器口縁部破片である。器種は鉢か。残存高3.6cmを測る。胎土が密で、焼成は良好である。色調は暗灰色を呈す。67はS D 402出土の龍泉窯系青磁碗である。復元高台径5.5cm、残存高3.3cmを測る。釉調はオリーブ灰色、磁胎は灰白色を呈す。内面見返り中央部に印花文が施される。全面施釉で、高台内部が蛇の目釉はぎである。13世紀代に比定される。68は第4トレンチS D 401出土の肥前産陶器瓶である。復元口径3.3cm、残存高7.15cmを測る。胎土にはパウダー状の白色砂粒を多量に含む。鉄釉が外面全体にやや雑に施され、白濁色の絵付がある。

第6トレンチ遺構面上層(第50図69) 69は土師器皿である。口径は不明で、器高0.8cmを測る。口縁端部を内湾気味にわずかにつまみ上げて成形し、立ち上がり内面にやや強いナデがある。

弥生時代後期末～古墳時代初頭の遺物の特徴 遺物番号11・19・24・25・45・49は、赤褐色系の色調で、砂粒を多く含み、胎土が粗い。土器の器種は甕が多い。8・13・14・17・18・21・32は、色調が淡い黄褐色系で、胎土が密な傾向がある。外面が赤色顔料で塗色された土器が含まれる。器種を見ると、高杯や加飾壺が目立つ。3・15・16・56の色調は橙色系で、胎土が密である。器種は二重口縁壺の頸部、加飾壺、高杯である。



第50図 出土遺物実測図(7)

上記の掲載遺物の内、第48・49図掲載遺物は弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての土器で、第48図1以外、全て第2トレンチから出土している。これらの土器の中には、胎土・色調などの特徴が似る資料がある。

第2トレンチ出土遺物は時期幅があり、出土遺構も異なるが、上に挙げた3群の土器は、色調・胎土の特徴と器種が対応している。特に淡い黄褐色系の一群と、橙色系の一群に、祭祀用に作られたとみられる土器が多く含まれる。(古川 匠)

〔3〕総括

平成22年度の第17次調査で検出した主な遺構は、弥生時代後期後葉から古墳時代初頭の溝群、奈良時代後期の掘立柱建物跡、平安時代～鎌倉時代と推定される掘立柱建物跡や柵列、土坑等のほか、中世から近世の素掘り溝群等である。また平成23年度の第19次調査では、古墳時代初頭の溝、古墳時代後期～飛鳥時代の溝、平安時代後期の可能性のある溝、平安時代末～室町時代にかけての溝群を検出した。これらの調査成果とともに、平成10年度からはじまった府営ほ場整備関連事業に伴う発掘調査において、特に大きな成果のあった遺構群の評価について、以下にまとめておきたい。

弥生時代～古墳時代の遺構 今回の調査では、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の多数の溝群を確認し、大きな成果を得ることができた。第17次調査区で検出した弥生時代後期後葉に掘削された最大幅5m以上の規模をもつ溝SD1は、北西から南東へ向けて掘削され、部分的に再掘削されながら、古墳時代初頭(庄内併行期古相)まで存続することが判明した。最下層が砂礫層であることから流路として機能したとみられ、灌漑を目的に掘削された溝と推定される。これまで第7次調査では、遺跡の北部から東部で弥生時代後期後葉の竪穴式住居跡を確認しており、居住域が第17次調査地の北東部を中心に展開するとみられることから、溝SD1は集落の南西の境界を画する溝であったと推定される。溝SD1の西部では、古墳時代初頭(庄内併行期古相)に溝SD2が掘削され、溝内から壺・甕・高杯など完形に近い土器がまとまって出土したことから、土器を伴う祭祀あるいは儀礼が行われ、一括して廃棄されたとみられる。集落の境界域における「僻邪」の意味をもつ祭祀、あるいは灌漑用水の導水に関わる農耕儀礼が行われた可能性がある。

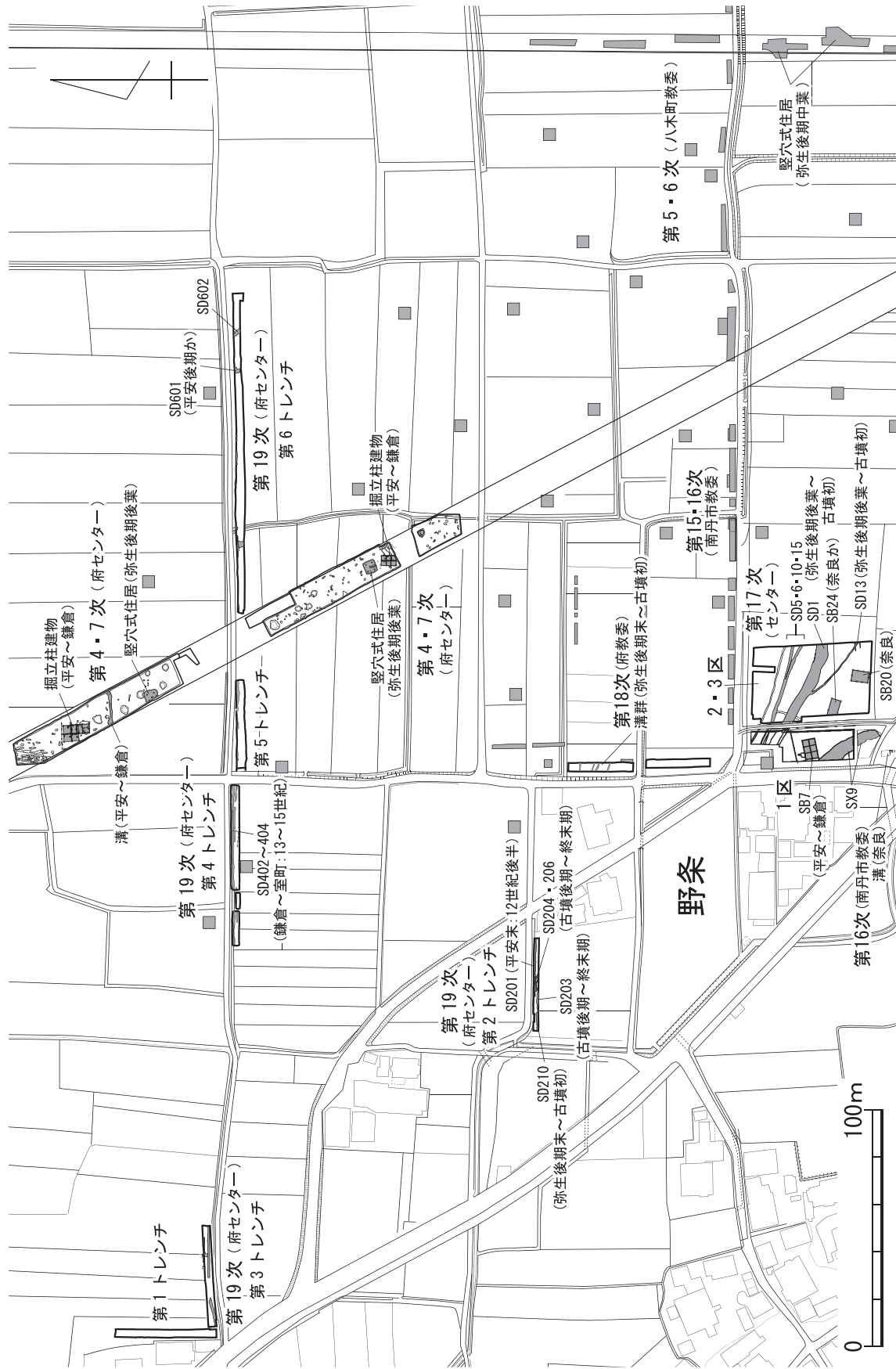
第19次調査の溝SD210は、第17次調査の溝SD1の延長方向にあり、当初、同一の溝の可能性があるとみられたが、出土土器は溝SD1よりもやや新しい庄内併行期新相に位置づけられることから、溝SD1から派生する溝の可能性もある。溝SD210の出土土器は、過去に調査された弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての遺構群のなかでも最も新しい様相をもち、同時期の竪穴式住居跡は未確認ながら、集落の下限をおおよそこの時期に求めることができよう。今回の調査成果によって、弥生時代後期中葉に成立したとみられる野条遺跡(第5・6次調査)の集落は、弥生時代後期末から庄内併行期古相に最も集落規模を拡大し、庄内併行期新相の段階まで存続することが明らかとなった。

奈良時代の遺構 奈良時代の遺構としては、第17次調査で掘立柱建物跡を検出し、これまで確認されていなかった奈良時代の居住域の一角が明らかとなった。南丹市教育委員会による第15次調査では、近接する地点で奈良時代の溝が検出され、遺跡の南西部に同時期の遺構が広がるとみられる。奈良時代の遺構は、第10・12次調査で北西から南西へ斜行する溝が検出され、北に隣接する室橋遺跡南部における室橋遺跡第11次調査でも、同時期の溝群が確認され、奈良時代にすでに灌漑用水路の整備の端緒となる溝の開削が行われていたと考えられる。

平安～鎌倉時代の遺構と平安時代末期の開発 第17次調査では、ほぼ正方位の主軸をもつ平安時代～鎌倉時代と推定される掘立柱建物跡や柵列を検出した。第19次調査では、第2トレンチで平安時代末期(12世紀後半)の東西方向に掘削された溝SD201を検出し、第4トレンチでは鎌倉時代(13世紀)の東西方向の溝を確認した。過去19次にわたる調査のなかで、弥生時代の遺構群とともに、特に大きな成果がみられたのは、こうした各所で検出された灌漑に関わる水路とみられ



第51図 野条遺跡の弥生集落の推定範囲



第52図 野条遺跡主要遺構検出地点

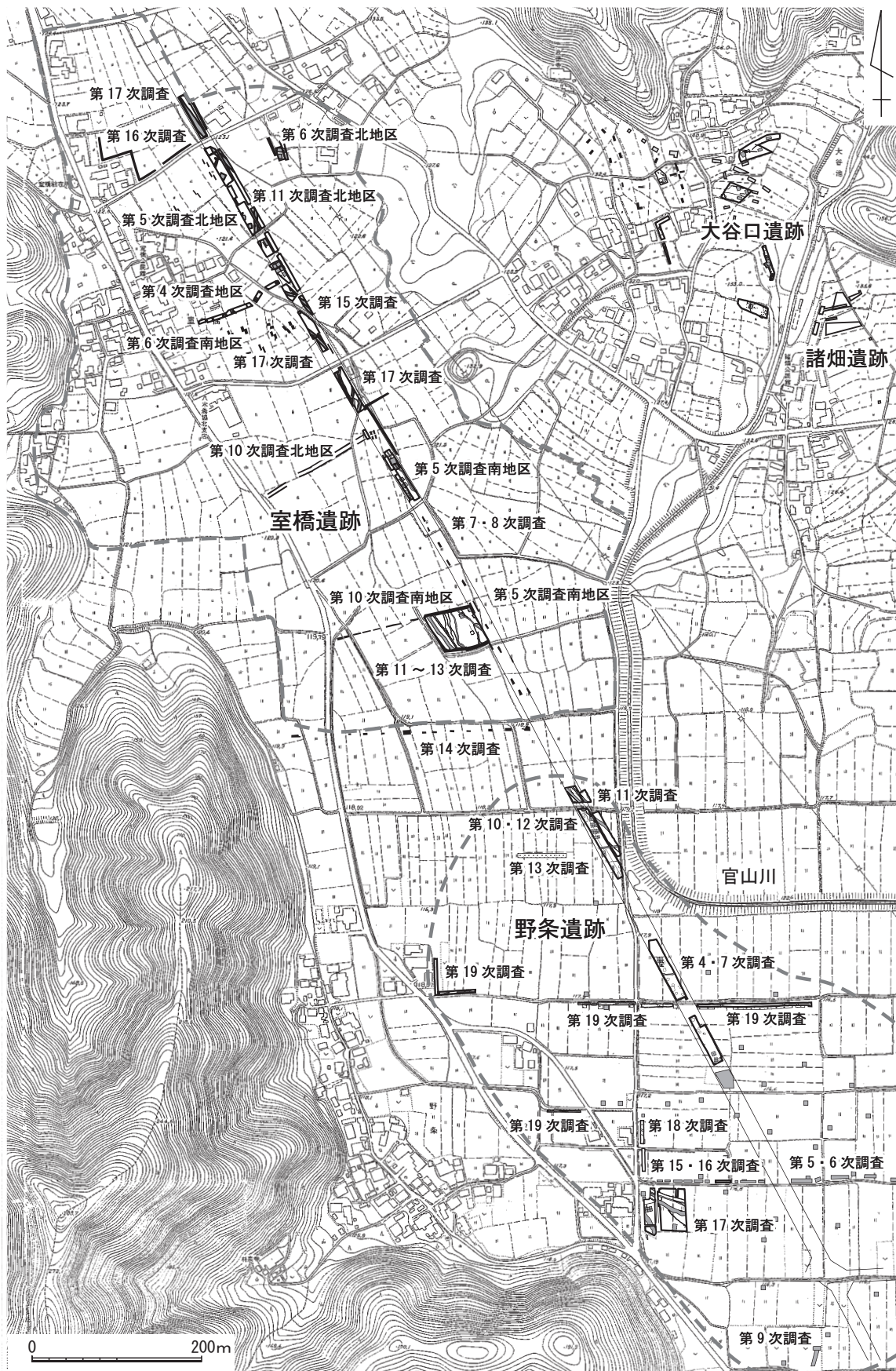
る遺構群の発見であり、平安時代～鎌倉時代の耕地開発にかかわる遺構として注目される。

これまでの調査では、野条遺跡北部で平安時代中期～末期の遺構群を検出し(第10・12次調査)、正方位にのる規格性の高い平安時代末期の建物跡や溝を検出している。これらは、調査地周辺で現在みられる地割と主軸を同じくし、なかでも東西方向の溝SD1は、1町四方(約109m)の大畔半(第56図)を東西半町に二分する位置で検出した。周辺には現在も坪名に関連する字名がみられることから、一帯の方格地割が古代の条里型地割に由来し、12世紀にまで遡る可能性を指摘したところである。^(注2)溝SD1の北部の正方位に配された掘立柱建物群の柱穴の一つから、秤量具である滑石製の分銅が出土するなど、野条遺跡北部の集落は一般集落と様相を異にし、穀倉等の倉庫群とこれに関わる在地領主あるいは地方官人等の屋敷地から構成された居住域とみられる。^(注3)

地割の改変の時期を考証するうえで、重要な遺構は、野条遺跡第11・12次調査で検出した北西から南東へ斜行する溝SD4・SD201である。溝SD201からは、わずかながら11世紀後半の土器が出土している。その北西で検出された室橋遺跡第11次調査の溝SD11707(11世紀後半～12世紀前半)と土層断面や埋土の堆積状況が類似し、一連の溝とみると、溝SD201は12世紀前半まで存続する可能性がある。第19次調査では、この溝SD201の延長上で、溝SD601を検出した。埋土の状況が近似していることから、同一の溝である可能性がある。同様の溝は、野条遺跡の南端で調査された第9次調査でも確認され、後述する条里型地割に改変されたとみられる平安時代末期以前に、広範囲に用水路の整備が行われた可能性を示すものとして注目される。一方、野条遺跡第10・12次調査で検出した条里型地割に沿う溝SD1は、出土土器から12世紀中葉を下限とすることが明らかである。こうしたことから、地割の改変を伴う大規模な開発の時期は、12世紀中葉、具体的には第2四半期を前後する時期に行われた可能性が高いと言えるだろう。

今回報告した第19次調査の第2トレンチでは、12世紀後半に掘削された東西方向の溝SD201を、また第4トレンチでも13世紀代の東西溝SD402～404を検出し、はじめて野条遺跡西部で条里型地割に沿う遺構群が検出された。こうした調査成果によって、条里型地割が野条遺跡の西部にまで及んでいたことが明らかとなり、改めて12世紀における条里型地割への改変が周辺地域を一網する大規模なものであることを裏付ける資料となった。この地域は、12世紀後半に「吉富庄」に立荘される以前は、亀岡市池尻・八木町屋賀に所在した丹波国府の北部の外縁部に形成された国衙領と推定される地域であることから、条里制施行による平安末期における耕地や灌漑用水路の整備が、公領における知行国主や受領による新たな耕地開発を背景にしたものであるとみることができよう。^(注4)

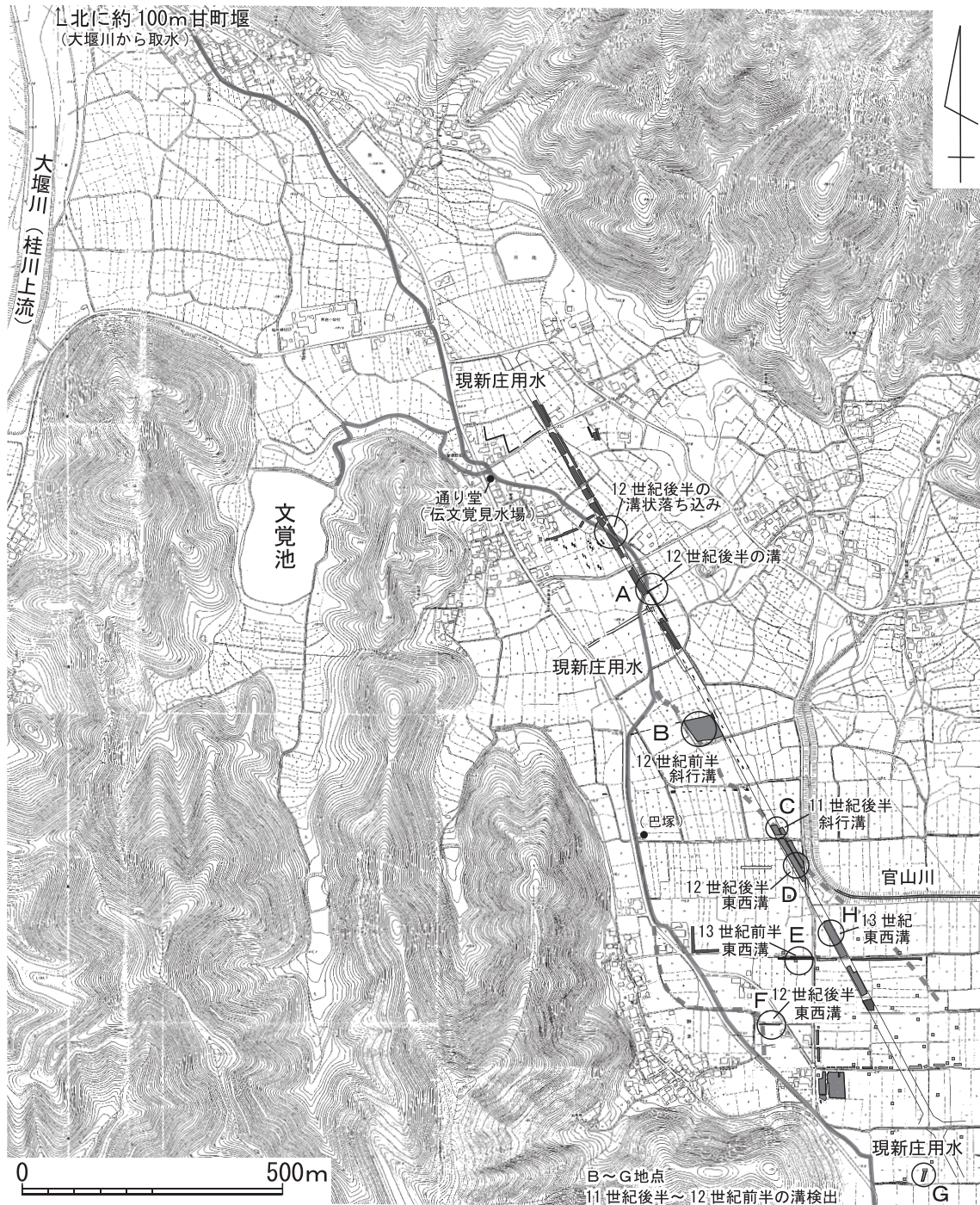
「新庄用水」と古代の用水路 今回の発掘調査の発端となったほ場整備の対象地域である八木町東部の平野部は、古代においては「刑部郷」とよばれ、荘園絵図として広く知られる「丹波国吉富荘絵図写」に描かれた「吉富荘」の9郷の一つである。室橋遺跡や野条遺跡の立地する八木町東部は、平安時代の伝承が多く残されている地域である。表2にみるように、この一帯は12世紀後半には清和源氏の所領であったものが、平家の知行を経て、その縁戚であった藤原成親が丹波国知行国主となり、私領化したとされる。成親は、承安4(1174)年に私領宇都郷に周辺5郷を



第53図 府営ほ場整備関連事業に伴う過去の調査地

加え、後白河院法華堂に寄進し、この時に「丹波国吉富庄絵図写」の原図が描かれたという。立荘時に「刑部郷」は「吉富新荘」として加えられ、野条遺跡・室橋遺跡を含む八木町のほぼ全域が新荘に含まれた。元暦元(1184)年には、僧文覚が神護寺の再興のため、後白河法皇に「吉富新荘」の寄進を求め、「刑部郷」は神護寺領となるが、『船井郡誌』によれば、その開発を主導した文覚が文治4(1188)年に新庄用水に繋がる灌漑用水を開削したとされる。

この地域における発掘調査で検出した平安時代後期から末期の灌漑用水路と推定される溝群の変遷については、過去の調査報告において詳細に述べたところである^(注5)。本報告では最後に、これ



第54図 野条・室橋遺跡の水路群と大堰川・文覚池との位置関係

までのほ場整備に関わる発掘調査で得られた成果をもとに、現在の新庄用水の原形となった平安時代末期における灌漑水路の復元を試みておきたい。

大堰川(桂川上流)の本流が大きく西へ迂回する当地域は、古来、水利灌漑が重要な課題であった。現在の新庄用水は、大堰川井堰の一つであり、取水堰を園部町越畑地区に設置し、約2kmを導水し船枝地区に至るもので、約200haの受益地区をもつ南丹波最大規模の井堰である。考古学的にみても、早くも弥生時代には、大堰川から導水した可能性が高い灌漑水路とみられる深さ2m以上の大規模な溝(室橋遺跡第17次調査)を確認している。奈良時代の溝群も各所で検出されていることから、水路の整備がこの時期からはじまったものと考えられる。平安時代には丹波国府の周縁に形成された国衙領として大規模な耕地開発の対象となり、それに伴う灌漑水路の整備が課題となったとみられる。

今回のほ場整備に関連する調査で、新庄用水との関わりで、特に重要な成果があったのは、室橋遺跡第17次調査であり、現在、機能している新庄用水の直下で12世紀後半の溝S D17203(第56図B地点)を検出したことである。また室橋遺跡第5次調査でも、新庄用水と平行する12世紀中頃の落ち込みを確認していることから(A地点)、室橋地区では、平安時代末期の溝群が現在の用水路のラインとほぼ重複、あるいは近いものであることが判明した。現在の新庄用水は、大堰川堰から直接導水するが、渇水期には西の文覚池(第55図)からも引水されることから、文覚池の開

付表2 「刑部郷」と「吉富荘」をめぐる関連年表

西暦	元号	主な出来事	備考
931～38	承平年間	丹波国船井郡下の九郷の一つとして、「刑部郷」がみえる。	『倭名類聚抄』
1024～45	万寿～寛徳年間	僧皇慶、「池上房」(現在の大日寺池上院とされる)造営。(丹波守は源章任、周辺は清和源氏の所領)	『谷阿闍梨伝』『四十帖決』
1159	平治元年	源義朝の私領「宇都郷」(京都市右京区京北)、平治の乱の敗北により平家の所領となる。	(「刑部郷」周辺は国衙領とみる説が有力)
1174	承安4年	丹波国知行国主藤原成親(平家の縁戚)、「宇都郷」に周辺5郷(神吉・八代・熊田・志摩・刑部等)を加え、「吉富荘」立荘。神吉・八代・熊田郷を「吉富本荘」に加え、刑部・志摩郷を「吉富新荘」とする。「吉富荘」を後白河法皇御願法華堂に寄進。 立券にあたり、「丹波国吉富荘絵図写」の原図作成(野条・室橋遺跡含む八木町のほぼ全域が新荘とされた)。	「僧文覚起請文」(平安遺文4892)文覚、1168年以降、勸進等により東寺・四天王寺・神護寺等復興はじめる。 真継正次氏所蔵絵図(戦国～江戸初期の写しとされる)
1177	治承元年	藤原成親、鹿ヶ谷事件で配流。「吉富庄」は平家領へ。	
1178	治承2年	文覚、伊豆配流(1174年)から許され、神護寺へ戻る。神護寺の本格的な再興に尽くす。	「僧文覚起請文」
1180～	治承4年～	源頼朝・木曾義仲挙兵。丹波国、一時、木曾義仲の知行。	巴御前の墓(野条地区伝承)
		「吉富本荘」は源頼朝の所領に、「吉富新荘」(刑部郷含む)は後白河院が領有する。	
1184	寿永3年	文覚の求めで、源頼朝「吉富本荘」を神護寺に寄進。	「僧文覚起請文」
1184	元暦元年	後白河院が「吉富新荘」寄進し、一円神護寺領となる。	「僧文覚起請文」
1188	文治4年	神護寺文覚による新庄用水の開鑿(伝承)。	『船井郡誌』(如城寺所蔵「室橋縁由」では治承元年(1177)5月とされる)
1199	正治元年	文覚、後鳥羽上皇に疎まれ、佐渡に配流。神護寺領は没収され、「吉富庄」は藤原範光の所領へ。	
1221	承久3年	承久の乱で藤原氏没官、鎌倉幕府の管領へ。	
1225	嘉禄元年	鎌倉幕府、「吉富荘」を神護寺に寄進。再び一円神護寺領となる。	



第55図 平安～鎌倉時代の検出遺構と現在の新庄用水

削もまた平安時代に遡る可能性あると言えよう。一方、野条地域を含む一帯で現在みられる条里型地割は、野条遺跡第10・12次調査地点を北限にしているが、この調査地の北部で条里型地割と斜交する溝を検出した。野条と室橋地区との境における室橋遺跡第11・13次調査では、11世紀後半～12世紀前半の溝SD11703(第56図C地点)を、また野条第10・12次調査で11世紀後半の溝SD203(D地点)を認している。これらの調査成果から、地割が改変される直前の時期には、北西から南東へ斜行する用水路が開削されたとみることができる。条里型地割に大規模に変更された12世紀後半以降の水路は、今回の第19次調査第4トレンチ(E地点)と第2トレンチ(F地点)で、東西方向の溝を検出したことから、現新庄用水に近い筏森山西麓に沿った南北のラインに付け替えられたものと推定される。このように、平安時代末期に行われた大規模な耕地と灌漑用水の整備に伴う開発が、現在この地でみられる景観の形成につながったものと言える。

室橋遺跡や野条遺跡の立地する八木町東部は、丹波でも平安時代の伝承が多く残されている地域として注目される。勸進聖として各地の開発に活躍した文覚の伝承もその一つであり、これまでの発掘調査の成果でも平安時代を中心に大規模な開発がなされたことが明らかになった。平安時代のこの地の領有権は、国家史とも連動するなかで大きく変遷しており、こうしたことが多くの伝承が残された背景となっているのであろう。平成7年度の第1次調査以来、19次にわたって実施された府営ほ場整備に関わる発掘調査の成果が、今後、地域史のさらなる解明と歴史学の発展に寄与し、多方で広く活用されることを願い、本報告を終えたい。

(高野陽子・古川 匠)

- 注1 加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定を行った。測定の結果、 5770 ± 40 年BP(2 σ の暦年代でBC 4720~4520年)という、おおそ縄文時代前期とされる分析値が得られた(測定ナンバー: Beta-314039)。分析は、株式会社古環境研究所に委託した。
- 注2 高野陽子「野条遺跡第10・12次 室橋遺跡第5次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第128冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2008
- 注3 前掲注2
- 注4 上島亨「池上院と神護寺・丹波国府-新史料の紹介と僧皇慶の活動をめぐって」(『郷土誌八木』第10号) 2000
- 注5 高野陽子・辻本和美「室橋遺跡第15・17次」(『京都府遺跡調査報告集』第139冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2010

(参考文献)

- 辻健二郎『南丹市内遺跡発掘調査報告書5(野条遺跡第16次)』(南丹市教育委員会) 2011
- 福島孝行「府営農業農村整備事業関係遺跡平成22年度発掘調査報告(野条遺跡第18次)」(『京都府埋蔵文化財調査報告書(平成22年度)』 京都府教育委員会) 2011
- 神村和輝ほか『神護寺領丹波国吉富荘故地調査報告書』(『八木町史編さん事業歴史資料調査報告書』第2集 八木町教育委員会) 2009
- 上島亨「丹波国府と吉富荘」(『京都と京街道-京都・丹波・丹後-』 吉川弘文館) 2002
- 平凡社地方資料センター編(『日本歴史地名大系26 京都府の地名』 平凡社) 1981

2. 京都第二外環状道路関係遺跡 平成21～23年度発掘調査報告

(1)長岡京跡右京第970・1007・1024次(西条地区)・下海印寺遺跡

1. はじめに

今回の発掘調査は、京都第二外環状道路建設事業に伴うもので、国土交通省近畿地方整備局の依頼を受けて実施した。道路は、大山崎ジャンクションから小泉川沿いに北上し、京都市西京区大原野を經由して京都縦貫自動車道に通じる。この路線の内、長岡京市域にかかる範囲を、平成15年度から当調査研究センターが発掘調査を行ってきた。本報告は、長岡京市下海印寺西条において平成21～23年度にかけて実施した調査成果について報告する。なお、平成20年度に実施した調査成果については既に報告したところであるが、出土遺物については今回新たに報告するものである。また調査地の表記については、長岡京跡の調査回数や各遺跡名のほかに、小字を地区名として使用してきた。今回報告する地区は西条地区にあたる。

調査地は、桓武天皇によって造営された長岡京跡の南西部付近にあたり、長岡京の条坊復元では右京七条四坊十一・十二町にあたる。また、小泉川左岸の段丘上に広がる縄文時代から中世の集落跡である下海印寺遺跡の南端にも位置する。

本報告は、岩松・引原・岡崎・高野が執筆し、文責については文末に記した。本報告で使用した国土座標は、日本測地系(第Ⅵ座標系)である。土層および土器の色調は、農林水産技術会議監修の『新版標準土色帖』を用いた。

現地調査・報告については、京都府教育委員会をはじめ長岡京市教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センターなどの関係各機関並びに職員のご指導・ご助言をいただいた。また、下海印寺自治会や地元の方々には多大なご協力を得ることができた。記して感謝します。

〔調査体制等〕

平成21年度調査 長岡京跡右京第970次調査(7ANOSJ-5)

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

調査担当者 調査第2課第2係長 森 正

同 主任調査員 松井忠春・引原茂治

同 専門調査員 竹井治雄・岡崎研一

同 調査員 村田和弘・奈良康正

調査場所 長岡京市下海印寺西条

現地調査期間 平成21年4月8日～平成22年2月19日

調査面積 4,000㎡

平成22年度調査 長岡京跡右京第1007次調査(7ANOSJ-6)

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸
調査担当者 調査第2課第2係長 森 正
調査第2課主幹調査第2係長事務取扱 石井清司
同 主任調査員 増田孝彦・中川和哉
同 専門調査員 岡崎研一
調査場所 長岡京市下海印寺西条
現地調査期間 平成22年9月2日～平成23年2月3日
調査面積 1,030㎡

平成23年度調査 長岡京跡右京第1024次調査(7ANOSJ-7)
現地調査責任者 調査第2課長 水谷壽克
現地担当者 調査第2課第2係長 岩松 保
同 専門調査員 岡崎研一
調査場所 長岡京市下海印寺西条
現地調査期間 平成23年4月6日
調査面積 30㎡

2. 位置と環境(第1図)

長岡京市は京都盆地の西南部に位置する。長岡京市域の東側を小畑川が、西側を小泉川が南東方向に流れ、ともに大山崎町で桂川に注ぐ。今回報告する下海印寺遺跡は、小泉川中流域の左岸低位段丘上に広がる遺跡である。同遺跡は旧石器時代から江戸時代にかけての集落遺跡で、その範囲は東西700m、南北600mである。今回の調査地は、その範囲の南東部にあたる。

以下、長岡京市と大山崎町に流れる小泉川流域に所在する主要遺跡を取り上げ、時代毎に概観したい。

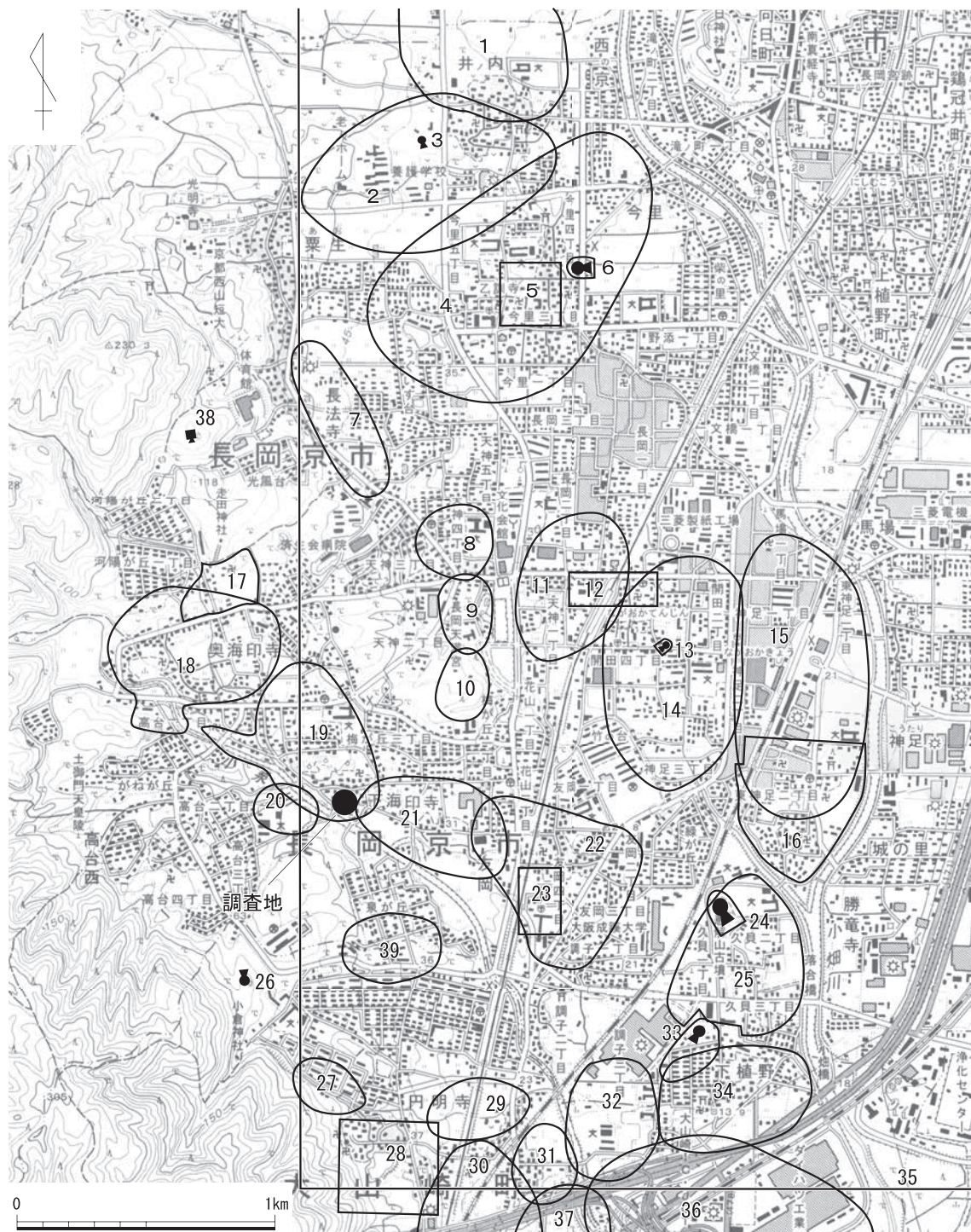
旧石器時代には、南栗ヶ塚遺跡で石器の集中部や接合資料が発見された。

縄文時代以降になると、小泉川周辺の段丘や低位段丘上に集落遺跡が展開する。

縄文時代の遺跡としては、草創期には下海印寺遺跡や久保川遺跡、早期には松田遺跡、前期には南栗ヶ塚遺跡、中期には友岡遺跡や伊賀寺遺跡、後期には伊賀寺遺跡や下海印寺遺跡がある。前期以降の遺跡では、竪穴式住居跡や土坑・溝などの遺構が確認されている。このように、小泉川流域には縄文時代の各時期の集落が分布していることから、小泉川流域が居住に適した環境にあり、流域の中で場所を移しながら継続的に集落が営まれたものと考えられる。

弥生時代では、南栗ヶ塚遺跡で前期末の土器が出土したほか、中期前葉の方形周溝墓が検出されている。下海印寺遺跡では中期の溝が、脇山遺跡では中期前半の遺構が検出されている。また、下植野南遺跡では方形周溝墓を主体とする中期後半の墓地がみつまっている。

古墳時代の各時期の代表的な古墳を挙げると、前期には長法寺南原古墳や鳥居前古墳が築造さ



- | | | | | |
|-------------|-----------|-------------|------------|------------|
| 1. 上里遺跡 | 2. 井ノ内遺跡 | 3. 井ノ内稲荷塚古墳 | 4. 今里遺跡 | 5. 乙訓寺 |
| 6. 今里車塚古墳 | 7. 長法寺遺跡 | 8. 東代遺跡 | 9. 西陣町遺跡 | 10. 天神山遺跡 |
| 11. 開田城ノ内遺跡 | 12. 開田城跡 | 13. 塚本古墳 | 14. 開田遺跡 | 15. 神足遺跡 |
| 16. 中世勝龍寺城跡 | 17. 海印寺跡 | 18. 奥海印寺遺跡 | 19. 下海印寺遺跡 | 20. 西山田遺跡 |
| 21. 伊賀寺遺跡 | 22. 友岡遺跡 | 23. 鞆岡廃寺 | 24. 恵解山古墳 | 25. 南栗ヶ塚遺跡 |
| 26. 鳥居前古墳 | 27. 西法寺遺跡 | 28. 円明寺跡 | 29. 久保川遺跡 | 30. 百々遺跡 |
| 31. 金蔵遺跡 | 32. 松田遺跡 | 33. 境野古墳群 | 34. 宮脇遺跡 | 35. 長岡京跡 |
| 36. 下植野南遺跡 | 37. 算用田遺跡 | 38. 長法寺南原古墳 | 39. 脇山遺跡 | |

第1図 調査地ならびに周辺主要遺跡分布図(国土地理院 1/25,000 京都西南部)

れ、中期には境野古墳群や前方部に刀剣など多量の鉄器を副葬していた恵解山古墳が、後期には周濠内から木製の埴輪などが出土した今里車塚古墳が築かれる。

集落遺跡としては、友岡遺跡や下海印寺遺跡において後期の集落が見つかっており、今里遺跡や開田城ノ内遺跡では後期の段階に集落が大きく拡大することが判明している。また、大山崎町内の古墳時代の集落遺跡を見ると、後期には、下植野南・松田・算用田・金蔵・宮脇遺跡を包括する範囲で竪穴式住居跡が見つかっており、乙訓地域の中でも傑出した一大集落が営まれている。その後の後期後半には、今里・井ノ内・開田城ノ内・神足・友岡・伊賀寺遺跡で集落跡が確認されている。

飛鳥時代には、法起寺式伽藍配置と想定される乙訓寺が創建される。また、長岡京市と大山崎町との境界付近には鞆岡廃寺があり、瓦が出土している。

奈良時代には、神亀2(725)年に行基によって山崎橋が築かれ、天平3(731)年には、行基が布教活動の拠点にした山崎院が建てられる。また、疫病流行や藤原広嗣の乱などが起こる中、国分寺・尼寺が建立される。

延暦3(784)年、桓武天皇により長岡京が造営され、平城京から遷都される。長岡京遷都に伴って、道路や港の整備が行われる。長岡京初期の建物は、難波宮から移設されており、その際に港(山崎津)で荷揚げが行われ造営されたようである。

延暦13(794)年、桓武天皇は長岡京を廃し、平安京に遷都する。この時、久我暲と西国街道の道路が整備されたと考えられている。条里地割を斜めに横切る久我暲は、平安京の羅城門に続く道であり、西国街道は、町の山手を北へ延びる道で平安京に通じる。廃都後の長岡京域は水田へと変わっていく。

この頃、西山山地の麓には多くの寺院が建立されたようである。下海印寺・奥海印寺の地名の基となった海印寺もその一つである。海印寺は、嘉祥4(851)年に長岡京市奥海印寺明神前・大見坊付近に建立され、東大寺の末寺、華嚴宗の道場として栄えた。その場所は定かではないが、十の子院が造られたようである。現在、その一院である寂照院が残っている。その後、海印寺は定額寺となり、国家の庇護を受けるようになるが、平安時代末期には当時の摂政であった藤原基房の祈祷所として摂関家に寄進される。鎌倉時代には、文永2(1265)年に院宣が出され、東大寺別院の尊勝院の末寺となる。室町時代には、寂照院を残して一山焼亡し、その栄華は幕を閉じることとなる。^(注2)

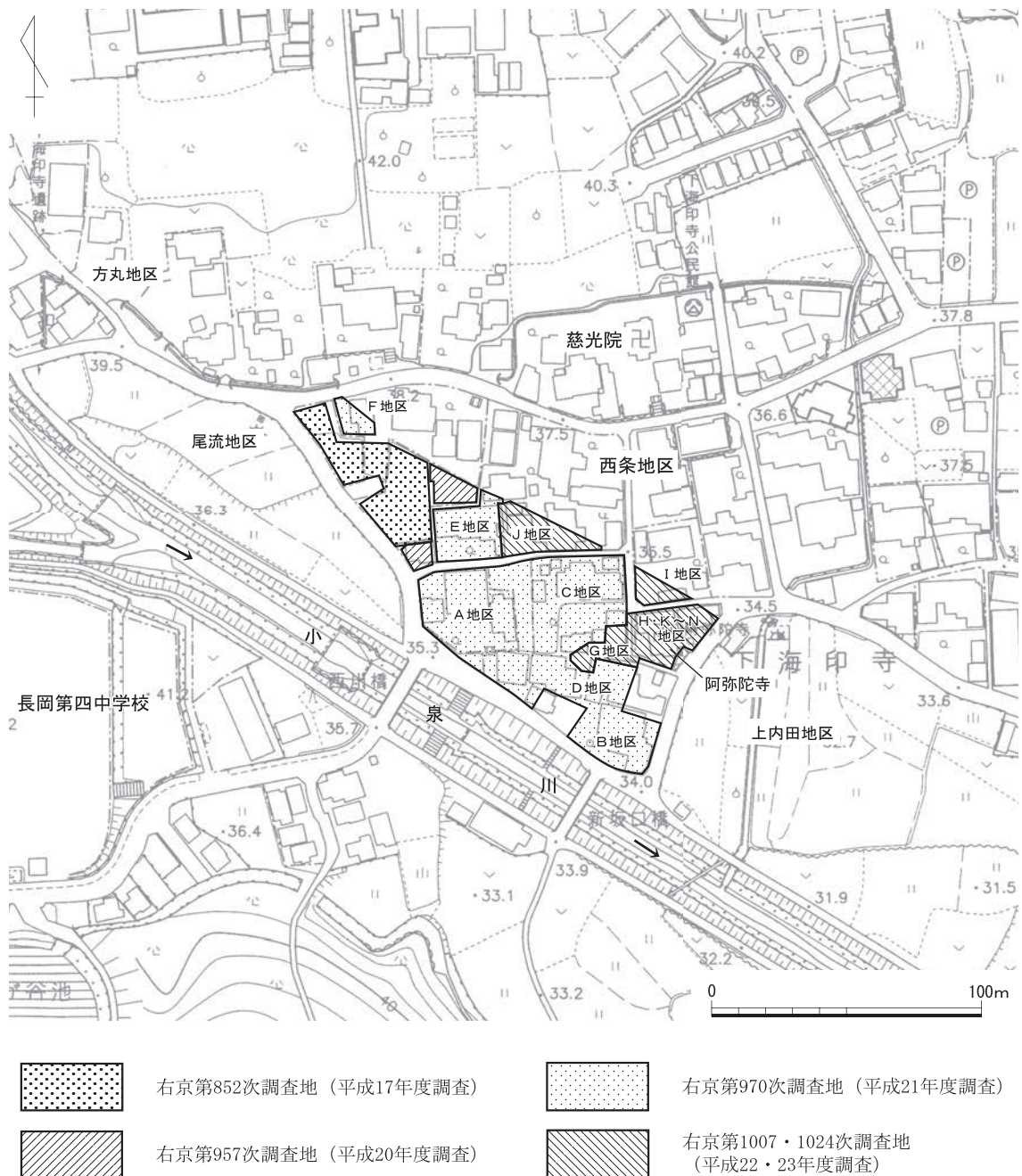
(岡崎研一)

3. 調査経過(第2図)

平成20年度に右京第956次調査として、西条地区の東半分を対象に調査を実施した。^(注3) その結果、遺構面が2面存在し、古墳時代から江戸時代にかけての遺構が存在することが明らかになった。この成果をもとに、平成21年度に右京第970次調査、平成22年度に右京第1007次調査、平成23年度に右京第1024次調査を実施した。

調査対象地は広範囲におよび、道路によって数か所に分断されている。調査も分割して行う必要があり、そのため、アルファベットを付して地区名を設定した。調査は、工事の進展に合わせて調査区を順次設定して実施し、右京第970次調査としてA～F地区を、右京第1007次調査としてG～J地区を、右京第1024次調査としてK～N地区を調査した。遺構番号は地区毎に付したため、遺構が地区を越えて広がる場合には、複数の遺構番号がつくものがある。また、掘立柱建物跡や柵列については、構成される柱穴のもっとも若い遺構番号を付した。

各遺構の詳細については、時代別に報告する。

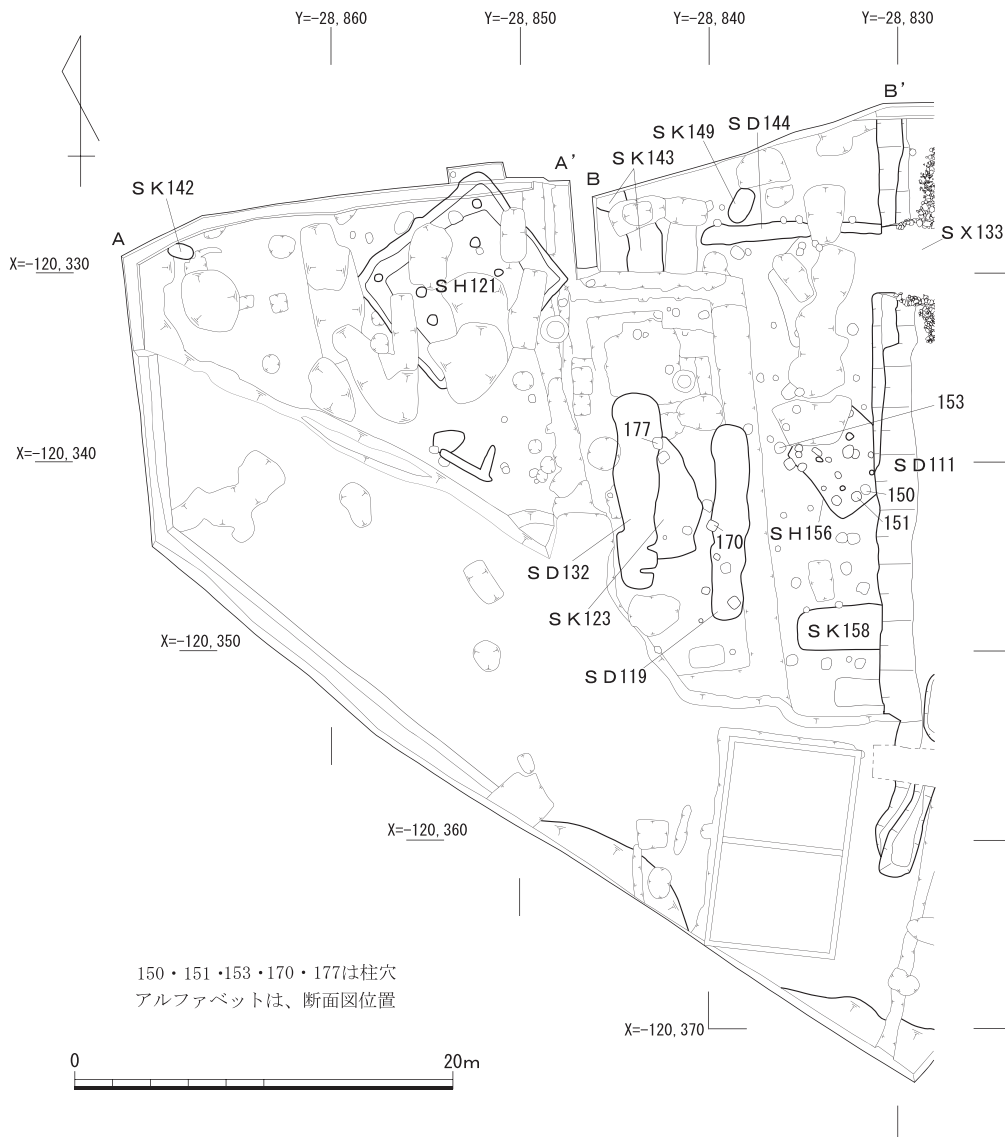


第2図 調査地位置図(G・H・K～N地区の詳細については第12図参照)

4. 層序と調査概要

今回報告する調査地の大半は、西条地区の中央部から南東部にかけて広がっており（A～E・G～N地区）、北西部分にも一部調査地がある（F地区：第2図）。調査前はすべて宅地であった。発掘調査により検出した各地区の遺構面の標高は、F地区が37.0m前後、E地区がおよそ36.5m、A地区がおよそ36.2mで、南北方向の比高は0.8mほどである。東西方向の比高は、西端のA地区が36.2m、C地区ではおよそ35.1m、H地区東端ではおよそ34.2m、B地区南端ではおよそ33.8mで、比高は2.4mほどである。F地区とB地区南端では比高差3.2m、E地区とB地区南端では比高差2.7mを測る。このように、西条地区では北西部が高く、南東方向に下る地形である。

（1）A地区（第3・4図） 調査地北側の土層断面から、A地区東側では、にぶい黄色土（第15層）上面から江戸時代陶磁器を多量に包含する溝SD89（第60図）が掘り込まれることから、第15層の上面が江戸時代の遺構面になる。ただし、江戸時代の遺構は良好な状態では残っていなかった。A地区西側では第15層が認められないことから、江戸時代以降に大きく削平されているものと想

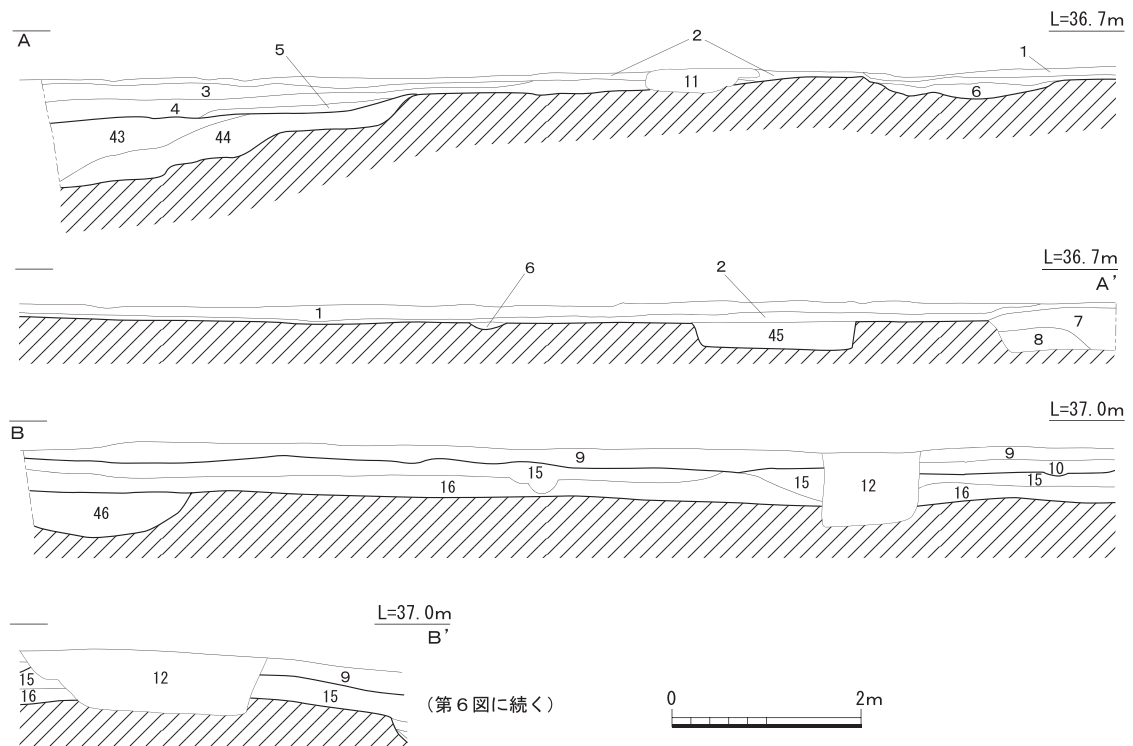


第3図 A地区遺構配置図

定された。また、調査地西側では、右京第957次調査地と同様に西側を下る地形を検出した。傾斜地には、褐灰色礫土(第43層)とにぶい褐色土(第44層)が堆積していた。出土遺物はなかったが、北側の第852・957次調査でも小泉川に向けて下る地形が確認されており、この斜面を埋める包含層中から庄内併行期の遺物が出土していることから、古墳時代初頭の段階には小泉川に向けて下る地形をなしていたと考えられる。また、A地区南半分は整地層(第9層)を取り除くと黄褐色粘質土の地山となった。顕著な遺構は検出できなかったが、土層の観察からこの地区は大きく削平を受けているものと考えられる。A地区北半分には、現代住居に伴う攪乱が数多くあったが、攪乱を受けていない部分で、古墳時代初頭の竪穴式住居跡S H121、土坑S K123、古墳時代後期の竪穴式住居跡S H156、長岡京期の溝S D119・132を検出した。いずれも黄褐色粘質土(地山)の上面で確認した。

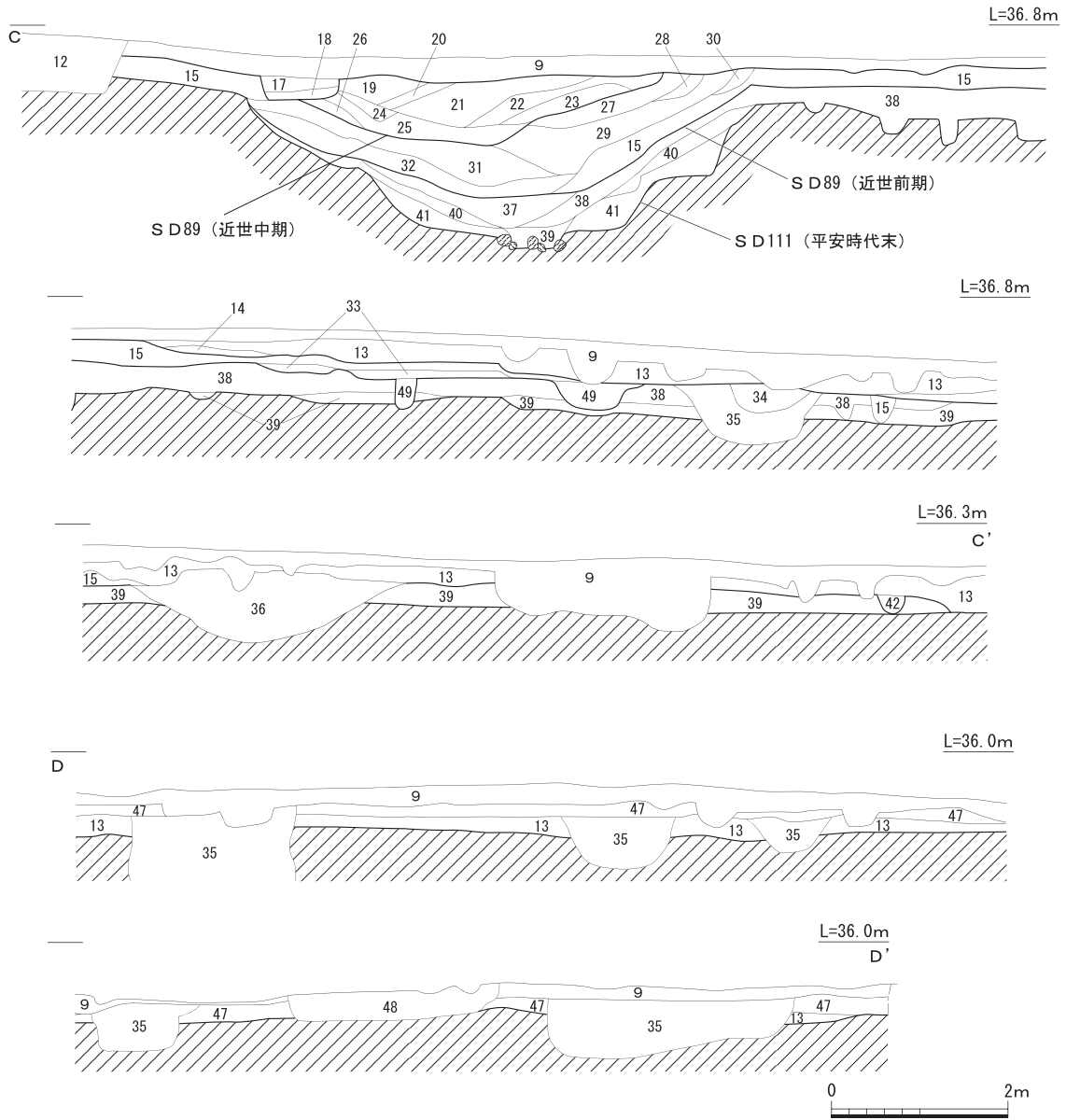
(2) C地区(第5・6図) A地区の東側、B・D地区の北側をC地区として調査した。この地区は、後述のように、平安時代末期に築かれた屋敷地の南西部あたる。

この地区では、にぶい黄色土(第15層)および地山である黄褐色粘質土の上面で遺構を検出した。前者は江戸時代以降のもので、後者は古墳時代後期から鎌倉時代のものである。検出した遺構は、第60図の溝S D89や柱穴群が江戸時代以降のもので、第5図の遺構群は古墳時代から鎌倉時代の



- | | | |
|-----------------------|-----------------------|-------------------------|
| 1. 盛土 | 8. 灰黄褐色砂質土 <10YR 5/2> | 16. 黄褐色土(砂質) <2.5Y 5/4> |
| 2. 整地土 | 9. 暗灰黄色土 <2.5Y 5/2> | 43. 褐灰色礫土 <7.5YR 4/1> |
| 3. 灰黄褐色砂質土 <10YR 5/2> | 10. コンクリート | 44. にぶい褐色土 <7.5YR 5/3> |
| 4. 灰黄色砂質土 <10YR 6/2> | 11. 根 | 45. 褐灰色砂質土 (S H121埋土) |
| 5. 明黄褐色土 <10YR 7/6> | 12. 攪乱 | 46. 黒褐色土 <7.5YR 3/2> |
| 6. 暗灰黄褐色礫土 <2.5Y 5/2> | 15. にぶい黄色土 <2.5Y 6/4> | (小石混入) |
| 7. 橙色砂礫 <2.5YR 6/8> | | |

第4図 A地区土層断面図(土層図の位置は第3図参照)

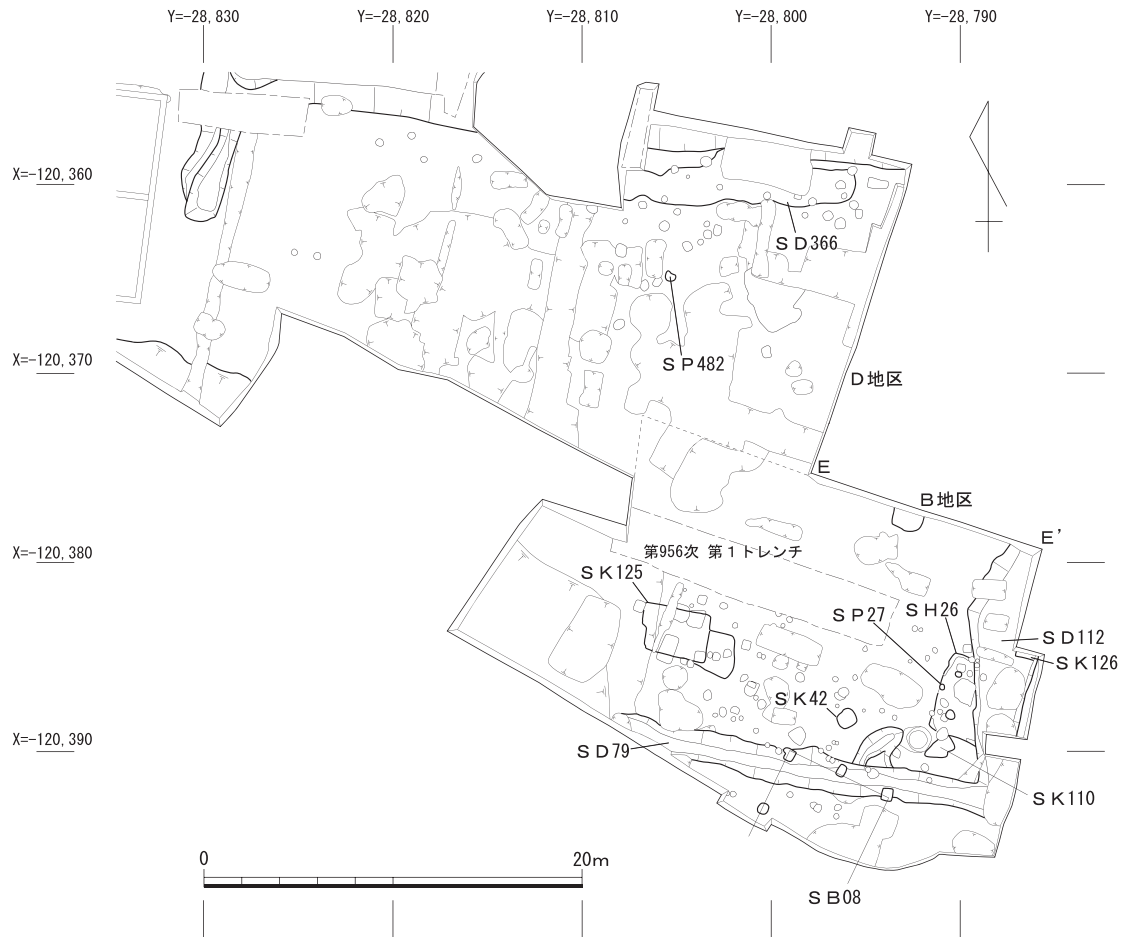


- | | | |
|--|--|--|
| 9. 暗灰黄色土 (2.5Y 5/2) | 24. 灰黄色砂質土 (2.5Y 6/2)
(焼土・壁土混入) | 36. にぶい褐色土 (7.5Y 5/3)
(拳大の礫混入) |
| 12. 攪乱 | 25. 黄褐色土 (2.5Y 5/3)
(拳大～人頭大の石混入) | 37. 暗褐色礫土 (10YR 3/3)
(人頭大～小石を多量に含む) |
| 13. 灰黄色土 (2.5Y 6/2) | 26. 灰黄色砂質土 (2.5Y 6/2)
(焼土・壁土混入) | 38. 黒褐色土 (7.5YR 3/2)
(小石混入) |
| 14. 灰黄色砂質土 (2.5Y 6/2)
(焼土・壁土混入) | 27. 黄褐色土 (2.5Y 5/3)
(拳大～人頭大の石混入) | 39. 明黄褐色礫土 (10YR 6/6) |
| 15. にぶい黄色土 (2.5Y 6/4)
(やや砂質) | 28. 黄褐色砂礫土 (2.5Y 5/3) | 40. 黒褐色土 (2.5Y 3/1)
(礫混入) |
| 17. 灰褐色礫土 (7.5YR 6/2) | 29. 暗灰黄色砂質土 (2.5Y 5/2)
(2cm～拳大の石混入) | 41. 黒褐色砂質土 (2.5Y 3/1) |
| 18. 灰黄色砂質土 (2.5Y 6/2)
(焼土・壁土混入) | 30. 褐色土 (7.5YR 4/3) | 42. オリーブ褐色土 (2.5Y 4/3) |
| 19. 暗灰黄色土 (2.5Y 4/2)
(炭混入) | 31. 灰黄色土 (2.5Y 6/2) | 47. 灰黄色砂質土 (2.5Y 6/2)
(焼土・壁土混入) |
| 20. 灰黄色砂質土 (2.5Y 6/2)
(焼土・壁土混入) | 32. にぶい黄色土 (2.5Y 6/4)
(壁土若干混入) | 48. コンクリート |
| 21. 暗灰黄色土 (2.5Y 4/2) | 33. 灰黄褐色土 (10YR 4/2) | 49. 黄灰色土 (2.5Y 6/1)
(やや砂質) |
| 22. 暗灰黄色砂質土 (2.5Y 5/2)
(2cm～拳大の石混入) | 34. 黄橙色礫土 (10YR 8/6) | |
| 23. 灰黄色砂質土 (2.5Y 6/2)
(焼土・壁土混入) | 35. 黄橙色土 (10YR 8/6) | |

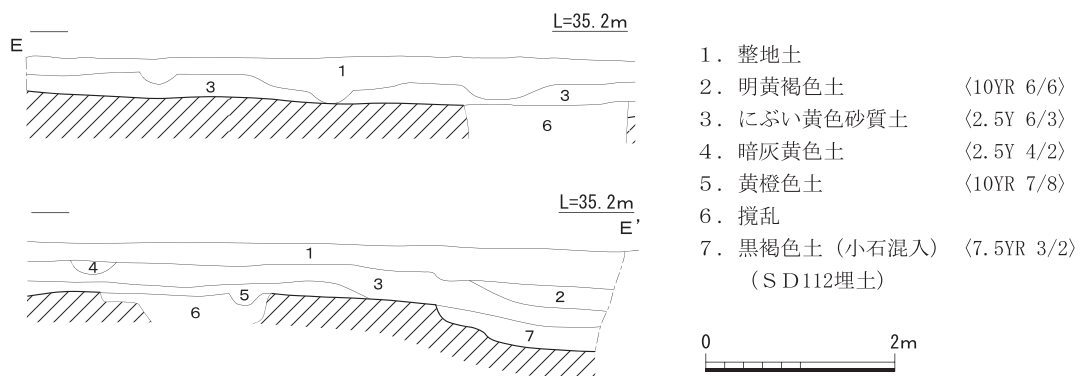
第6図 C地区土層断面図(土層図の位置は第5図参照)

在の道路に沿う形で微高地が分布し、小泉川に沿って湿地帯が認められるが、竪穴式住居跡はその微高地上で検出されている。

(4) D地区(第7図) B地区とC地区をつなぐ形で設定した。地表下には明黄褐色土層、にぶい黄色砂質土層が堆積しており、礫混じり黄褐色粘質土(地山)まで掘削して、精査を行った。精査の結果、長岡京期とみられる東西溝 S D366を検出することができた。その他数十か所で柱穴を検出したが、掘立柱建物跡などを復元するには至らなかった。



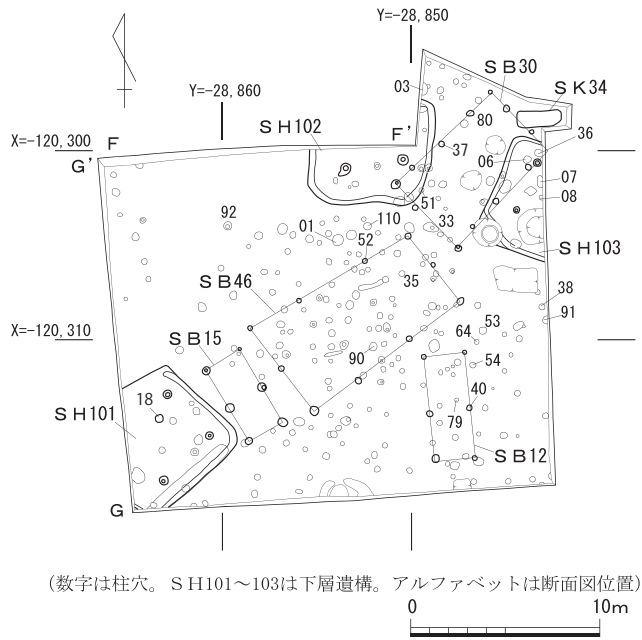
第7図 B・D地区遺構配置図



第8図 B地区土層断面図(土層図の位置は第7図参照)

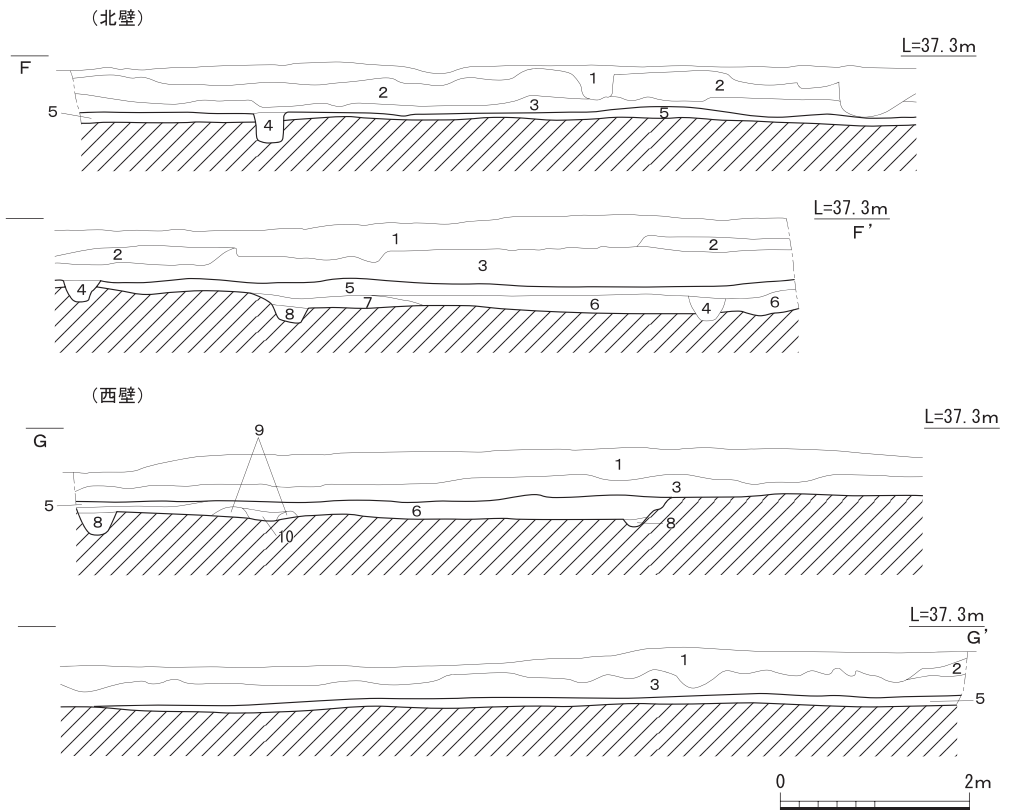
(5) E地区(第9・10図) A地区北側に設定した地区で、第852・957次調査地に隣接する。この地区では、遺構面が2面存在した。上層の遺構面は褐色礫土(第5層:山砂利を敷き叩きしめた整地土)の上面で、柱穴や土坑など中世の遺構を検出した。地区南西部では後世の削平により整地土は認められなかった。下層の遺構面はさらに10cm程下げた礫混じりの黄褐色土(地山)の上面で、竪穴式住居跡など古墳時代の遺構を検出した。

中世の遺構には掘立柱建物跡4棟(SB12・15・30・46)、土坑墓1基(SK34)、柱穴群がある。柱穴の中には、土師



(数字は柱穴。SH101~103は下層遺構。アルファベットは断面図位置)

第9図 E地区遺構配置図



- | | | |
|-----------------------------------|--|--------------------------------------|
| 1. 盛土・攪乱 | 5. 褐色礫土 (10YR 4/4)
(礫を多く含む。山砂利を敷き、叩きしめた整地土) | 8. 暗褐色粘質土 (10YR 3/4)
(4~6cm大の礫含む) |
| 2. にぶい黄褐色土 (10YR 4/3) | 6. 黒褐色粘質土 (10YR 2/2)
(4~5cm大のれきを含む) | 9. 赤褐色焼土 (10R 4/4)
(焼けた小石を含む) |
| 3. 褐色土 (10YR 4/6)
(2~3cm大の礫含む) | 7. 黒褐色粘砂土 (10YR 2/2)
(4~5cm大のれきを含む) | 10. 暗赤色土 (10R 3/6)
(焼土塊を含む) |
| 4. 暗褐色土 (10YR 3/3) | | |

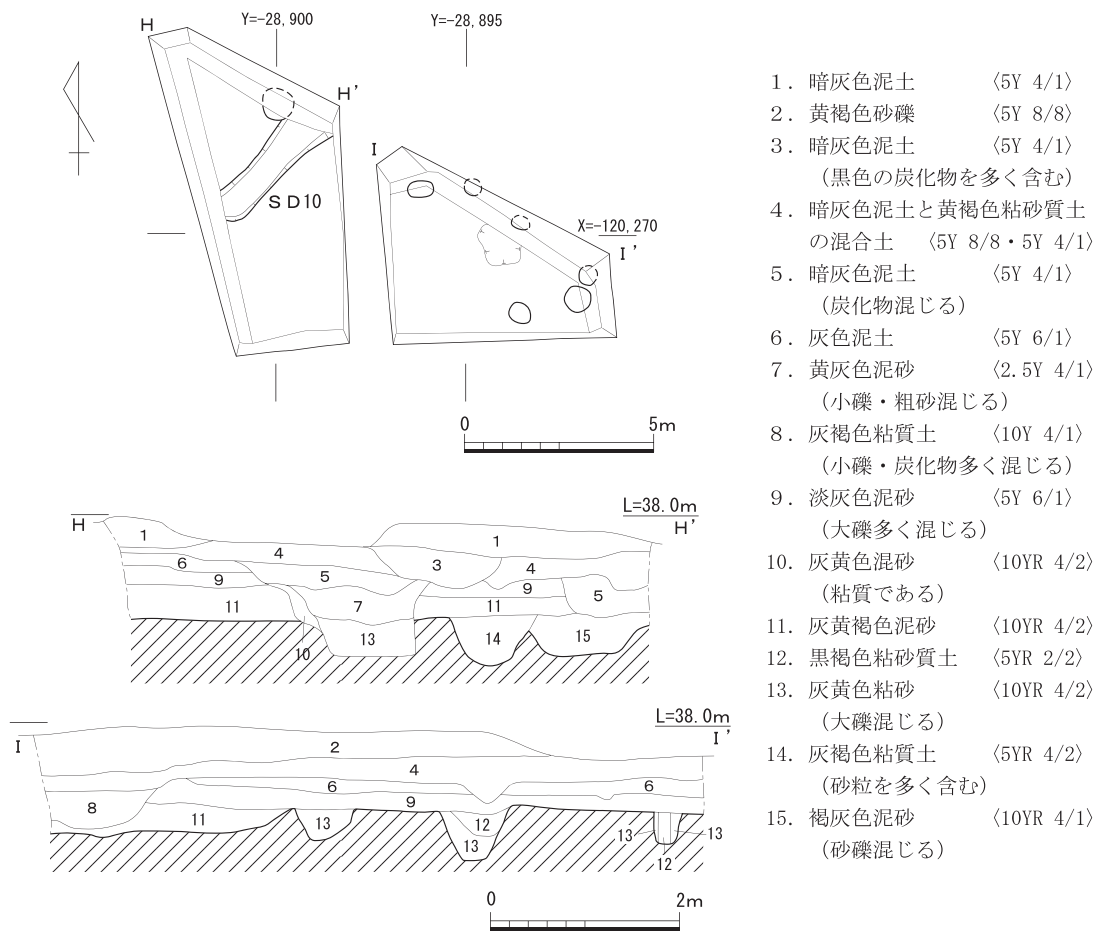
第10図 E地区土層断面図

器皿や瓦器碗が完形に近い状態で埋められていたものもある。また、古墳時代の遺構には竪穴式住居跡 S H101～103があり、出土遺物から古墳時代後期の遺構と考えられる。S H103の東半分は J 地区で確認しており、J 地区では S H79としている。

(6) F 地区(第11図) 西条地区でもっとも北側に位置する地区である。灰色泥土(第6層)や淡灰色泥砂(第9層)を掘り込む攪乱は江戸時代のものである。その下に堆積する灰黄褐色泥砂(第11層)は出土遺物がなく時期不明である。この地区では後世の攪乱があり、黄褐色土(地山)の上面で柱穴や溝を確認した。出土遺物がなく時期については不明である。南側の右京第852次調査地北端でも柱穴を数か所で検出していることから、F 地区で検出した柱穴はそれに伴う可能性がある。

(7) G 地区(第12図) 右京第970次調査の C・D 地区間を G 地区として、電柱設置か所付近については L～N 地区として調査を実施した。G と H 地区の境は L 地区東側の道である。

G 地区には、多数の攪乱があり、それらの間から柱穴や溝跡などを検出した。遺物包含層である褐灰色土(第13図第19層)を除去すると黄褐色土の地山となる。遺構は地山の上面で検出した。この地区では、北側の H 地区から南に続く掘立柱建物跡 S B01に伴う柱穴や、南側の C 地区から



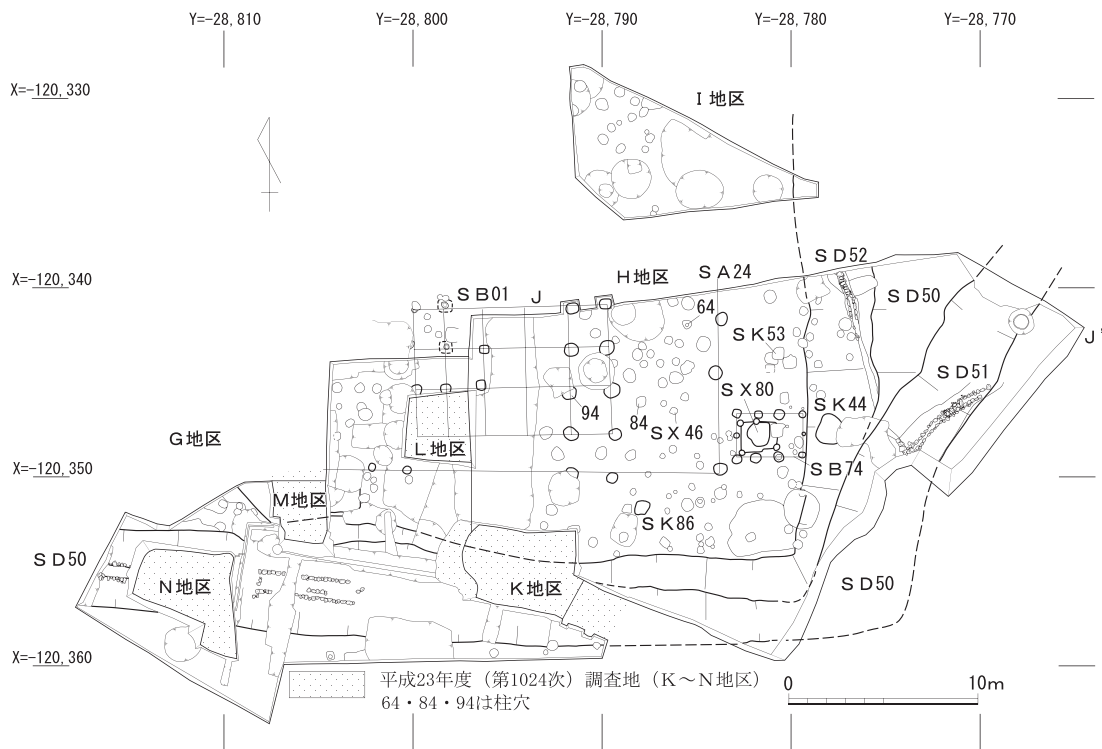
第11図 F 地区遺構配置図・土層断面図

続く江戸時代の溝と平安時代末期の堀を検出した。江戸時代の溝はS D21とし、平安時代の堀はS D50とした。

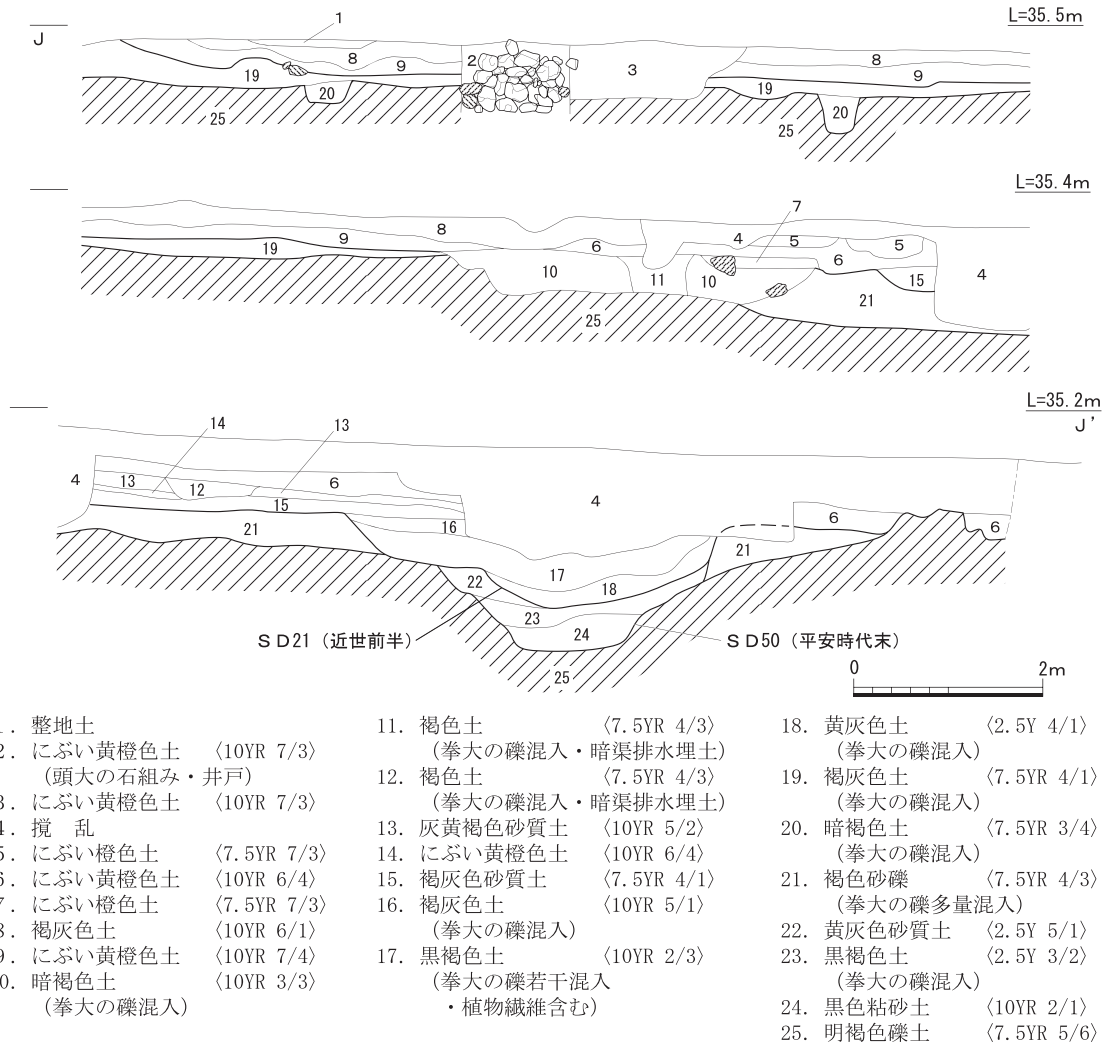
(8) H地区(第12・13図) 調査対象地東端にあたる。阿弥陀寺が建っていた場所である。地区の南東部には、農業用水として利用されていた田苗池がある。地区北側で土層断面を観察したところ、遺構面は2面存在した。第1面は褐灰色土(第19層)や褐色砂礫(第21層)の上面で、江戸時代の遺構を、第2面は地山である明褐色礫土の上面で、平安時代末期から中世にかけての遺構を検出した。江戸時代の遺構としては、地区の南側をG地区から田苗池の方向に延び、池付近で大きく屈曲して北から北東方向に延びる溝S D21を検出した(第60図)。平安時代末期から中世の遺構としては、地区北西部で掘立柱建物跡S B01を、その建物を囲む柵列S A24を、櫓的な構造物の可能性が高いS B74、皇朝十二銭を埋納していた土坑S X46、土坑S K44・86などがある。また、南辺を画する堀S D50と柵列S A24の間には褐色土(第22・24層)と褐灰色土(第23層)が0.2mの厚さで堆積しており(第39図)、この層から瓦器片や土師器片が多量に出土した。遺物や土層の堆積状況からS D50が埋まっていく過程で堆積した層であると考えられ、上面から掘り込まれるS K86(第59図)などは鎌倉時代の遺構と考えた。

にぶい黄橙色土(第2・3層)は井戸本体とその裏込め土である。また、地区東側では溝S D21を切る形で、2列の石列からなる溝S D51・52を検出した(第60図)。これは、明治時代から現代にかけての阿弥陀寺の東限に沿う位置にあることから、現代に非常に近い遺構と判断される。

(9) I地区(第12図) H地区北側に設定した地区である。多くの攪乱がある中で、地区西側でわずかな数の柱穴を検出し、東端近くで東側を下る地形の落ちを確認した。柱穴群は掘立柱建物



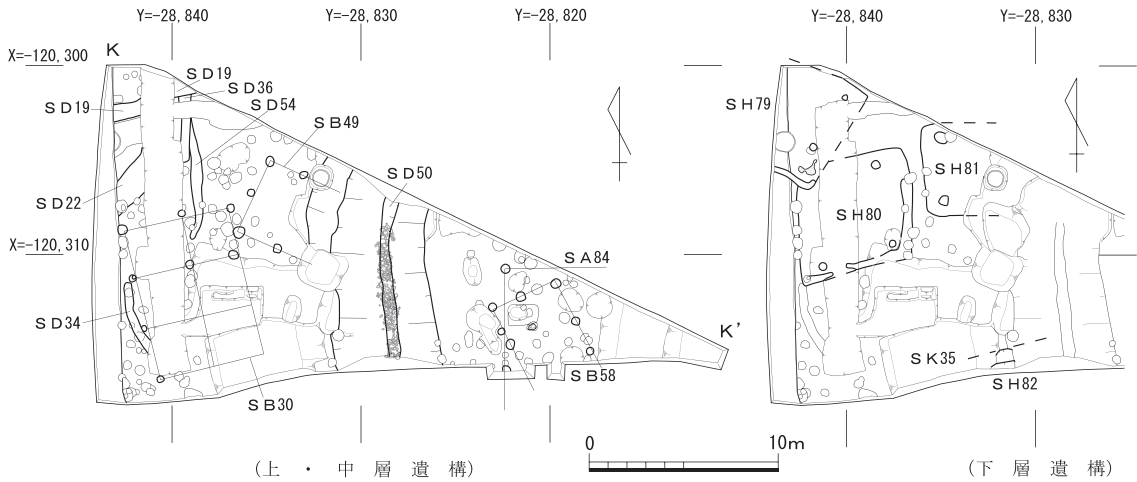
第12図 G・H・I地区遺構配置図



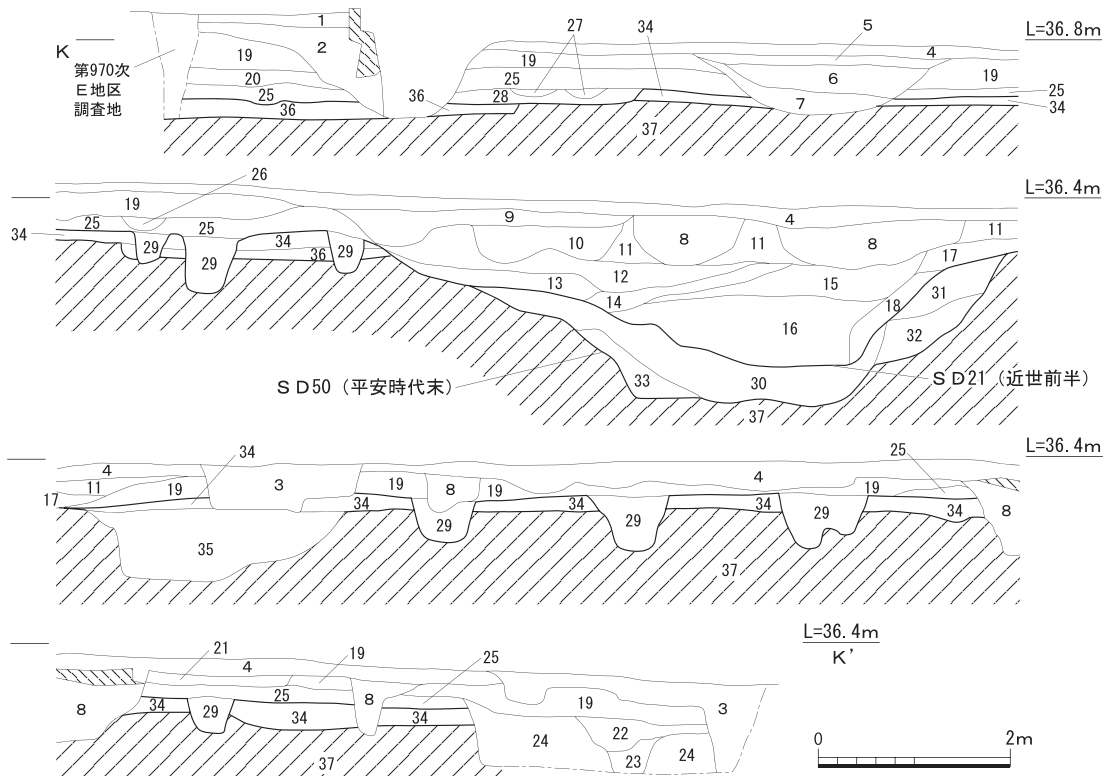
第13図 H地区土層断面図

跡に復元できなかった。東端で検出した地形の斜面は、H地区南東コーナー部から続くSD50の西肩部にあたる。H地区の土層断面と同じであるため、図示していないが、基本的な層位は、褐灰色土(第8層)・にぶい黄橙色土(第9層)・黄褐色礫土(地山)となる。

(10) J地区(第14・15図) C地区の北側で、E地区の東側に設定した調査区である。この地区では、遺構面を3面確認した。第1面は明黄褐色砂質土(第19層)上面で、江戸時代の遺構を、第2面は灰黄褐色土(第34層)上面で、平安時代末期から中世にかけての遺構を、第3面は暗褐色礫土(第37層)で、古墳時代の遺構をそれぞれ検出した。江戸時代の遺構としては、地区中央を縦断する溝SD20・21、土坑SK35がある。平安時代末期から中世の遺構は、C地区の屋敷跡から続く遺構として、堀SD50、柵列SA84である。その他、掘立柱建物跡SB30・49・58、溝SD19・34・36・54などがある。これらの遺構を第14図の上・中層遺構として図示した。古墳時代の遺構としては、竪穴式住居跡SH79~82があり、第14図の下層遺構として図示した。竪穴式住居跡SH82は古墳時代初頭、竪穴式住居跡SH79~81は古墳時代後期のものである。地区の東側では、灰黄褐色土(第34層)を除去し精査したが、下層では遺構は検出できなかった。



第14図 J 地区遺構配置図



- | | | | | |
|------------------|---------------|-------------|--------------|-------------|
| 1. 整地土 | 13. 礫混じり褐色砂質土 | 〈10YR 4/4〉 | 27. 明赤褐色土 | 〈5YR 5/6〉 |
| 2. 埋土 | 14. にぶい黄褐色砂質土 | 〈10YR 4/3〉 | (焼土) | |
| 3. 攪乱 | 15. 褐色砂礫土 | 〈10YR 4/6〉 | 28. 暗赤褐色土 | 〈5YR 3/2〉 |
| 4. 褐灰色砂質土 | 〈10YR 5/1〉 | | 29. にぶい黄褐色礫土 | 〈10YR 5/3〉 |
| 5. 褐灰色土 | 〈7.5YR 5/1〉 | | (拳大の礫混入) | |
| 6. 橙色土 | 〈7.5YR 7/6〉 | | 30. 暗褐色砂礫土 | 〈10YR 3/3〉 |
| (拳大～頭大の礫多く混入) | | | (細砂混入) | |
| 7. 明褐色砂質土 | 〈7.5YR 5/6〉 | | 31. 暗褐色砂礫土 | 〈10YR 3/3〉 |
| 8. 攪乱 | 17. 褐灰色砂質土 | 〈7.5YR 5/1〉 | 32. 暗褐色礫土 | 〈10YR 3/3〉 |
| 9. 明黄褐色砂質土 | 〈10YR 7/6〉 | | 33. 黒褐色砂質土 | 〈10YR 3/1〉 |
| 10. 攪乱 | 18. 黄灰色細砂 | 〈2.5Y 5/1〉 | 34. 灰黄褐色土 | 〈10YR 4/2〉 |
| 11. にぶい黄褐色砂質土 | 〈10YR 5/3〉 | | 35. 攪乱 | |
| 12. 灰褐色砂質土 | 〈7.5YR 4/2〉 | | 36. 黒褐色土 | 〈7.5YR 3/2〉 |
| (3cm大の礫混入) | | | (拳大の礫混入) | |
| 19. 明黄褐色砂質土 | 〈10YR 7/6〉 | | 37. 暗褐色礫土 | 〈10YR 3/3〉 |
| 20. 褐灰色砂礫土 | 〈10YR 4/1〉 | | | |
| 21. 明赤褐色土 (焼土) | 〈5YR 5/6〉 | | | |
| 22～24. 攪乱 | | | | |
| 25. 灰褐色砂礫土 | 〈7.5YR 4/2〉 | | | |
| (3cm大の礫混入) | | | | |
| 26. 橙色土 (焼土・炭混入) | 〈5YR 6/6〉 | | | |

第15図 J 地区土層断面図

(11) K～N地区(第12図) 平成23年度に右京第1024次調査として調査を実施した地区である。調査場所は4か所あり、東からK～N地区とした。K・L地区では、G・H地区で確認していた配管に伴う攪乱が続いているのが認められた。その攪乱は堀S D50の底面をも掘り抜いており、遺構を検出するには至らなかった。M地区では遺物包含層である褐灰色土を除去すると、黄褐色土の地山を掘り込んで竪穴式住居跡の一隅を検出した。この住居跡は、C地区南東隅で検出した竪穴式住居跡S H351の南半分にあたる。N地区では、その大半が平安時代の堀S D50と江戸時代の溝S D21が占め、両遺構は第38図と同様の土層の堆積が認められた。

(岡崎研一)

5. 検出遺構

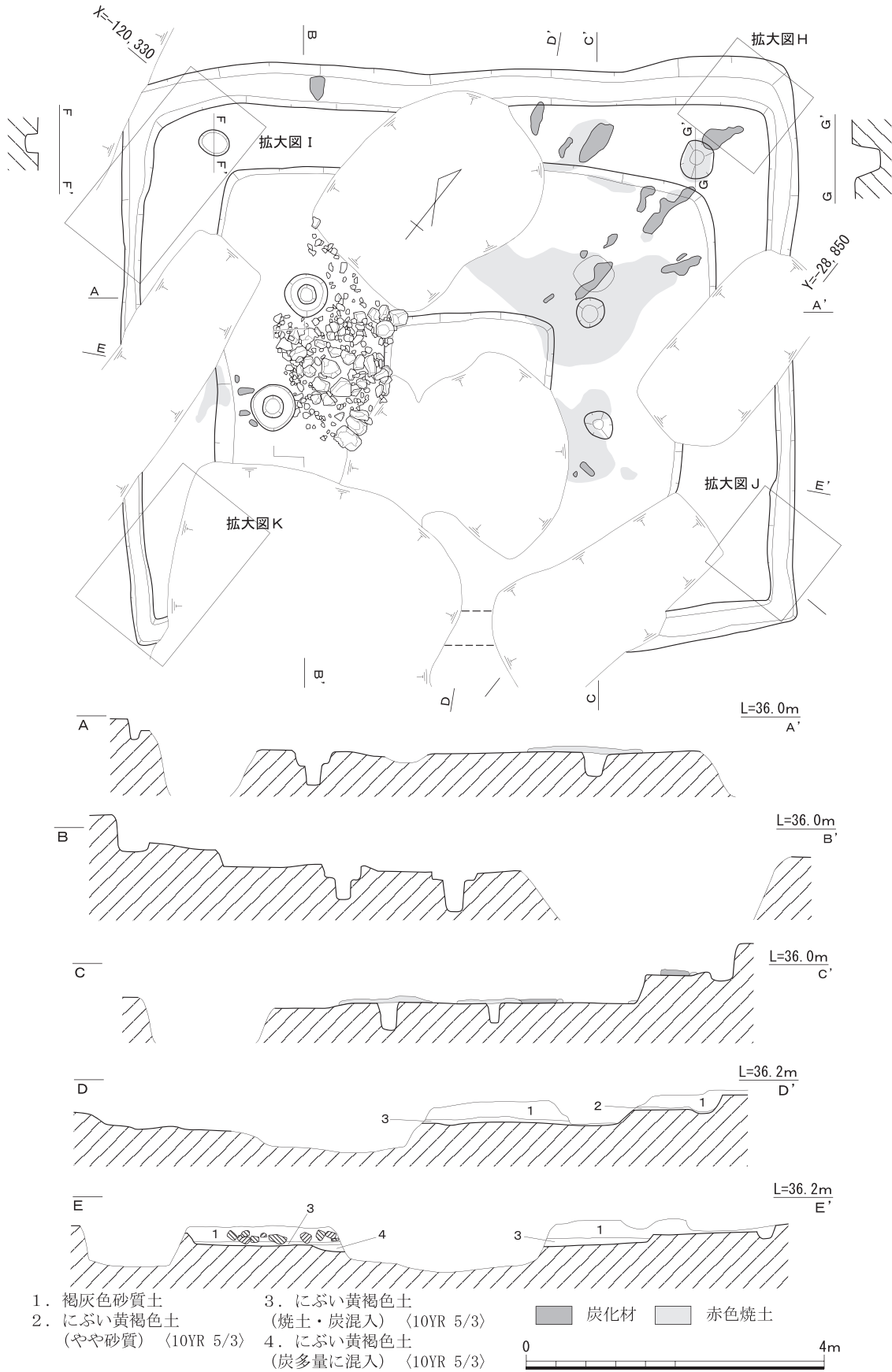
右京第970・1007・1024次調査で検出した遺構は、古墳時代初頭から江戸時代にかけてのものである。以下、時代ごとに遺構の詳細を記述する。

(1) 古墳時代初頭

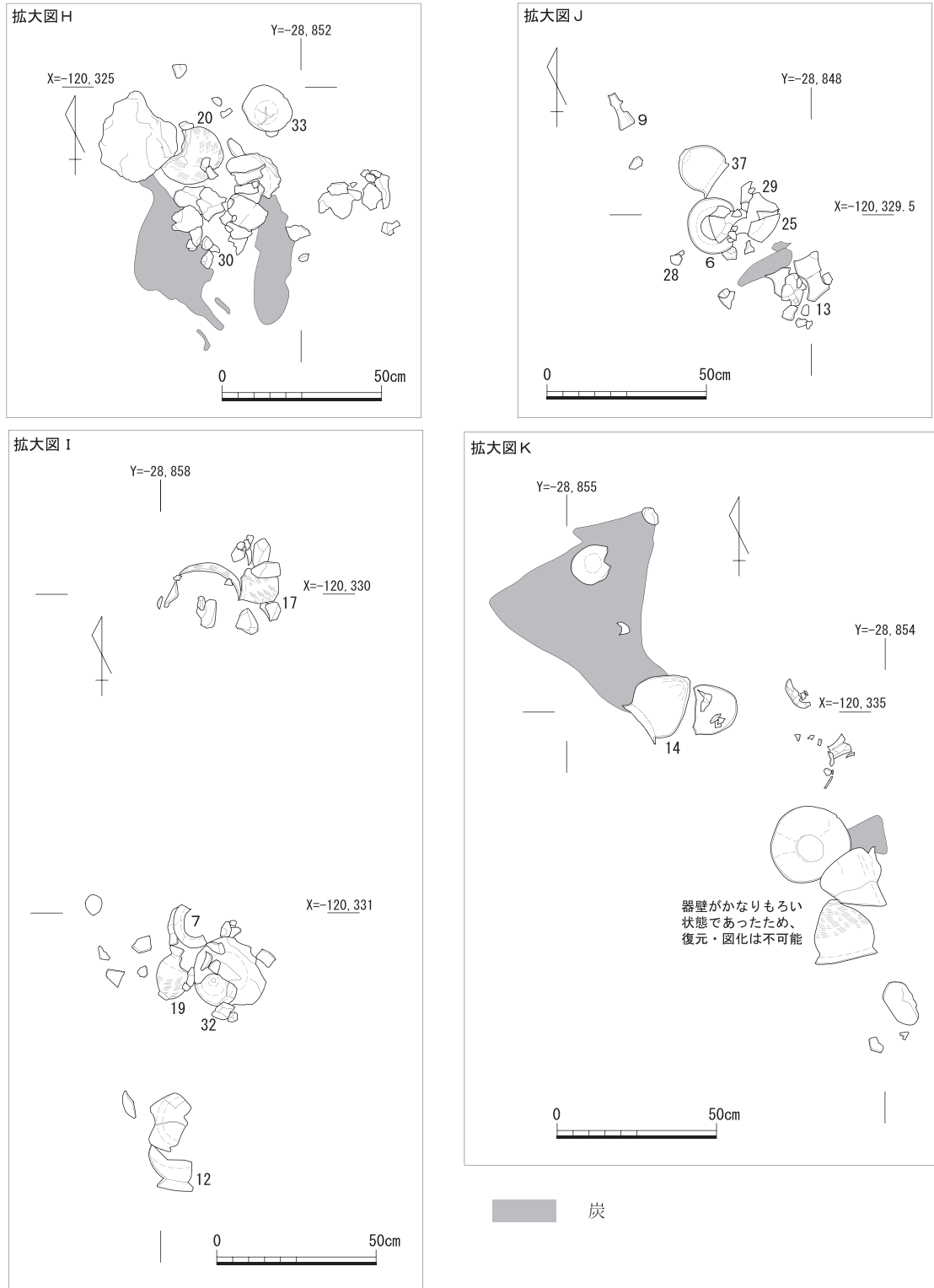
この時期の遺構としては、A地区で検出した竪穴式住居跡S H121、土坑123・149とJ地区の竪穴式住居跡S H82がある。

竪穴式住居跡S H121(第3・16・17図) A地区北西部で検出した。平面形は方形で、規模は9.0×7.6m、検出した深さは0.8mを測り、方位はN40°Wである。住居跡は6か所の攪乱により大きく削平されていた。竪穴床面の四周には、幅0.3～0.6m、深さ0.1mの周壁溝が巡る。周壁溝の内側では幅0.8～1.3mの範囲が、床面より0.2～0.3m高く掘り残されていて、ベッド状遺構となっていた。床面では4か所の支柱穴を検出した。その規模は、径0.4～0.6m、深さ約0.5mである。ベッド状遺構の北・西コーナーで径0.2～0.4m、深さ0.2～0.3mのピットを検出した。上部構造を支える支柱の痕跡と判断される。東・南コーナーは攪乱のため検出できなかったが、それぞれのコーナー部分にも支柱が存在したと考える。また床面中央では、床面から約0.1m掘り下げられた方形の落ち込みを検出した。この落ち込み中には、多量の炭が混じったにぶい黄褐色土が埋まっており、炉として機能していたと考えられる。ただし、底面・壁面は火を受けた痕跡は認められない。この遺構の南半分は攪乱で消失していたが、西辺付近で拳大から人頭大の石を敷いた状況が認められた。この住居内床面直上付近では、数か所で径0.2～0.4m程度の焼土を検出したほか、部分的に炭化材が放射状に分布していた。このような状況から、焼失家屋であったと考える。またこの住居内から出土した土器は、庄内併行期のもので、主にベッド状遺構の上面から出土した。これら土器の大半は、かなりの歪みが認められるが、その原因は不明である。また器壁面が薄く剝離したものもあり、火を受けたためと考えられる。南隅から出土した土器(第17図拡大図K)については、器壁がもろく、接合・実測はできなかった。

竪穴式住居跡S H82(第14・18図) J地区中央の南壁近くで検出した。検出したのは北壁の一部で、南側に二段の掘り込みを検出した。一段目から二段目に落ちる肩部分よりほぼ完形の庄内期の土器が出土しており、ベッド状遺構を備えた住居跡と判断した。住居跡東側はS D50・21

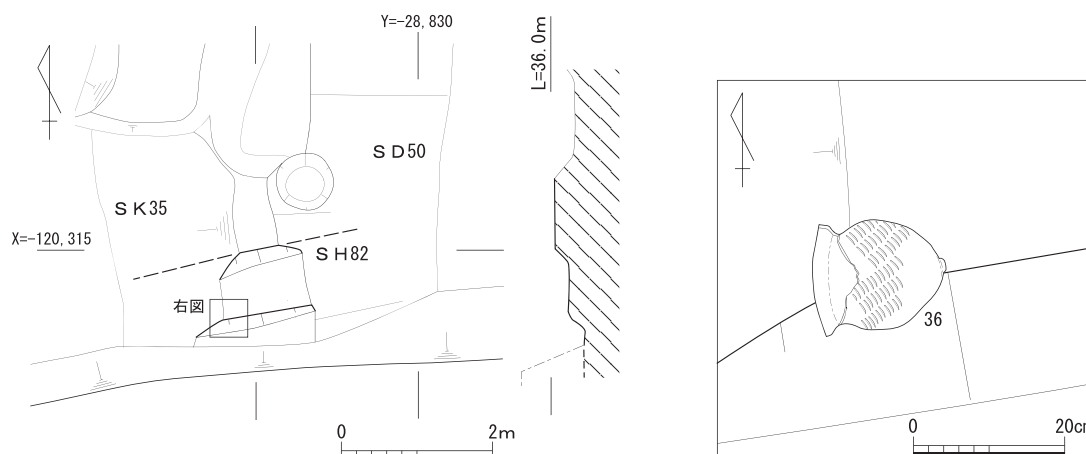


第16図 A地区竪穴式住居跡 S H121実測図



第17図 A地区竪穴式住居跡S H121内遺物出土状況図

に、西側は土坑S K35に削平されており、南半分は調査地外へ続くため、1.7×1.3mの範囲を検出ただけである。床面までの深さは0.4mで、幅0.6mのベッド状遺構を有し、床面から0.2m高い。周壁溝は存在しない。ベッド状遺構端から庄内併行期の壺(第18図36)が出土した。また、西側の江戸時代の土坑S K35内からも庄内併行期の土器片(第65図46)が出土しているが、これらの土器

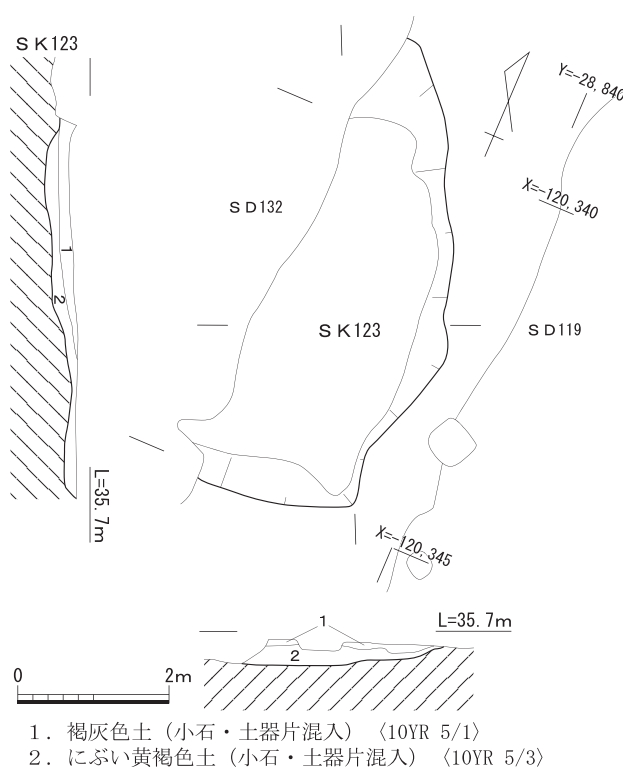


第18図 J地区竪穴式住居跡S H82実測図・遺物出土状況図

は、本来はこの住居に伴うものであったと判断される。

土坑S K123(第3・19図) A地区中央で検出した南北方向に長い土坑である。土坑の西半分は長岡京期の溝S D132に切られている。規模は東西2.5×南北6.4m、深さ0.4mを測る。土坑の床面は平坦でなく、出土遺物の大半は南側の埋土中から、破片の状態で出土した。土坑の性格については不明である。

土坑S K149(第3・20図) A地区の北側中央で検出した土坑である。規模は、1.0×1.8m、深さ0.1mを測る。内部から庄内併行期の土器が出土した。遺構の性格については不明である。



第19図 A地区土坑S K123実測図

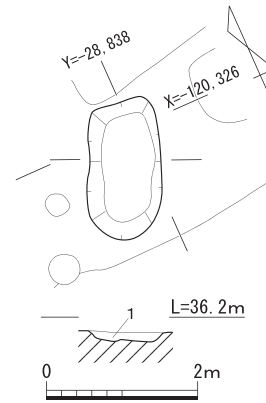
(2) 古墳時代後期

この時期の遺構は、A地区の竪穴式住居跡S H156、土坑S K142、溝S D144、B地区の竪穴式住居跡S H26、土坑S K125、C地区の竪穴式住居跡S H127・350・351(一部M地区に及ぶ)、土坑S K394・128、E地区の竪穴式住居跡S H101~103とJ地区の竪穴式住居跡S H79~81がある。E地区のS H103とJ地区のS H79は同一の住居跡で、地区をまたがって検出した。

竪穴式住居跡S H127(第5・21・23図) C地区中央付近で検出した。今回の一連の調査の中で唯一竈をもつ竪穴式住居跡である。住居跡の平面形は方形で、規模は3.8×4.0m以上、深さ0.2m、を測り、主軸はN14°Eである。東辺は後世の攪乱で削平されていた。竪穴の壁に沿って、幅約0.2m、深さ約0.1mの周壁溝が巡る。床面で、径約0.4m、深さ0.2mの主柱穴を4か所で検出した。竪穴の北辺中央で竈を検出した。規模は1.0×1.0mを測る。馬蹄形状に張り出した両袖部間には、

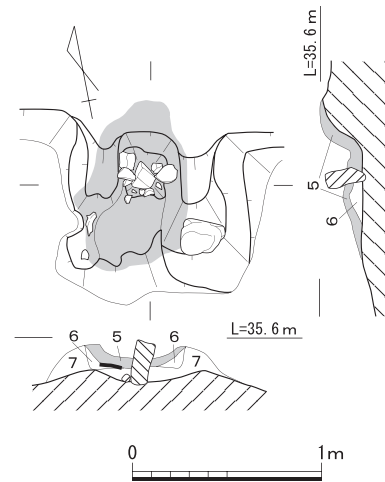
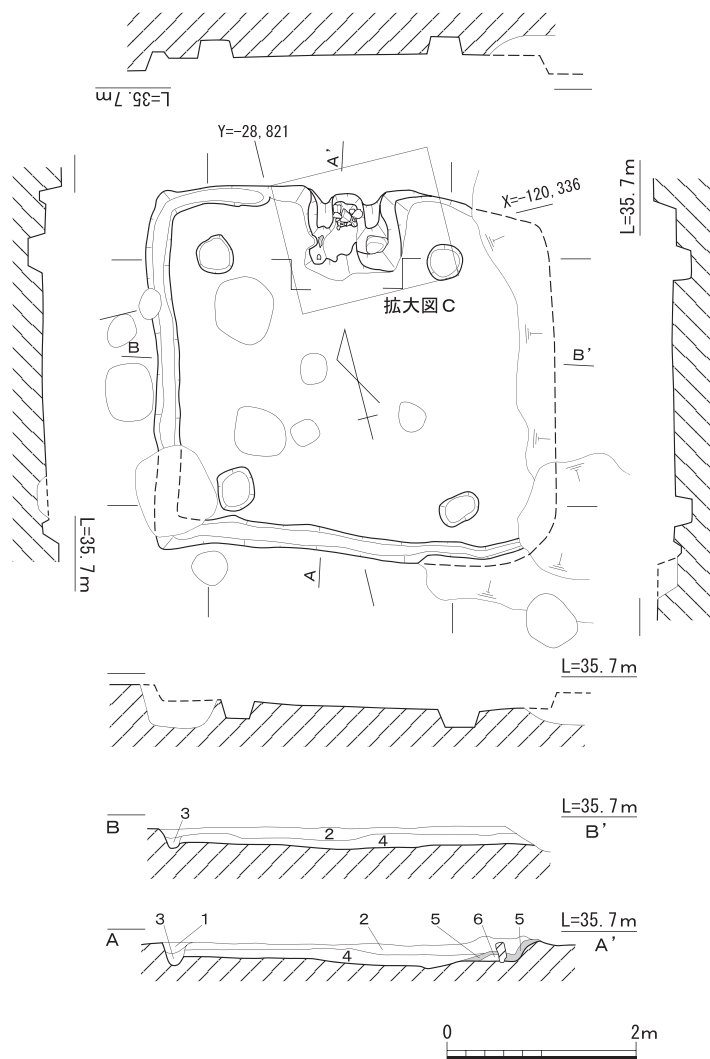
羽釜の底部を固定するための石製の支柱が存在した。この付近での両袖部間の内法は、約0.35mを測る。竈付近から出土した羽釜(第23図101)の体部径は内法とほぼ同じで、羽釜底部から鏝部分まで約25cmを測ることから、支柱先端部から25cm上方まで竈が立ち上がっていたと考えられる。竈付近から羽釜をはじめ須恵器杯身(第23図63)・土師器壺(第23図87)などが出土し、これらの時期から6世紀後半の住居跡と考える。

竪穴式住居跡 S H156 (第3・22・23図) A地区の東側中央で検出した方形の竪穴式住居跡である。住居北西部は後世の攪乱で削平され、東部は平安時代末期の堀 S D111で消失している。平面の規模は、4.4×4.8mと南北方向にやや長い。深さ0.2~0.3mを測り、主軸はN39°Wである。周壁溝はなく、支柱穴を3か所で検出した。東コーナーの支柱穴は S D111によって削平されている。支柱穴は、



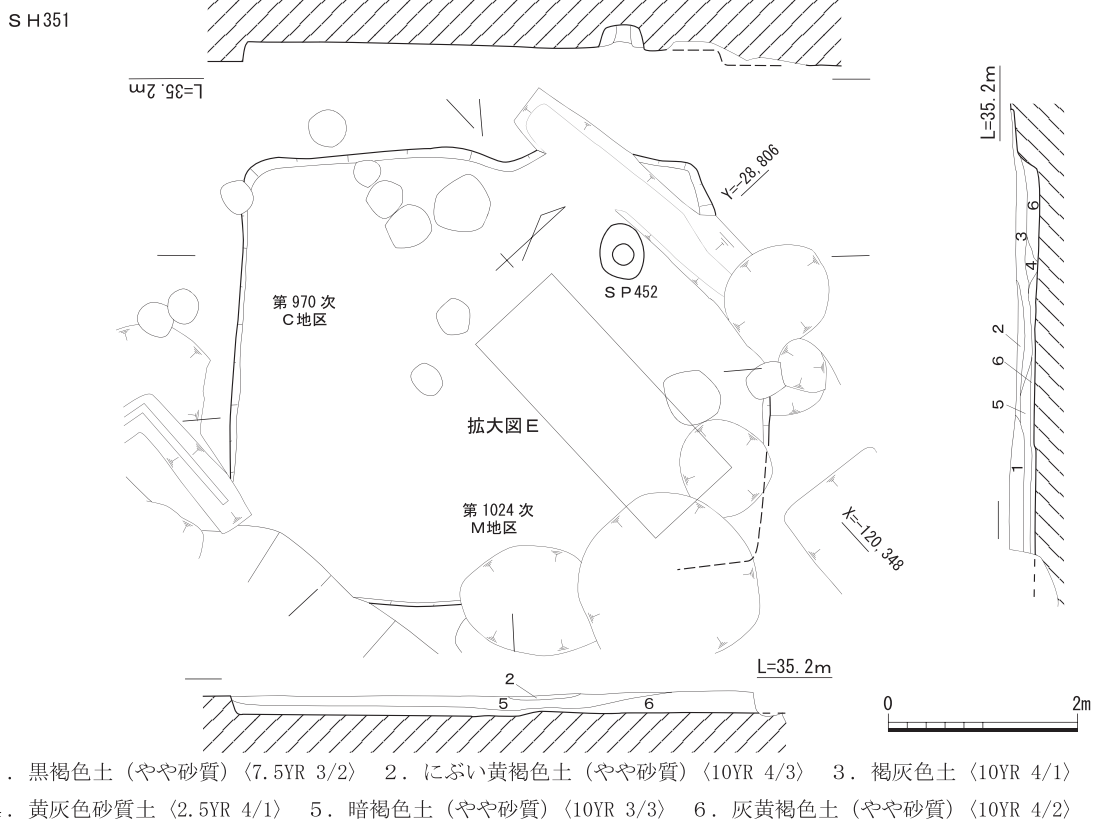
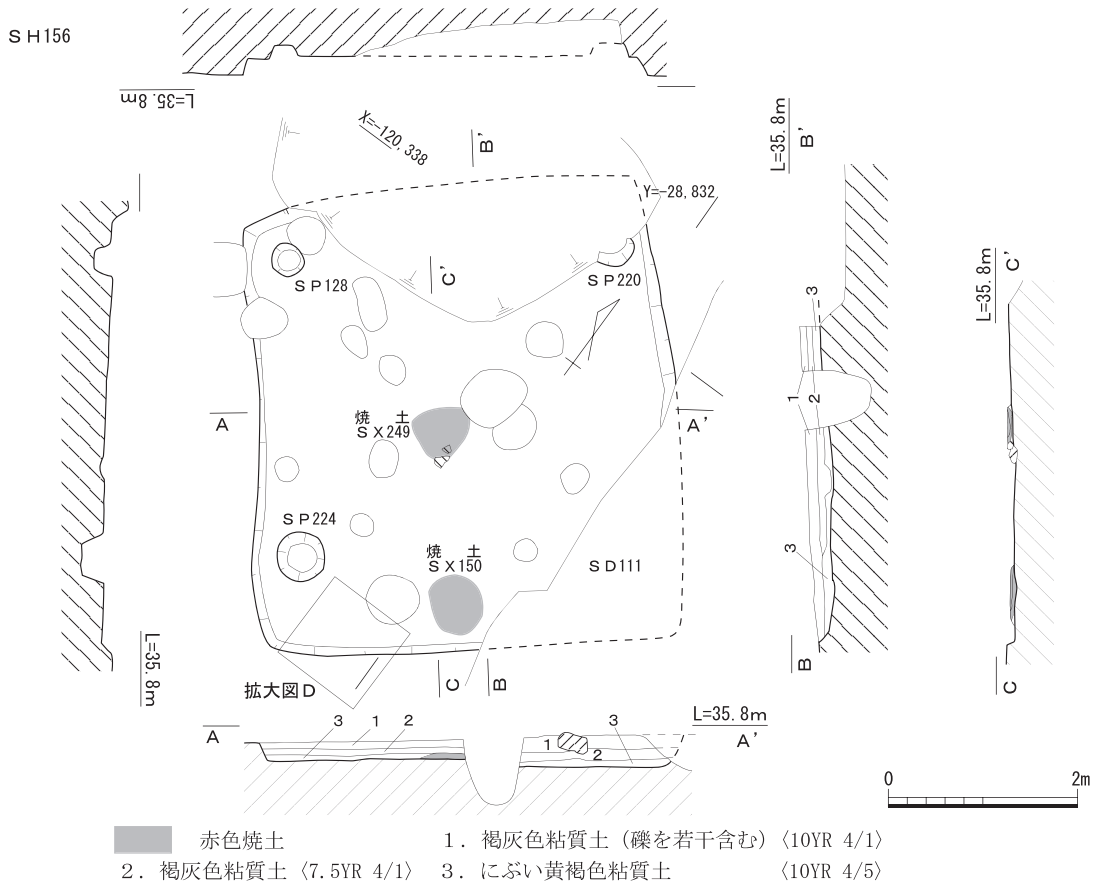
1. 暗褐色砂礫土 <10YR 3/2>

第20図 A地区土坑 S K149実測図

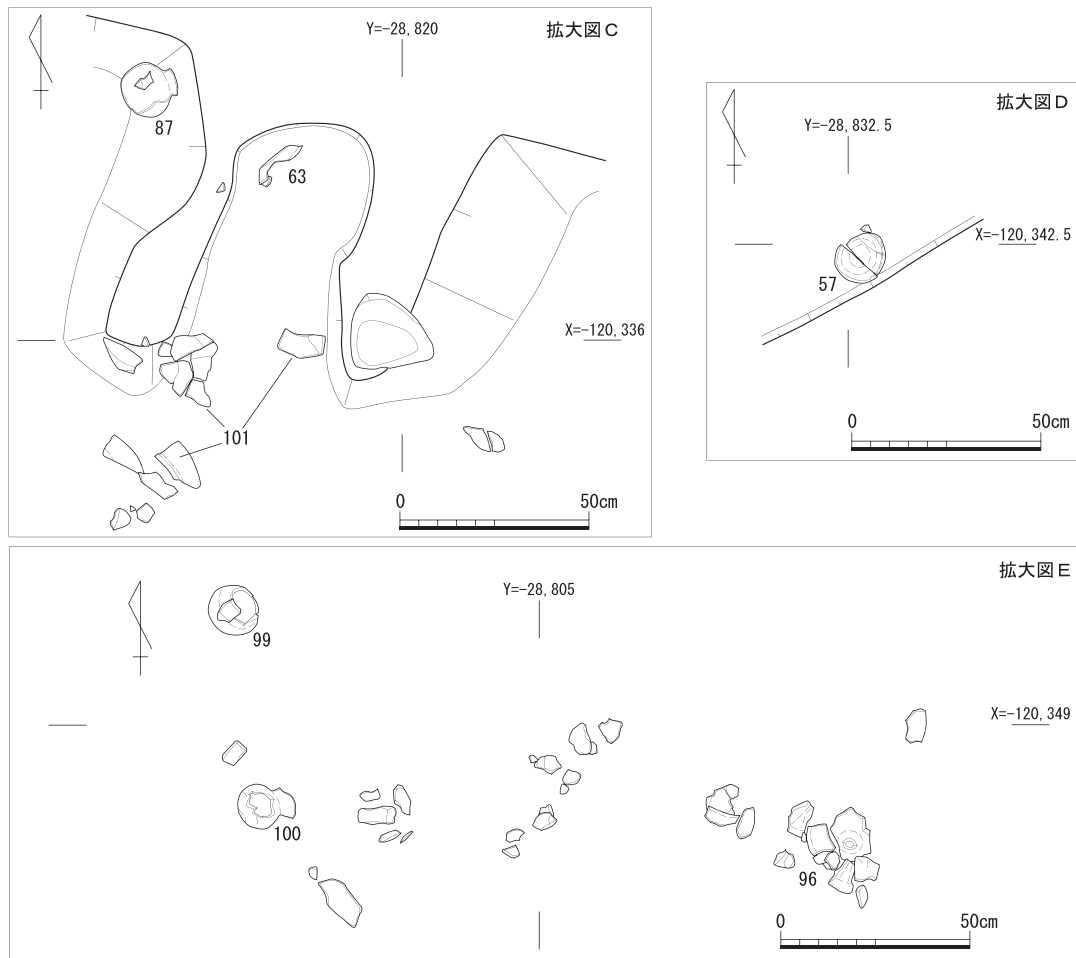


- 1. 黒褐色粘土 <5YR 3/1>
- 2. 黒褐色粘質土 <5YR 3/1>
- 3. 褐色粘質土 <7.5YR 4/4>
- 4. にぶい褐色粘質土 (礫多量に混入) <7.5YR 5/4>
- 5. 橙色砂質土 (赤色焼土) <5YR 6/8>
- 6. にぶい褐色砂質土 <7.5YR 5/4>
- 7. 褐色砂質土 <7.5YR 4/4>

第21図 C地区竪穴式住居跡 S H127実測図



第22図 A地区竪穴式住居跡SH156・C地区SH351実測図

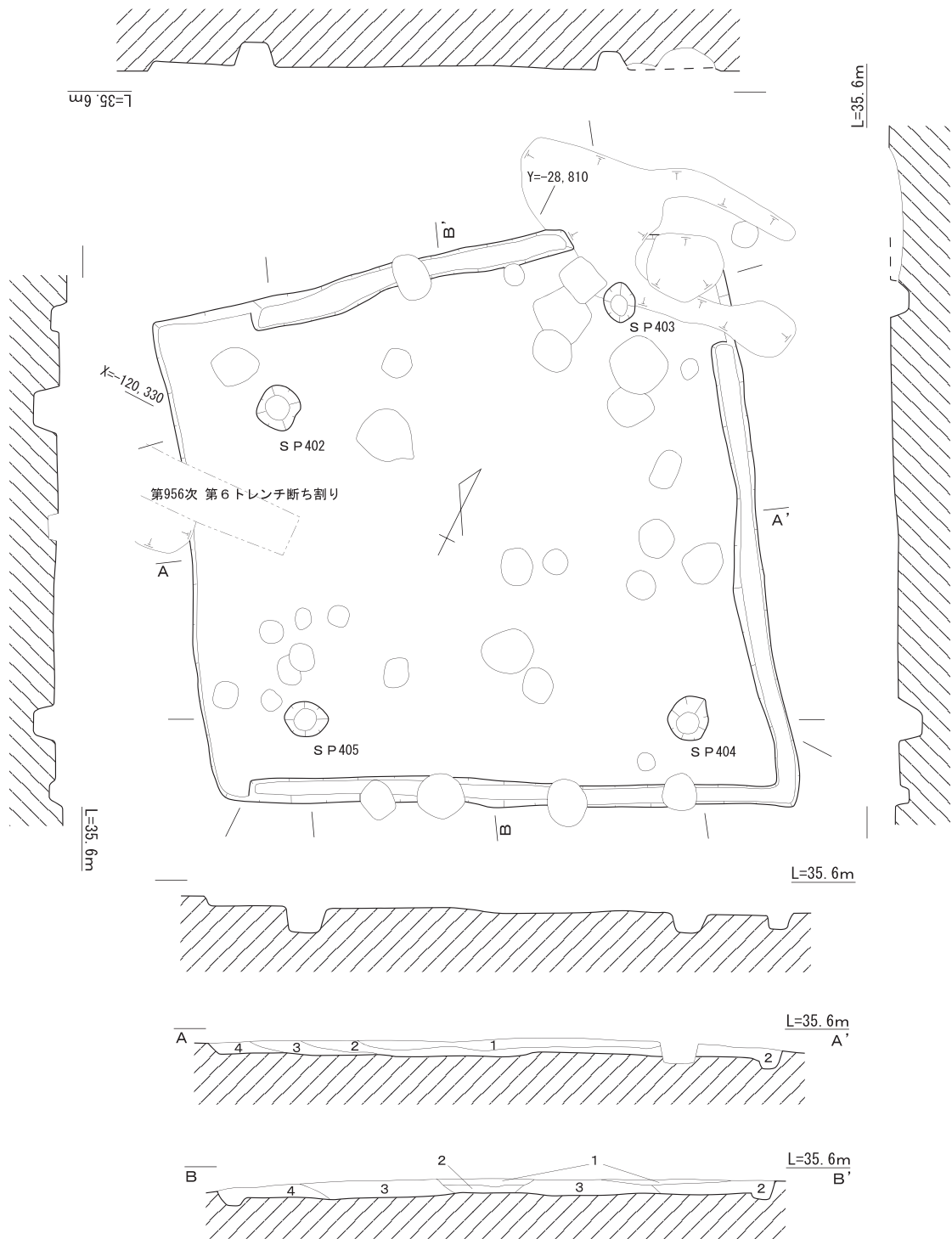


第23図 A地区竪穴式住居跡S H 127・156・351遺物出土状況図

径0.3~0.5m、深さ0.2~0.3mである。住居の床面中央と東辺中央付近の2か所から、赤色に発色した焼土(S X 249・150)を検出した。それぞれの範囲は、径約0.6mである。床面上では、南コーナー付近で須恵器杯蓋(第27図拡大図D57)が出土した。また埋土中からは、須恵器杯身・甕・甕や土師器高杯脚部などが出土した。6世紀後半の住居跡と考える。

竪穴式住居跡S H 350(第5・24図) C地区北東部で検出した方形の竪穴式住居跡である。今回検出した竪穴式住居跡の中で、比較的大きなものである。南西辺が他に比べて短く、平面形はやや台形を呈している。規模は、7.2×7.2m、南西辺のみ6.0mで、深さ約0.2mを測る。主軸はN 36° Wである。南西辺以外の3辺に沿って周壁溝を検出した。その規模は、幅約0.4m、深さ約0.2mを測る。各コーナーの内側付近で、径約0.5m、深さ約0.3mの主柱穴を4か所検出した。住居内から焼土は見つからなかった。この住居は大阪層群直上に築かれており、床面のいたるところで拳大以上の石礫が認められた。住居として用いられていた段階では床面に貼り土がなされていたと考えられるが、土層断面の観察では確認することはできなかった。

竪穴式住居跡S H 351(第5・22・23図) C地区の南東隅から右京第1024次調査のM地区にかけて検出した。平面形は方形で、規模は5.6×4.8m、深さ約0.2mを測る。主軸はN 46° Wである。主柱穴は北コーナーの内側で1か所確認できた。径約0.6m、深さ0.3mを測る。住居内埋土中か



1. にぶい黄橙色土
(5cm大の礫混入・部分的に炭混入) <10YR 6/4>
2. 明黄褐色礫土
(3~10cm大の礫混入) <10YR 7/6>
3. 褐灰色礫土
(10~20cm大の礫混入) <7.5YR 5/1>
4. 明黄褐色礫土
(5~10cm大の礫混入) <10YR 7/6>



第24図 C地区竪穴式住居跡S H350実測図

ら土師器壺(96・99・100)などが出土した。6世紀後半の住居跡と考える。

竪穴式住居跡 S H101 (第9・25図) E地区の南西隅で検出した。規模は6.6×6.4m、深さ約0.2mで、N47°Wを測る。幅約0.3m、深さ約0.1mの周壁溝が「コ」の字状に巡る。主柱穴は北西コーナー以外の3か所で検出した。径約0.4m、深さ約0.2mである。住居跡南西部の床面がわずかに赤色に変色していたが、竈に伴うものではなかった。住居跡の北コーナー付近の埋土中から、須恵器器台脚部破片(第25図拡大図D83)・須恵器杯身(第25図拡大図E65・71)が出土した。器台は、竪穴式住居跡 S H102からも出土していることから、この付近に古墳が存在した可能性を示唆する遺物と考える。

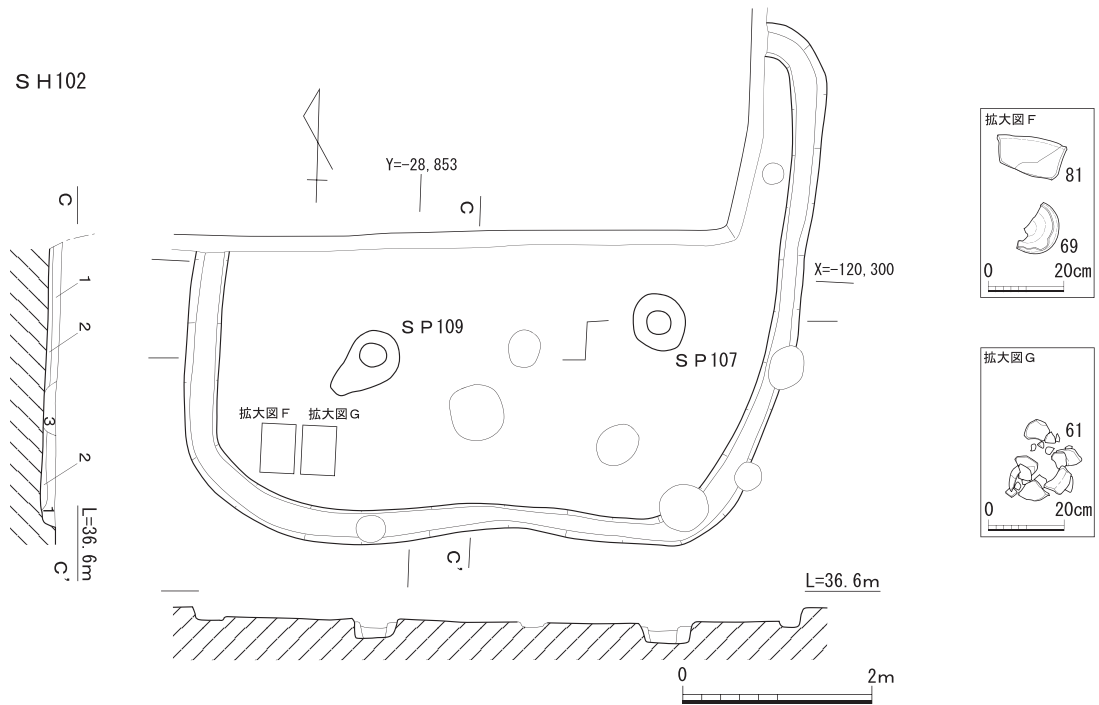
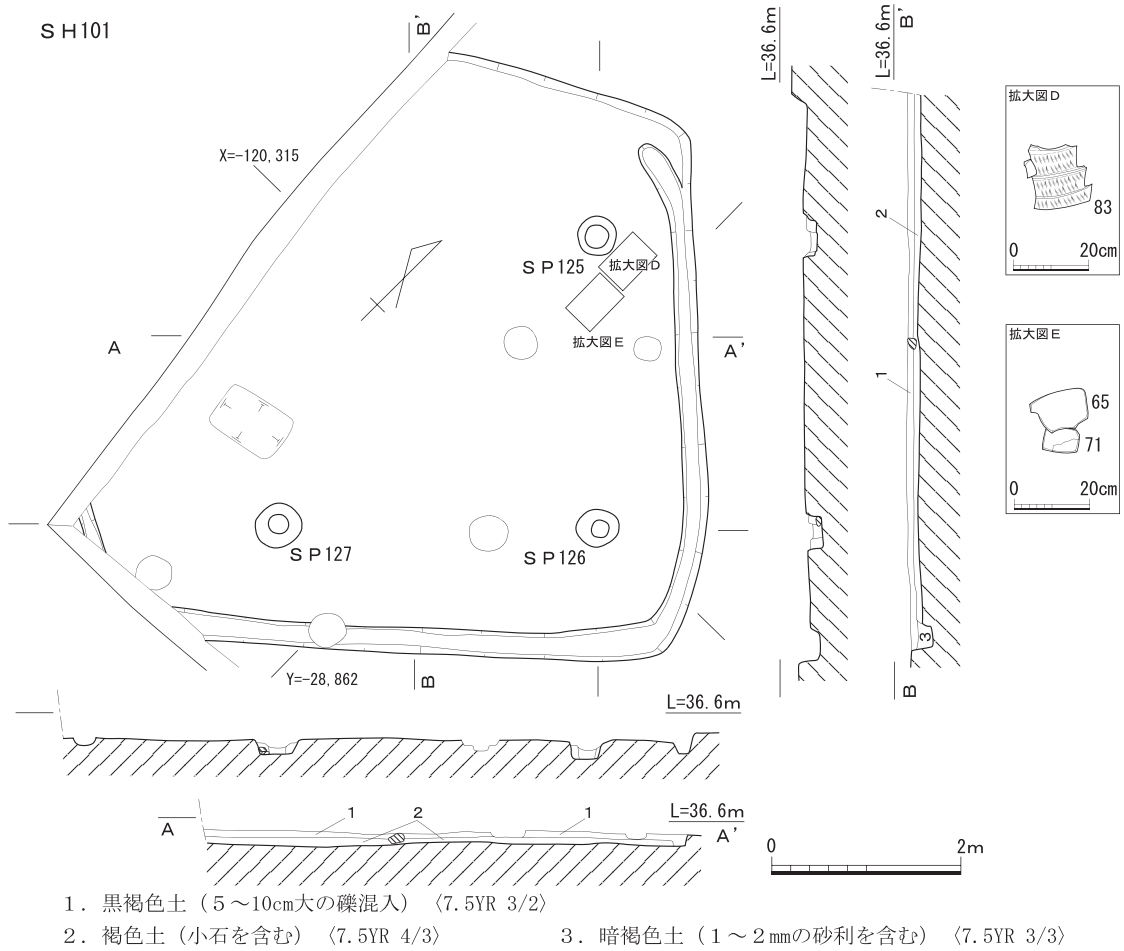
竪穴式住居跡 S H102(第9・25図) E地区の北辺で検出した。規模は6.4×5.8m、深さ約0.1m、N4°Eを測る。幅約0.3m、深さ約0.1mの周壁溝が巡る。主柱穴は2か所で検出した。径約0.5m、深さ約0.2mを測る。右京第957次調査で、落ち込み S X95710と赤色に焼けしまった所を確認している。このことから、この住居の北辺には竈が存在した可能性がある。住居跡の南西付近の埋土中から、須恵器杯身(第25図拡大図G61・拡大図F69)と須恵器器台片(第25図拡大図F81)が出土した。これは S H101出土の器台とともに、古墳の存在を示唆するものと考えられる。第957次調査地の北西付近で、古墳時代後期の土器片が出土する弧状に巡る浅い溝を検出しており、古墳の周溝であった可能性が高い。

竪穴式住居跡 S H79・103(第9・14・26図) E地区の北東隅とJ地区の北西隅で検出した、平面形逆台形の住居跡である。規模は、北辺約6.0m、南辺約5.4m、東・西辺約6.0m、深さ約0.2mである。主軸はN23°Eを測る。北西と南東コーナー付近で幅約0.3m、深さ約0.1mの周壁溝を検出した。また、南東コーナー付近では赤色に変色した所を確認した。各コーナー内側の4か所で、径約0.3m、深さ約0.1mの主柱穴を検出した。住居跡の北東部から土師器高杯片(95)が、南西部から須恵器杯身(第26図拡大図D64)・杯蓋(第26図拡大図D59)・器台(第26図拡大図L82)が出土した。

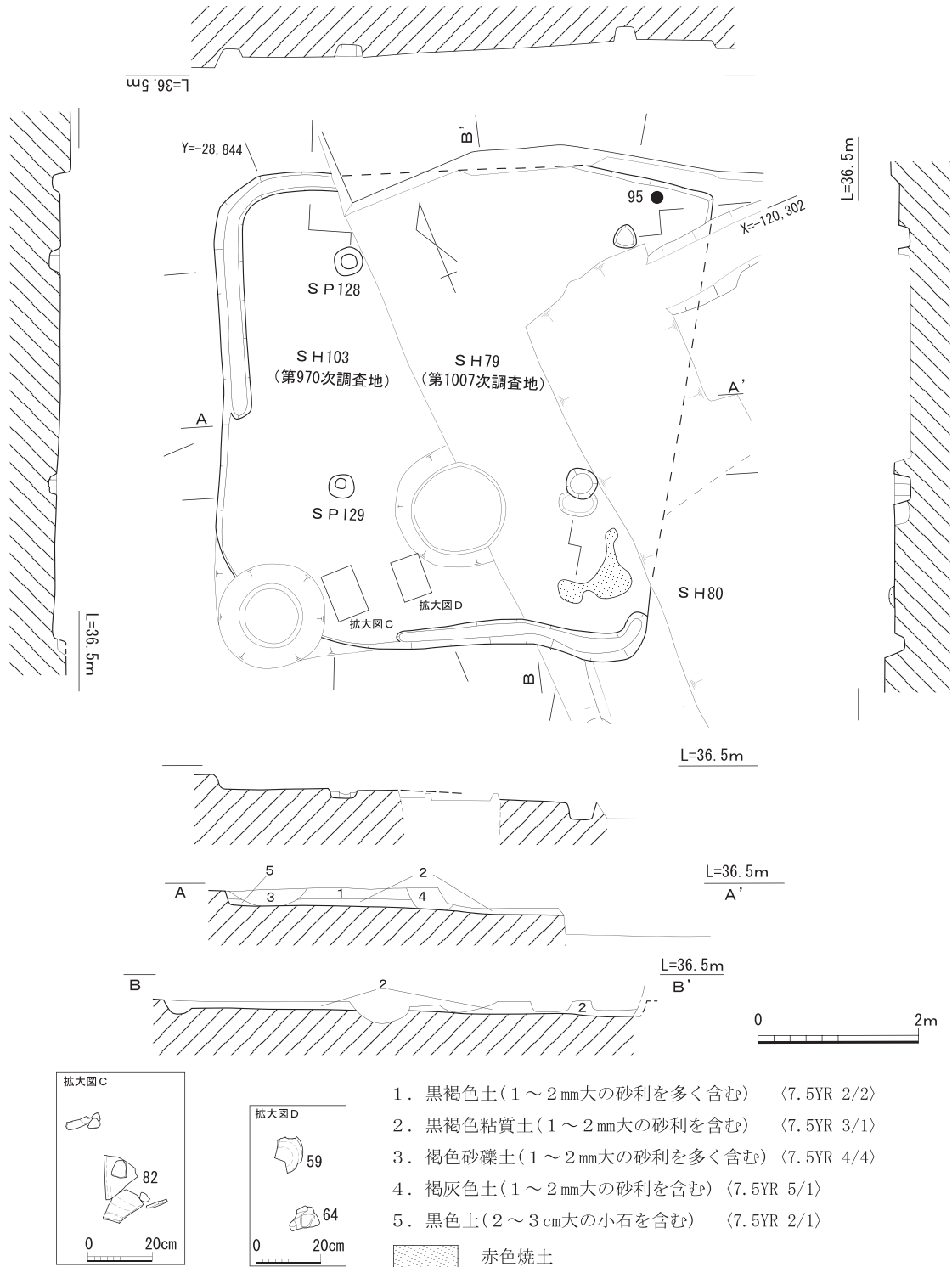
竪穴式住居跡 S H80(第14・27図) J地区の西辺近くで検出した。S H79の南側に位置し、切り合い関係から S H79に先行する住居跡である。規模は、6.0×6.0m、深さ約0.2mで、主軸はN6°Wを測る。住居跡の南辺から東辺にかけて幅約0.4m、深さ約0.2mの周壁溝が巡る。S H79と切り合っていたため、主柱穴は3か所で検出しただけである。径約0.4m、深さ約0.4mである。

竪穴式住居跡 S H81(第14・28図) J地区北西部で検出した。S H80の東隣に位置する。住居跡の東半は後世の攪乱で削平されていた。規模は、4.8×3.6m以上、深さ約0.1mで、主軸はN4°Wの主軸である。主柱穴は西半の2か所で検出した。径約0.5m、深さ約0.1mである。

竪穴式住居跡 S H26(第8・29図) B地区北東部で検出した。住居跡の東半分は、長岡京期の溝 S D112で削平されていた。住居跡は非常に残りが悪く、周壁溝や柱穴が5cm前後の深さで認められただけである。周壁溝は幅約0.2m、深さ約5cmである。住居跡の規模は、4.2×2.7m以上で、主軸はN19°Eである。主柱穴は、西側の2か所で検出した。径約0.4m、深さ約0.3mである。

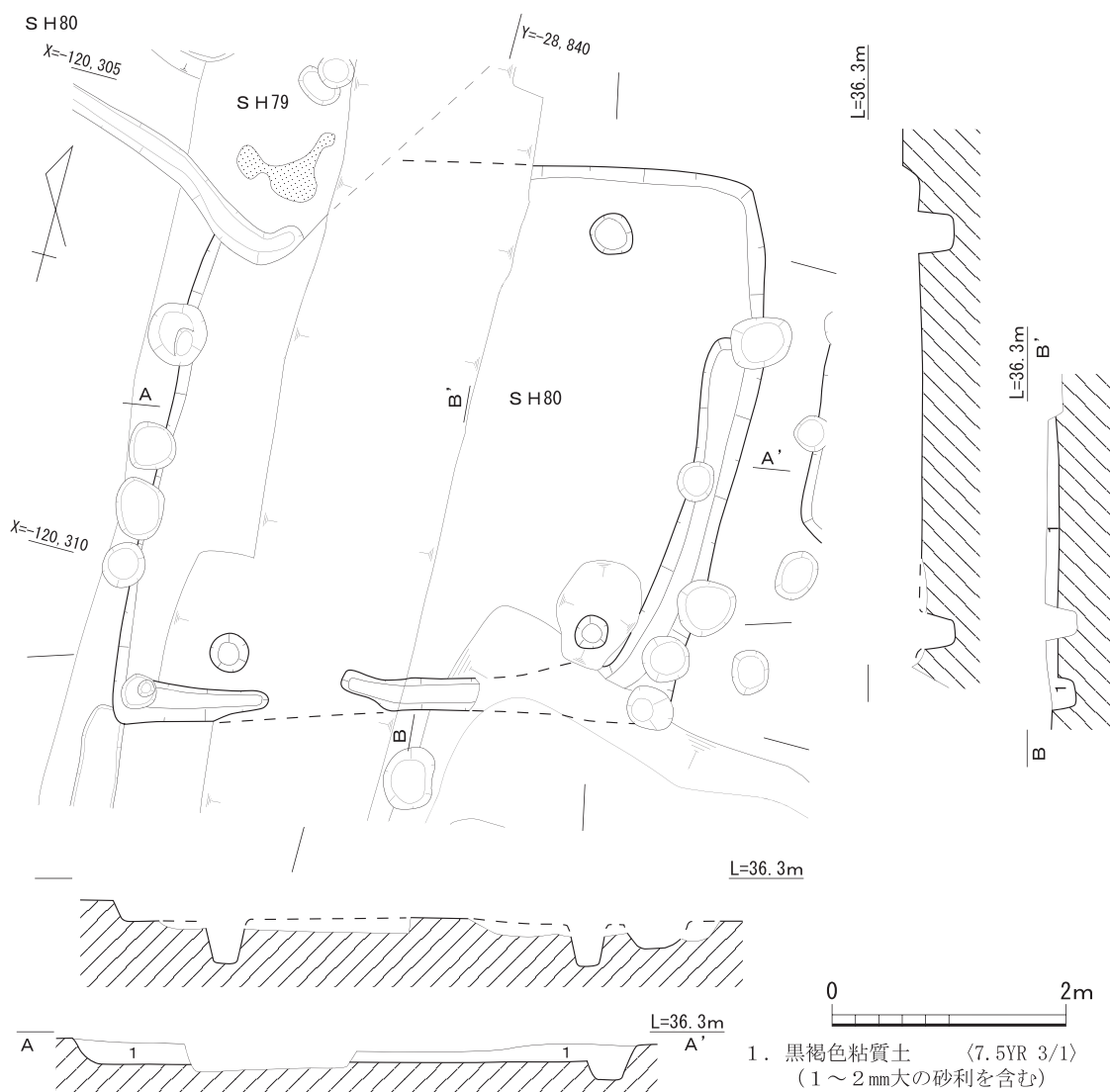


第25図 E地区竪穴式住居跡S H101・102実測図



第26図 E地区竪穴式住居跡S H103・J地区竪穴式住居跡S H79実測図

土坑S K142(第3図) A地区の北西隅で検出した不定形な土坑である。1.2×0.7m、深さ0.15mを測る。底面は平坦でない。埋土中から、土師器の細片が出土した。この土坑は西側に向けて下る斜面を埋める土層の上から掘り込まれている。右京第957次調査で庄内併行期の高杯が斜面を埋める土層中から出土したことから、この斜面は古墳時代初頭以後に徐々に埋まり、古墳時代後期には現小泉川付近まで平坦な地形が作り出されていたものと考えられる。

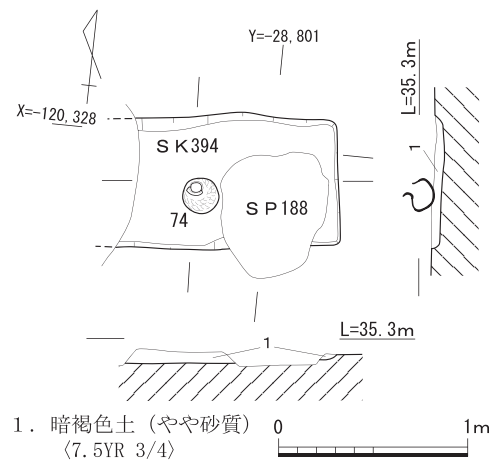
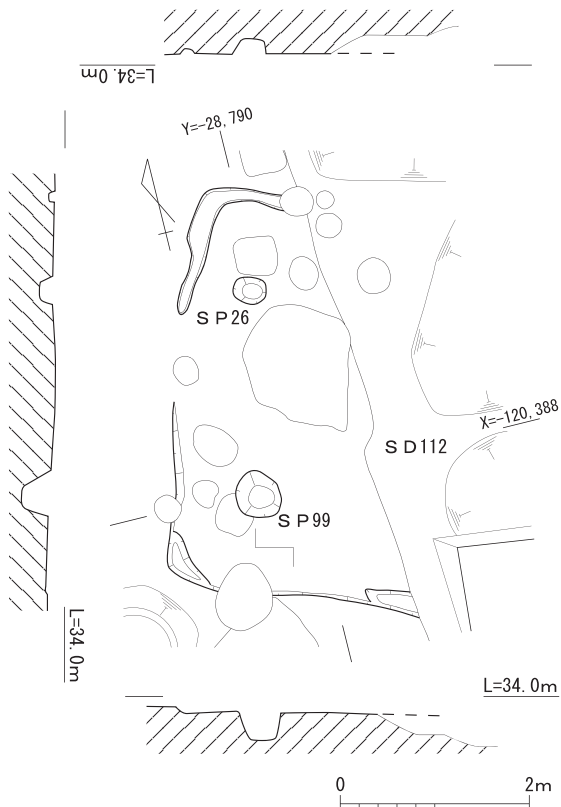
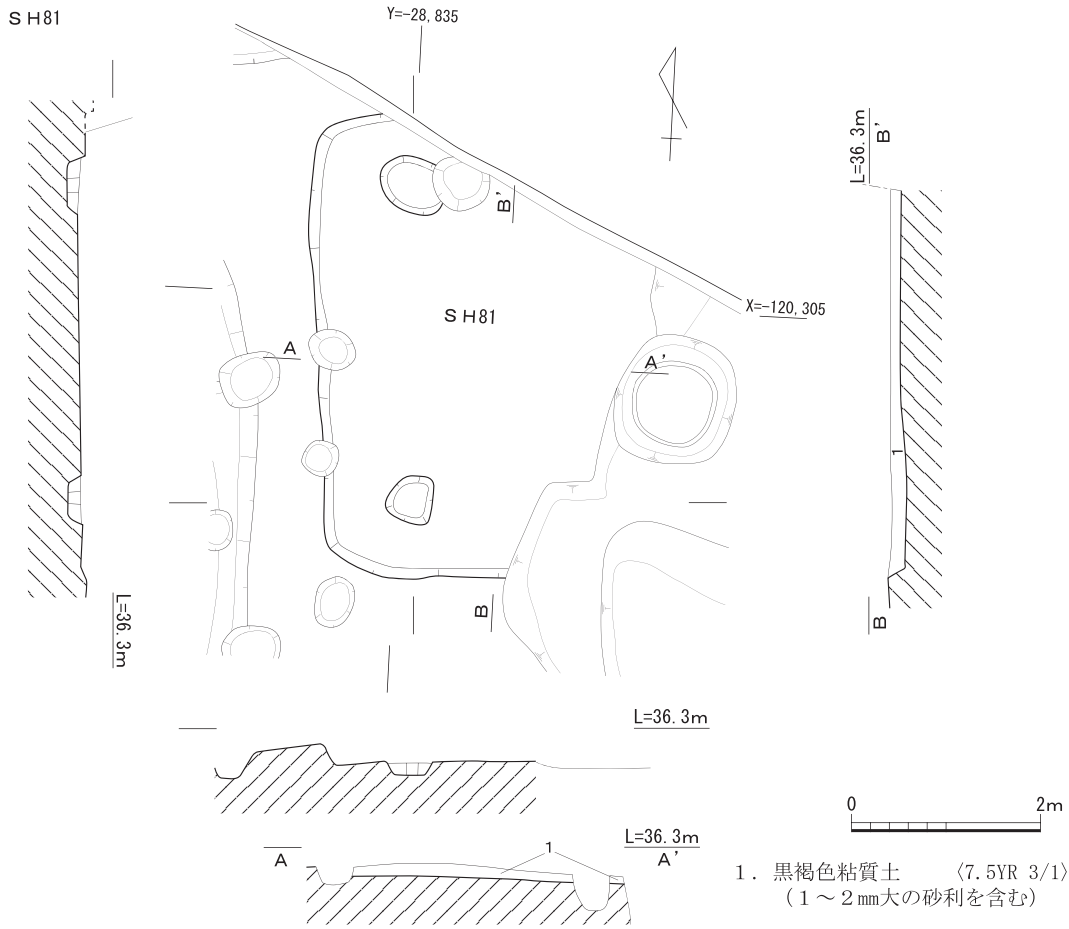


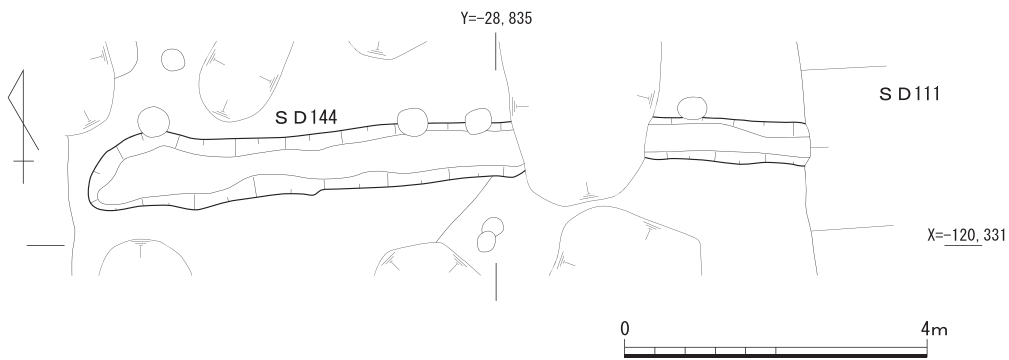
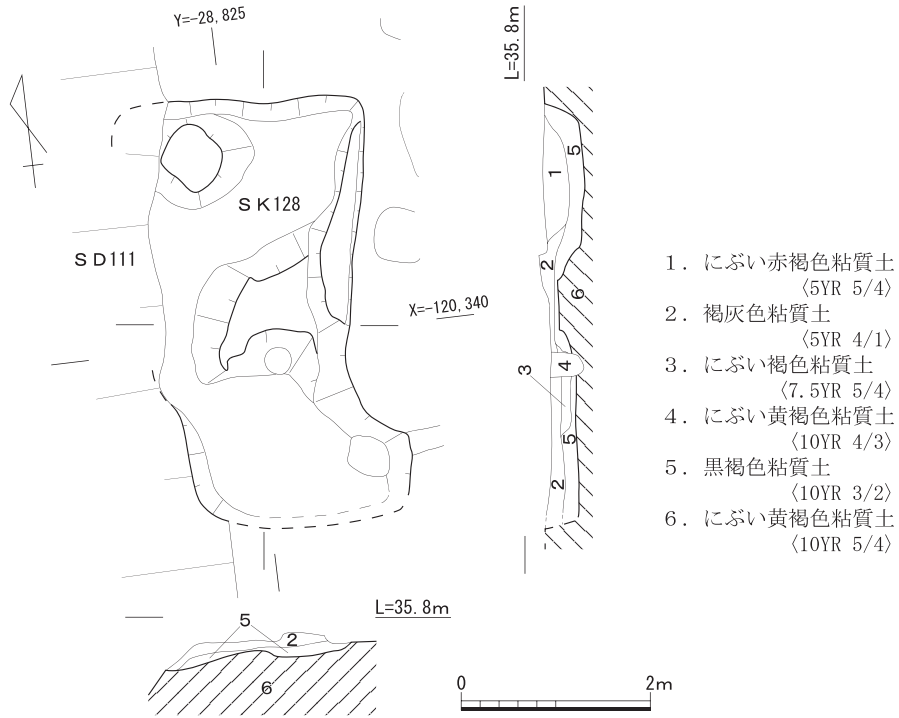
第27図 J地区竪穴式住居跡S H80実測図

土坑S K 394 (第5・30図) C地区北東部で検出した平面形が長方形の土坑である。後世の柱穴S P 188や攪乱によって一部消失していた。確認した規模は、長辺1.2(以上)×短辺0.7m、深さ0.05mである。主軸方向はN85° Eを測る。土坑の中央からほぼ完形の須恵器壺(74)が出土した。土坑の平面形から墓の可能性があると考えたが、土層断面では棺痕跡は認められなかった。

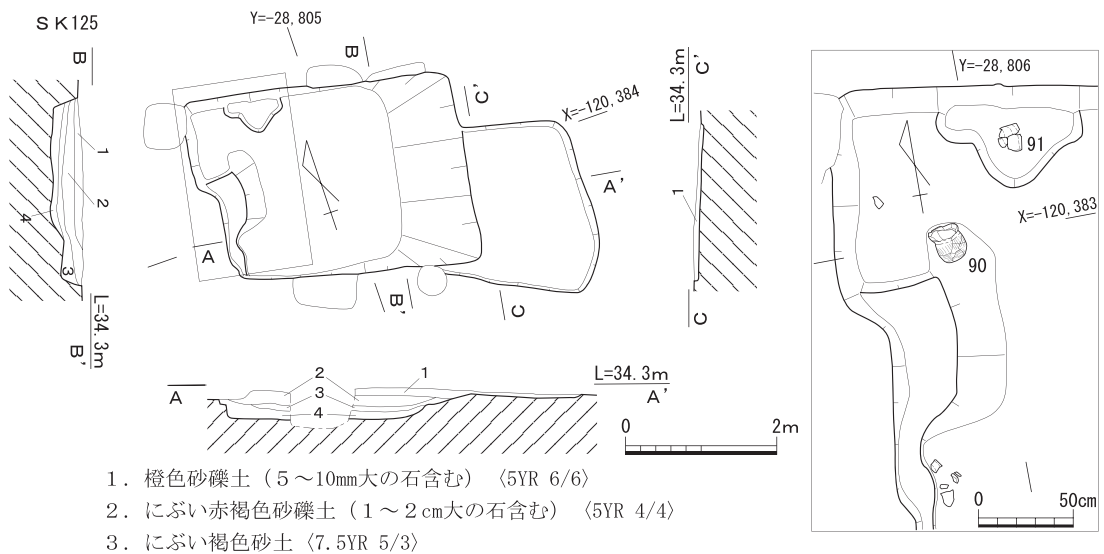
土坑S K 128 (第5・31図) C地区の西部で検出した土坑である。西半分が平安時代末期の堀S D 111により削平され、消失していた。規模は、4.4×2.2m以上、深さ0.1~0.5m、N7° Eを測る。検出した当初は、東に隣接して竪穴式住居跡S H 127があること、平面形が方形であることから、竪穴式住居跡ではないかと考えたが、土坑の底面が平坦でなく、周壁溝や柱穴も認められないことから、土坑と判断した。埋土中から土師器片が出土した。

溝S D 144 (第3・31図) A地区の北東部で検出した東西方向の溝で、ほぼ真東西に主軸をもつ。遺構の東部は平安時代末期の溝S D 111により削平されていた。幅0.6~1.0m、検出長9.6m、深さ0.1mである。遺構の遺存状況は極めて悪い。埋土中から須恵器杯蓋(54)が出土した。





第31図 C地区土坑S K 128・A地区溝S D 144実測図

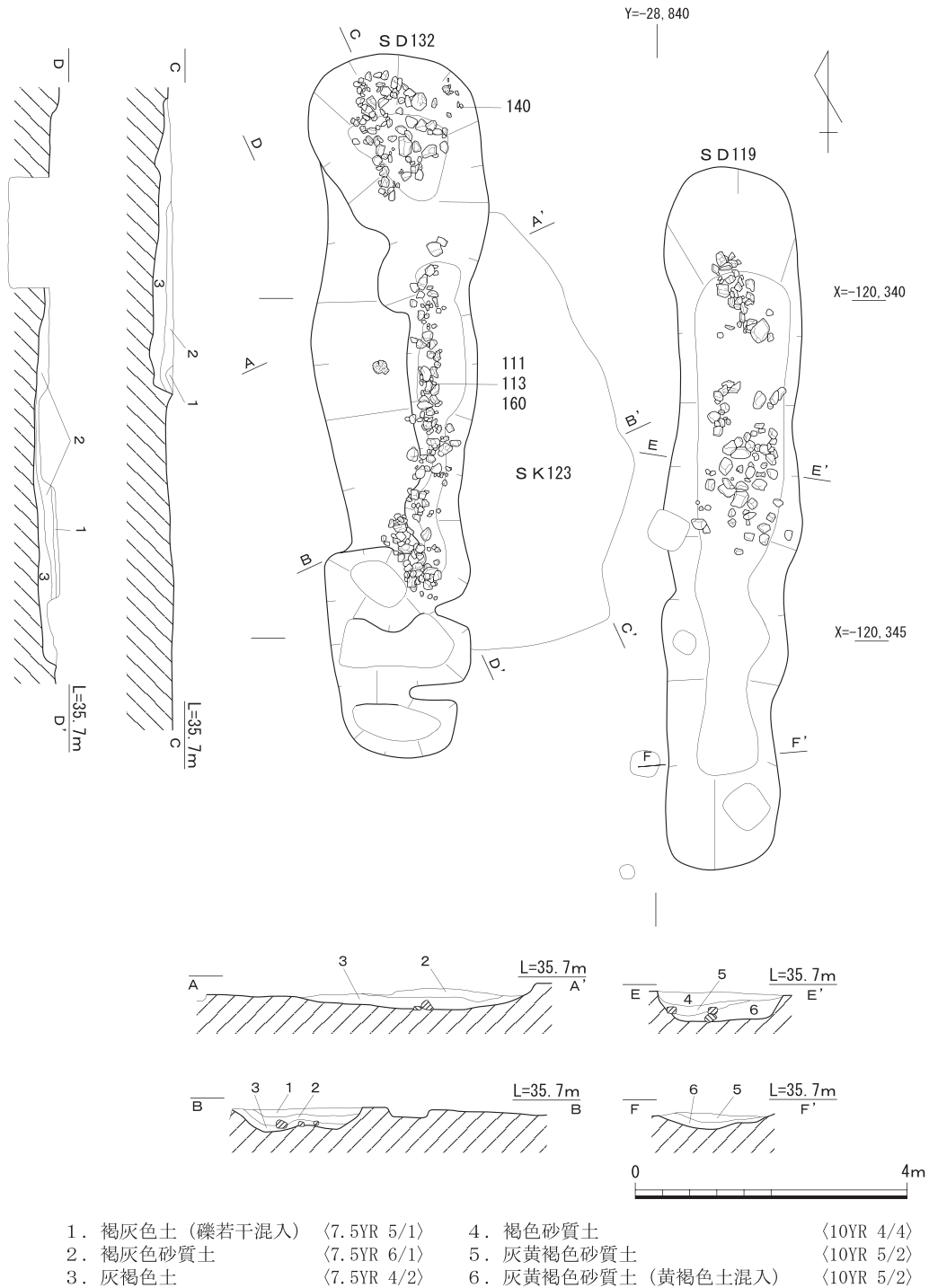


第32図 B地区土坑S K 125実測図

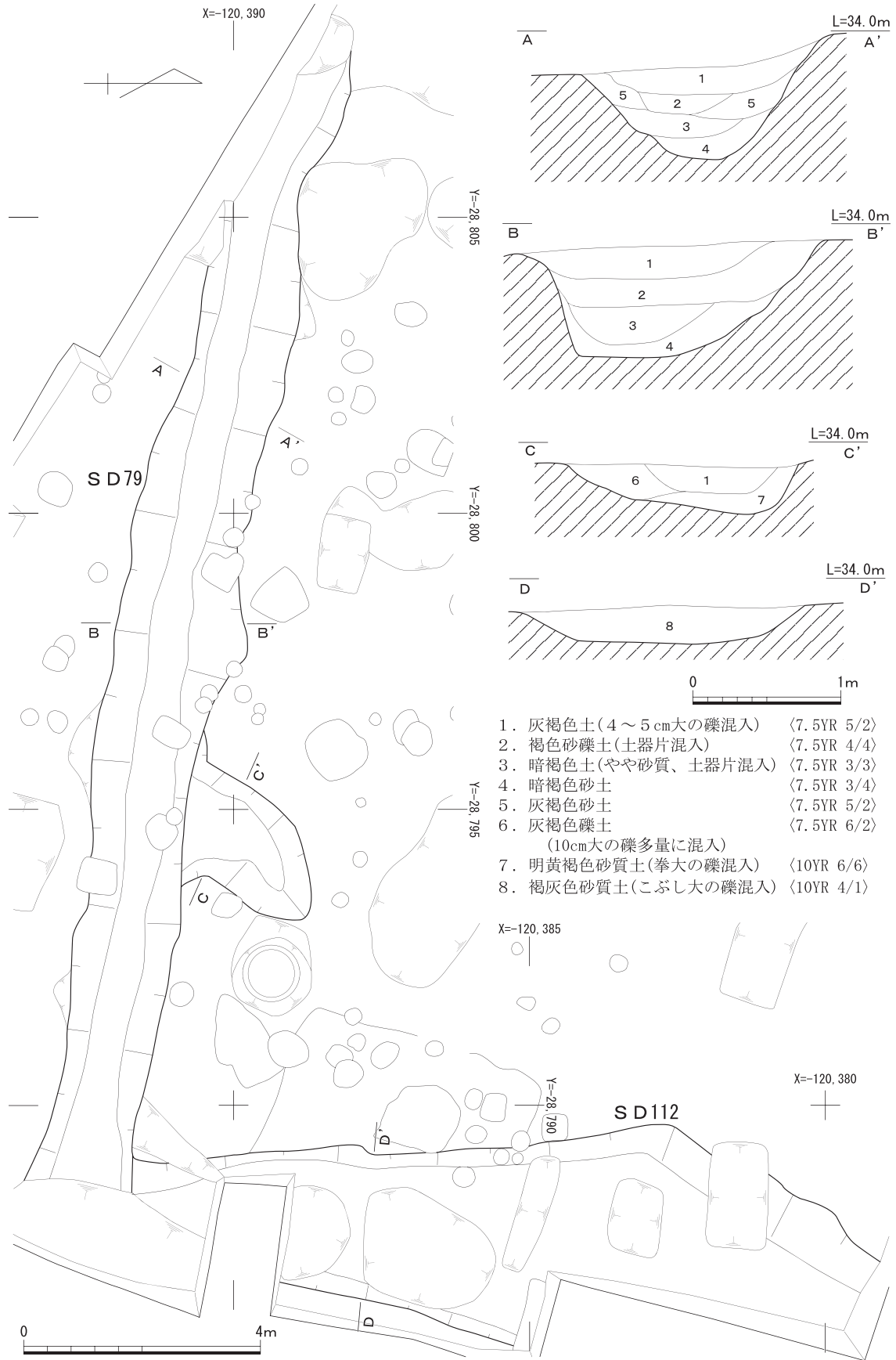
土坑S K 125(第7・32図) B地区中央付近で検出した。方形に深く掘り込まれた土坑とその東側で浅く掘り込まれた方形の土坑からなる。深く掘り込まれた土坑の規模は、3.6×2.5m、深さ0.5mを測る。この土坑の東側は緩やかに立ち上がる。浅い土坑は、2.1×2.2m深さ0.05mである。土坑の底面に接して土師器甕(90・91)が出土した。

(3)長岡京期

長岡京期の遺構としては、溝S D119・132・366・79・112と土坑S K158がある。長岡京の条



第33図 A地区溝S D119・132実測図



第34図 B地区溝SD79・112実測図



第35図 A地区土坑S K158・D地区溝S D366実測図

坊に直接関係する遺構は確認できなかった。

溝S D119・132(第3・33図) A地区中央付近で検出した南北方向の溝で、真南北に掘られている。S D132は古墳時代初頭の遺物が出土したS K123を切る形で検出した。東側のS D119と西側のS D132の間は、溝心々で5.0mを測る。須恵器壺(111・113)、ミニチュア甌(126)、土馬(140・143)、土師器壺E(160)、平瓦(296)が出土した。S D119は幅1.5~2.0m、長さ10.3m、深さ0.3~0.5m、S D132は幅2.0~2.3m、長さ10.3m、深さ0.3mである。両溝の埋土の第3層中には、拳大の石が多く混じっており、その中から土馬(146)が出土した。

溝S D79(第7・34図) B地区南辺近くで検出した東西方向の溝である。S D79は、幅約2.0m、検出長19.5m、深さ0.6~0.8mで、溝の主軸はN79°Wを測る。溝底は西から東に傾斜する。埋土中から長岡京期の土器群とミニチュア甌や甎、土馬などが出土した。溝底に接して出土するものもあった。祭祀関連の遺物が集中的に出土していることから、この溝で祭祀が行われたものと考えられる。小泉川を挟んだ対岸には西山田遺跡があり、長岡第四中学校建設に伴う右京第104次調査で、多量の祭祀遺物が出土している。この遺構とは約150m離れているだけであり、何らかの関連が窺える。ミニチュア甌(125・127~136)、ミニチュア甎(137・138)、土馬(144・145)、土師器杯(147・148)・皿(149~153)・鉢(155~157)・壺E(159・161)・皿B(163)と蓋(162)・甕

(164・167)、須恵器杯B蓋(103～105)・杯(106～110)・壺(112・115・116)・鉢(119)・壺蓋(120・121)・壺(122・124)・萬年通寶(102)が出土した。

溝S D 112(第7・34図) B地区の東辺に沿って検出した南北方向の溝で、S D 79と重複関係を有し、切り合い関係からS D 79に先行するものである。規模は、幅2.2～3.3m、検出長12.6m、深さ0.6mで、N10° Eを測る。土師器の細片が出土したが、時期は不明である。

土坑S K 158(第3・35図) A地区南東部で検出した。2.2×4.3m以上、深さ0.05mを測る。土坑の東端は、平安時代末期の堀S D 111によって消失している。図化できないが、奈良時代末から平安時代前期の土器の小片が出土している。

溝S D 366(第7・35図) D地区の北部で検出した東西方向の溝である。規模は、幅1.4～2.0m、検出長12m、深さ0.05mを測る。非常に残りの悪い遺構である。図化できないが、奈良時代末から平安時代前期に該当する土器小片が出土した。

(4)平安時代中期

この時期に該当する遺構は確認していない。しかし、平安時代末期の遺構、特にS D 111から平安時代中期の無釉陶器や緑釉陶器などが出土している。これは、この周辺に当時の遺構が存在したことを示すもので、平安時代末期以降の土地利用により削平されてしまったため、当該期の遺構を検出するには至らなかったものと推測される。過去の下海印寺遺跡の調査では、平安時代の柱穴や土器埋納土坑といった遺構以外に、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器などの遺物の出土が確認されている。緑釉陶器・灰釉陶器が出土することから、下海印寺遺跡に存在した集落は、一般的な農村集落ではないことが指摘されている^(注6)。今回の調査地から無釉陶器や緑釉陶器が出土したことは、その集落が西条地区にまで及んでいたと考えられる。

(5)平安時代末期(第36図)

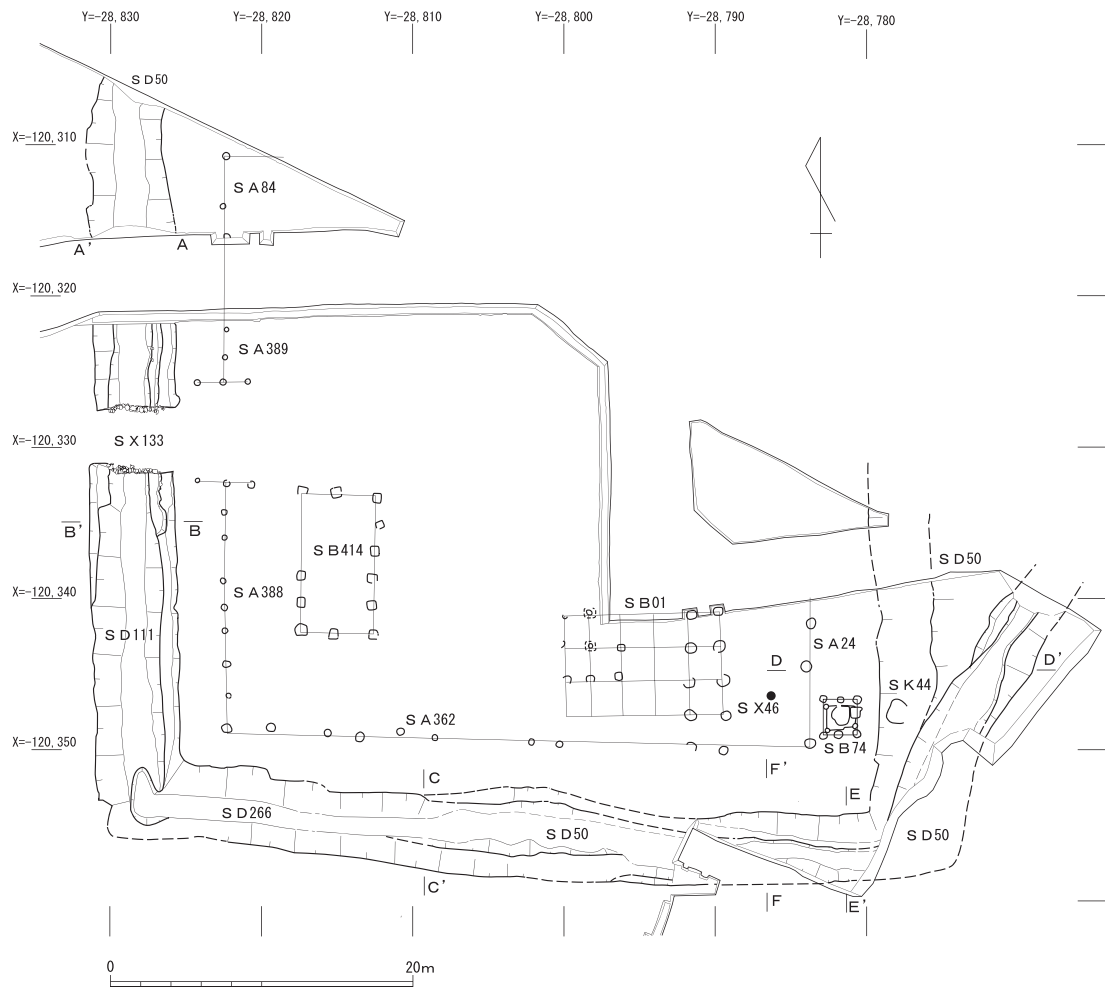
この時期の遺構には、C・G・H・J地区で検出した、堀と塀で区画された一辺50m四方の屋敷跡がある。屋敷地内では、方形区画に平行あるいは直行する形で掘立柱建物跡3棟を検出した。以下、関連する遺構について説明したい。堀については西・南・東辺に分けて記す。

西辺北側・堀S D 50(第14・15・37図) J地区中央付近で検出した真南北方向の堀である。調査区の北端では、堀が東側に曲がる様相が認められたことから、地区外のすぐ北側で東に屈曲するものと考えた。遺構の規模は、屈曲付近で幅5.0m、深さ1.6m、J地区の南端では幅4.8m、深さ1.2mを測り、堀の底は南側に下る傾斜を有する。堀の底には幅0.5m、深さ0.3mの断面「U」字状の溝がさらに掘られており(第37図23層)、溝内には拳大から人頭大の石が埋められていた。これは南方の土橋まで続く。後述のように、暗渠排水として利用されていたものと推測される。

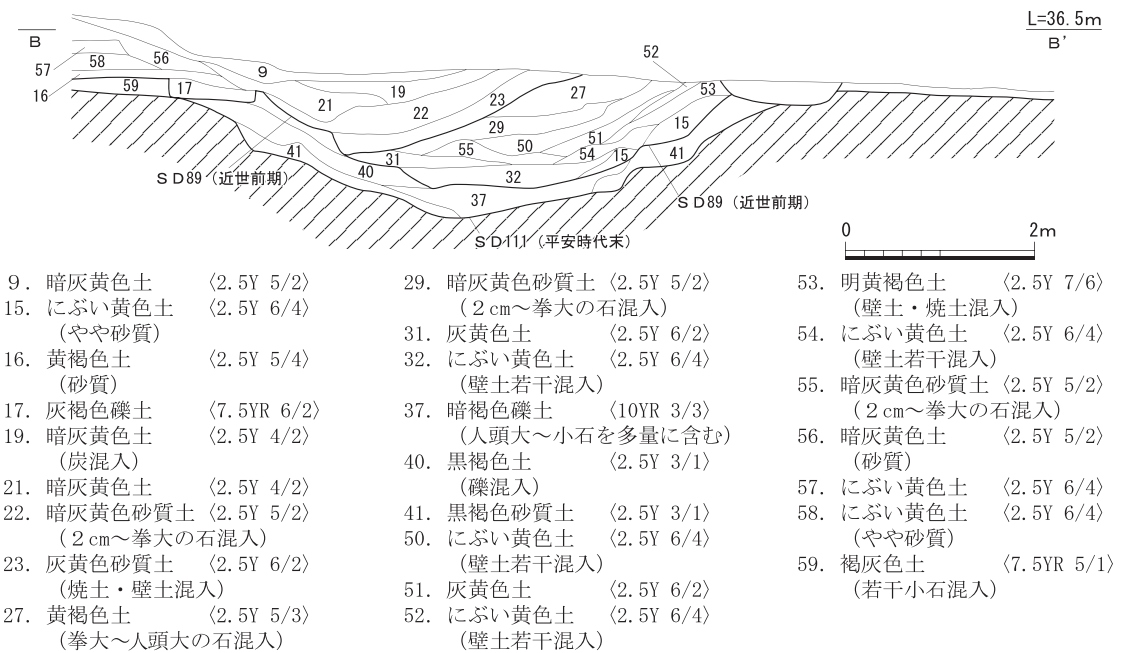
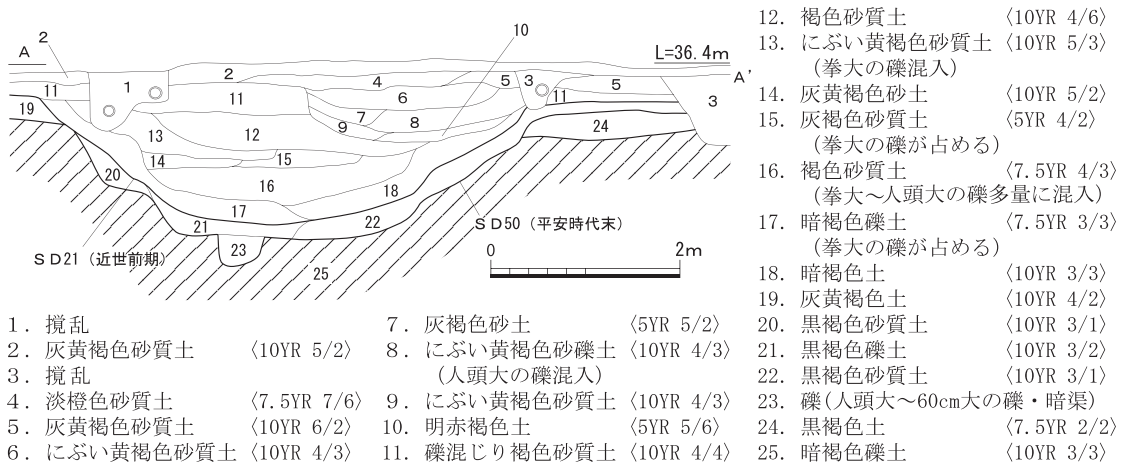
西辺南側・堀S D 111(第5・6・37図) C地区で検出した真南北方向の堀である。C地区の北辺近くで土橋S X 133が設けられている。S X 133の南側での堀の規模は、幅6.2m、深さ1.4mを測る。堀の断面形は、緩やかな「U」字形をなす。堀の東側立ち上がりの中位付近に、幅0.6mの平坦面(テラス状遺構)が認められた。このテラス部直上や、最下層の埋土である暗褐色礫土(第37層)や黒褐色砂質土(第41層)から、瓦器碗や土師器皿や瓦片などが多量に出土した。堀の底

は、南へ傾斜する。また、S X133南側の石組みから南へ約2m付近まで、幅0.5m、深さ0.2mの暗渠排水が認められた。暗渠排水の断面形は「U」字形で、中に拳大～人頭大の石が多量に埋められていた。この暗渠排水は、C地区の北側のJ地区北端から続いている。土橋を造った造成土を除去すると同じ規模の暗渠排水が土橋下にも構築されているのが認められ、土橋を築く際に付随して設けられた施設と判断される。S D111は、土層の観察では滞水していた状況を示しておらず、空堀であったと推測される。土橋から南方約25m付近で大きく屈曲して東方に続く。この東西方向の堀については、S D266として調査を行った。

南辺堀 S D266・50 (第5・38・39図) C地区南端で検出した、S D111南端からほぼ直角に屈曲して東西に延びる S D266と G・H地区の南端で検出した東西方向の S D50は同一の堀で、方形の屋敷地の南限を画している。堀の規模は、幅4.0～5.0m、深さ1.9mを測る。南北方向の S D111南端部と接合する地点から、東方に長さ50mにわたって検出し、東端では東辺を画する堀 S D50となる。南限を画する堀の底は西から東方に下り、方形区画の北側から南東コーナーに向けて排水されていたと推測される。H地区南端で検出した S D50の土層断面(方形区画の南東隅付近)の観察において、灰色砂質土(第19層)や黒褐色粘砂土(第20層)が見られたことから、南東



第36図 平安時代末期屋敷跡全体図

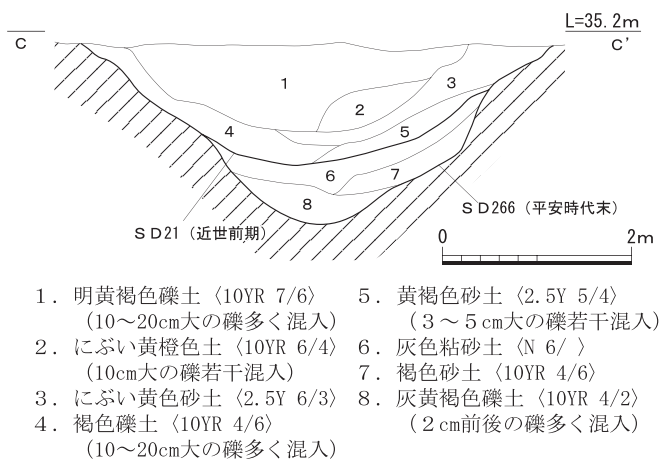


第37図 J 地区堀 S D50・C 地区 S D111断面図(断面図の位置は第36図参照)

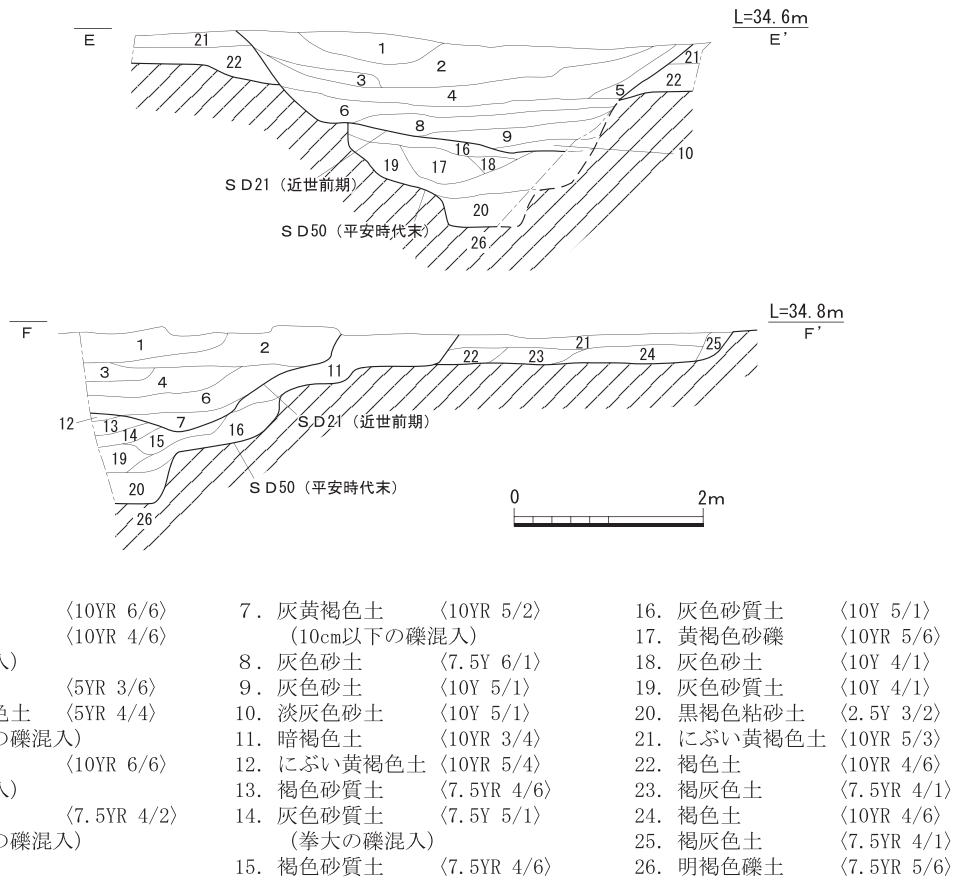
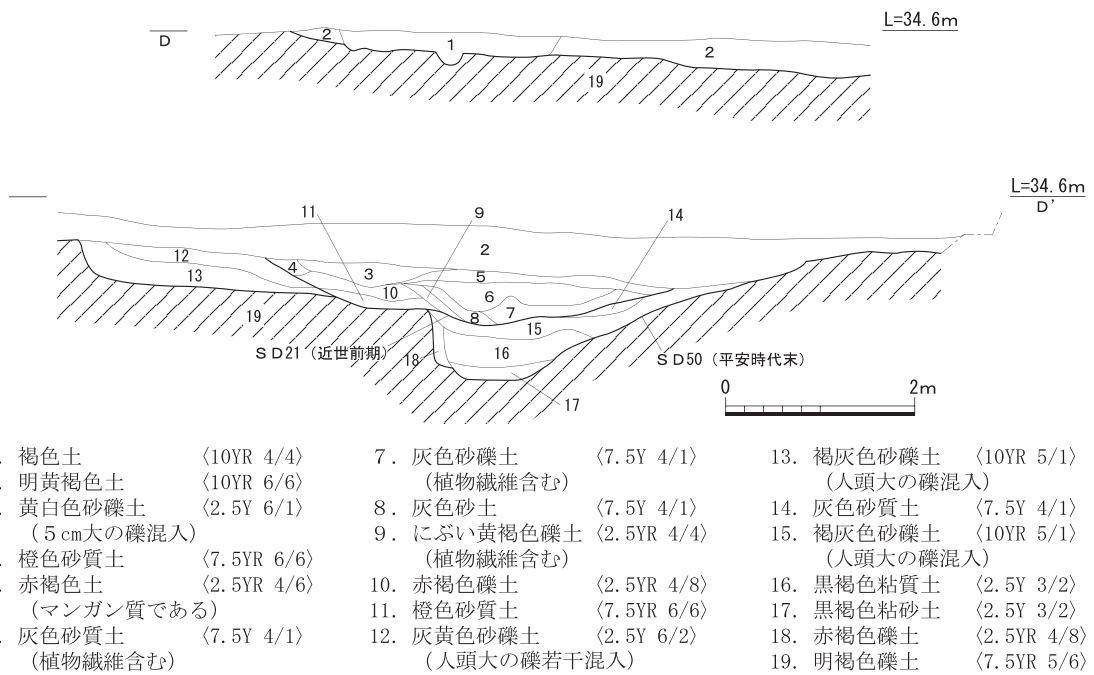
隅付近だけが滞水していたものと推定される。方形に区画された堀の南東コーナー部には、調査前には「田苗池」が存在した。地元の方の話では、田苗池は水が枯れることがないと言われていたそうであるが、これは地下に「水の流れ道」としての堀が掘削されていたことに因るものと考えられる。

東辺堀 S D50 (第12・13・39図)

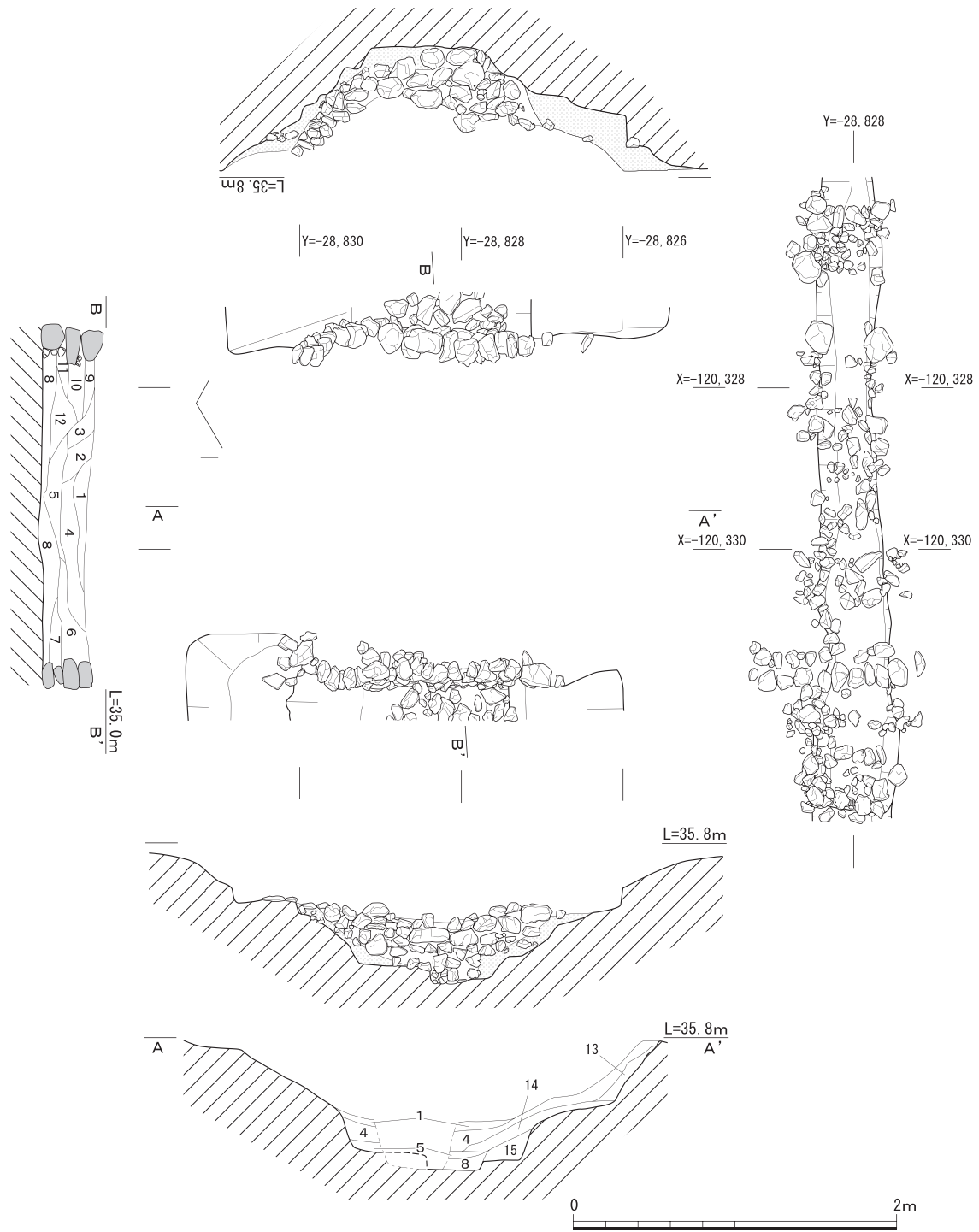
H 地区東部で検出した。堀の底は、



第38図 C 地区堀 S D266断面図(断面図の位置は第36図参照)



第39図 H地区堀 S D 50断面図



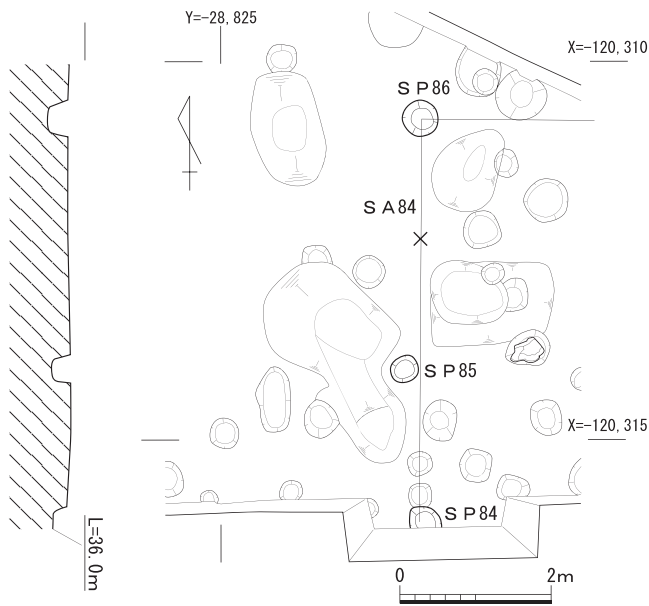
- | | | |
|---|--|---|
| 1. 褐色砂礫土
(5~10cm大の礫混入) | 7. 黒褐色礫土
(10cm大の礫若干混入) | 11. 褐色砂土
(10YR 4/4) |
| 2. 褐灰色砂礫土
(10~20cm大の礫混入) | 8. 黒褐色礫土
(7.5YR 3/1)
(5~20cm大の礫多く混入) | 12. 暗褐色砂礫土
(10~20cm大の礫混入)
(7.5YR 3/3) |
| 3. 黒褐色砂礫土
(2~5cm大の礫混入)
(10YR 3/2) | 9. にぶい黄褐色土
(若干砂質)
(10YR 4/3) | 13. 灰黄褐色砂質土
(10YR 4/2) |
| 4. 黄灰色砂土
(2.5Y 4/1) | 10. 褐色土
(若干砂質)
(10YR 4/4) | 14. にぶい黄褐色砂礫土
(2~5mm大の礫混入)
(10YR 5/4) |
| 5. オリーブ褐色砂土
(2.5Y 4/4) | | 15. にぶい黄褐色砂土
(10YR 5/4) |
| 6. 暗褐色砂礫土
(5cm前後の礫混入)
(10YR 3/4) | | |

第40図 C地区土橋S X133実測図

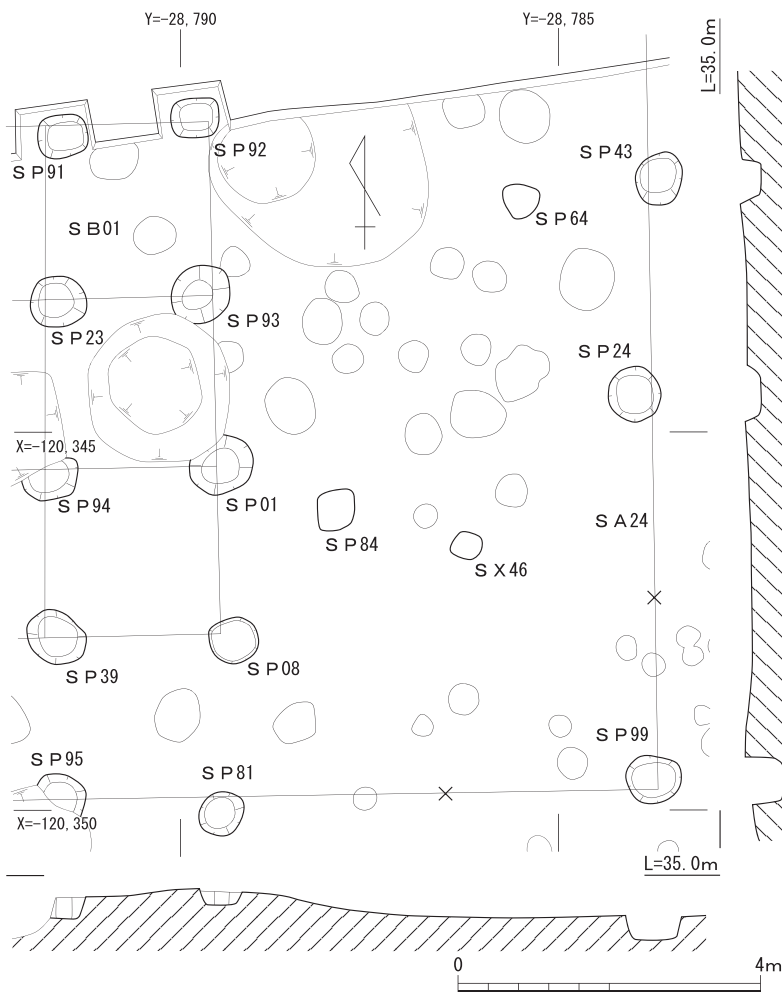
北から大きく東に振れて検出したが、堀の西側肩部はほぼ真北に掘られている。堀自体は北東－南西に掘削されているが、掘形の位置を重視すると方形区画を意識したものと思われる。堀の底が北東に振れることについては、時期は異なるが、隣接する上内田地区において検出した古墳時代中期後半から後期の溝も大きく北へ蛇行して東流しており、この溝は微地形に沿って流れていると考えられる。堀 S D50 もまた立地する微地形に応じて設けられたものと思われる。東辺半ば付近では、浅く掘りこんだ堀の中央付近をさらに深く掘り込んでいた。堀の上半部で幅8.4m、深さ0.6mを測る。さらに深く断面「U」字形の彫り込みは、幅2.4m、深さ0.6mを測る。最下層に堆積していた黒褐色粘質土(第39図第16層)・黒褐色粘砂土(第39図第17層)から瓦器碗や土師器皿などが出土した。

土橋 S X133・暗渠排水(第5・40図) 土橋は、西辺堀の中央部で検出した。土橋北側と南側に拳大から径0.6m大の自然石を積み上げ、土止めとしていた。堀は大阪層群の礫層を掘り込んでいることから、土橋の土止め石は堀構築時に掘り出した石を用いたものと思われる。石組みはさほど精緻に積まれていないが、土橋北側の石組みよりも土圧がかかる南側の石組みが密に積まれていた。規模は幅3.8～4.0mである。土橋の上半部は、江戸時代の溝(S D89)で大きく「U」字状に削平されていた。また、土橋内の埋土中から平安時代中期の土器片が混入した状況で出土した。今回の調査対象地内で検出した土橋はこの1か所だけで、南辺には存在しないことが調査で明らかとなっている。東辺については西辺と同じく、辺中央に土橋が存在すると仮定すると、対象地外となる。しかし、東辺堀の底部から土器類とともに人頭大の自然石が数石出土したことから、東辺にも同様の土橋が存在した可能性が高いと考える。西辺中央に土橋を設ける際に、まず土橋の南北に暗渠を構築している。幅0.6m、深さ0.1mの断面「U」字形の溝を掘り、中に拳大から人頭大の石を敷き詰めていた。暗渠施設は、土橋南辺の石組みの南方2.5m付近から北側に向けて、北西コーナー付近までの長さ27mにわたって敷設されていた。このような暗渠を設けることにより、湧水・雨水などが土橋によってせき止められて滞水しないようにしたものと考えられる。

西辺柵列 S A84・388・389(第5・14・41・43図) S A84はJ地区で検出した柱穴列で、西辺堀の東側肩部から約3m東側に位置する南北方向の柵列である。堀の内側を囲む柵列の北西部分にあたる。検出長は5.4mで、3間分である。後述するように、屋敷の建物配置に規則性が高いことを考慮すると、S P84は想定北辺堀から南へ3m付近にあたることから、この柱穴位置で東に屈曲すると考えた。S P84に続く東側の柱穴は検出できていない。柱穴の規模は径0.4m、深さ0.3mを測り、柱間は1.5～2.0mである。S A389は、S A84から南に続く柱穴列で、土橋までの柵列である。C地区で検出した柱穴は、径0.3～0.4m、深さ0.3mを測る。柱間は1.5～2.0mである。検出長は3.6mで2間分を確認した。S A388は、土橋の南側から屋敷地の南西コーナーまでの柵列である。柱穴は、径0.3～0.4m、深さ0.2～0.4mを測る。検出長は16.3mで、8間分を確認した。S A388・389はともに土橋の手前で終わり、そこから東西に柱穴を1基ずつ平面T字状に検出した。北と南のT字の間隔は6.6mと、土橋の幅よりも広い。間隔が6.6mとやや広いが、



第41図 J地区柵列S A84実測図



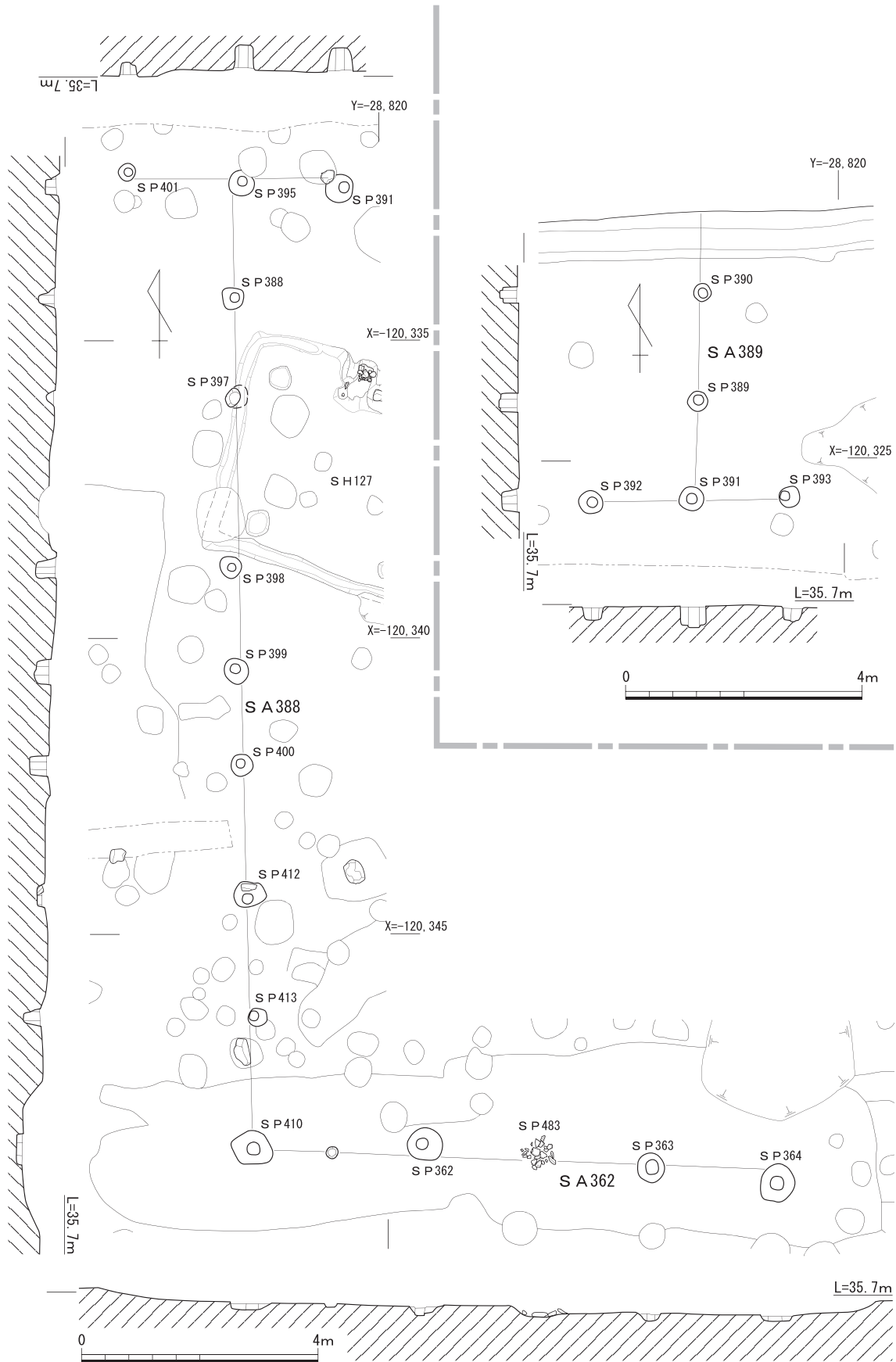
第42図 H地区柵列S A24実測図

土橋の東に位置することから、門のような施設が存在した可能性を想定したい。

南辺柵列S A362・24(第5・12・36・42・43図) C地区からH地区にかけて検出した東西方向の柵列である。後世の攪乱によって、かなりの部分が検出できなかったが、推定18間分にわたって検出した。南辺堀の北側掘形から北に3~4mの付近を堀に沿って築かれており、柵列の方位は、N87°Wを測る。S A362は南辺柵列の西側部分の柵列で、径0.5~0.7m、深さ0.2mを測る。柱間は1.5~2.0mである。S P483は柱

穴の検出には至らなかったが拳大の石を平坦に敷き詰めていたことから、柱穴の根石であったと考えた。S A24は南辺柵列の東側部分の柵列で、径0.6m、深さ0.2~0.4mを測る。柱間は2~3mである。

東辺柵列S A24(第12・42図) H地区で検出した。I地区では、後世の攪乱のため検出できなかった。東辺の堀が緩やかに傾斜する地点より、西方4m付近で検出した。径0.6~0.8m、深さ0.2~0.5mを測る。柱間は、2.5mである。これら、堀の内側に設けられた柵列は、柵列付近や堀内埋土に土壁の堆積が認められないことから、板塀であったと考え

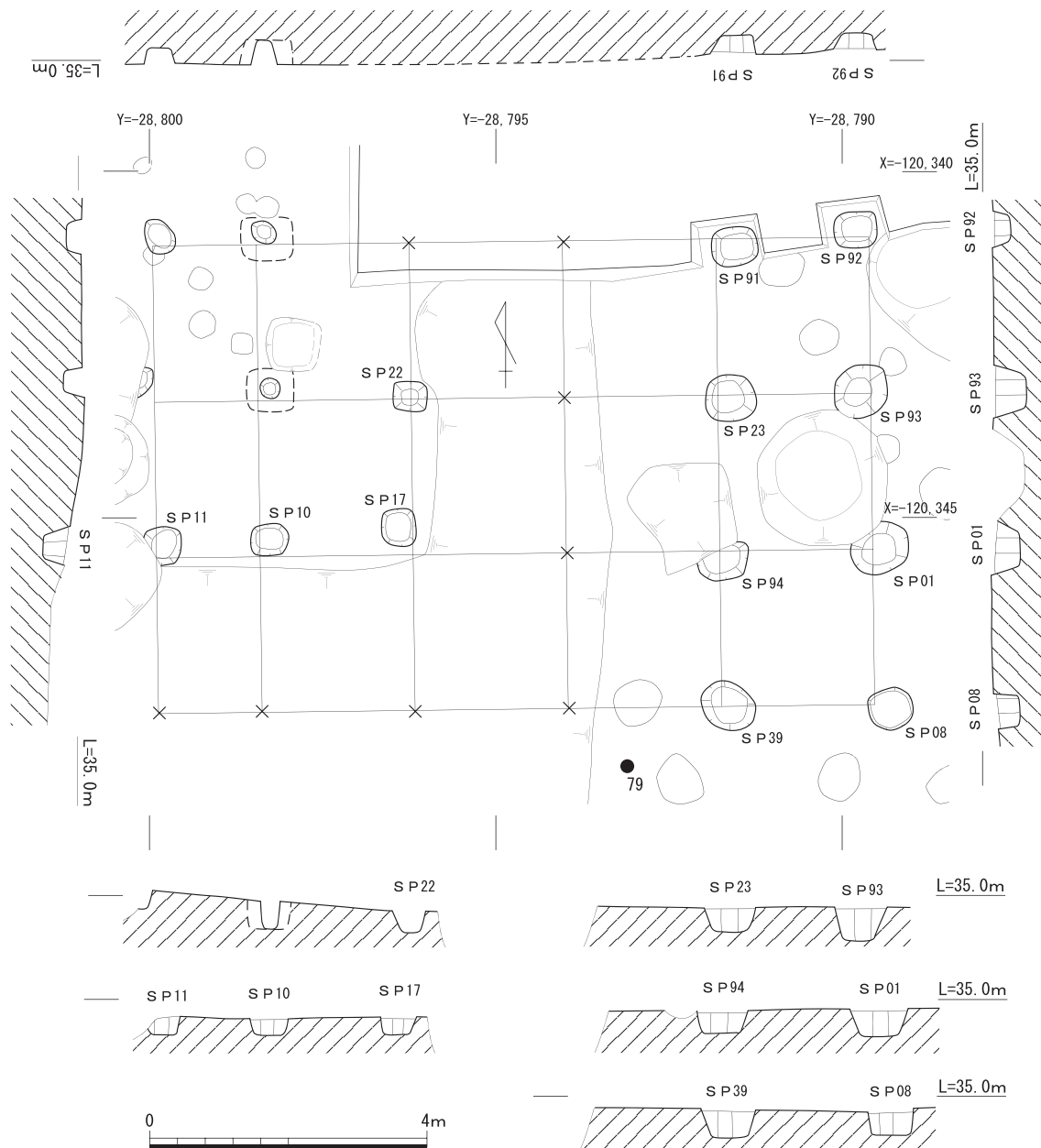


第43図 C地区柵列S A 362・388・389実測図

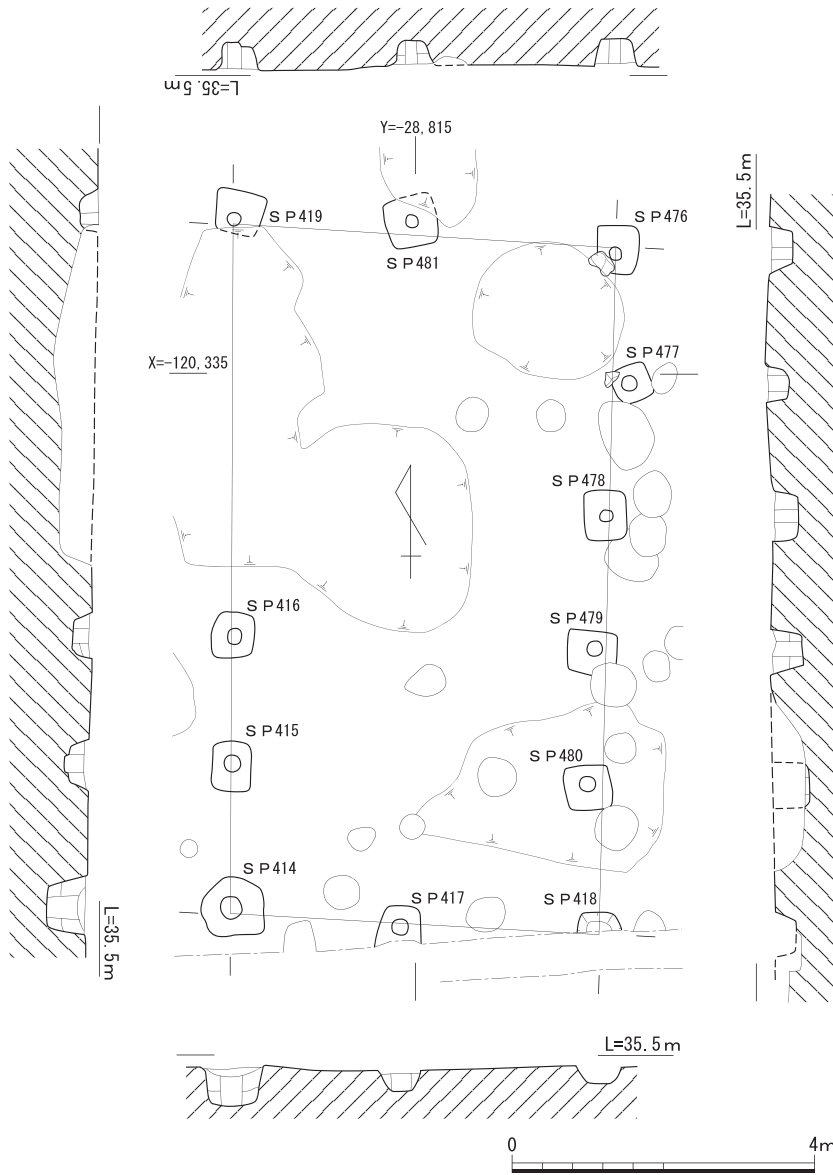
る。

掘立柱建物跡 S B 01 (第44図) C・H地区で検出した、3間(6.8m)×4間(8.9m)の東西棟の総柱建物跡である。柱間は2.2mである。西辺に柱間1.5mの庇が付く。建物の中央部・南西部の柱穴は後世の攪乱によって消失していた。また、北西部の柱穴の掘形は検出できなかった。柱穴の平面形は、円形、隅丸方形を呈す。その規模は0.5~0.8m、深さ0.3~0.5mを測る。柱痕跡は、径0.3mである。建物の方位は、真東西を向く。今回検出した建物の中で最も大きな規模で、屋敷の主殿もしくはそれに準じるものと推測される。

掘立柱建物跡 S B 414 (第45図) 土橋の南東部で検出した建物跡である。建物の北辺が土橋南辺にほぼ揃う位置にある。一部攪乱で消失していたが、2間(4.8m)×5間(9.1m)の南北棟の建物に復元できる。柱穴の平面形は隅丸方形で、一辺0.5~0.8m、深さ0.3~0.5mを測る。柱痕跡は



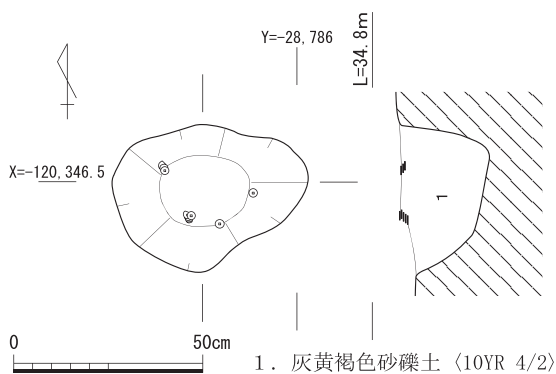
第44図 H地区掘立柱建物跡SB01実測図



第45図 C地区掘立柱建物跡S B414実測図

径0.2~0.3mである。柱間は1.6~1.8mである。建物の方位は、真北を向く。

埋納土坑 S X46 (第12・42・46図) 掘立柱建物跡 S B01の東辺より東方約3mの地点で検出した。規模は、0.4×0.5m、深さ0.23mを測る。埋土中から皇朝十二銭17点が出土した。これらは、遺構検出時に、4か所で3~5点が重なる形で出土した。内訳は、饒益神寶1点、貞観永寶15点、寛平大寶1点の計17点(第72図)である。また、掘立柱建物跡 S B01の S P93付近から長年大寶1点、寛平大寶1点が出土しており、同様の遺構がこの付近にも



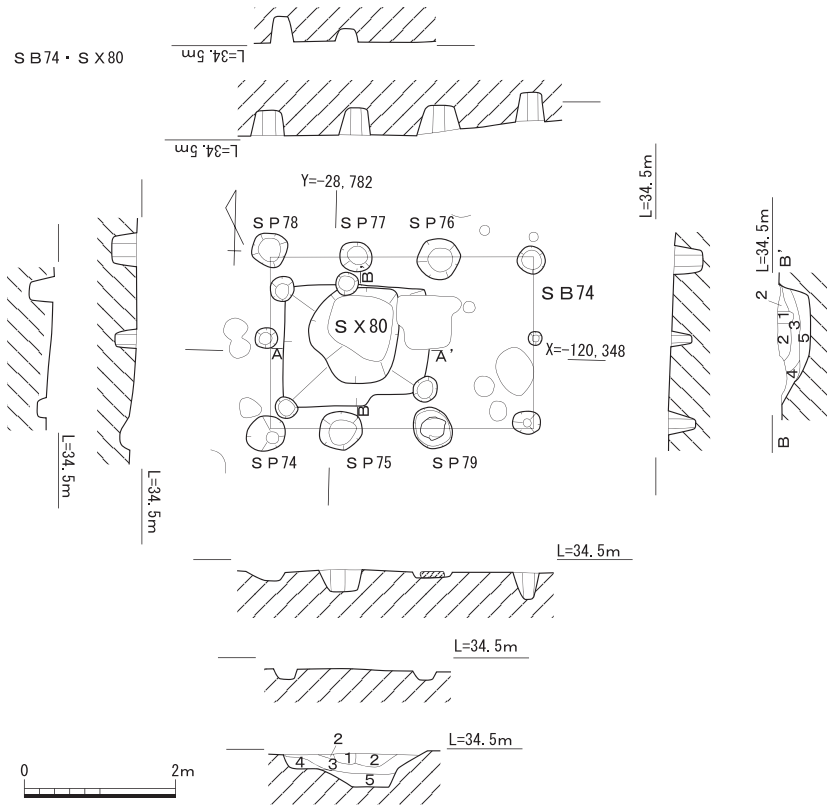
第46図 H地区埋納土坑 S X46実測図

存在した可能性がある。いずれも9世紀中頃から後半にかけて初鑄されたものである。今回検出した平安時代末期期の屋敷とはかなりの時期差があるものの、その屋敷建設に伴う祭祀的な遺構、もしくはその前身の屋敷に伴う祭祀遺構であった可能性がある。

掘立柱建物跡 S B74 (第12・47図) 屋敷跡の南東コーナー付近、柵列と堀の間に検出した。柵列や堀に主軸を揃えており、建物規模は2間

(2.3m) × 3間 (3.5m) を測る。建物の規模やその検出した位置から、櫓的な建物と考える。柱穴は径0.2~0.5m、深さ0.4mを測る。また建物内側に平行して、方形の土坑 S X80と土坑肩部で径

0.3m、深さ0.2mの柱穴4か所を検出した。土坑S X80の上面での規模は1.9×1.6mで、その中央部を径約1.2mの範囲にわたって掘り込んでいる。深さは0.5mを測る。埋土中から土器片が出土したが、時期の判明するものはなかった。



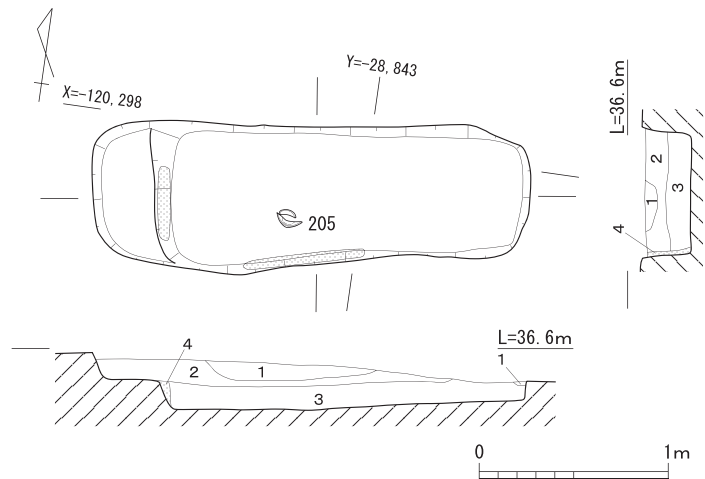
- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| 1. 灰黄褐色砂質土 <10YR 4/2> | 4. 褐色砂礫 <10YR 4/6> |
| 2. にぶい黄褐色砂質土 <10YR 4/3> | 5. 黒褐色砂質土 <7.5YR 3/2> |
| 3. 暗褐色砂質土 <7.5YR 3/3> | |

第47図 H地区掘立柱建物跡S B74・土坑S X80実測図

土壙墓S K34(第9・48図) E地区の北東部で検出した。規模は2.3×0.8m、深さ0.3m、主軸はN82°Eを測る。東部は、大きく削平を受けている。棺痕跡を部分的に確認した。棺内から白磁椀(205)が出土した。

(6) 鎌倉時代(第49~59図)

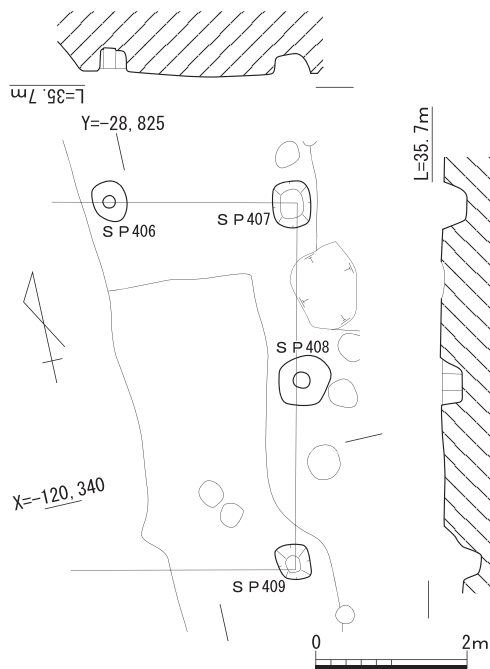
この時期の遺構には、主軸が平安時代末期の真北・真東西を向く遺構群とは異なり、大きく西に振れる掘立柱建物跡群がある。建物跡は、C地区からE地区で検出した。特にE地区では、建物跡に伴う柱穴ならびに同一面で検出した柱穴から出土した遺物などから、鎌倉時代には方形に区画された屋敷地は消滅し、大きく西に振る建物群が、この地に形成されたと考える。



- | | |
|--------------------------------------|-------------------------------------|
| 1. コンクリート・攪乱 | 3. 極暗赤褐色土 <5YR 2/4>
(1cm前後の小石含む) |
| 2. 暗赤褐色砂質土 <5YR 3/6>
(2~3cm大の礫含む) | 4. 赤褐色土 <5YR 4/6>
(棺痕跡か) |

第48図 E地区土壙墓S K34実測図

掘立柱建物跡S B406(第5・49図) C地区で検出した。建物跡の西半部は江戸時代の溝によって削平されている。規模は2間(4.9m)×1間(2.5m)以上で、主軸はN13°Eを測る。柱穴は径0.4~0.6m、深さ0.3~0.5mである。



第49図 C地区掘立柱建物跡 S B 406実測図

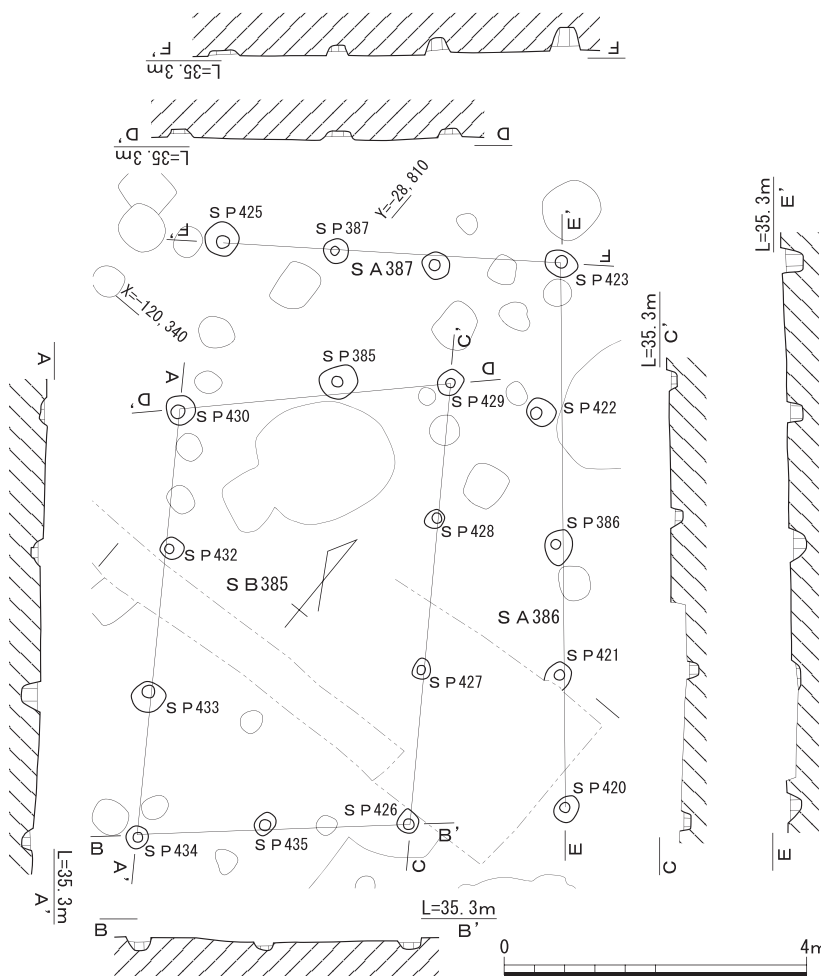
掘立柱建物跡 S B 385 (第5・50図) C地区で検出した。東・北側を柵列で囲まれた建物である。建物の規模は、2間(3.5m)×3間(5.9m)、主軸はN34°Wである。柱穴は0.3~0.5m、深さ0.2mと小規模なものである。柱穴からは、わずかな土器片が出土したが、時期を決定できるものはなかった。E地区で検出した建物群と同じく、その軸を大きく西に振ることから、鎌倉期の建物跡と考えた。

柵列 S A 386・387 (第5・50図) S A 386は、S B 385の東方1.5~1.8mで検出した南北方向の柵列で、4間(7.2m)分を確認した。柱穴は径約0.3m、深さ約0.2mで、柵列の方位はN41°Wである。S A 387は、S B 385の北方1.7~2.1mで検出した東西方向の柵列で、主軸はN54°Eである。3間(4.4m)分を検出し、柱穴は径0.3~0.4m、深さ0.1~0.3m

を測る。

掘立柱建物跡 S B 12 (第9・51図) E地区の南東部で検出した南北棟の建物跡である。規模は、1間(2.1m)×2間(5.5m)で、主軸はN6°Wを測る。柱穴は円形で、径0.2~0.4m、深さ0.1~0.3mを測る。東辺中央の柱穴 S P 40から土師器皿が出土した。

掘立柱建物跡 S B 15 (第9・51図) E地区の南西部で検出した南北棟の建物跡である。規模は1間(2.0m)×2間(4.7m)で、主軸はN30°Wを測る。柱穴は円形で、径0.3~0.5m、深さ0.2~0.4m



第50図 C地区掘立柱建物跡 S B 385、柵列 S A 386・387実測図

を測る。

掘立柱建物跡 S B 30 (第9・52図) E地区の北東部で検出した、主軸方向が大きく東に振れる建物跡である。規模は3間(4.6m)×4間(7.0m)で、主軸はN40°Eを測る。柱穴は円形で、径0.2~0.5m、深さ0.1~0.4mを測る。柱穴 S P 33から土師器皿(265・266・283)が出土した。

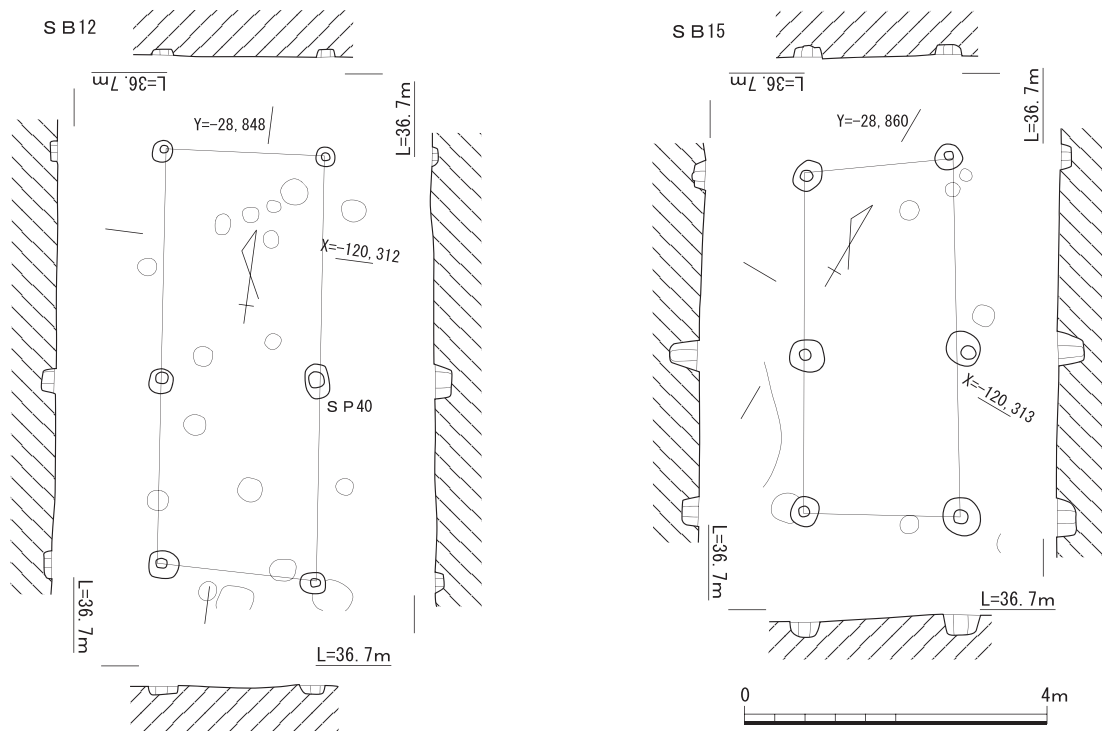
掘立柱建物跡 S B 46 (第9・52図) E地区の中央部で検出した、主軸方向が大きく東に振れる建物跡である。規模は2間(4.5~5.5m)×3間(9.6m)で、主軸はN53°Eを測る。柱穴は円形で、径0.3~0.5m、深さ0.1~0.2mを測る。柱穴 S P 52から土師器皿(269)が出土した。

掘立柱建物跡 S B 58 (第14・53図) J地区の東部で検出した南北方向の建物跡である。規模は2間(3.6m)×2間(4.2m)以上で、主軸はN25°Wを測る。柱穴は円形で、径0.4~0.5m、深さ0.3mを測る。

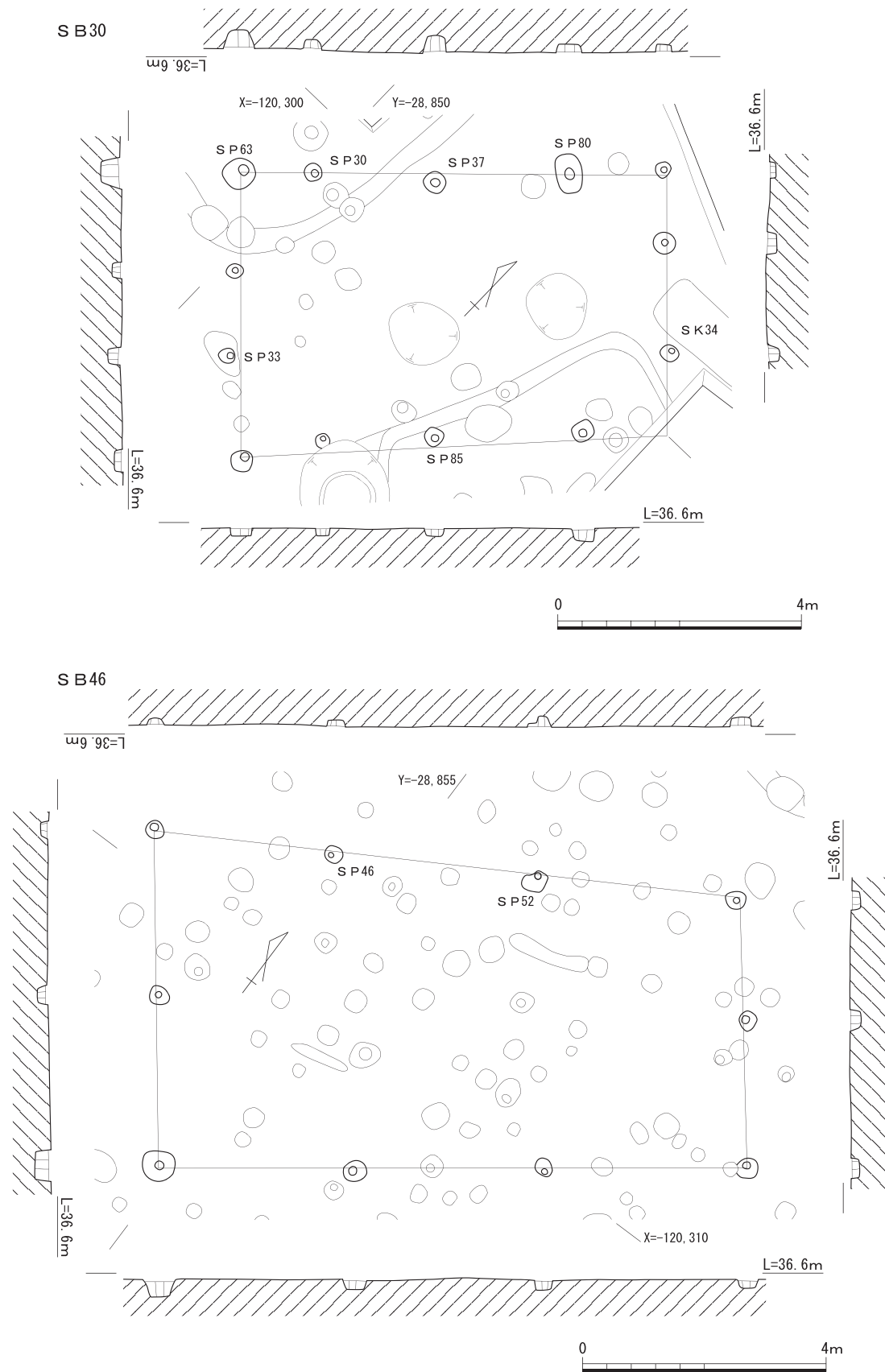
掘立柱建物跡 S B 30 (第14・54図) J地区の南西部から検出した南北棟の建物跡である。建物南東部は後世の攪乱によって消失していた。規模は2間(5.7m)×3間(8.2m)で、主軸はN14°Wを測る。柱穴は、径0.3~0.5m、深さ0.3~0.4mである。

掘立柱建物跡 S B 49 (第14・55図) J地区の中央部で検出した建物跡である。建物東側は、方形に巡る平安時代後期の堀 S D 50によって削平されていた。建物の規模は2間(4.1m)×1間(2.3m)以上で、主軸はN65°Wを測る。柱穴の規模は、径0.4~0.6m、深さ0.2~0.3mである。

掘立柱建物跡 S B 08 (第8・56図) B地区の南東部で検出した。建物跡の規模は、2間(5.5m)×1間(3.4m)以上で、主軸はN21°Eを測る。柱穴の平面形は隅丸方形で、一辺0.5~0.7m、深さ0.3mである。切り合い関係から、長岡京期の溝 S D 79埋没後に築かれた建物である。柱穴内か



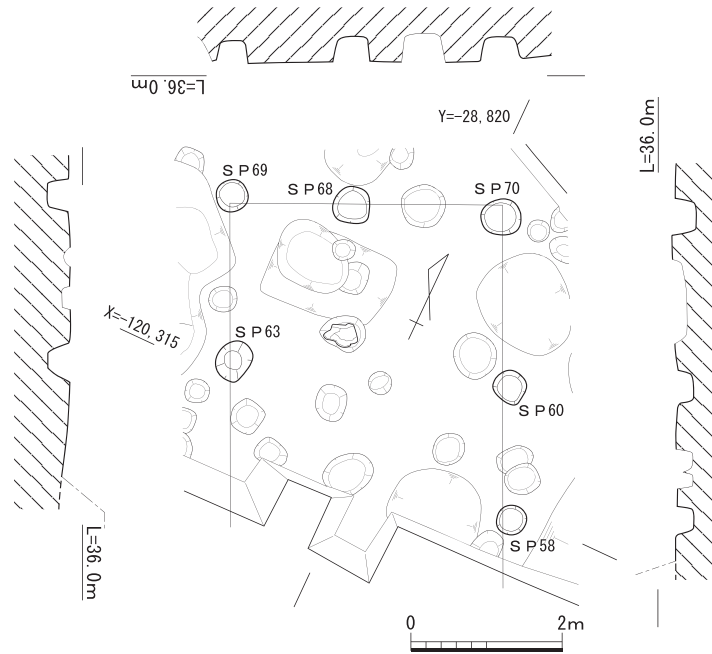
第51図 E地区掘立柱建物跡 S B 12・15実測図



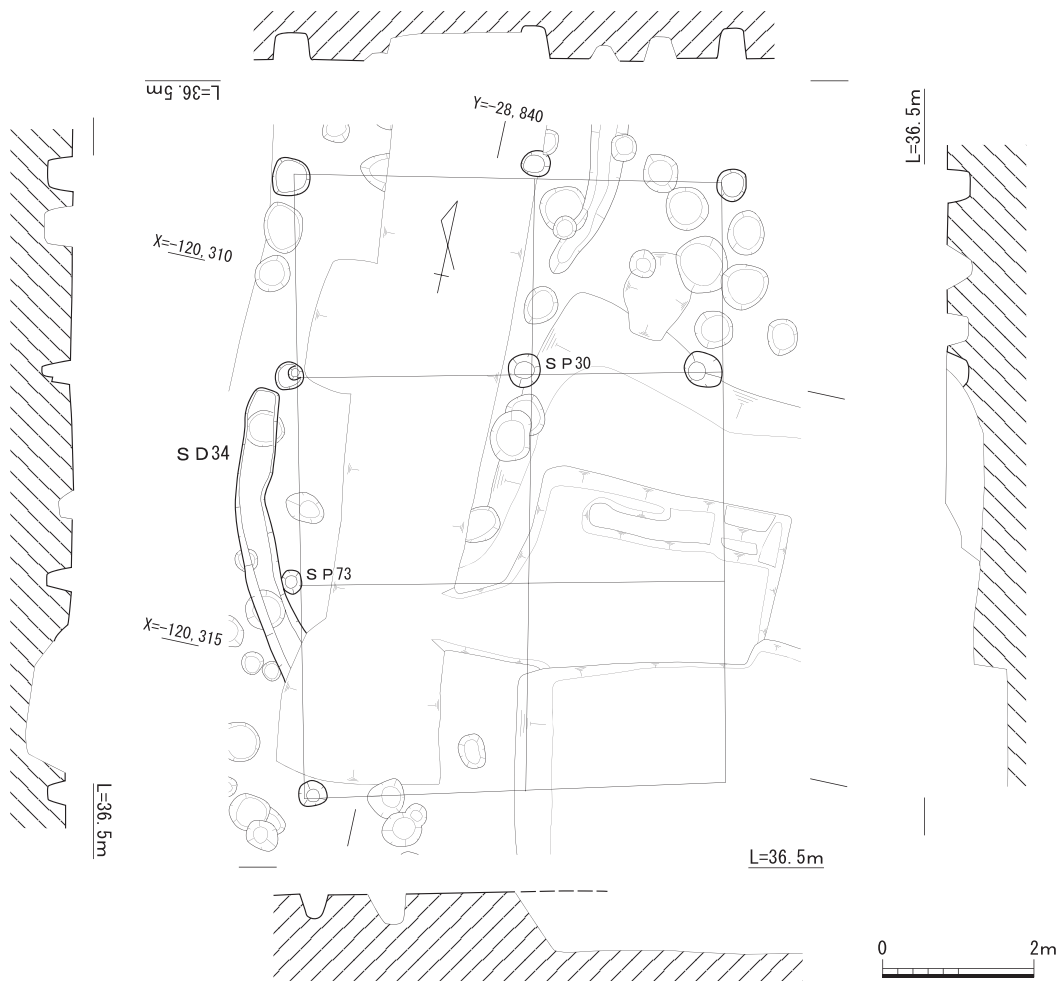
第52図 E地区掘立柱建物跡S B30・46実測図

らの出土遺物はなかったが、建物跡の軸方向が大きく斜傾することから、この時期のものと考えた。

掘立柱建物跡柱穴とその他の柱穴(第57図) 図示した柱穴はE地区で検出したもので、この地区で検出した柱穴は、土器が出土するものが多い。柱穴は褐色礫土(第10図第5層)から掘り込まれる。この褐色礫土は、小礫を多く含み、山砂利を混ぜ合わせて固く叩きしめられており、整地土と判断される。S P 40は掘立柱建物跡S B 12に、S P 33は掘立柱建物跡S B 30



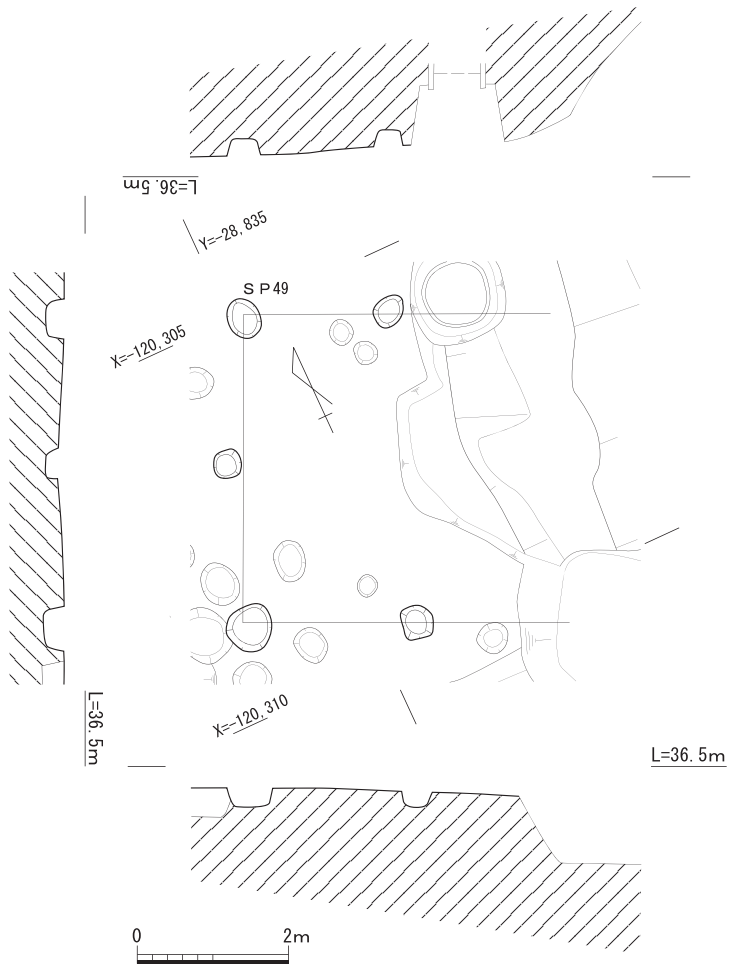
第53図 J地区掘立柱建物跡S B 58実測図



第54図 J地区掘立柱建物跡S B 30実測図

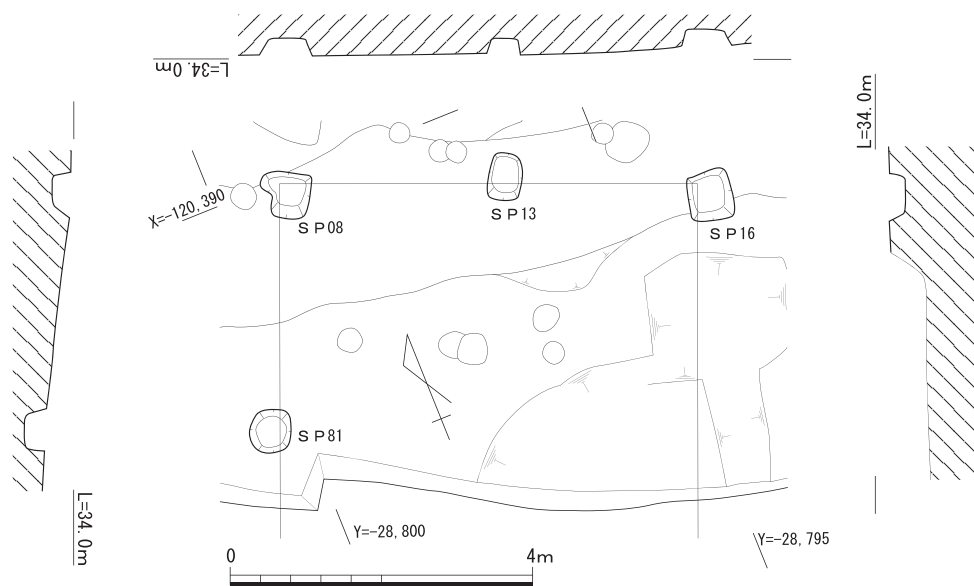
に、S P 52は掘立柱建物跡S B 46に伴う柱穴である。その他、時期の判明する土器片が出土した柱穴を掲載した。同じく、褐色礫土を掘り込むものである。これらの柱穴から出土した遺物の年代観を、E地区で検出した主軸方向が大きく斜傾する建物群の時期とした。またE地区以外で検出した同様の方位の建物群についても、明確に時期を判断できる遺物の出土はなく、E地区のような整地土を確認できなかったが、同時期の遺構であると考えた。

溝 S D 19・22・36・54(第14・58図) これら溝群は、J地区の北西隅で検出した。灰黄褐色土(第15図第34層)から掘り込まれる。灰黄褐色土は、整地土と判断したE地区の褐色礫土と同時期のものとする土層である。溝内から土師器片や瓦器片が出土した。S D 19は幅0.9m、深さ0.2mを測り、埋土は暗赤褐色土(第15図第28層)である。S

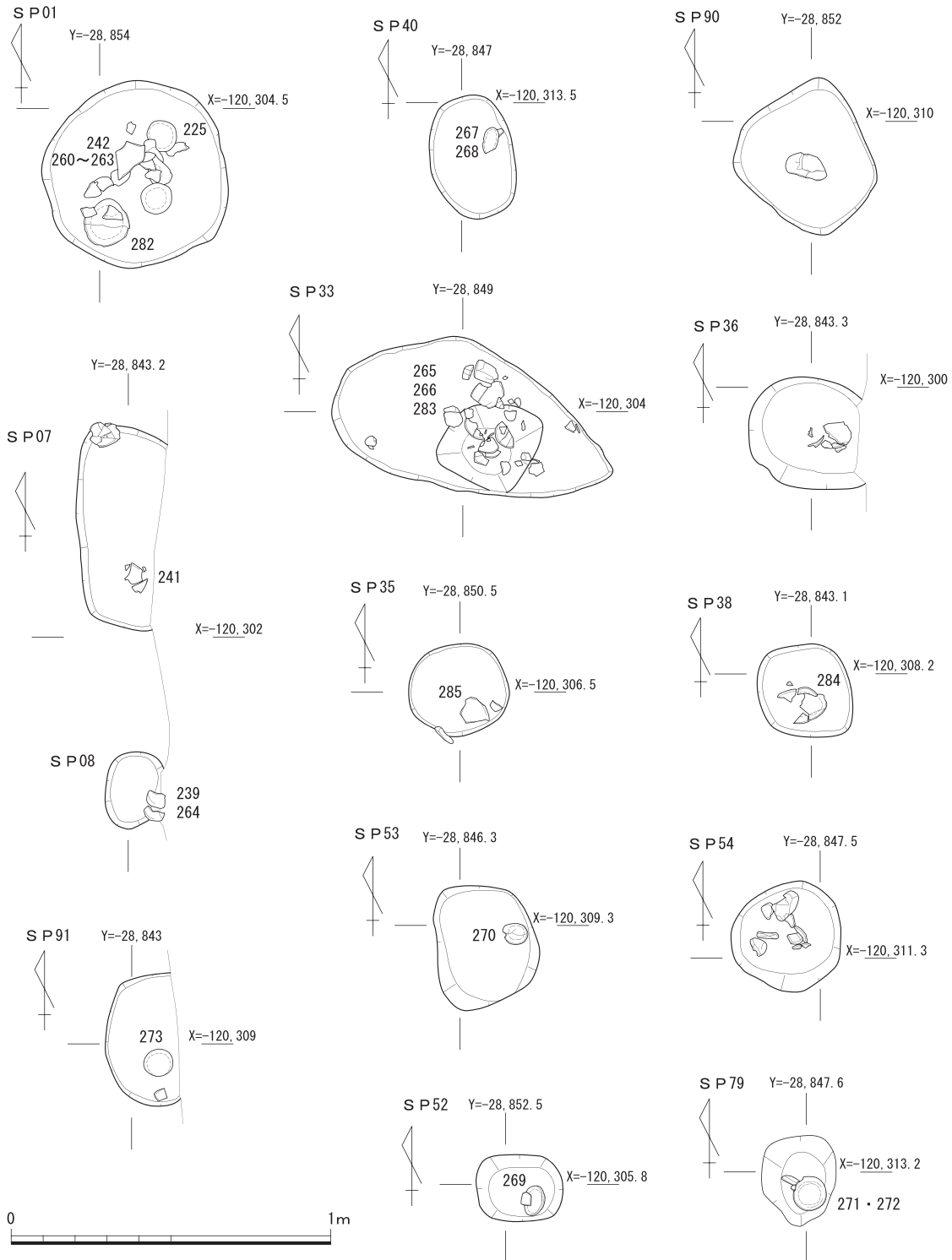


第55図 J地区掘立柱建物跡S B 49実測図

溝 S D 19は幅0.9m、深さ0.2mを測り、埋土は暗赤褐色土(第15図第28層)である。S



第56図 B地区掘立柱建物跡S B 08実測図



第57図 E地区柱穴内遺物出土状況図

D22は幅1.5m、深さ0.15mを測る。埋土はにぶい黄褐色土である。S D36と埋土は同じであるが、規模が異なることから別の遺構とした。S D36は幅0.5m、深さ0.15mを測る。S D54は、S D36に切られる形で検出した。幅0.65m、深さ0.15mを測る。埋土は暗褐色土であった。

土坑S K44(第12・59図) H地区の東側で検出した土坑である。掘形は方形で、二段に掘り込まれていた。方形区画の東辺堀を掘削している際に検出したことから、堀が徐々に埋まってい

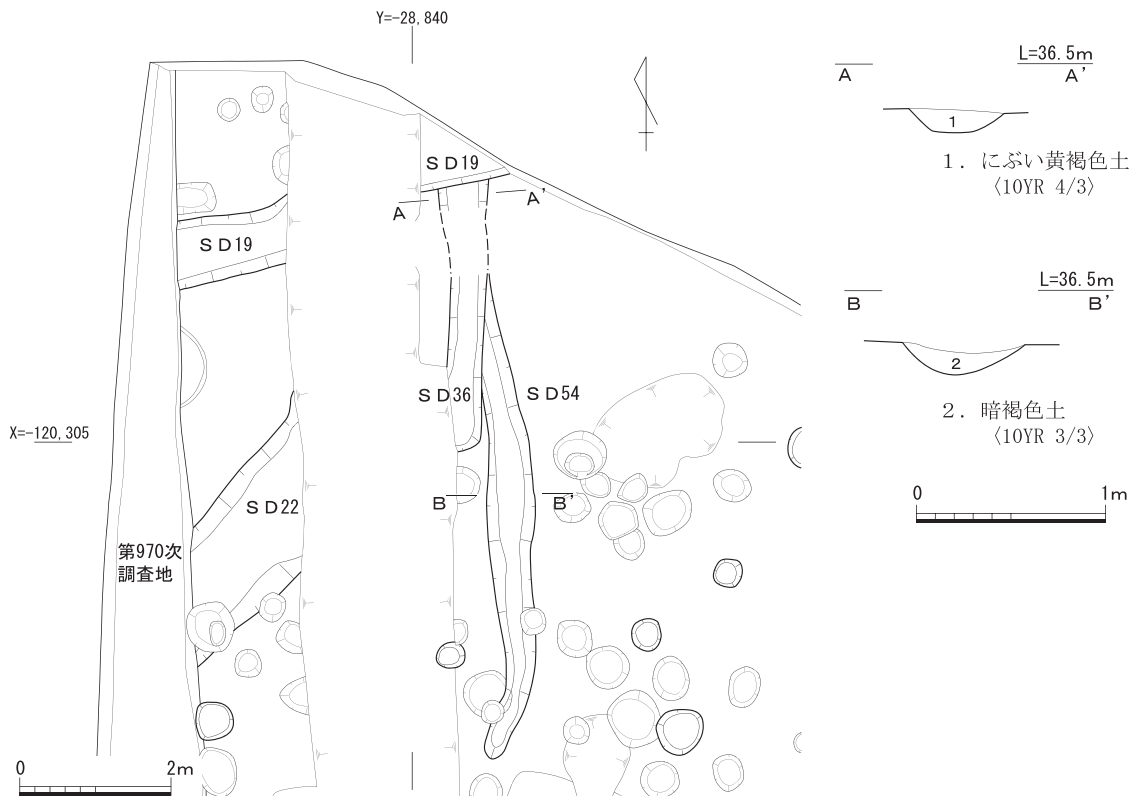
く過程の中で築かれたものと考えられた。土坑東側は後世の削平によって消失していた。規模は、南北1.5m、東西1.1m、深さ0.2mを測る。土坑内から、中国製陶磁器(212)、瓦器椀(233)、土師器皿(274~280)などが出土した。また、土坑の掘形に沿って0.2~0.3m大の石を確認したが、土坑の性格については不明である。出土した遺物群は、方形に区画された屋敷跡の存続時期を示す良好な資料と考えられる。そのほか、土馬(141)も出土した。

土坑 S K 86 (第12・59図) H地区中央付近で検出した方形の土坑である。一辺0.7m、深さ0.1mを測る。出土遺物はなく時期については不明であるが、褐色土(第39図24層)の上面で検出し、検出した層位から鎌倉時代の遺構と考える。土坑壁の一部から床面にかけて炭や赤色焼土が認められた。硬質に焼けた壁などは認められない。

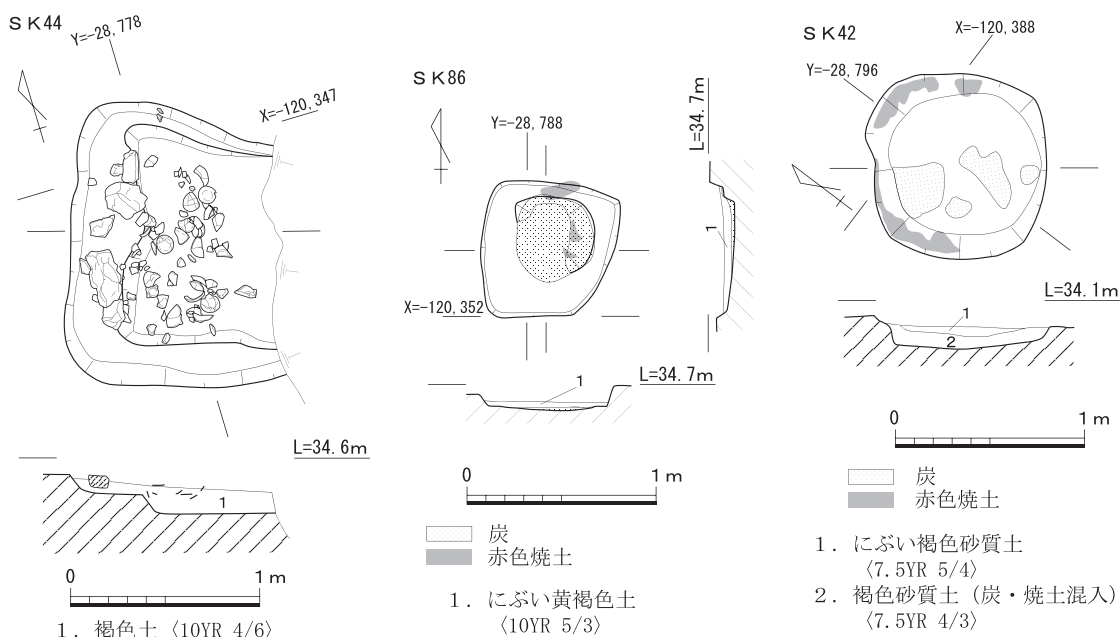
土坑 S K 42 (第7・59図) B地区の中央部で検出した隅丸方形の土坑である。一辺1.0m、深さ0.15mを測る。土坑床面付近には炭や焼土片が混入する褐色砂質土が堆積していた。出土遺物はないが、床面にはまとまって炭が広がっており、壁面は部分的に赤色に変色していた。土坑の性格については不明である。

(7)江戸時代

今回の一連の調査地は、江戸時代以降の攪乱より消失している部分が多く、遺構は部分的にし確認することができなかった。江戸時代のこの地は、下海印寺村として伏見宮家の領地であった。この一画に阿弥陀寺が存在していたが、今回の道路建設に伴って、寺は移転している。長岡京市教育委員会は下海印寺地区を対象に古文書・建築・民俗資料などから調査を行っている。^(注7)



第58図 J地区溝S D 19・22・36・54実測図



第59図 H地区土坑S K 44・86、B地区土坑S K 42実測図

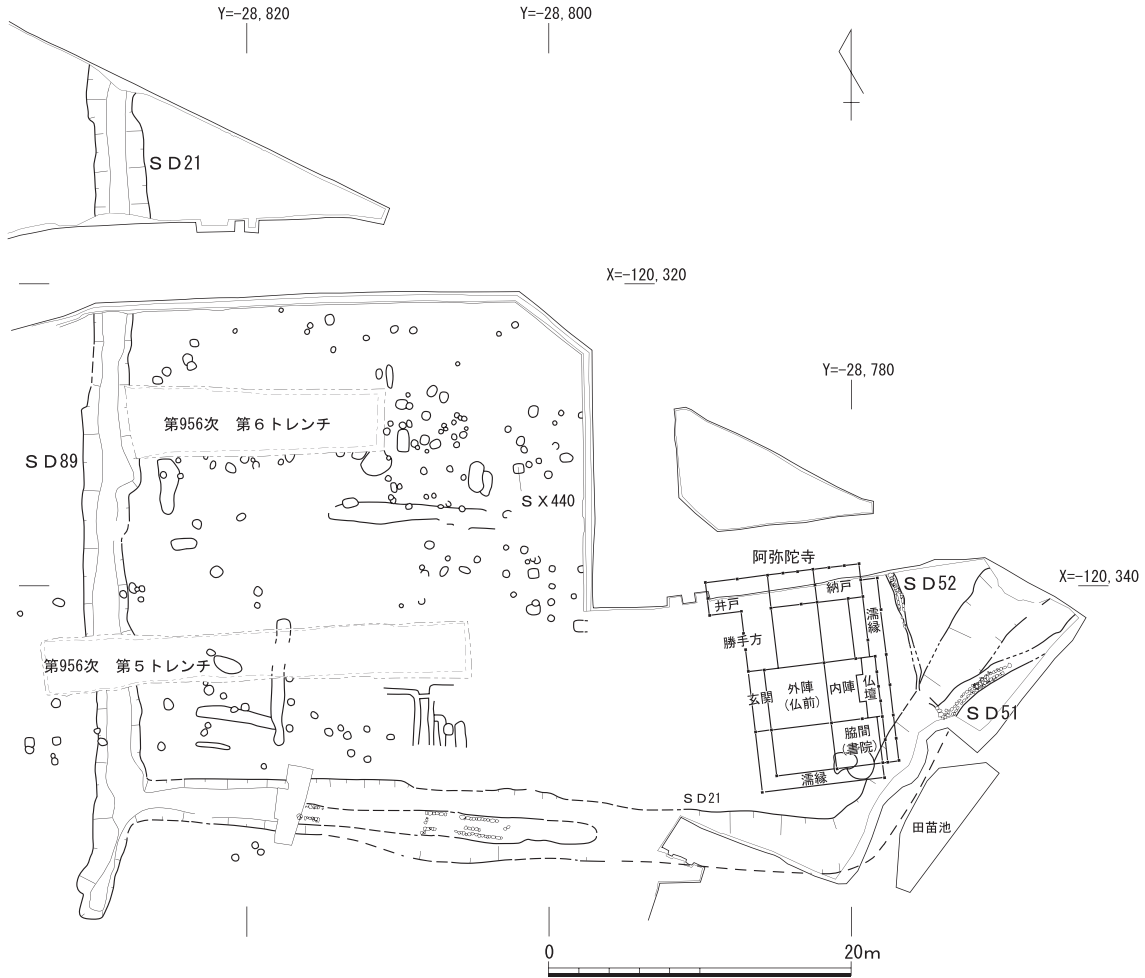
れによると阿弥陀寺は、正覚山を山号とし、光明寺下に属す西山浄土宗派の寺院である。創建時期は不明であるが、慶長10(1605)年「京都所司代上竹赦免状」には松の坊(慈光院)とともに寺名が記載されており、「町村沿革調」では延宝元(1673)年の開創とする。本尊阿弥陀如来座像には元禄15(1702)年の朱書がある。境内の古い墓石には元禄期のもものことから、元禄年間には現地に寺として建立されていたとする。

発掘調査の結果、C地区を中心に、北はJ地区、東はG・H地区にかけて江戸時代の遺構が認められた。これらの遺構は、直接ではないが江戸時代の阿弥陀寺に関連すると判断される。

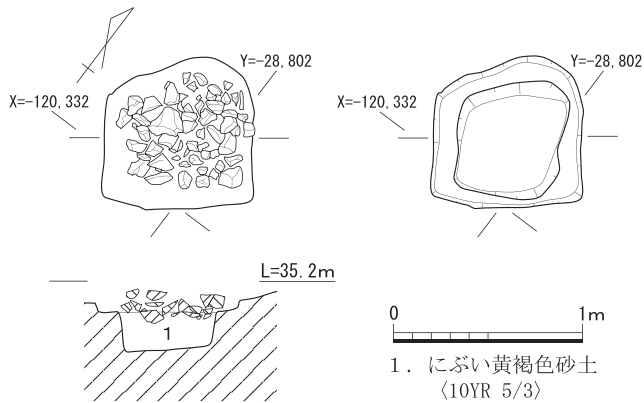
溝S D 21・89(第60図) J・G・H地区でS D 21を、C地区でS D 89を検出した。これらの溝は同一のもので、平安時代末期の屋敷地の堀と同じ位置で検出した。およそ500年を経た後に同じ位置に溝を巡らせた理由はよくわからないが、一つには、周辺の地盤が大阪層群の礫層直上にあたり、堀の埋め土は容易に掘削できたためと考える。

S D 89の規模は、J地区においては幅5.0~5.8m、深さ1.1~1.2mを測る(第60図)。溝底には褐色砂質土(第15図第16層)、暗褐色礫土(第37図第17層)や暗褐色土(第37図第18層)が堆積していた。これらの層からは多量の陶磁器類が出土した。C地区では幅5.0~5.9m、深さ1.3mを測る(第6・37図)。溝底にはにぶい黄色土(第6図第26・23層、第37図第32層)が堆積していた。C地区においては掘り直しが認められた。その規模は、幅3.4m、深さ0.9mを測る。溝底には灰黄色砂質土(第6・37図第23層)や黄褐色土(第6図第25層)が堆積していた。これらの層からも多量の陶磁器類が出土した。特に香炉をはじめ仏飯器や花瓶などが出土しており、阿弥陀寺との関連を示唆するものである。南北方向の溝の南端部はS D 21との接合点よりさらに南に向けて掘られ、ここから小泉川に排水していたと思われる。

S D 21の規模は、C地区で幅5.0m、深さ1.2mを測る(第38図)。溝底には黄褐色砂土(第38図第



第60図 C・G・H・J地区江戸時代遺構配置図



第61図 C地区不明遺構S X 440実測図

これらの溝は、江戸時代の下海印寺村内に設けられた排水のための溝と考えられる。神戸市立博物館や高槻市教育委員会蔵の17世紀中頃の「洛外図屏風」に下海印寺村が描かれているが、その絵図にはこのような溝は描かれていない。絵図によると、慈光院裏手の竹藪までが下海印寺村であったことがうかがえ、現在の位置関係からその付近までこの溝は続いていると推測される。

溝S D 51・52(第60図) H地区の北東部で検出した溝である。人頭大の自然石を積み上げて

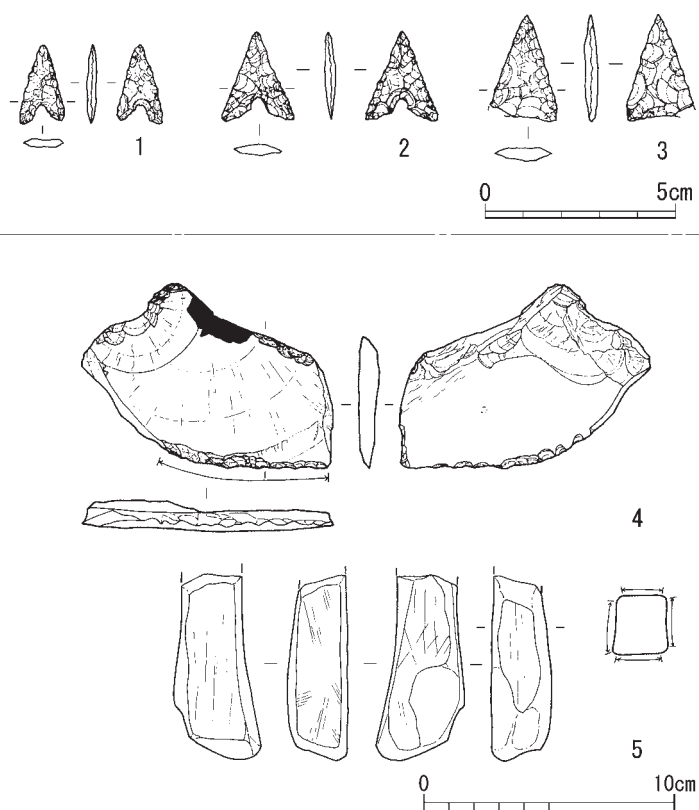
5層)が堆積しており、この層から近世陶磁器類が多量に出土した。G地区においても幅4.7m、深さ0.7mを測る。H地区では北東方向に大きく弓状に屈曲する。その規模は幅4.2m、深さ0.5mと浅いものであった。水は東から西へ流れ、S D 89と合流して南下し、小泉川へと排水していたと推定される。

いる。両溝も阿弥陀寺に伴う溝と考えられる。江戸時代の溝 S D 21 の埋没後に築かれていた。

不明遺構 S X 440 (第60・61図)

C 地区東部で検出した土坑である。平面は方形を呈し、二段に掘り込む。土坑内はにぶい黄褐色砂土で埋まっていた。その上面を拳大の石で覆っていた。石は0.6m四方の範囲に集石する。土坑の規模は、上段が一辺0.8m、下段が一辺0.6m、深さ0.25mを測る。墓であった可能性がある。

(岡崎研一)



第62図 出土遺物実測図(1)

6. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器・緑釉陶器・瓦器・白磁・青磁・近世陶磁器・瓦・石製品・銭貨など整理箱127箱である。その内訳は、第970次が75箱、第1007次が52箱である。

(1) 縄文時代・古墳時代初頭(石製品、第62図)

1はE地区 S P 37から、2はC地区 S P 431から、3はA地区 S K 142の西側の小泉川への斜面地内埋土中から出土した。4はE地区の精査中に、5は古墳時代初頭のA地区 S K 123から出土した。1・2は平面二等辺三角形を呈し、側縁は直線的である。基部に深い三角形の抉りをもつ、凹基式の石鏃である。3は側縁が直線的な二等辺三角形を呈す。基部には、浅い三角形の抉りを施す。4は削器である。5は砥石である。

(岡崎研一)

(2) 古墳時代初頭(第63～65図)

A・C・J地区の竪穴式住居跡、土坑、柱穴等から、整理箱約10箱分の古墳時代初頭の土器が出土している。D・J地区の後世の土坑内や包含層からも良好な資料を得ることができたので、関連遺構の存在を考え掲載した。以下、遺構ごとにその詳細を述べる。

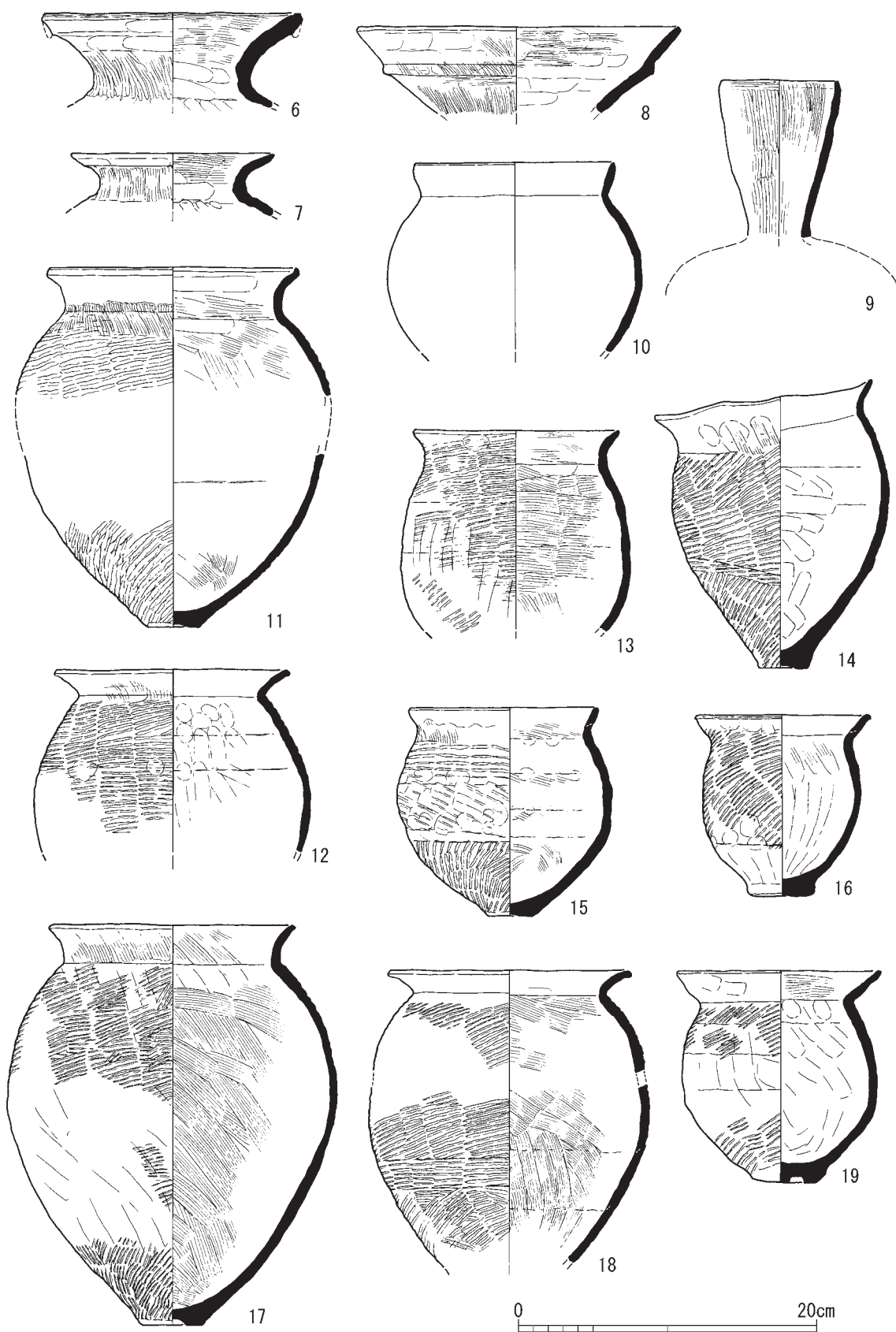
6～33は、A地区竪穴式住居跡 S H 121から出土した。残存率は高く、図化した28点のうち、約半数の土器がほぼ完形に復元できる。器種は、壺、甕、高杯、器台、鉢からなり、バラエティに富む。まず壺の形式には、緩やかに外反する口縁をなす広口壺(6・7)、頸部が外反する二重口縁壺(8)、内湾する口縁を特徴とする細頸壺(9)や、短頸壺(10)がある。これらのうち、6の広口壺は垂下口縁をなすものである、口縁部は一部剥離している。胎土には、赤色斑粒が多量に

含まれ、色調は浅い黄橙色(7.5YR 8/4)を呈する。甕は、弥生系タタキ甕から構成され、器高によって、25cm前後(11・17・18・20・21)、20cm前後(12~14・22)、14cm前後(15・16・19)のものに大きく分けられる。口縁部の形態は、いずれも「く」字状口縁をなし、口縁端部は丸くおさめるものが主体をなすが、11のみは口縁部を跳ね上げるタイプである。口縁部の特色として、口縁端面に1条の沈線をもつもの(16・20・21)がある。また、口縁部外面は、通常、横ハケあるいは横ナデ調整によって処理されるが、縦方向のハケ調整によって仕上げるものがあり(17・21)、特徴的な手法として注目される。体部は、右上がりのタタキを基調とし、底面から約3分の1の高さを前後する位置で、明瞭にタタキ方向が変化し、分割成形がなされたことが窺える(14・18・21・22)。分割成形による粘土接合痕は、板状のナデを多用することによって完全に消しているものがある(17)。底部は輪台状を呈するものが主体をなす。14は、口縁部の約半分が残存するが、口縁の成形がなされておらず歪な形状を呈する。甕の胎土は、混和材として、主に石英・長石のほか、堆積岩類を含み、乙訓地域に特徴的な赤色斑粒を含む。色調は、にぶい黄橙色(10YR 7/2)を呈するもの(11)があるが、全体ににぶい橙色~赤褐色系の色調を呈するものを基調とする。15は、一部左上がりタタキ痕を認める小形甕である。24は、突出した底部をなすことから、タタキ成形による壺の底部とみられる。29・30は高杯である。杯部が長く拡張し、スカート状に開く脚をもつ東海系の系譜上に派生したとみられる庄内併行期に通有の高杯(29)と、脚部が明瞭に屈曲して開くいわゆる畿内系高杯の古式のタイプがある(30)。ともに1~3mm大の赤色斑粒を含み、色調は他の土器群と比較し強い赤色系の色調を呈する(29は5YR 5/6、30は10R 5/6)。32の器台は、近江・東海系高杯に特徴的な形式で、脚部から受部へ大きく屈曲して開く形式で、口縁部外面に一条の沈線を施す。33の鉢は、「く」字状口縁をもち、口径が大きく開くタイプで、外面にナデ、内面はハケ調整による粗製品である。S H121出土資料は、内面ハケ調整を主体とする弥生系タタキ甕を組成の中心とする一括資料であるが、近江・東海系器台(32)の形態に加え、高杯の形式のなかには、杯部に稜をもち、脚が大きく開くタイプ(29)を含むことから、庄内併行期中段階に帰属する土器群である。

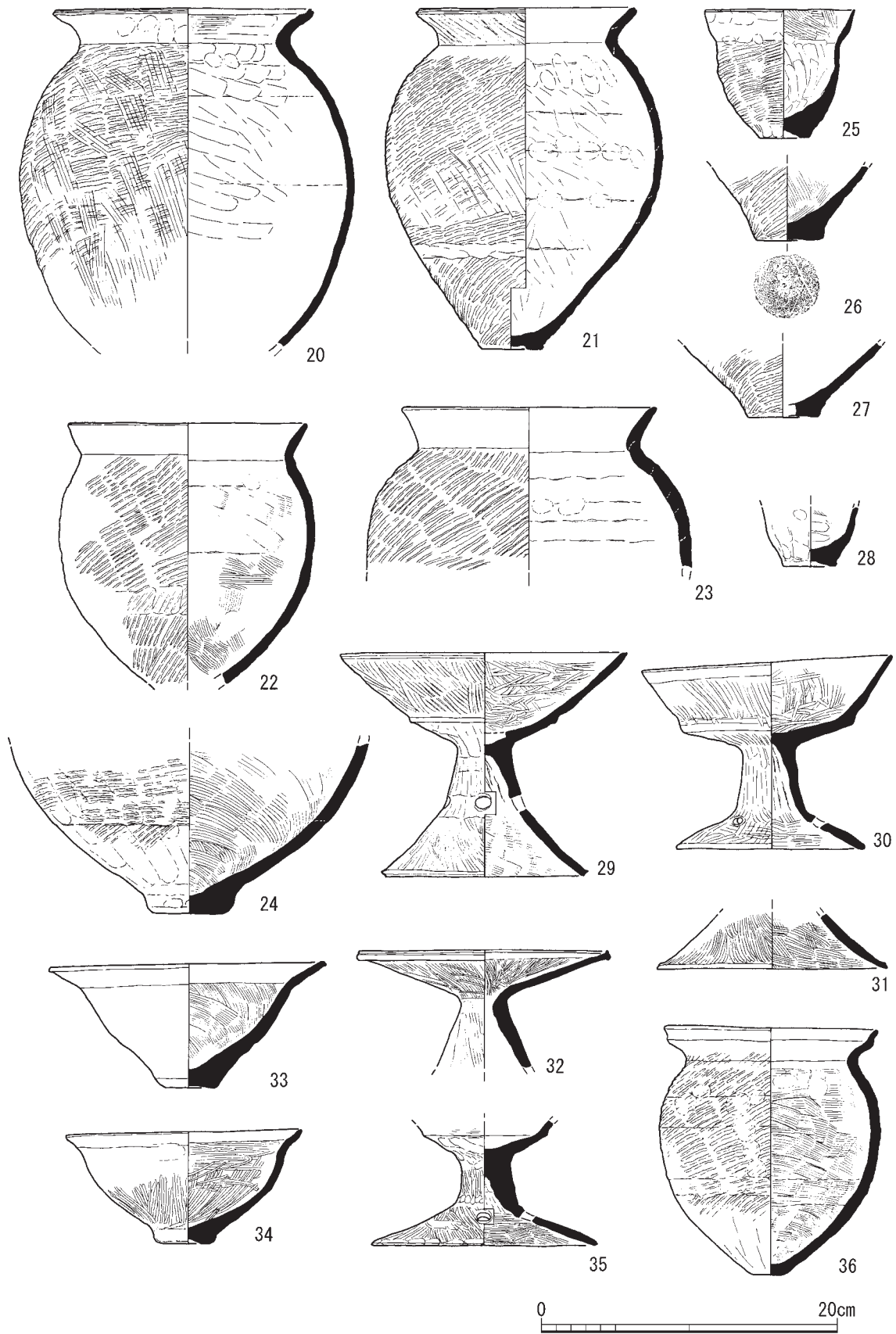
34・35は、A地区土坑S K149から出土した。34は、内外面にミガキを施す精製品の鉢である。35の高杯は、口縁部が欠損するが、長く拡張する口縁をもつ形式とみられる。

36は、J地区竪穴式住居跡S H82から出土した弥生系タタキ甕である。口縁部は受口状を呈する近江系との折衷的な特色をもつ。体部下部に接合痕が確認され、2段階の分割成形によるものである。底部がいわゆる輪台技法によらず、小形化した平底であることから、庄内併行期前半の資料とみられる。

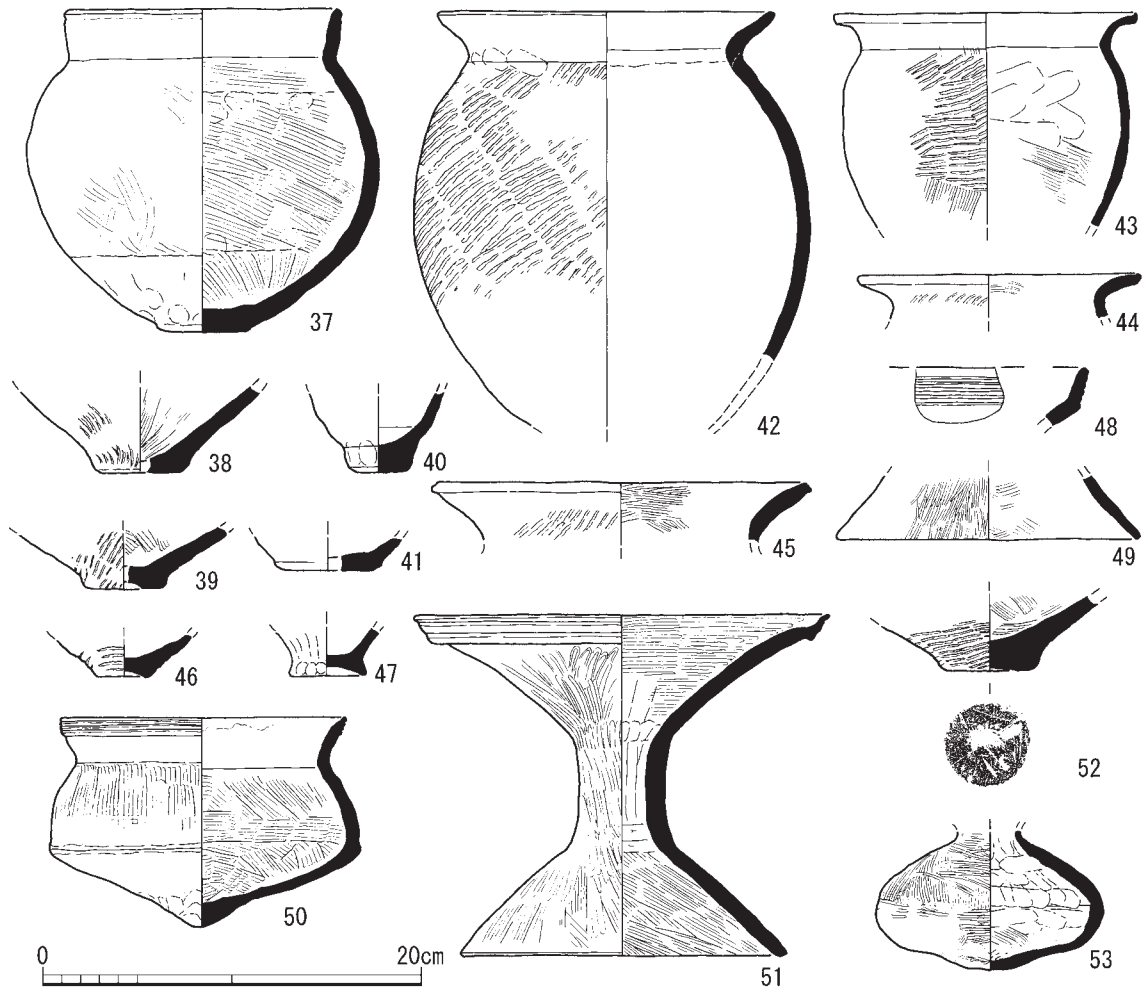
37~50は、A地区土坑S K123から出土した。37は短頸壺である。外面ナデ調整、内面にハケ調整を施す。38・39は、小さく突出した底部の形状から、タタキ成形を施す壺底部とみられる。40は手づくねによる壺の一部と推定される。42~45は弥生系タタキ甕である。いずれも「く」字状口縁をなす。42が端部を丸く納めるのに対し、43~45は端部に面をなす。残存状況の比較的良好的な43は、端部をわずかに摘み上げ、内面をハケ調整後にナデを施す。43の上半は板状工具を用



第63図 出土遺物実測図(2)



第64図 出土遺物実測図(3)



第65図 出土遺物実測図(4)

いたナデである。48は擬凹線文をもつ、有段口縁甕の口縁部である。口縁部外面に4条からなる多条沈線状の明瞭な擬凹線文を施す。断面の形状から、口縁部が均一な厚みを持ち、口縁部受部外面に、強いナデによる屈曲を認めないことから、細片資料ではあるが、北陸系甕の一部と推定する。46は窪み底を呈する弥生系タタキ甕の底部で、47は鉢あるいは甕の底部である。49はスカート状に広がる高杯脚部の一部である。50は口縁部に擬凹線文を施す鉢である。外面にハケ後一部ナデ、内面にハケ調整を施す。体部の下半で明瞭に屈曲し、底部はケズリ調整によって尖底に仕上げられている。ほぼ完形で出土したものだが、底部が尖底であり、単体で自立しない。同一遺構から器台は出土していないが、底部の形状から、本来、器台と組み合わせで用いられた鉢であることは明らかである。鉢体部の屈曲から、対応する器台の形状は、近江・東海系の脚と受部に明瞭な屈曲をもつタイプの器台と推定される。鉢は、明瞭な有段口縁をなすものではないが、内面が薄く仕上げられていることから、擬凹線文系土器の系譜にあるものとみられ、搬入土器と推定されるものである。対応する器台との関係から、擬凹線文系土器分布圏との接点となる湖西および湖北地域周縁に由来するものである可能性が高い。51はJ地区SH82を切る形で検出した土坑SK35から出土した。口縁部の擬凹線文を特徴とする北近畿系の器台である。擬凹線文が退

化し、細い胴部を呈することから、庄内併行期中段階に併行する資料とみられる。S K35は、J地区のS H82を切る形で検出していることから、この遺物は住居跡に伴う可能性が高い。52は、C地区柱穴S P153から出土した弥生系タキを施す壺の底部とみられる。底部外面に木葉痕が認められる。53は、D地区包含層から出土した。口縁部を欠損するが玉葱状の形状から細頸壺の体部とみられる。体部外面に細かなミガキを施す精製品である。

以上、詳述したA・C・D・J地区から出土した土器群には、帰属時期に大きな時期幅は認められず、いずれも古墳時代初頭の庄内併行期前半に帰属する資料と考えられる。

(高野陽子)

(3)古墳時代後期(第66～68図)

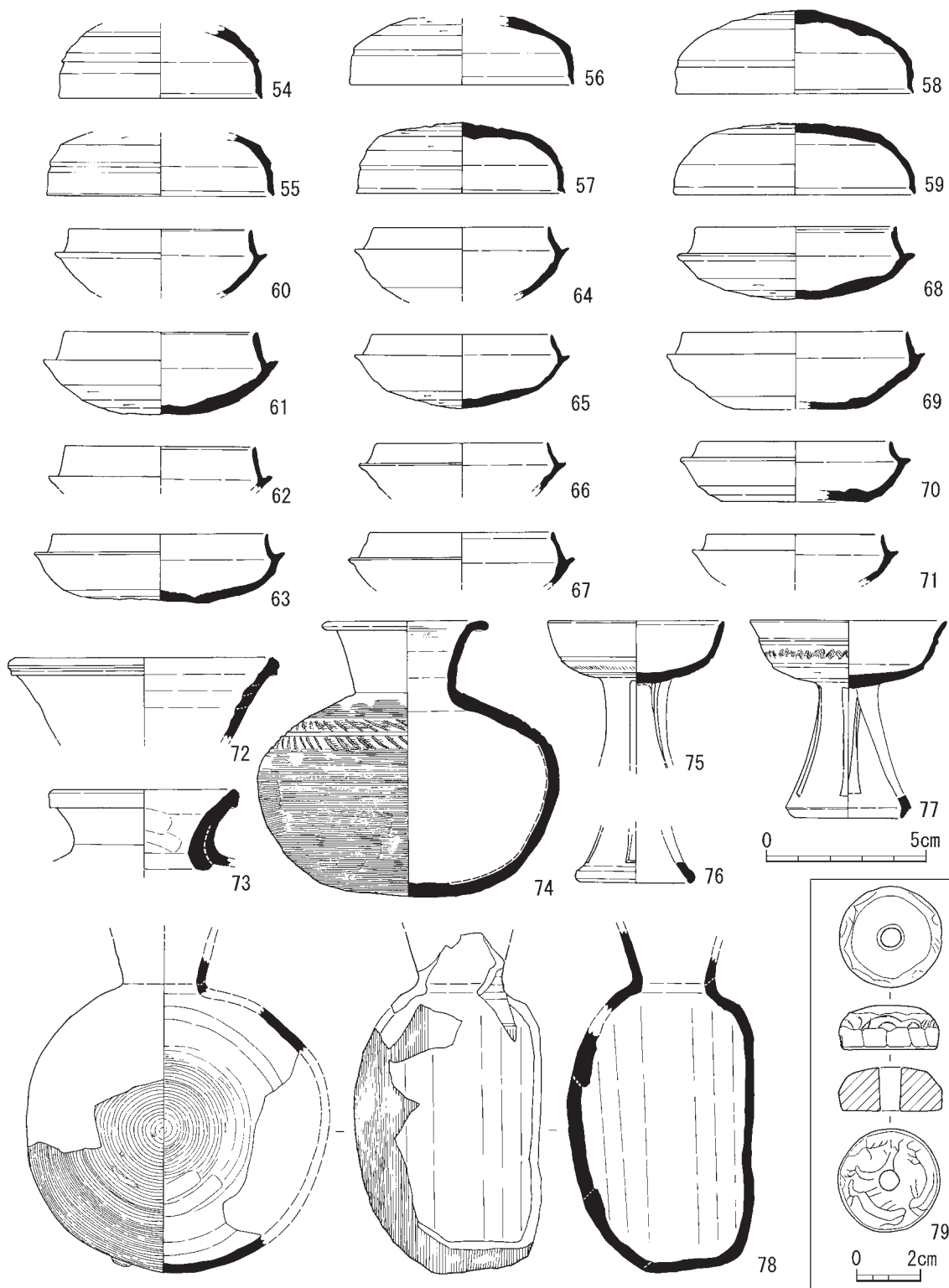
第66～68図に掲載したものは、主に古墳時代後期の遺構から出土した須恵器と石製品である。

57・62・67はA地区S H156から、56・63・72・86・87・101はC地区S H127から、73・75・77・78はC地区S H350から出土した。70・96・99・100はC地区S H351から、58・60・65・71・76・83・88・97・98はE地区S H101から、61・69・81・84・85・89はE地区S H102から、59・64・82・95はE・J地区S H103・79から出土した。90・91はB地区S K125から、92～94はC地区S K128から、74はC地区S K394から、54はA地区S D144から出土した。68はC地区S P185から、80はC地区S P457から、55はD地区S P482から、66はE地区S P18から、79はH地区包含層から出土した。

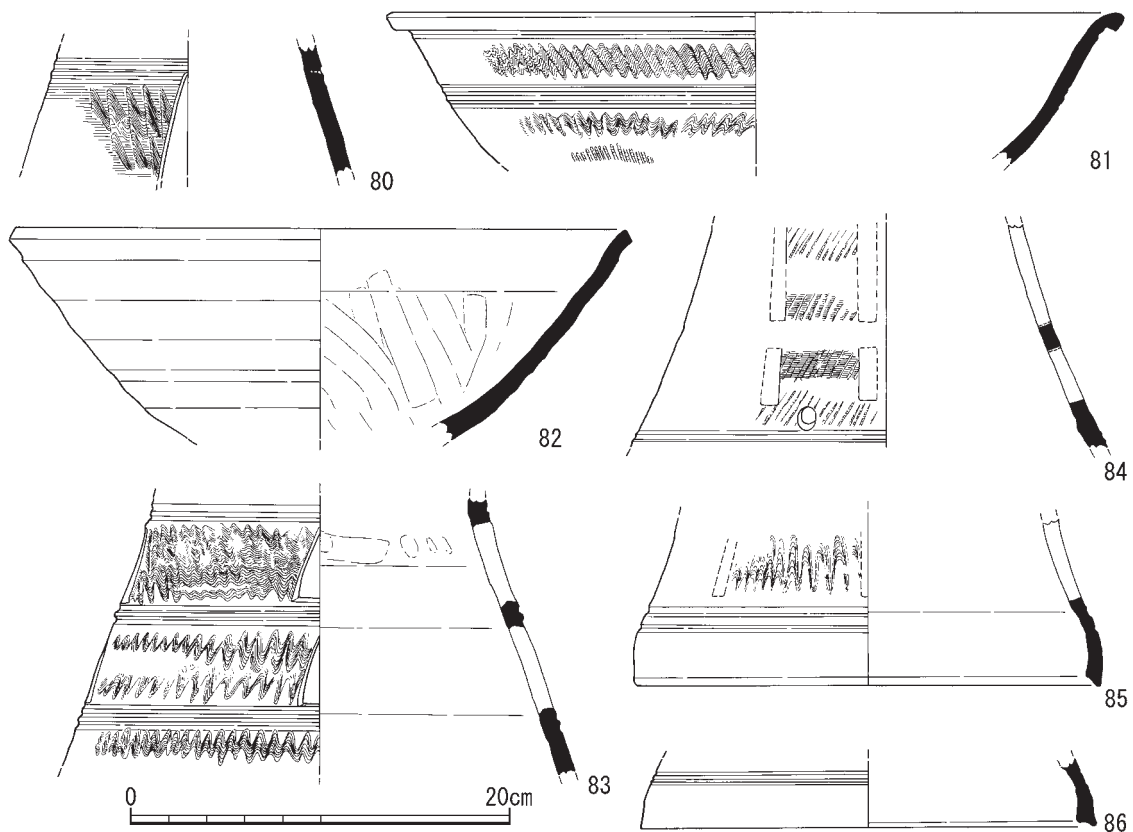
54～59は須恵器杯蓋である。54は天井部と口縁部との間の稜線が鋭く表現されている。陶邑編年TK47併行期のものである。55・56・58は外面の稜線が不明瞭ながらも表現され、口縁端部内面に段が認められる。TK10併行期のものとする。57は天井部と口縁部との境界の稜線が不明瞭ながらも表現され、口縁端部内面の段は明瞭である。MT15併行期のものとする。59は外面の天井部から口縁部にかけて丸く成形されており、口縁端部内面の段が認められる。TK10～43併行期のものとする。60～71は杯身である。61・62・68はたちあがりが高く直立気味に立ち上がり、口縁端部内面に段が認められる。MT15併行期のものとする。60・63～67・69～71は立ち上がりがやや短く内傾しており、口縁端部内面の段は不明瞭である。TK10併行期のものとする。72は甕の口縁で、逆「ハ」の字状を呈している。73・74は須恵器壺である。73は短く外反する口縁部で、74は底部がわずかに丸みを帯び、肩部が張る。体部下半は、カキ目を施す。75～77が須恵器高杯で、長脚一段スカシのものと推測される。75は杯部底面外面に列点文と沈線があり、口縁部へと移る。77は杯部の口縁と底部の間に段が付き外反する口縁を有している。78は須恵器提瓶で、体部の耳は欠損している。79は紡錘車で、側面下半は幅1cm程度で面取りがなされる。底面には、鹿の線刻が浅く施されていた。80～86は須恵器器台である。E地区の竪穴式住居跡内やC地区の竪穴式住居埋土中から出土した。これらの遺物から、付近に古墳が存在した可能性を示唆すると考えた。

87～94は土師器甕である。87・88は小型で、短い口縁部が直立気味に立ち上がる。89～93は小

型で、丸い体部に「く」の字状の頸部から口縁が外方に伸びるものである。94は長胴の体部に逆「ハ」字形の口縁がつく。95は土師器高杯で、杯部は半円状の体部で外方の横方向に引き出された口縁端部を有する。96~100は土師器壺で、96は丸い体部に短く直立気味の口縁がつく。97~100は球形の体部に、逆「ハ」の字状に外方に大きく開く口縁を有する。101は羽釜で、長胴の体



第66図 出土遺物実測図(5)



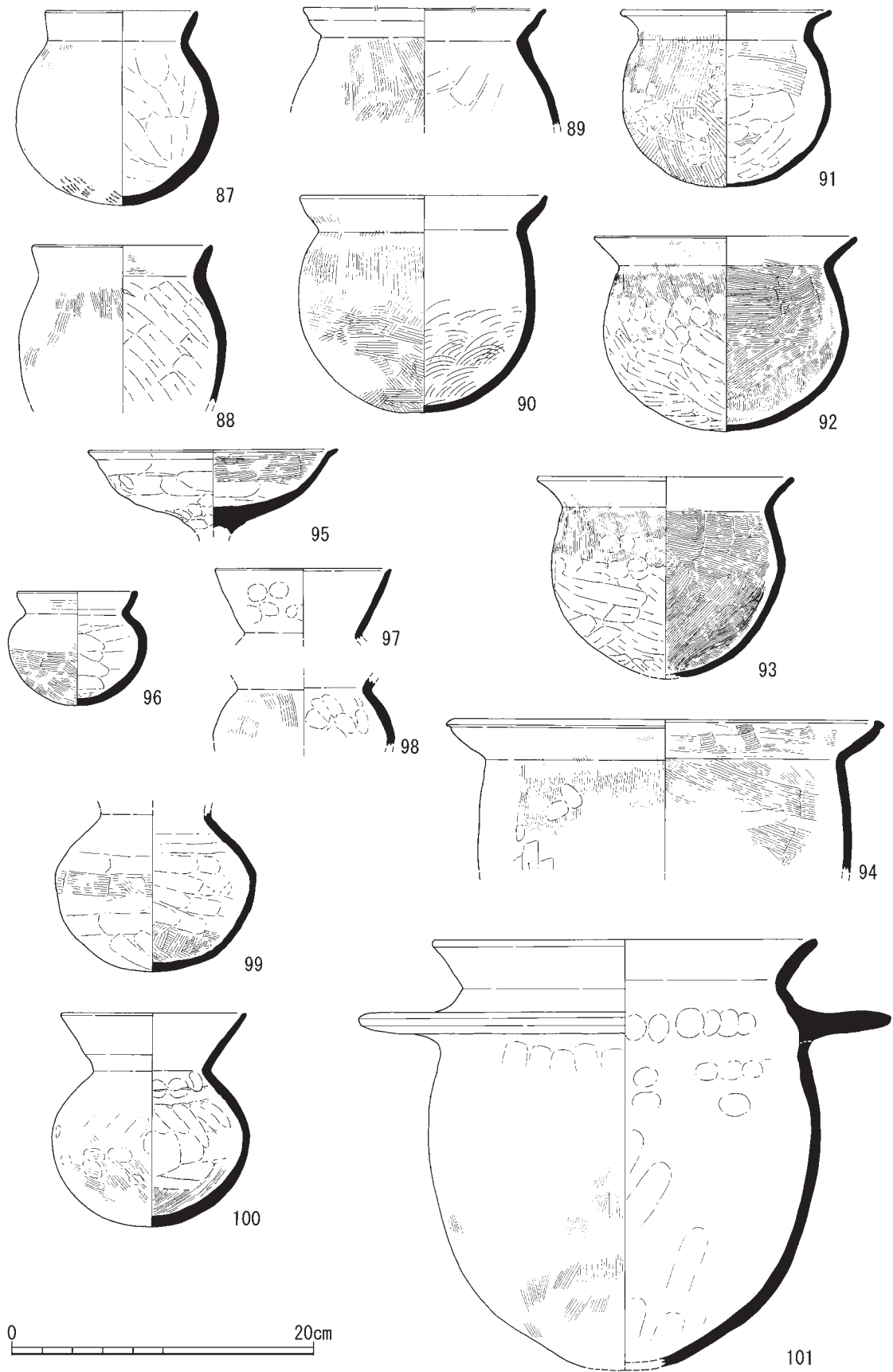
第67図 出土遺物実測図(6)

部に「く」の字状の口縁を有し、頸部下に鏝が巡る。C地区S H127の竈周辺および埋土から出土した。

(4) 奈良時代末～平安時代前期(第69～71図)

第69図には、須恵器と銭貨を掲載した。102～110・112・115～122・124はB地区S D79から、111・113はA地区S D132から、114はH地区包含層から、123はA地区S K143から出土した。第70・71図にはミニチュア土器や土馬、土師器を掲載した。125・127～138・144・145・147～159・161～164・167はB地区S D79から、146はA地区S D119から、126・139・140・143・160はA地区S D132から出土した。165はH地区S P84から、166はC地区S K336から出土した。141は鎌倉時代の遺構であるH地区S K44に混入していた。142は江戸時代の遺構であるC地区S D89に混入した遺物である。102は、皇朝十二銭の一種である萬年通寶(760年初鑄)である。

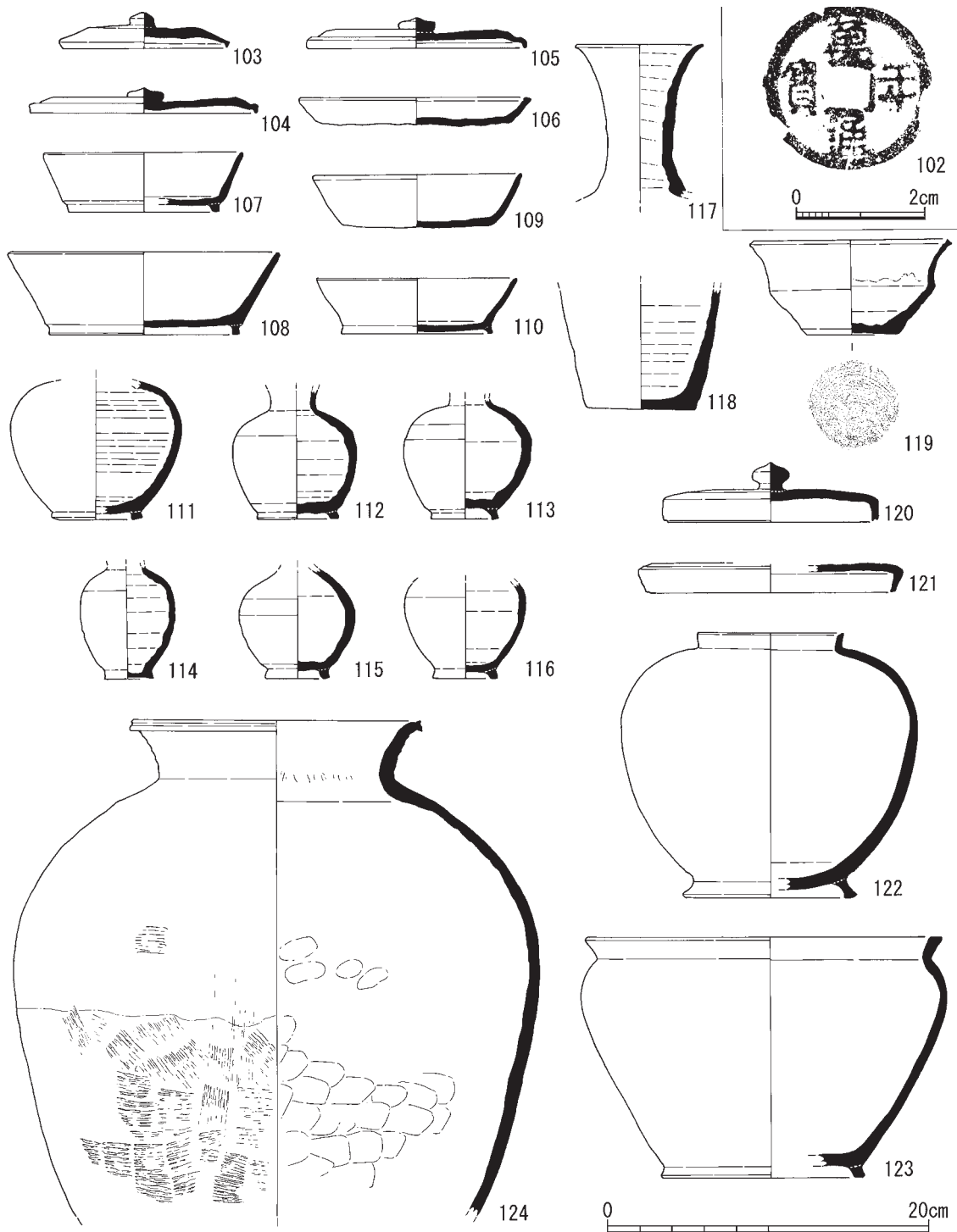
103～105は須恵器杯B蓋で、器高が低く、つまみが付けられた中央部分が下方にくぼむものである。106は皿、107・108・110は杯B、109は杯Aである。110の高台は杯底部に「ハ」の字形に貼り付けられている。111～113・115・116は壺Lで、球形を呈した体部に直立した頸部からやや外方に開く口縁がつくものである。奈良時代末から平安時代前期のものである。114は倒卵形の体部を呈し、回転糸切りの底部を有する。9世紀中葉頃のものである。117・118は壺Gである。119は須恵器壺Hで、肩部が張り、口縁部が外反しつつ上方に伸びる。底面糸切りである。120・121は須恵器壺A蓋である。122は須恵器壺Aで、球形の体部に短い口縁がつく。123は須恵器鉢で、



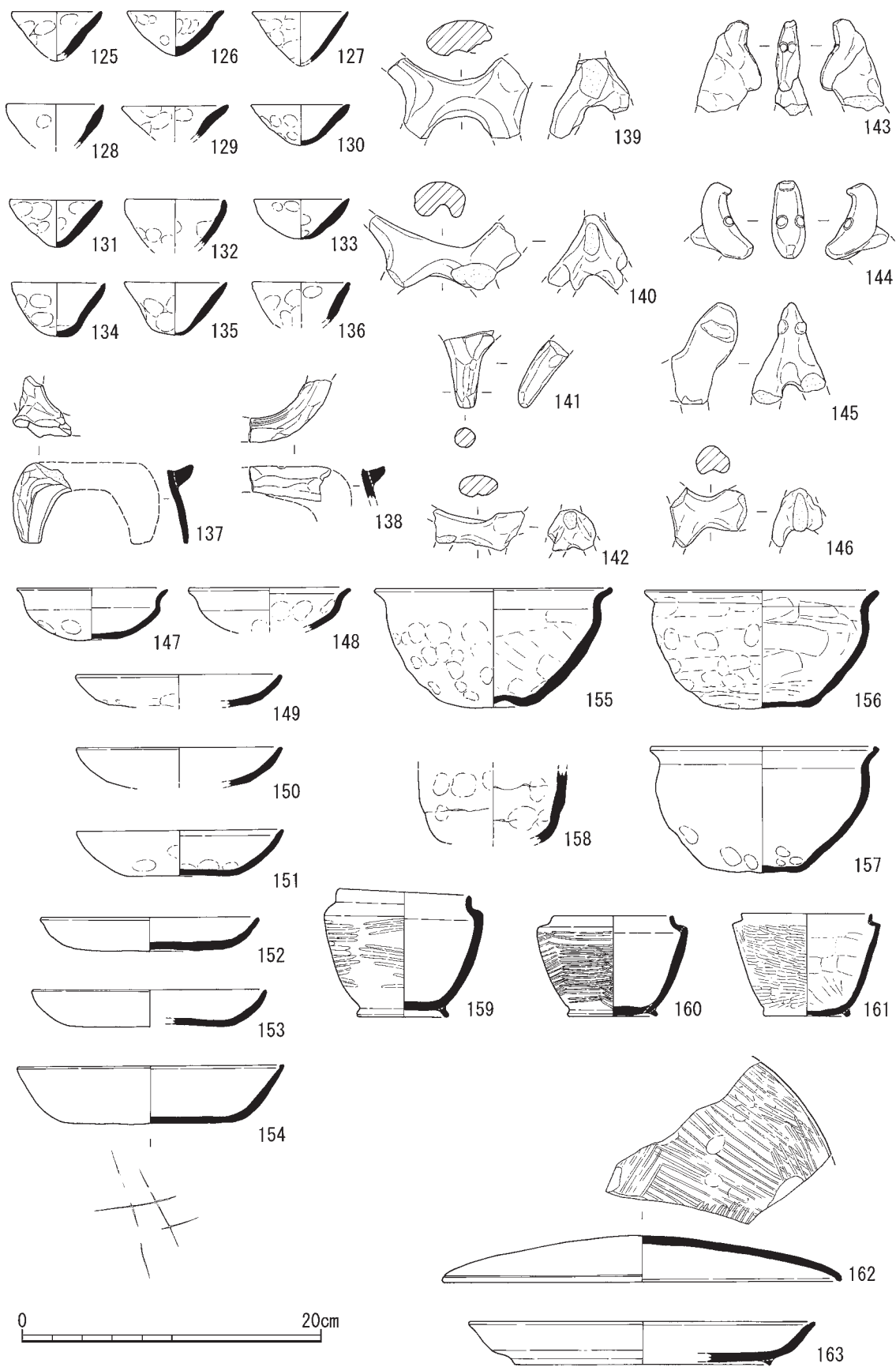
第68図 出土遺物実測図(7)

底部に高台を配し、丸い肩部に「く」の字状に屈曲した頸部から短い口縁部がつく。124は須恵器甕である。

125～136はミニチュア甕で、逆円錐をした形態である。底部は尖底のもの(125～127)、丸底のもの(130・131・133～135)がある。口縁部はやや内湾するもの、外湾するもの、直線状に終わるものがある。137・138はミニチュア甕で、焚き口部に底を有する。139～146は土馬で、頭部・体部・脚の破片が出土しており、全体が遺存するものはない。147・148は小型の土師器壺で、外反

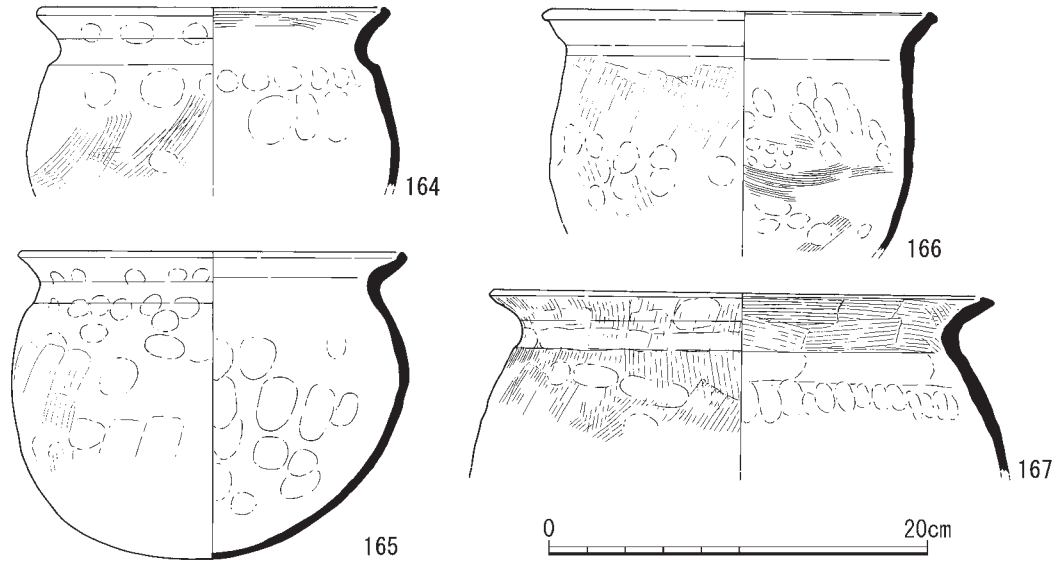


第69図 出土遺物実測図(8)

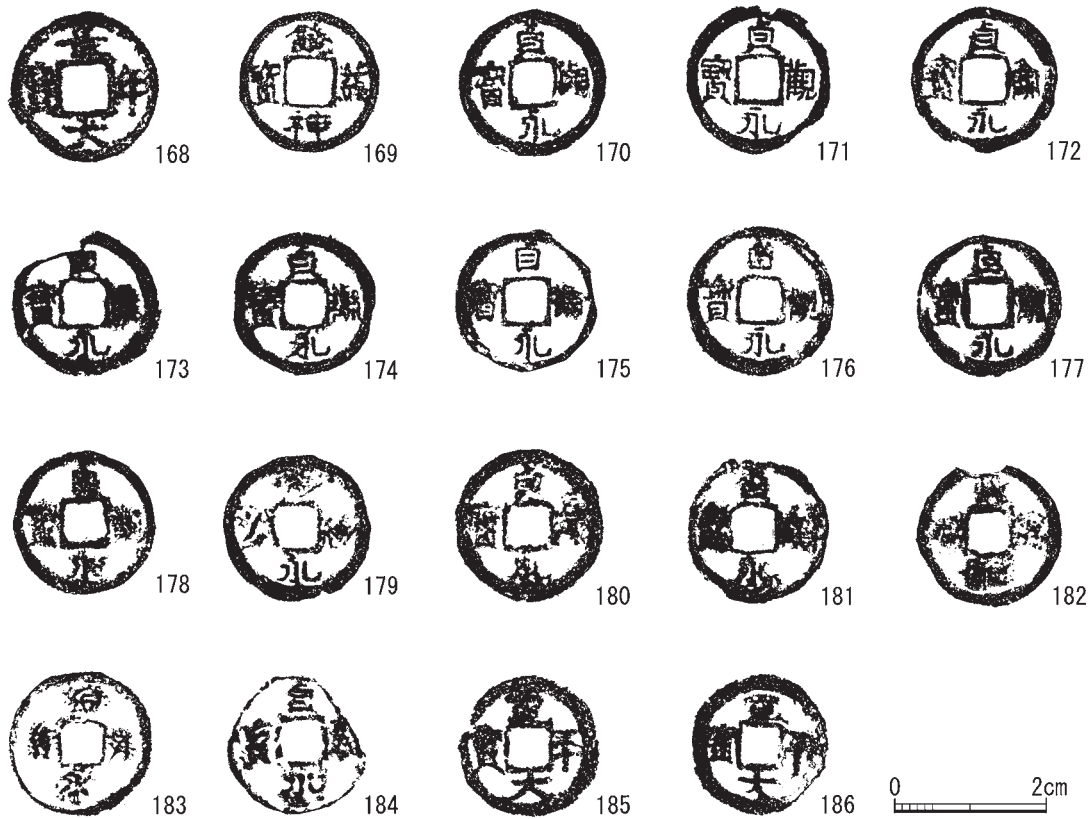


第70図 出土遺物実測図(9)

する短い口縁を有する。149・150・152・153は土師器皿で、149は底部付近をケズリで調整する。150・152・153はナデによる調整である。151・154は土師器杯で、ともにナデによる調整である。155～157は土師器壺Bである。丸い胴部に頸部がしまって肩が張り、口縁部が短く外反して立ち上がる。158は製塩土器である。159～161は土師器壺Eで、肩部が内側に屈曲し、短く立ち上が



第71図 出土遺物実測図(10)



第72図 出土遺物実測図(11)

る口縁部を有する。外面は丁寧に横方向にミガキを施している。163は土師器皿Bである。内外面ともにナデで仕上げられている。162は蓋で外面にヘラミガキ調整がなされている。164～167は土師器甕で、丸い体部に「く」の字状に屈曲する頸部から短く外方に伸びる口縁部を有し、口縁端部は内側に肥厚する。

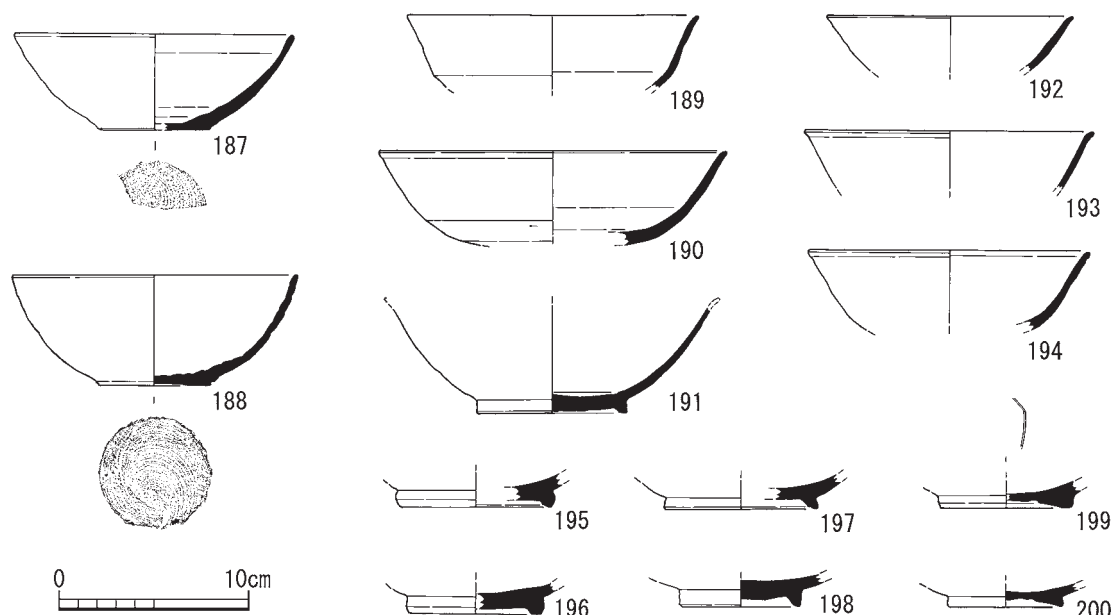
第72図は皇朝十二銭である。168は長年大豊(848年初鑄)で、H地区の精査中に出土した。169は饒益神寶(859年初鑄)で、H地区S X46から出土した。170～184は貞観永寶(870年初鑄)で、H地区S X46から出土した。185・186は寛平大寶(890年初鑄)である。185はH地区S X46から、186はH地区の精査中に出土した。

(5)平安時代後期(第73図)

187・193・197・199は、江戸時代の溝であるH地区S D21内から出土した。188は方形区画に伴う土橋S X133内埋土中から、192・198は堀S D111から出土した。いずれも混入遺物である。189はB地区S K126から、190はH地区S P94から、191はH地区S K53から、195はH地区S K44から出土した。196はS X27から、194はC地区S P467から、200はC地区S P189から出土した。

187・188は須恵器椀で底部糸切りである。亀岡市篠窯跡群の西長尾3号窯に併行し、10世紀前後のものである。189は緑釉陶器で、体部に稜線が認められる。190は無釉陶器の椀である。191～196は無釉陶器の椀で、器壁にミガキが施されている。197・199は緑釉陶器の底部である。197は削り出し高台で、見込みにトチンの痕跡がある。199は蛇の目高台である。198は無釉陶器の椀である。200は無釉陶器で、蛇の目高台である。

この時期の遺構は検出しなかったが、下海印寺遺跡ではこの時期の土器が出土しており、一般的な集落とは性格の異なる施設が存在した可能性が指摘されている。今回の調査で検出した平安時代末期の屋敷が出現する基盤になった可能性が考えられる。



第73図 出土遺物実測図(12)

(6) 平安時代末期～鎌倉時代(第74～77図)

201はC地区S D111から、202はJ地区S D50から、203・204は江戸時代の遺構の攪乱内から出土した。205・206・248はE地区S K34から、207・208はE地区S P06から、209はC地区S D111から、210はH地区S D50から、211はE地区S P51から、212はH地区S K44から出土した。

213～216・218～223・232・237・238・247はC地区S D111から、217はC地区土橋S X133内埋土中から、224は方形区画の南西コーナー部であるS D111とS D266の合流地点から出土した。226～231・234～236・249はH地区S D50から、233はH地区S K44から出土した。225・242はE地区S P01から、239はE地区S P08から、240はE地区S P110から、241はE地区S P07からの出土である。243はE地区S P03から、244はE地区S P92から、245はE地区S P80から、246はH地区S P64から出土した。

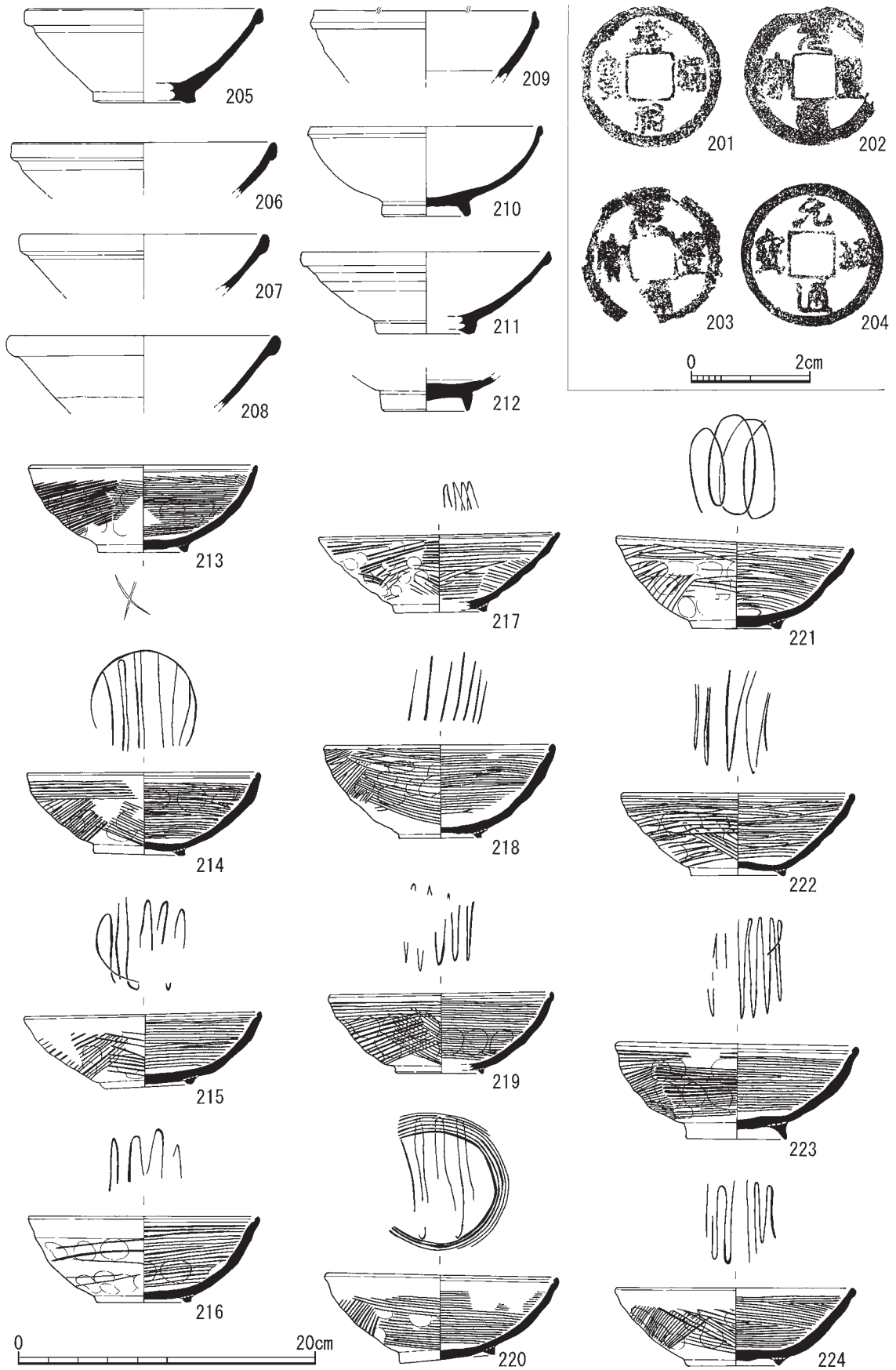
250～256・258・286～289・291はC地区S D111から、257はH地区S D50から、259・281・290は土橋S X133から出土した。260～263・282はE地区S P01から、264はE地区S P08から、265・266・283はE地区S P33から、267・268はE地区S P40からの出土である。269はE地区S P52から、270はE地区S P53から、271・272はE地区S P79から、273はE地区S P91から、274～280はH地区S K44から、284はE地区S P38から、285はE地区S P35から出土した。

201～204は北宋銭で、201が嘉祐通寶(1056年初鑄)、202・203は元豊通寶(1078年初鑄)、204が元祐通寶(1086年初鑄)である。

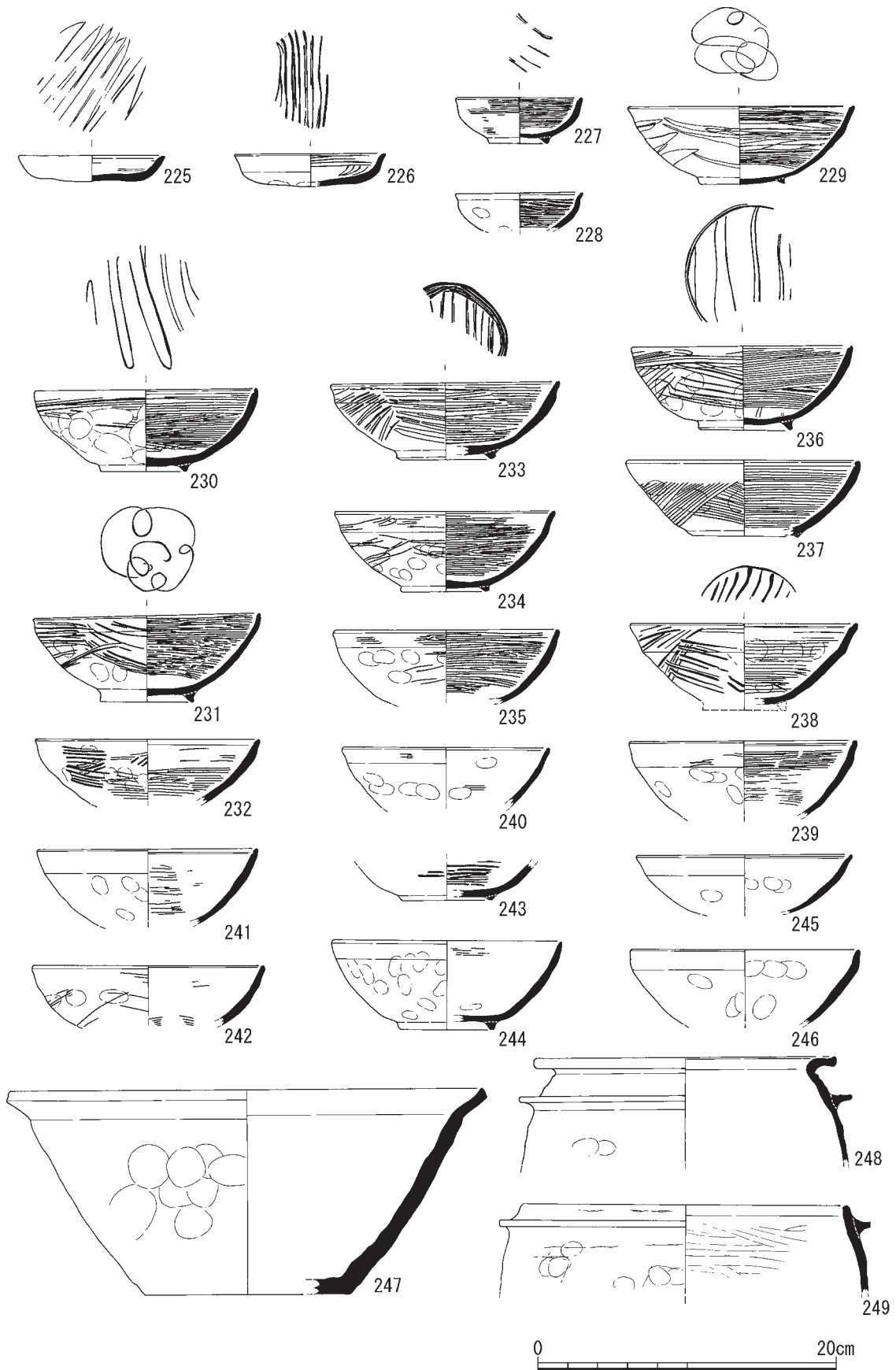
205～212は白磁碗である。体部が直線的に立ち上がり口縁部が大きく三角形に肥厚するもの(205～209・211)と、内湾しながら立ち上がり口縁部が小さく三角状に肥厚するもの(210)がある。210は他のものよりも古く11世紀後半と考える。

213～246は瓦器で、225・226は皿、227・228は小椀で、他は椀である。椀は、その大半が楠葉型のもので、わずかに大和型(229・236)と和泉型(224・231)が存在する。その比率は、おおむね両型で1%前後とみられる。221は見込み内に連続長楕円状のミガキが、229・231は連結輪状の暗文が施されているのに対して、大多数のものは見込み内にジグザグ暗文を施している。213～224は体部のミガキは密になされており、外面においては高台貼り付け付近までミガキを施す。高台は断面三角形のしっかりとしたもので、11世紀末～12世紀初頭にかけてのものとする。体部外面のミガキを高台貼り付け上方まで施す232・239は12世紀中葉のものと思われ、229は体部外面のミガキが希薄になることから12世紀後半のものと考えられる。245は口径が小さく、器高も低いことから、やや時期が下り、12世紀後葉～13世紀前葉のものとする。213～224や232が、方形に区画された屋敷地関連遺構から出土したことから、この屋敷地は11世紀末～12世紀中葉にかけて存続したものとする。247は瓦質の鉢である。248・249は瓦質の羽釜である。

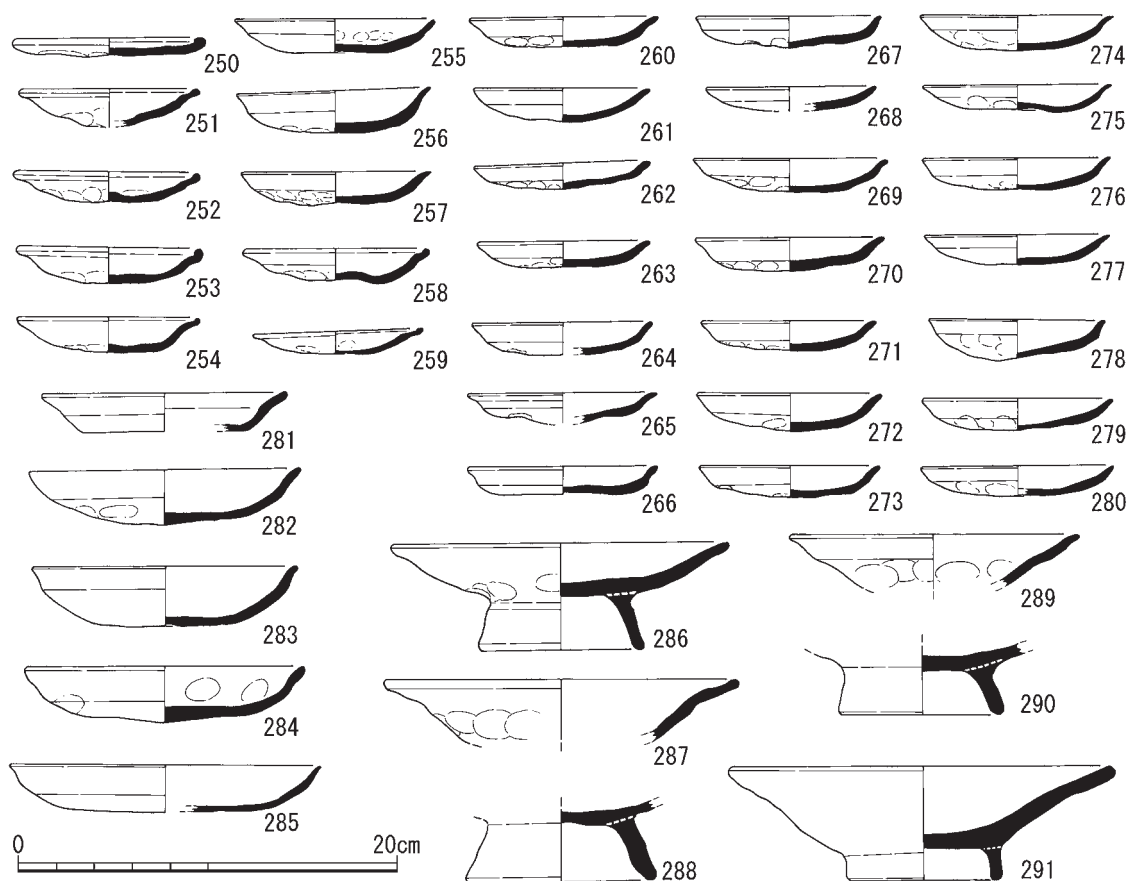
250～291は土師器皿で、286～291は脚付きのものである。皿には小型のものとして大型のものがある。小型のもの形態は、コースター形を呈するもの(250)、「て」の字状口縁(251～254・258・259)を有するもの、口縁端部下を強くナデて外反するもの(255・256・260～264・266～280)がある。大型のものには、逆「ハ」字状に大きく外反するもの(281)、口縁下を強くなでて端部が外



第74図 出土遺物実測図(13)



第75図 出土遺物実測図(14)



第76図 出土遺物実測図(15)

反するもの(282~285)がある。252は11世紀後半~12世紀初頭のものである。台付皿が多く出土した点は、11世紀後半頃の特徴の一つと考える。

292~299は瓦で、292・293はH地区東部の包含層から、294・295はH地区S D50から出土した。296は平瓦で、A地区S D132から出土した。297は丸瓦でJ地区S D50から、298は丸瓦でH地区S D50から、299は丸瓦でH地区S D50から出土した。

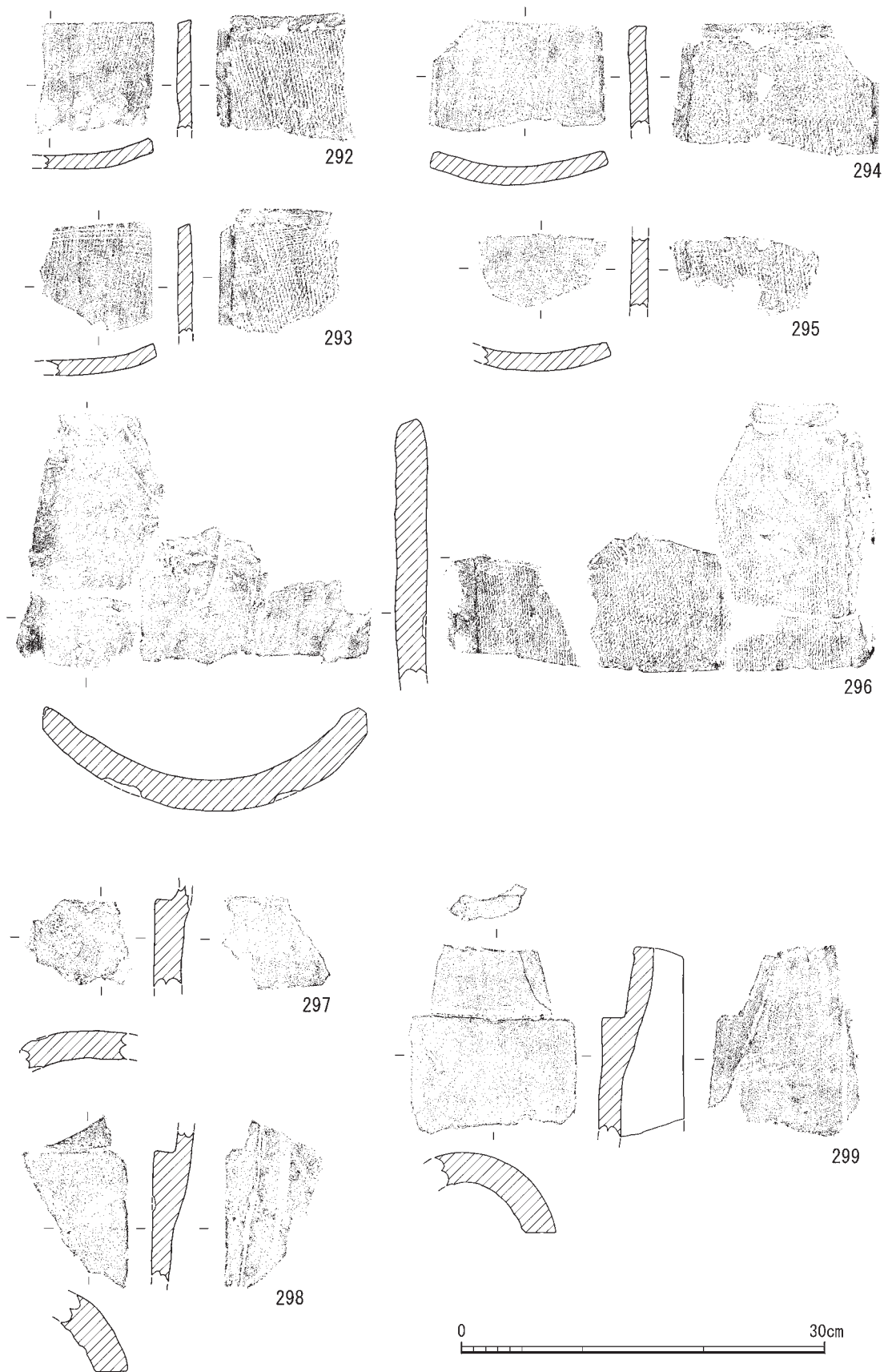
(岩松 保・岡崎研一)

(7)江戸時代(第78~83図)

溝S D89上層からは、中世後半から近世にかけての陶磁器や銭貨などが多数出土したが、多くを占めるのは近世陶磁器である。陶磁器類では、国産の製品が多い。さらに、中国や朝鮮王朝産の輸入陶磁器がわずかに含まれる。国産のものとしては、江戸時代の肥前陶磁器類(唐津・伊万里)が多数を占める。ほかに、瀬戸美濃や京都・信楽・丹波などの製品が含まれる。

a.陶磁器

301は中国製の青磁碗で、見込みに円刻がある。高台径5.2cmを測る。302・303は瀬戸美濃焼の天目碗で体部は丸味をもつ。16世紀後半頃の製品とみられる。302は口径11.6cm、器高6.1cm、高台径4.5cmを測る。304は瀬戸美濃焼の天目碗で、体部と口縁部が明瞭に屈曲し、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。17世紀前半頃の製品とみられる。330・331は京焼の色絵碗で、330には内面に金彩がみとめられる。17世紀頃の製品とみられる。



第77図 出土遺物実測図(16)

305～314は肥前陶器(唐津)の椀である。305・306は、刷毛目椀で、内外面に白土を刷毛塗りする。17世紀後半頃の製品である。305は口径10.8cm、器高4.8cm、高台径4.1cmを測る。307は、17世紀後半頃の製品である。308～313は、見込みに呉須で山水文を描く。胎土は精良である。いわゆる、京焼風肥前陶器である。高台内に「小松吉」(308)、「木下弥」(309)、「森」(310)、「清水」(311・312)、「新」(313)の刻印を押す。17世紀後半頃の製品である。314は丸椀で、青釉を施す。口径10.2cm、器高6.0cm、高台径4.7cmを測る。

315～329は肥前磁器(伊万里)の椀である。315は梅樹文染付椀で、器胎は薄手であり、文様は比較的丁寧な描かれる。17世紀後半頃の製品とみられる。口径10.0cm、器高5.8cmを測る。316は菊花文染付椀である。器胎は薄手で、施文も丁寧である。京都からの注成品で、18世紀頃の製品とみられる。口径10.3cm、器高5.8cm、高台径4.8cmを測る。317は網目文染付椀で、内面見込みに菊花文、周囲に網目文を描く。外面には二本描きの二重網目文を施す。高台内には渦福文を描く。18世紀頃の製品とみられる。口径9.8cm、器高5.2cm、高台径4.2cmを測る。318～322は草花文染付椀である。器胎は厚手で、いわゆる「くらわんか」椀である。18世紀頃の製品とみられる。320は口径10.3cm、器高5.7cm、高台径4.1cmを測る。325・326・327は染付椀で、草花文や松竹梅文を描く。器胎は厚手で、いわゆる「くらわんか」椀である。323・324はコンニャク印版の染付椀で、323は笹文を、324は花文を施す。器胎は厚手で、いわゆる「くらわんか」椀である。18世紀頃の製品とみられる。324は口径10.1cm、器高5.3cm、高台径4.3cmを測る。328は手描きとコンニャク印版併用の染付椀で、草花文を手描きし、松樹文をコンニャク印版で施す。18世紀頃の製品とみられる。口径10.5cm、器高5.6cm、高台径5.2cmを測る。329は赤絵椀で、染付に赤釉で花文を上絵付けする。見込みは無釉であり、鉄釉で菊花文を描く。なお、このような上絵付けが、生産地でおこなわれたものか、消費地で施されたかは不明である。底部が厚手であり、「くらわんか」椀に属するものと考えられる。18世紀頃の製品とみられる。口径12.1cm、器高5.5cm、高台径4.3cmを測る。

300は中国製の青花磁器皿である。16世紀前半頃の製品とみられる。高台径7.2cmを測る。334は瀬戸美濃焼の黄瀬戸丸皿である。口径8.6cm、器高1.4cm、高台径5.6cmを測る。335は瀬戸美濃焼の灰釉折縁菊皿である。口径10.9cm、器高2.2cm、高台径5.8cmを測る。この2点は16世紀後半頃の製品とみられる。

336～340は肥前陶器の皿である。336・337は灰釉段皿である。見込みに砂目の目痕が残る。17世紀初頭頃の製品とみられる。336は口径12.8cm、器高3.1cm、高台径5.0cmを測る。338・339・340は見込みには蛇の目状の無釉部分があり、重ね焼きの痕跡が残る。338・339は部分的に銅緑釉を垂らしこむ。17世紀後半の製品とみられる。338は口径13.2cm、器高4.2cm、高台径5.0cmを測る。

341～349は肥前磁器の染付皿である。341は内面に獅子文とみられる動物文を描く。中国製の古染付などを真似たものか。口径13.8cm、器高3.1cm、高台径5.6cmを測る。344もやや稚拙であるが同文であり、あるいは一組のものか。342・343は花卉文を描く。345は鳥文を描き、口縁端

部に鉄釉を施す。口径13.2cm・器高2.9cm・高台径6.0cmを測る。347は段皿で、吹墨技法で施文する。346は見込みが蛇の目状の無釉で、重ね焼きの痕跡が残る。外面高台際も無釉である。以上7点は、17世紀前半頃の製品である。348・349は見込み中央にコンニャク印版で五弁花文を施し、周辺部に草花文を描く。器胎は厚手である。18世紀の製品である。348は口径12.9cm・器高3.5cm・高台径7.7cmを測る。

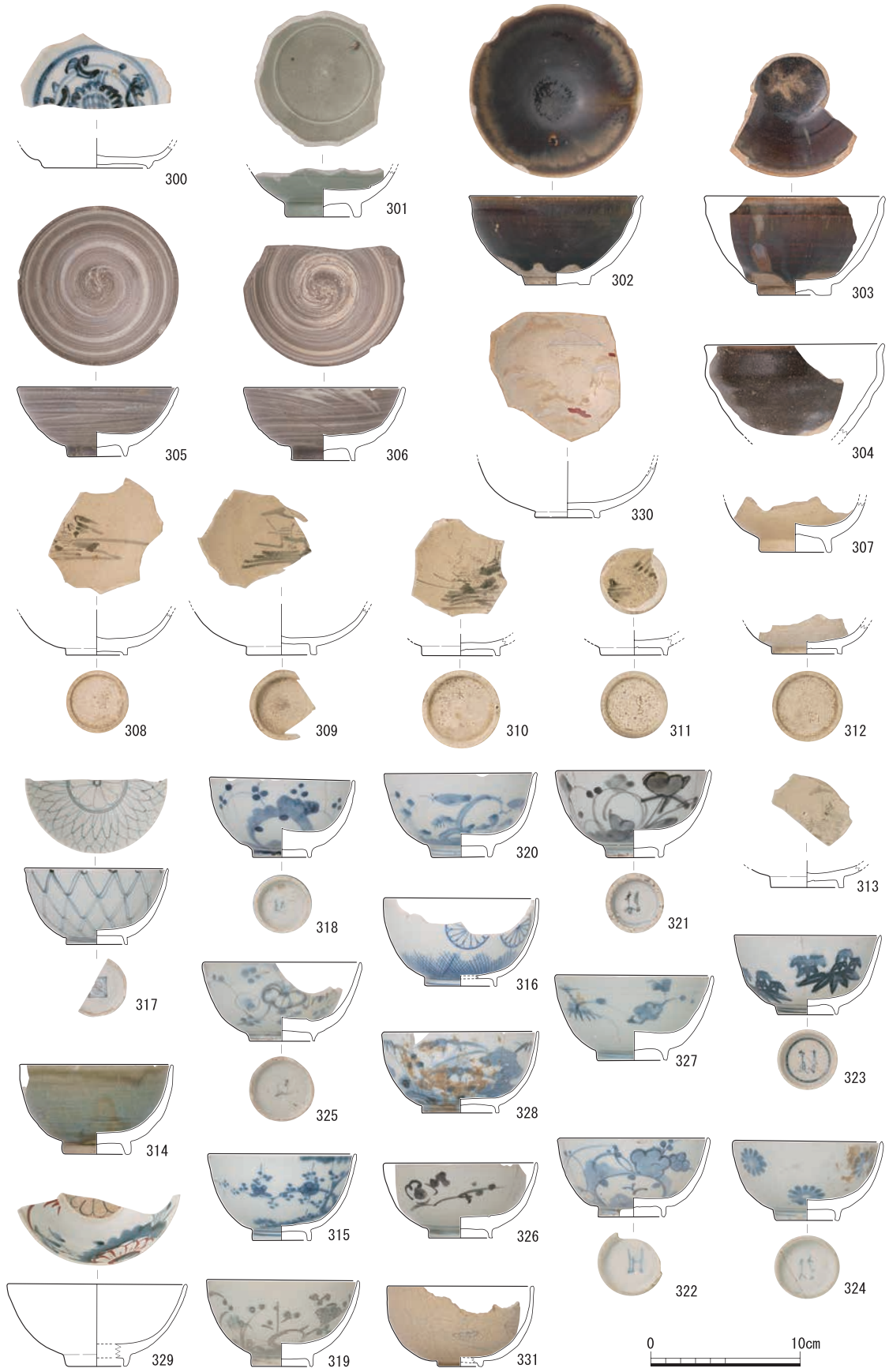
350は肥前磁器の青磁段皿である。内面に蛇の目状の無釉部分があり、重ね焼きの痕跡が残る。外面高台際は無釉である。17世紀前半から中葉頃の製品とみられる。351は肥前磁器の折縁青磁鉢で、口縁部に穿孔がある。17世紀の製品とみられる。

352は朝鮮王朝の半磁胎の白磁皿である。内面には砂目の目痕が残る。内面周縁部には黒土を象嵌して施文する。高台径6.0cmを測る。17世紀の製品とみられる。

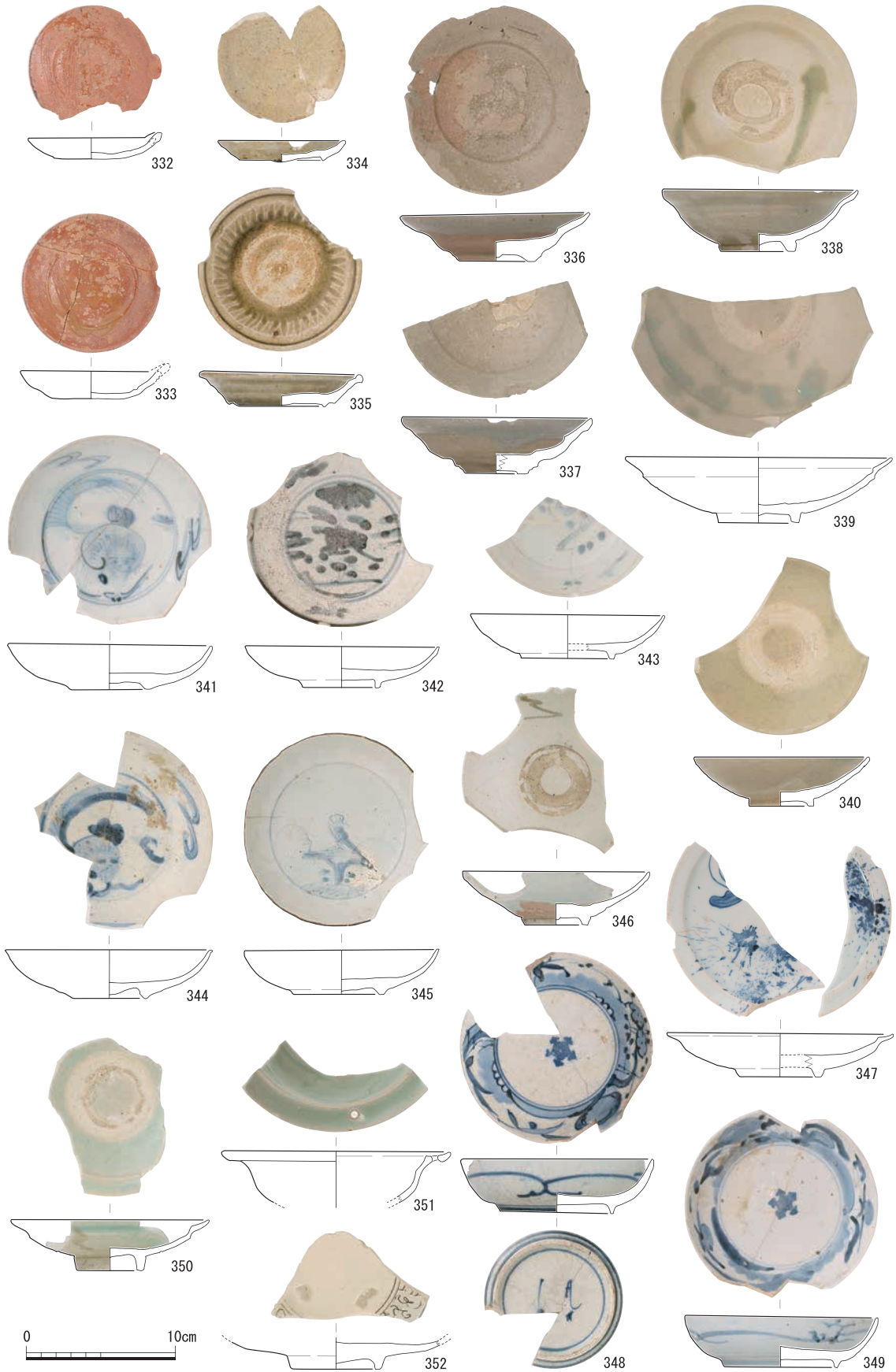
361は肥前磁器の卸目皿である。高台は幅広の蛇の目状である。17世紀の製品とみられる。362は肥前磁器の染付大皿である。菊水文を描く。17世紀前半頃の製品とみられる。363は肥前磁器の青磁皿である。17世紀の製品とみられる。364は肥前陶器の蓮葉形皿である。内面に呉須で薄く葉脈を描く。高台内に「柴」の刻印を押す。胎土は精良で、高台は高い。京焼風肥前陶器である。17世紀後半頃の製品とみられる。365は肥前陶器の三島鉢である。内面に印花文を施し、見込みに9か所の砂目の目痕がある。口径28.5cm、器高9.2cm、高台径11.1cmを測る。17世紀後半頃の製品である。366は肥前磁器の染付鉢である。見込みに蛇の目状の無釉部分があり、重ね焼きの痕跡が残る。口径20.7cm、器高6.2cm、高台径8.0cmを測る。367は瀬戸焼の深鉢である。見込みに菊花文を押印する。18世紀後半以降の製品とみられる。368は信楽焼の壺である。胎土に長石粒が多く含まれる。器高16.9cmを測る。369は肥前磁器の染付瓶である。17世紀後半以降の製品か。

353～359は土師器皿である。口縁部に煤が付着するものがあり、燈明皿として使用されたものもある。358・359は、内面の底部と口縁部の境に沈線をもつ。358は口径10.8cm、器高1.7cmを測る。17世紀のものともみられる。332・333は施釉土師器皿である。口縁端部に燈芯置きを付する。358・359と同様、内面の底部と口縁部の境に沈線を持つ。360は陶器製の燈明皿である。口径6.5cm、器高1.2cmを測る。

370～377は肥前磁器の仏飯器である。377は口径8.5cm、器高6.3cm、高台径4.9cmを測る。17世紀後半から18世紀にかけての製品とみられる。378は肥前磁器の染付小瓶である。簡略な草花文を描く。17世紀中葉から後半頃にかけての製品とみられる。379は瀬戸美濃焼の茶入である。鉄釉を施し、下部は無釉である。高台は糸切りである。17世紀頃の製品か。高台径4.6cmを測る。380は肥前磁器の染付小椀で、口縁部に雨降文を描く。18世紀後半頃の製品か。口径8.3cm、器高4.6cm・高台径3.8cmを測る。381は肥前陶器の小椀で、鉄釉を施す。口径6.8cm、器高3.6cm、高台径3.6cmを測る。382は肥前磁器の筒型椀である。外面に青磁釉を施し、内面は白磁である。18世紀後半頃の製品とみられる。386・387は京焼の椀である。鉄釉などで蔓草文や垣文を描く。386は口径11.1cm、器高5.9cm、高台径4.2cmを測る。



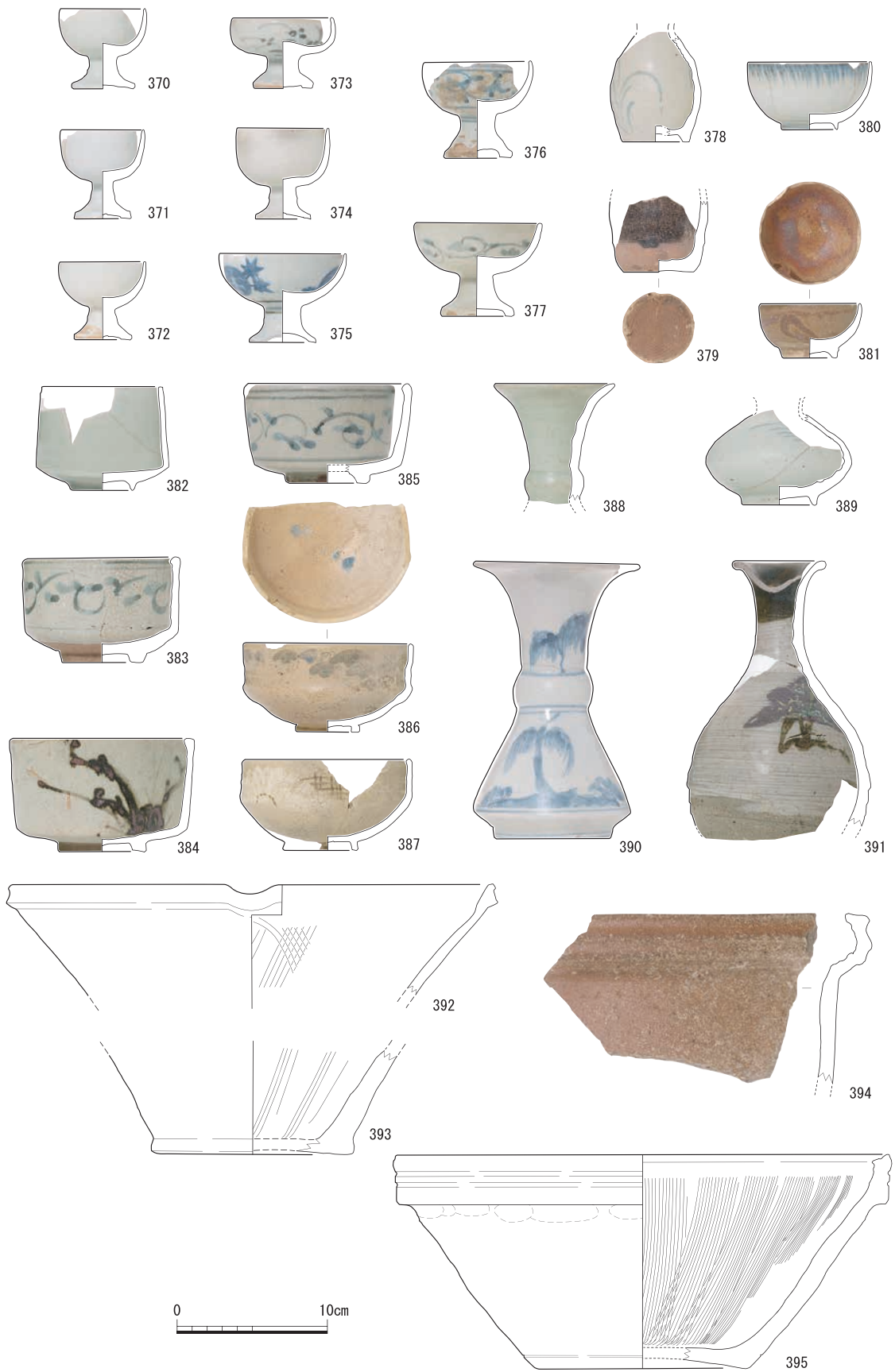
第78図 出土遺物実測図(17)



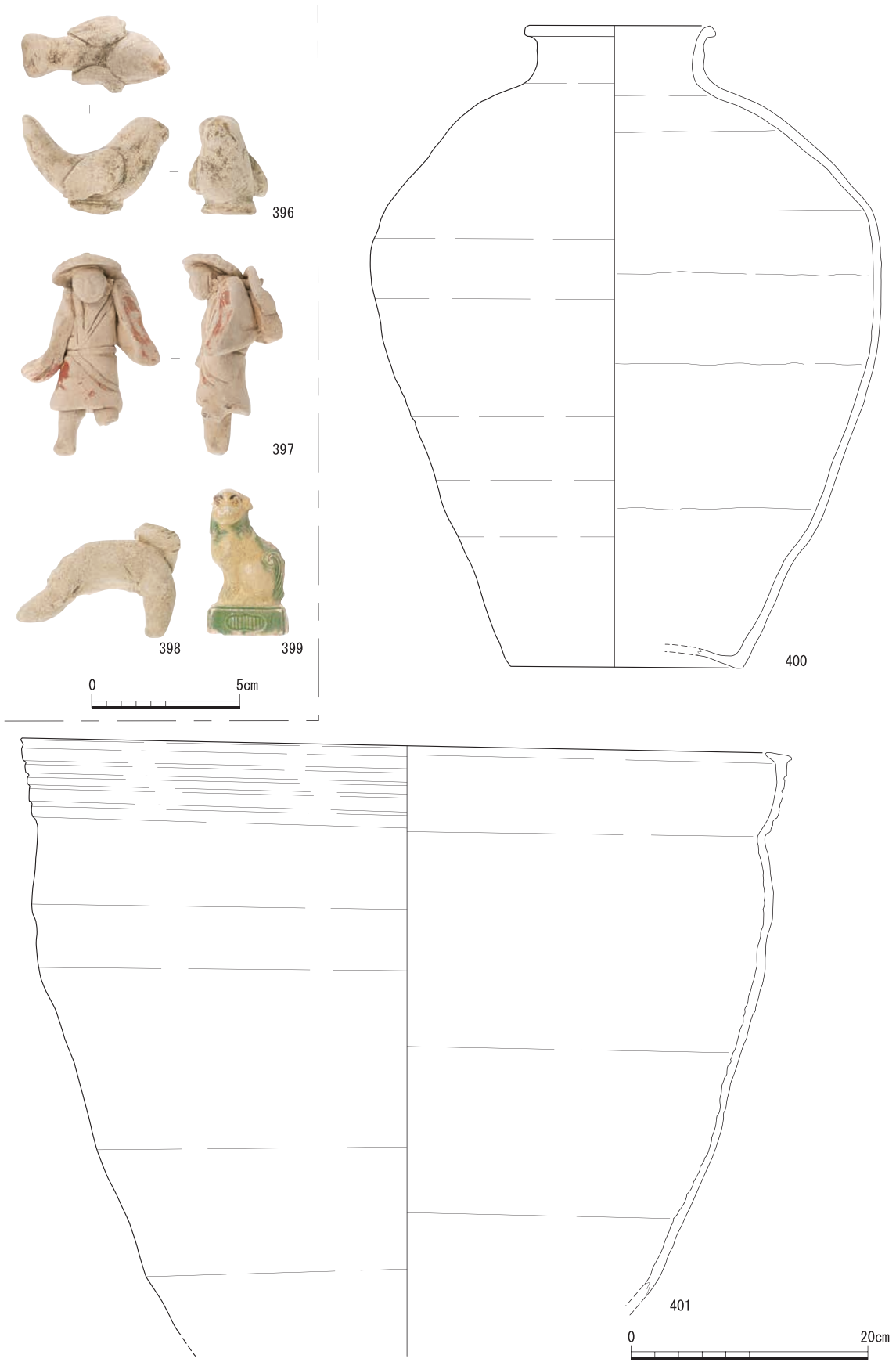
第79図 出土遺物実測図(18)



第80図 出土遺物実測図(19)



第81図 出土遺物実測図(20)



第82図 出土遺物実測図(21)

383～385は肥前陶器の香炉である。呉須や鉄釉で唐草文や梅樹文を描く。内面は無釉である。17世紀後半頃の製品か。383は口径9.8cm、器高6.9cm、高台径5.3cmを測る。390は肥前磁器の染付花瓶で、胴部と頸部の境が帯状に膨らむ形態である。17世紀末から18世紀前半頃の製品とみられる。口径11.0cm、器高18.5cm、高台径7.6cmを測る。388は肥前磁器の青磁花瓶で、390と同様の形態である。389は肥前磁器の染付瓶で、油壺形である。18世紀頃の製品とみられる。391は肥前陶器で白土を刷毛塗りした後、鉄釉や銅緑釉で松文を描く。17世紀後半以降の製品とみられる。

392は丹波焼の播鉢である。内面に粗い櫛描きの播目を施す。393は信楽焼の播鉢である。これら2点は17世紀の製品とみられる。395は堺播鉢で、密な播目を施す。18世紀の製品とみられる。394は信楽焼の深鉢とみられる。400は丹波焼の壺である。17世紀の製品か。口径15.3cm、器高54.1cm・高台径19.5cmを測る。401は丹波焼の甕である。口径61.0cmを測る。396～399は伏見人形である。鳥や西行、動物、狛犬形である。

b. 銭貨

寛永通寶が出土している。図示したものは、全て銅製の一文銭である。402～411はいわゆる「古寛永」である。寛永13(1636)年～万治2(1659)年に鑄造されたものである。412～422はいわゆる「新寛永」である。このうち、419・421・422は背面に「文」の字を鑄出す。いわゆる「文銭」と呼ばれるもので、寛文8(1668)年～天和3(1683)年に鑄造されたものである。412～418・420は元禄10(1697)年以降に鑄造されたものである。418は、背面に「元」の字が鑄出されている。それ以外は背面無文である。

c. 石造五輪塔

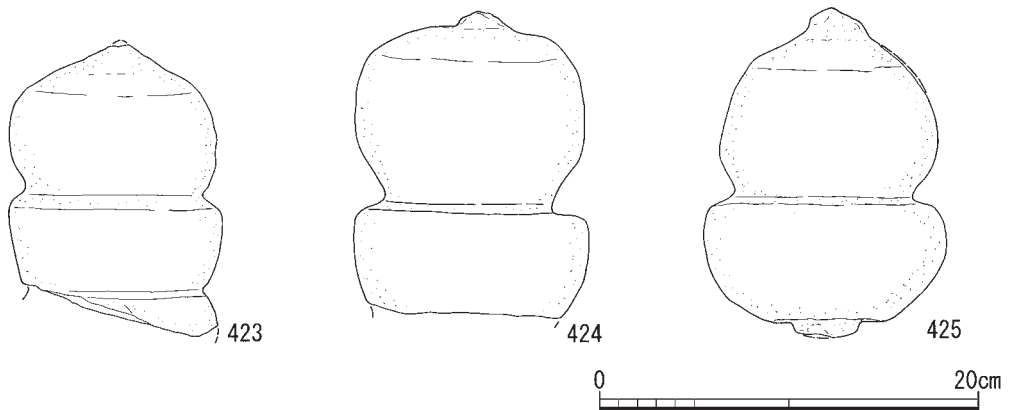
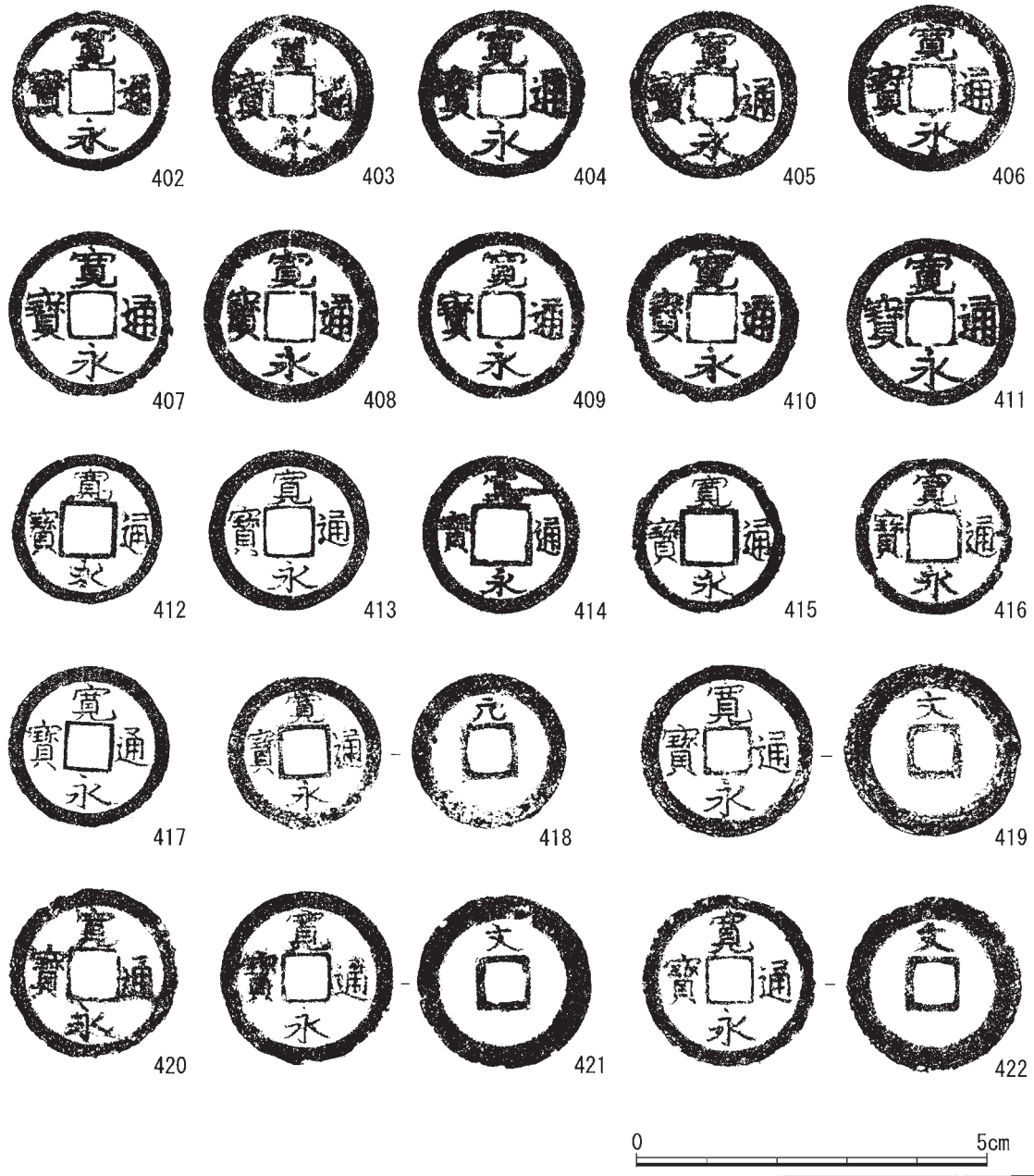
423は、一石五輪塔の風空輪である。空輪の宝珠形の先端は緩やかに尖る。中世後期頃のものと思われる。424は五輪塔の風空輪であるが、風輪の請花基部が破損しており、一石五輪塔、別石五輪塔の区別は不明である。空輪の宝珠形の先端が突出して尖り気味であり、江戸時代前期頃のものである可能性が考えられる。425は別石五輪塔の風空輪である。風輪下部に突出した臍が残る。空輪の宝珠形の先端が突出して尖っており、江戸時代前期頃のものである可能性がある。

(引原茂治)

7. まとめ(第84～86図・付表)

下海印寺遺跡の調査としては、過去数回の調査が実施されてきた。その中でも西条地区周辺の調査はいずれも京都第二外環状道路建設に伴う調査で、この周辺の様相が明らか^(注9)となってきた。西条周辺には、西から方丸・尾流・西条となり、南西に上内田地区があり、下海印寺遺跡の南部にあたる。以下、この下海印寺西条地区周辺で検出した主要遺構を時期毎に概観する。江戸時代については前述したので割愛する。

弥生時代後期～古墳時代初頭 この時期の遺構は広範囲に点在している。上内田地区で検出した溝S D 2001(11：番号は付表に対応。以下同じ。)は、幅8mの大きな流路が南東方向に流れ、その右岸高台上に竪穴式住居跡S H 82(4)や竪穴式住居跡S H 121(5)が営まれている。S H 121



第83図 出土遺物実測図(22)

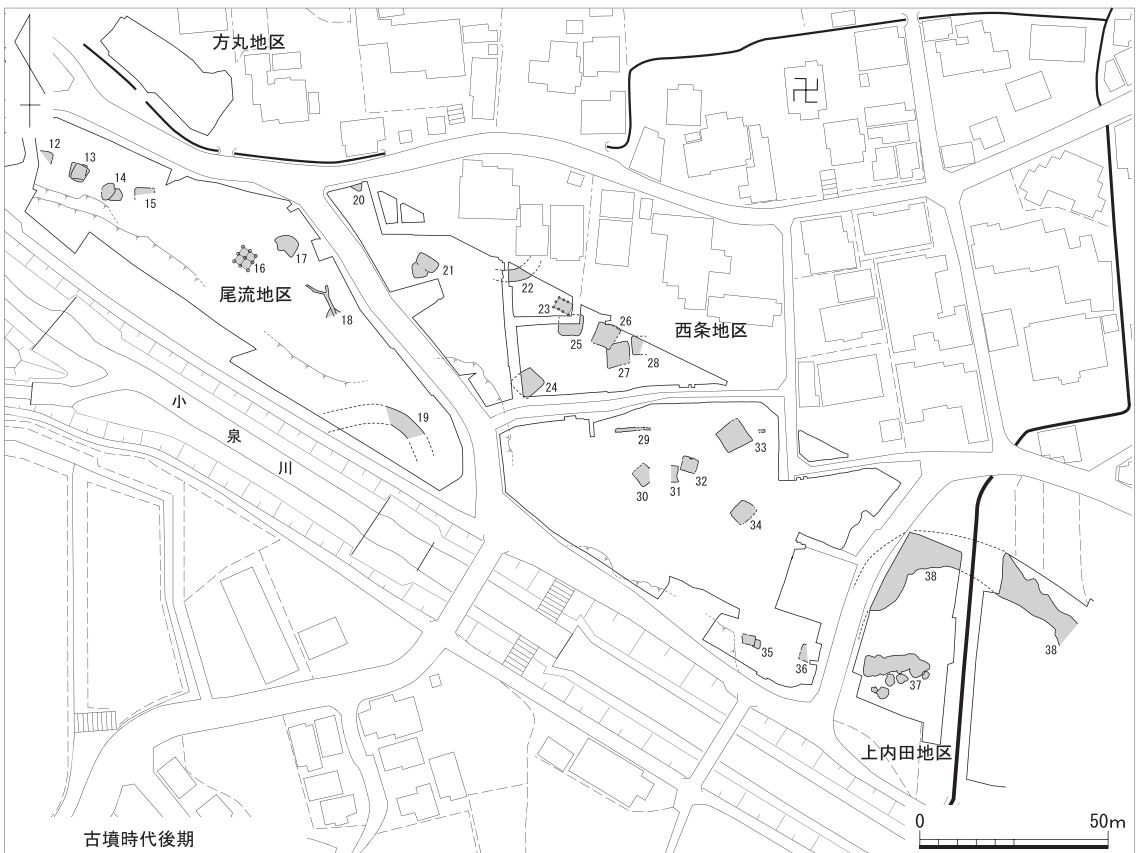
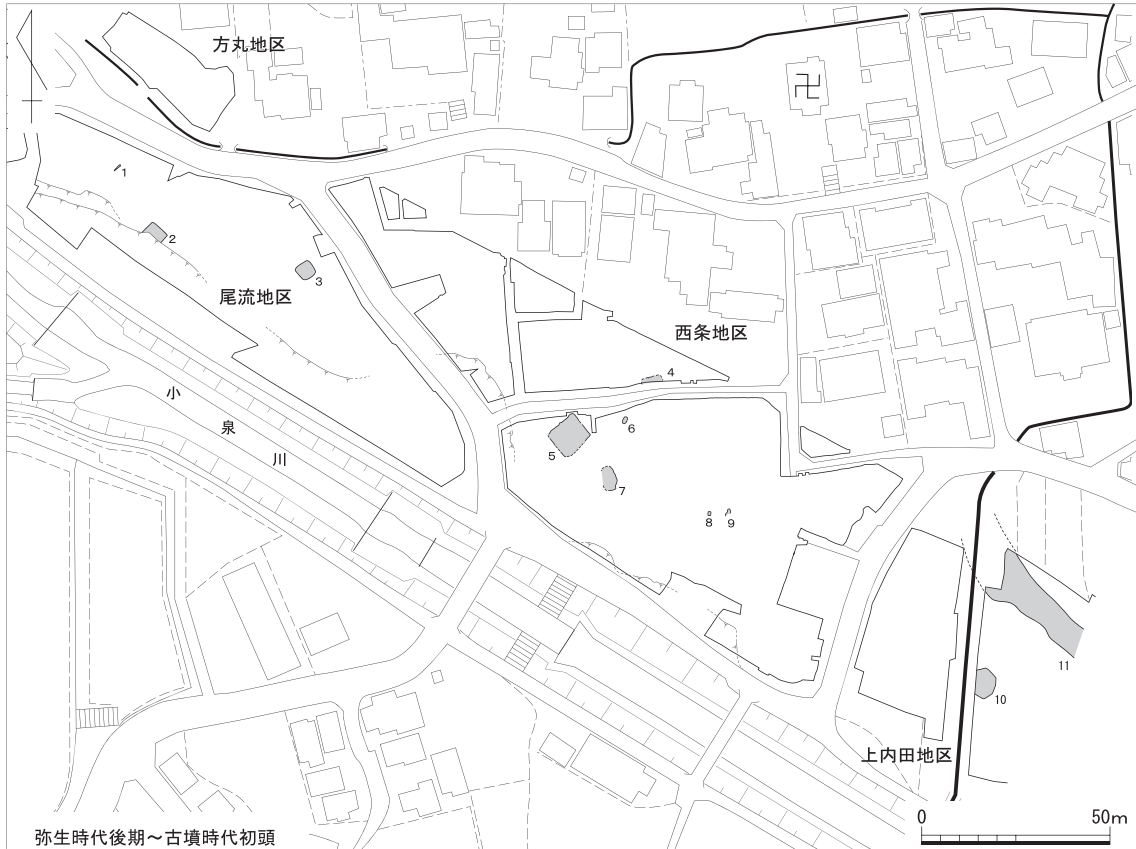
はベッド状遺構を有し、一辺9mを測る大形住居である。またその周囲の低位段丘上では竪穴式住居跡SH2(10)やSH58(2)、SH05(3)を検出した。特にSH2は、多角形住居である。

古墳時代後期 尾流地区では溝SD25(19)、上内田地区では溝SD1001・2001(37)を検出したことから、段丘裾部を大きく蛇行しながら流れる流路が復元できる。その上面にあたる段丘上に竪穴式住居跡が広範囲に数多く営まれる。竪穴式住居跡は、尾流地区東側から西条地区にかけて分布しており、北・東にはさらに住居跡が分布していることが想定できる。いわば、大集落の一面を検出したといえよう。掘立柱建物跡としては(16・23)の2棟のみである。また溝SD95703(22)は、幅3.6mを測り、弓状に検出した。竪穴式住居跡SH101・102・103(24～26)の埋土中から須恵器器台の破片が出土したことから、溝SD95703は古墳に伴う遺構である可能性も考えられる。

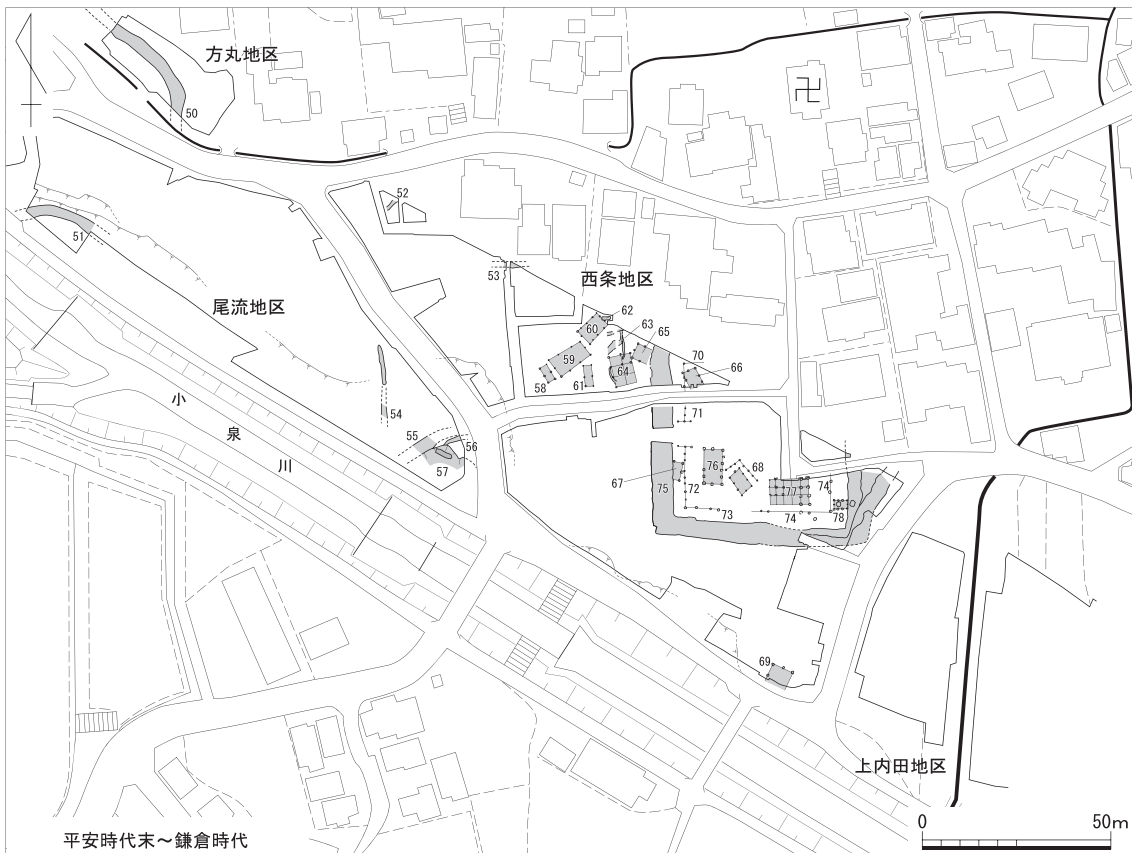
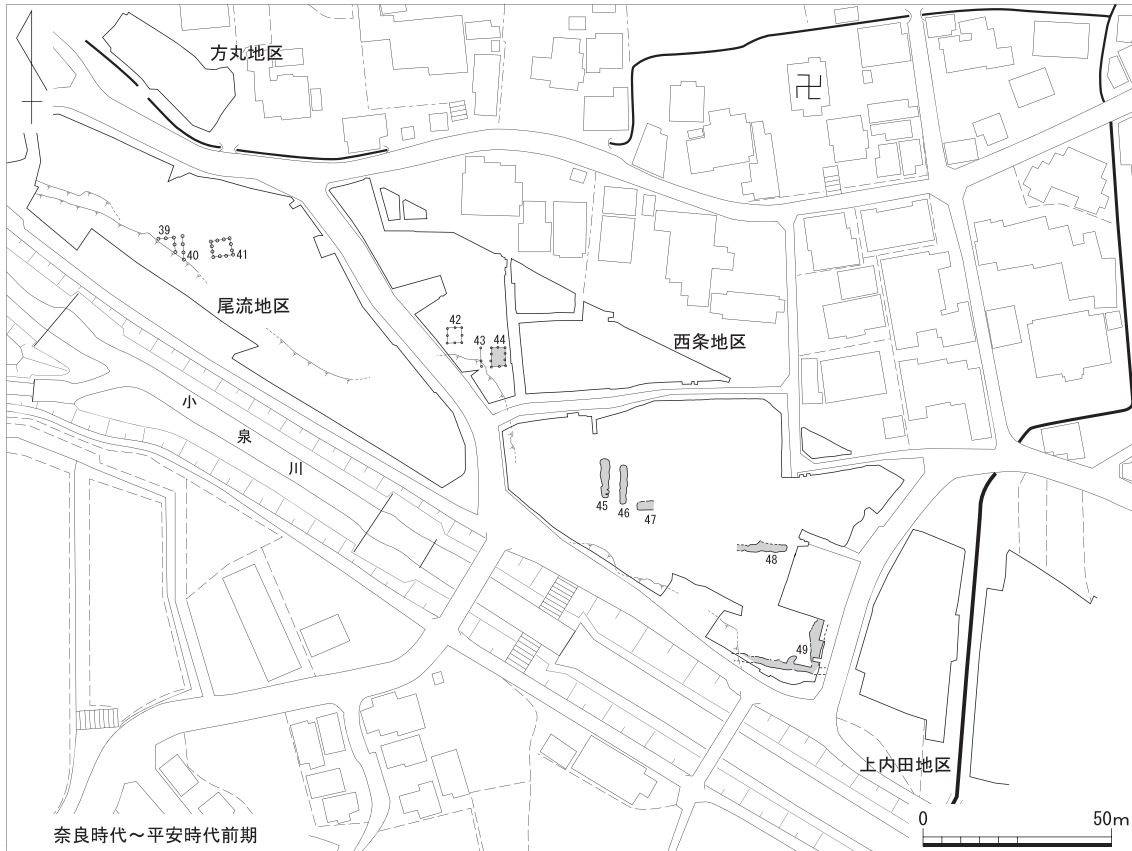
奈良時代～平安時代前期 この時期の遺構は、掘立柱建物跡、柵列、溝跡、土坑などである。図示した範囲は、長岡京跡の南西部である右京七条四坊十一・十二・十四町付近にあたる。西条地区南東隅から検出した溝SD79・112(49)については、その主軸方向が真南北・真東西からわずかに斜傾することから、長岡京跡の側溝にはならないと判断した。一方、真東西を向く溝SD366(47)は、七条条間南小路付近に、真南北を向く溝SD132(45)は西四坊坊間西小路付近に位置する。しかし、いずれも検出長10m前後であり、周辺に遺構が続いていかないことから、条坊側溝の残欠であるかどうかについては不明である。なお、検出した掘立柱建物跡や柵列は、長岡京の条坊呼称では十四町内の施設となる。掘立柱建物跡SB06(39)の西側付近が西四坊大路の推定地とされているが、関連する遺構の検出には至らなかった。

平安時代末期～鎌倉時代 この時期の遺構は、二時期に細分できる。

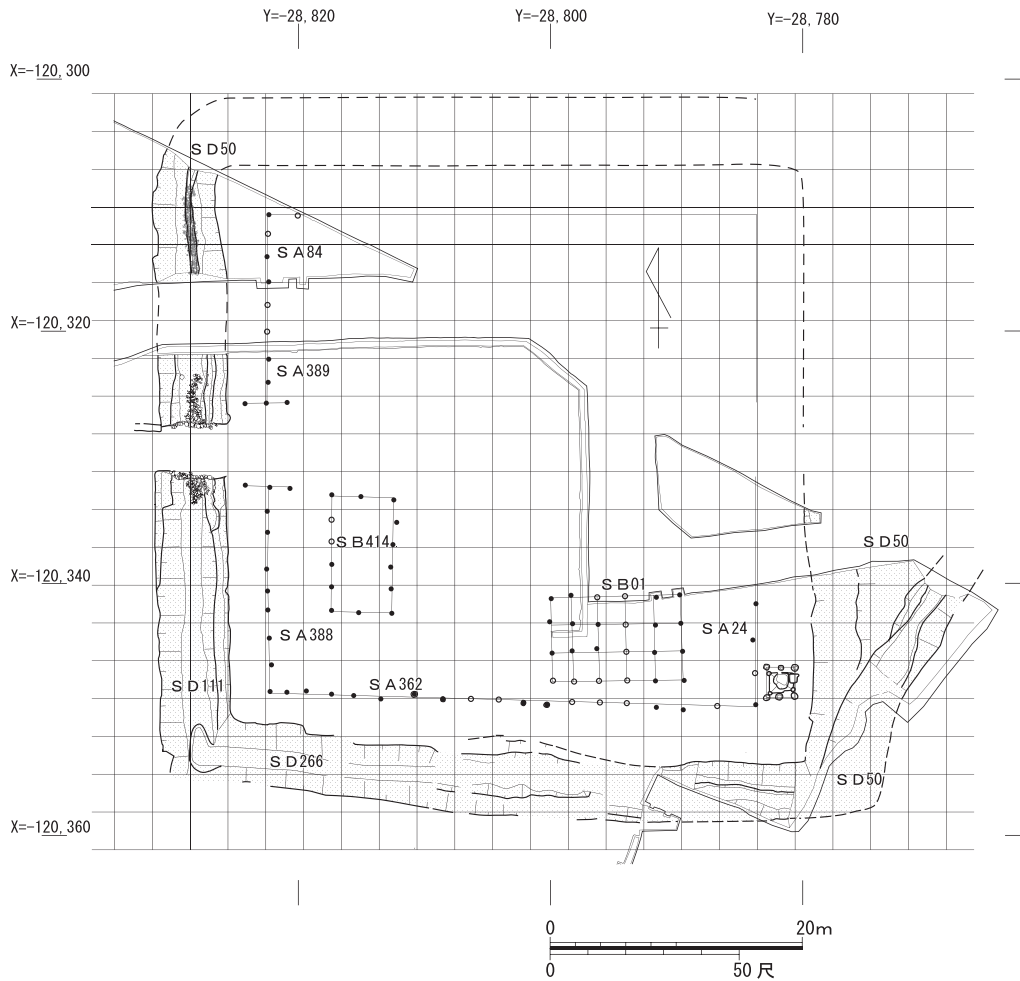
一つは平安時代末期で方形に区画された屋敷地に関連する遺構群と、尾流地区南東部で検出した遺構群である。屋敷地については、第86図に示すように規格に沿って築かれたものである。堀はおおむね20尺幅で築かれ、その10尺内側に柵列(板塀)が巡る。柵列間は、およそ130尺である。土橋の幅は10尺で築かれる。このような屋敷の年代は、瓦器碗(213～224)の出土により11世紀末頃に築かれ、瓦器碗(232・239)の出土により12世紀中葉にかけて存続したと考える。尾流地区で検出したSX51(55)は北東を向く、固く叩きしめた道路状遺構である。その側溝と考えられているSD64は東方に湾曲しており、同時期の遺物が出土している。その東方50m先には土橋SX133が存在する。さらにNR56(57)は当時の旧河道であり、SX51がそこで止まることから、おそらくこの付近に橋が架かっていたと考えられている。以上のようなことから方形区画から西方に通じる通路が存在したと思われる。また、溝SD95701(53)やSD02(54)もこの時期の区画溝と考える。同様の遺構としては久世郡に位置する佐山遺跡^(注10)があり、当遺跡とともに堀や濠でもって方形に区画した在地領主層の屋敷跡の初見は、11世紀後半から末頃に求めることができる。この後、井ノ内遺跡や神足遺跡(第1図)などに見られるように、屋敷地内や周辺部に人々が集約され、屋敷跡は変貌していったと思われる。福知山市の大内城跡や堺市の日置荘遺跡、大阪市の長原遺跡や和気遺跡などに見られるように土塁を設け、防御的機能を備えた屋敷跡へとさらに変貌していったと思われる。^(注11)



第84図 下海印寺遺跡遺構配置図(1)



第85図 下海印寺遺跡遺構配置図(2)



第86図 屋敷跡規格図

もう一つは鎌倉時代の遺構群である。その主軸方向を西に斜傾する掘立柱建物群や溝などである。西条地区に集中して築かれるが、その全容もその原因についても不明である。

今回の調査で数多くの成果を得ることができた。古墳時代後期の集落群や平安時代末期の屋敷跡についてはその一角が検出でき、隣接地にさらに及んでいることについても明らかとなった。今後の周辺部の調査に期待される。

(岡崎研一)

注1 岡崎研一ほか「4. 京都第二外環状道路関係遺跡 平成20年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第137冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2010

注2 長岡京市史編さん委員会編集『長岡京市史』本文編一 長岡京市役所 平成8年

注3 注1に同じ

注4 山本輝雄・岩崎 誠「長岡京跡右京第104次調査概要(7ANOND地区)」(『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第1集 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター) 1984

注5 岡崎研一ほか「3. 京都第二外環状道路関係遺跡 平成19年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第131冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2009

- 注6 百瀬ちどりほか『長岡京市文化財調査報告書』第58冊 長岡京市教育委員会 2011
- 注7 注6に同じ
- 注8 注6に同じ
- 注9 中川和哉ほか「2. 京都第二外環状道路関係遺跡 平成18年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第126冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2008
 森 正ほか「5. 京都第二外環状道路関係遺跡 平成21年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第142冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2011
- 注10 森島康雄ほか『佐山遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第33冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003
- 注11 岡崎研一「方形区画(居館)の調査事例-特に乙訓地域において-」(『京都府埋蔵文化財論集』第6集 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2010

付表 下海印寺遺跡内主要遺構一覧表

番号	調査回数	地区名	トレンチ名	遺構番号	規模 (m)	時期	備考
1	第862次	尾流地区	2トレンチ	S X 45	長2.0×幅0.5、深0.4	弥生時代後期	土器溜まり・完形品の甕などが出土
2	第957次	尾流地区		S H 58	5.0×4.0以上	弥生時代末	住居内から炉跡・貯蔵穴検出
3	第973次	尾流地区		S H 05	4.2×3.8	弥生時代後期	
4	第1007次	西条地区	J地区	S H 82	1.7×1.3、深0.4、後世に削平	古墳時代初頭	本報告集に掲載
5	第970次	西条地区	A地区	S H 121	9.0×7.6、深0.8、ベッド状遺構	古墳時代初頭	本報告集に掲載
6	第970次	西条地区	A地区	S K 149	1.0×1.8、深0.1	古墳時代初頭	本報告集に掲載
7	第970次	西条地区	A地区	S K 123	東西2.5×南北6.4、深0.4	古墳時代初頭	本報告集に掲載
8	第970次	西条地区	C地区	S K 458	0.7×1.0、深0.1	古墳時代初頭	本報告集に掲載
9	第970次	西条地区	C地区	S K 339	0.6×1.0、深0.1	古墳時代初頭	本報告集に掲載
10	第902次 第928次	上内田地区		S H 2	2.6×2.6	古墳時代初頭	多角形住居・幅1mのベッド状遺構
11	第937次	上内田地区	上内田-2	S D 2001	幅8.0、深0.4～0.6	弥生時代後期末	下層遺構
12	第862次	尾流地区	2トレンチ	S H 27	1.5×2.5以上	古墳時代後期か	
13	第862次	尾流地区	2トレンチ	S H 13-A	4.2×4.0	古墳時代後期	
				S H 13-B	4.1×4.0	古墳時代後期	
14	第862次	尾流地区	2トレンチ	S X 14-A	長軸4.0、深0.3	古墳時代後期	
				S X 14-B	長軸3.0、深0.3	古墳時代後期	
15	第862次	尾流地区	2トレンチ	S H 16	4.3×1.7、深0.2	古墳時代後期	
16	第973次	尾流地区		S B 184	2間(4.6)×2間(4.4)	古墳時代後期	
17	第957次	尾流地区		S K 54	6.5×5.5	古墳時代後期	
	第973次			S K 14			
18	第973次	尾流地区		S D 130	幅0.3～0.8	古墳時代後期	
				S H 140	3.0×2.0以上	古墳時代後期	
19	第870次	尾流地区		S D 25	幅5.0、検出長20		

番号	調査次数	地区名	トレンチ名	遺構番号	規模 (m)	時期	備考
20	第 852 次	西条地区		S H 23	3.0 以上 × 3.0 以上	古墳時代後期	
21	第 852 次	西条地区		S H 85208	5.0 × 3.5	古墳時代後期	
				S H 85215	4.2 × 4.2	古墳時代後期	S H 85208 に切られる
22	第 957 次	西条地区	西条 - 1	S D 95703	幅 3.6、深 0.3	古墳時代中期後半	弧状に巡る
23	第 957 次	西条地区	西条 - 1	S B 95706	3 間 (4.3) × 2 間 (2.8)	古墳時代後期	
24	第 970 次	西条地区	E 地区	S H 101	6.6 × 6.4、深 0.2	古墳時代後期	本報告集に掲載
25	第 970 次	西条地区	E 地区	S H 102	6.4 × 5.8、深 0.1	古墳時代後期	本報告集に掲載
26	第 970 次	西条地区	E 地区	S H 103	6.0 × 6.0、深 0.2	古墳時代後期	本報告集に掲載
	第 1007 次		J 地区	S H 79			
27	第 1007 次	西条地区	J 地区	S H 80	6.0 × 6.0、深 0.2	古墳時代後期	本報告集に掲載
28	第 1007 次	西条地区	J 地区	S H 81	4.8 × 3.6 以上、深 0.1	古墳時代後期	本報告集に掲載
29	第 970 次	西条地区	A 地区	S D 144	検出長 9.6、幅 0.6 ~ 1.0 深 0.1	古墳時代後期	本報告集に掲載
30	第 970 次	西条地区	A 地区	S H 156	4.4 × 4.8、深 0.2 ~ 0.3	古墳時代後期	本報告集に掲載
31	第 970 次	西条地区	C 地区	S K 128	4.4 × 2.2、深 0.1	古墳時代後期	本報告集に掲載
32	第 970 次	西条地区	C 地区	S H 127	3.8 × 4.0、深 0.2	古墳時代後期	本報告集に掲載
33	第 970 次	西条地区	C 地区	S H 350	7.2 × 7.2、深 0.2	古墳時代後期	本報告集に掲載
				S K 394	長辺 1.2 × 短辺 0.7 深 0.05		
34	第 970 次	西条地区	C 地区	S H 351	5.6 × 4.8、深 0.2	古墳時代後期	本報告集に掲載
	第 1024 次		M 地区	S H 351			
35	第 970 次	西条地区	B 地区	S K 125	3.6 × 2.5、深 0.5	長岡京期	本報告集に掲載
36	第 970 次	西条地区	B 地区	S H 26	4.2 × 2.7、深 0.05	古墳時代後期	本報告集に掲載
37	第 937 次	上内田地区	上内田 - 1	S K 1009	東西 17.5、南北 6.0、深 0.5	古墳時代後期	水辺の祭祀関連遺構か
38	第 937 次	上内田地区	上内田 - 1	S D 1001	幅 10、深 0.4 ~ 0.8	古墳時代中期後半	
			上内田 - 2	S D 2001	幅 7.0 ~ 10、深 0.3	古墳時代中期後半	上層遺構
39	第 957 次	尾流地区		S B 06	2 間 (4.0) × 2 間 (4.1)	奈良時代	
40	第 957 次	尾流地区		S A 15	長 9.3 m	奈良時代	
41	第 957 次	尾流地区		S B 60	3 間 (5.2) × 3 間 (4.3)	奈良時代	
42	第 852 次	西条地区		S B 85202	2 間 (3.8) × 2 間 (3.8)	長岡京期 ~ 平安時代初頭	総柱の倉庫か
43	第 852 次	西条地区		S A 85204	南北 4 間 (5.0)	奈良 ~ 平安時代	
44	第 852 次	西条地区		S B 85201	2 間 (3.6) × 3 間 (5.1)	奈良 ~ 平安時代	
45	第 970 次	西条地区	A 地区	S D 132	長 10.3、幅 2.2 ~ 2.3、深 0.3	長岡京期	本報告集に掲載
46	第 970 次	西条地区	A 地区	S D 119	長 10.3、幅 1.5 ~ 2.0、深 0.3 ~ 0.5	長岡京期	本報告集に掲載
47	第 970 次	西条地区	A 地区	S K 158	2.2 × 4.3 以上、深 0.05	長岡京期	本報告集に掲載
48	第 970 次	西条地区	D 地区	S D 366	検出長 12.0、幅 1.4 ~ 2.0、深 0.05	長岡京期	本報告集に掲載
49	第 970 次	西条地区	B 地区	S D 79	検出長 19.5、幅 2.0、深 0.6 ~ 0.8	長岡京期	本報告集に掲載
				S D 112	検出長 12.6、幅 2.2 ~ 3.3、深 0.6		
50	第 973 次	方丸地区	A トレンチ	S D 01	幅 3.5、深 1.7、検出長 66	中世	北西方向の C トレンチまで続く
51	第 870 次	尾流地区	5 トレンチ	S D 48	幅 3.0 × 長 17	平安時代末期	旧河道

番号	調査次数	地区名	トレンチ名	遺構番号	規模 (m)	時期	備考
52	第970次	西条地区	F地区	S D 10	幅0.4、長1.4	中世?	
53	第957次	西条地区	西条-1	S D 95701	幅1.7、深0.5	中世	区画溝か
54	第862次	尾流地区	4トレンチ	S D 02	幅0.2~0.5、長13	中世?	区画溝か(確認長20)
	第870次	尾流地区	6トレンチ	S D 02	幅1.4、長3.6	中世?	
55	第870次	尾流地区	6トレンチ	S X 51	幅2.4~3.4、検出長12	平安時代後期	道路状遺構か
56	第870次	尾流地区	6トレンチ	S D 64	幅0.5~1.3、検出長5.0	平安時代後期	S X 51の側溝か
57	第870次	尾流地区	6トレンチ	N R 56 - B	幅3.4、深0.9	中世	中世の旧河道
				S X 55	基底幅1.1、高0.7、長5.6	中世	護岸施設
58	第970次	西条地区	E地区	S B 15	1間(2.0)×2間(4.7)	鎌倉時代	本報告集に掲載
59	第970次	西条地区	E地区	S B 46	2間(5.5~4.5)×3間(9.6)	鎌倉時代	本報告集に掲載
60	第970次	西条地区	E地区	S B 30	3間(4.6)×4間(7.0)	鎌倉時代	本報告集に掲載
61	第970次	西条地区	E地区	S B 12	1間(2.1)×2間(5.5)	鎌倉時代	本報告集に掲載
62	第970次	西条地区	E地区	S K 34	2.3×0.8、深0.3	平安時代末期	本報告集に掲載
63	第1007次	西条地区	J地区	S D 19ほか	幅0.9、深0.2	鎌倉時代	本報告集に掲載
64	第1007次	西条地区	J地区	S B 30	2間(5.7)×3間(8.2)	鎌倉時代	本報告集に掲載
65	第1007次	西条地区	J地区	S B 49	2間(4.1)×1間(2.3)以上	鎌倉時代	本報告集に掲載
66	第1007次	西条地区	J地区	S B 58	2間(3.6)×2間(4.2)以上	鎌倉時代	本報告集に掲載
67	第970次	西条地区	C地区	S B 406	2間(4.9)×1間(2.5)以上	鎌倉時代	本報告集に掲載
68	第970次	西条地区	C地区	S B 385	2間(3.5)×3間(5.9)	鎌倉時代	本報告集に掲載
				S A 386	4間(7.2)		
				S A 387	3間(4.4)		
69	第970次	西条地区	B地区	S B 08	2間(5.5)×1間(3.4)以上	鎌倉時代	本報告集に掲載
70	第1007次	西条地区	J地区	S A 84	3間(5.4)	平安時代末期	本報告集に掲載
71	第970次	西条地区	C地区	S A 389	2間(3.6)	平安時代末期	本報告集に掲載
72	第970次	西条地区	C地区	S A 388	8間(16.3)	平安時代末期	本報告集に掲載
73	第970次	西条地区	C・H地区	S A 362	5間(8.9)	平安時代末期	本報告集に掲載
74	第970次	西条地区	H地区	S A 24	南辺3間(7.9)、東辺3間(8.1)	平安時代末期	本報告集に掲載
75	第970次	西条地区	C地区	S D 111・266	幅4.0~0.6 深1.4~1.9	平安時代末期	本報告集に掲載
	H・J地区		S D 50	幅5.0~8.4 深0.6~1.6	平安時代末期	本報告集に掲載	
76	第970次	西条地区	C地区	S B 414	2間(4.8)×5間(9.1)	平安時代末期	本報告集に掲載
77	第1007次	西条地区	C・H地区	S B 01	3間(6.8)×4間(8.9)	平安時代末期	本報告集に掲載
78	第1007次	西条地区	H地区	S B 74	2間(2.3)×3間(3.5)	平安時代末期	本報告集に掲載

(2)長岡京跡右京第1024次(7ANOKI-4 川向井地区)・伊賀寺遺跡

1. はじめに

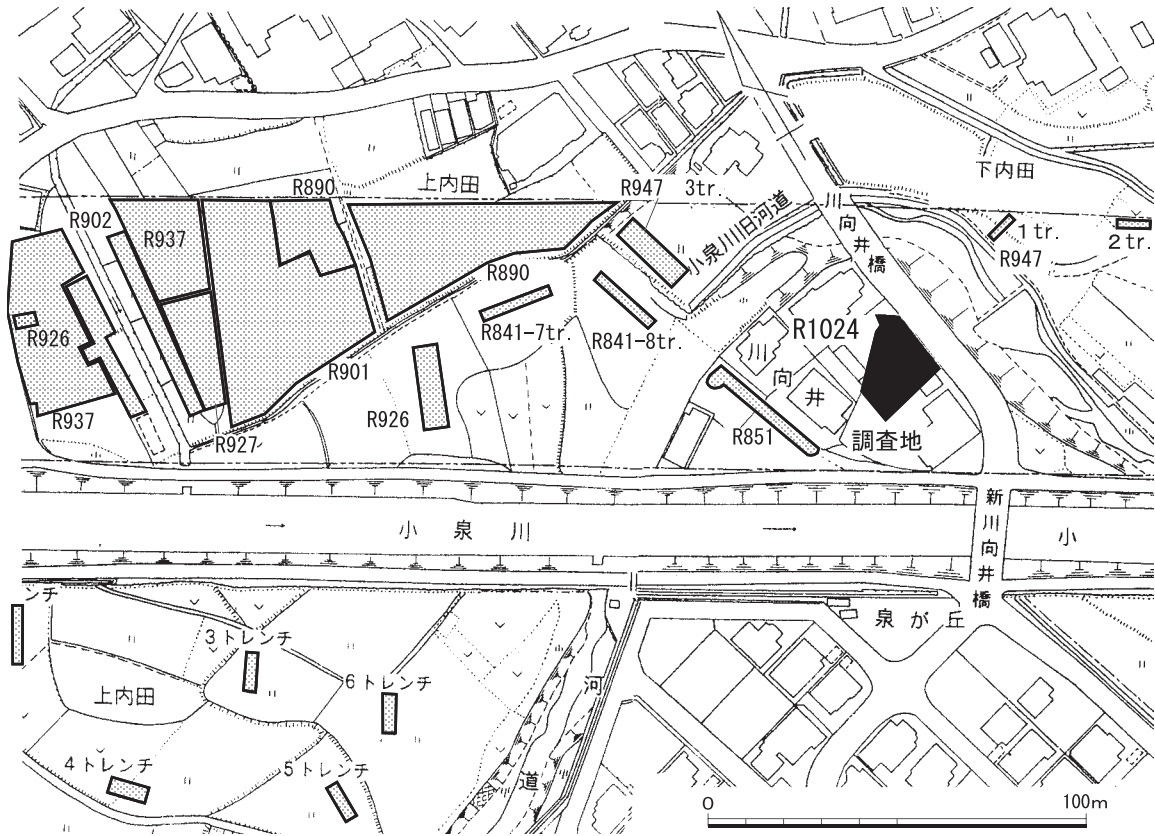
川向井地区は、長岡京市下海印寺川向井に所在し、長岡京跡の条坊復元では右京七条四坊四・五町、七条大路(旧条坊では右京七条四坊二・七町、七条条間小路)に位置する(第87図)。また、縄文時代～中世の集落遺跡である伊賀寺遺跡の範囲に含まれる。

現在の小泉川は、昭和56年度以降に当時の建設省による河川改修で北西から南東方向の直線的な流路に改変されているが、それ以前は下海印寺地区より下流域は大きく蛇行しながら流れていた。今回の調査地は、旧小泉川と現小泉川にはさまれた中の島状に残る部分にあたり、西・北・東側には旧河道が大きく蛇行していた痕跡が残り、この旧流路部分にはコンクリート造りの川向井橋が現存している。旧地形を復原すると、南側にある泉が丘地区から丘陵が北に張り出した裾部に沿って旧河道が大きく「U」字状にカーブしていたものと考えられ、調査地は丘陵上の先端部分に相当する可能性が認められた(第88図)。

第二外環関係遺跡で実施した周辺の調査では、北西側の上内田地区では河岸段丘上に設けられたトレンチで竪穴式住居跡や流路が検出されている(右京第890・923・927次調査)。河岸段丘下の旧小泉川の流路内に設けられた右京第941次調査の8トレンチでは、河川氾濫原を田畑として利用する時点での整地土が確認され、中世以降に土地利用が開始されたことが明らかとなっている。同様な結果は、西側の旧河道肩部付近で調査された右京第947次調査の第3トレンチでも確認されている。北東側の下内田地区では、右京第947次調査で、河岸段丘肩部(第1・2トレンチ)が確認され、旧小泉川の氾濫原でないことが確認された。また、西側の右京第851次調査では、



第87図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 京都西南部・淀)



第88図 周辺調査トレンチ配置図

小泉川の旧流路内であることが明らかとなった。

このような周辺における調査成果と旧地形の復原から、今回の調査地には遺構が存在する可能性が期待できた。

〔調査体制等〕

現地調査責任者 調査第2課長 水谷壽克

調査担当者 調査第2課第2係長 岩松 保

同 主任調査員 増田孝彦・戸原和人

調査場所 長岡京市下海印寺川向井

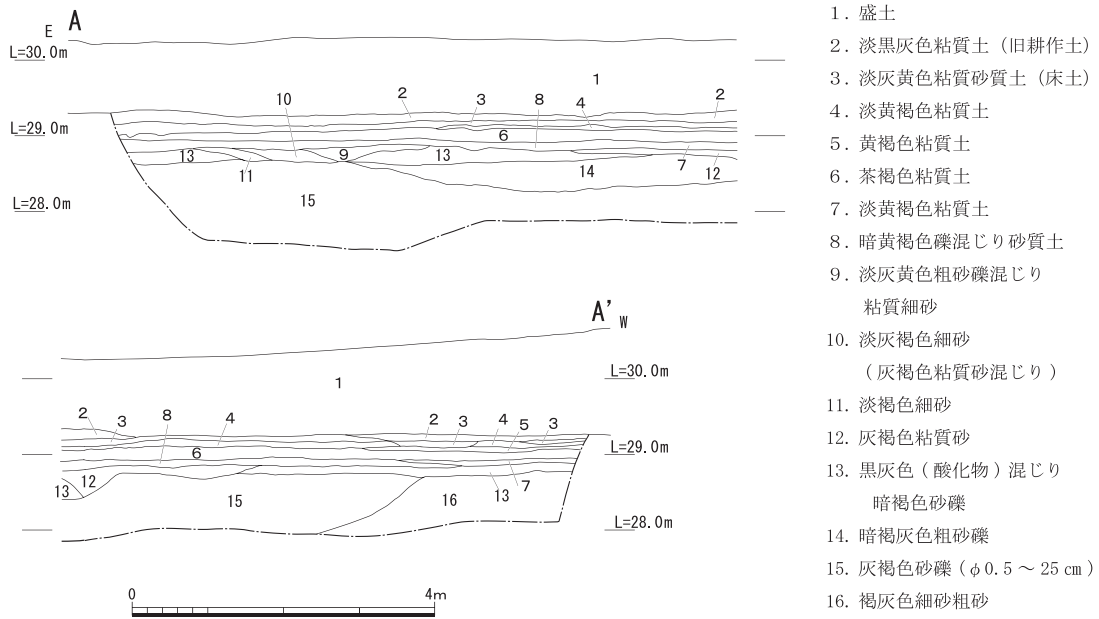
現地調査期間 平成23年12月5日～12月16日、平成24年1月11日

調査面積 300㎡

2. 調査概要

調査地の現地表面の標高は32.1mであり、現存の旧河道上に存在する水田面より2.4mほど高くなっており、旧河道に架かる川向井橋および道路その南側の住宅造成に伴う盛土が施されているものと考えられた。調査は盛土の除去作業より着手し、旧耕作土を確認後、トレンチを設定した。

旧耕作土の検出高は北西側で標高29.7m、南側で29.3mあり、トレンチ北西壁に沿った約1/3は

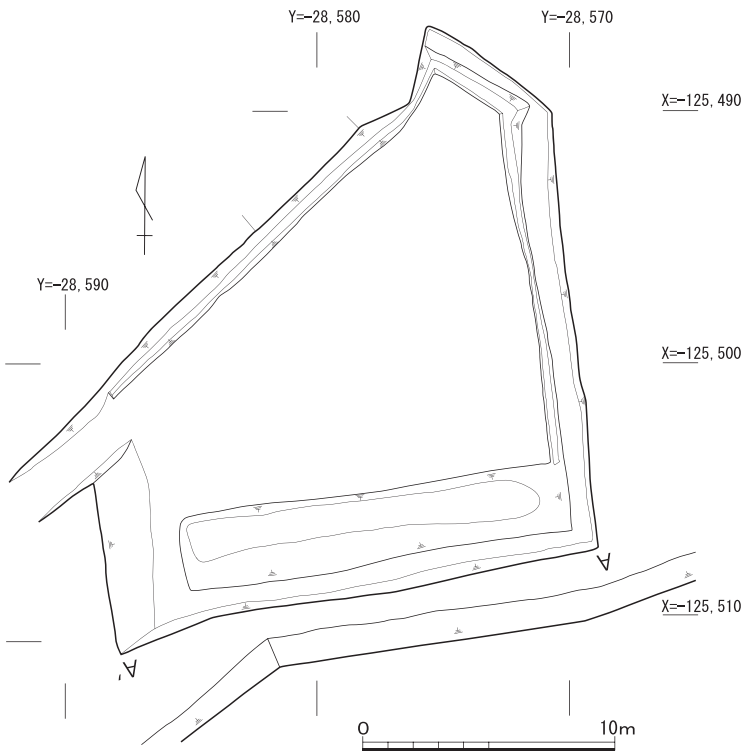


第89図 調査地南壁土層断面図

南側に比べて約0.4m高い水田となっている(第89図)。その下位には床土(第3層)があり、その下層には厚さ5～10cm程度の水平に堆積した土層が広がっていた(第4～7層)。水田造成に伴う整地土と判断される。この土層中より細片化した須恵器・土師器・瓦質土器が出土した。水田造成に伴い、土砂が持ち込まれた先に混じていたものと考えられる。

これより下層は、砂礫の堆積となっていた。部分的に3mの深さまで断ち割りを行い、旧小泉川流路内の砂礫が厚く堆積していることを確認した。砂礫内からは、遺物の出土は認められなかった。北・北西側には、この砂礫検出面に粘質砂と互層になる部分が認められ、北側の旧河道に向かって下の傾斜をもっていた。これを削平する形で整地土がある。最終流路の肩部付近であったと考えられる。南側部分はこの傾斜部分がすべて削平されており、流路が変更する前の流路本体部分における堆積であろう。

調査地南側の宅地について、家屋の解体後に立会調査を行っ



第90図 調査地平面図

たが、トレンチ南側の堆積状況と同じで、整地土より下位は旧小泉側の河川堆積で、砂礫が厚く堆積し、遺構・遺物包含層とも存在しなかった。

過去の周辺の調査では、小泉川の氾濫原における耕地化は中世以降の段階と判断されている(岩松ほか2005)が、今回の調査においても中世以降に耕地化されたものと判断され、過去の調査成果を追認する結果となった。また、今回の調査地は、旧流路の分布から南から北に張り出す丘陵を想定したが、その考えを積極的に肯定する成果は得られなかった。

(増田孝彦)

参考文献

岩松 保ほか「京都第二外環状線道路関係遺跡 平成15年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第113冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2005

(3) 奥海印寺遺跡(7ANPAR-4 奥海印寺荒堀地区)

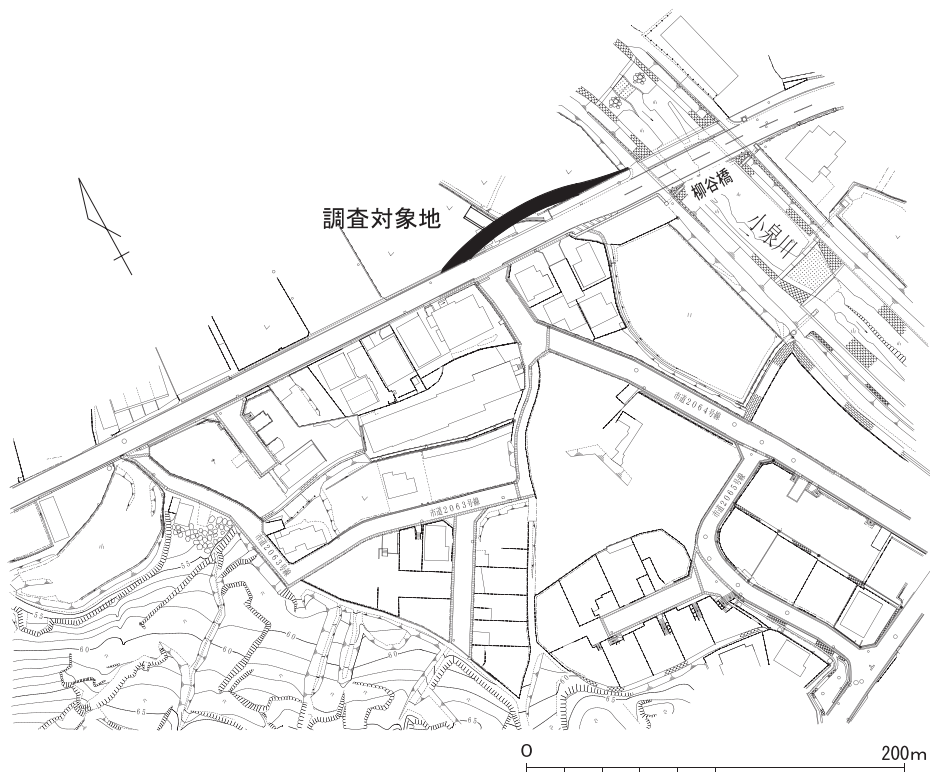
1. はじめに

荒堀地区は、長岡京市奥海印寺荒堀に所在する。長岡京跡の条坊復元では京外となり、奥海印寺遺跡の東端に位置する(第87図)。

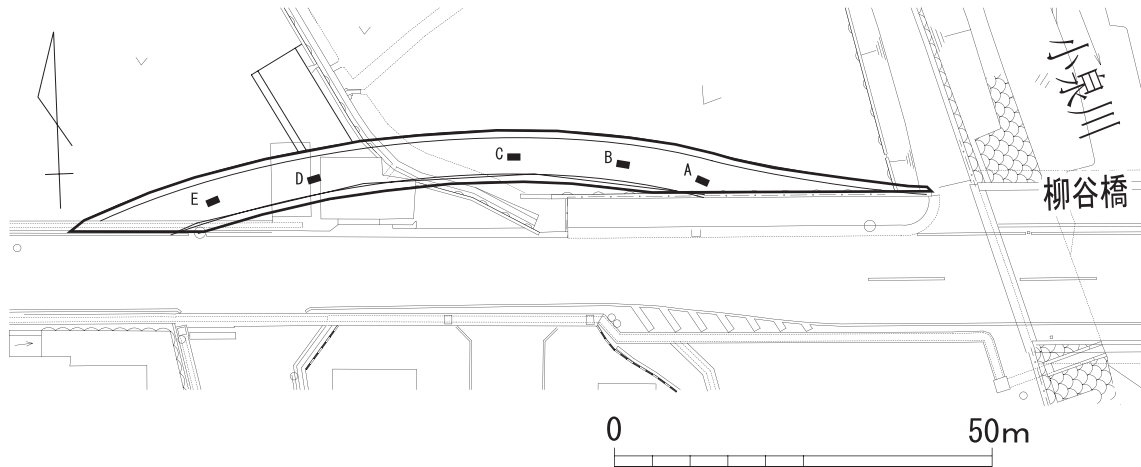
第二外環状道路建設に伴う府道伏見柳谷高槻線の拡幅工事に伴い調査を実施した。調査地は、小泉川右岸の河岸段丘上の水田である。現況の道路の北側、幅約4m、長さ42mが対象で、現況の水田面(標高47.9m)より下1mが地盤改良となるため、工事の進行に合わせて、まず東半を1月12日に調査し、2月16日に西半の調査を実施した。

〔調査体制等〕

現地調査責任者 調査第2課長 水谷壽克
 調査担当者 調査第2課第2係長 岩松 保
 同 主任調査員 増田孝彦
 調査場所 長岡京市奥海印寺荒堀
 調査期間 平成24年1月12日、2月16日
 調査面積 5㎡



第91図 調査地位置図



第92図 トレンチ配置図

2. 調査概要

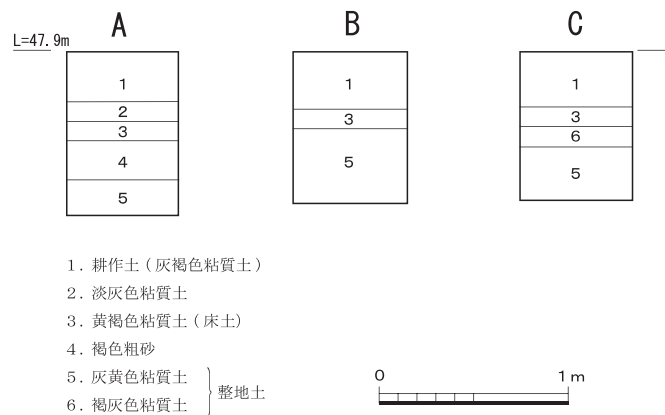
調査は、工事による掘削が現地表下70cmまで行うため、それまでの掘削深度の中で文化層や遺物が確認できるかどうかを主眼として実施した。幅約70cm、長さ約1.5mのトレンチを任意に配置した。調査は、工事の進行状況に合わせて2回実施し、1月12日には小泉川寄りの水田に3か所(A～Cトレンチ)、2月16日には西側の一段高い水田に2か所(D・Eトレンチ)の計5か所のトレンチを設定し掘削を行った。

A～Cトレンチは、水田耕作土下が床土、Aトレンチではその下層が小泉川の最終氾濫に伴うと考えられる砂礫の堆積が認められ、以下は黄褐色系の水田造成に伴う整地土である。B・Cトレンチは、床土以下は水田造成に伴う整地土である。

これらの整地土からは、遺物の出土は全く認められなかった。遺構が存在するとすれば、この整地土より下層になると考えられる。

西側の一段高い水田部にはD・Eトレンチを設定した。ここでは、地表下20cmまでの掘削で、耕作土が堆積しているだけであった。遺物や遺物包含層は確認できなかった。

(増田孝彦)



第93図 奥海印寺地区土層柱状図

3. 上狛北遺跡第2次発掘調査報告

1. はじめに

この発掘調査は、主要地方道上狛城陽線の建設工事に伴い、京都府建設交通部の依頼を受けて実施したものである。上狛北遺跡では、平成21年度に調査対象地内全域に6か所の調査区を設けて実施した。6か所の調査区のうち、南部の3か所で遺存状況の良好な地点を確認した(第1次調査)。この調査成果を受けて、平成22年度に調査地を拡張して、全面的な調査を実施することとした(第2次調査)。

現地調査にあたっては、京都府教育委員会、木津川市教育委員会、京都府立山城郷土資料館のご指導、ご協力を得た。また、現地調査並びに整理作業には、当調査研究センター上田正昭理事長をはじめ、中尾芳治副理事長、井上満郎・上原真人・中谷雅治・高橋誠一各理事、奈良文化財研究所渡辺晃宏氏・神野恵氏・中村一郎氏、木簡学会の諸先生方からは、遺構・遺物についてさまざまなご指導・ご教示を得た。記して感謝します。本報告は筒井・松尾のほか、谷崎仁美(現大阪市博物館協会大阪文化財研究所)が執筆した。また、調査期間中ならびに本報告に記載した国土座標は、日本測地系(第Ⅵ座標系)を使用している。なお、調査にかかる経費は、全額京都府山城南土木事務所が負担した。

〔調査体制等〕

現地調査責任者	調査第2課長	肥後弘幸
調査担当者	調査第2課主幹調査第3係長事務取扱	石井清司
	同 専門調査員	竹井治雄
	同 調査員	筒井崇史
	同 調査第1係調査員	松尾史子
調査場所	木津川市山城町上狛宝本・西浦代ほか	
現地調査期間	平成22年8月24日～平成23年3月9日	
調査面積	1,630㎡	

2. 位置と環境

1) 地理的環境

上狛北遺跡の所在する木津川市は、平成19年に木津町・山城町・加茂町の3町が合併して成立したもので、上狛北遺跡は旧山城町に属する。木津川市は京都府の最南端に位置し、地理的にも京都盆地の南端に位置する。京都盆地は干拓によって消滅した巨椋池を境に北山城地域と南山城地域に区分でき、南山城地域は、木津川とそれに注ぎ込む中小河川の沖積作用によって形成され



第1図 調査地位置図および周辺主要遺跡分布図(国土地理院1/50,000 奈良)

- | | | | | |
|------------|-------------|-------------|-------------|------------|
| 1. 上粕北遺跡 | 2. 上粕東遺跡 | 3. 上粕西遺跡 | 4. 高麗寺跡 | 5. 高麗寺瓦窯跡 |
| 6. 泉橋寺 | 7. 天竺堂古墳群 | 8. 千両岩遺跡 | 9. 千両岩古墳群 | 10. 宮城谷古墳群 |
| 11. 柳田遺跡 | 12. 椿井遺跡 | 13. 松尾廃寺 | 14. 椿井大塚山古墳 | 15. 堂ノ上遺跡 |
| 16. 平尾城山古墳 | 17. 上津遺跡 | 18. 燈籠寺廃寺 | 19. 燈籠寺遺跡 | 20. 内田山遺跡 |
| 21. 片山遺跡 | 22. 釜ヶ谷遺跡 | 23. 木津城山遺跡 | 24. 鹿背山瓦窯跡 | 25. 木津遺跡 |
| 26. 作り道遺跡 | 27. 馬場南遺跡 | 28. 西山遺跡 | 29. 瓦谷遺跡 | 30. 上人ヶ平遺跡 |
| 31. 市坂瓦窯跡 | 32. 五領池東瓦窯跡 | 33. 瀬後谷瓦窯跡 | 34. 歌姫瓦窯跡 | 35. 梅谷瓦窯跡 |
| 36. 弓田遺跡 | 37. 歌姫西瓦窯跡 | 38. 音如ヶ谷瓦窯跡 | 39. 大島遺跡 | 40. 相楽遺跡 |
| 41. 樋ノ口遺跡 | 42. 畑ノ前東遺跡 | 43. 畑ノ前遺跡 | 44. 森垣外遺跡 | 45. 法花寺野遺跡 |

た河谷地形で、南北14km、東西2～3kmの狭長な地形を呈する。木津川は奈良・三重両県に水源を發し、旧山城町付近までは東から西に流れ、ここでその流れを大きく北に変える。旧山城町は、旧町域の西側と南側を木津川によって画される。旧山城町の地形は大きく、旧町域東部の山地と、旧町域西部の河岸段丘や平野部に区分される。また、旧町域内の鳴子川など4河川が天井川と化している。

上狛北遺跡は、木津川の右岸、旧町域西部の河岸段丘と平野部の境界付近で、平野部側に位置する。遺跡付近の標高は28.7m前後で、木津川との比高差はおよそ5mである。遺跡の周辺は、木津川によって形成された沖積平野が広がっており、現在は宅地化が進むものの、水田地帯が広がる。

2) 歴史的環境

木津川市山城町には南山城地域を代表する遺跡が多数所在する。以下、上狛北遺跡の周辺における旧山城町域における代表的な遺跡について概観する(第1図)。

山城町域では旧石器時代・縄文時代に属する遺跡はそれほど多くないが、上狛北遺跡の東方約2kmに位置する千両岩遺跡(8)ではサヌカイト製の有茎尖頭器や押型文土器(高山式)が出土している。また、椿井大塚山古墳(14)の盛り土から縄文時代後・晩期の土器が出土している。

弥生時代になると、中期の湧出宮遺跡、後期の上狛西遺跡(3)・椿井遺跡(12)・堂ノ上遺跡(15)などがある。いずれも竪穴式住居跡が確認されているが、集落の規模はあまり大きくないようである。対岸に位置する木津川市旧木津町の大畠遺跡(39、中期後半)や木津城山遺跡(23、後期初頭)などでも集落が確認されている。

古墳時代になると、三角縁神獣鏡が30面以上出土した椿井大塚山古墳(14、前方後円墳、全長175m)が築造される。また、椿井大塚山古墳に引き続き平尾城山古墳(16、前方後円墳、全長110m)が築造されるものの、その後は全長100mを越えるような大型前方後円墳は築造されなくなる。中期における大型前方後円墳の築造は城陽市域に多くみられようになる。その後、中期末には上狛北遺跡の北東の丘陵上に天竺堂1号墳(7)が築造される。全長わずか27mの小規模な前方後円墳であるが、墳丘上には円筒埴輪や形象埴輪が並べられていた。南山城地域では、埋葬施設として横穴式石室を採用したもっとも古い古墳の1つとされる。石室内からは約3,000点の玉類や馬具などが出土した。天竺堂1号墳以降、山城町域では直径6～20m程度の小規模な古墳が多数築造され、群集墳を形成する。代表的な群集墳として車谷古墳群(総数40基以上)・宮城谷古墳群(10、総数12基)・千両岩古墳群(9、総数7基)などがある。これに対して、古墳時代の集落はあまり知られておらず、上狛東遺跡(2)で古墳時代前期の土器がまとまって出土しているものの、竪穴式住居跡などは確認されていない。

飛鳥時代になると、山城地域でも最も古い古代寺院の1つである高麗寺跡(4)が造営される。高麗寺跡の創建は、奈良県飛鳥寺と同範の軒丸瓦が出土したことから7世紀初頭と考えられる。ただし、この段階で伽藍は未整備で、本格的な伽藍が整備されるのは7世紀後半と考えられる。これにともなう軒丸瓦は、奈良県川原寺の軒丸瓦と同範である。また、高麗寺伽藍整備期の軒丸

瓦などを焼いた高麗寺瓦窯跡(5)なども確認されている。なお、高麗寺は、近年の調査成果によると、中世前期まで存続した可能性が高い。このほか旧山城町域では白鳳期に遡る寺院跡として、蟹満寺や松尾廃寺(13)などがある。このように早い時期から寺院の整備が進むが、当該期の集落域は確認されていない。

奈良時代になると、上狛北遺跡周辺では、具体的な遺構は未確認であるが、第1次山城国府や恭仁京右京の推定地とされている。前者は文献資料からの推定であり、相楽郡内でも他の推定地がある。後者は足利健亮氏をはじめ、いくつかの恭仁京域に関する復元プランが提示されているが、これまでに考古学的な遺構は確認されていない。このため、恭仁京の京域についてはその存在を疑問視する意見もあった。

引き続き平安時代・中世も遺物の出土はみられるものの、具体的な遺構が検出された遺跡は少ない。

3. 調査の経過

1) 第1次調査の成果

平成21年度に実施した本事業に伴う調査としては、上狛北遺跡と柳田遺跡の2遺跡がある。両遺跡は、これまで発掘調査が行われたことはなく、調査対象地周辺でも具体的な調査成果が少ない地点に当たる。このため、遺物の散布は認められるものの、木津川の旧河道などの存在も予想された。そこで、遺構・遺物の状況を把握するための調査を実施した。

調査は平成21年10月27日に開始し、平成22年2月25日に終了した。調査面積は1,000㎡である。調査に当たっては、対象地内に合計10か所のトレンチを設定した(第2図)。このうち第1～6トレンチが上狛北遺跡、第7～10トレンチが柳田遺跡に該当する。

第1トレンチでは中世の溝や柱穴などの遺構の存在を確認し、遺物が多数出土した。第2・3トレンチでも中世の耕作溝を多数確認するとともに、その下層に南北方向に延びる奈良時代の溝を確認した。これらの遺構の確認により、第1～3トレンチについては、関係機関と協議の上、平成22年度に対象地全体まで調査区を拡張して全面的な調査を実施することとなった。

第4～6トレンチならびに第7～10トレンチの柳田遺跡については、耕作土・床土を除去すると、砂質土層・砂層が厚く堆積しており、安定した遺構面を確認することはできなかった。この砂質土層・砂層からは少量ながらも弥生時代から中世にかけての遺物が出土した。砂層より下層の状況を確認するため、重機による断ち割りを行ったが、粘土層が厚く堆積していることを確認したにとどまる。以上のような状況を確認して、第4トレンチ以北の調査対象地については調査を終了した。

両遺跡の調査で出土した遺物の総量は整理箱にして15箱である。このうち第1～3トレンチに伴う遺物は13箱ある。これらの遺物については、一部昨年度に報告しているが、本報告で改めて掲載したものがあ

2) 第2次調査の経過

平成22年度の調査は、道路建設予定地内を対象に1,500㎡の調査区の設定を行った。ただ、周辺には水田や用水路、里道などが広がることから、調査区と対象地外との間に余裕を持って調査区を設定した部分がある。

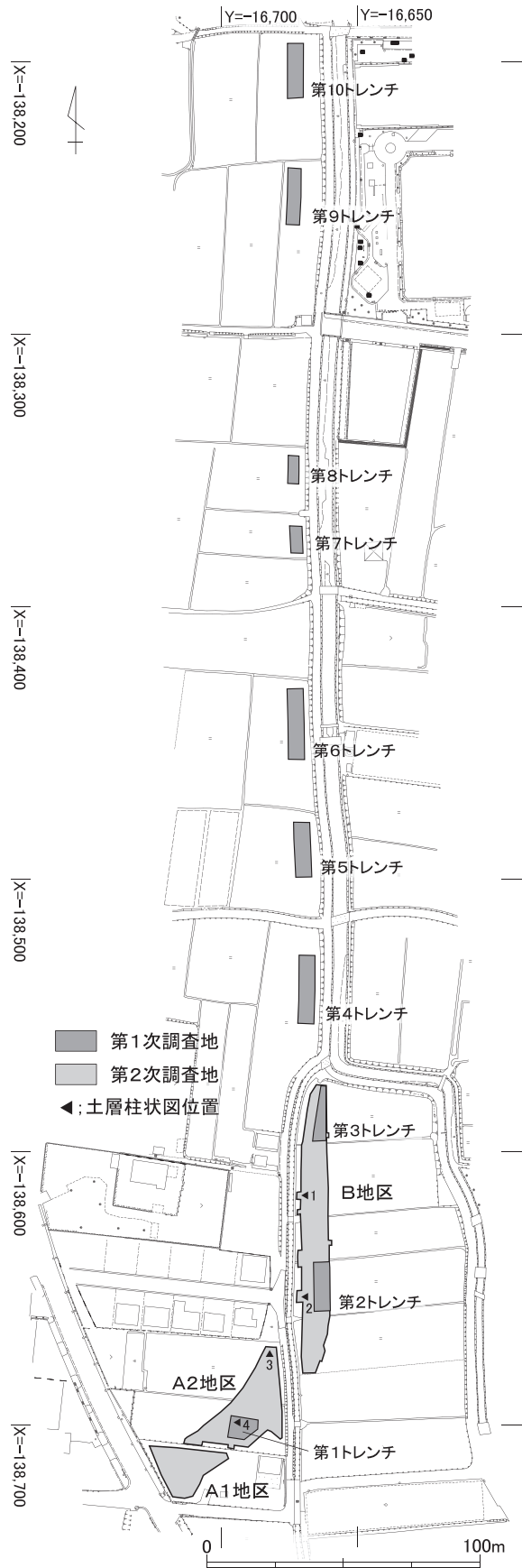
平成21年度の調査成果を受けて、平成22年8月24日からフェンスの設置作業、調査トレンチの設定などに着手し、9月1日からは重機による掘削を開始した。調査区は、現在の里道を挟んで大きく西側のA地区と東側のB地区に分けたが、A地区については土地利用の関係上、南側の駐車場用地をA1地区、北側の水田部分をA2地区とした(第2図)。

調査を進めると、各調査区とも、中世、奈良時代、古墳時代中・後期の各時期の遺構が確認された。

A1・A2地区の古墳時代の遺構の状況ならびにB地区の奈良時代の遺構の状況がおおむね明らかになったことから、平成23年1月23日に現地説明会を実施し、約480人の参加があった。

調査期間中には平成22年12月2日、平成23年1月25日、同2月23日の3回に分けて、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。現地説明会終了後、A地区については、平面図の補足や遺物の取り上げ等を行った後、埋め戻し作業を行い、2月22日に現地調査を終了した。B地区については、2月に古墳時代の遺構面の調査を実施し、すべての作業を3月4日に終えた。その後、3月9日まで埋め戻し作業を行い、調査を終了した。

なお、第1次調査における第1トレンチはA2地区に、第2・3トレンチはB地区に含まれる。



第2図 第1・2次調査区配置図

3) 報告書作成作業について

平成23年度は、平成22年度に実施した上狛北遺跡第2次調査の出土遺物の整理作業ならびに報告書作成作業を実施した。出土遺物の整理作業では、遺物の洗浄・接合・注記を順次行い、報告に必要な遺物の選別を行った。これらについては実測を行い、必要な場合は拓本も行った。最終的に本報告に掲載した遺物は、写真図版のみに掲載したのもも含めて739点である。実測した遺物のうち、復元可能なものについては石膏による復元を実施した。復元できた遺物や小破片でも重要な遺物については、遺物写真の撮影を行い図版として掲載した。

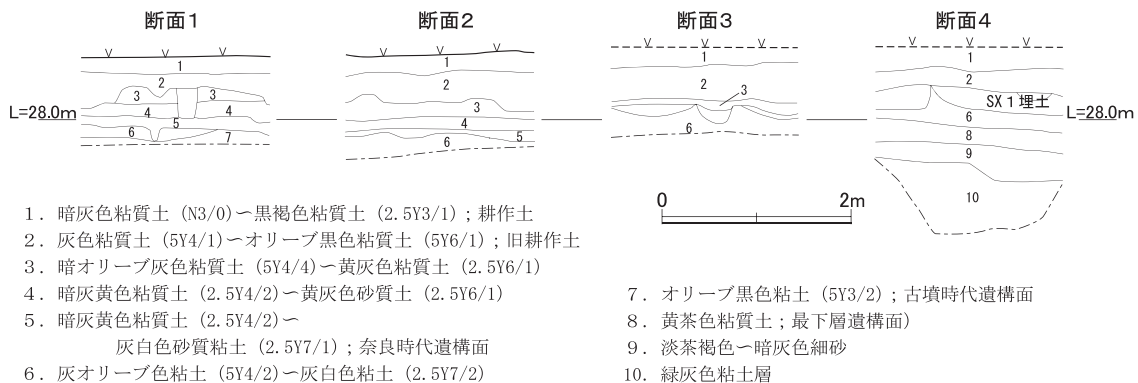
また、土坑S X96から持ち帰った土砂の洗浄を順次進め、木簡や削屑の検出に努めた。その結果、木簡3点、削屑41点のほか、墨書土器31点を確認した。これらの木簡の内容については、平成23年7月19日に奈良文化財研究所の協力を得て赤外線カメラによる積読を行った。出土した木簡の内容や遺構の時期、遺跡全体の性格などを考慮して、7月27日に出土木簡のみを対象とした報道発表を行った。

報道発表後、出土した木簡や削屑の保存処理とともに、木簡材の樹種同定作業を委託した^(注1)。また、土坑S X96からは大量の炭化材が出土したので、これらの試料を使って放射性炭素年代測定も委託した^(注2)。これらの結果については、それぞれの項で報告する。

4. 調査の概要

1) 調査の方法

昨年度の調査成果にもとづき、いずれの調査区とも、上層遺構面直上まで耕作土・床土・旧耕作土等を重機で除去し、その後、人力による精査を行い、遺構の検出に努めた。検出した遺構は、その位置を平板で記録しながら、掘削を行った。検出した遺構には原則として通し番号をつけ、遺構の性格を示す略号を付与した。略号は調査の進展に伴って変更することもあったが、遺構番号は変更しないようにした。使用した略号は、竪穴式住居跡；SH、掘立柱建物跡；SB、溝；SD、土坑；SKもしくはSX、井戸；SE、柱穴；SP、不明遺構・その他；SXである。なお、本報告で使用した遺構番号は調査時のものである。ただし、調査時に番号のなかった遺構については、本報告作成時に新たに付与した。



第3図 土層柱状図

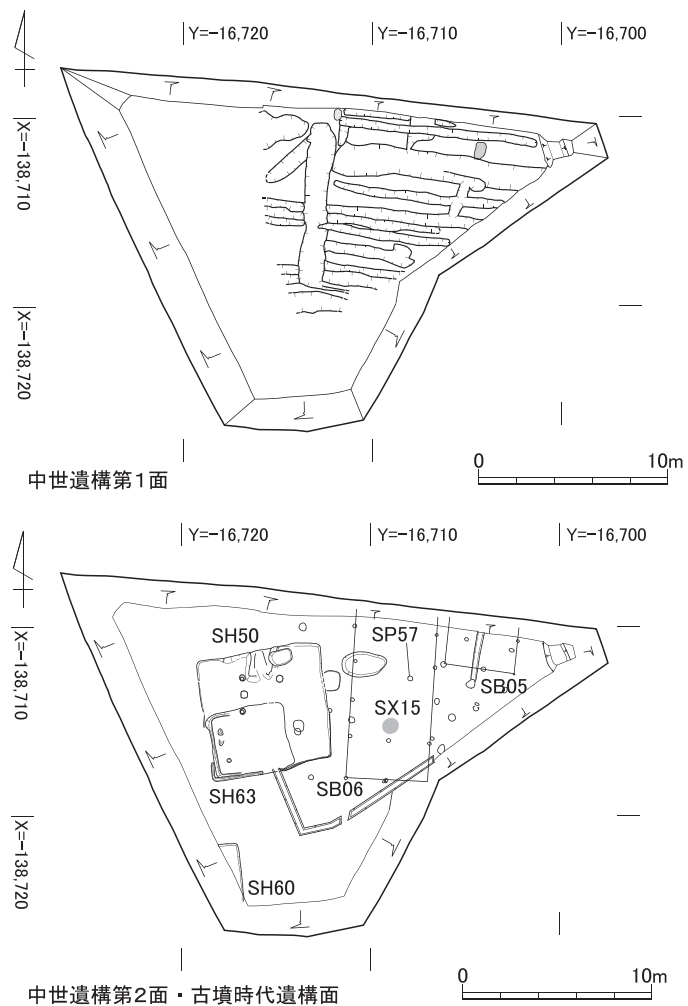
遺構の掘削を終えると、必要に応じて1/10ないし1/20の平面図や断面図の作成と写真撮影を行った。遺構面全体の調査を終えると、調査区ごとに全景写真を撮影するように努めた。なお、A1・A2地区では、中世の遺構は2～3時期の遺構の重複が認められた。また、今回の調査では国土座標系にもとづく地区割りの設定等を行わなかった。

各遺構面の間も厚さ5～30cm程度の遺物包含層が認められたので、必要に応じて重機でこれを除去し、上記の作業を繰り返した。調査期間中、調査の進捗状況に合わせて、計3回のラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。

今回の調査で出土した遺物は、整理箱にして84箱である。このほかに土坑SX96からは木簡や削屑を含む土砂60箱余りを持ち帰り洗浄した。

2)基本層序

調査区的基本的層序を第3図に示した。調査区的基本層序は、現在の耕作土、旧耕作土等の堆積層、上層遺構面、下層遺構面、最下層遺構面となる。なお、A1地区では、現在の耕作土の上面に1m余りの盛り土をして、駐車場として利用されていた。各調査区の中世の遺構面の検出標高は、B地区北端で27.9m、南端で28.1m、A2地区北端で28.1m、南端で28.3m、A1地区南端で28.2mとなり、南から北へ向かって緩やかに傾斜している。なお、A2地区では中世の遺構を3時期確認したが、B地区では1面のみ確認した。次に奈良時代の遺構面は、B地区で標高27.8～27.9mであるのに対して、A地区では奈良時代の遺構面そのものを確認することはできなかった。これは中世の遺構群の土地利用の結果、奈良時代の遺構面が大きく削平されたものと考えられる。古墳時代の遺構面の検出標高は、B地区北半部で27.7m、南端で27.9mであり、南半部では奈良時代の遺構と古墳時代の遺構は、ほぼ同一面で検出した。A2地区では27.8～27.9m、A1地区西端で28.0mとなる。いずれの調査区においても、中世の遺構面からおよそ0.2m下で古墳時代



第4図 A1地区遺構配置図

の遺構面を検出した。古墳時代の遺構面よりも下層の状況は、A2地区井戸SE215とB地区土坑SX96の断ち割りで確認した。古墳時代の遺構面よりもおよそ2mは緑灰色粘土層で、固く締まる。それよりも下は茶灰色砂層ないし、粗砂と細砂の互層堆積層となり、古墳時代の遺構面よりも約3.4m下で、湧水層に達する。SE215はこの湧水層まで達していた。

3)各調査区の概要

(1)A1地区

調査対象地の南端に位置し、調査前は駐車場として利用されていた。調査地の西側を国道24号線が通るため、安全に配慮して調査区の設定を行った。調査区の平面形はやや歪な三角形を呈する。調査面積は当初170㎡であったが、その後、古墳時代の竪穴式住居跡の全容を確認するため、調査区の南西側の拡張を行った。最終的な調査面積は300㎡である。

遺構面は、中世と古墳時代の2時期を確認した。現地表面下約1.4m、標高28.1m付近で中世の遺構を検出した。中世の遺構は2時期あり、第1面では重複した耕作溝を15条以上検出した。第2面では掘立柱建物跡2棟のほか、柱穴20基などを検出した。出土遺物としては瓦器・土師器などがあり、中世から近世にかけての遺構と思われる。

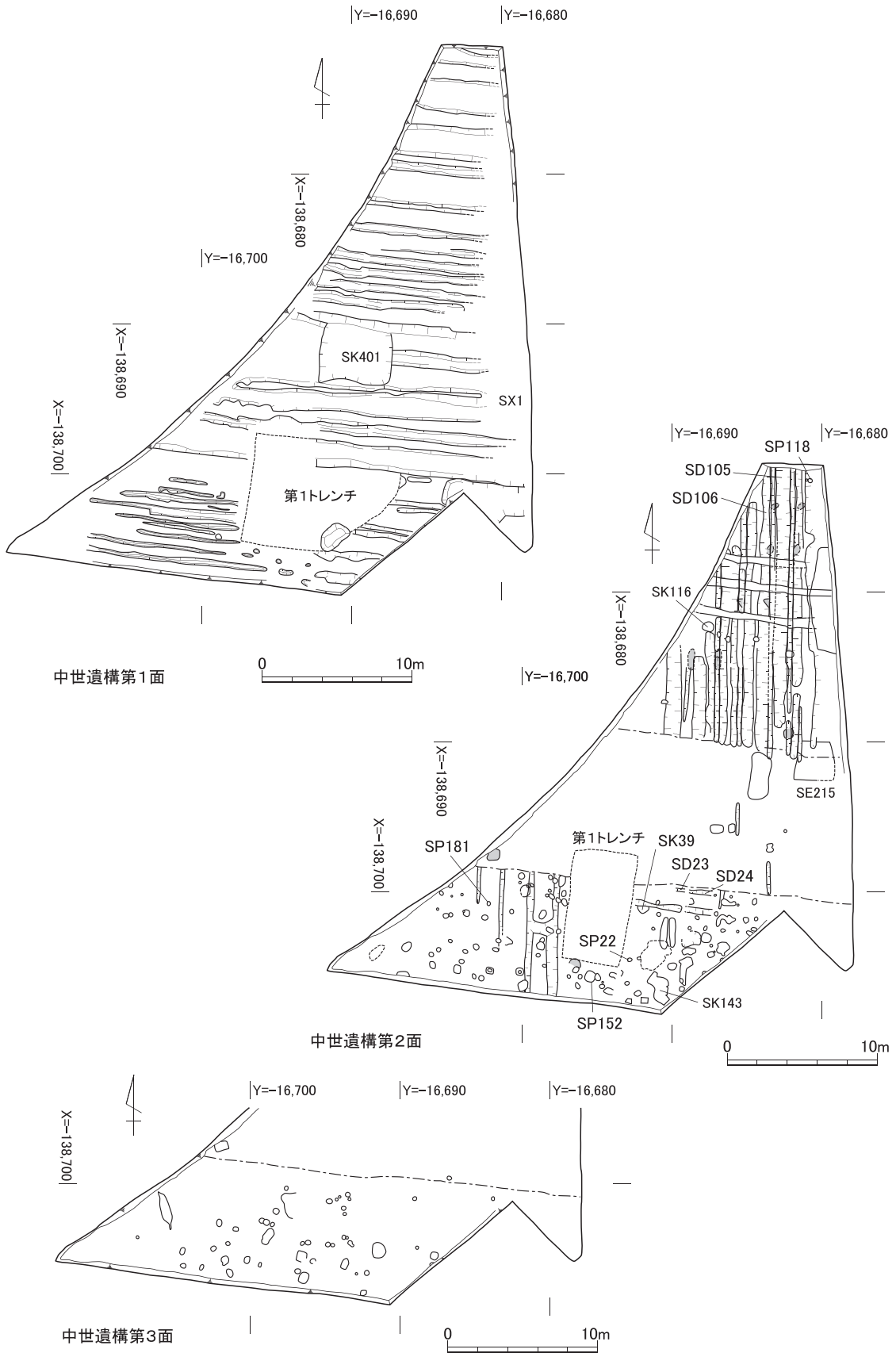
古墳時代の遺構としては竪穴式住居跡3基、土器溜まり1か所などがある。中世の遺構の第1面で検出した耕作溝の掘削時に、土器溜まりの一部や住居跡の竈などを検出しつつあり、中世の遺構の第2面と古墳時代の遺構面はほぼ同一面で検出した。出土遺物としては須恵器・土師器・製塩土器などがあり、古墳時代中期後半ごろと思われる。なお、奈良時代の遺構面は確認されなかった。

(2)A2地区

A1地区の北側に位置し、調査前は水田であった。調査区の平面形は不整形な台形を呈する。調査面積は540㎡である。遺構面は、上層と最下層の2面を確認した。現地表面下約0.6m、標高28.2m付近で中世の遺構を検出した。

中世の遺構は3時期の遺構が重複していた。第1面ではおもに東西方向の耕作溝30条以上と調査区のはほぼ中央を東西方向に横断する幅10m、深さ0.3mほどの大溝状の遺構SX1を検出した。SX1は第2面、第3面の遺構面を掘り込んでいる。出土遺物としては瓦器、中国製陶磁器、中世陶器、銭貨(寛永通寶)などがあり、中世後半～近世と思われる。第2面では、SX1よりも北部で南北方向の耕作溝を20条以上検出し、南部では耕作溝のほか、土坑や柱穴多数を検出した。ただし掘立柱建物跡として復元することはできなかった。出土遺物に土師器・瓦器・中国製陶磁器などがあることから、中世前半～中頃の遺構と考えられる。第3面はSX1よりも南側のみに認められ、柱穴40基以上を検出した。これらも掘立柱建物跡として復元することはできなかった。出土遺物に土師器・瓦器などがあり、中世初頭～前半の遺構と考えられる。また、わずかであるが平安時代の黒色土器碗や緑釉陶器の破片などが出土した。

中世の遺構の調査終了後に重機によって堆積層の掘り下げ(約20～30cm)を行い、古墳時代の遺構面を検出した。古墳時代の遺構として竪穴式住居跡4基をはじめ、溝や土坑、柱穴などを多



第5図 A2地区遺構配置図



第6図 A2地区遺構配置図(古墳時代遺構面)

数検出した。土壌化の影響や堆積土の状況から遺構の輪郭を確定するのに相当の時間を要した。ただ、遺構の遺存状況は良好である。

出土遺物としては須恵器・土師器・製塩土器などがあり、古墳時代中期後半～後期にかけてと思われる。このほか、遺構にともなわないが、庄内式や布留式の甕が出土しており、当該期の遺構が調査地周辺に存在する可能性がある。

なお、遺構面として確認することはできなかったが、奈良時代の井戸1基と土器溜まり1か所のほか、柱穴数基を

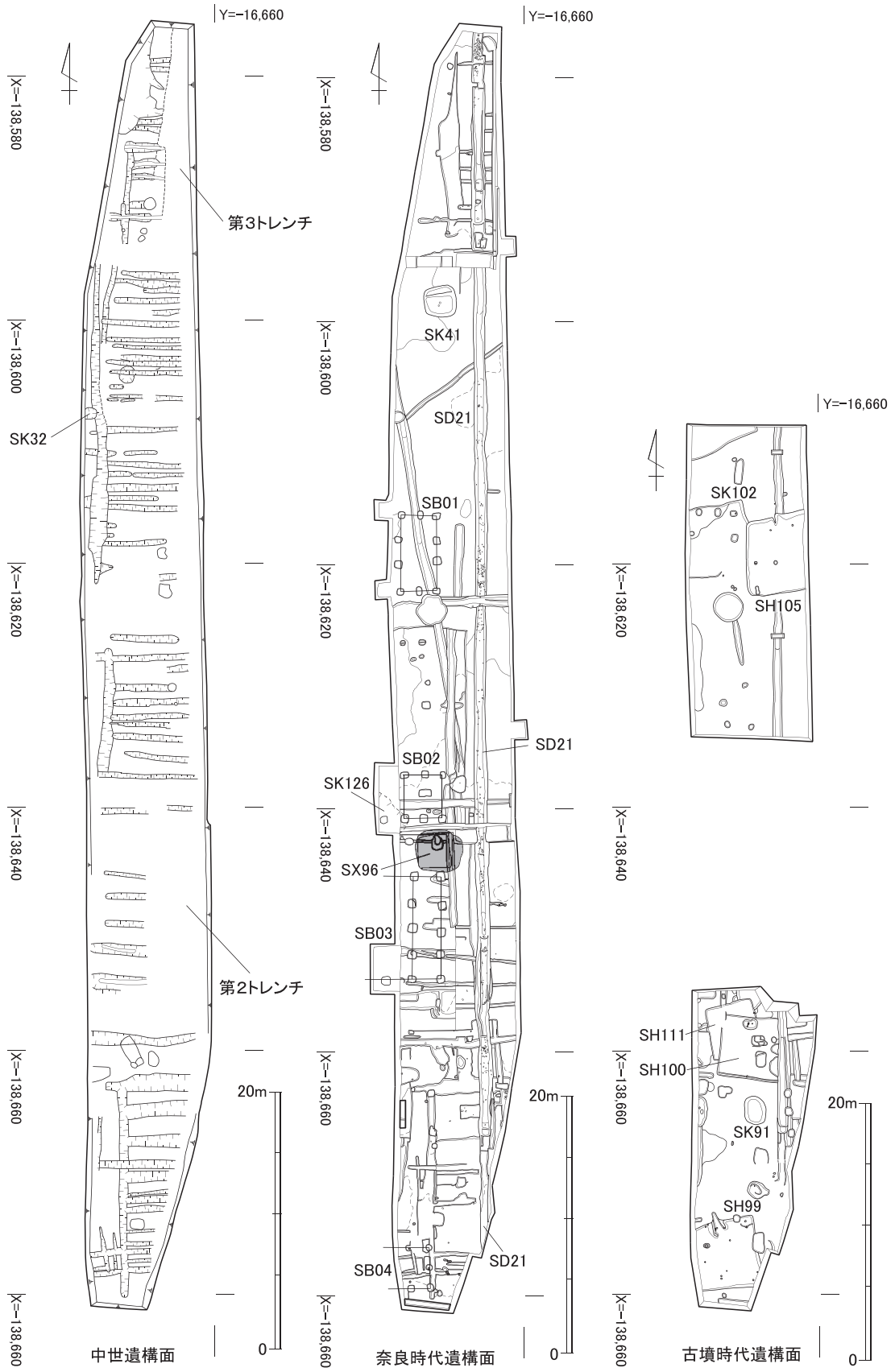
確認した。奈良時代の遺構面は、中世の遺構の形成過程で大きく削平されたものと判断した。

(3) B地区

A2地区の北東側、里道をはさんで位置し、調査前は水田であった。調査区の平面形は、細長い矩形を呈する。調査区の西側には現用の用水路が、東側には水田が存在するため、調査区は若干の余地を残して設定した。しかし、奈良時代の遺構面で検出した掘立柱建物跡の状況や南北溝の対となる溝の有無を確認するため、部分的に拡張した。最終的な調査面積は790㎡である。

遺構は、中世・奈良時代・古墳時代の3時期を確認した。現地表面下約0.7m、標高28m付近で上層遺構面を検出した。中世の遺構はA1・A2地区と異なり、1時期のみである。中世の遺構として東西方向の耕作溝を60条以上検出した。また、区画溝や排水路と思われるやや規模の大きな南北溝も数条検出した。出土遺物には土師器・瓦器・中国製陶磁器などがあり、中世の遺構と考えられる。A2地区の中世の遺構の第1面に相当すると考える。

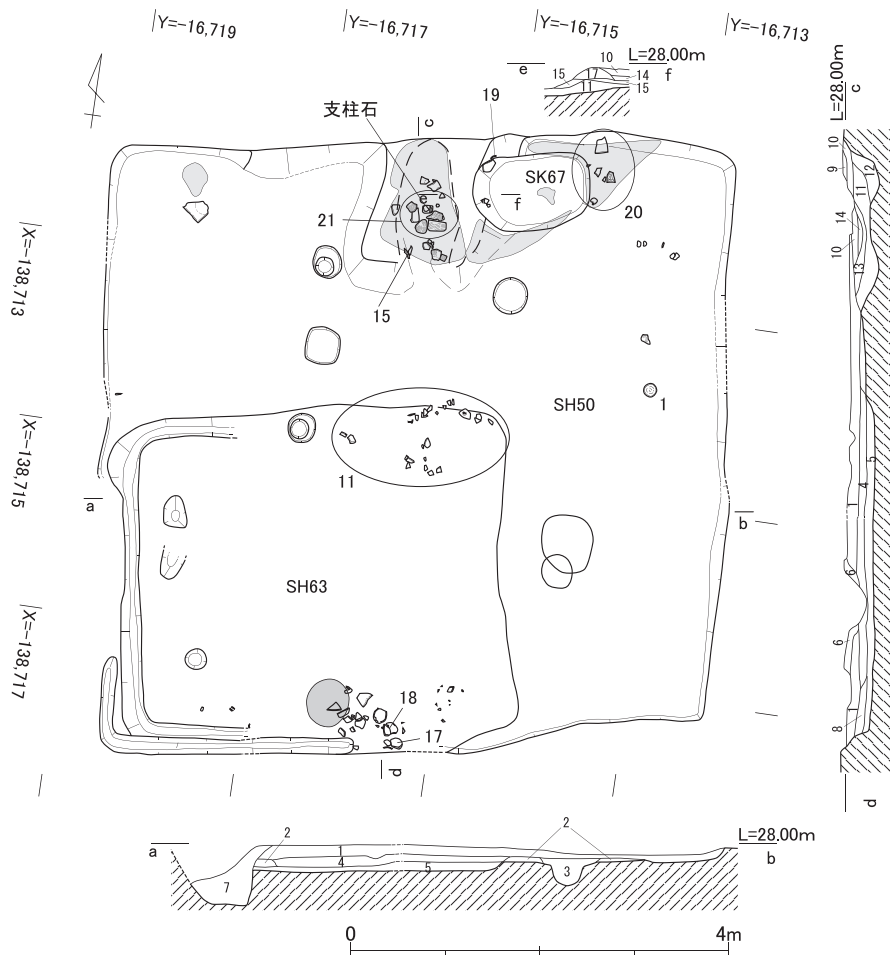
中世の遺構面の調査終了後に、重機によって堆積層を掘り下げ(約10~20cm)、奈良時代の遺構面を検出した。奈良時代の遺構としては掘立柱建物跡4棟、溝5条、土坑2基などを検出した。このうち土坑SX96は、古墳時代の遺構面の状況を確認するための断ち割り作業中に確認したもので、掘立柱建物跡などよりも若干先行する遺構である。土坑SX96では、大量の土器や炭が出土した。また、埋土の状況から木簡や木製品が遺存しやすい土質であることから、埋土に木簡等が含まれている可能性や調査期間等を踏まえて、SX96の埋土を可能な限り取り上げ、室内で洗浄作業を行うこととした。現地調査中に木簡2点と削屑1点を確認し、その後、室内の洗浄作業



第7図 B地区遺構配置図

で、後述するように大きな成果を上げることができた。奈良時代の遺構からの出土遺物としては木簡、瓦埴類、須恵器、土師器、製塩土器、金属製品、木製品などがあり、奈良時代中ごろと思われる。5条検出した溝のうち、溝S D21を除く4条については詳細な時期は不明であるが、S D21や掘立柱建物跡に先行すると考えられる。

土坑S X96の調査に並行して、三たび重機によって堆積層を掘り下げ(約5~10cm)、古墳時代の遺構面を検出した。なお、最下層遺構面は遺構の認められた2地点の合計470㎡を対象とした。調査区は北寄りと南半部の2か所で、両地点の間にS X96が位置する。古墳時代の遺構としては竪穴式住居跡4基、土坑と柱穴を10基前後ずつ検出した。出土遺物として須恵器・土師器などがあり、古墳時代後期と思われる。



- | | |
|----------------------------------|--------------------------------------|
| 1. 灰オリーブシルト (5Y5/2) | 9. 灰白色極細砂 (10YR7/1) |
| 2. 灰白色粘土 (7. 5Y7/2) | 10. 赤色土 (10R4/8) 焼土+明褐色土 (7. 5YR7/2) |
| 3. オリーブ灰色粘土 (2. 5GY6/1) | 11. 明オリーブ灰色粘質土 (2. 5GY7/1) |
| 4. 灰オリーブ粘質土 (5Y6/3) | 炭混・遺物片混・焼土混 |
| 5. 淡黄色粘土 (2. 5Y8/3) | 12. オリーブ灰色シルト質粘土 (2. 5GY6/1) |
| 部分的に灰色粘土混じる (N4/0) | 13. 浅黄色粘質土 (5Y7/4) |
| 6. 褐色砂質土 (7. 5YR6/1) | 14. 赤色土 (10R5/8) |
| 7. 青灰色砂混にぶい褐色土 (5B6/1+7. 5YR5/3) | 15. 16のブロック混じり灰色粘土 (7. 5Y6/1) |
| 8. 灰白色シルト (7. 5Y7/2) | 17. 淡黄色粘質土 (5Y8/4) |
| | カマド構築材(炭・焼土・遺物片混) |

第8図 竪穴式住居跡S H50・63実測図

5. 検出遺構

調査の概要でも述べたように、遺構面としては「上層」、「下層」、「最下層」の3面を確認したが、以下では、各遺構面を上から順に、中世、奈良時代、古墳時代として、古い方から時代順に調査区ごとに検出した遺構を報告する。

1) 古墳時代

各調査区合わせて、竪穴式住居跡11基や土器溜まり3か所をはじめ、土坑、溝、柱穴などを多数検出した。

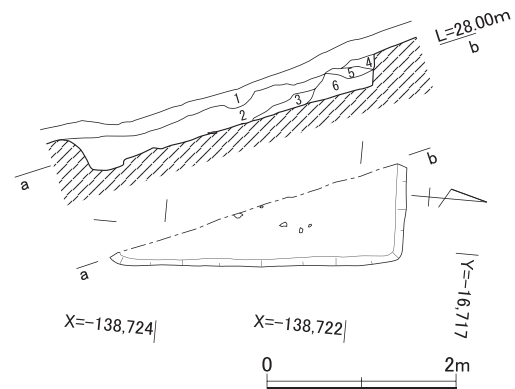
(1) A1地区

竪穴式住居跡 S H50 (第8図) 調査区のやや西寄りで見出した。当初設定した調査区では、西辺がトレンチ外となることから、調査区を拡張し、住居跡の全容を明らかにした。

平面形はほぼ方形を呈し、南北長6.4m、東西長6.5m、深さ0.15mを測る。住居跡の北辺に竈を有する。削平のため煙道や煙出しなどは確認できなかった。竈は残存長1.8m、幅1.6mを測る。竈の中央に支柱石がある。竈の東側に接して貯蔵穴と推定される土坑 S K67を見出した。小判形に近い楕円形を呈し、長軸長1.2m、短軸長0.8m、深さ0.4~0.5mを測る。周壁溝は南西隅で見出したものの、それ以外には検出できなかった。また、明確に支柱穴といえるものも検出できなかった。

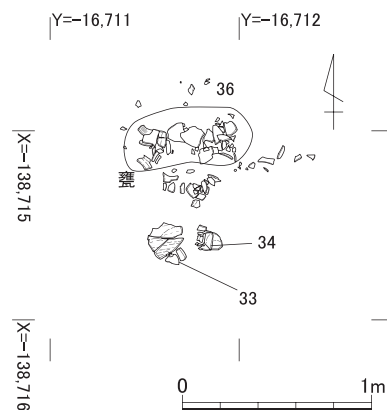
遺物の出土状況としては、竈内に土師器甑や甕などが落ち込んだ状況で出土した。また、大量の製塩土器片が竈上面から出土した。顕著なまとまりは認められなかったが、集落における製塩土器のあり方を考える上で良好な出土状況である。住居埋土からは須恵器杯蓋、土師器杯・小型丸底土器・高杯・甕などが出土しているが、住居床面よりは若干浮いた個体が多い。また、土坑 S K67からも須恵器杯蓋・杯身、土師器杯、甕、製塩土器などが出土している(第37図1~第38図32)。出土した遺物から古墳時代中期後半~末ごろと推定される。

竪穴式住居跡 S H63 (第8図) 竪穴式住居跡 S H50と重複して見出した住居跡で、S H50よりも古い。平面形はほぼ方形を呈し、南北長3.6m、東西長4.1m、深さ0.1mを測る。S H50にくらべ小型の住居である。住居跡の南辺に焼土がみられたが、竈かどうかは不明である。南辺の焼土の状況か



1. 灰色粘土 (5Y5/1)
2. 灰色粘土 (5Y5/1) に黄色粘土ブロック混じる (5Y8/6)
3. 淡黄色粘土 (5Y8/4)
4. 灰色粘土 (N6/0)
5. 黄色粘土 (2.5Y8/6)
6. 灰白色粘土 (5Y8/4) 混灰色粘土 (N6/0)

第9図 竪穴式住居跡 S H60実測図



第10図 土器溜まり S X15実測図

らも、竈導入以前の住居跡である可能性がある。

周壁溝は住居の西半部で検出したものの、東半部では確認できなかった。また、支柱穴も認められなかった。明らかにS H63出土の遺物と言えるものはないが、S H50出土遺物に当住居跡の遺物が含まれている可能性がある。S H50との重複関係から古墳時代中期後半よりも古く位置づけられる。

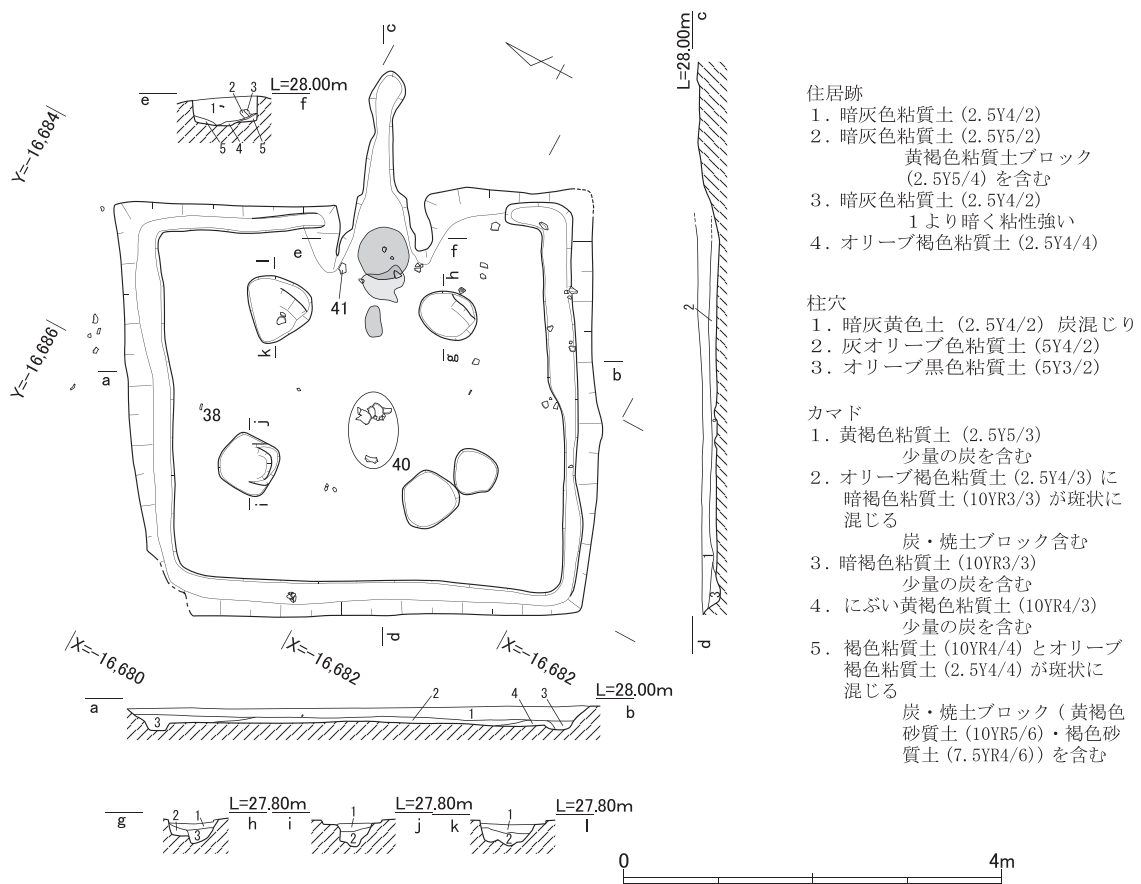
竪穴式住居跡S H60(第9図) 竪穴式住居跡S H50の全容を明らかにするための調査区を拡張した結果、調査区西辺で検出した住居跡である。住居跡は、これ以上調査区の拡張ができなかったため、検出は部分的なものにとどまる。

平面形は検出状況から方形を呈すると考えられ、住居跡の北東隅を検出したものとする。南北辺3.1m以上、東西辺1.1m以上、深さ0.3mを測る。周壁溝や柱穴は認められなかった。

住居跡の埋土から土師器の小片が少量出土したが、詳細は不明である。このため住居の時期は明らかではないが、周辺の遺構とほぼ同じ古墳時代中期ではないかと推定される。

土器溜まりS X15(第10図) 調査区のほぼ中央で検出した。直径2mほどの範囲から多数の土器が出土したが、これに伴う遺構の輪郭は確認できなかった。

出土した土器はすべて土師器で、甕・甑・椀などが出土した(第39図33~36)。出土した遺物から古墳時代中期後半ごろと推定される。



第11図 竪穴式住居跡S H281実測図

(2) A2地区

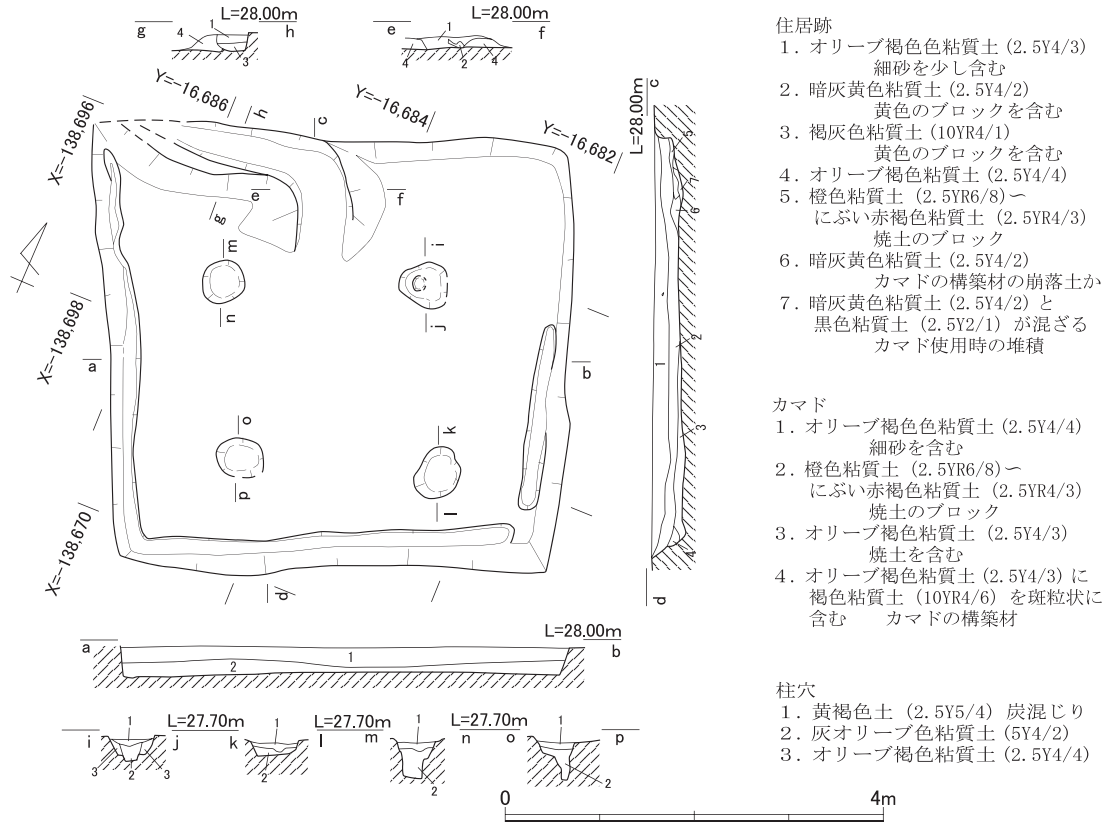
竪穴式住居跡 S H281 (第11図) 調査区の北半で検出した。平面形はほぼ方形を呈し、北に対して61°ほど東へ振っている。北東辺長5.0m、南東辺長4.5m、深さ0.15mを測る。北辺の中央に竈を有する。煙道と煙出しを合わせた竈の全長2.3m、幅1.2mを測る。竈の上面は上層遺構第2面を検出した時点ですでに確認していた。

周壁溝はほぼ全周しており、竈の付近だけ途切れている。幅10~25cm、深さ5~10cmを測る。主柱穴は4か所確認したが、南西の柱穴がやや浅く、その他は24~28cmの深さがあった。

出土遺物は少ない。遺物の出土状況としては、住居のほぼ中央で土師器甕が出土したほか、床面上に散在した状態で須恵器杯身、土師器甑などが出土した(第40図37~41)。出土した遺物から古墳時代後期中頃~後半と推定される。

竪穴式住居跡 S H282 (第12図) 調査区に南半部、やや東寄りで検出した。後述する竪穴式住居跡 S H283と重複し、本住居跡の方が新しい。S H283とともに、遺構の輪郭がみにくく、竈の焼土を確認することで、住居跡の存在を認識することができた。また、S H283との切り合い関係や遺構の最終的な規模や形状を確認するのにやや時間を要した。平面形はやや歪な方形を呈する。南北長4.6m、東西北辺長5.1m、東西南辺長4.6m、深さ0.3mを測る。東西長は北辺の方がやや長い。北辺の中央に竈を有する。

竈は、本体が北辺の中央にみられるが、煙道が住居の周壁に沿って西へ延びており、いわゆる



第12図 竪穴式住居跡 S H282実測図

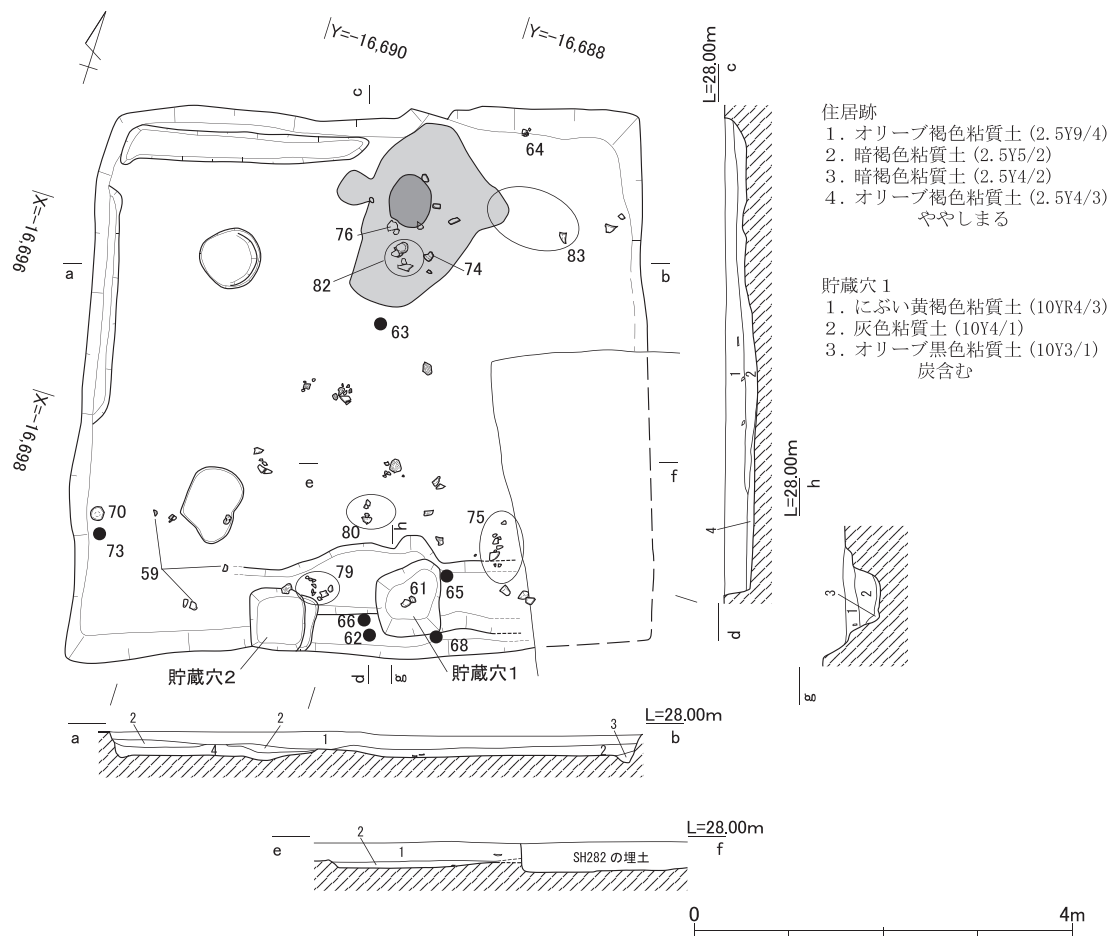
「L字形竈」の形態を呈する。竈本体は全長1.2m、幅1.4mを測る。煙道は住居跡の北辺に沿って延びるが、煙出しの部分が後世の柱穴によって攪乱されているため、全容は明らかでないが、残存長1.8m、幅0.75m、煙道の内法幅0.4mを測る。竈や煙道はオリブ褐色粘質土で構築されていた。

周壁溝は北辺と北東角を除く3辺で検出した。幅0.25~0.3m、深さ0.05m程度を測る。支柱穴は4か所確認し、直径0.4~0.5m、深さ0.12~0.27mを測る。

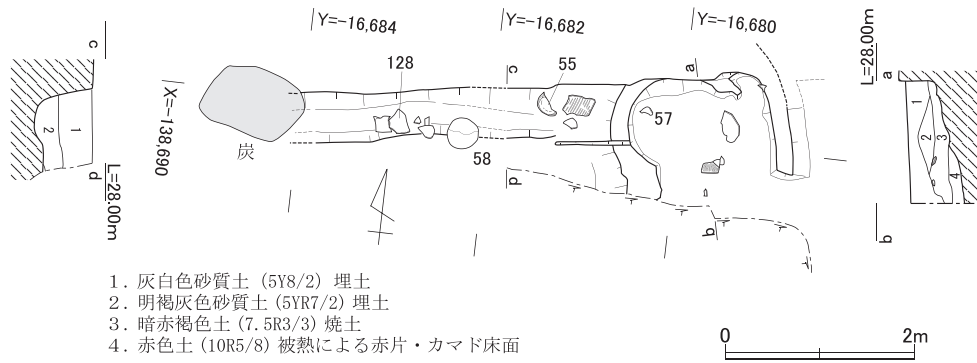
遺物の出土状況としては、竈内部やその周辺で出土したものや支柱穴で囲まれた住居の中央部分で出土したものが多い。このほか埋土上層で出土したものがある。出土した遺物としては、須恵器杯蓋・杯身、土師器甕・甑・高杯などの土器(第40図42~54)のほか、滑石製の白玉や鉄鏃などがある(第46図124・125・127)。出土した土器から古墳時代後期前半~中頃と推定される。白玉は竈の検出中に出土したもので、まとまりは認められなかった。

竪穴式住居跡 S H283 (第13図) 調査区の南半部、ほぼ中央で検出した。前述の竪穴式住居跡 S H282と重複し、本住居跡の方が古い。平面形はほぼ方形を呈し、南北長5.6m、東西長6.0m、深さ0.25mを測る。

竈は遺存していなかったが、焼土や炭・灰の広がりや北辺の中央部に接して確認した。焼土塊



第13図 竪穴式住居跡 S H283実測図



第14図 竪穴式住居跡 S H330実測図

などが厚く堆積していたので、竈を意図的に破壊した可能性もある。竈の構造は不明であるが、焼土の広がりには長軸長2.0m、短軸長1.5mほどの範囲に認められた。

周壁溝は北・西・南の3辺で確認したが、いずれも部分的な検出にとどまる。南辺の周壁溝は幅70cm前後、深さ5～10cmで、北辺や西辺で検出した周壁溝にくらべ、やや規模が大きい。北辺や西辺の周壁溝は幅20～30cm、深さ5～10cmを測る。

主柱穴と考えられる柱穴を住居の西半部で2基確認したが、深さが5～13cmと浅く、この柱穴が本住居跡に伴う主柱穴かどうか判断できなかった。

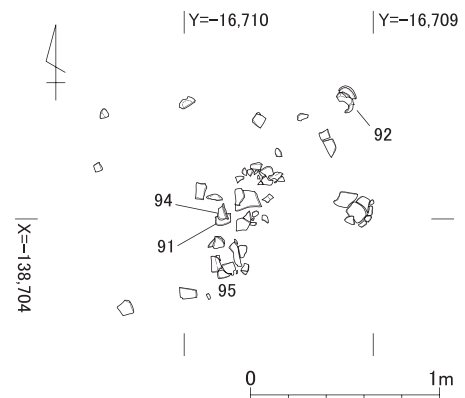
南辺の周壁や周壁溝に接して貯蔵穴と考えられる遺構を2基検出した(貯蔵穴1・2)。貯蔵穴1は、やや歪な方形を呈し、一辺0.6～0.79m、深さ0.4mを測る。貯蔵穴2は、ほぼ方形の平面形を呈し、一辺0.55～0.63m、深さ0.45mを測る。

遺物は、竈の残欠と考えられる焼土の周辺と、住居南半部のほぼ床面直上のほか、貯蔵穴から多く出土した。出土した遺物としては須恵器杯蓋・杯身、土師器甕・甑・高杯、製塩土器などがある(第41図59～90)。このうち貯蔵穴1からは製塩土器(85・86・90)が、貯蔵穴2からは須恵器杯蓋・杯身、土師器杯・甕、製塩土器などが出土した(60・66・71・81・88)。出土した遺物から古墳時代中期後半ごろと推定される。

竪穴式住居跡 S H330 (第14図) 調査区の東辺沿い、ほぼ中央で検出した。奈良時代の井戸 S E215と重複し、大半を破壊される。検出した周壁がほぼ直線であることから、平面形は方形であったと推定され、住居の北辺の一部を検出した。住居跡の残存する規模は、北辺検出長5.4m、残存幅1.5mである。

北辺に竈を有するが、煙道や煙出しは確認できなかった。ただ、周壁に沿って赤変している箇所がみられたので、竪穴式住居跡 S H282のような「L字形竈」であった可能性もある。周壁溝は北辺に沿って検出し、幅20～25cm、深さ5cm程度を測る。

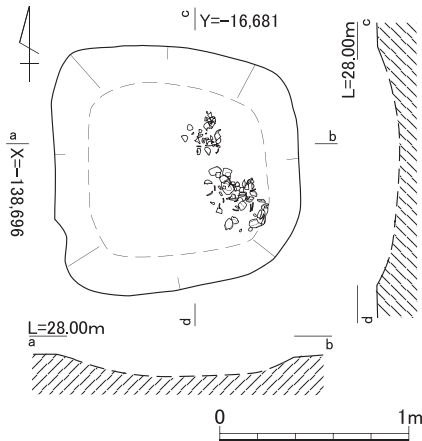
遺物は、竈内や住居の埋土から、須恵器杯身や土師器甕などが出土した(第40図55～58)。出土



第15図 土器溜まり S X199実測図

した遺物から古墳時代後期前半～中頃と推定される。また、本住居に直接伴うものではないと思われるが、埋土から朝顔形円筒埴輪の肩部の破片なども出土した(第46図128)。

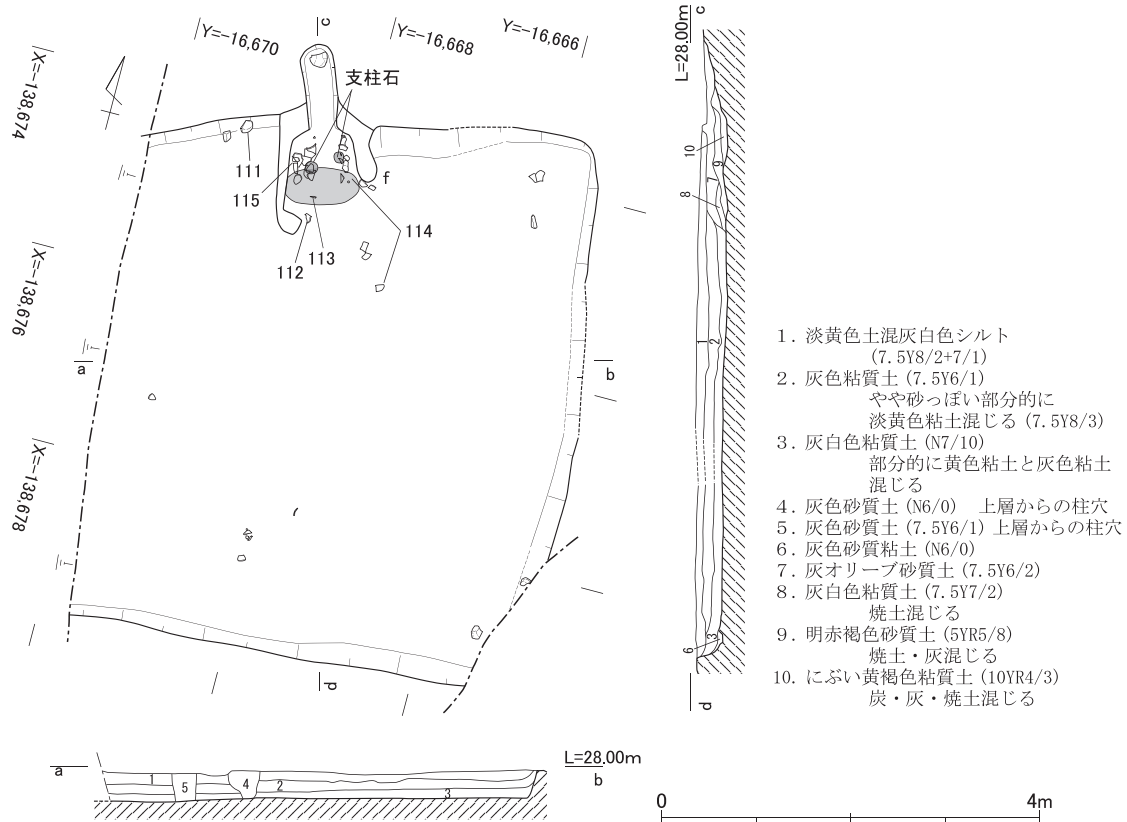
土器溜まり S X 199 (第15図) 調査区西端で検出した。長軸長3.5m、短軸長2.5mの範囲から多数の土器が出土した。しかし、A 1 地区の土器溜まり S X 15と同様、これに伴う遺構の輪郭等は確認できなかった。出土した土器として、須恵器高杯・壺、土師器杯・甕などがあり、このうち5点を図示した(第43図91～95)。出土した遺物から古墳時代中期後半ないし末ごろと推定される。



第16図 土坑 S K 280実測図

土器溜まり S X 321 調査区北半部西辺寄りで検出した。明確な遺構の輪郭は認められなかったが、古式土師器など3点がほぼ同一地点で重なった状況で出土した。出土した土器として、土師器甕2点と弥生土器と思われる甕1点がある(第43図96・97)。土師器2点は布留式甕と庄内式甕各1点であり、弥生土器とともに、出土状況から同時性の指摘ができる資料である。

土坑 S K 280 (第16図) 調査区の東辺中央部やや南寄り、竪穴式住居跡 S H 282の東側にほぼ接して検出した。平面形は隅丸方形を呈し、一辺1.3m前後、深さ0.2m程



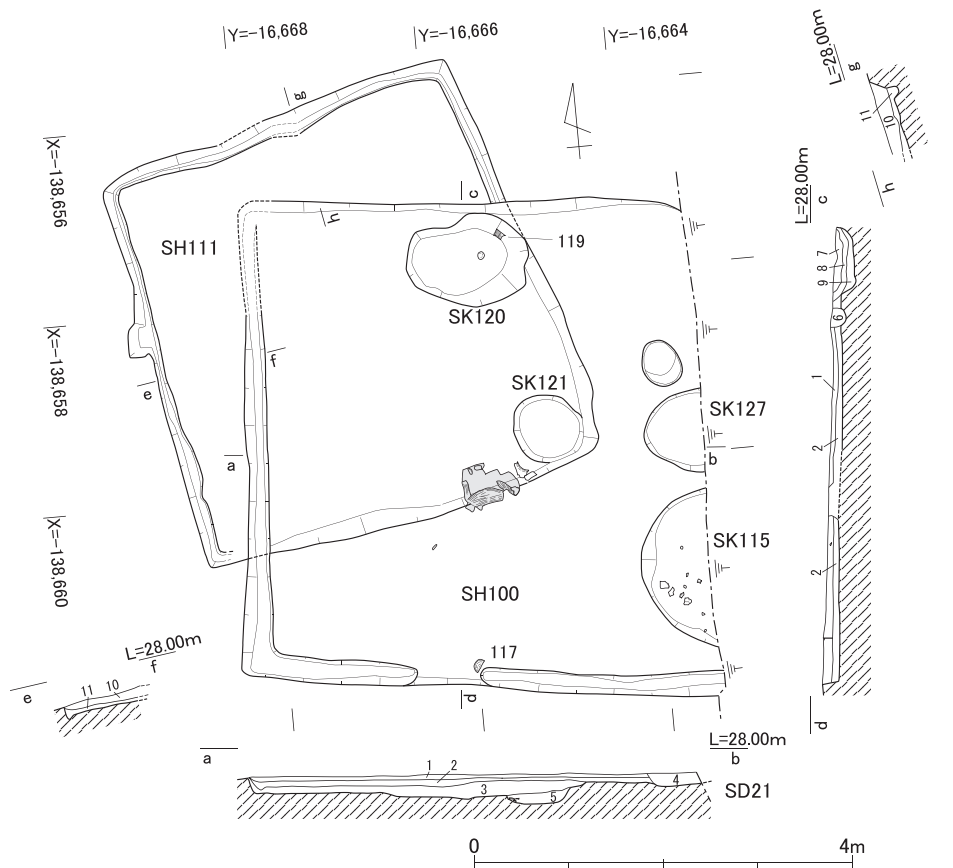
第17図 竪穴式住居跡 S H 99実測図

度を測る。出土遺物としては土坑の埋土最上層から製塩土器300gほどが出土した(第44図98～107)。しかし、土坑内には焼土等が認められないことから焼塩に伴うような焼成用の土坑ではないと判断される。なお、製塩土器以外の遺物が出土しなかったため、時期は明確でないが、周辺の遺構と同時期の古墳時代中～後期に位置づけられると思われる。

(3) B地区

竪穴式住居跡 S H99(第17図) 調査区の最南端で検出した。住居跡の西辺と南東角が調査区外となるため、住居跡の全容を確認することはできなかったが、平面形はやや歪な方形を呈する。南北長5.7m、東西検出長5.0m、深さ0.3mを測る。住居跡の北辺と南辺は平行にならず西に向かって幅がやや狭くなる。北辺の中央に竈が造り付けられており、煙道がまっすぐ住居外へ延びる。煙道と煙出しを合わせた竈の全長1.9m、幅1.1mを測る。竈内には支柱石と思われる石が2点認められた。周壁溝や支柱穴は認められなかった。

遺物は竈内でややまとまって出土したほかは、住居内に散在したような状態で出土した。出土した遺物としては須恵器杯身・高杯、土師器杯・高杯・甕などがある(第45図108～116)。出土した遺物から古墳時代後期中頃～後半と推定される。



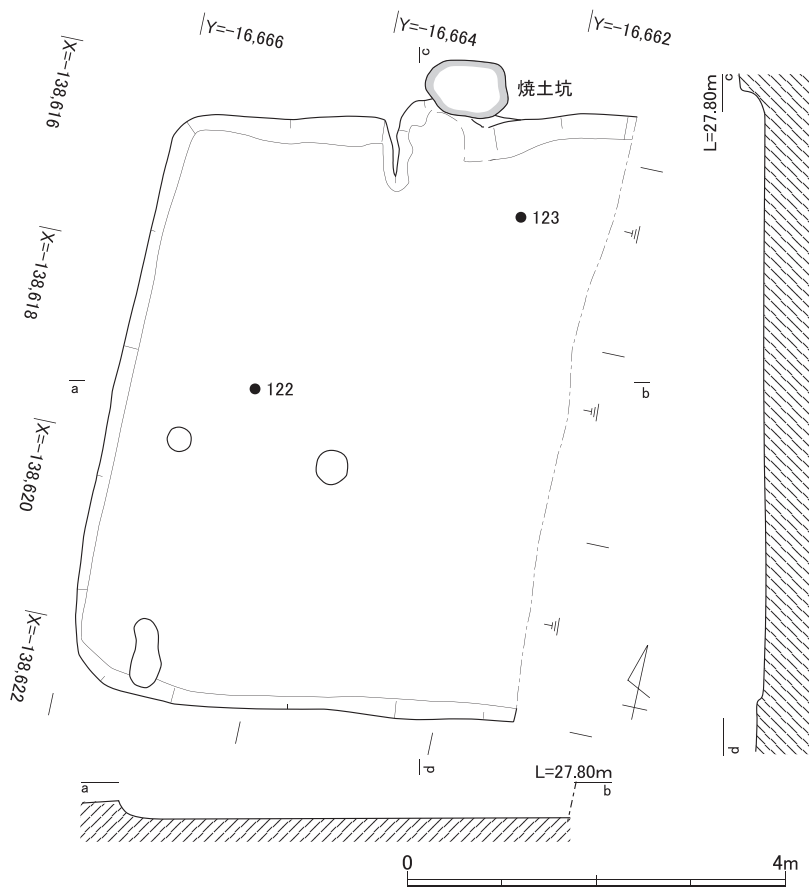
- | | |
|------------------------------------|------------------------------------|
| 1. 明黄褐色砂質粘土 (2.5Y7/6) | 6. 灰色砂質土 (7.5Y5/1) |
| 2. オリーブ灰色粘質土 (2.5GY5/1) | 7. 灰オリーブ粘質土 (5Y6/2) 炭・焼土・遺物含む |
| 黄色粘土ブロック少々混じる | 8. 暗赤褐色粘土 (5YR3/6) 焼土 |
| 3. 暗オリーブ灰色粘質土 (2.5GY4/1) S H111 埋土 | 9. 灰白色砂質土 (10Y7/1) 8が混じる |
| 4. 明赤褐色粘質土 (5YR5/6) S K127 埋土 | 10. 暗オリーブ灰色粘質土 (5GY4/1) S H111 埋土 |
| 5. 灰オリーブ粘質土 (7.5Y5/3) S K121 埋土 | 11. 暗オリーブ灰色砂質粘土 (5GY4/1) S H111 埋土 |

第18図 竪穴式住居跡 S H100・111実測図

竪穴式住居跡 S H100 (第18図) 調査区に南半部で検出した。後述する竪穴式住居跡 S H111と重複し、本住居跡の方が新しい。住居跡の東辺は奈良時代の南北溝 S D21によって切られている。平面形は方形を呈し、南北長5.1m、東西残存長4.9m、深さ0.15mを測る。北辺の中央には竈の残欠と思われる焼土が広がる。この焼土を完掘する過程で長軸長1.3m、短軸長0.9m程度の楕円形を呈する土坑 S K120を検出した。この土坑は竈に関連する可能性はあるものの、竈との関係は明らかにできなかった。住居跡の東半部で土坑 S K115・127を検出した。

周壁溝は西辺と南辺で検出したが、北辺には認められなかった。周壁溝は幅0.15~0.30m、深さ0.05m程度を測る。主柱穴は検出されなかった。遺物は全体に少なく、須恵器杯蓋や土器器甕が出土した(第45図117~119)。また、直径2mm程の孔を穿った緑色を呈する玉状の石製品が出土している(第45図126)。出土した須恵器から古墳時代後期前半ないし中頃と推定される。

竪穴式住居跡 S H111 (第18図) 調査区南半部で検出した。竪穴式住居跡 S H100と重複していたが、本住居が S H100よりも深く掘削されていたことから住居の規模等については明らかにすることができた。平面形はほぼ正方形で、南北長、東西長とも4.4mで、深さは0.25m前後を測る。竈や主柱穴は認められなかった。幅0.1m、深さ0.05m程度の周壁溝は全周すると思われるが、S H100との重複部分では不明瞭であった。本住居の南辺に沿って、炭の塊がまとまって出土した。詳細は不明である。遺物はごく少量が出土した程度である(第45図120・121)。S H100に先行す



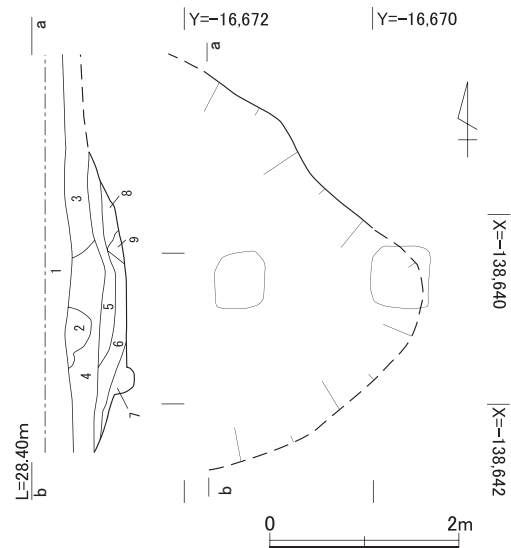
第19図 竪穴式住居跡 S H105実測図

る住居であることから古墳時代後期前半ごろと推定される。

竪穴式住居跡 S H105 (第19図) 調査区北半部で検出した。住居跡の東辺は調査区外となる。平面形は歪な方形を呈し、南北長6.4m、東西検出長4.8m、深さ0.1~0.15mを測る。北辺の中央には竈の袖と思われる部分が残存する。住居の北辺に接して、周囲が赤く焼けた楕円形の土坑がある。しかし、焼土の広がりなどから、竈とは考えられず、古墳時代よりも新しい時期の焼土坑と考えられる。周壁溝や主柱穴は検出できなかった。遺物はほとんど出土せず、土師器の破片などが少量あるのみである(第46図122・123)。出土した土器から時期の特定は難しいが、周辺で検出した竪穴式住居跡とほぼ同時期の古墳時代中期後半から後期にかけてと推定される。

土坑 S K126 (第20図) 調査区の南半部西辺に接して検出した。遺構の一部がトレンチ壁に接して検出され、大量の土器が出土したことから、調査終了に伴う埋め戻しに際して、調査区の一部を拡張して遺物の取り上げを行った。ただ、遺構の全容は、調査区の西側に現用の水路があるため調査に限界があり、明らかにできなかった点がある。土坑の規模は長さ3.2m以上、深さ0.4m程度の不整形な楕円形を呈すると推定され、大量の土器が廃棄されたような状態で出土した。

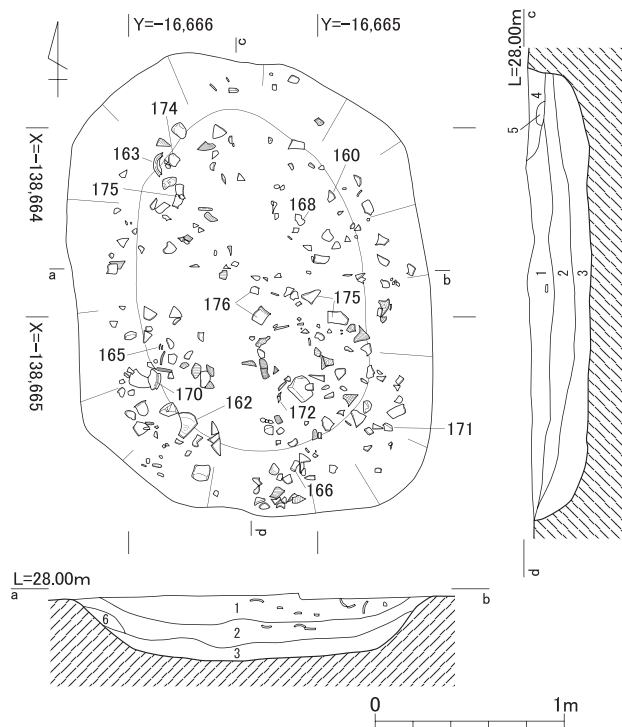
遺物は、縄蓆文を有するタタキ調整痕がみられる陶質土器甕1点を除き、すべてが土師器で、整理箱にして8箱程度が出土した。土師器の器種は小型丸底土器・



1. 灰色粘質土 (7.5Y5/1) 部分的に橙褐色斑粒状の変色有り
2. 灰白色砂混じり粘土 (10YR7/1) 中世東西溝
3. 灰白色粘土 (10YR7/1) 中世東西溝
4. 灰黄色粘質土 (2.5Y7/2)
5. 灰オリーブ色炭混じり粘質土 (7.5Y6/2)
6. 明オリーブ灰炭混じり色粘土 (2.5GY7/1)
7. オリーブ灰色炭混じり粘土 (2.5GY6/1)
8. 明緑灰色炭混じり粘土 (7.5GY7/1)
9. オリーブ灰色焼土・炭混じり粘土 (10Y5/2)

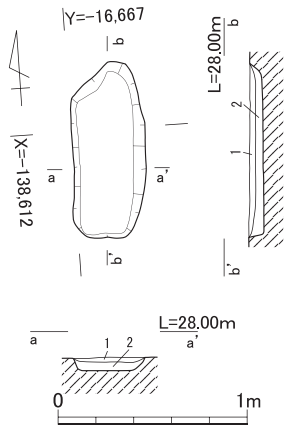
5~9 ; S K126 埋土、土器を大量に含む

第20図 土坑 S K126実測図



1. オリーブ褐色粘質土 (2.5Y4/3) 炭混じり
2. 暗オリーブ褐色粘質土 (2.5Y3/3) 炭混じり
3. 暗オリーブ褐色粘質土 (2.5Y3/3) 炭をほとんど含まない
4. オリーブ褐色粘質土 (2.5Y4/4)
5. 灰オリーブ色細砂 (5Y5/3)
6. 暗灰黄色粘質土 (2.5YR5/8)
明赤褐色 (5YR5/6) などの焼土ブロックを含む

第21図 土坑 S K91実測図



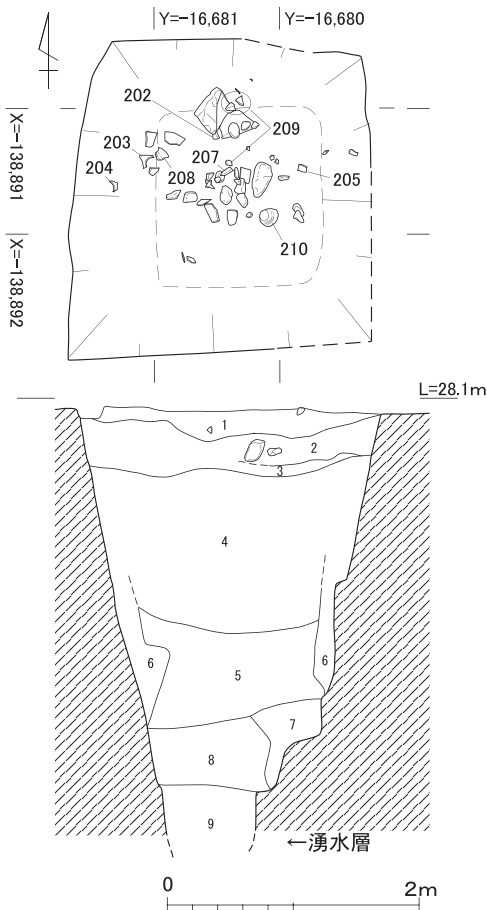
1. 灰褐色砂質土 (7.5YR4/2)
2. 暗オリーブ灰色粘質土 (2.5GY4/1)

第22図 土坑SK91実測図

壺・甕・高杯などがある。本報告ではその一部のみを報告するが、土器様相としては、ほぼ同じ内容のものである(第47図129～第48図159)。出土した土器から古墳時代中期初頭ないし前半と思われる。

土坑SK91(第21図) 調査区南半部で検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸長2.4m、短軸長1.9m、深さ0.35m前後を測る。土坑埋土は大きく3層に分かれ、おもに上2層から多数の土器と少量の炭が出土した。

出土した土器として、須恵器杯蓋・杯身・高杯・壺、土師器杯・甕などがあり、このうち18点を図示した(第49図160～177)。出土した土器から古墳時代後期後半と推定される。



1. にぶい黄色粘質土 (2.5Y6/4) 粒子細かい
2. にぶい黄色粘質土 (2.5Y6/4)
3. 灰オリーブ粘土 (7.5Y5/2)
4. 暗青灰色シルト灰色砂混じり
5. 暗青灰色シルト
6. 緑灰色粘質土
7. 緑灰色粘質土
8. 淡青灰色粘土 (やや暗青灰色の部分あり)
9. 茶灰色砂混じり淡青灰色粘土

第23図 井戸SE215実測図

土坑SK102(第22図) 調査区北半部で検出した。平面形はやや歪な長方形を呈し、全長0.94m、幅0.39m、深さ0.1mを測る。土坑からは土師器甕1点が出土した(第49図178)。

2) 奈良時代

A1地区では当該期の遺構は検出していない。また、遺物もほとんど出土していない。A2地区では井戸1基のほか、少数の柱穴や土坑を検出したのみで、全体として遺構の数は少ない。これは、中世に遺構が削平されてしまったためと思われる。B地区では掘立柱建物跡4棟、溝5条、土坑2基などを検出した。

(1) A2地区

井戸SE215(第23図) 調査区の東辺、ほぼ中央で検出した。平面形はほぼ方形を呈し、一辺2.1～2.5mを測る。当初は人力で掘削を行っていたが、2mを超える深さであることが判明したため、重機による断ち割り調査に切り替えた。その結果、検出面からの深さ約3.4mで湧水層と思われる砂層に達した。この付近が井戸の底と思われるが、曲げ物などは認められなかった。また、井戸枠も確認されなかった。

遺物は最上層の約0.5mほどの範囲からまとまって出土したものの、それよりも下層では、ほとん

ど出土しなかった。土層の堆積状況から判断して、ある程度埋められた後に土器が投棄されたのではないかと推定される。

出土した遺物としては、土師器杯A、須恵器杯A・杯B・杯B蓋・鉢D・壺L・壺Q、平瓦などがある(第58図200～210)。出土した土器から奈良時代中頃と判断され、B地区で検出した土坑S X 96や溝S D 21などとほぼ同時期である。

土器溜まりS X 203 上層遺構第2面の南北方向の耕作溝の掘削中に確認したもので、1.4m程の範囲から若干の土器がまとまって出土した。耕作溝による攪乱のため、遺構の掘形等は確認されなかった。あるいは遺物包含層中の土器がややまとまって出土した可能性もある。出土遺物としては須恵器ばかりで、杯Bや鉢Dなどがある(第58図211・212)

その他の遺構 A2地区では、奈良時代の遺物を出土する柱穴や土坑を少数検出した。検出した柱穴は掘立柱建物跡としてのまとまりを確認することはできなかった。柱穴S P 222からは土師器皿A・甕Aが、柱穴S P 169からは土師器杯Aが、柱穴S P 221からは須恵器杯Bが、柱穴S P 313からは須恵器杯B蓋がそれぞれ出土した(第58図213～217)。

(2) B地区

土坑S X 96(第24・25図) 調査区のほぼ中央で検出した。後述する掘立柱建物跡S B 03と重複し、これよりも古い遺構である。平面形はほぼ方形を呈するが、西壁の立ち上がりを明瞭に検出できたのに比べ、北壁・南壁の立ち上がりはともにやや不明瞭であった。また、東壁はさらに不明瞭であった。検出状況等から、当初は井戸の可能性を考えたが、井戸枠等が認められず、掘形底面でも湧水も、湧水層と思われる砂層も認められなかったことから、土坑と判断した。

平面形は、やや不明瞭な点もあるが、ほぼ方形を呈し、南北長3.5m、東西長3.9mで、深さは最大で1.9mを測る。埋土は下層から、木簡や削屑を含む木屑層(13・15層)、大量の遺物が焼けた木材や炭とともに出土した炭層(7・10層)、土坑を最終的に埋め立てた層(1～4層)の大きく3層に分けることができる。

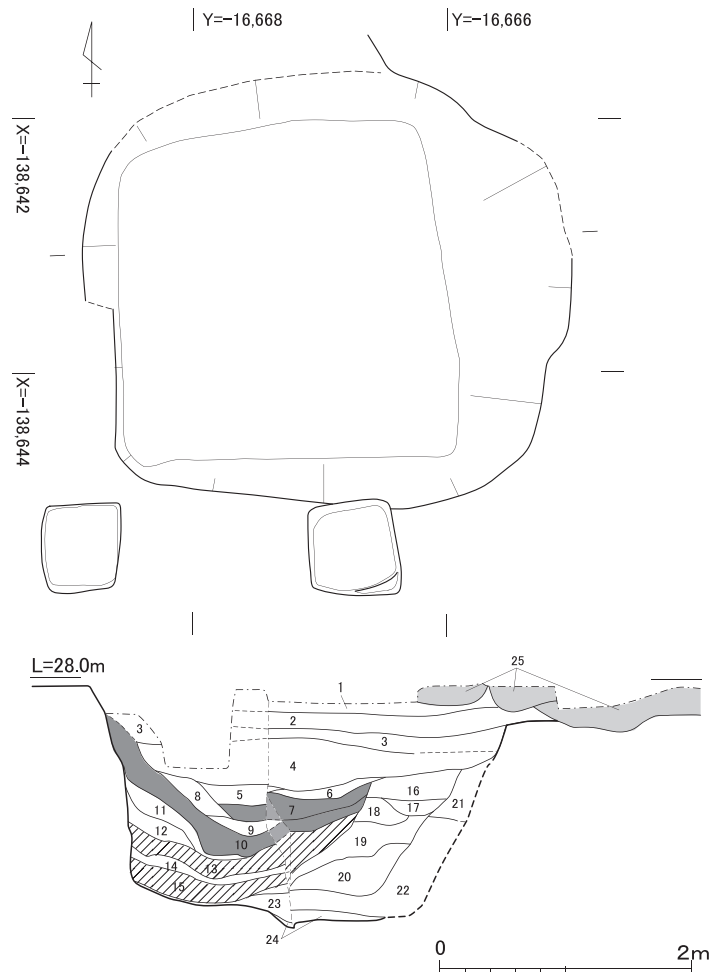
遺物の出土状況は次の通りである。まず、木屑層からは大量の木屑や加工木に混じって今回の調査で最大の成果となった木簡や削屑が出土した。合わせて少量の土器や瓦片などが出土した。次に炭層からは大量の炭や焼けた木材、自然木などとともに、墨書土器、須恵器・土師器などの土器類、製塩土器、瓦埴類のほか、銅椀片、鉾滓などが出土した。その出土量は膨大で、炭層そのものの厚さが限定されることから、これらの遺物と炭などが一時に大量に投棄されたと考えられる。第25図に示した遺物出土状況は、上層・下層としているが、炭層内における遺物の出土状況を示している。整地層からも若干の土器と瓦埴類が出土した。

土坑S X 96から出土した遺物は整理箱にして30箱を越える。その内容は木簡や削屑(第50図179～181、図版第33 703～736)、瓦埴類(第51図182・184、第52図186～188、第53図190・191、第54図193、第55図195～第57図198)、須恵器・土師器などの土器類(第59図218～第67図412)、墨書土器(第68図413～第70図443)、製塩土器(第71図444～457)、木製品・銅製品・鉄製品(第80図604～609)など多岐に及ぶ。出土した木簡や墨書土器などの文字資料に年代の書かれたものはなかつ

たが、出土土器は、その特徴から奈良時代中頃に位置づけられる。

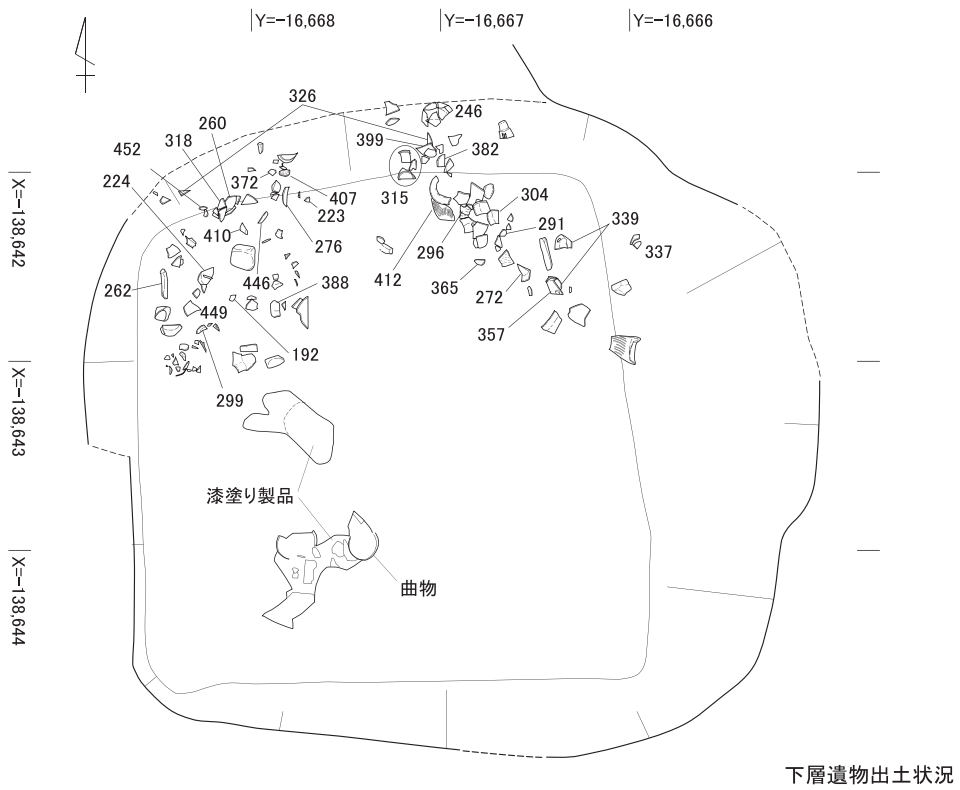
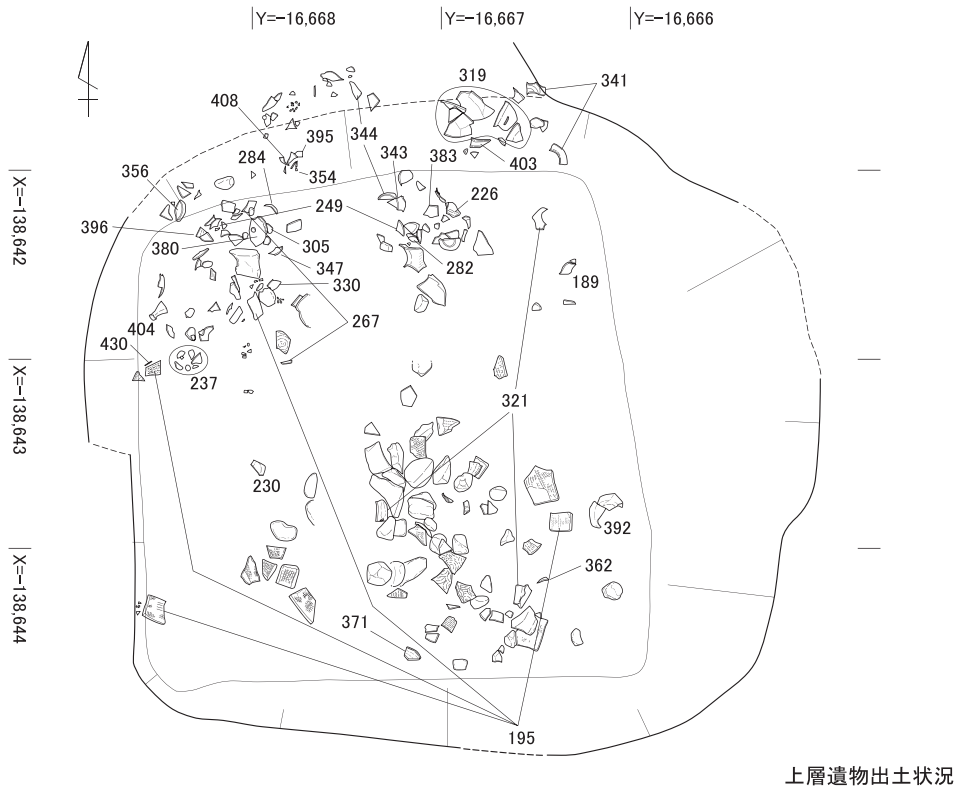
この遺構の性格については、出土遺物の内容や土層の堆積状況などから、調査地周辺で生じた不要物を廃棄するために掘られた土坑と考えられる。また、調査終了後に重機による断ち割りをを行い、この遺構が井戸でないことを最終的に確認した(図版第15-3)。

また、大量の炭化材が出土したことから、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。結果のみを記すと、1σ 暦年代範囲(確率68.2%)で681-716 cal AD(39.7%)および744-768 cal AD(28.5%)、2σ 暦年代範囲(確率95.4%)で671-773 cal AD(95.4%)と、7世紀後半



- | | |
|---|--|
| <p>1. 黄褐色砂質土 (2.5Y5/4) にぶい黄褐色の斑点あり</p> <p>2. 黄褐色砂質土 (2.5Y5/3)</p> <p>3. 暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2)</p> <p>4. 灰色粘土 (10Y4/1) 炭を少し含む</p> <p>5. 暗オリーブ灰色粘質土 (5GY3/1)</p> <p>6. 灰色粘質土 (7.5Y4/1) 炭を少し含む</p> <p>7. 黒色粘質土 (2.5GY2/1)
土器片を大量に含み、炭をやや多く含む</p> <p>8. 暗オリーブ灰色粘質土 (5GY3/1) 炭を少し含む</p> <p>9. 黒色シルト (2.5GY2/1) 炭を少し含む</p> <p>10. 黒色炭層 (N1.5/0)
土器片を大量に含み、炭を多く含む</p> <p>11. 黒色シルト (2.5GY2/1) 細砂を含む</p> <p>12. オリーブ黒色シルト (7.5Y3/1)</p> <p>13. オリーブ黒色粘質土 (2GY3/1) 木屑を多く含む</p> | <p>14. 黒色シルト (2.5GY2/1) 細砂を含む</p> <p>15. 黄褐色砂質土 (2.5Y5/3) 木屑を多く含む</p> <p>16. 灰色粘質土 (10Y4/1) 細砂を多く含む</p> <p>17. 暗オリーブ灰色粘質土 (2.5GY3/1)</p> <p>18. 黒色粘質土 (10Y2/1) 炭、細砂を含む</p> <p>19. 暗オリーブ灰色粘質土 (5GY3/1)</p> <p>20. 黒色粘質土 (2.5GY2/1) やや明るい</p> <p>21. オリーブ黒色シルト (10Y3/1)</p> <p>22. 暗オリーブ灰色シルト (2.5GY4/1) →
オリーブ灰色粘土 (5GY5/1)</p> <p>23. 緑黒色シルト (10GY2/1)</p> <p>24. 黒色シルト (2.5GY2/1) 木の葉を含む</p> <p>25. にぶい黄色細砂 (2.5Y6/4)
掘立柱建物跡S B03に伴う整地層</p> |
|---|--|

第24図 土坑S X96実測図



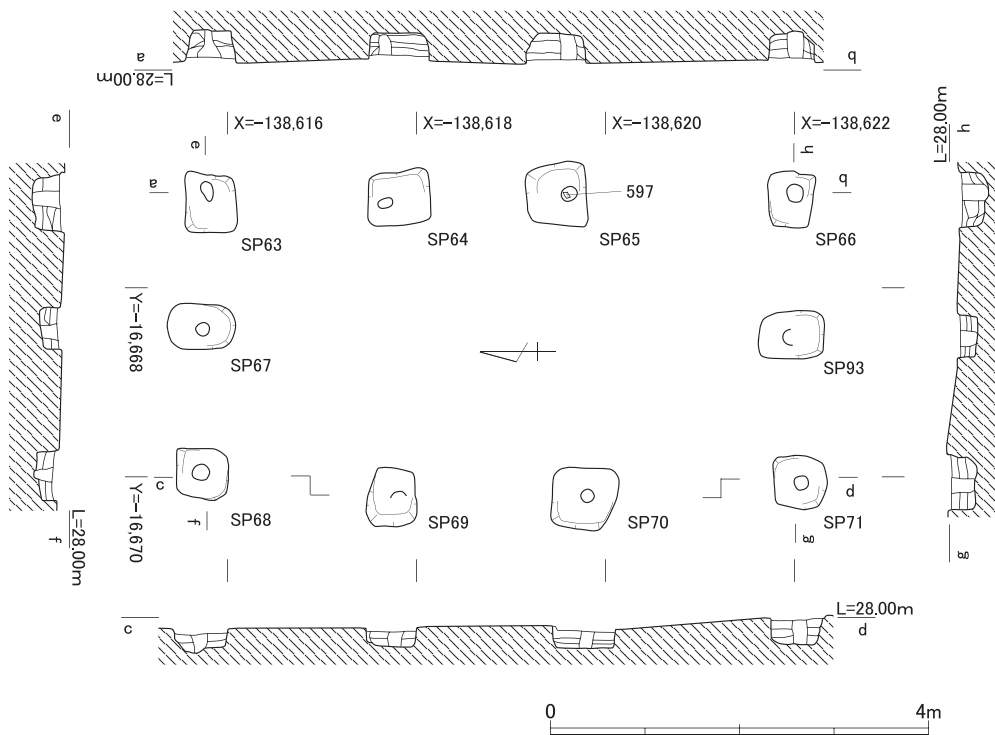
第25図 土坑 S X 96遺物出土状況

～8世紀後半の範囲を示した。この結果は、土器から推定される遺構の年代とほぼ重なるが、土器から得られた年代ほど絞り込むことはできていない。

掘立柱建物跡 S B 01 (第26図) 調査区の中央、やや北寄りで見出した。柱間が不揃いであるが、東西2間(2.8m)、南北3間(6.2m)の南北棟建物跡である。建物主軸は北に対して0.5～1°東に振る。柱穴は方形を呈し、一辺の長さがほぼ同じものが多いが、一部長方形を呈するものが多い。柱穴の一辺は45～70cm、深さ20～30cmを測る。両妻側中央の柱穴 S P 67・93はやや南北に長い長方形を呈する。また、四隅の柱穴はほかの柱穴にくらべ、わずかに深い。いずれの柱穴でも柱痕を確認しており、直径12～18cmを測る。

出土遺物としては、柱穴 S P 65から土師器甕(第78図597)があるほか、須恵器や土師器の小破片などがある。出土した土器から時期を特定することは難しいが、奈良時代の建物跡である。

掘立柱建物跡 S B 02 (第27図) 調査区の中央で見出した。掘立柱建物跡 S B 01から南へ約15mの所に位置する。東西2間(3.2m)、南北1間(3.6m)の建物跡である。建物主軸は北に対して0.5°程度西に振る。柱穴はやや不整形な方形を呈するもの(柱穴 S P 117)もあるが、ほぼ方形を呈する。柱穴の一辺は55～65cm、深さ16～20cmを測る。柱穴 S P 78は断面の観察を繰り返したが、底面を確認することはできなかった。いずれの柱穴でも柱痕を確認しており、直径20～25cmを測る。S B 02の西側に位置する柱穴 S P 81は、S B 02の南側柱列と柱筋や柱間寸法が揃うが、北側柱列の西への延長部分で柱穴を検出することができなかったため、別の遺構と判断した。また、S B 02の柱列で囲まれた中央に、長辺1.0m、短辺0.6m、深さ0.15mを測る平面長方形の柱穴がある(柱穴 S P 75)。柱穴内には柱痕が2つ確認できた。この S P 75が S B 02と一体のものである



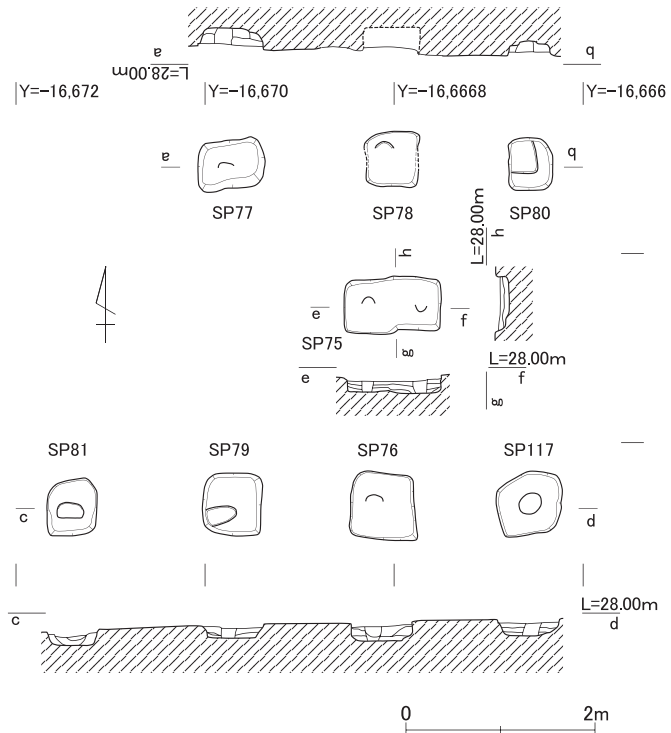
第26図 掘立柱建物跡 S B 01実測図

のか、別の時期のものであるのか、明確にすることはできなかった。

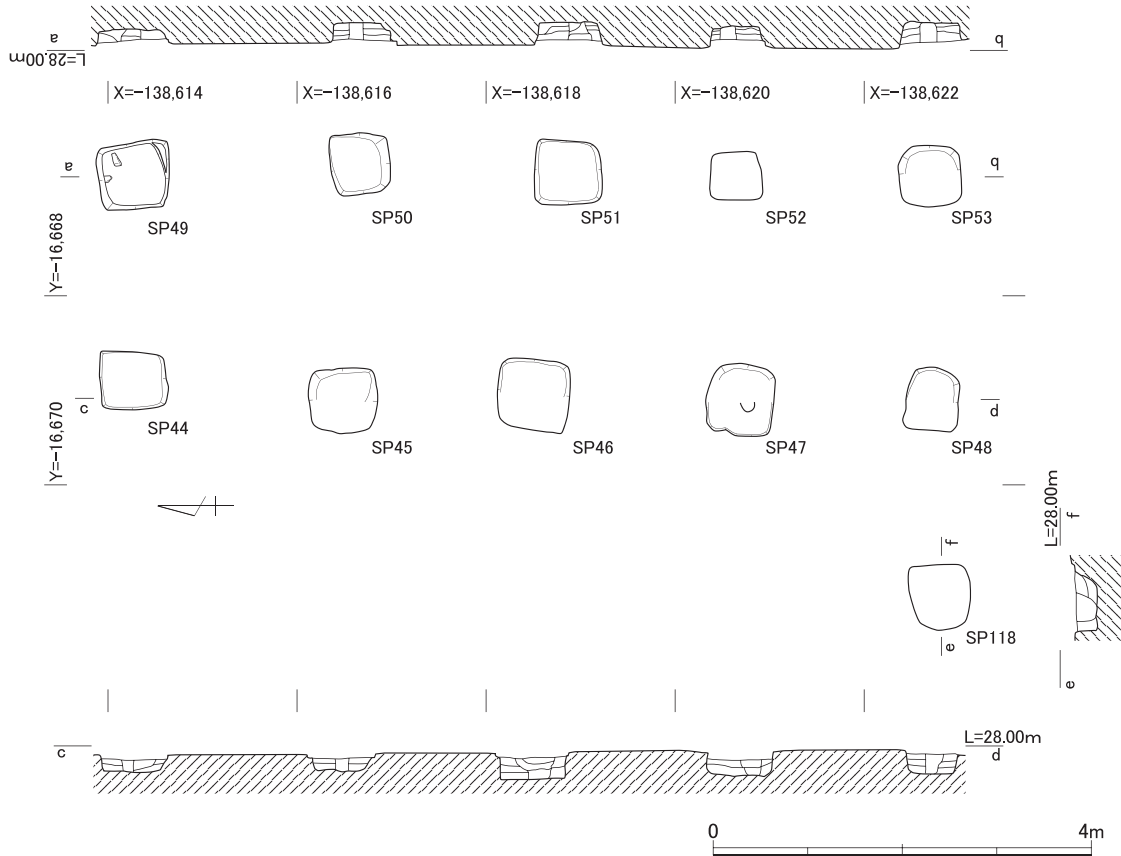
遺物としては、各柱穴から須恵器や土師器の小破片などが出土したが、土器から時期を特定することは難しい。

掘立柱建物跡 S B03 (第28図)

調査区の中央、やや南寄りで
 検出した。掘立柱建物跡 S B02
 から南へ約 5 m の所に位置す
 る。東西 1 間 (2.0m) 以上、南北
 4 間 (8.5m) の建物跡で、東側に
 庇を持つと考えられる。身舎の
 大半は調査区外に位置する。庇
 の出は 2.4m (1 間分) である。建
 物主軸は北に対して 1 ~ 1.5° 東
 に振る。柱穴は方形を呈し、一
 辺の長さが 65 ~ 75cm を測るもの
 が多い。深さは 18 ~ 28cm を測る。
 身舎の柱穴と庇の柱穴の大きさ



第27図 掘立柱建物跡 S B02実測図



第28図 掘立柱建物跡 S B03実測図

はほぼ同じである。柱痕はすべての柱穴で確認しており、直径20cm前後を測る。

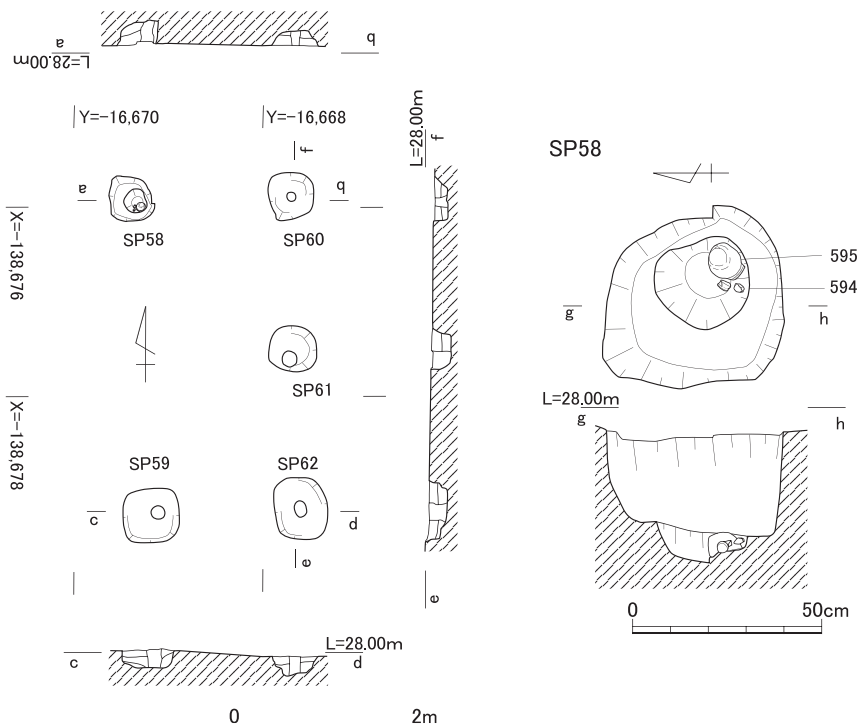
遺物としては、柱穴S P 49から須恵器杯Bや土師器杯Cが出土した(第78図591・592)ほか、各柱穴から須恵器や土師器の小破片などが出土した。出土した土器から奈良時代中頃と思われる。

掘立柱建物跡S B 04(第29図) 調査区の南端で検出した。掘立柱建物跡S B 03から南へ約21mのところの位置する。東西1間(1.6m)以上、南北2間(3.3m)で、東西棟の建物跡と推定される。建物主軸は北に対して1.5°西に振る。柱穴は隅丸方形を呈し、柱穴の一辺は48~60cm、深さ18cm前後を測る。いずれの柱穴でも柱痕を確認しており、直径11~13cmを測る。

S B 04を構成する柱穴の1つであるS P 58からは、須恵器杯B蓋のつまみや土師器壺Bなど(第78図594・595)が出土した。出土状況から壺Bに供え物を入れて地鎮のため柱穴内に埋納した可能性もある。また、柱穴S P 60から土師器甕(第78図593)が出土したほか、その他の柱穴からも須恵器や土師器の小破片が出土している。出土した土器から奈良時代と思われるが、詳細な時期は不明である。

今回の調査で検出した掘立柱建物跡S B 01~04の4棟の建物跡の、いずれからも時期を決定できるような遺物はほとんど出土しなかった。しかし、後述する溝S D 21と掘立柱建物跡4棟は、方位をおおむね揃えていることから、同時期の遺構である可能性が高いと考えている。この点は土坑S X 96と掘立柱建物跡S B 03との層位的な関係とも矛盾しない。

溝S D 21(第30~33図) 溝S D 21は調査区を縦断する溝で、総延長は100mに達し、幅は0.7~1.1mを測る。深さは地点によってまちまちであるが、0.1~1.0mを測る。S D 21の方位は、北に対して1°西に振る。なお、調査区内で、S D 21に直交するような溝や柵などの遺構は確認しい



第29図 掘立柱建物跡S B 04実測図および柱穴S P 58遺物出土状況図

ない。第1次調査では第2・3トレンチでS D21の一部を検出している。

遺構の検出状況や遺物の出土状況から、S D21全体を大きく3区分して記述する。まず、北部は、調査区の北端から第1次調査の第3トレンチの南端までの範囲で、第3トレンチ全体を含む。この付近の溝の規模は、幅0.9～1.1m、深さ0.1～0.2mを測り、全般的に浅い。水の流れていた痕跡は明確には認められなかったが、北から南に向かって流れていたと思われる。北部では調査範囲が狭かったものの、第1次・第2次とも多数の遺物が出土した。出土遺物としては土師器や須恵器、製塩土器がある(第72図458～第73図512)。しかし、この西側の調査範囲では、出土土器と関連づけられる建物などの遺構は検出されなかった。

中央部は、第1次調査の第3トレンチの南端から同じく第2トレンチの北端までの範囲とする。したがって、第1次調査の際に調査区を設定しなかった範囲である。この範囲の溝の規模は、幅0.7～1.1m、深さ0.15～0.5mを測り、全般的に浅い。溝底は中央が高くて北と南に向かって下がっていくようである。水の流れていた痕跡は明確には認められなかった。遺物の出土状況は、中央部の北10mほどの範囲からは遺物がほとんど出土しなかった。S D21のほかの地点では遺物が多数出土することから、この付近では遺物が投棄されるような状況になかったと考えられる。出土遺物としては土師器・須恵器のほか、丸瓦・平瓦の破片や製塩土器が少量ある(第74図514～第75図549)。

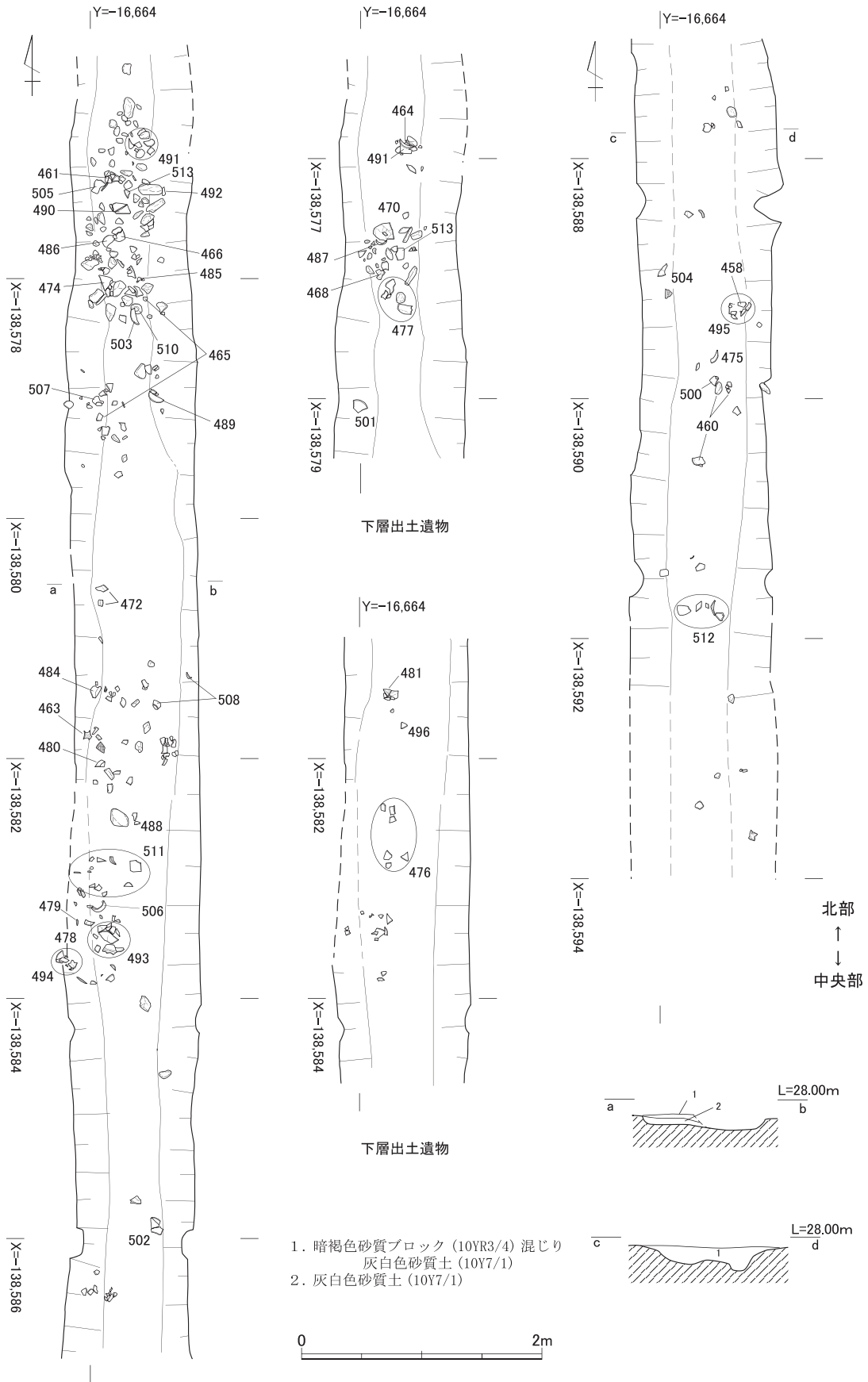
南部は、第1次調査の第2トレンチの北端から調査区の南端までの範囲で、第2トレンチ全体を含む。この範囲の溝の規模は、幅0.6～1.2m、深さ0.1～1.0mを測り、特に第2トレンチで遺構の深さが1.0mを測るところがある。しかし、国土座標のX=-138,666付近で溝の底面が比高0.4mほどの段差をもって急に浅くなり、最南端では深さがわずか0.1m程度となる。溝の底がこのように大きく変化する理由については明らかでない。ただし、この深い範囲の西側には今回調査した建物の中では比較的大型の建物である掘立柱建物跡S B03があり、何らかの関係があるかもしれない。遺物の出土状況は、第2トレンチでまとまった土器が出土したほか、第2トレンチ南端よりも南側では遺物の出土量は徐々に減少し、浅い部分ではほとんど出土しなかった。出土遺物としては土師器・須恵器のほか、丸瓦・平瓦の破片が少量ある(第76図550～第77図590)。ただし、第1次調査の際に、溝S D21の最上層から完形の平瓦1点(第55図194)が出土している。

以上のようにS D21からは多数の須恵器や土師器が出土したほか、平瓦や丸瓦などが少量出土した。軒瓦の出土は認められなかった。出土した土器の特徴からおおむね奈良時代中頃に位置づけられる。また、全体として溝の底の標高は一定しないことから、水を流すような機能は認めにくく、区画等の表示を目的としたものだった可能性もある。

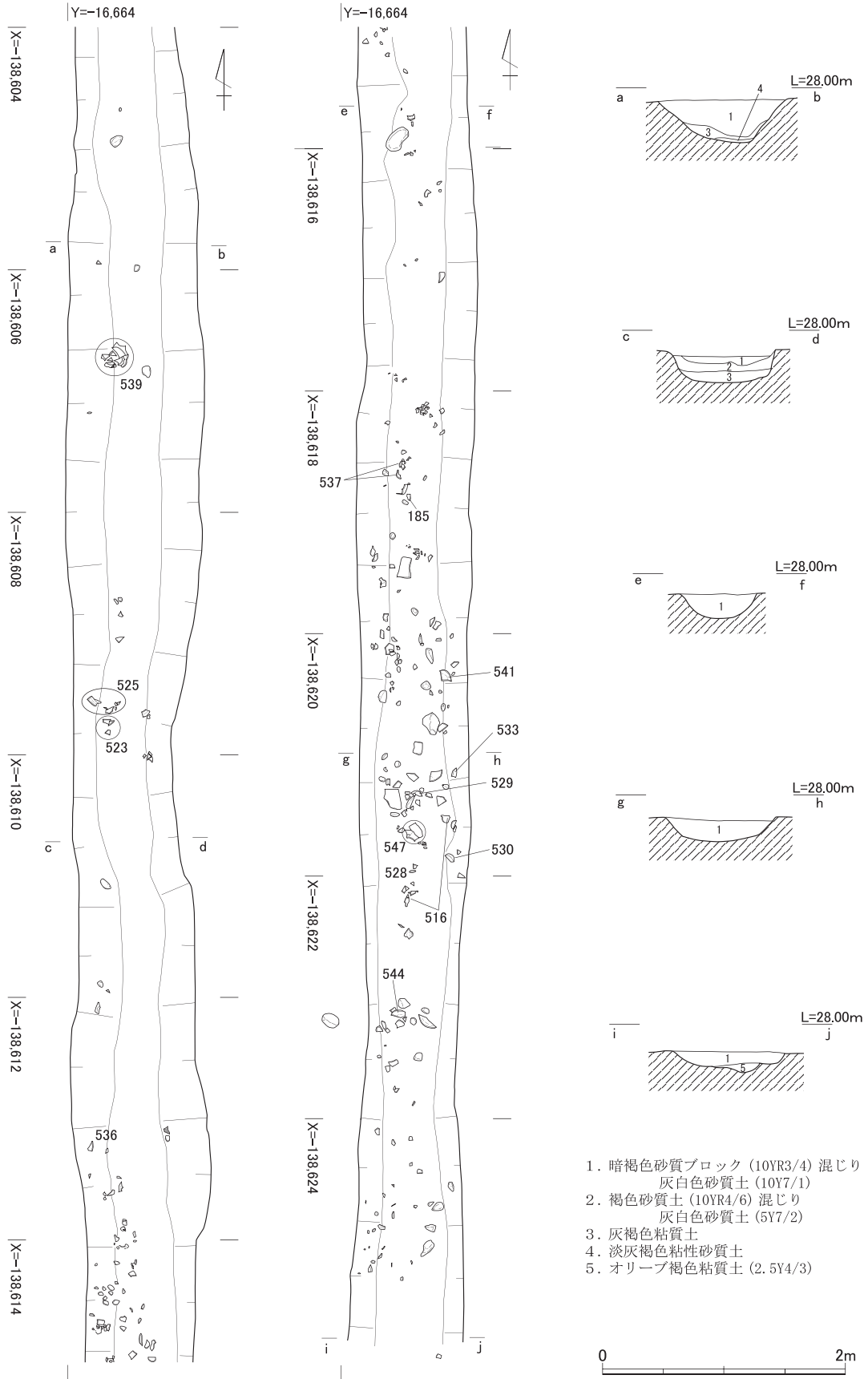
土坑S K41 調査区の北半部で検出した。平面形は隅丸方形を呈し、一辺2.6m前後、深さ0.3m程度を測る。埋土は黄灰褐色砂質土ないし灰褐色砂質土で、須恵器杯Aなどが出土した(第78図596)。溝S D21や掘立柱建物群とおおむね同時期と考えられる。

3) 中世

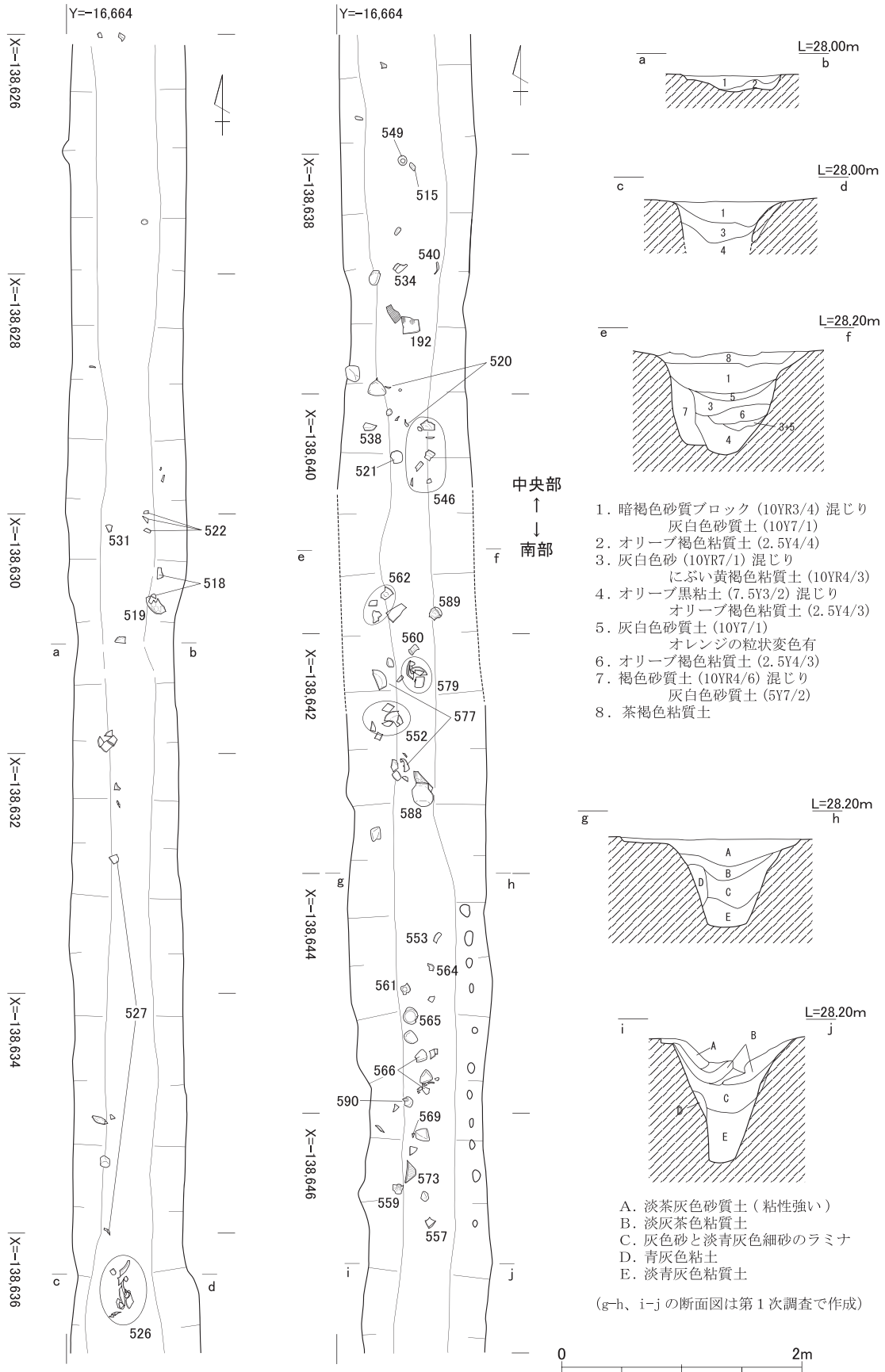
中世の遺構は、A1地区で2面、A2地区で3面、B地区で1面検出した。遺構の大半は素掘



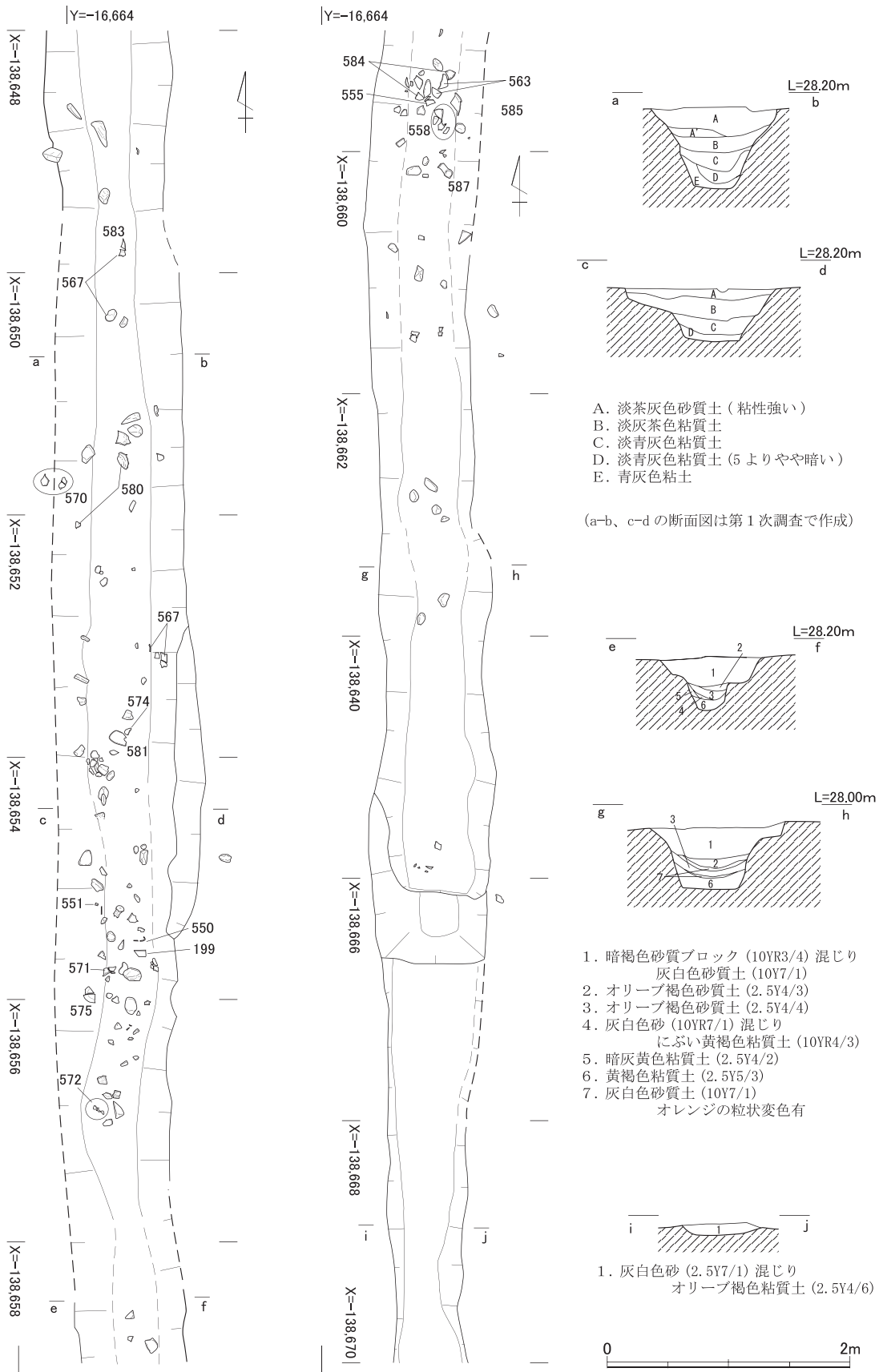
第30図 溝 S D 21実測図(1)



第31図 溝 S D 21実測図(2)



第32図 溝 S D 21実測図(3)



第33図 溝 S D 21実測図(4)

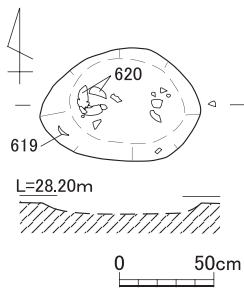
り溝で、100条以上に達する。また、A1地区とA2地区の南半部で掘立柱建物跡2棟をはじめ、柱穴や土坑を多数確認した。中世から近世にかけての遺物が出土しており、当該期の集落と耕作地の一部と推定され、遺構面に応じた変遷が考えられる。

(1) A1地区

素掘り溝群(第4図上段) 中世の遺構の第1面で検出した素掘り溝群で、重複が著しいが、15条以上の溝群を検出した。幅0.5m、深さ0.1~0.3m前後を測るものが多い。東西方向を指向しており、A2地区の中世の遺構の第1面と同方位である。出土遺物としては土師器や瓦器などがあり、中世から近世にかけての遺構と考えられる。

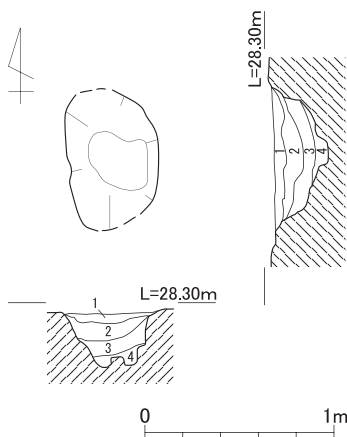
掘立柱建物跡SB05(第4図下段) 中世の遺構の第2面東寄りで検出した。東西2間(3.8m)、南北1間以上(1.8m以上)の建物跡である。建物主軸は北に対して8°東に振る。柱穴は直径0.2m前後の円形ないし隅丸方形を呈する。深さは0.1m未満である。出土遺物がほとんどなく、詳しい時期は不明である。

掘立柱建物跡SB06(第4図下段) 中世の遺構の第2面中央で検出した。東西2間(4.3m)、南北4間以上(8.0m以上)の建物跡である。建物主軸は北に対して4°ないし5°東に振る。柱穴は直径0.2mほどの円形を呈する。深さは0.15~0.2mを測る。出土遺物がほとんどなく、詳しい時期は不明である。



第34図 土坑SK106実測図

深さ0.1~0.15mを測る。SX1は幅10m、深さ0.3mほどを測り、埋土の大半は淡青灰色粘質土



1. オリーブ褐色粘質土 (2.5Y4/3)
2. 暗灰黄色粘質土 (2.5Y4/2)
3. 暗灰黄色粘質土 (2.5Y4/2)
黄褐色土 (2.5Y5/4) が混じる
4. 暗灰黄色粘質土 (2.5Y5/2)

第35図 土坑SK143実測図

(2) A2地区

素掘り溝群1(第5図上段) 中世の遺構の第1面で検出した素掘り溝群で、おもに東西方向に延びる。重複が著しいが、30条以上の溝群と調査区のほぼ中央を東西方向に横断する大溝状の遺構SX1を検出した。素掘り溝の大半は、幅0.3~0.6m、

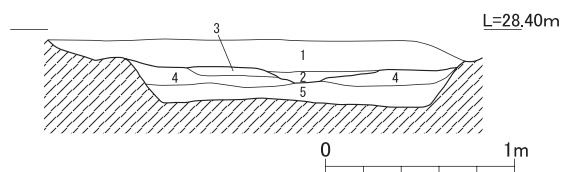
であった。出土遺物としては瓦器、中国製陶磁器、中世陶器、銭貨(寛永通寶)などがあり、中世後半~近世と思われる。

素掘り溝群2(第5図中段) 中世の遺構の第2面で検出した素掘り溝群で、おもに南北方向に延びる。重複が著しいが、SX1よりも北側で南北方向の耕作溝を20条以上検出した。出土遺物としては土師器・瓦器・中国製陶磁器などがあり、中世前半~中頃と思われる。

土坑SK106(第34図) 中世の遺構の第2面の北半部で検出した。平面形は東西方向に長い楕円形を呈する。長軸0.85m、短軸0.6m、深さ

0.1mを測る。瓦器椀や土師器皿などが出土した(第81図612～614)

土坑S K 143(第35図) 中世の遺構の第2面の南端で検出した。平面形は歪な長方形を呈する。長辺1.7m、短辺0.9m、深さ0.6mを測る。瓦器椀・瓦器皿・白磁椀・須恵器椀・土師器皿などが出土した(第81図621～634)。



1. 淡青灰色粘質土：SX1の埋土
2. 灰色粘質土：SX1の埋土
3. 淡黄灰色粘質土：SK401の埋土
4. 暗黄灰色粘質土：SK401の埋土
5. 青灰色シルト（細砂混じり）：SK401の埋土

第36図 大溝状遺構S X 1・土坑S K 401土層断面図

(3) B地区

素掘り溝群(第7図左) 中世の遺構面で検出した素掘り溝群で、大半が東西方向に伸び、一部南北方向に伸びる。全体に重複が著しいが、60条以上の溝群を検出した。幅0.3～0.6m、深さ0.1m前後を測るものが多い。素掘り溝には、区画溝や排水路と思われるやや規模の大きな南北溝も数条検出した。出土遺物としては土師器や瓦器などがあり、中世前半～後半と思われる。A2地区上層遺構第1面と同方位であり、同遺構面に対応すると考える。

土坑S K 32 調査区の北半部、西壁に接して検出した。平面形はほぼ円形を呈し、直径1.0m、深さ0.4mを測る。遺物として土師器羽釜が1点出土した。

6. 出土遺物

今回の発掘調査では、古墳時代から中世にかけての遺物が多数出土した。これらの多くは遺構から出土したもので、遺構の時期や変遷、遺跡の性格を考える上で重要な資料となる。また、少数であるが弥生時代の遺物が出土していることを確認した。弥生時代の遺物については、古墳時代以降の遺構から出土しているものもあるが、いずれも遺物包含層出土として扱うこととする。

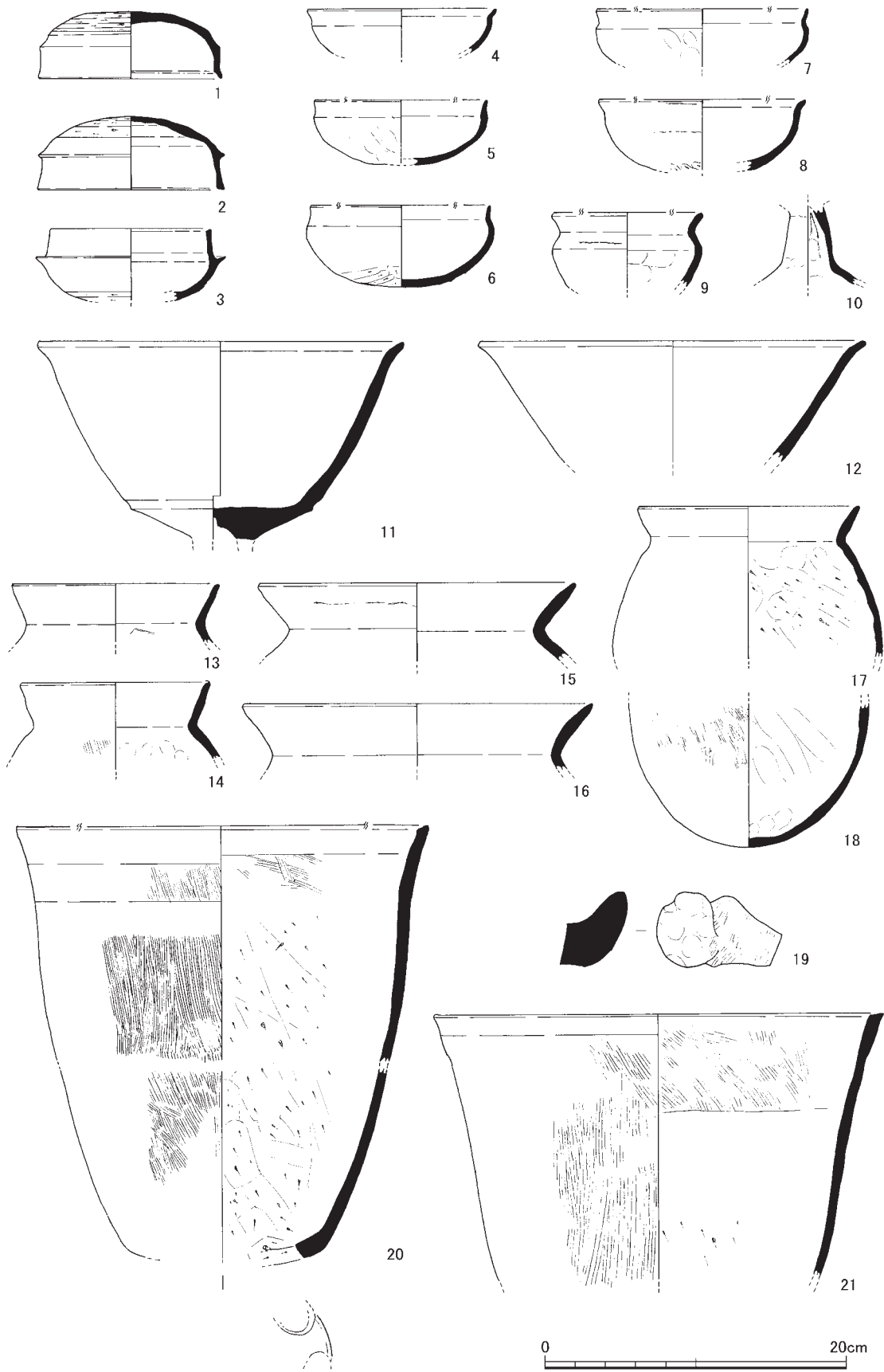
以下、検出遺構と同様に、時代ごとに遺物の報告を行う。

1) 古墳時代

各調査区から古墳時代前期から後期にかけての各時期の遺物が出土した。主体となるのは11基もの竪穴式住居跡を検出した中期後半～後期後半のものであるが、前期初頭や中期初頭の遺物も出土しており、調査地周辺における土地利用の一端を伺い知ることができる。なお、古墳時代の遺物については、調査区ごとに報告する。

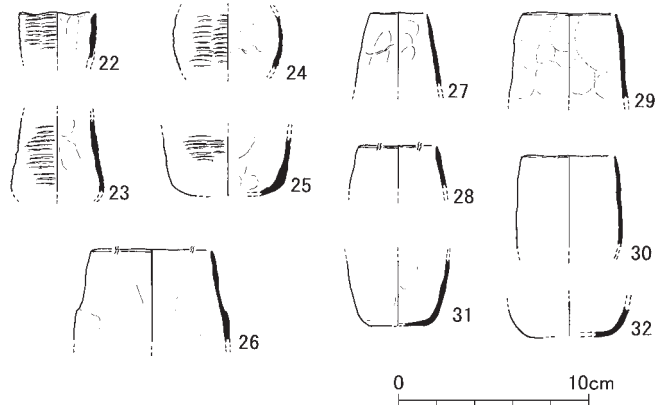
(1) A1地区

竪穴式住居跡S H50(第37図1～第38図32) 須恵器・土師器・製塩土器などが多数出土した。1～3は須恵器である。1・2はほぼ同形・同大の杯蓋で、口縁端部の形状が若干異なり、1は内径気味、2はほぼ平坦な面をなす。どちらも天井部の2/3程度に回転ヘラケズリ調整を施す。1は完形で、口径12.1cm、器高4.4cmを測る。3は杯身の破片で、ほぼまっすぐに立ち上がる口縁部と短い受け部を持つ。底部に回転ヘラケズリ調整を施す。おおむね陶邑編年のTK47型式に位置づけられる。^(注4)



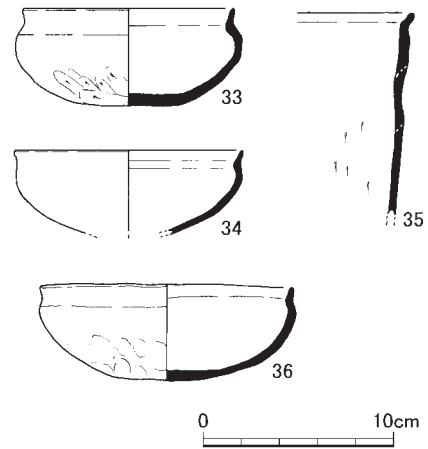
第37図 竪穴式住居跡S H50出土土器実測図(1)

4～21は土師器である。4～8は杯である。いずれも口縁部に強いヨコナデ調整を施して外反させる。底部は丸底気味で、6・8は手持ちのヘラケズリ調整を、5はユビオサエを施す。9は小型丸底土器の破片と思われる。10は高杯の脚柱部で、脚端部は「ハ」字状に開く。11・12は大型高杯の杯部である。11は脚柱部との接合部に刺突痕が認められる。11は口径24.2cm、残存



第38図 竪穴式住居跡S H50出土土器実測図(2)

高13.0cmを測る。13～18は甕である。13・14は小型品、17は中型品、15・16は大型品である。いずれも口縁部が単純「く」字状を呈し、口縁端部を丸く納める。18は底部である。17は体部内面にケズリ調整、18はナデ調整を施す。19は甕あるいは甑の把手である。20・21は甑である。20は直接接合しないものを図上で復元したもので、推定口径27.2cm、推定器高28.7cmを測る。体部内面の上位にハケ調整、それ以下にヘラケズリ調整を施す。底部には少なくとも2か所の穿孔が認められる。21は20よりもやや大型の甑で、体部内面の上位にハケ調整、それ以下にヘラケズリ調整またはヘラケズリ調整後にナデ調整を施す。図示した以外にも別個体の甑が1点ある。



第39図 土器溜まりS X15・柱穴S P57出土土器実測図

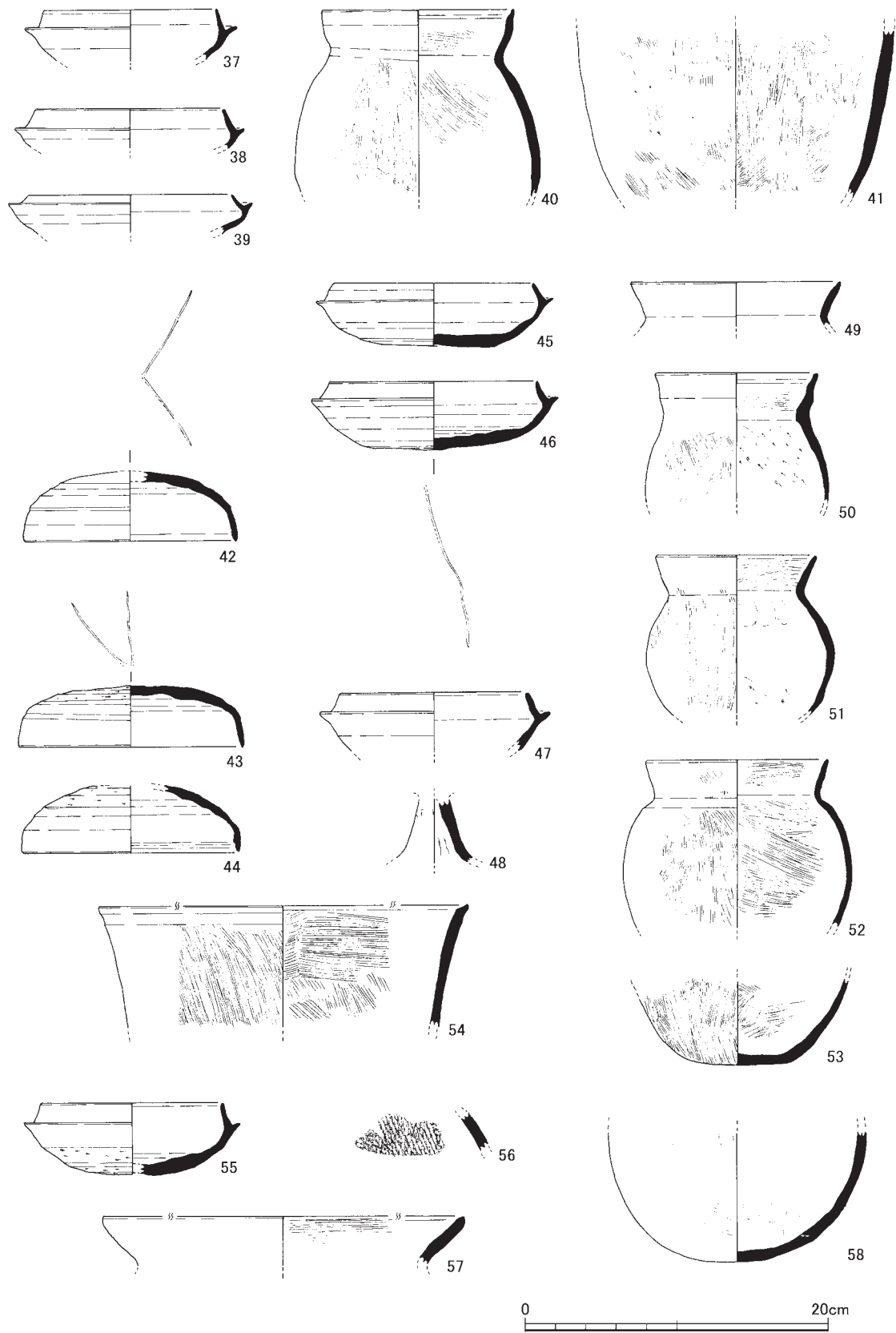
22～32は製塩土器である。口径3.0～6.2cmを測る小型品で、器壁は非常に薄い。22～25は外面にタキ調整を、内面にナデ調整を施す。26～32は内外面ともナデ調整とユビオサエを施す。

土器溜まりS X15(第39図33～35) いずれも土師器である。33・34は杯である。ともに口縁部が斜め外上方に屈曲する。33は底部外面に手持ちのヘラケズリ調整を施す。35は口縁端部をわずかに斜め上方につまみ上げる甑である。内面にヘラケズリ調整を施す。小破片のため分量等は不明である。出土した杯の特徴から陶邑編年のTK208～TK47型式に併行すると思われる。^(注5)

柱穴S P57(第39図36) 土師器杯である。口縁部にやや歪みあり、口径12.2～13.3cm、器高5.1cmを測る。口縁部が斜め外上方に屈曲する。体部内面に丁寧なナデ調整を施す。土器溜まりS X15出土の杯類とおおむね同時期と考えられる。

(2) A2地区

竪穴式住居跡S H281(第40図37～41) 須恵器・土師器などが出土した。出土量は少なく、破片資料を中心に5点を図示した。37～39は須恵器杯身である。いずれも受け部と立ち上がりを有する器形である。37・38にくらべ、39は立ち上がりが若干短い。口径は11.3～13.4cmを測る。小



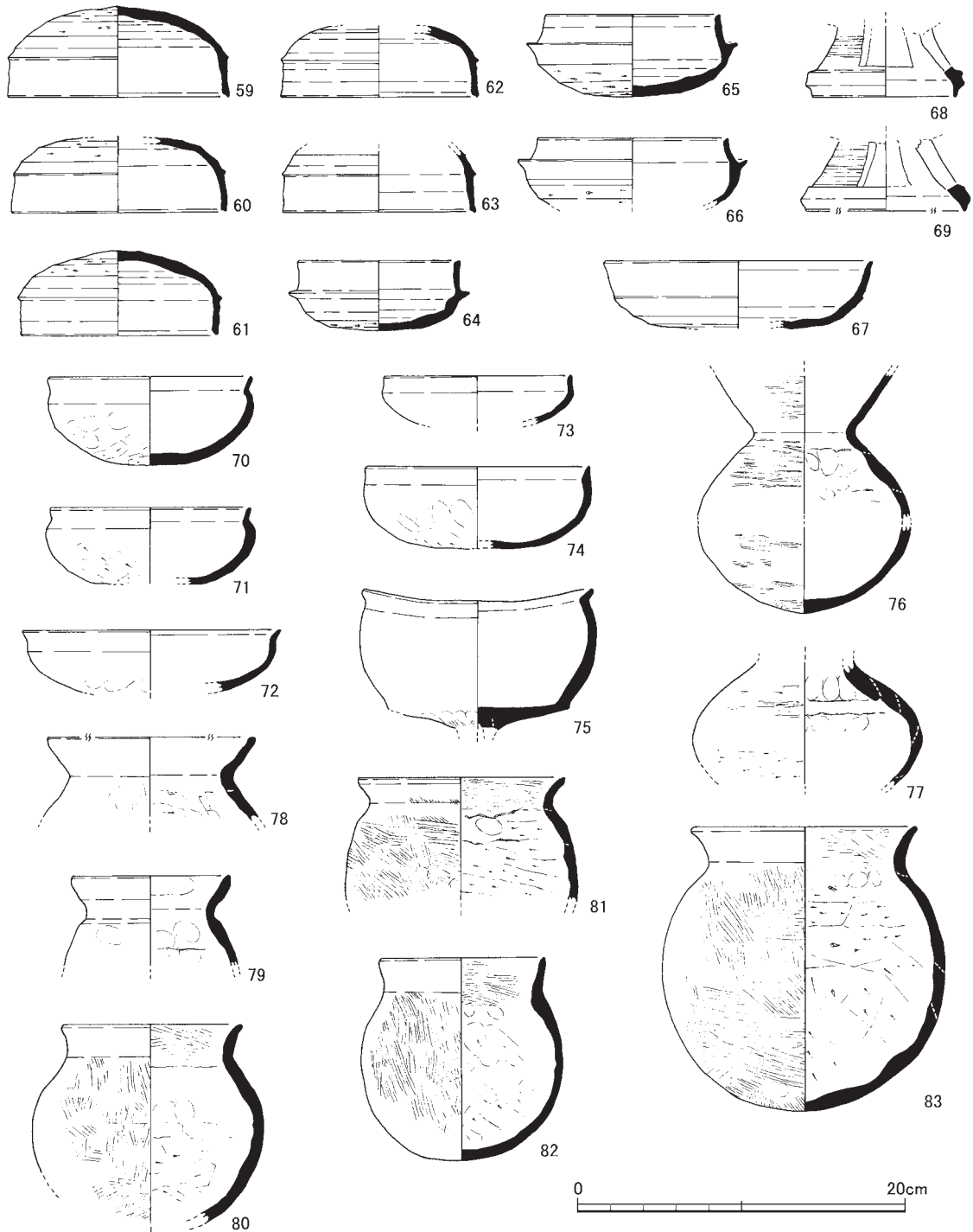
第40図 竪穴式住居跡 S H281・282・330出土土器実測図

片のため時期は不明確な点があるものの、おおむね陶邑編年のTK43型式に位置づけられる。40は土師器甕である。口縁部は内面にハケ調整を、口縁端部から外面にはヨコナデ調整を施す。体部内外面にハケ調整を施す。外面が赤変することから2次焼成を受けたと考えられる。口径12.6cm、残存高12.2cmを測る。41は土師器甕もしくは甑の体部の破片である。甕であれば長胴甕の可能性もある。内外面ともハケ調整を施すが、外面には砂粒の移動が確認でき、ケズリ調整を施している可能性もある。

竪穴式住居跡SH282(第40図42~53) 須恵器・土師器が多数出土した。42~44は須恵器杯蓋である。42・43は口縁端部を丸く納め、口縁部と天井部の境に稜ないし沈線がみられる。どちらも天井部にヘラ記号がみられるが、1/2程度しか残存しないため全容は不明である。44は口縁端部に沈線状の段を持つが、天井部との境に稜や沈線はみられない。3点とも天井部の1/2程度に回転ヘラケズリ調整を施す。43は口径14.8cm、器高4.0cmを測る。45~47は須恵器杯身である。45・46はほぼ同形同大の杯身で、短い立ち上がりの口縁部を持ち、底部外面1/3程度に回転ヘラケズリ調整を施す。46は底部外面にヘラ記号がある。47は45・46にくらべやや厚めの器形を呈する。45は口径13.1cm、器高4.2cmを測る。これらの須恵器蓋杯は、おおむね陶邑編年のTK10型式に位置づけられる。44・47はやや古く位置づけられるかもしれない。48は土師器高杯脚部の小破片で、摩滅のため調整は不明である。49~53は土師器甕である。50・51は体部外面にハケ調整、体部内面にケズリ調整を施し、50は口縁部が段状を呈する。52は体部内外面ともにハケ調整を施す。50~52は口縁部内面に横方向のハケ調整を施す。53はやや平底気味の底部の資料で、内外面ともハケ調整を施す。外面に煤らしき黒色物が付着する。51は口径10.6cm、残存高10.5cmを測る。54は土師器甑の口縁部と思われる。

竪穴式住居跡SH283(第41図59~第42図90、第46図124・125・127) 須恵器・土師器、製塩土器、滑石製白玉、鉄器などが多数出土した。59~69は須恵器である。59~63は、口縁部と天井部の境に稜がみられる杯蓋である。60の口縁端面は水平に近いが、それ以外は内傾する。いずれも天井部の1/2~2/3程度に回転ヘラケズリ調整を施す。残存率はいずれも1/4未満であるが、59は口径13.6cm、器高5.5cmを測る。61は口径12.0cm、器高5.1cmを測る。64~66はやや内傾気味の口縁部と短い受け部をもつ杯身である。底部外面1/3~2/3程度に回転ヘラケズリ調整を施す。65は完形で、口径10.6cm、器高5.0cmを測る。64の断面は赤紫色を呈する。これらの須恵器蓋杯は、おおむね陶邑編年のTK23型式ないしTK47型式に位置づけられる。67は高杯の杯部と推定される。68・69は高杯脚部で、ともに脚部外面にカキメを施す。また長形状のスカシ孔が認められる。4か所に穿孔されていたと推定される。

70~83は土師器である。70~74は杯である。形態的には大きく3つに分かれ、口縁部が斜め外上方に屈曲するもの(70・71)、口縁部が外反するもの(73)、口縁部にヨコナデ調整を施すだけのもの(73・74)がある。70・71の底部外面には手持ちのヘラケズリ調整を施す。70はほぼ完形で、口径12.4cm、器高5.4cmを測る。74は1/3程度が残存し、口径13.6cm、器高5.0cmを測る。75は高杯の杯部で、1/4程度が残存するものの、歪みが著しい。平坦な杯底部から、大きく内湾しながら



第41図 竪穴式住居跡S H283出土土器実測図(1)

杯部が立ち上がり、口縁部が70・71の杯のように斜め外上方に屈曲する。76は長頸壺である。77もほぼ同形態の土師器長頸壺の体部上半の破片と思われる。76は直接接合しない破片を図上で復元した。ともに外面に横方向のヘラミガキ調整を施し、77は体部下半にヘラケズリ調整を施す。76は1/2程度が残存し、推定残存高は14.6cmである。78～83は甕である。小型もしくは中型品が多い。口縁部はいずれも「く」字状に屈曲するが、78はやや内湾気味、79・82はやや直線的、80・81・83は外反しており、口縁部の形状は多様である。79を除き、体部内面にヘラケズリ調整

を施す。

84～90は製塩土器である。口径3.0～4.8cmを測る小型品で、器壁は非常に薄い。いずれも内外面ともナデ調整とユビオサエを施す。90は底部から体部への屈曲部の破片である。

124・125は滑石製の白玉である。直径4.9～5.2mm、厚さ2～3mmを測る。

110は床面直上から出土した鉄鏝である。残存長12.5cm、鏝身部幅1.2cm、茎幅2.5mmを測る。

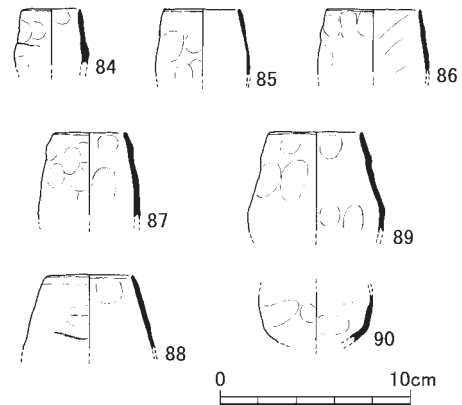
竪穴式住居跡 S H330 (第40図55～58、第46図128)

須恵器・土師器などが出土したが、住居跡そのものが、奈良時代の井戸 S E215によって大きく攪乱されていたため、出土量は非常に少ない。破片資料中心に5点を図示した。55は須恵器杯身である。口径12.0cm、器高4.7cmを測る。口縁端部に沈線状の段がみられる。底部外面2/3程度に回転ヘラケズリ調整を施す。おおむね陶邑編年のMT15型式に位置づけられる。56は甕か壺の体部の小片であるが、外面に縄蓆文がみられる。57は土師器甕の口縁部で内面にハケ調整を施す。58は土師器甕の底部で、丸底である。

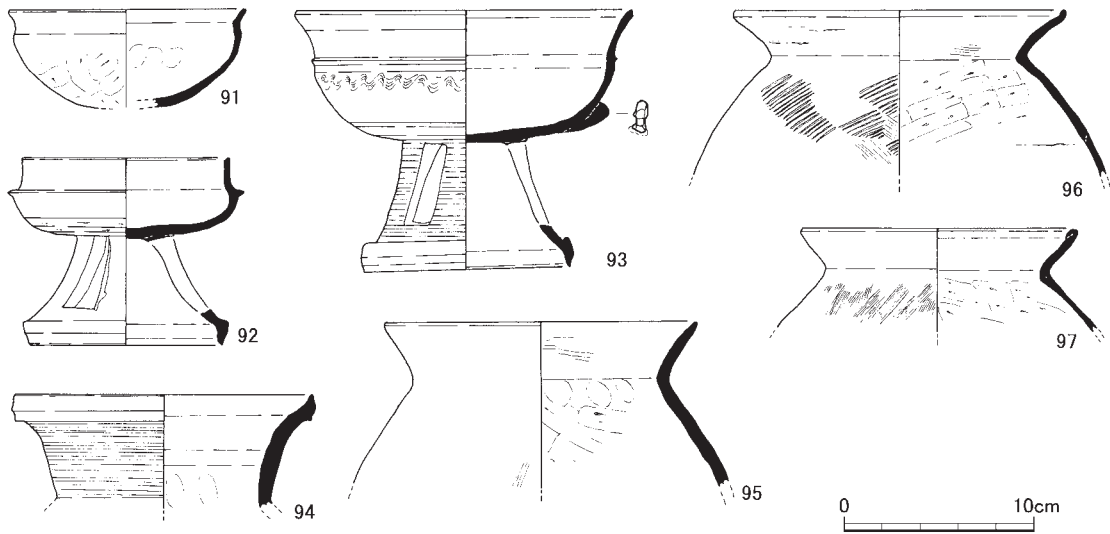
111は朝顔形円筒埴輪の破片である。円筒部の最上段の突帯と、その上部に頸部に向かってすばまる肩部が依存する。肩部外面に縦ハケ調整を施す。

土器溜まり S X199 (第43図91～95) 図示したのは須恵器3点、土師器2点であるが、出土量はもう少しある。91は土師器杯である。口縁部が斜め外上方に屈曲する。体部外面はナデ調整とユビオサエを施す。口径12.4cm、残存高5.2cmである。92は須恵器の有蓋高杯である。口縁部はほぼ直立し、短い受け部を有する。杯底部外面に回転ヘラケズリ調整を施した後、脚部を接合する。脚部には3方向に透かしを穿つ。口径11.0cm、器高9.8cm、底径10.2cmを測る。93は須恵器の無蓋高杯である。杯部中位に凸線状の稜があり、下半に波状文を施す。脚部には3方向に透かしを穿ち、外面にカキメを施す。口径17.7cm、器高13.6cm、底径10.8cmである。92・93は形状などからおおむね陶邑編年のTK23型式に位置づけられよう。94は須恵器壺の口縁部と思われる。頸部外面にカキメを施す。95は土師器甕である。摩滅が著しく調整は不明瞭である。

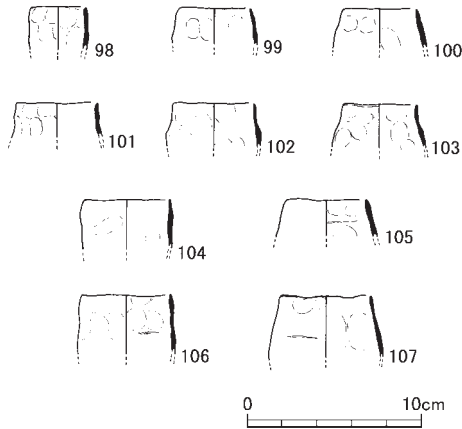
土器溜まり S X321 (第43図96・97) 古式土師器2点と弥生土器1点が出土した。96は庄内式甕である。口縁端部をつまみ上げるが、やや丸く納めている。外面に細筋のタタキ調整、体部内面にヘラケズリ調整を施す。ヘラケズリ調整は頸部まで達する。口径17.5cm、残存高8.5cmである。97は布留式甕である。口縁端部内面が肥厚するものの、膨らみはやや弱い。体部外面にハケ調整、体部内面にケズリ調整を施す。ケズリ調整は頸部まで達しない。口径14.4cm、残存高5.4cmである。このほか、図示していないが弥生土器の甕がある。体部外面にタタキ調整を施す。体部内面はやや摩滅しているが、ナデ調整を施す。これら3点がほぼ重なって出土したことから同時期のものである可能性が高いと判断した。時期は資料数が少ないため不明確な点もあるが、庄内式甕や布



第42図 竪穴式住居跡 S H283
出土土器実測図(2)



第43図 土器溜まり S X 199・321出土土器実測図



第44図 土坑 S K 280出土土器実測図

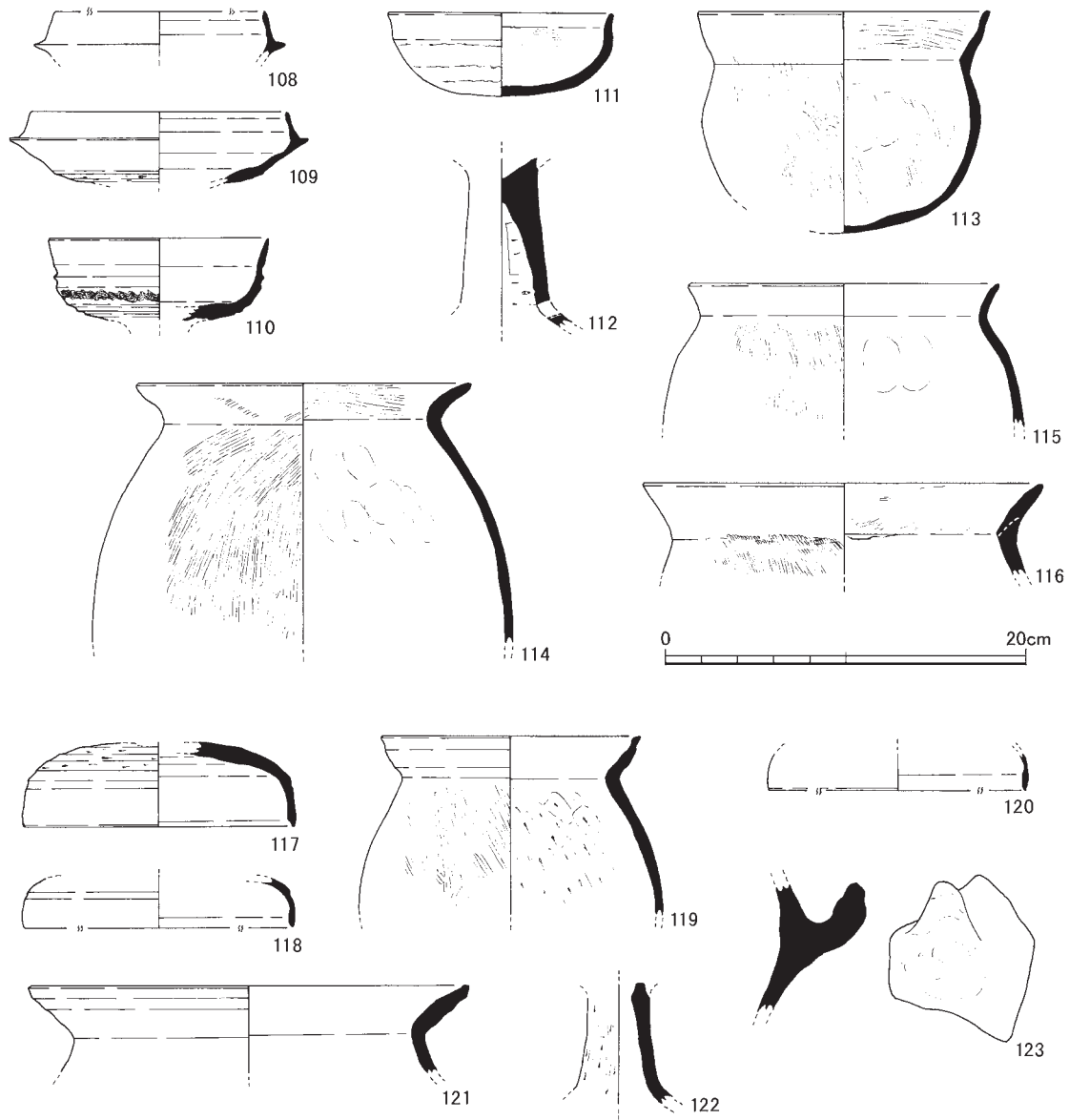
留式甕の形態から布留1式を前後する時期のものであろう。^(注6)

土坑 S K 280 (第44図98~107) 製塩土器のみが出土した。口径3.2~5.3cmを測る小型品で、器壁は非常に薄い。いずれも内外面にナデ調整とユビオサエを施すが、全体に摩滅が著しい。詳しい時期は不明であるが、竪穴式住居跡 S H 50や S H 283で出土したものと大きさや形態に大きな差がみられないので、これらの住居跡とほぼ同時期と推定される。

(3) B 地区

竪穴式住居跡 S H 99 (第46図108~116) 須恵器や土師器などが出土した。B地区で検出した住居跡としては遺物が多く出土しており、9点を図示した。108~110は須恵器、111~116は土師器である。108・109は杯身である。わずかに内傾する立ち上がりと、短く水平に延びる受け部を持つ。109は底部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。110は高杯杯部である。杯底部外面に脚部の剥離痕が認められる。口縁部中位に稜がみられ、下半部には波状文を施す。口径12.1cm、残存高4.5cmを測る。これらの須恵器杯身は、おおむね陶邑編年の T K 10型式ないし M T 85型式に位置づけられる。111は杯である。口縁部にヨコナデ調整を施して外反させる。体部から底部にかけての外面には粘土紐の接合痕が残る。112は高杯の脚柱部である。113~116は甕である。117は内湾気味の口縁部に、球形の体部を呈する。内外面とも粗めのハケ調整を多用する。口径16.2cm、器高12.3cmを測る。114~116は口縁部が単純「く」字状を呈する。体部の形状は不明であるが、114は長胴気味の体部である。

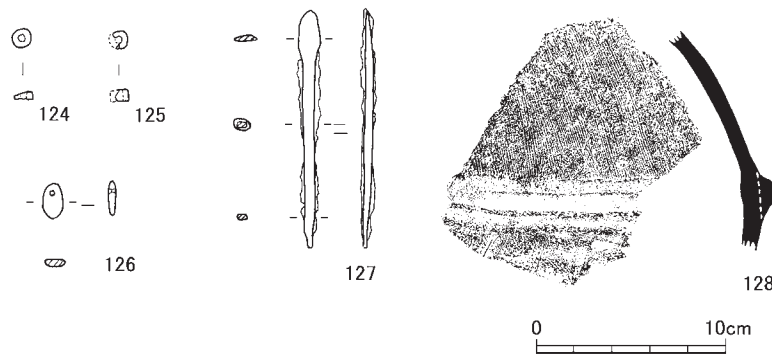
竪穴式住居跡 S H 100 (第46図117~119) 須恵器や土師器の破片が少量出土した。後述する S



第45図 竪穴式住居跡SH99・100・105・111出土土器実測図

H111と重複するため、SH111の遺物が混入している可能性もある。117・118は須恵器杯蓋である。117は口縁端部に段を持ち、口縁部から天井部への境界にはわずかに突出した稜がみられる。天井部の2/3程度に回転ヘラケズリ調整を施す。口径15.0cm、残存高4.6cmである。これらの須恵器杯蓋は、おおむね陶邑編年のTK10型式に位置づけられる。119は土師器甕で、縁部が内湾気味に立ち上がり、端部をやや外方につまみ出す。端部はやや内傾気味となる。体部外面にハケ調整、内面にケズリ調整を施す。口径14.4cm、残存高10.9cmである。

竪穴式住居跡SH105(第46図122・123) 出土遺物は少量であり、図示できたのは土師器2点のみである。122は高杯の脚部である。内外面ともヘラケズリ調整が施される。123は把手付甕の把手である。出土遺物の時期は不明であるが、他の住居跡とほぼ同じ古墳時代中期後半から後期におさまるものと思われる。



第46図 玉類・鉄製品・埴輪実測図

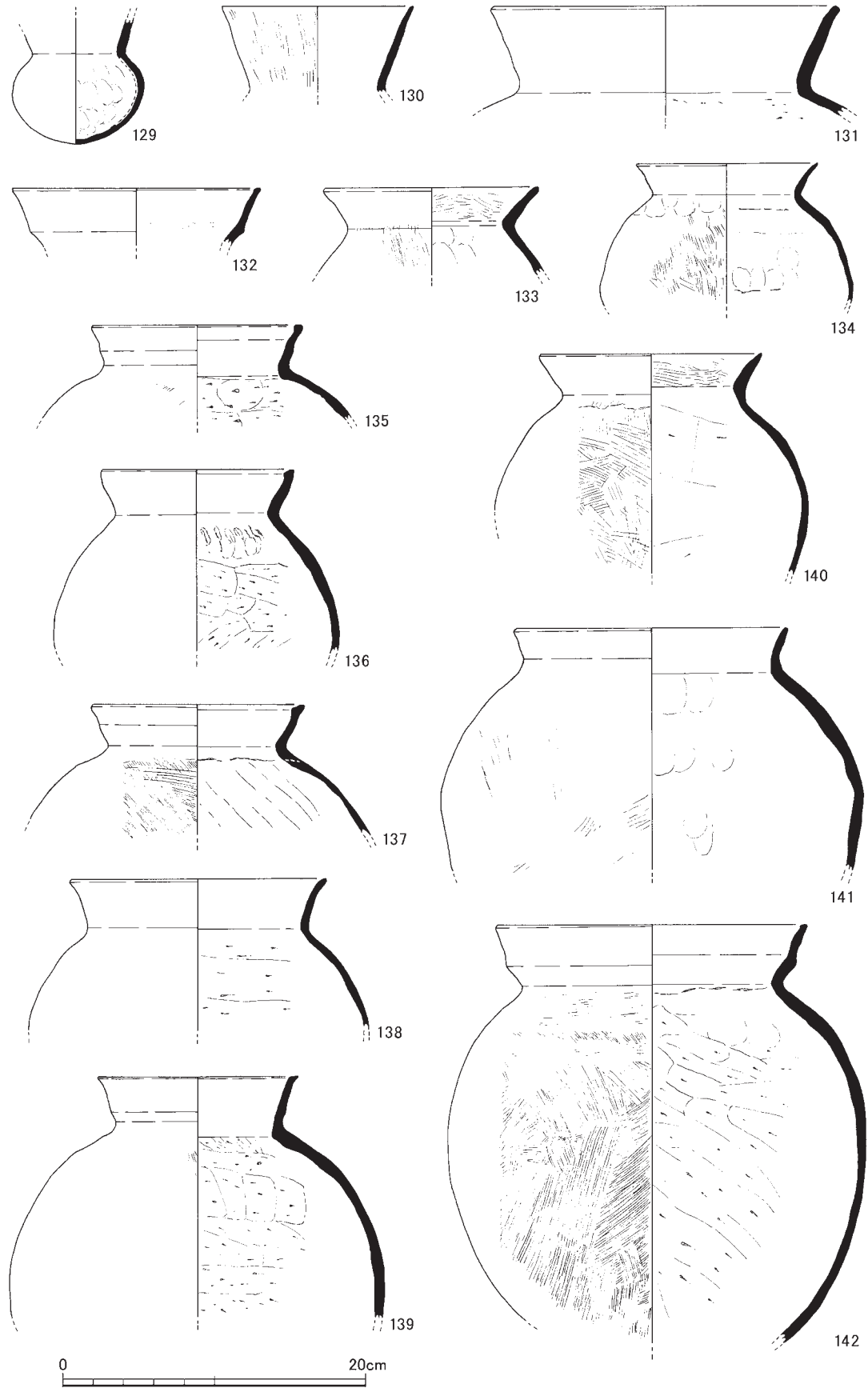
竪穴式住居跡SH111

(第46図120・121) 120は須恵器杯蓋と思われる小破片である。口縁端部は丸く納める。小破片のため時期の決定にはいたらないが、陶邑編年のTK10型式以前には位置づけられない。121

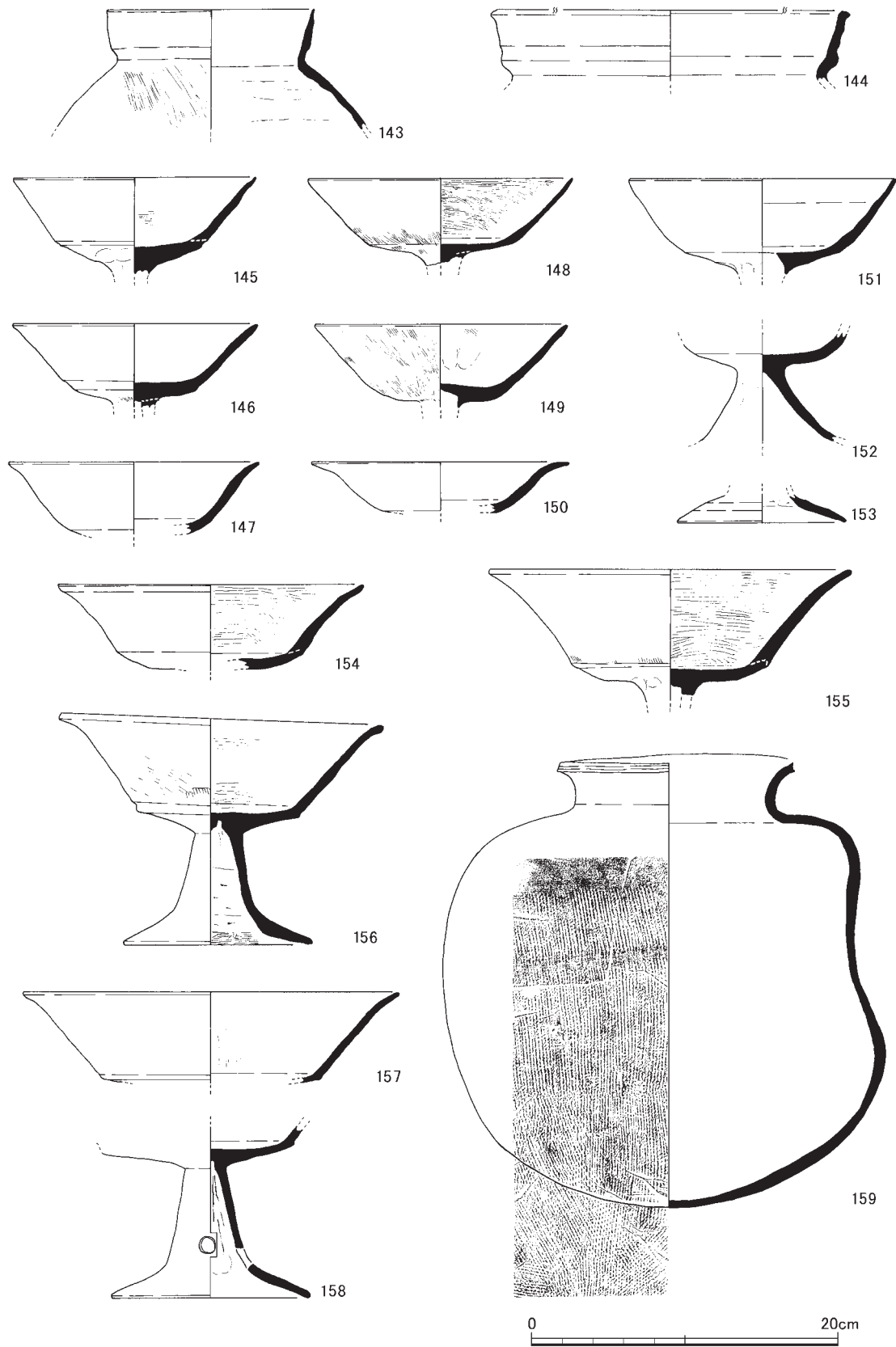
は土師器甕で、口縁端部をややつまみ上げる。詳細な時期は不明であるが、SH100に先行することから古墳時代後期前半に位置づけられる可能性がある。

土坑SK126(第47図129～第48図159) 129～158は土師器、159は須恵器である。129は小型丸底土器である。口縁部を欠損し、全体に摩滅気味である。130・131は直口壺である。130は口径12.6cmを測る小型品、131は口径22.4cmを測る大型品である。132は複合口縁を呈する壺と推定される。133～144は甕で、口縁の形状や体部の調整が多様である。135～137は口縁部内面が肥厚し、体部内面にケズリ調整を施す。136は口径12.6cm、残存高12.1cmを測る。133・134・138～141は、口縁部が外上方、もしくは外反気味に「く」字状に屈曲する口縁を呈する。133・134・141は外面にハケ調整、内面にナデ調整を施す。138・139は内面にヘラケズリ調整を施すが、外面は摩滅のため不明瞭である。140は外面にハケ調整、内面にヘラケズリ調整を施す。141は内外面とも摩滅気味であるが、外面はハケ調整、内面にナデ調整を施す。139は口径13.3cm、残存高15.9cmを測る。142～144は複合口縁を呈する甕である。142は体部外面にハケ調整、内面にヘラケズリ調整を施す。口径20.6cm、残存高27.5cmを測る。甕類は外面に煤の付着するものが多い。145～158は高杯である。145～149は斜め上方に開く杯部を有するほぼ同形同大の高杯である。口径15.9～17.3cm、杯部の高さ4.7～5.7cmを測る。145・148は内面にハケ調整を施す。148・149は外面にハケ調整を施す。150は杯口縁部が大きく外反し、ほかの個体にくらべ浅い器形である。152は杯部から脚部にかけての資料である。153は高杯もしくは器台の脚部と思われる。150・154はやや中型の高杯である。150は杯部の内外面ともナデ調整を施すが、154は杯部の内面にハケ調整を施す。150は口径16.8cm、残存高3.3cmを測る。155～157は大型の高杯である。杯底部から杯口縁部への立ち上がり部分に明瞭な稜を持つ。155は口径23.6cm、残存高8.5cmを測る。156の脚柱部内面は横方向にケズリ調整を施す。口径21.8cm、器高15.1cm、底径12.4cmを測る。157と158は同一個体と思われる。158は円形の透かし孔が3か所に穿たれる。脚柱部内面は不調整で、シボリ痕が残る。

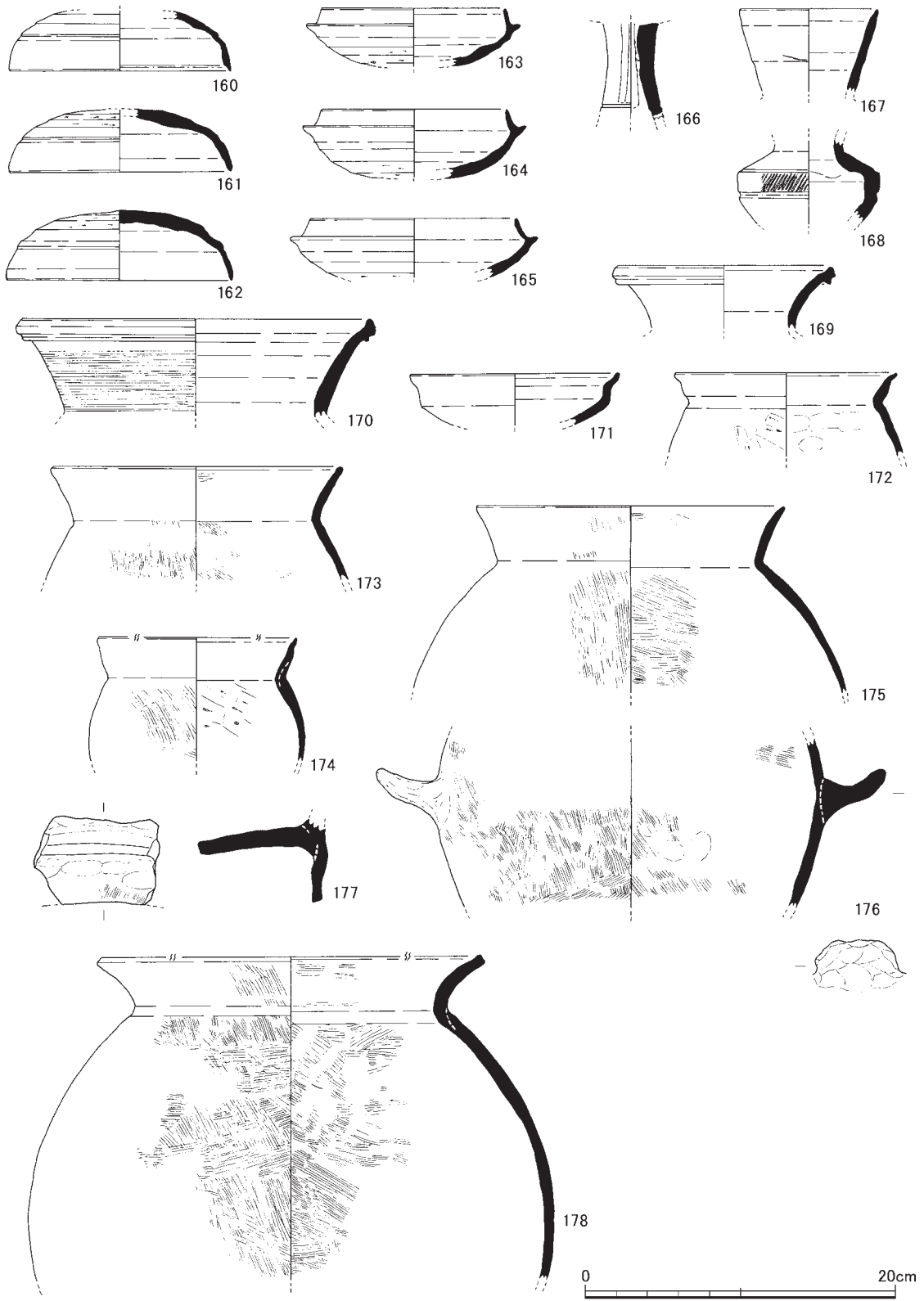
159は須恵器壺である。大きく焼け歪むが、口径15.2～15.7cm、器高29.6cmを測る。口縁部から肩部外面までは回転ナデ調整、体部外面に縄蓆文によるタタキ調整を施し、体部内面を丁寧なナデ調整で仕上げる。



第47図 土坑 S K126出土土器実測図(1)



第48図 土坑 S K126出土土器実測図(2)



第49図 土坑 S K91・102出土土器実測図

土坑S K 91 (第49図160～177) 須恵器・土師器が多数出土したが、完形に復元できるものはほとんどなかった。160～170は須恵器、171～177は土師器である。160～162は杯蓋である。160は口縁端部内面に段をもち、161・162は口縁端部を丸く納める。口縁部と天井部の境に稜ないし沈線がみられる。3点とも天井部の2/3程度に回転ヘラケズリ調整を施す。161は口径14.6cm、器高4.5cmである。163～165は須恵器杯身である。163・164はほぼ同形同大の杯身で、内傾しながら立ち上がる口縁部を持ち、底部外面1/2程度に回転ヘラケズリ調整を施す。164は口径12.0cm、残存高4.4cmである。これらの須恵器蓋杯は、おおむね陶邑編年のMT85型式ないしTK43型式に位置づけられる。166は長脚2段透かしの高杯脚部である。167は提瓶の口縁部と推定される。168は甕の体部片と思われるが、残存する破片に透かし孔は認められない。体部中位に櫛状工具による刺突文を施し、その上下に1条ずつの沈線を施す。体部最大径は9.2cmを測る。169・170は壺の口縁部である。170は口縁部外面にカキメを施す。口径22.6cm、器高6.1cmである。171は杯である。口縁部を上方に屈曲させた後、端部を若干つまみ上げる。172～175は甕である。172・175は口縁部がやや外反気味のもの、173は口縁端部内面がわずかに肥厚するもの、174は内湾気味の口縁部の端部を少しつまみ上げたものなど、さまざまな口縁部の形状ものがある。175は口径19.9cm、残存高11.9cmである。176は把手付甕の体部の破片である。体部最大径(把手を除く)は25.0cmを測る。177は竈の底部分の破片である。

土坑S K 102 (第49図178) 土師器甕1点が出土した。口縁端部をややつまみ上げる。内外面ともハケ調整を施す。推定口径24.5cm、残存高20.8cmを測る。

(筒井崇史)

2)奈良時代

奈良時代に属する遺物の大半はB地区で出土しており、A地区で出土した遺物は非常に少ない。これはA地区の奈良時代の遺構面が遺存していなかったためであり、出土した遺物をみると、ある程度遺構が存在していた可能性は高い。なお、奈良時代の遺物については、遺物の種類ごとに報告することにした。

(1)木簡

今回の調査では、B地区の土坑S X 96から木簡3点と削屑41点が出土した。これらは多量の土器や木片、炭化物などとともに出土したことや、持ち帰った土砂の水洗中に確認できたため、出土位置を記録できたものはなく、出土層位を把握したのみである。以下、出土木簡および削屑の概要を述べる。

①木簡(第50図、巻頭図版第2、図版第32)

179は木屑層(第13層)もしくはその直下から出土した。長方形の板材に墨書されたもので、下端は折れて欠損している。現存の長さ19.0cm、幅1.1cm、厚さ1～4mmである。木簡の上半部は何度も削られたようで薄くなっている。樹種同定の結果、ヒノキ科ヒノキ属である。

釈文は「讃岐國鷓足郡少領□」と読める。□以下は削り取られているため不明である。少領であった人物の名前もしくは物品名が書かれていたものと考えられる。長屋王家木簡にも「宗形郡

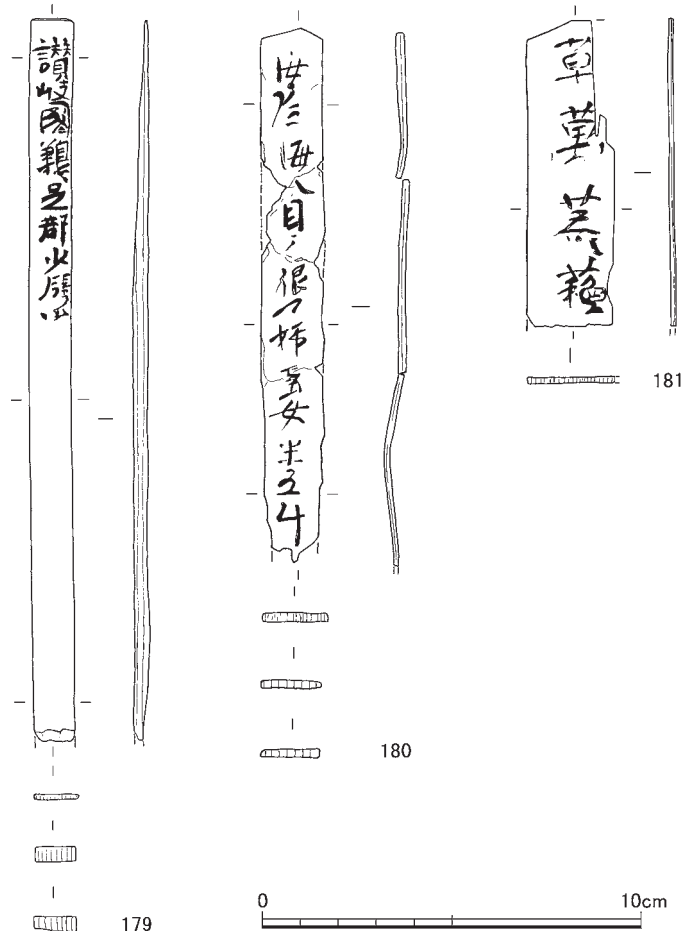
大領鯛醬」という郡司名木簡が見られ、郡司名の下には物品名が書かれている。本木簡については、報告にあたりいずれか確定することはできなかった。

讃岐国鶴足郡は、現在の香川県丸亀市を中心に、坂出市や綾歌郡の一部を含む地域にあたる。この木簡の具体的な内容は不明であるが、鶴足郡から上狛北遺跡にあった人物、あるいは施設に送られた文書木簡と考えられる。この木簡により、上狛北遺跡と讃岐国鶴足郡との間で何らかの交流があったことがうかがわれる。

180は木屑層(第13層)から出土したが、出土した土砂には多くの炭化物が含まれていたことから直上の炭層(第10層)に接していたものと思われる。上端は圭頭状である。下端は折れて欠損しているが、尖っている可能性が高い。現存の長さ14.1cm、幅1.7cm、厚さ2.5mmである。なお、全体が4つに折れている。形状および内容から荷札木簡と考えられる。樹種同定の結果、スギ科スギ属スギである。

釈文は「海戸主海八目戸服部姉虫女米五斗」と読める。1字目の「海」は貢進元の地名を略記したものと考えられる。「海」という表記から「海部郷」を表す可能性が高い。「海八目」は戸主、「服部姉虫女」は「海八目」の「戸」、つまり戸口の名前と考えられる。「八」は左側のはらいの墨痕が不明であったが、字形から「八」と判断した。木簡の内容は、「海部郷」の戸主「海八目」の戸口である「服部姉虫女」が「米五斗」を貢進したというものであろう。「海部郷」は、平安時代に編纂された『倭名類聚鈔』によれば、伊勢国川曲郡をはじめ、尾張国海部郡、越前国坂井郡、丹後国熊野郡、安芸国佐伯郡、阿波国那珂郡、筑前国伊都郡などで確認できるが、いずれの海部郷であるかは不明である。

公式な荷札木簡の場合、その書式は「国名+郡名+郷名+人名+税目+品名+数量」であることが多いが、本木簡では郷名を略して書いているほか、税目にあたる部分が記載されていない。このように、国郡名や人名が省略される簡略なものには長屋王家木簡でも見られる。本木簡のように地名を略式で書く例は、長岡京跡や西大寺食



第50図 木簡実測図

堂院推定地でわずかにみられる。^(注7)長岡京跡の例は越前国坂井郡海部郷、西大寺食堂院の例は越前国足羽郡小名郷の荷札木簡で、前者は郷名を「海」、後者は「少」と略して書いている。両者の共通点が越前国であることを積極的にとらえるならば、この木簡の「海部郷」は越前国と考えることもできる。なお、平城宮内裏東北官衙域の土壙S K 820出土木簡群の中に、讃岐国山田郡に「海郷」という郷が存在したことを示す木簡が出土しており、^(注8)上述の木簡1と本木簡がかかわりをもつ可能性もある。また、貢納物の貢進者は男性である例が圧倒的に多く、女性である例は非常に^(注9)珍しい。

本木簡は、地名を「海」1文字で表現するなど書式が簡略である点や女性が貢進している点などから、公式なものとは考えにくい。同様の書式の木簡が出土している遺跡の性格と考え合わせると、貢進先として、寺院や貴族の邸宅など私的な施設の可能性が考えられ、当遺跡の性格を考える上で重要な資料といえる。

181は木屑層から出土した。上端は圭頭状で、下端および右側は欠損している。現存の長さ8.1cm、幅2.3cm、厚さ1.5mmである。樹種同定の結果、ヒノキ科ヒノキ属である。

釈文は「草萬荒蘇」と読めるが、記載されている内容の意味は不明である。中国の漢籍等を写した可能性もあるが、現時点では草かんむりの字を練習した習書木簡と考えておきたい。

②削屑(図版第33 703～736)

木簡と同じく炭層や木屑層から出土しており、削屑どうして接合するものも含め合計41点確認した。墨痕が確認できる34点を図版に示した。「長長」(719)や「連連」(721)、「段段段」(705)など同じ字を繰り返し書いているものが多いことから習書木簡の削屑と考えられる。ほかに「言偏」と考えられるもの(715・724)や「しんにょう」(703・712)がある。706は「多」または「移」の一部の可能性もある。713は「ぎょうにんべん」が確認できるが、字は確定できない。731は「のぎへん」の有無が不明であるが「稲」か。削屑のうち、704・716・726の3点は樹種同定の結果、ヒノキ科ヒノキ属である。

なお、釈文や出土層位については付表1を参照されたい。

(松尾史子・筒井崇史)

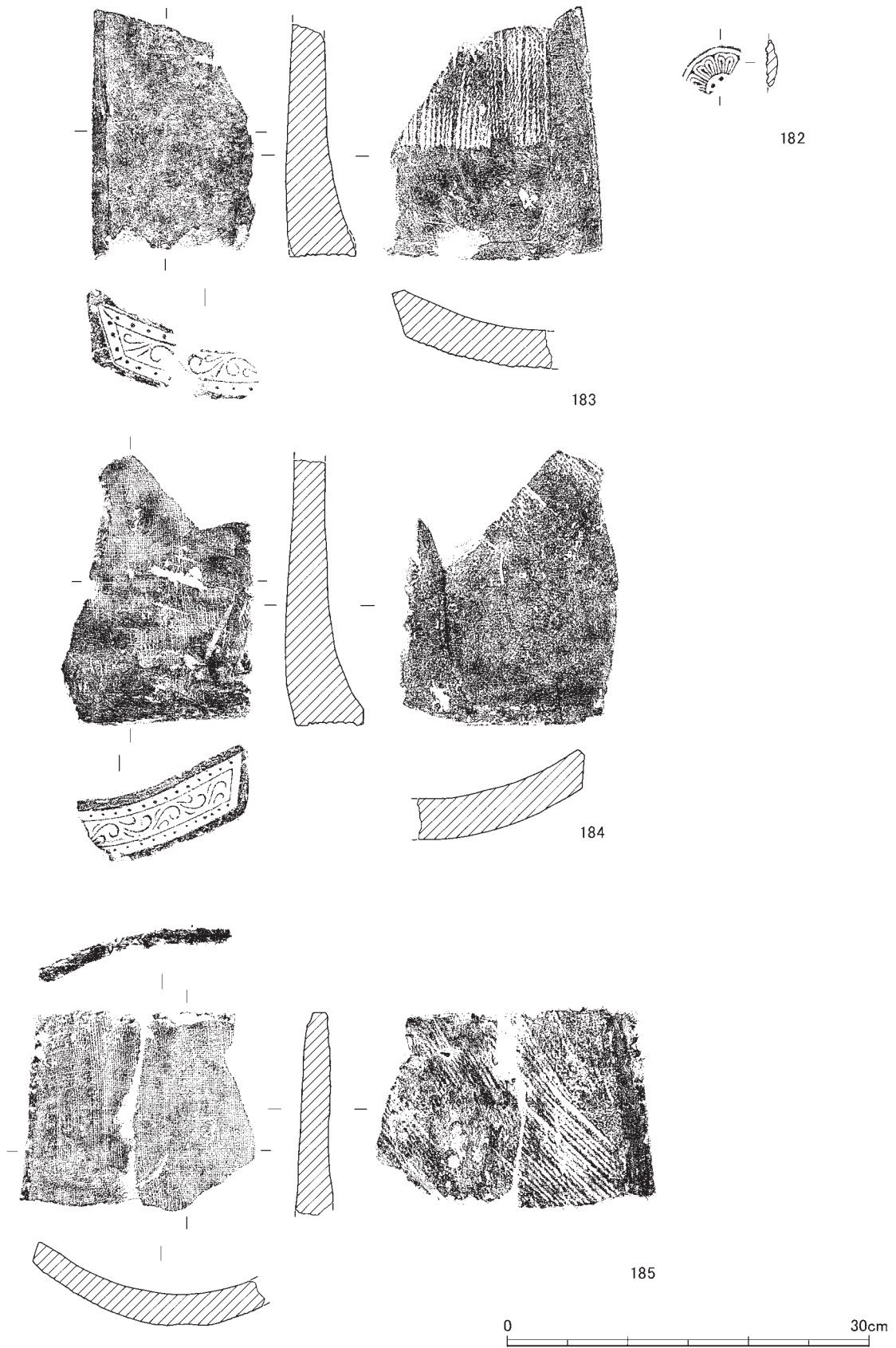
(2)瓦埴類

B地区の土坑S X 96をはじめ、溝S D 21やA地区の井戸S E 215などから出土した。整理箱にして8箱ほどあるが、大半は丸・平瓦である。鬼瓦などの道具瓦はなく、瓦質の埴が2点出土した。

①軒瓦(第51図)

軒丸瓦1種1点(182)、軒平瓦2種各1点(183・184)が出土した。これらは、瓦当文様、製作技法、胎土、焼成などから、恭仁宮跡出土の軒瓦との共通性がみられた。以下、恭仁宮跡出土軒瓦と比較しながら、軒丸瓦・軒平瓦の順に述べる。^(注10)

182は複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。中房と内区文様の一部が残存する。恭仁宮KM02B型式や平城宮6282Da型式^(注11)と同範と考えられる。KM02B型式は、恭仁宮跡の内裏地区出土のKM02A型



第51図 軒瓦実測図

式と瓦当部と筒部との接合法がほぼ共通するとされるが、182は瓦当の表面のみの残存のため、瓦当裏面の調整法などの詳細は不明である。B地区土坑S X96の最上層から出土した。

183は均整唐草文軒平瓦である。中心飾はなく、左側のみ残存する。蕨手3葉を3転半させる。表面は燻し風の黒灰色で、内部は灰白色を呈する。焼成はやや軟質である。20cmほどが残存するが、凹面の布目圧痕は全体的に横ナデで擦り消されており、布目が一部残るのみである。顎部は、いわゆる曲線顎Ⅱ^(注12)である。凸面は、瓦当側端部を幅1cmほど面取りして顎部を成形し、顎部から7cm内外の凸面を縦ナデで整形している。その後、縦位の比較的粗い縄目叩きを施し、その上に斜位の縄目叩きを加えている。側面は、凹面側を深く削っている。凸面側は、整形の際に側面に近いところの縄目叩きは一部擦り消されている。B地区南端付近の遺物包含層から出土した。

183は恭仁宮KH01型式や平城宮6691A型式と同範である。KH01型式は、恭仁宮跡の大極殿地区と内裏地区で出土しているが、瓦当文様の精微さ、凸面の縄目の粗さ、凸面の整形技法の手順などの違いから明確に二分されている。183は内裏地区出土のKH01型式と同じ特徴を持ち、瓦当文様の線が比較的丸みを帯びて太く、凸面をナデ整形してから縦位の縄目叩きを施し、その上に斜位の縄目叩きを加えている。KH01型式は、恭仁宮跡において第2群軒瓦に分類され、恭仁宮造営に際して新調されたものと考えられている。

184は均整唐草文軒平瓦である。中心飾はなく、右側のみ残存する。蕨手3葉を5回転させる。灰褐色を呈し、焼成は堅緻である。184は22.1cmが残存するが、凹面の布目圧痕は全体的に残っている。しかし、瓦当側のみ幅3.5cmにわたって横ケズリを施し、布目を擦り消している。顎部はいわゆる曲線顎Ⅱである。凸面は、斜位の縄目叩きを施し、瓦当側端部1.5cm幅を面取りして、顎部から10cm内外の凸面を縦ケズリすることで、縄目が一部擦り消されている。側面は、凹面側を深く削っている。S X96の埋土上層(炭層よりも上)から出土した。

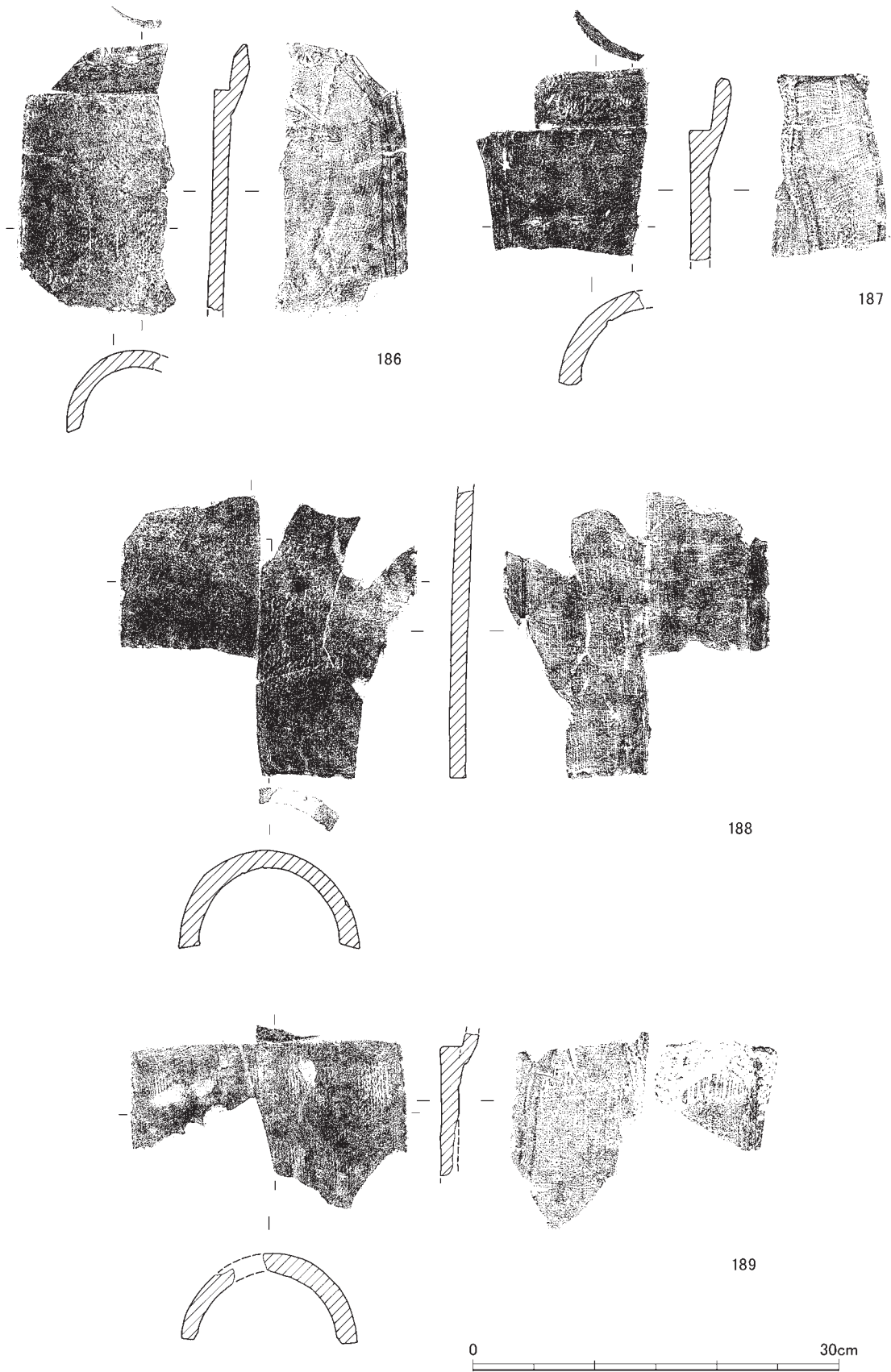
184は恭仁宮KH04A型式や平城宮6721C型式と同範である。ところで184と瓦当文様だけでなく、平瓦部の整形技法も共通するのは、6721C型式の方である。KH04A型式とは、凹面側の側面を深く削ることは共通するが、凹面の布目圧痕を横ナデで全体的に擦り消し、凸面に縦位の縄目叩きを施しており、この点が異なる。6721C型式は、平城宮瓦編年のⅢ-1期において主体となるものの、恭仁宮跡において同範であるKH04A型式が出土していることから、恭仁宮造営時に新調されたもの^(注13)と考えられている。

185は凹面の布目圧痕を擦り消さず、凸面に斜位の縄目叩きを施すことから、184と同一型式の軒瓦に接合する平瓦部と考えられる。B地区溝S D21中央部のほぼ最上層から出土した

②丸瓦(第52図)

上狛北遺跡で出土した丸瓦の大半が破片資料であるため型式分類には至らなかった。ここでも恭仁宮跡出土丸瓦との比較しながら、個々の説明を行う。

出土した丸瓦で、全長が分かるものはないが、すべて粘土板巻き付けによる成形の玉縁式丸瓦である。玉縁部接合技法の分かるものは、大脇潔氏分類のBまたはC1手法^(注14)である。表面が燻し風



第52図 丸瓦実測図

の黒灰色で、内面が灰白色のやや軟質のものと、灰褐色で堅緻なものがある。凹面の糸切り痕・布目圧痕は擦り消さない。凸面は、縦位の縄目叩きの後、丁寧にナデが施され、ほとんど擦り消されている。側面は大脇潔氏分類のc手法で、凹面側を深く削って面取りする。186は筒部径が12cm前後で、玉縁部の長さが3.8cmである。187～189は筒部径が15cm前後で、187は玉縁部の長さが4.5cmである。

恭仁宮跡出土の丸瓦の大きさには、筒部長と筒部径とで相関関係があり、b型式丸瓦は、筒部長が35cm以上で筒部径が16.5～18cmで大型なのに対し、b型式以外の丸瓦は、筒部長が35cm未満で筒部径が15cm未満である。上狛北遺跡の丸瓦は、すべて後者のb型式以外の丸瓦と共通する。また、b型式丸瓦は、筒部端縁を面取り風に何回も横ケズリするという特徴があるが、188にはそのような整形技法はみられない。このようなことから、上狛北遺跡で見られる丸瓦は、b型式以外の丸瓦と共通性があることが分かる。186は土坑S X96の炭層～木屑層から出土した。187・189はS X96の炭層よりも上の堆積層で出土した。188はS X96の整地層から出土した。

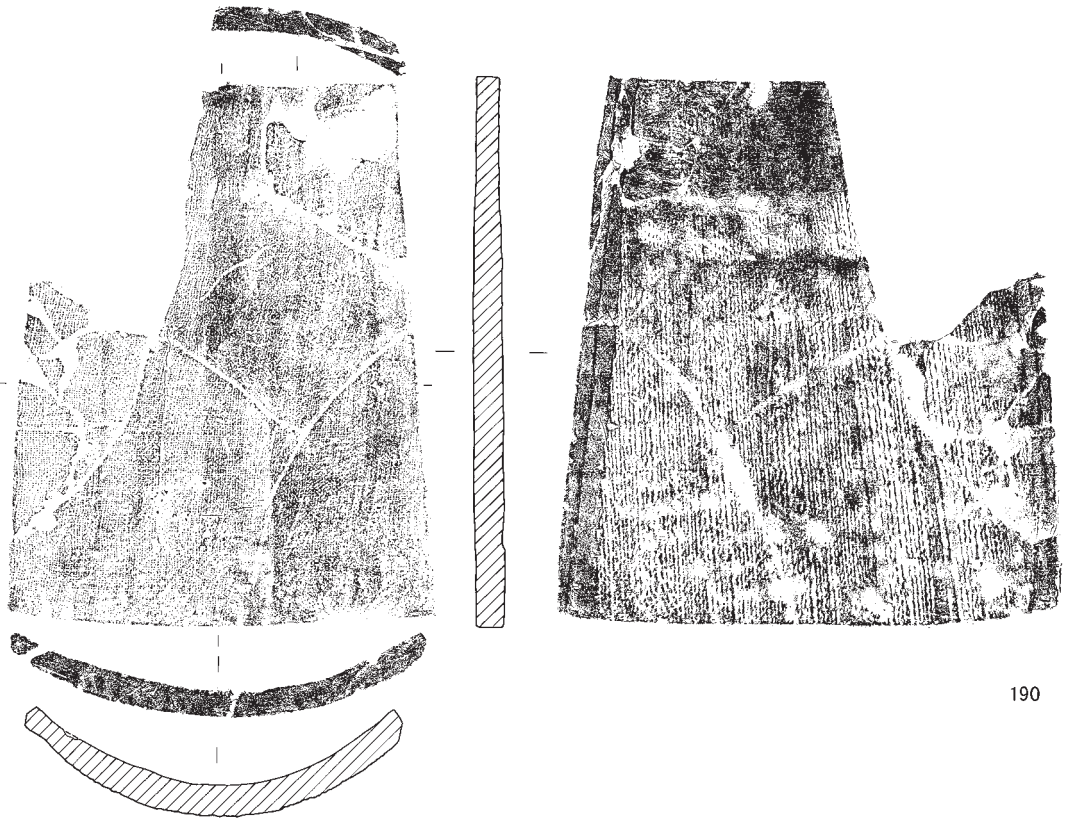
③平瓦(第53～56図)

恭仁宮では、平瓦の成形法を大別基準として、細部の整形法・叩き目・胎土・焼成などを含めた技法の連鎖型としての製作技術体系を「型式」とし、B・C・D I～IV・E・F・Gの9型式に大別している。上狛北遺跡では、型式設定に耐えうる完形品、およびそれに近い資料に恵まれたため、恭仁宮都と同様の方法をもとに型式設定を行い、大きく3つに分類した。

1類(第53図190～第54図193) 全長が36cm前後で、台形を呈する。粘土板による成形である。表面は燻し風の黒灰色で、焼成がやや軟質なもの、灰褐色で焼成が堅緻なものがある。凹面の糸切り痕・布目圧痕は擦り消さない。幅3～3.5cmの杵板痕が観察でき、桶巻作りの可能性がある。凸面は、縦位の縄目叩きを施しており、所々、条の不整合が見られる。狭端側8～11cm内外を横ナデして叩き目を擦り消している。190・191は土坑S X96の埋土上層から炭層にかけて出土した。192は溝S D21南部で出土した。193はS X96から出土したが、詳細な層位は不明である。

2類(第55図194～第56図196) 全長が30cm前後で、ほぼ長方形を呈する。粘土板による成形である。表面は燻し風の黒灰色で、内部は灰白色を呈する。焼成はやや軟質である。凹面の糸切り痕・布目圧痕は擦り消さない。194は、凹面の右側面に沿って、紐状の圧痕が見られ、分割線と考えられる。また、195や196は幅4～5cmの杵板痕が観察でき、桶巻作りの可能性がある。凸面は、縦位の縄目叩きを施し、狭端側5cm内外を横ナデして叩き目を擦り消している。縦位の縄目叩きに条の不整合はみられない。側面は、凹面側を深く削るが、195はそれがみられない。194は第1次調査第2トレンチで検出したS D21の最上層で出土した。195・196はS X96の埋土上層から炭層にかけて出土した。

3類(第56図197) 197は、狭端側が残存し、隅の角度がほぼ直角であるので、ほぼ長方形を呈するものと考えられる。粘土板による成形である。全長が分かるものは無かった。第2類と同様に、表面は燻し風の黒灰色で、内部は灰白色を呈する。焼成はやや軟質である。凹面の糸切り痕・布目圧痕は擦り消さない。杵板痕はみられない。凸面は、比較的粗い縦位の縄目叩きを施す。条



190



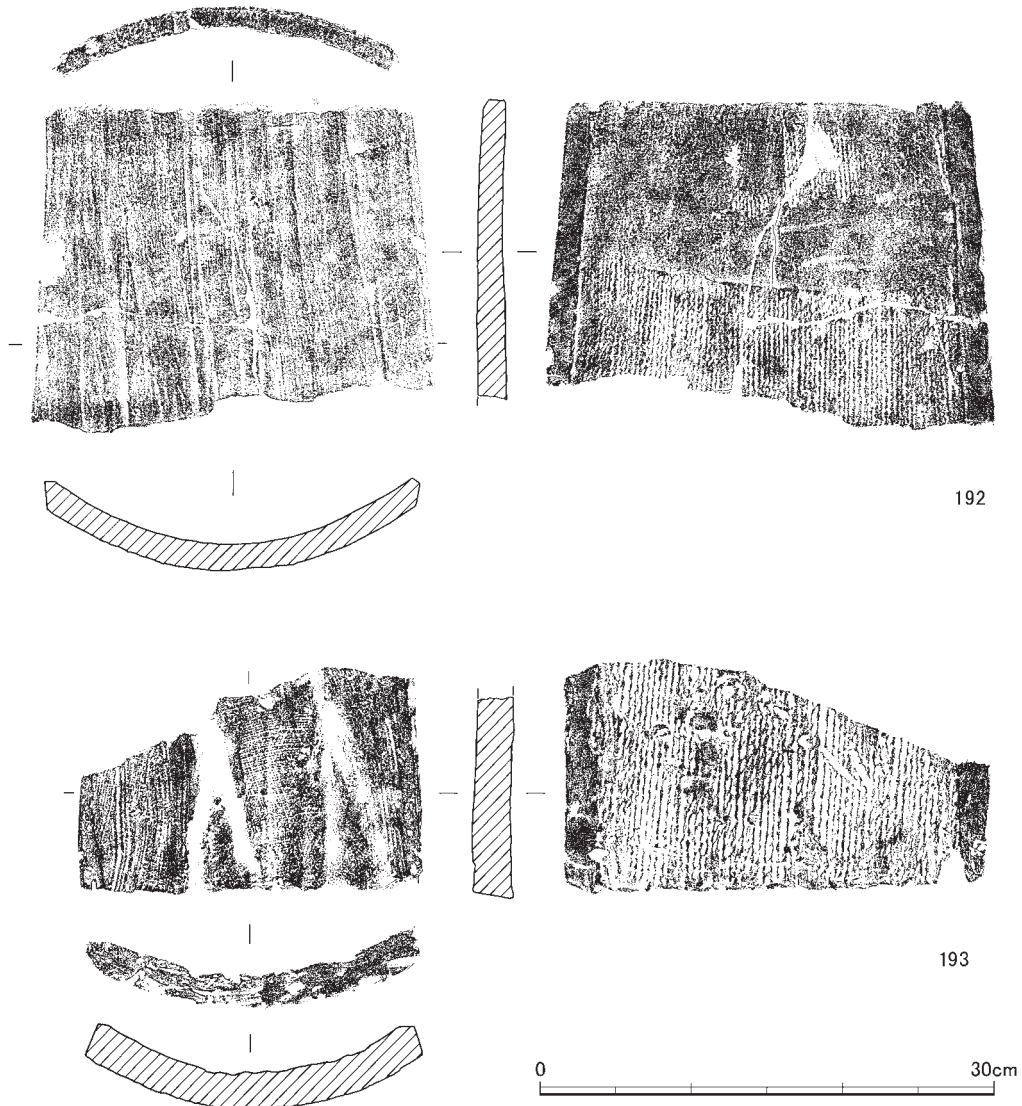
191

0 30cm

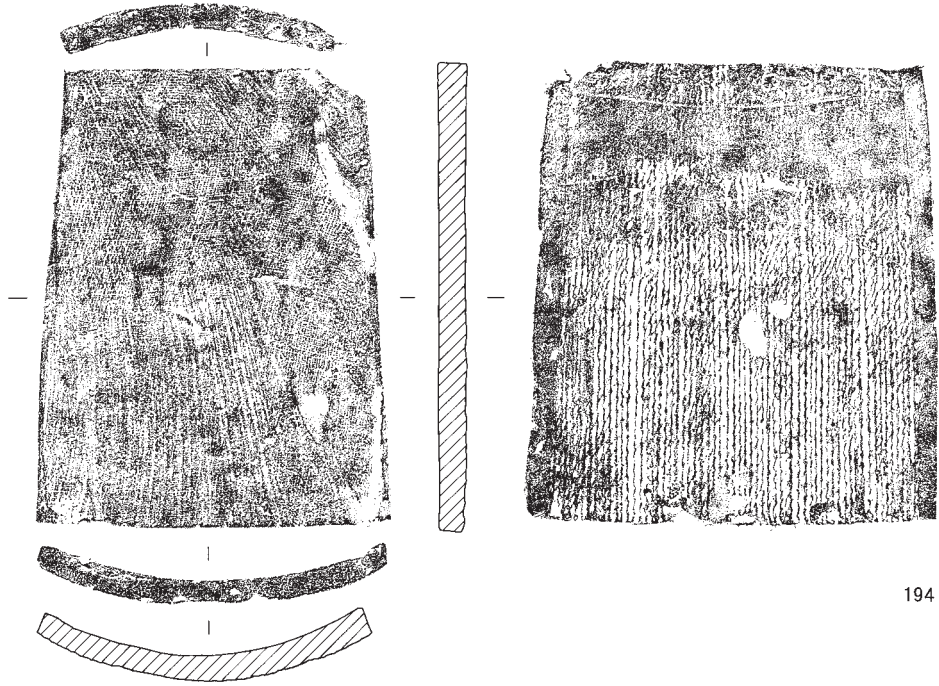
第53図 平瓦実測図(1)

の不整合はみられない。側面は、凹・凸面側ともに深く削って面取りする。197はS X96の埋土上層もしくは炭層から出土した。

恭仁宮跡出土の平瓦は、桶巻き作りで、凹面の整形をほとんど行わず、凸面の叩き目が縦位の縄目叩きで、それを横ナデで擦り消すC型式平瓦がある。C型式平瓦で全長の分かるものは35.1cmで、形状は台形である。縦位の縄目叩きを施した後、狭端および広端側の数cm幅を横ナデして擦り消し、縦位の縄目叩きには条の不整合が見られ、全長10cm・幅7～8cmの叩き板が復元されている。つまり、1類・2類ともに恭仁宮跡出土のC型式平瓦との共通点が多く見られる。しかし、規格の違いや、凹面の杵板痕や叩き目の不整合が恭仁宮跡出土資料ほど明瞭ではないこと、C型式平瓦は叩き目の擦り消しを凸面広端側でも行うことなど相違点もある。上狛北遺跡出土瓦の量的な制約からも、ここでは、恭仁宮跡C型式平瓦との共通性を指摘するのみに留めておきたい。一方、3類は、1・2類と異なり、凸面の狭端側を横ナデして縄目叩きを擦り消すということを行わないが、恭仁宮跡出土資料でそのような特徴がみられるのは、一枚作りのD型式平



第54図 平瓦実測図(2)



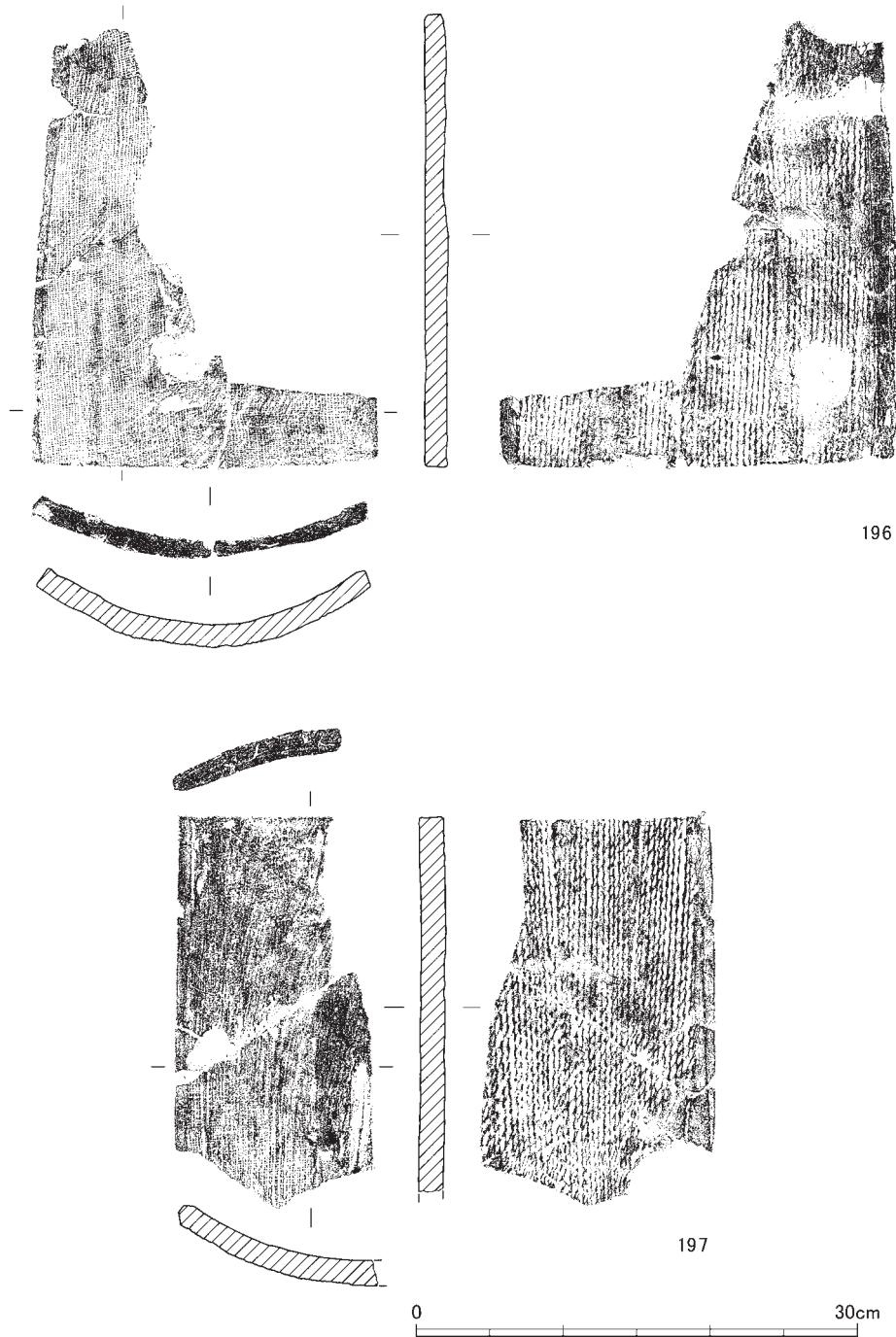
第55図 平瓦実測図(3)

瓦である。比較的粗い縄目叩きであることや、条の不整合がみられないことから、DⅡないしⅢ型式に近いといえる。しかし、3類が破片資料しか出土していないという資料の制約から、D型式平瓦との共通性を指摘するのみに留めておく。

(谷崎仁美)

④瓦塼(第57図)

2点を確認した。198は長さ22.2cm、残存幅16.4cm、高さ6.4cmを測る。本来の大きさは不明



第56図 平瓦実測図(4)

である。土坑S X96の埋土上層から出土した。199は埴の1つの面の粘土が掻き取られて凹むものである。埴の表面がこのような凹む形態のものは類例がない。溝S D21南部出土である。

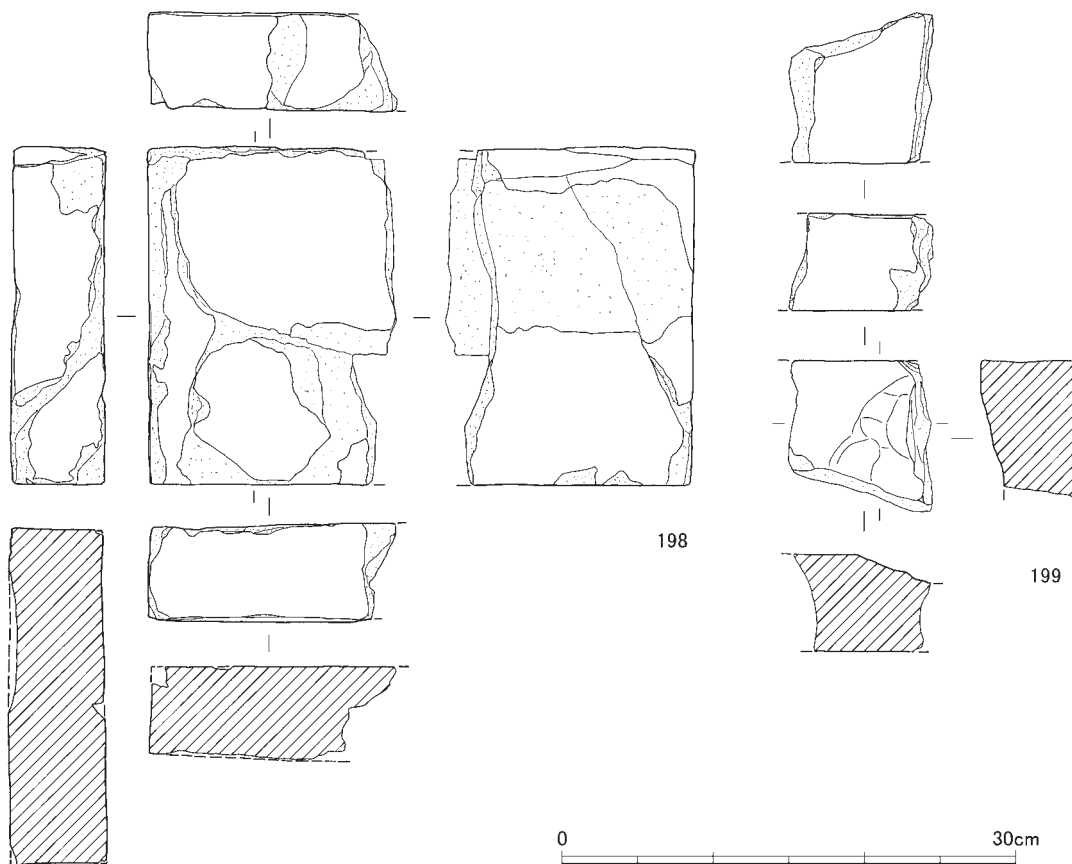
(筒井崇史)

(3)土器

今回の調査では、B地区を中心に大量の土器が出土した。特に土坑S X96では整理箱で30箱を越える土器が出土しており、その内容から奈良時代中頃の良好な一括資料といえる。また、溝S D21からも多くの土器が出土しており、他の遺構からの出土土器と合わせて、上狛北遺跡の性格を考える上で重要な資料である。なお、奈良時代の土器の器種名や土師器の調整手法^(注15)については奈良文化財研究所が使用しているものに準じることとする。

①A2地区出土遺物

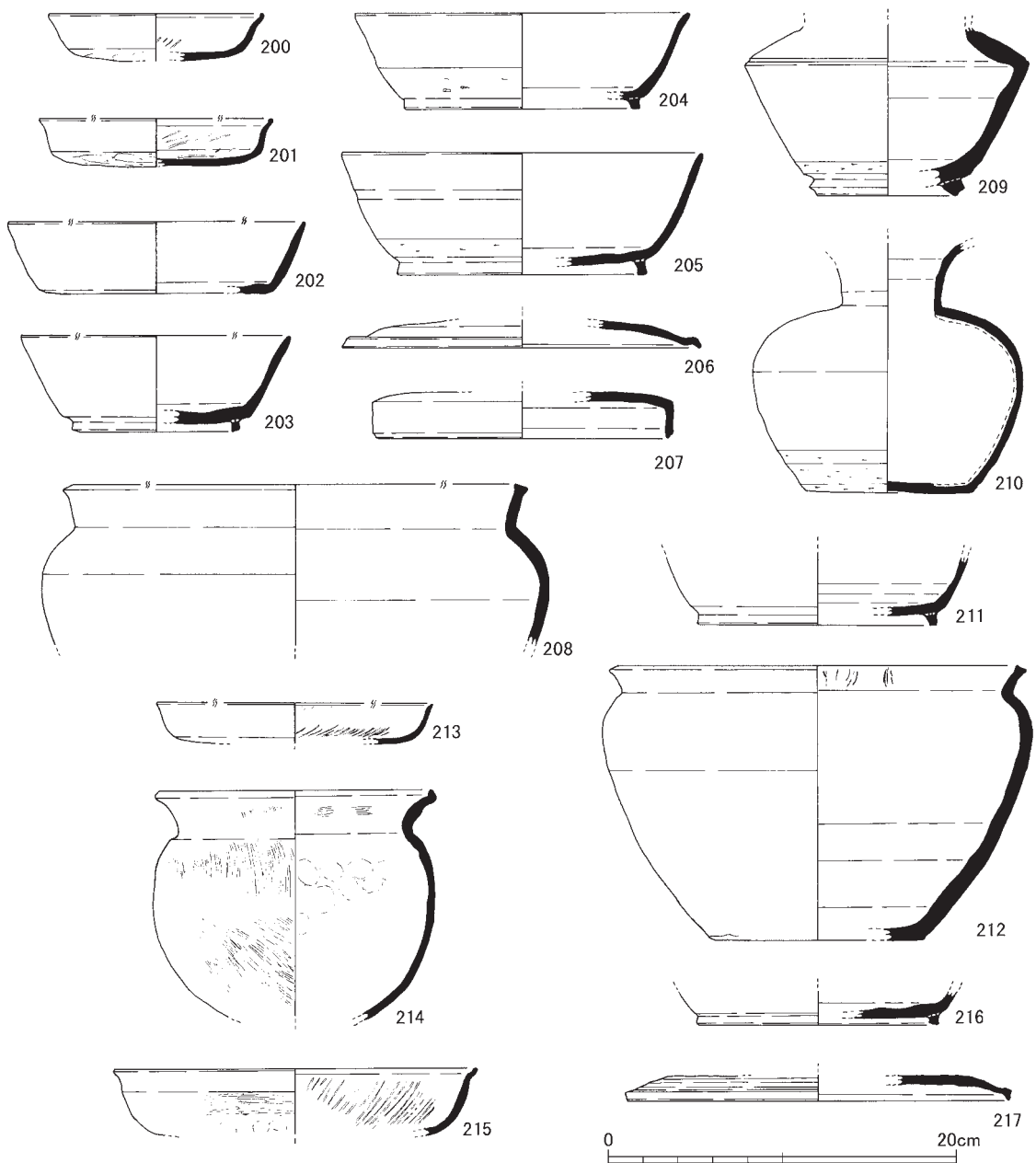
井戸S E215(第58図200~210) 出土量自体少ないが、供膳具が主体である。200・201は土師器杯Aである。口径12.3~13.4cm、器高2.7cmを測る。外面の調整は200がa0手法で、201はb0手法である。内面の調整は、いずれも口縁部内面に1段斜放射状暗文を施す。また、201は底部内面に螺旋状暗文が見られるが、200は不明である。202~210は須恵器で、杯A・B、蓋、鉢D、壺L・Qなどがある。202は杯A、203は杯BⅡ、204・205は杯BⅠである。204・205は底部と体部の境に回転ヘラケズリ調整を施し、丸みをもたせる。205は内面が研磨されていることから転



第57図 瓦埴実測図

用硯と考えられる。206は杯B Iもしくは皿B Iの蓋、207は壺Aの蓋である。208は口径16.8cm、残存高2.7cmを測り、全体に自然釉が掛かる。208は口径の残存率が1/12以下であるが、器壁の厚みから鉢Dと考えられる。調整は内面が回転ナデ調整で、外面はケズリ後ナデと考えられる。209は壺Qである。底部と体部の境に回転ヘラケズリ調整を施し、高台を貼り付ける。肩部には沈線を1条施し、自然釉が掛かる。210は壺Lである。底径9.5cmを測る。底部外面はヘラキリ後ナデで調整し、体部下半の約1/4に回転ヘラケズリ調整を施す。肩部には自然釉が掛かる。

土器溜まりS X 203 (第58図211・212) いずれも須恵器で、211は杯B、212は鉢Dである。211は底径13.8cm、残存高3.8cmである。212は口径23.0cm、器高15.7cmを測る。調整は、内外面ともに回転ナデ調整である。口縁部内面には所々線刻状の痕跡が見られる。



第58図 A 2 地区奈良時代遺構出土土器実測図

柱穴 S P 222 (第58図213・214) 213は土師器皿Aである。外面調整はa0手法で、内面には1段斜放射状暗文を施す。底部内面の螺旋状暗文については摩滅が著しいため不明である。214は土師器甕である。口縁部内外面と体部外面にハケ調整、体部内面にナデ調整を施す。口径15.6cm、残存高13.2cmを測る。

柱穴 S P 169 (第58図215) 215は土師器杯Aである。口径20.8cm、器高3.8cmを測る。外面の調整はa1手法で、口縁部外面にヘラミガキ調整を施す。口縁部内面には1段斜放射状暗文が施されるが、底部内面に螺旋状暗文が施されていたかどうかは不明である。

柱穴 S P 221 (第58図216) 216は須恵器杯Bの底部である。底径13.1cm、残存高2.7cmを測る。

柱穴 S P 313 (第58図217) 217は須恵器杯Bもしくは皿Bの蓋である。口径22.0cmを測る。

②B地区出土遺物

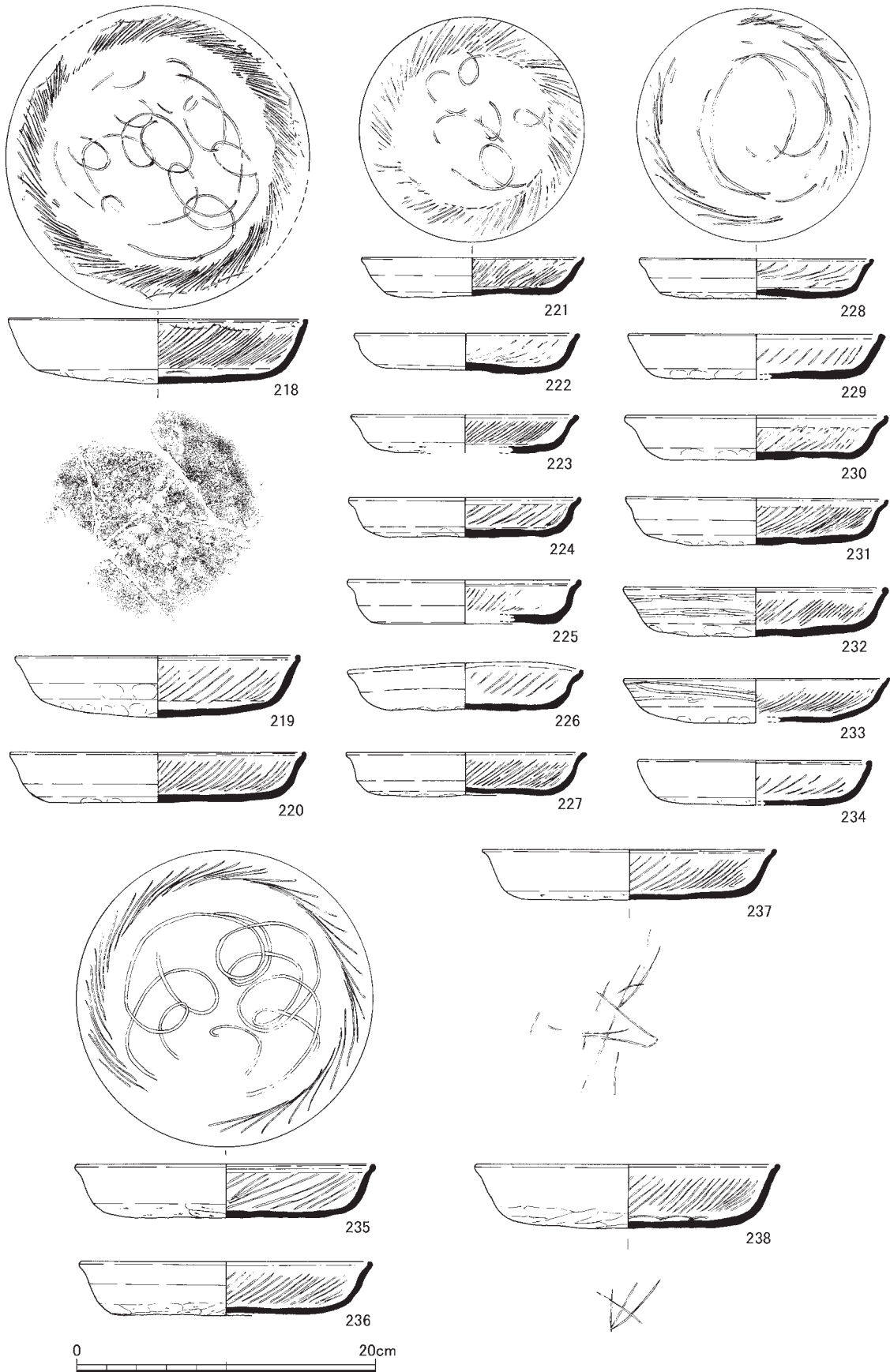
土坑 S X 96 (第59図218～第71図457) 出土した土器としては土師器や須恵器のほか、墨書土器や製塩土器などがある。以下、土器の種類ごとに報告する。

土師器 (218～321) 杯A・B・C、皿A・B・C、椀C、高杯、壺A・B、甕A・B、鍋B、竈などがある。218～254は杯Aである。口径14.4～17.8cmの杯AⅡと、口径18.8～20.8cmの杯AⅠに分類できる。外面調整は、218～231がa0手法、232・233がa1手法、234～242がb0手法、243～251・253がb1手法、252・254がb3手法で、a0手法が最も多く、次いでb1手法が多い。253はb1手法であるが、底部外面中央にケズリ残した部分に木の葉圧痕がみられる。内面の暗文は1段斜放射状暗文と螺旋状暗文の組合せが基本である。螺旋状暗文については、225・226・242の3点が摩滅のため不明で、234は施さない。放射状暗文には密なものや粗いものがあり、密なものの方が多し。螺旋状暗文はほとんどが二重ないし三重である。また、218・253・254は口縁部内面に連弧状暗文がみられる。218・230・253は底部外面に木の葉圧痕が、238は線刻がみられる。221は口縁部に煤が付着していることから灯火器として使用されていたと考えられる。

255～268は杯Cである。口径16.8～18.8cm、器高2.5～3.0cmを測り、法量分化はみられない。外面調整は、256～258・262～265・268がa0手法、255・259～261・266・267はb1手法で、ほぼ同じ割合である。内面の暗文は1段斜放射状暗文と螺旋状暗文の組合せが基本である。262は摩滅のため不明である。斜放射状暗文は密で、螺旋状暗文は二重ないし三重である。また、255・259～261は口縁部内面に連弧状暗文がみられる。

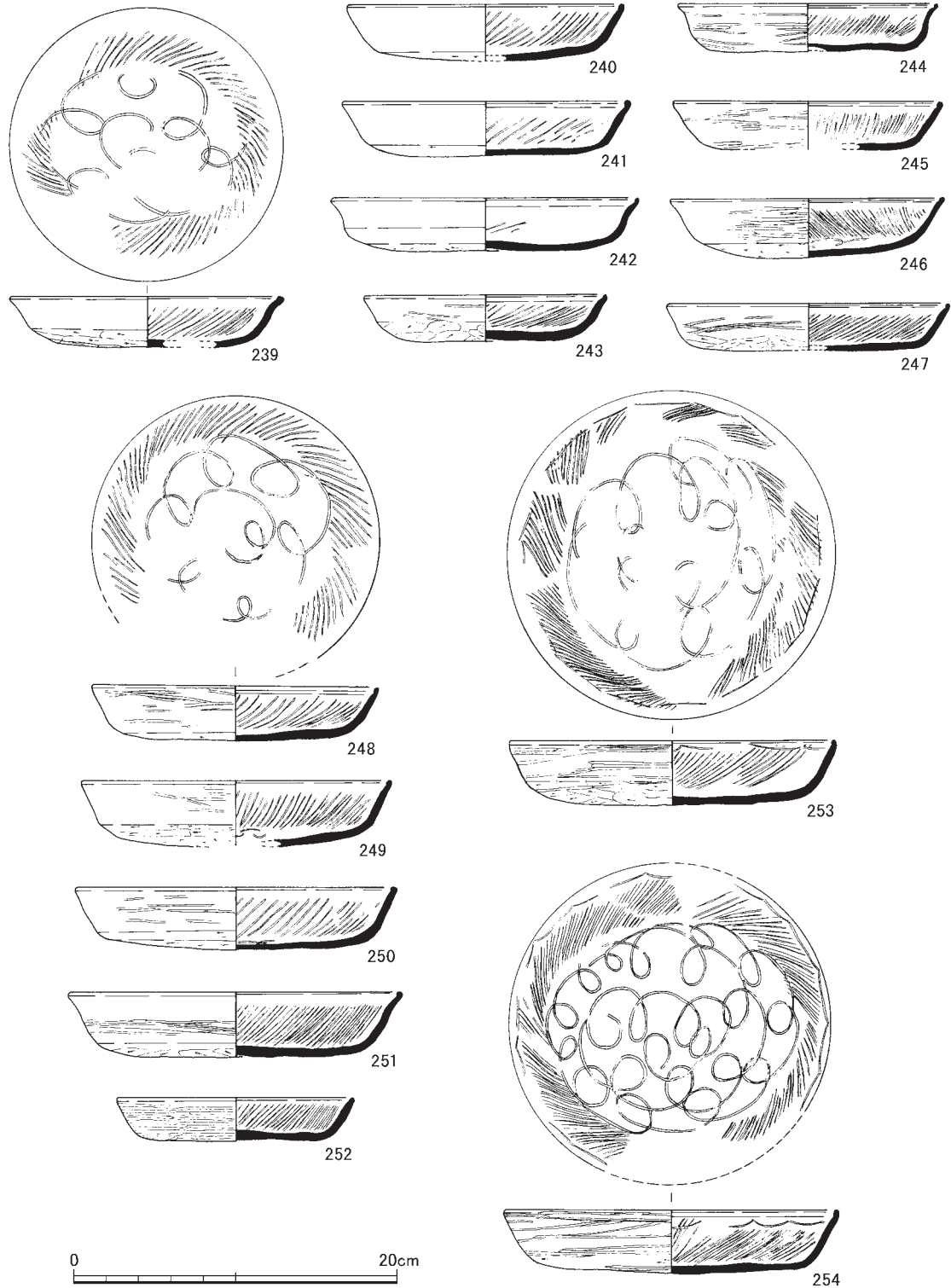
269～280は皿Aである。口径15.2～15.8cmの皿AⅢ、口径18.8cmの皿AⅡ、口径21～23.6cmの皿AⅠに分類できる。外面調整は269～277がa0手法、278～280がb0手法で、a0手法が多い。内面の暗文は1段斜放射状暗文と螺旋状暗文の組合せが基本であるが、271はなく、274は摩滅のため不明である。斜放射状暗文は密なものが多く、螺旋状暗文は二重ないし三重である。277の底部外面には線刻がみられる。

281・282は杯Bで、口径15.0～15.2cm、器高3.0～3.2cmを測る。調整はいずれもb0手法で、口縁部内面には1段斜放射状暗文が施される。281は底部内面に螺旋状暗文がみられるが、282にはない。283は皿Bである。底径25.2cm、残存高1.9cmを測る。内面には1段斜放射状暗文と螺旋状

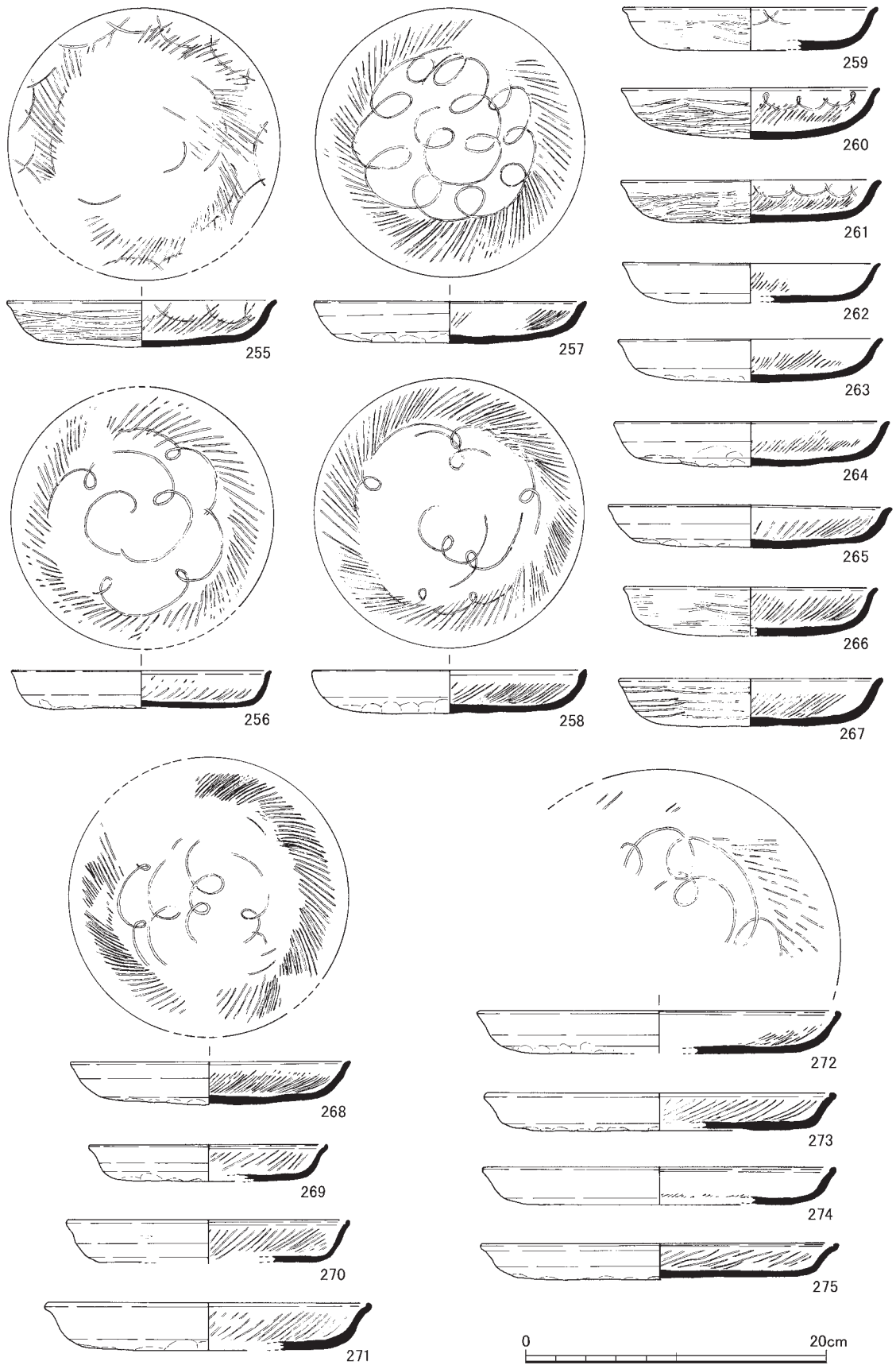


第59図 土坑 S X 96出土土器実測図(1)

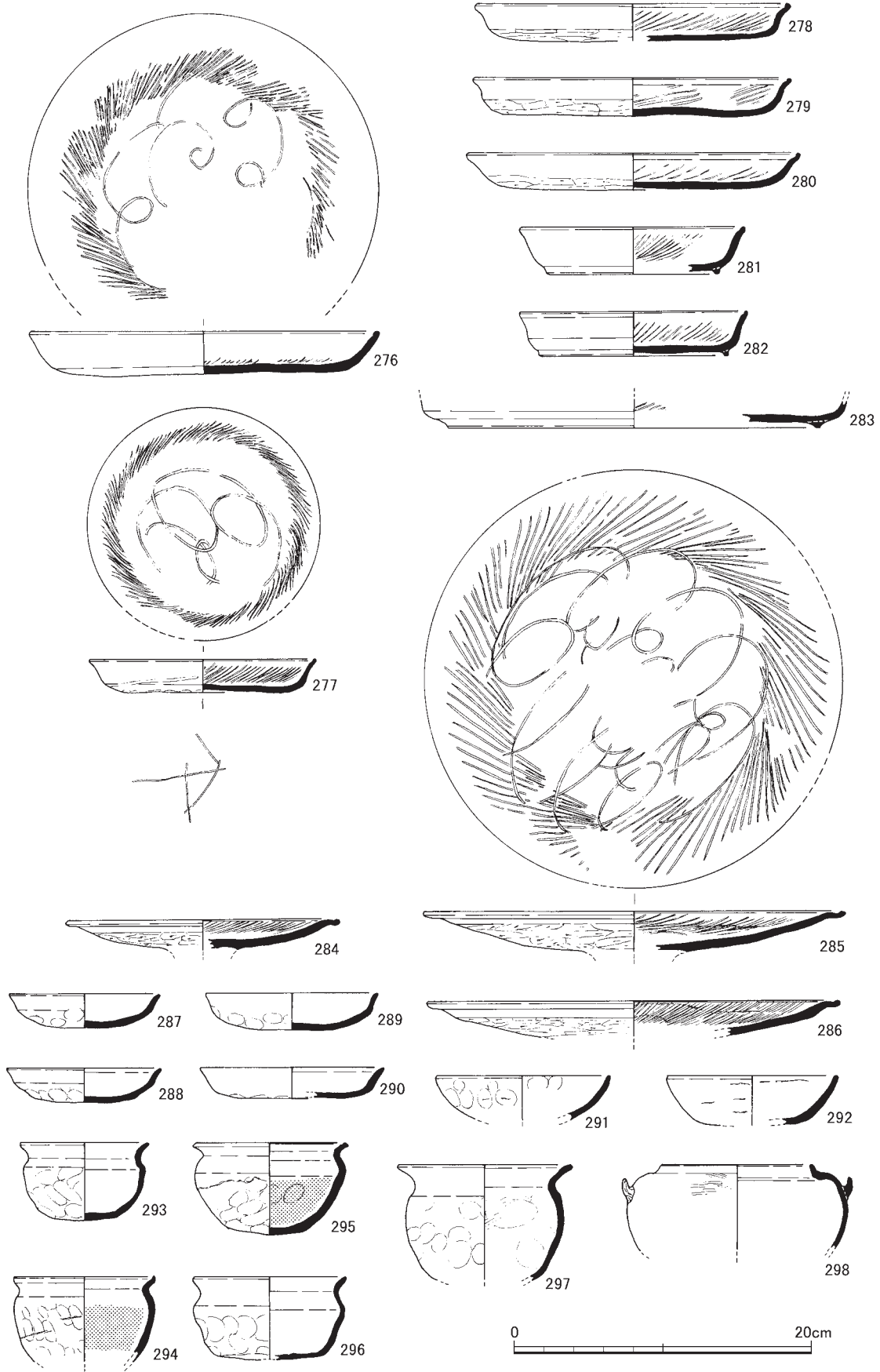
暗文を施す。284~286は高杯である。口縁部端部はヨコナデ、杯部外面はヘラケズリで調整する。内面にはいずれも放射状暗文を施す。285・286には底部内面に螺旋状暗文がみられるが、284は摩滅のため不明である。放射状暗文は密なものが多く、螺旋状暗文は二重ないし三重である。なお、S X 96では脚部はほとんど出土していない。287~290は皿Cである。口径10.0~12.3cm、器



第60図 土坑 S X 96出土土器実測図(2)

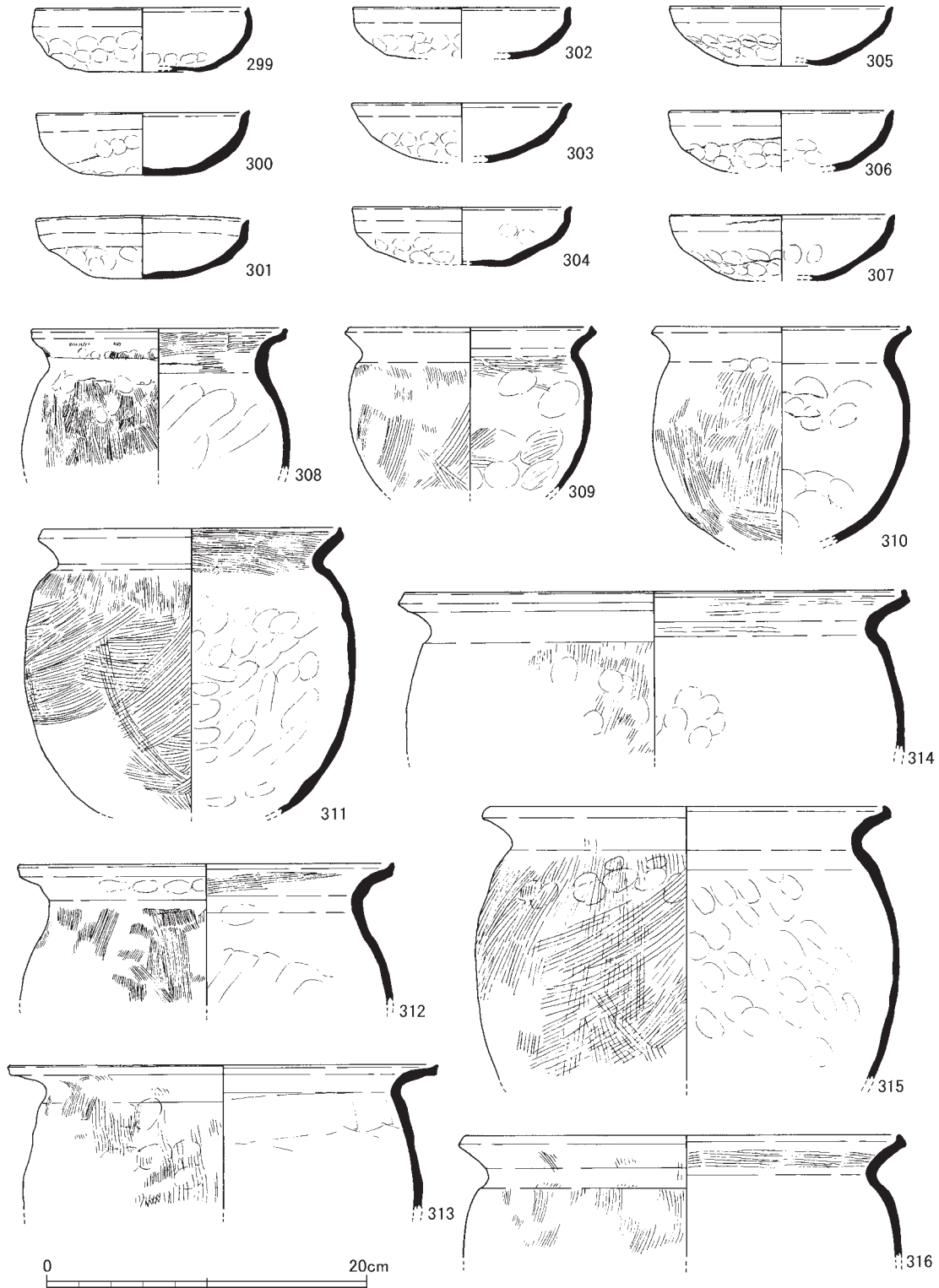


第61図 土坑S X96出土土器実測図(3)



第62図 土坑S X96出土土器実測図(4)

高2.1~2.5cmを測る。e手法で調整する。291・292は杯である。口径11.4~11.6cm、器高3.0~3.3cmを測る。いずれも全体をナデで調整するが、291は指圧痕が残る。293~297は壺Bである。口径8.5~11.6cm、器高(もしくは残存高)5.2~7.7cmを測る。294~296は内面に漆が付着する。298は壺Aである。口径9.9cm、残存高5.7cmを測る。摩滅が著しいが、口縁部および内面はナデ、



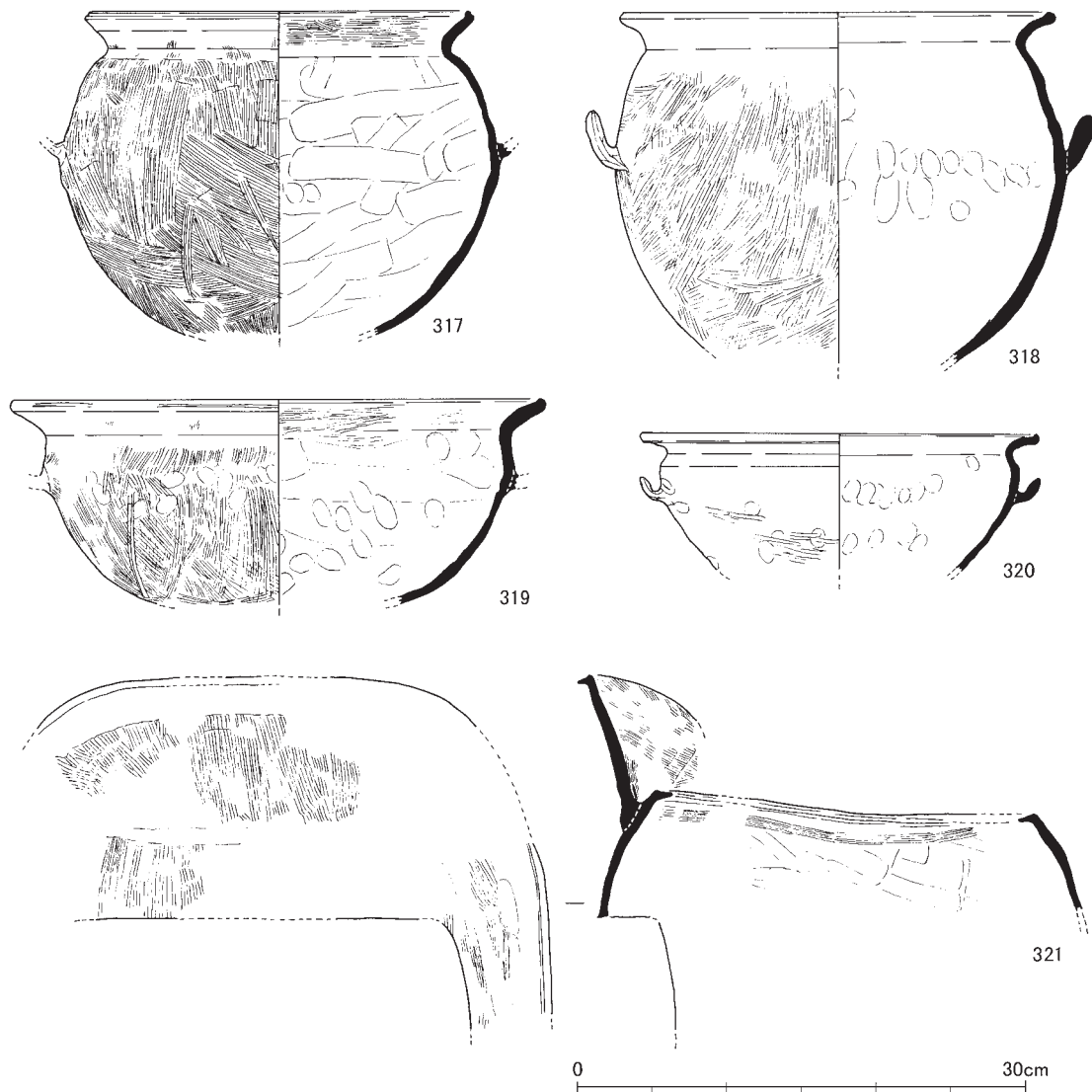
第63図 土坑S X96出土土器実測図(5)

外面はミガキで調整する。299～307は椀Cで、口径13.3～14.0cm、器高3.2～4.1cmを測る。e手法で調整する。299は口縁端部が内湾し、303は外反気味である。

308～316は甕Aである。口径15.2～18.6cmの甕AⅢ、口径23.6～27.6cmの甕AⅡ、口径31.2cmの甕AⅠに分類できる。いずれも体部外面はハケメ、内面はナデ調整する。308・310・311・312・314・316は口縁部内面をハケメ調整する。317・318は甕Bである。口径25.1～28.7cm、残存高21.5～23.5cmを測る。口縁部内面はハケメ、外面はヨコナデ、体部内面はナデ、外面はハケメ調整する。319・320は鍋Bである。319は口径34.9cmを測り、320は口径26.2cmと小型である。いずれも体部外面はハケメ、内面はナデ調整する。319は口縁部内面をハケメ調整する。

321は竈である。同一個体と思われるが、欠損部位が多く、完形に復元することはできなかった。推定口径24cmを測る。図示していないが底部の破片もある。

S X96から出土した土師器供膳具は、斜放射状暗文が密であるものが多く、螺旋状暗文が二重ないし三重である。また、口縁端部内面に連弧状暗文を施すものが一定量含まれる。これらの特



第64図 土坑S X96出土土器実測図(6)

徴から平城宮土器編年のⅢの古段階に併行する資料群と考えられる。旧山城町域でこの時期の資料がまとまって出土した例はなく、この地域の土器編年を考えていく上で貴重な資料といえることができる。

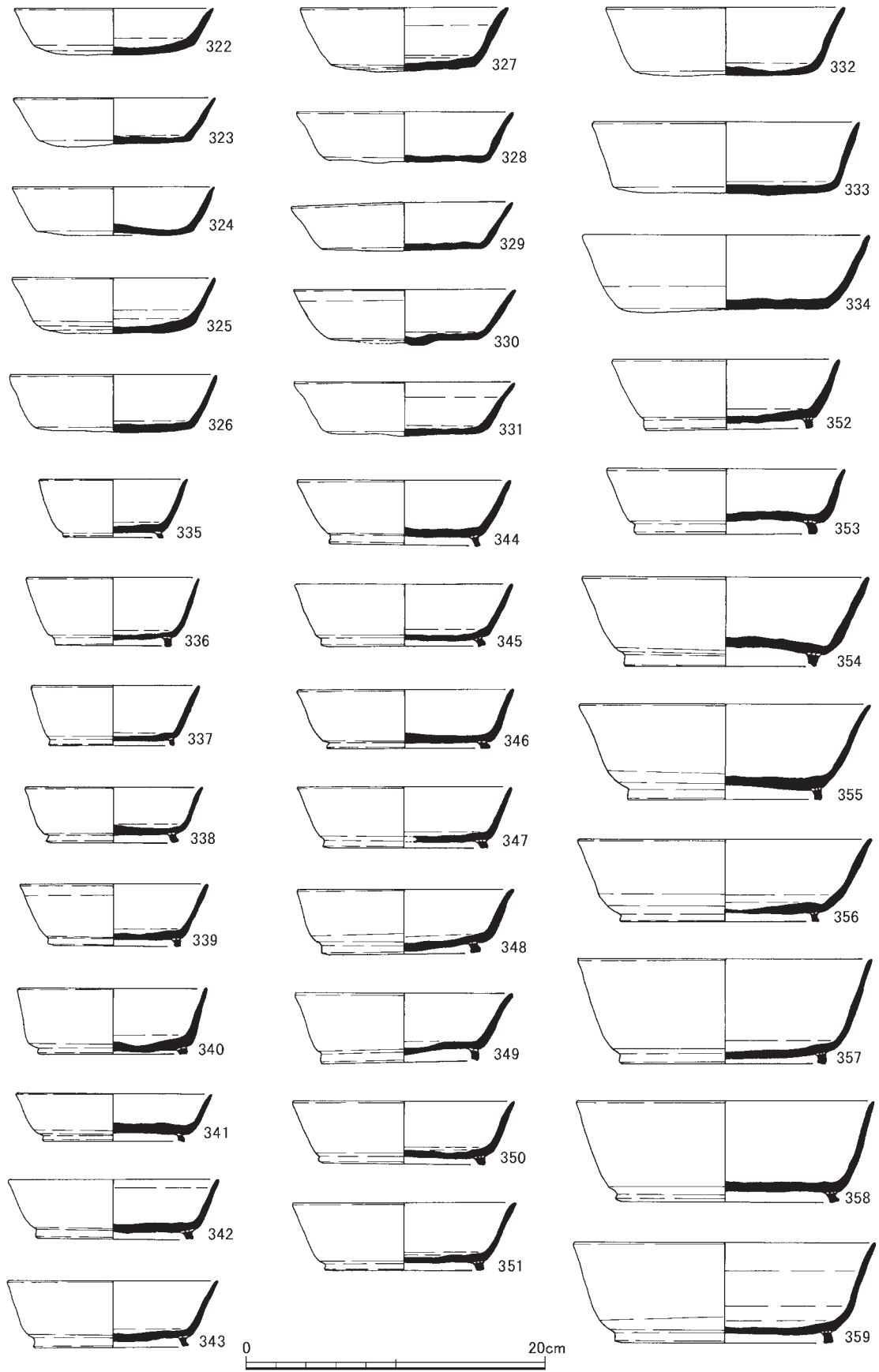
須恵器(322~412) 杯A・B・E・F、杯B蓋、皿B・C、皿B蓋、高杯、壺E・K・Q、壺A蓋、甕などがある。供膳具、中でも杯Bが多く、貯蔵具は少ない。322~334は杯Aである。口径の大きさにより杯AⅠ(口径18~20cm)、杯AⅡ(口径15~18cm)、杯AⅢ(口径13~15cm)のおおむね3つに分類できる。ほとんどが底部をヘラキリ後にナデで仕上げるが、322・325・327は調整しない。杯AⅠは器高が4cmを越える深手のものである。

335~361は杯Bである。口径の大きさにより杯BⅠ(口径19~21cm)、杯BⅡ(口径14~16cm)、杯BⅢ(口径11~13cm)、杯BⅣ(口径9~11cm)のおおむね4つに分類できる。杯BⅠは器高6cmを越える深手のものが多い。また、底部の調整はほとんどがヘラキリ後ナデであるが、340・342・343・350・353は調整しない。354・357~361はヘラキリ後にヘラケズリを施す。また、354~356・359~361は底部から体部にかけてヘラケズリすることにより丸味をもたせる。361は内面に漆が付着している。ほかにも漆の付着した須恵器杯Bが数点ある。

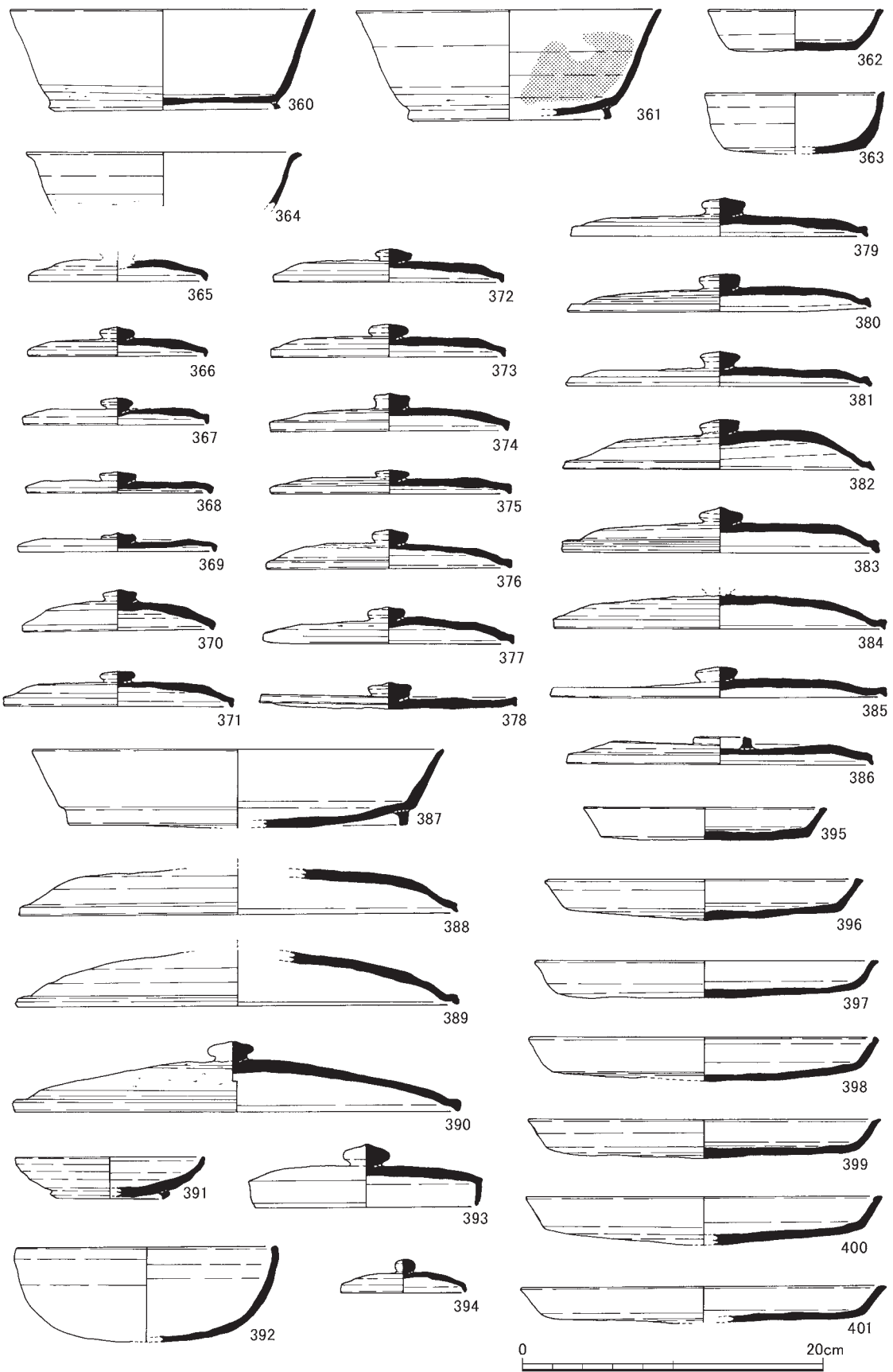
362・363は平底から湾曲して体部が立ち上がり、口縁端部が平坦であることから杯Eと判断した。364は杯Fである。体部下半はヘラケズリを施す。365~386は杯B蓋である。口径の大きさにより杯B蓋Ⅰ(口径19~22.2cm)、杯B蓋Ⅱ(口径15~17.1cm)、杯B蓋Ⅲ(口径11~13cm)の3つに分類できる。385は環状つまみをもつ。387は皿Bである。口径27.3cm、器高5.2cmを測る。底部外面はヘラケズリである。388~390は皿B蓋である。

391は皿である。口径12.5cm、器高2.75cmである。体部は湾曲して立ち上がり、口縁端部は内傾する。貼り付け高台で、底部外面にはヘラケズリを施す。畿内では見られない器形である。内面には赤色顔料が付着する。392は杯Eもしくは鉢の類であろう。口径17.0cm、器高6.25cmを測り、調整は摩滅のため不明である。393は壺A蓋である。394は口径8.2cm、器高2.2cmを測り、小型の壺の蓋もしくは杯B蓋のミニチュアと考えられる。395~401は皿Cである。口径16.0cmの皿CⅢ、口径20.5cmの皿CⅡ、口径22.7~24.0cmの皿CⅠがある。底部外面はほとんどがヘラキリ後ナデで調整する。402~404は高杯脚部、405は壺頸部である。406は壺Kで、口径7.5cm、器高19.7cmを測る。体部の下方約1/3はヘラケズリ、底部外面はナデで調整する。407は壺Eである。口径10.1cm、器高7.6cmを測る。貼り付け高台で、底部外面はヘラキリ、体部はナデである。408は壺Qの頸部の破片である。409・410は壺底部である。409は底径5.2cm、残存高4.1cmを測り、高台は貼り付けである。体部外面はケズリ、底部外面はナデで調整する。410は底径9.6cm、残存高7.2cmを測り、高台は貼り付けである。体部と底部の境をケズリで調整する。411・412は甕である。412は口径20.0cm、残存高18.2cmを測る。

墨書土器(413~443) 総出土点数は31点である。個々の釈文や出土層位は付表2を参照されたい。413~423・443が土師器(13点)、424~442が須恵器(18点)である。墨書のほとんどが杯や皿などの供膳具の底部外面に記載されていた。出土層位は炭層および木屑層である。

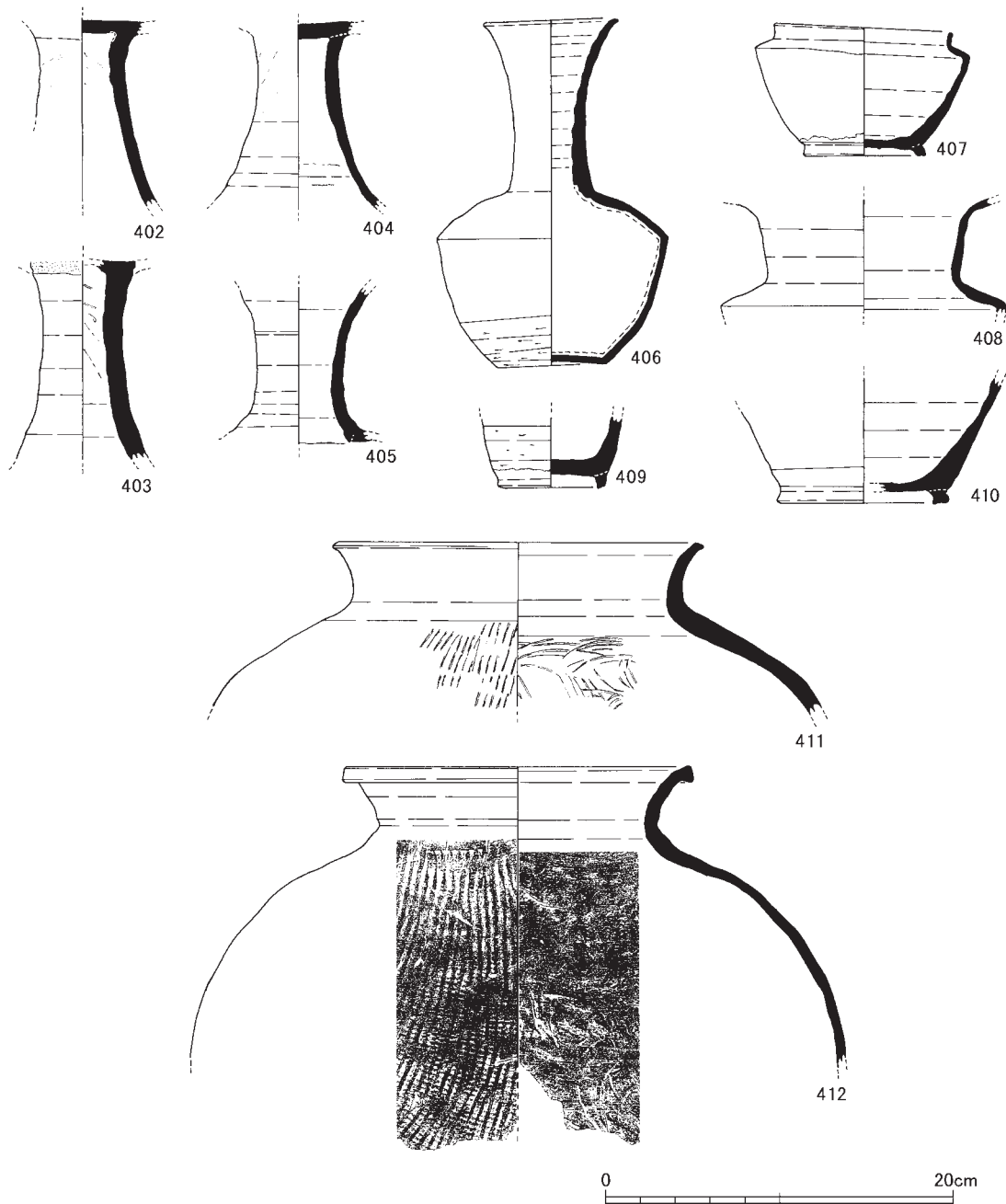


第65図 土坑 S X 96出土土器実測図(7)

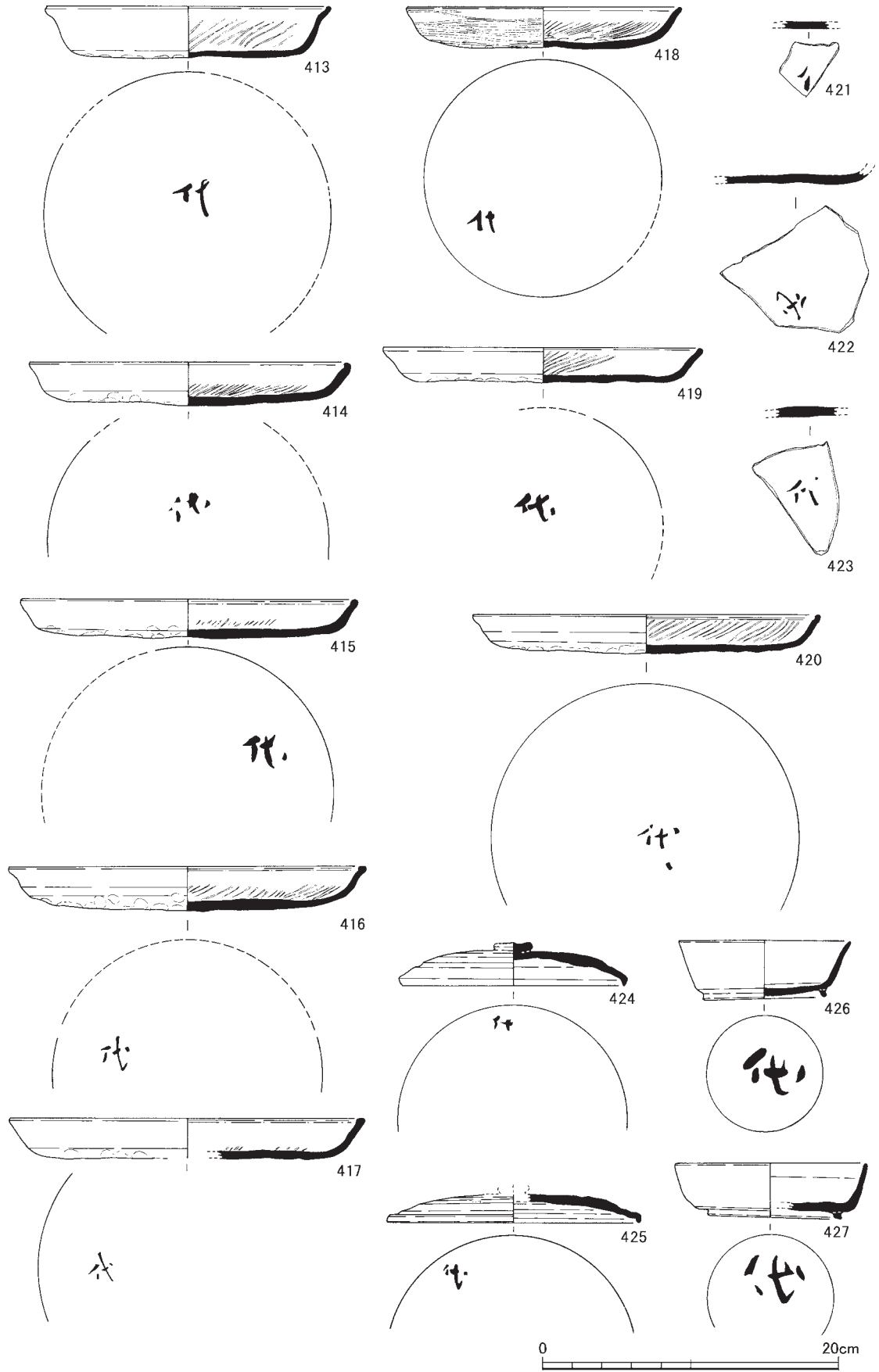


第66図 土坑 S X 96出土土器実測図(8)

413～420・422～434は「代」と墨書されたものである。21点を数え、墨書土器全体の7割を占める。413～420・423は土師器で、皿が多い。いずれも底部外面に墨書される。413は杯A、414～420は皿Aである。外面調整は418はa1手法、他はa0手法である。いずれも内面に1段斜放射状暗文と螺旋状暗文を施す。斜放射状暗文は密なものが多く、螺旋状暗文は二重ないし三重である。422・423は杯もしくは皿の底部である。421も杯もしくは皿の底部で、人偏のみ判読でき、「代」である可能性が高い。424～434は須恵器である。424・425は杯B蓋で、いずれも内面に墨書される。426～429は杯Bで、底部外面に墨書される。430は杯もしくは皿の底部である。外面に墨書される。431～433は皿Cである。底部外面に墨書される。434は鉢Dで、口径26.8cm、器高



第67図 土坑S X96出土土器実測図(9)

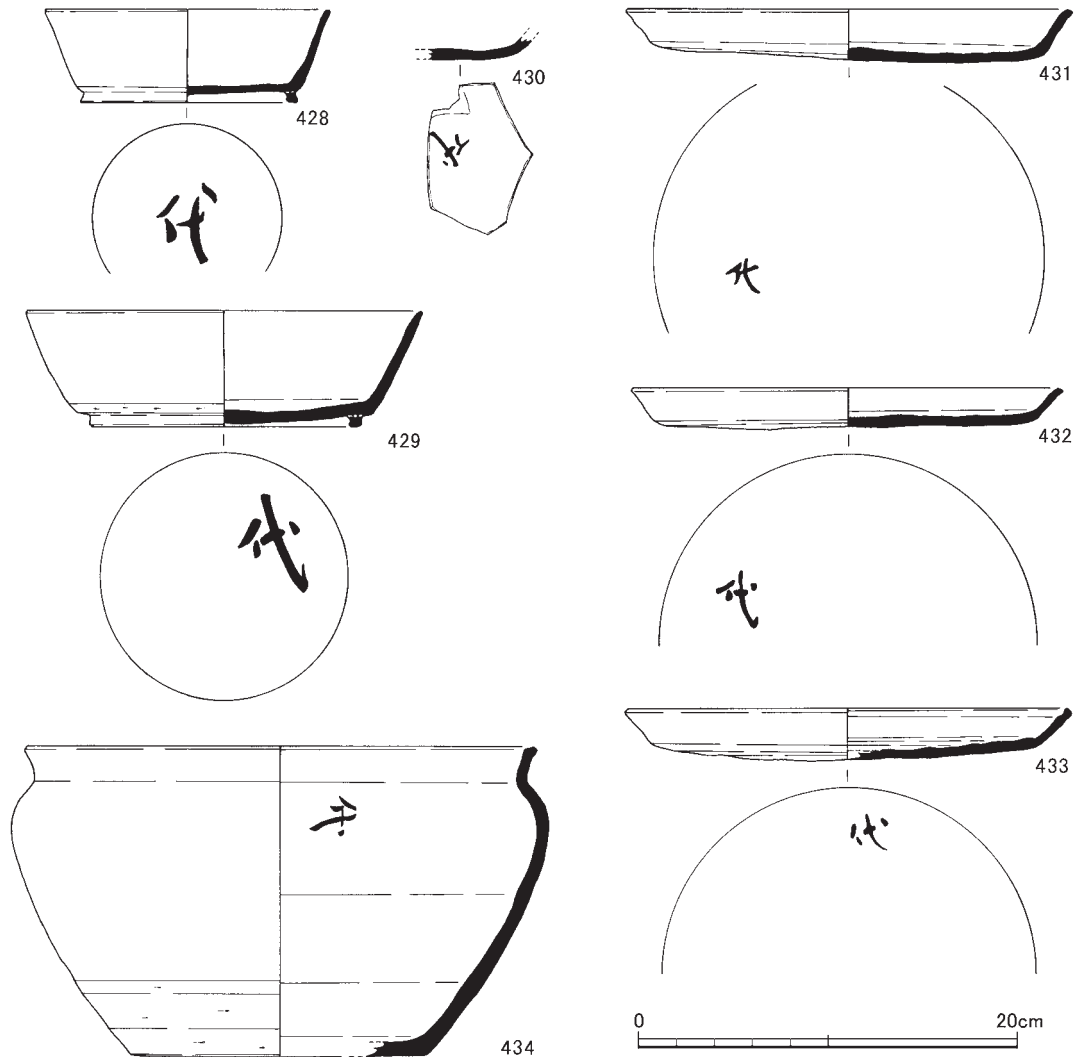


第68図 土坑S X96出土墨書土器実測図(1)

16.3cmを測る。体部の下半部約1/4はヘラケズリで調整する。肩部内面に横向きに墨書される。

「代」の運筆を観察すると少なくとも3種類以上あり、おそらく複数の人の手によるものと考えられる。なお、「代」の意味するところについては不明である。

その他の墨書としては「咋女」・「若女」など女性の名前と考えられるものや「石」・「匠」・「寺」などがある。435～442は須恵器である。435～437は杯Aで、口径14.5～17.8cm、器高3.9～4.1cmを測る。いずれも底部外面に墨書がみられる。345は「会」または「金」または「参」と考えられる。436は「大」、437は「咋女」と墨書される。438～441は杯Bで、口径14.3～14.8cm、器高4.4～4.8cmを測る。いずれも底部外面に墨書される。438は「寺」、439は「若□」、440は「若女」、441は「匠」と墨書される。442は皿Cである。口径23.5cm、器高2.2cmを測り、底部外面に「石」と墨書される。443は土師器皿Aである。口径24.2cm、器高2.9cmを測る。外面調整はb0手法で、内面には1段斜放射暗文と螺旋状暗文が施される。斜放射状暗文は粗い。底部外面に「山」と墨書される。

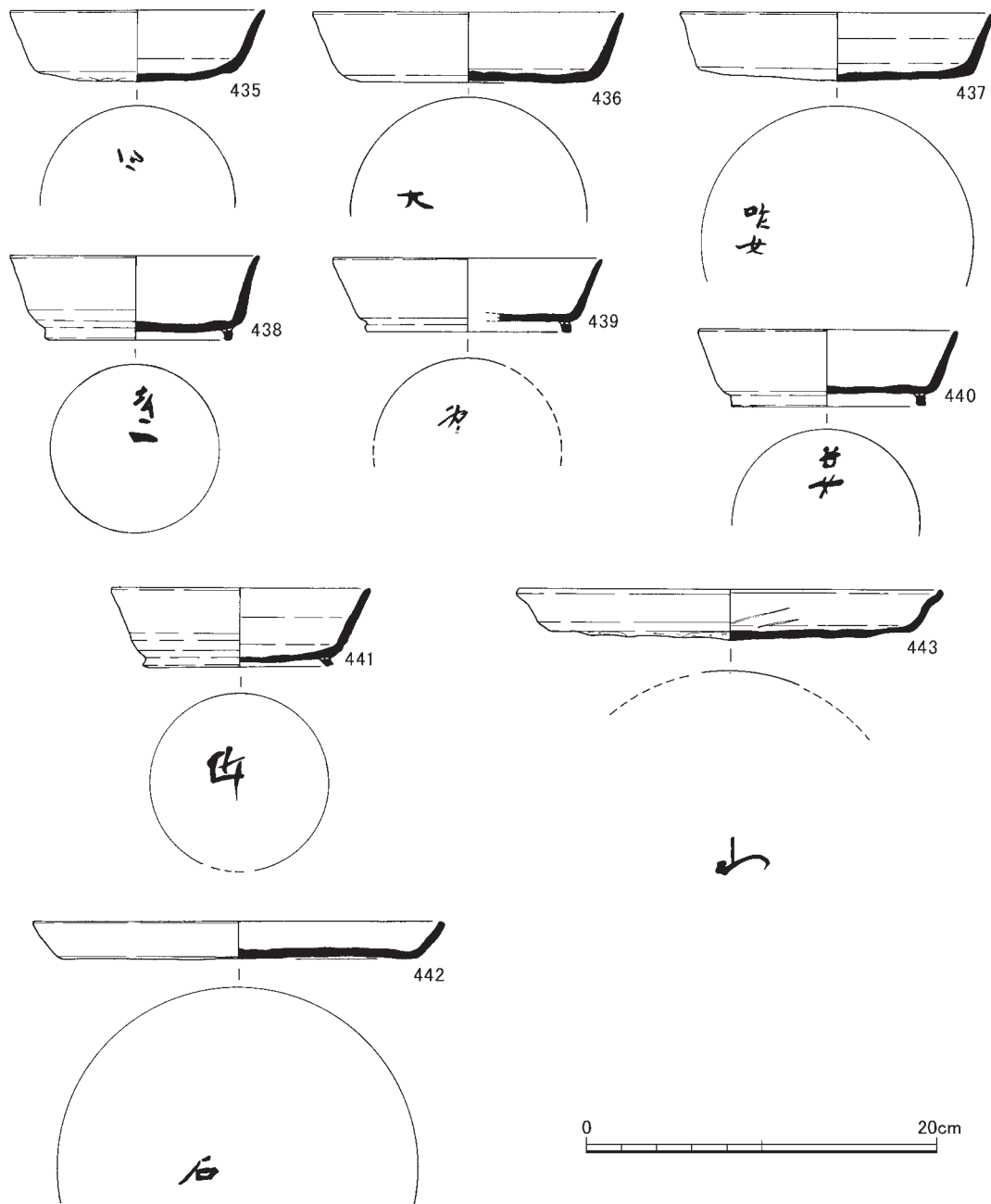


第69図 土坑S X96出土墨書土器実測図(2)

(松尾史子)

製塩土器(444~457) S X96で出土した製塩土器は19.0kgに達する。大半は破片資料で、全体の形状がわかるような復元を行うことはできなかった。代表的なもののみを図示した。444~448は内外面ともユビオサエとナデ調整を施す。いずれも粘土紐接合痕を残す。449~454は外面にユビオサエやナデ調整を、内面にハケ調整を施す。外面には粘土紐の接合痕を残す。455~457は外面にタタキ調整を施す。457は底部の破片で、尖底気味である。図示していないが、内面に布目の圧痕が残るものが少量ある。

なお、製塩土器の生産地については十分に検討することはできなかったが、大半は大阪湾沿岸、



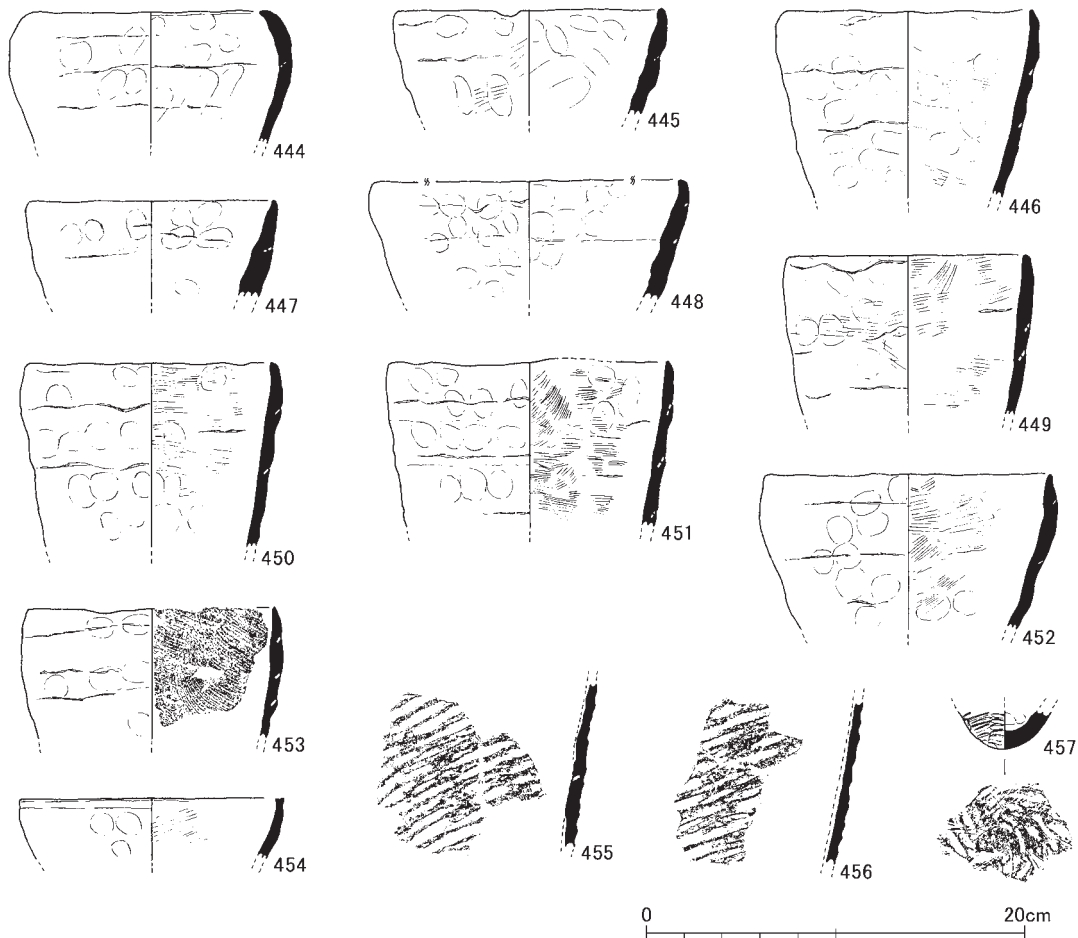
第70図 土坑S X96出土墨書土器実測図(3)

もしくは東部瀬戸内沿岸のものと推定される。ただし、タタキ調整を施すものはこれらの地域にみられず、詳しい生産地は不明である。^(注17)

(筒井崇史)

溝S D21(第72図457~第77図590) S D21から出土した遺物は遺物整理箱で12箱分である。遺構の項で述べたように、この溝は総延長約100mにおよび、遺物は溝の北部・中央部・南部の3地区でまとまって出土する傾向にあることからその地区ごとに報告する。なお、製塩土器は溝全体で、4.3kgが出土した。

北部(第72・73図) 土師器(458~477)には杯A、壺B、甕A、製塩土器などがある。458~462は杯A IIである。外面調整は、458・459がa0手法、460はa1手法、461はb0手法である。458・460は内面に1段斜放射状および螺旋状の暗文を施す。459・460は内面に暗文を施さない。462は内外面とも摩滅が著しく調整は不明である。463・464は高杯の脚柱部、465は脚部である。463・464は外面を面取りし、杯部内面に螺旋状暗文を施す。466は小型の杯である。口径10.0cm、器高2.5cmを測る。内外面ともにナデにより仕上げる。平城京ではあまり見られない器形であり、在地の土器である可能性がある。467は杯B蓋と考えられる。口縁端部はヨコナデにより仕上げる。468~473は壺Bである。468・469はほぼ完形で、470~473はいずれも底部付近が欠損している。



第71図 土坑S X 96出土製塩土器実測図

法量は、口径8cm台と10～11cm台の2種類である。いずれも体部外面には指オサエによる圧痕がみられ、口縁部はナデによって仕上げる。469・470・472・473の内面には黒漆が付着している。474は鉢Aである。口径21.8cm、器高6.25cmを測る。口縁部外面はミガキで、体部下半から底部はケズリで仕上げる。内面の調整は摩滅が著しく不明である。475～477は甕Aないし甕Cと思われる。口径27.6～28.6cmを測る。調整はいずれも体部外面および口縁部内面はハケ、体部内面はタタキ後ナデである。

478・479は製塩土器である。破片資料であるためいずれも器形および口径は不明であるが、口縁端部はナデによって仕上げられ、外面には指圧痕が残る。

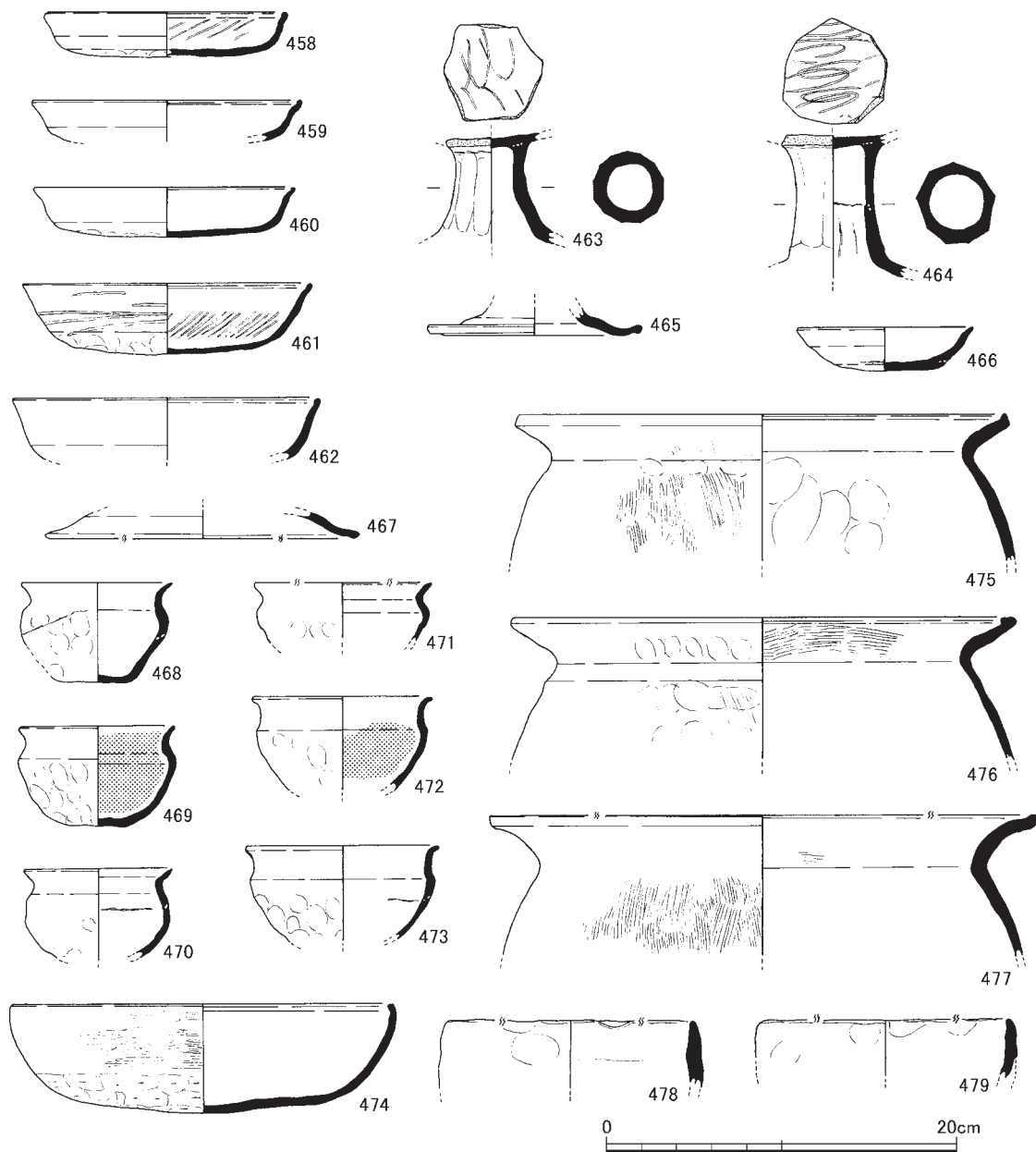
須恵器(480～512)には、杯蓋、杯A・B・C・E・F、皿B、鉢A、壺A・C・D・E・N、壺A蓋などがある。杯は深さ4cm前後の深手のものが多い。また、他の地点に比べ壺類が多く出土している。480～485は杯A、486～492は杯Bである。493は皿Bである。494は杯Cで、口縁端部内面に沈線を施す。495は杯Eである。口縁端部は平坦に仕上げ、底部と体部の境にケズリを施す。496～501は杯B蓋である。500・501以外はつまみ部分が欠損している。503は壺Aの蓋である。口径13.4cmである。口縁端部はナデによりシャープに仕上げる。つまみは欠損している。504は壺Aで、口縁部および底部は欠損している。506は壺Dで、口径7.4cm、器高6.2cmを測る。体部と高台の境にヘラケズリを施す。507・508は壺Eである。いずれも口縁部は欠損している。体部内外面ともナデで仕上げる。505・509は壺の底部である。510は壺Cで、口径4.0cm、器高5.8cmを測る。511・512は壺Nである。511は体部の下方1/4をヘラケズリで調整し、底部との境には手持ちのヘラケズリを施す。肩部には把手が対向して2つ貼り付けられる。また、体部の下方1/3あたりに把手か何かが剥離した痕跡があり、三耳壺の可能性もある。512は体部と底部の境目のみにケズリを施す。513は鉢Aで、口径21.4cm、残存高7.3cmを測る。外面にヘラミガキ調整を施す。

中央部(第74・75図) 土師器(514～528)には、杯A、皿A・B・C、椀C、甕A・C、製塩土器などがある。514は杯Aである。外面調整はa0またはb0手法で、内面に1段斜放射状暗文が見られる。螺旋状暗文の有無は不明である。515は小型の皿A、516～517は大型の皿Aである。外面調整は、516がa1またはb1手法で、他はa0手法である。515は内面に1段斜放射と螺旋状暗文が施される。516・517は暗文の有無は不明で、518は暗文を施さない。514は1段斜放射はみられるが、螺旋状暗文の有無については不明である。523は大型の皿Bである。外面の調整はb0手法で、内面の暗文は不明である。520・521は皿C、522は椀Cである。いずれも口縁部をヨコナデで仕上げ、底部には指オサエが残る。524～526は甕Aである。口径は25～30cmを測る。いずれも体部外面はハケ調整を行い、口縁部および内面はナデで仕上げる。527・528は製塩土器である。527は口縁部が外上方に開き、口縁端部内面が内傾する。体部内外面はナデで仕上げるが、外面には粘土紐接合痕が明瞭に残る。器壁は分厚く、胎土には砂粒を多く含む。528は口縁部が内傾する。口縁端部の内側をハケ調整する。器壁が薄く、内外面ともナデや指オサエで調整する。

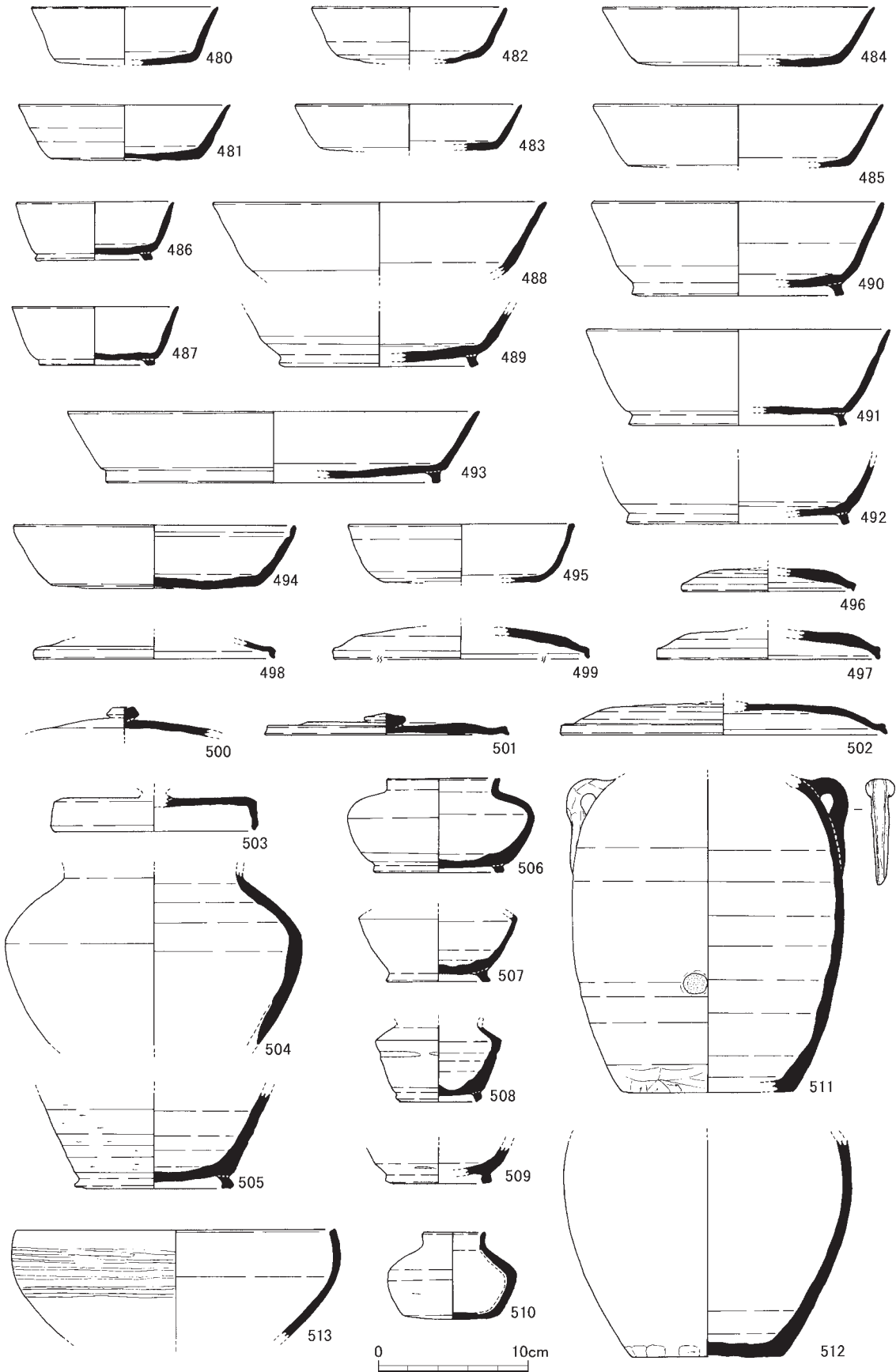
須恵器(529～549)には、杯A・B、杯B蓋、皿B蓋、鉢A、壺C・L・Mなどがある。529は

杯A、530～536は杯A、537は杯B、538は杯B、539・540は杯Bである。535・536・539・540など深手のものがある。541～543は杯B蓋、544・545は皿B蓋である。543～545はつまみが欠損している。546は鉢Aいわゆる鉄鉢である。ほぼ完形である。器壁は薄く、外面は丁寧なミガキを施す。547は壺Lで、底径6.6cmを測る。体部下半をケズリで仕上げる。548は壺Cで、口径4.6cm、器高4.4cmを測る。549は壺Mで底部には高台を貼り付ける。548・549はいずれも全体をナデで仕上げる。

南部(第76・77図) 土師器(550～573)には、杯A、杯B蓋、皿A・B・C、鉢B、高杯、壺B、甕などがある。550は杯Aである。口径14.7cm、器高2.7cmを測る。外面の調整はa0手法で、内面には551は鉢Aである。口径21.0cm、残存高2.95cmを測る。体部外面はケズリである。552・

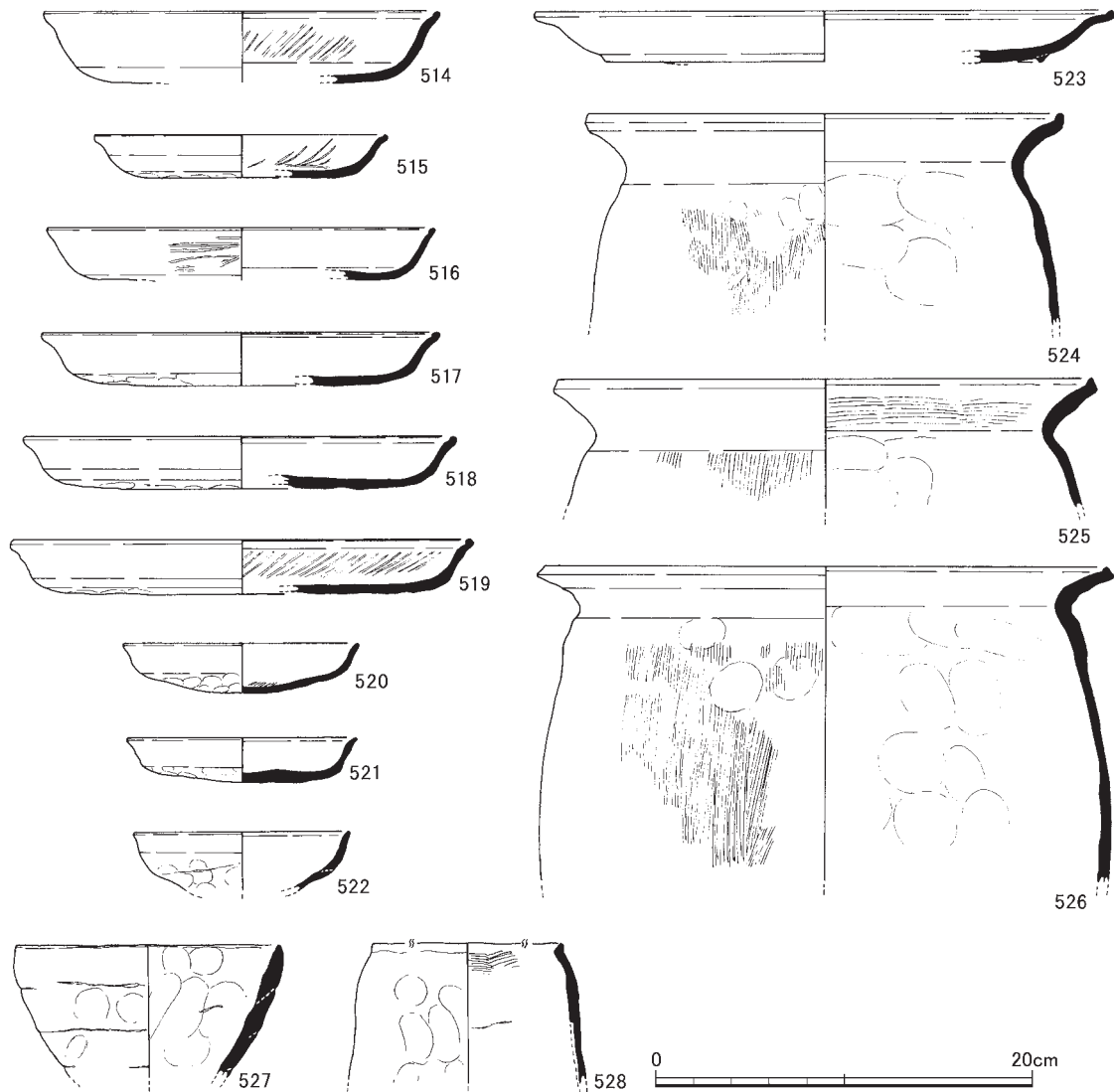


第72図 溝S D21出土土器実測図(1)



第73図 溝S D21出土土器実測図(2)

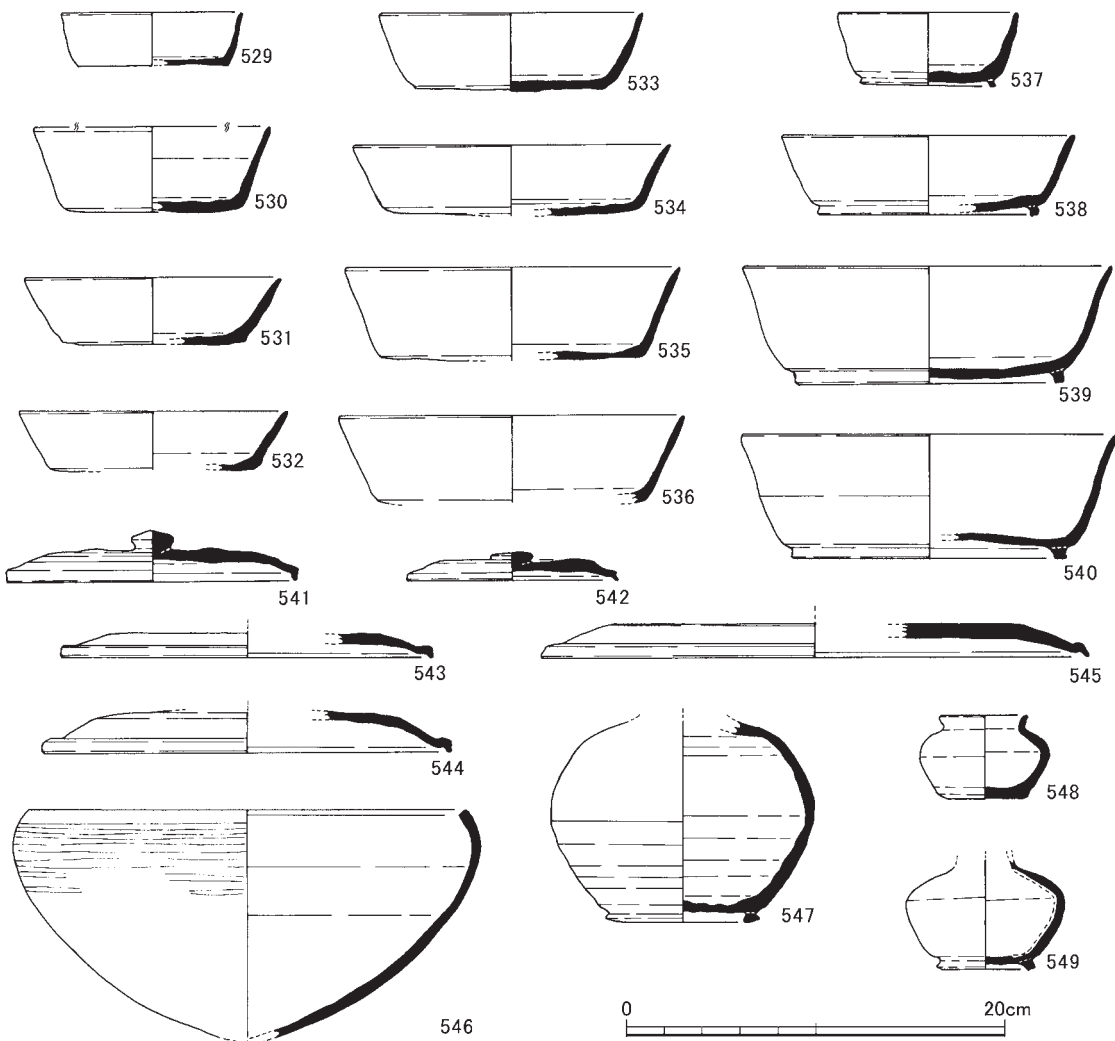
553は皿Aである。口径23.5cm前後、器高3.2cm前後を測る。いずれも外面調整はa0手法で、内面には洗い1段斜放射状暗文が施される。底部内面の螺旋状暗文は摩滅のため不明である。554は皿Bの底部である。底径18.2cm, 残存高1.4cmを測る。555は皿Cである。556は皿で、口径10.6cm、器高2.3cmを測る。口縁端部はヨコナデにより摘むように外反させる。都城ではあまり見られない器形であり、在地系のものである可能性が高い。555・556はいずれも灯明皿である。562は杯B蓋である。562は口径16.8cm、器高2.7cmを測る。外面は4分割で丁寧にミガキ調整をする。内外面に煤が付着している。563は鉢Aである。口縁端部および内面をナデで、体部外面はケズリで仕上げる。557~561は高杯Aである。557・558は杯部である。559~561は脚柱部で、外面をそれぞれ9面・10面に面取りする。557の内面には放射状暗文が、558~560の杯部内面には螺旋状暗文が施される。558は杯部外面をヘラケズリで調整する。564~567は壺Bである。564は口径7.6cm、565~567は口径11.5cm前後を測る。いずれも外面に指押さえの圧痕がみられ、口



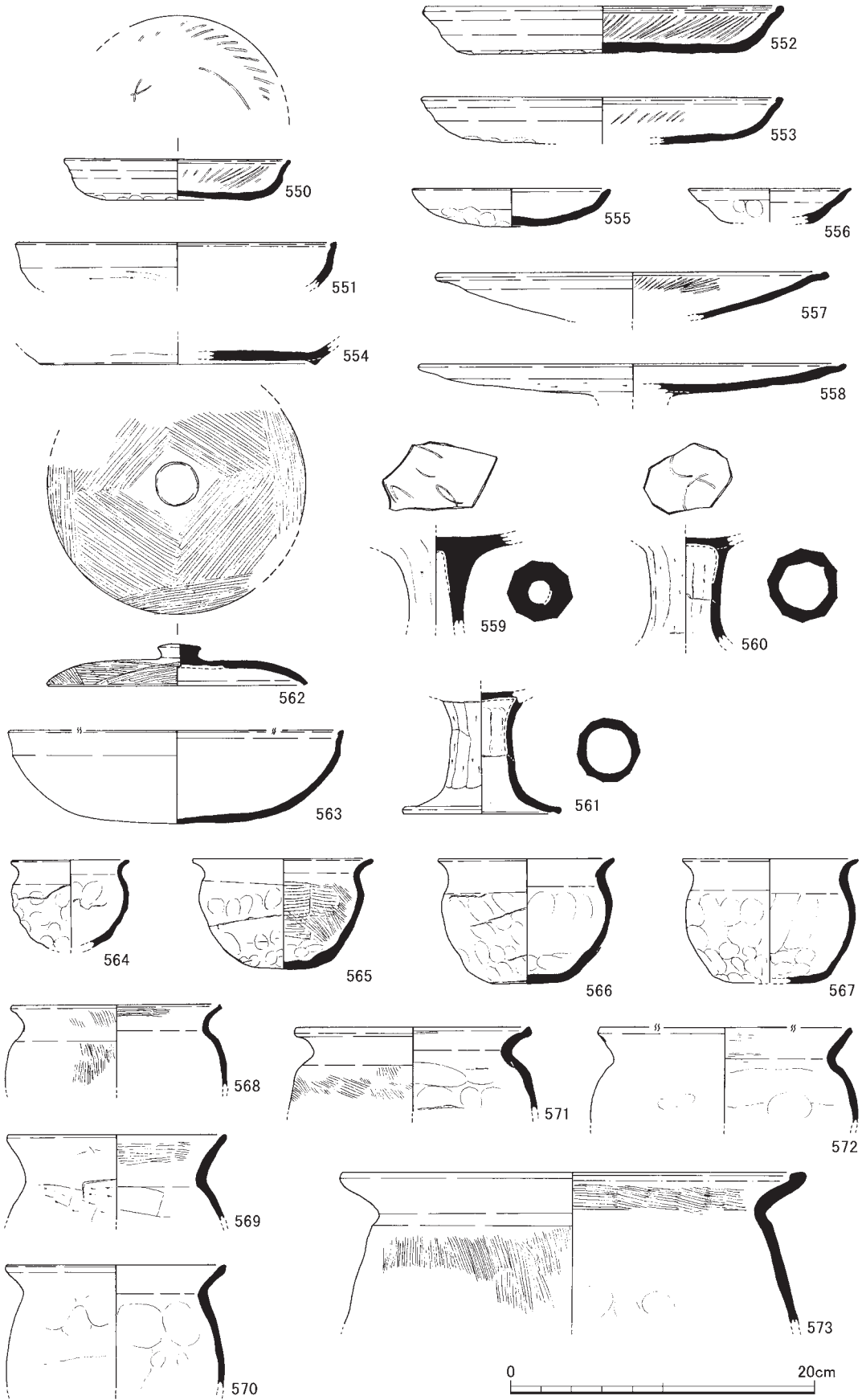
第74図 溝S D21出土土器実測図(3)

縁部および内面はナデにより仕上げる。568～573は甕Aである。571～573は体部外面および口縁部内面はハケ調整し、内面はナデにより、当て具痕を消す。572は外面調整は不明で、内面はナデにより当て具痕を消す。口縁部内面はハケ調整する。569・570は口縁端部を丸くおさめる。569は体部内外面をケズリで調整し、口縁部内面はハケ調整する。570は内外面ともナデ調整する。569・570ともに平城京ではみられないタイプであり、在地の土器と考えられる。

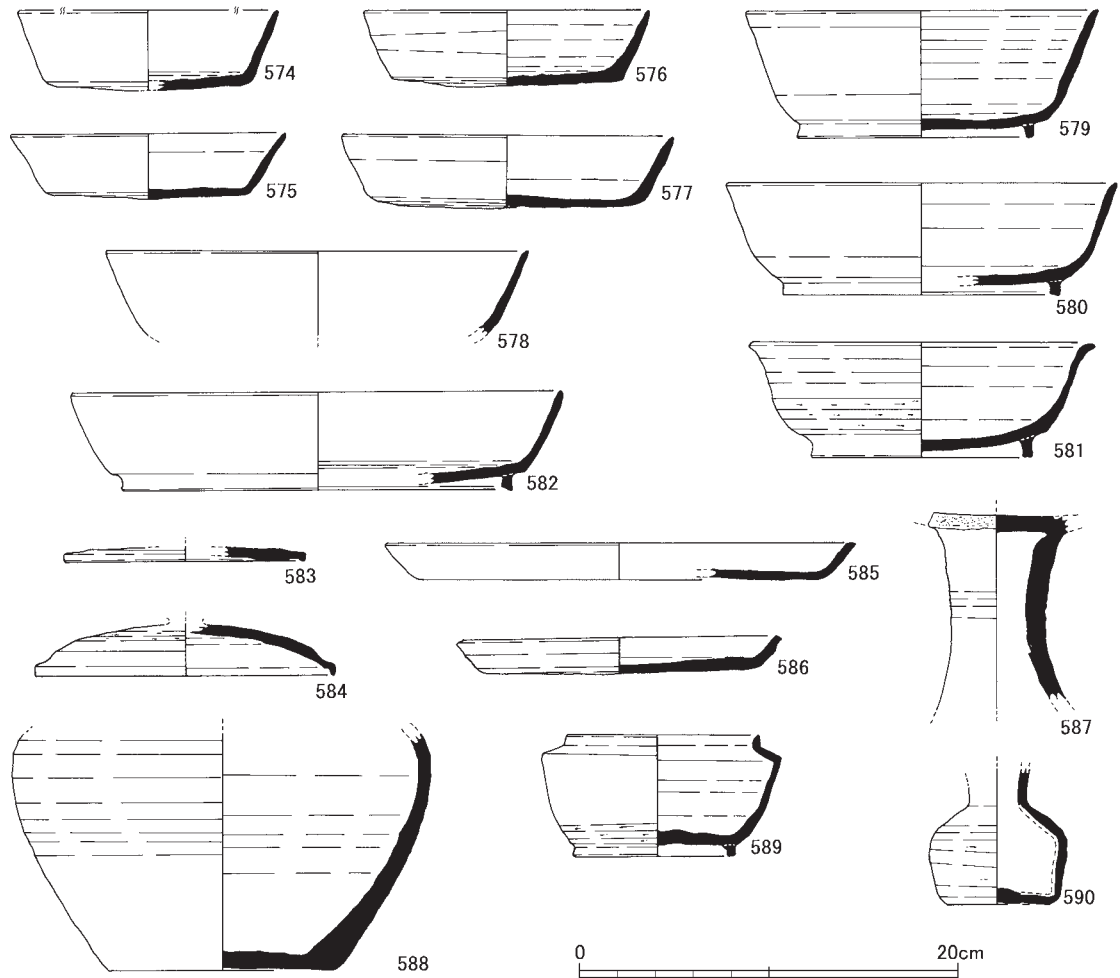
須恵器(574～590)には杯蓋、杯A・B・F、皿B、皿C、高杯、鉢、壺E・Mなどがある。574～577は杯AⅡで、口径13.8～17.6cm、器高3.4～4.2cmを測る。579・580は杯BⅡである。580は器高6.7cmと深手である。578は底部が欠損しているが、体部から底部にかけて緩く湾曲することから杯Bと考えられる。582は皿Bである。581は杯Fで、口径18.0cm、器高6.05cmを測る。口縁端部は外反し、体部下半をケズリで仕上げる。583・584は杯B蓋である。584は笠形を呈する。585・586は皿C、587は高杯脚柱部、588は鉢である。589は壺Eである。口径10.1cm、器高6.4cm、底径8.5cmを測る。体部の下方1/3はケズリで仕上げ、高台を貼り付ける。590は壺Mと考えられる。肩部は体部に向かって緩くカーブする。体部はヘラケズリ後ナデで仕上げている。



第75図 溝S D21出土土器実測図(4)



第76図 溝S D21出土土器実測図(5)



第77図 溝S D21出土土器実測図(6)

底部外面はヘラキリである。

S D21出土の土師器杯・皿は、S X96出土の土師器杯・皿を比較すると、a0手法のものがほとんどであり、連弧状暗文がみられないことや、内面の斜放射状暗文や螺旋状暗文が省略されるものが一定量存在することから、S X96よりも新しい様相をもつ土器群といえる。椀Aが出土していないことを考え合わせると、平城宮土器Ⅲ中～新段階の資料と考えられる。^(注18)

(松尾史子)

掘立柱建物跡S B01(第78図597) 597は土師器鍋もしくは甕の口縁部の破片である。内面にハケ調整を施し、口縁端部を内方に折り返す。復元口径36.6cmを測る。柱穴S P65から出土した。

掘立柱建物跡S B03(第78図591・592) 591は須恵器杯Bの底部である。底部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。底径12.9cmを測る。592は土師器杯Cである。全体に摩滅が著しく、内面の暗文の有無は不明である。口径16.5cm、残存高2.7cmを測る。ともに柱穴S P49から出土した。

掘立柱建物跡S B04(第78図593～595) 593は土師器甕である。口縁部は緩やかに「く」字状に屈曲する。柱穴S P60から出土した。594は杯B蓋のつまみの破片である。595は土師器壺Bで、ほぼ完形である。口縁部内外面にヨコナデ調整、体部外面にナデ調整とユビオサエ、体部内面にナデ調整を施す。口径9.3cm、器高7.5cmを測る。594・595は柱穴S P58から出土した。

土坑 S K 41 (第78図596)

596は須恵器杯Aである。焼け歪みがみられるものの、口径13.3cm、器高3.7cmを測る。底部外面はヘラキリ後ナデ調整を施す。

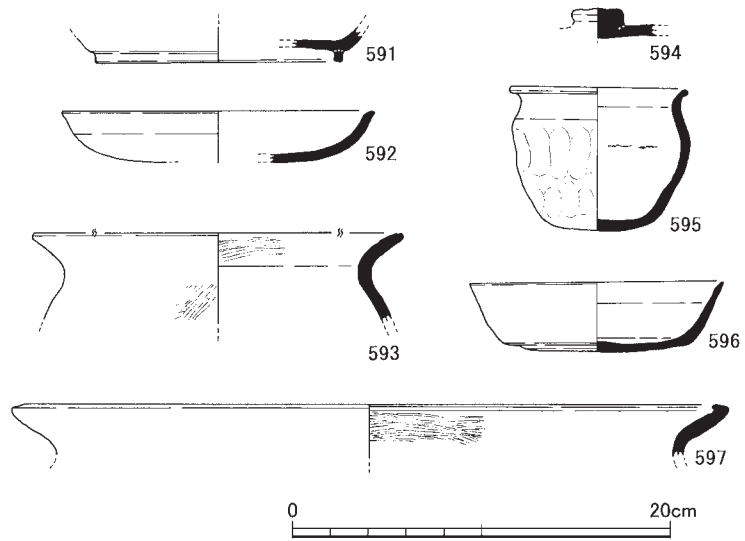
(4)その他

今回の調査では、木簡・瓦埴類・土器類のほかに、土馬やミニチュア竈などの土製品、銅椀や鉄釘などの金属製品が出土した。また、鞆の羽口の破片も出土しており、調査地周辺に金属製品生産関連遺構の存在が予想される。図示した遺物はいずれもB地区出土である。

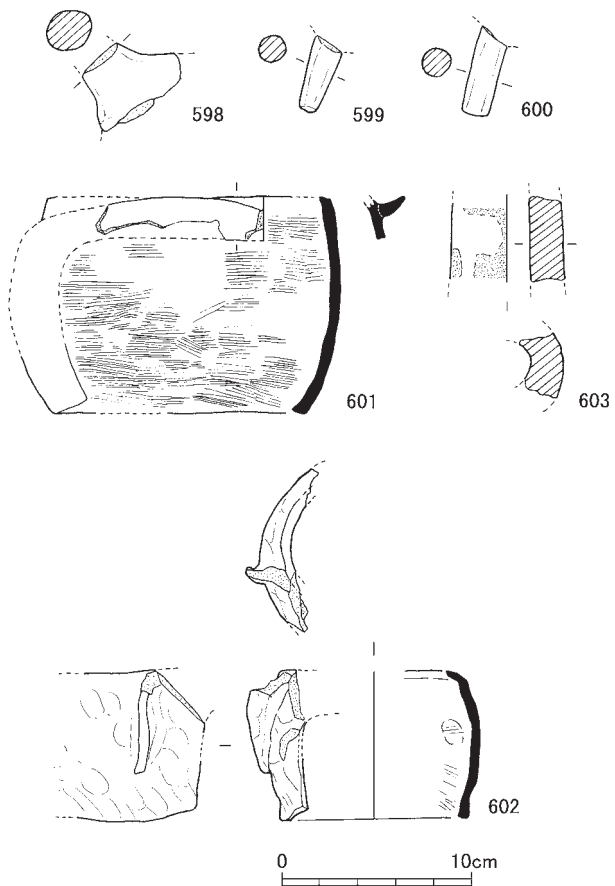
①土馬(第79図598~600) 598は土馬の首から体部にかけての破片、599・600は脚部と思われる。いずれも淡めの橙褐色を呈する。598は溝 S D 21南部、599・600は S D 21北部で出土した。600は残存長4.7cm、脚部の直径1.6cmを測る。

②ミニチュア竈(第79図601・602) 2点とも破片で出土しており、全容が明らかにできるほど復元することはできなかった。601は溝 S D 21中央部で出土した。1/3程度残存し、底径12.4cm、器高11.5cmを測る。外面に縦方向のハケ調整を、内面に横方向のハケ調整を施す。長さ1.6cmの庇がつくようである。602は溝 S D 86で出土した。1/6程度の破片であるが、底径9.8cm、器高8.0cmを測り、601よりも一回り小型である。内外面ともにユビオサエやナデ調整を施す。また、内面にはハケ調整を加えていると思われる。甕の受け部は大きく内方に屈曲させて、ヨコナデ調整を施す。

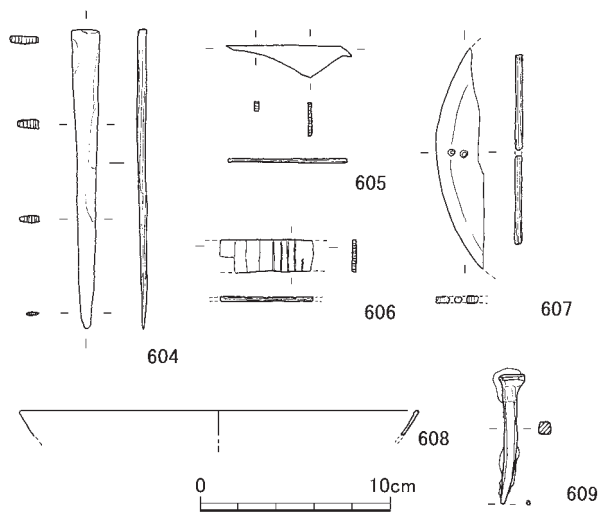
③鞆羽口(第79図603) 図示したもの以外にも羽口と思われるものがある(図版第48-737)。



第78図 B地区奈良時代遺構出土土器実測図



第79図 土製品実測図



第80図 木製品・銅製品・鉄製品実測図

603は溝S D21中央部の最上層から出土した。残存長は4.5cmを測る。直径は6.0cm、内径は2.4cmに復元できる。737は土坑S X96から出土した羽口の先端である。

④木製品(第80図604~607) いずれも土坑S X96の木屑層から出土した。604は不明木製品である。全長15.8cm、最大幅1.5cm、最大厚さ0.5cmを測る。図のどちらが上下かも明らかではないが、表面には墨痕等もみられず、あるいは木筒の未使用品かもしれない。605も不明木製品である。いずれが上下が明らかではないが、

各辺とも加工痕が認められる。長さ6.7cm、幅1.7cm、厚さ0.2cmを測る。606は表面に目盛と思われる刻みがあることから定規と考えられる。残存長5.0cm、幅1.8cm、厚さ0.3cmを測る。607は曲げ物の底板と考えられる。直径4mm程度の孔が2か所並んで穿たれている。

⑤銅製品(第80図608) 銅碗の破片1点が土坑S X96炭層から出土した。608は口縁部のみが遺存し、推定口径21.0cm、残存高1.3cmを測る。緑灰色を呈するが、錆で脆弱化していない。

⑥鉄製品(第80図609) 土坑S X96から出土した鉄釘1点を図示したが、ほかにも数点の鉄釘がS X96から出土している。609はやや湾曲しているものの、断面方形の鉄釘である。全長7.2cm、断面の大きさは0.7cm四方を測る。

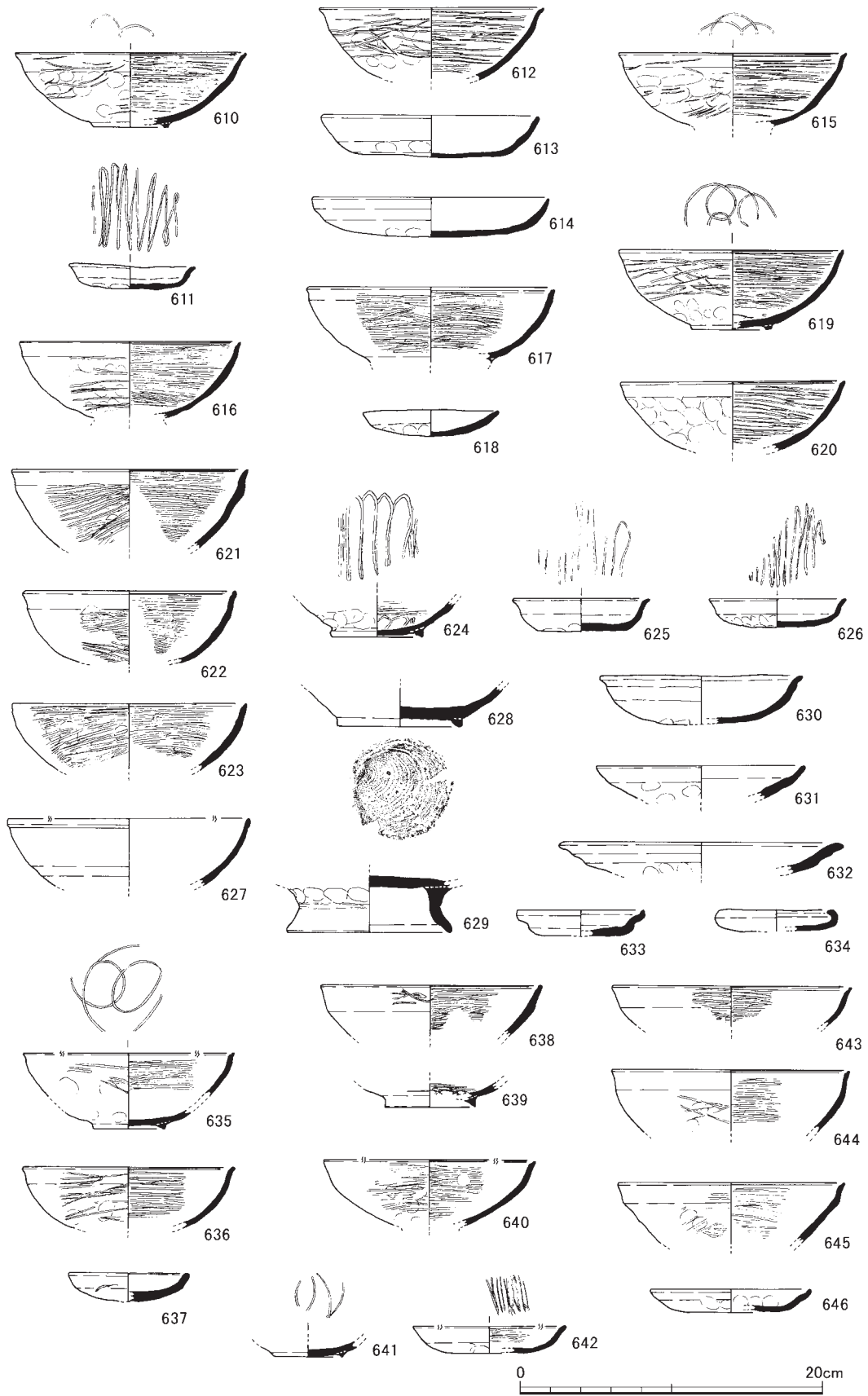
⑦漆塗り製品(図版第47-2) 土坑S X96から出土した用途不明の製品で布状を呈する。片面に織物の痕跡が認められる瓦、裏面にはなく、素材は不明であるが、皮などに織物を漆で固定したような構造かと思われる。折り重なったような状態で出土しており、整理箱に底に敷き詰めると、およそ4箱文ほどが出土している。

⑧その他(図版第48-2 738・739) 土坑S X96からはこれまでに報告してきた遺物のほか、スサ入りの土壁状の塊や、鉍物滓等も出土している。これらの用途は不明であるが、土坑S X96の性格を考える上で、重要な資料となる。

3) 中世

中世に属する遺物の大半はA2地区で出土したが、これはA2地区で上層遺構面を3面確認するとともに、土坑や柱穴などの遺構を多数検出したためである。これに対してA1地区やB地区では検出した遺構の大半が耕作溝であったため、遺物が少ない。以下で報告する遺物はすべてA2地区ならびに第1次調査第1トレンチ出土のものである。

溝S D314(第81図610・611) 610は瓦器碗である。内面に密にミガキ調整を施す。高台の断面形は方形を呈する。見込みに螺旋状暗文を施す。口径15.4cm、器高4.9cmを測る。611は瓦器皿で、焼け歪みが著しい。見込みに平行線状の暗文を施す。口径8.6cm、器高1.6cmを測る。



第81図 A2地区中世遺構出土土器実測図(1)

溝S D 106(第81図612~614) 612は瓦器椀である。内外面ともやや粗いミガキ調整を施す。復元口径14.9cmを測る。613・614は土師器の皿で、大型品である。どちらも全体にユビオサエやナデで調整し、口縁部にヨコナデ調整を施すが、摩滅気味である。613はほぼ完形で、口径14.3cm、器高2.8cmを測る。614は口径15.7cm、器高2.6cmを測る。

溝S D 105(第81図615) 615は瓦器椀である。内面に密にミガキ調整を施す。見込みに螺旋状暗文を施す。

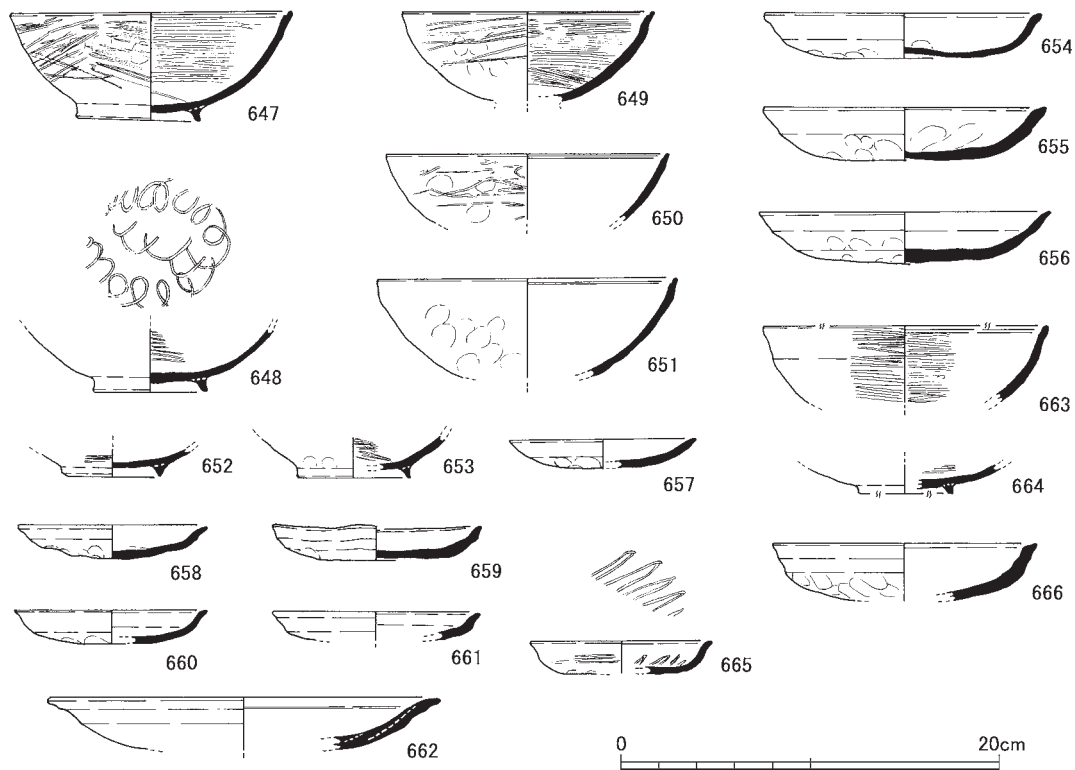
柱穴S P 181(第81図616) 616は瓦器椀である。内面に密にミガキ調整を施す。

柱穴S P 152(第81図617) 617は瓦器椀である。内外面とも密にミガキ調整を施す。他の個体にくらべ器壁がやや厚い。復元口径16.4cmを測るが、もう少し小さいかもしれない。

柱穴S P 118(第81図618) 618は土師器皿で、全体に摩滅が著しい。口径9.0cm、器高1.8cmを測る。

土坑S K 116(第81図619・620) 619・620はともに瓦器椀である。619は内面にやや粗めのミガキ調整を施すが、外面にミガキ調整を施さない。620は内面に密にミガキ調整を施す。高台の断面形は方形を呈する。見込みに螺旋状暗文を施す。口径14.8cm、器高5.2cmを測る。溝S D 314出土の瓦器椀(610)によく似た特徴・法量である。

土坑S K 143(第81図621~634) 621~624は瓦器椀である。621~623は口縁部の破片で、内外面とも密にミガキ調整を施す。3点ともほぼ同形同大で、口径14.0~15.6cmを測る。614は底部で断面三角形の高台を貼り付ける。見込みに平行線状の暗文を施す。625・626は瓦器皿である。



第82図 A 2 地区中世遺構出土土器実測図(2)

底部内面に並行縁状の暗文を施す。口径9.0～9.1cm、器高1.9～2.2cmを測る。627は白磁碗の破片である。口縁端部外面は小さな玉縁状を呈する。復元口径16.0cmである。628は須恵器碗の底部である。外面に糸切り痕を残し、高台を貼り付ける。629は脚台付の皿もしくは杯の脚台部である。脚台の高さは3.0cmを測る。630～632は土師器の大型の皿である。器形はいずれも異なるが、630・632は口縁部に二段のヨコナデ調整を施す。630は口径13.4cm、残存高3.1cmを測る。633・634は土師器の小型の皿である。633はいわゆる「て」字状口縁で、端部をつまみ上げる。口径8.4cm、器高1.7cmを測る。634は口縁部を内方に折り曲げるもので、いわゆる「コースター形」を呈する。

柱穴 S P 22 (第81図635～637) 635・636はほぼ同形同大の瓦器碗で、外面にやや粗めのミガキ調整を施し、内面は密にミガキ調整を施す。635は見込みに螺旋状暗文を施す。高台は断面三角形を呈する。637は土師器の小型の皿である。

柱穴 S P 52 (第81図638・639) 638・639は瓦器碗であるが、同一個体かどうかは判断できない。内面のミガキ調整は密である。639は見込みに螺旋状暗文を施す。

土坑 S K 39 (第81図640～642) 640は内外面とも密にミガキ調整を施す。641が瓦器碗の底部で、見込みに螺旋状暗文を施す。高台は小さな断面三角形を呈する。642は瓦器皿で、内面に平行線状の暗文を施す。

土坑 S K 51 (第81図643～646) 643～645は瓦器碗の口縁部の破片で、3点ともほぼ同形同大である。643は内外面とも密にミガキ調整を施すが、644・645は内面のみ密にミガキ調整を施し、外面は粗いミガキ調整を施す。646は土師器の小型の皿で、口縁端部をわずかにつまみ上げる。

溝 S D 24 (第82図647～662) 647～653は瓦器碗である。647は内外面にミガキ調整を施す。高台の断面形は台形に近い三角形状を呈する。口径14.8cm、器高5.7cmを測る。648は底部の資料で、見込みに螺旋状暗文をほかの個体よりもやや細かく施す。高台の断面形は台形状を呈し、647よりもやや古い特徴を有する。649～651は口縁部の破片であるが、650・651は摩滅のため、器表面のミガキ調整の粗密が不明である。652・653は底部の破片で、高台は断面三角形を呈する。654～656・662は土師器の大型の皿である。いずれも全体にユビオサエやナデで調整し、口縁部にヨコナデ調整を施す。656・662は二段にヨコナデ調整を施す。657～661は土師器の小型の皿である。大型の皿と同様に全体をユビオサエやナデで調整し、口縁部にヨコナデ調整を施す。660・661は口縁部を外反させる。

溝 S D 23 (第82図663～666) 663・664は瓦器碗である。どちらも小破片である。663は内外面に密にミガキ調整を施す。664は断面方形の高台を有する。665は瓦器皿で、底部内面に平行線状の暗文を施す。666は土師器の大型の皿である。654～656などに比べると、やや厚手である。全体をユビオサエやナデで調整し、口縁部に二段にヨコナデ調整を施す。

4) 遺物包含層

今回の調査では、遺構面の数が多く、これに伴った形成された遺物包含層からも多数の遺物が出土した。また、遺構面として確認できた時期以外の遺物も出土していることを確認した。ここ

では代表的な遺物包含層出土の遺物を報告する。

(1) 土器

667・668は弥生時代中期の土器である。667は外面にタタキ調整を施す甕の肩部の破片である。668は甕の底部と考えられ、底径は9.4cmを測る。

669～679は古墳時代の土器で、669～674は土師器、675～679は須恵器である。669は庄内式甕の肩部の破片である。670は受け口状の口縁部を呈する壺の口縁部である。671は底径4.8cmの突出底をもつ壺の底部である。672は口径16.9cm、残存高5.4cmを測る高杯杯部である。杯部はおおむねヨコナデ調整である。673は平底気味の壺の底部である。674は口縁部が「く」字状を呈する甕である。1次調査2トレンチで出土したもので、奈良時代遺構面の下層に古墳時代の遺構面が存在する可能性を示した土器である。675は杯蓋で、口径11.6cm、器高4.4cmを測る。天井部の2/3程度に回転ヘラケズリ調整を施す。陶邑編年のTK23～TK47型式に位置づけられよう。676・677は杯身である。676は小破片であるが、675とほぼ同時期かやや新しい時期に位置づけられる。677は口縁部が短く立ち上がり、底部外面の回転ヘラケズリもほとんど認められない。土器溜まりSX91とほぼ同時期に位置づけられる。679は提瓶である。口縁部と体部下半を欠損する。外面にカキメを施し、環状の把手を肩部に貼り付ける。詳しい時期は不明であるが、TK10型式ないしMT85型式に位置づけられる。

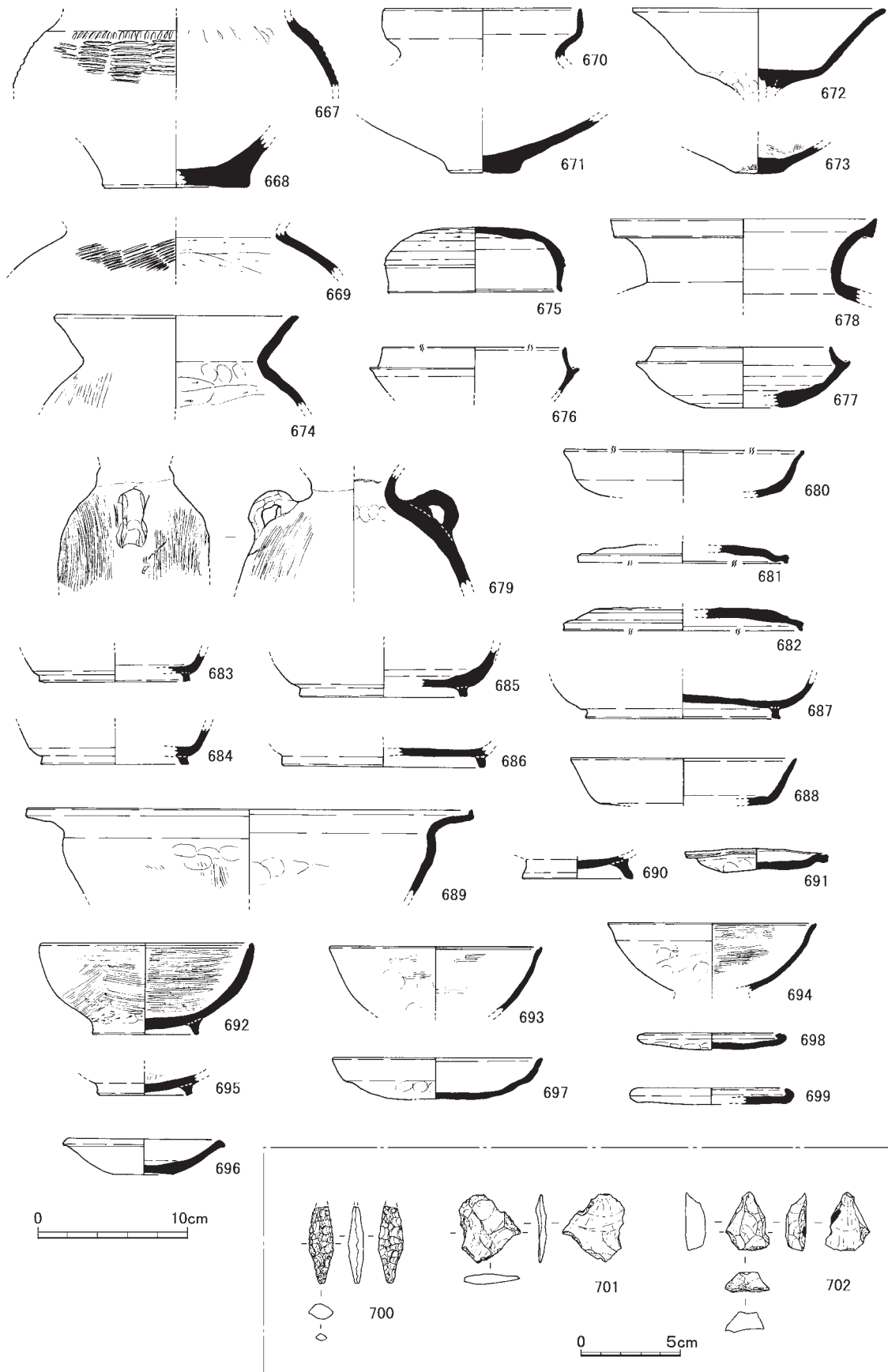
680～689は奈良時代の土器で、680・689が土師器、その他が須恵器である。680は杯Aで、内面に暗文は認められない。681・682は杯B蓋である。681は口縁部が屈曲気味であるのに対して、682は屈曲せず全体の形状が笠形に近い。683～687は杯Bの底部である。686・687は底部外面に回転ヘラケズリ調整を施した後に高台を貼り付ける。688は杯Aで、口径15.2cm、残存高3.2cmを測る。689は鍋Aで、口径29.9cm、残存高5.7cmを測る。全体に摩滅気味で、内面に煤が付着する。

690・691は平安時代の土器である。690は黒色土器碗の底部である。底径7.4cm、残存高1.5cmを測る。691は土師器皿で、口縁部がいわゆる「て」字状を呈する。口径9.7cm、器高1.6cmを測る。

692～699は中世の土器で、692～695が瓦器碗、696が白磁、697～699が土師器である。692はやや厚手の個体で、口縁部が内湾気味に立ち上がる。内外面とも密にミガキ調整を施すが、見込みに暗文は認められない。外面のミガキ調整に先行して器表面にケズリ調整を施す。出現期に近い特徴を持つ瓦器碗で、11世紀後半ごろのものと考えられる。693・694は口縁部が内湾気味に立ち上がった後、ヨコナデ調整によって外反するものである。695は底部の破片で、高台の断面形が方形を呈する。696は小型の白磁皿である。口径10.0cm、器高2.3cmを測る。697は大型の皿である。口縁部内外面にヨコナデ調整を施し、底部内外面はユビオサエヤナデ調整を施す。698・699は小型の皿で、いわゆる「コースター形」と呼ばれるものである。698は口径9.0cm、器高1.1cmを測る。

(2) 石器

3点を図示した。確認した石器はこの3点のみで、いずれもサヌカイト製である。700は石鏃である。先端が折損するが、残存長3.9cm、最大幅1.3cmを測る。701は剥片である。702は楔形



第83図 遺物包含層出土遺物実測図

石器である。一部に自然面が残る。

7. まとめ

平成21・22年度に実施した上粕北遺跡の調査では、古墳時代・奈良時代・中世の各時期の遺構・遺物を多数検出し、大きな成果を得ることができた。また、遺構や遺物がほとんどみられなかった時代もあるが、遺跡の変遷や性格を考える上では重要な成果といえる。以下では、周辺の遺跡の調査成果とも絡めながら、時代ごとに調査成果をまとめたい。

①弥生時代

今回の調査で、弥生時代の遺構を検出することはできなかった。しかし、少量とはいえ、弥生土器や石器が出土したことから、調査地周辺に当該期の遺構の存在する可能性がある。当遺跡の西側に位置する上粕西遺跡では弥生時代後期の竪穴式住居跡が検出されており、今後、調査地周辺でも弥生時代の遺構の広がりが予想される。

②古墳時代前期～古墳時代中期前半

古墳時代前期では、顕著な遺構を検出することはできなかったが、庄内式甕や布留式甕を検出することができた。これらの遺物が示す年代は椿井大塚山古墳の築造年代に近く、椿井大塚山古墳を築造した集落、あるいは集団の1つが、現在の上粕周辺に存在したことを示唆している。資料数が少ないため、不明確な点もあるが、布留1式を前後する時期のものであろう。

これらに後出する資料が、当遺跡の東に位置する上粕東遺跡で出土している。報告書によれば、布留2～4式(古)段階に比定されている^(注19)。この資料に続くのが今回の調査で検出した土坑SK126出土の資料である。SK126からは布留式の特徴を持つ土器群とともに、大型化した高杯や体部に縄蓆文を施した陶質土器甕などが出土しており、布留4式、すなわち古墳時代中期初頭ないし前半に位置づけられる。これまで旧山城町域では古墳時代前期～中期前半の集落遺跡は確認されていないが、今回の出土遺物から上粕北遺跡周辺に当該期の集落の存在が予想されるとともに、南山城地域南部における渡来系の要素を有する集落の出現がこの時期まで遡る可能性もある。

③古墳時代中期後半～後期

須恵器出現以降の古墳時代中期後半になると、上粕北遺跡では集落の形成がみられる。今回の調査で検出した竪穴式住居跡は11基あるが、中期後半～後期後半まで継続して集落が営まれたと考えられる。また、調査地を中心に広範囲に集落が形成されていた可能性もある。今回検出した竪穴式住居跡の中には渡来系の特徴とされる「L字形竈」をもつ住居跡を1基検出した(ほかに可能性のあるものが1基ある)。このような渡来系要素を持った竪穴式住居跡の確認は、旧山城町域でははじめてであるが、木津川を挟んだ西側に位置する精華町森垣外遺跡では、渡来系の特徴とされる大壁住居跡や陶質土器・韓式系土器などが検出されている^(注20)。地名としても当遺跡所在地の「上粕」に対して精華町には「下粕」(森垣外遺跡は隣接地に所在)という地名があり、「粕＝高麗(高句麗)」と考えられ、地名の上では渡来系氏族の存在などが考えられている。今回、上粕北遺跡でわずかな事例であるが、渡来系要素を確認したことは地名の由来となった歴史的背景を

明らかにするための一素材を提供できたという点で評価できる。

④飛鳥時代

今回の調査では飛鳥時代に属する遺構・遺物はまったく確認できなかった。この時期は、調査地の南東1.1kmに位置する高麗寺跡の造営が行われたが、造営主体となる在地氏族の集落については未確認である。上狛北遺跡でこの時期の集落が古墳時代後期に引き続き営まれていてもよいと思われるが、何らかの理由により集落が廃絶、あるいは移動してしまったようである。その後、奈良時代中頃まで、当遺跡周辺での土地利用はほとんどされていなかった可能性がある。

⑤奈良時代

今回の調査では最も大きな成果が得られた。まず、土坑S X96では木簡や墨書土器が多数出土した。特に179の「讃岐國……」木簡については、正確な内容は不明であるものの、他地域からもたらされた木簡である点で重要である。これは上狛北遺跡やその周辺に、讃岐国の郡司が文書をやり取りするような施設があった可能性を示す。すでに木簡の報告でも触れたように、「讃岐國……」、「海戸主……」の両木簡の内容は、平城京域で出土するものに類似したものを見いだすことができる。したがって、上狛北遺跡には平城京域と同等の性格を有する施設が存在した可能性を示している。その場合、八省やその被管官司などの中央官衙の可能性や、有力寺院もしくは貴族がもつ家政機関のような組織の可能性もある。またS X96では、平城宮や平城京で出土する土器と比較しても遜色のない土器群が多数出土した。遺物の項で検討したように平城宮土器Ⅲの古段階に位置づけられる。さらに恭仁宮造営時の軒瓦(恭仁宮KH01型式・KH04A型式)も出土している。以上の点から土坑S X96は、恭仁宮遷都時(天平12(740)年12月)を含む天平年間前半ごろの遺構と推定される。

次に総延長100m以上を測る南北方向の溝S D21は、長さや方位性から計画的に掘削された溝と考えられる。S D21の西側で検出された掘立柱建物群を区画している可能性や、東側に同様の溝があつて道路遺構となる可能性もある。S D21出土の土器はS X96よりもやや新しい様相を示し、平城宮土器Ⅲの中～新段階に位置づけられる。これらの土器はS D21の埋没年代を示し、恭仁遷都から平城遷都後しばらくの間の短い期間が想定できる。S D21の掘削時期は不明であるが、上述のように建物と溝の一体性を考慮すると、溝の時期がS X96を大きく遡ることはないと思われる。掘立柱建物群は、規模が小振りであるものの、正方位を指向して配置されていることから、溝と一体に計画的に配置されたものと考えられる。

以上のように、上狛北遺跡に平城京域と同等、あるいはそれに準じる性格の施設が存在したと考えるならば、遺跡の存続時期や遺跡の位置を考えると、それは恭仁京である可能性が最も高い。^(注21)これらの遺構が恭仁京にともなうものであるとすれば、S X96は恭仁京の京域や諸施設の造営によって生じた不要物を廃棄した土坑、溝S D21や掘立柱建物群は京域の施設の一画であると評価することができる。

今回の調査では、恭仁宮が営まれたのとほぼ同時期の遺構を検出することができた。そして、この遺構群は、上述のように、恭仁京に伴う遺構である可能性が高い。この遺構群の検出によっ

て、その存在が疑問視されがちであった恭仁京の京域について、存在する可能性をはじめて示すことができたといえる。また、S X 96から出土した木簡も、遺構の性格を評価する上では重要な成果といえる。しかし、恭仁京そのものはわずか3年余りの都であり、どこまで条坊等の整備が進んでいたのか、まったく明らかではない。こうした点をふまえると、恭仁京の京域の広がりや施設の整備などについては、今後の調査・研究に期待される。

⑥平安時代・中世

上層遺構として中世の遺構群を検出した。検出した遺構の大半は耕作溝で、A1地区とA2地区の南半部で掘立柱建物跡や多数の柱穴を確認した。検出状況から調査地の北半部は耕作地、南半部は集落の一面と推定される。これらに伴って出土した瓦器碗には、出現期に近いものが含まれ、上狛北遺跡における中世集落の形成が11世紀代後半まで遡る可能性がある。また、今回の調査では、少量ながらも平安時代の遺物が出土した。調査地周辺に平安時代の遺構が広がる可能性もある。

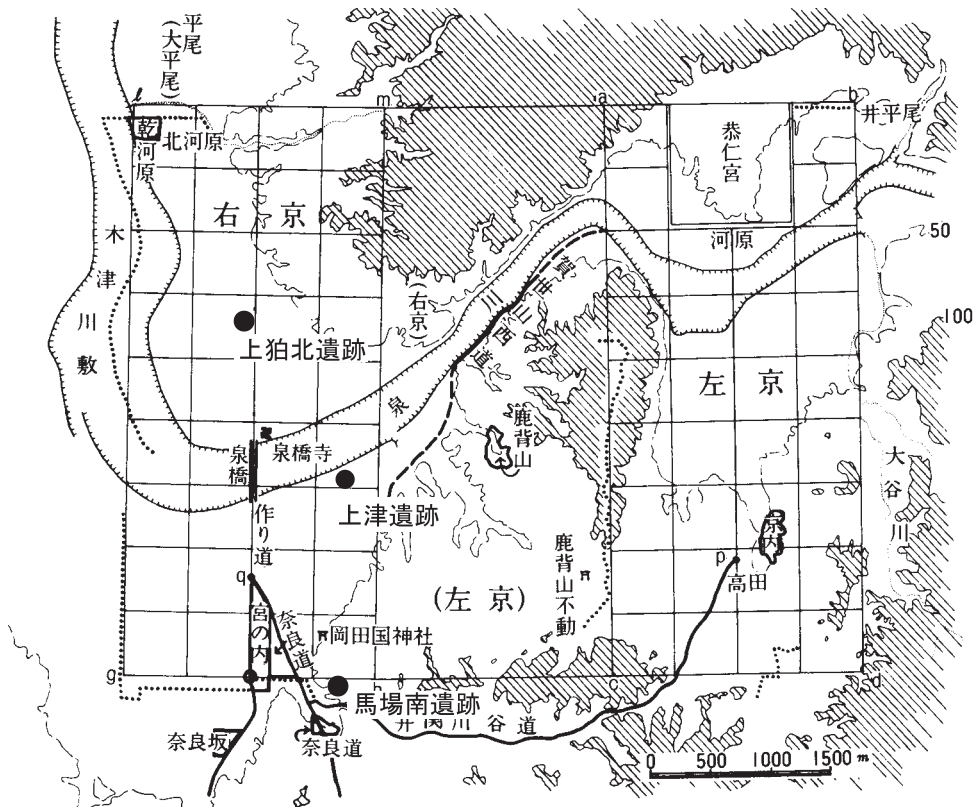
(筒井崇史)

注1 木簡の保存処理ならびに樹種同定作業は株式会社吉田生物研究所に委託した。

注2 放射性炭素年代測定は株式会社パレオ・ラボに委託した。

注3 「L字形竈」については、以下の文献を参照した。

松室孝樹「竈穴住居に設置されるL字形カマドについて」(『韓式系土器研究』VI 韓式系土器研究会)



第84図 恭仁京域と上狛北遺跡(足利健亮氏作成の図を一部改変)

1996

- 注4 須恵器の編年については以下の文献を参照した。
田辺昭三『陶器古窯址群Ⅰ』（平安学園考古学クラブ）1966
田辺昭三『須恵器大成』（角川書店）1981
- 注5 古墳時代後半期の土師器の編年については以下の文献を参照した。
辻美紀「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」（『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室）1999
- 注6 古墳時代前半期の土師器の編年については以下の文献を参照した。
寺澤薫「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」（『矢部遺跡』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第49冊 奈良県立橿原考古学研究所）1986
- 注7 長岡京跡左京第13次調査では
「・「海」戸主秦小田比戸同吉万呂 ・□□米五斗上人吉万呂」がみられる。
向日市教育委員会『長岡京木簡Ⅰ』（1984）
西大寺食堂院推定地では
「少戸主波太郎直万呂戸田料大豆五斗」、「少戸主波太郎直万呂大豆五斗」、「少波太郎直万呂」、
「少戸主□□□□紀須大豆五斗」などがみられる。
独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所編『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告』2007
- 注8 奈良国立文化財研究所『平城宮木簡Ⅰ』1966・1969
- 注9 貢進者が女性で、同様の書式で書かれた木簡には平城宮跡推定造酒司宮内道路南側溝で出土した「中村郷戸主丸部今赤戸口真魚女米五斗」がある。
奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡概報』32（1996）
- 注10 恭仁宮出土瓦については下記の文献を参照した。
京都府教育委員会編『恭仁宮跡発掘調査報告 瓦編』（1984）
また、京都府立山城郷土資料館に収蔵されている恭仁宮跡出土瓦について資料調査を実施した。資料の実見については同館森島康雄氏にお世話になった。記して感謝したい。
- 注11 軒瓦の型式名は奈良文化財研究所が使用しているものを使用する。
奈良国立文化財研究所編『平城宮跡発掘調査報告Ⅵ』（1974）ほか
- 注12 奈良国立文化財研究所編『平城宮跡発掘調査報告ⅩⅢ』（1991）
- 注13 岸本直文「軒瓦6282-6721の年代観」（『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』奈良国立文化財研究所）1995
- 注14 丸瓦の製作技法の分類については下記の文献に準じる。
大脇潔「丸瓦の製作技術」（『研究論集Ⅸ 奈良国立文化財研究所学報 第49冊』奈良国立文化財研究所 1991）
- 注15 土師器・須恵器の器種名は下記の文献を参照した。
小笠原好彦・西弘海・吉田恵二「土器」（奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告Ⅶ』（『奈良国立文化財研究所学報』第26冊）1976
安田龍太郎・巽淳一郎・沢田正昭「土器」（奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告ⅩⅠ - 第1次大極殿地域の調査 -』（『奈良国立文化財研究所学報』第40冊）1981
神野恵「土器類」（奈良文化財研究所編『平城宮発掘調査報告ⅩⅥ - 兵部省地区の調査 -』（『奈良文化財研究所学報』第70冊）2005

注16 土師器供膳具の調整手法は、奈良文化財研究所の報告に準じて以下のような記号を組み合わせで使用する。

①調整手法

- ・ a手法 口縁部外面をヨコナデし、底部は未調整のもの。
- ・ b手法 口縁部外面をヨコナデし、底部はヘラケズリで調整するもの。
- ・ c手法 口縁部以下の外面全体をヘラケズリするもの。
- ・ e手法 口縁部以下を幅狭くヨコナデし、それよりしたは未調整のもの。

②器表面の調整手法

- ・ 0手法 ミガキ調整を施さないもの。
- ・ 1手法 口縁部のみミガキを加えるもの。
- ・ 2手法 底部のみミガキを加えるもの
- ・ 3手法 口縁部から底部にかけてミガキを施すもの。

注17 製塩土器については下記の文献を参照した。

積山洋「律令制期の製塩土器と塩の流通」(『ヒストリア』第141号 大阪歴史学会) 1993

注18 上粕北遺跡の調査抄報(『京都府埋蔵文化財情報』第115号)では、溝S D21の時期を平城宮土器Ⅳとして報告したが、報告後に奈良文化財研究所で、土器資料の検討を行ったところ、平城宮土器Ⅲの中～新段階に位置づけるのが妥当であるとの認識に至った。したがって、S D21の埋没年代については、平城宮土器Ⅲの中～新段階に訂正したい。

注19 中島正・永澤拓志「上粕東遺跡における布留式土器の様相とその背景」(『上粕東遺跡』(『京都府山城町埋蔵文化財調査報告』第24集) 山城町教育委員会) 2000

注20 小池寛ほか「森垣外遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第86冊 1999)、小池寛ほか「森垣外遺跡第3次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第91冊 2000)、小池寛ほか「森垣外遺跡第4次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第96冊 2001) いずれも(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注21 第84図は恭仁京の復元を行った足利健亮氏の復元案に上粕北遺跡をはじめ、恭仁京期の代表的な遺跡を図示したものである。

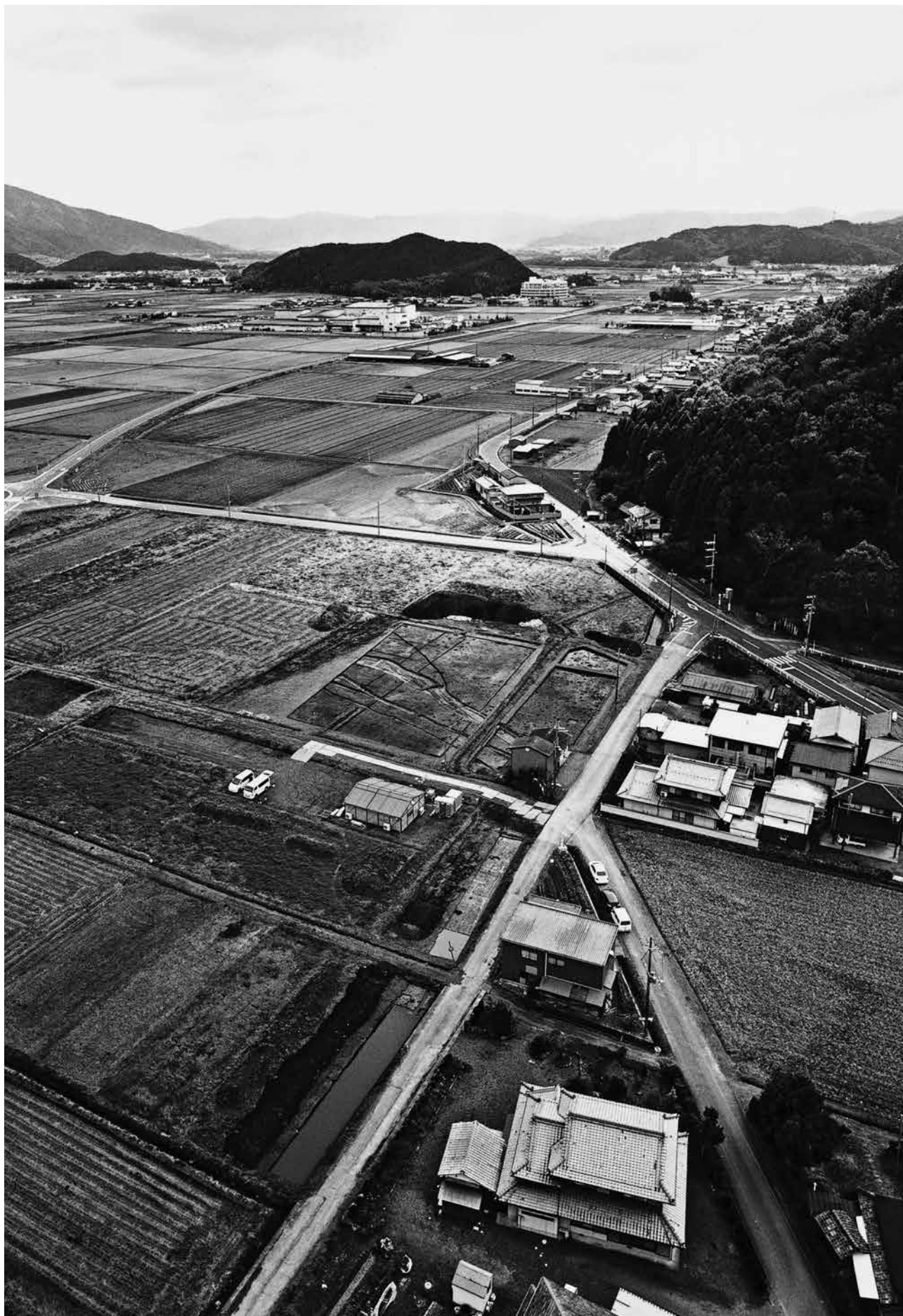
付表1 土坑S X96出土削屑一覧表

報告番号	整理番号	出土層位	釈文
703	削屑 1	4区 木屑層	じ じ
704	削屑 2	4区 木屑層	〔言カ〕 〔千 千 千カ〕
705	削屑 3	4区 木屑層	□ 段 段 段
706	削屑 4	4区 木屑層	□ 多カ 多カ 多カ
707	削屑 5	4区 木屑層	□ □ □
-	削屑 6	4区 木屑層	(削屑3と接合)
708	削屑 7	4区 木屑層	□ □ □ □
709	削屑 8	4区 木屑層	□ □
710	削屑 9	4区 木屑層	□ □
711	削屑 10	4区 木屑層	□ □ □
712	削屑 11	3区 木屑層	□ じ じ じ じ
713	削屑 12	4区 木屑層	□ □ □ □ 行カ □
714	削屑 13	不明	□ □
715	削屑 14	不明	□〔言カ〕 □〔言カ〕
717	削屑 15	4区 木屑層	
716	削屑 16	4区 木屑層	□ □ □ □
718	削屑 17	4区 木屑層	□
719	削屑 18	4区 木屑層	□ 長 長
720	削屑 19	4区 木屑層	□ (土へんカ) □ (土へんカ) □
721	削屑 20	4区 木屑層	連 連
722	削屑 21	4区 木屑層	
723	削屑 22	4区 木屑層	□ □
-	削屑 23	4区 木屑層	□
-	削屑 24	4区 木屑層	
-	削屑 25	4区 木屑層	□
724	削屑 26	4区 木屑層	□ □〔言カ〕 □〔言カ〕 □
725	削屑 27	4区 木屑層	□
726	削屑 28	4区 木屑層	□
-	削屑 29	4区 木屑層	墨痕のみ
-	削屑 30	4区 木屑層	墨痕のみ
-	削屑 31	4区 木屑層	墨痕のみ
727	削屑 32	4区 木屑層	墨痕のみ
728	削屑 33	4区 木屑層	墨痕のみ
729	削屑 34	4区 木屑層	墨痕のみ
-	削屑 35	4区 木屑層	墨痕のみ
-	削屑 36	4区 木屑層	墨痕のみ
730	削屑 37	4区 木屑層	墨痕のみ
-	削屑 38	4区 木屑層	削屑ではない可能性あり
731	削屑 39	木屑層 (15層)	〔稲カ〕
-	削屑 40	木屑層 (15層)	墨痕のみ
-	削屑 41	3区 27層より下	墨痕のみ

付表2 土坑S X96出土墨書土器一覧表

報告番号	出土地区・層位	積文	土 器		墨書部位	備 考
			種類	器種		
413	2区	代	土師器	杯/皿	底部外面	
414	炭層ほか	代カ	土師器	皿A	底部外面	
415	炭層	代	土師器	皿A	底部外面	
416	木屑層	代	土師器	皿A	底部外面	人べん
417	木屑層	代	土師器	杯/皿	底部外面	
418	炭層	□〔代カ〕	土師器	杯A/皿A	底部外面	人べん
419	木屑層	□〔代カ〕	土師器	杯/皿	底部外面	
420	炭層	代	土師器	杯A	底部外面	
421	炭層	□	土師器	杯/皿	底部外面	
422	炭層	代	土師器	杯/皿	底部外面	
423	炭層	□〔代カ〕	土師器	杯/皿	底部外面	
424	炭層	□〔代カ〕	須恵器	杯B蓋	天井部内面	
425	炭層	代	須恵器	杯B蓋	天井部内面	
426	炭層	代	須恵器	杯B	底部外面	
427		代	須恵器	杯B	底部外面	
428	炭層	代	須恵器	杯B	底部外面	
429	炭層	代	須恵器	杯B	底部外面	
430	4区	代	須恵器	皿A/皿C	底部外面	
431	炭層ほか	代	須恵器	皿C	底部外面	
432	炭層	代	須恵器	皿C	底部外面	
433	木屑層	代	須恵器	皿C	底部外面	
434	炭層ほか	代	須恵器	鉢D	口縁部内面	
435	炭層	□	須恵器	杯A	底部外面	全、金、参などの可能性あり
436	炭層・木屑層	大カ	須恵器	皿A	底部外面	
437	炭層	昨女	須恵器	杯A	底部外面	
438	炭層ほか	寺カ	須恵器	杯B	底部外面	
439		若□	須恵器	杯B	底部外面	
440	埋土上層ほか	若女	須恵器	杯B	底部外面	
441	炭層	□〔匠カ〕	須恵器	杯B	底部外面	
442	木屑層	石	須恵器	皿C	底部外面	
443	炭層	山カ	土師器	杯/皿	底部外面	

圖 版



第17次調査区遠景(左後方に池上遺跡・多国山、北西から)



(1) 第17次調査区遠景(北から)



(2) 第17次調査区遠景(南東から)



(1) 第17次調査区近景(東から)



(2) 第17次調査区近景(西から)



(1) 第17次調査区全景(南東から)



(2) 第17次調査区全景(上が北)



(1) 第17次調査前全景(北西から)



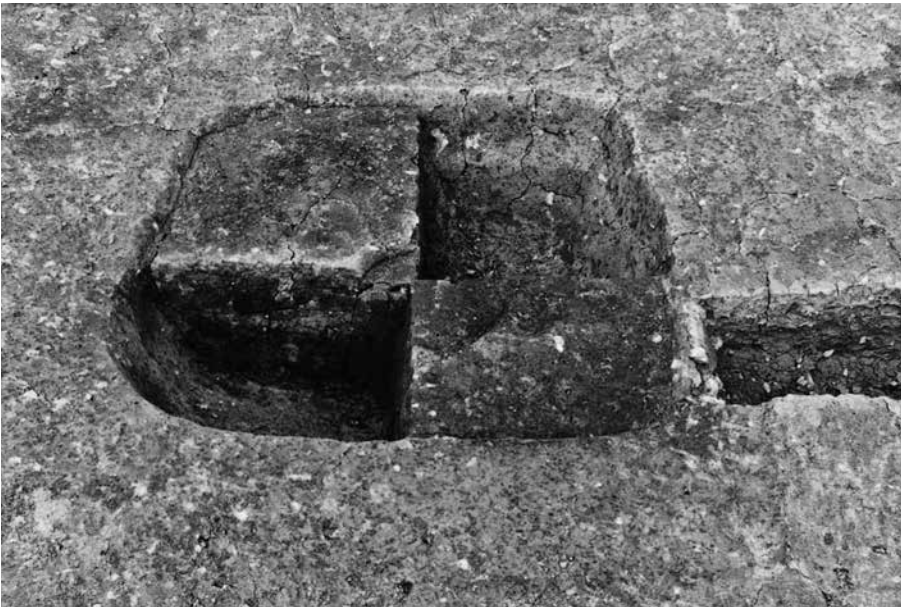
(2) 第17次掘立柱建物跡 S B 7
(北から)



(3) 第17次掘立柱建物跡 S B 24
(東から)



(1) 第17次掘立柱建物跡 S B 20
(南西から)



(2) 第17次掘立柱建物跡 S B 20
柱穴 P 6 (南から)



(3) 第17次掘立柱建物跡 S B 20
柱穴 P 7 (南から)



(1) 第17次溝 S D 1・2 (西部)
検出状況 (南東から)



(2) 第17次溝 S D 2 遺物出土状況
(南から)



(3) 第17次溝 S D 2 土器出土状況
(上が南西)



(1) 第17次 1区溝 S D 1・2
土器出土状況(北東から)



(2) 第17次 1区北壁北部土層断面
(溝 S D 5・6・15検出部、
東から)



(3) 第17次 1区南壁土層断面
(北から)



(1) 第17次1区北部溝群完掘状況(北から)



(2) 第17次1区完掘状況(北から)



(1) 第17次北部溝群検出状況(上が西)



(2) 第17次北部溝群検出状況(北東から)



(1) 第17次溝 S D 1 検出状況(南東から)



(2) 第17次溝 S D 1 検出状況(南西から)



(1) 第17次溝 S D 1 検出状況
(東から)



(2) 第17次溝 S D 1 中央部検出状況
(南東から)



(3) 第17次溝 S D 1 畦②土層断面
(東から)



(1) 第17次溝 S D 1・2 合流部
検出状況(東から)



(2) 第17次溝 S D 2 土器出土状況
(上が北)



(3) 第17次溝 S D 1 完掘状況
(東から)



(1) 第17次溝 S D 5・6・10・15
検出状況(東から)



(2) 第17次溝 S D 5・6・15全景
(南東から)



(3) 第17次溝 S D 5 工具掘削痕
検出状況(南東から)



(1) 第17次溝 S D 5・6・10
土層断面⑩(東から)



(2) 第17次溝 S D 5・6
土層断面⑧(南東から)



(3) 第17次溝 S D 14検出状況
(南西から)



(1) 第17次溝 S D13検出状況
(南東から)



(2) 第17次溝 S D13土層断面⑦
(南東から)



(3) 第17次作業風景(西から)

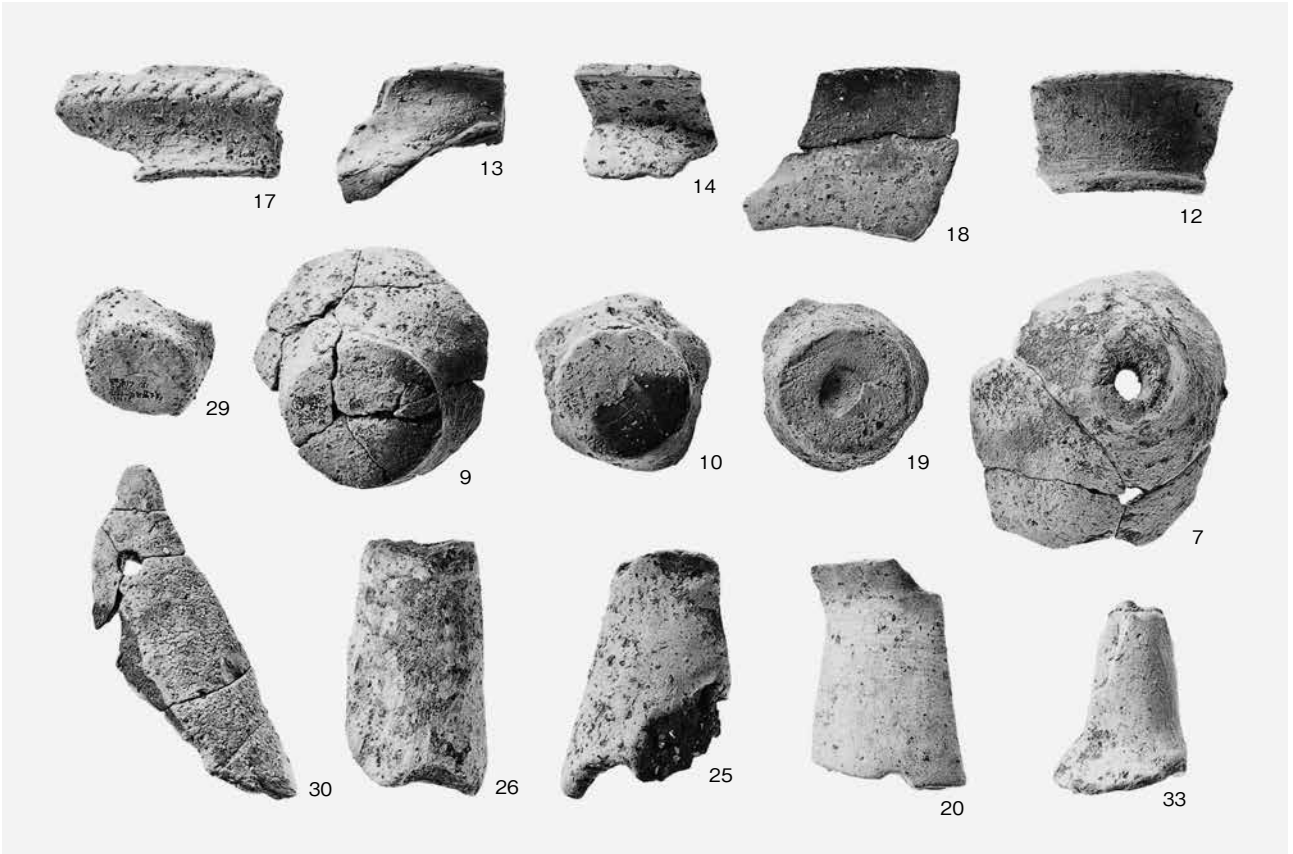


(1) 第17次 2・3区全景(北から)

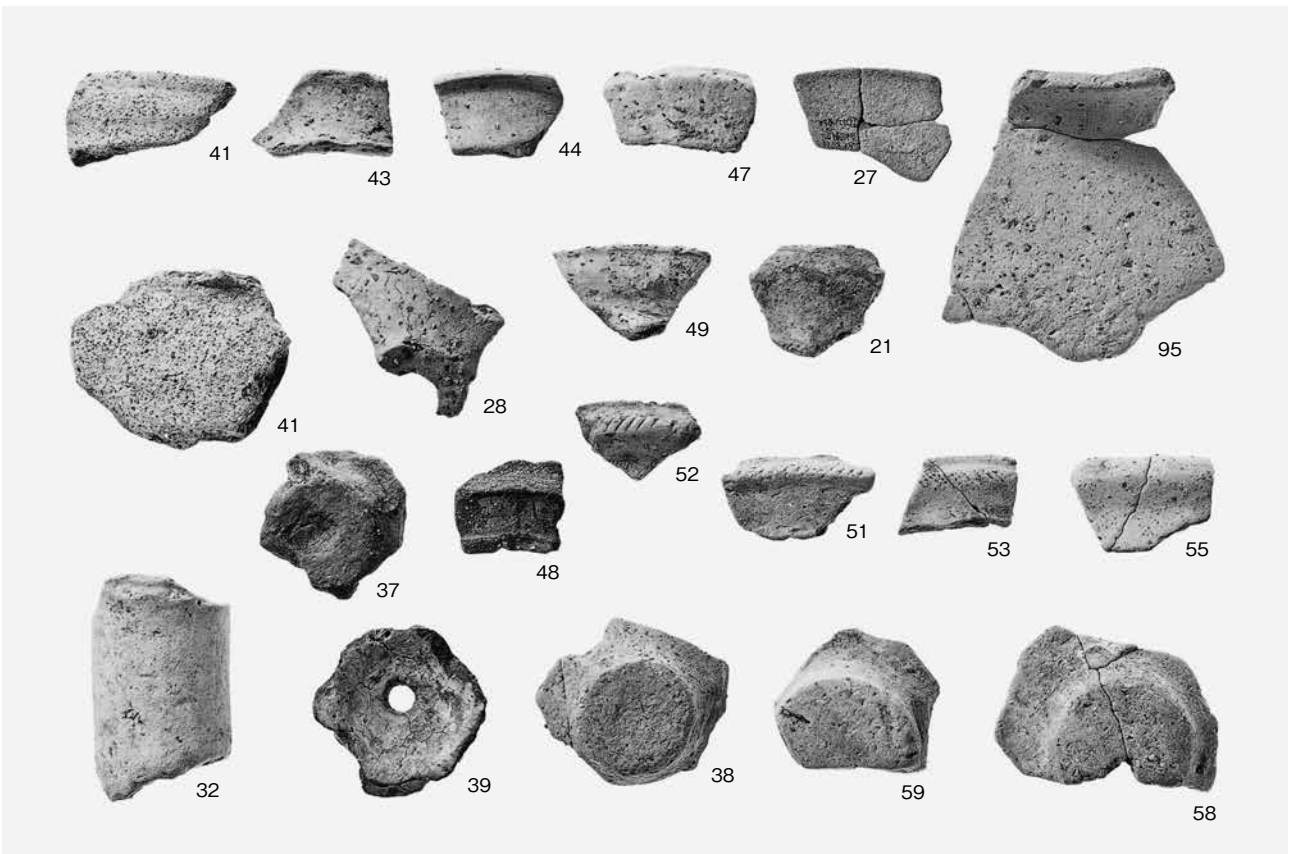


(2) 第17次 2・3区全景(南から)

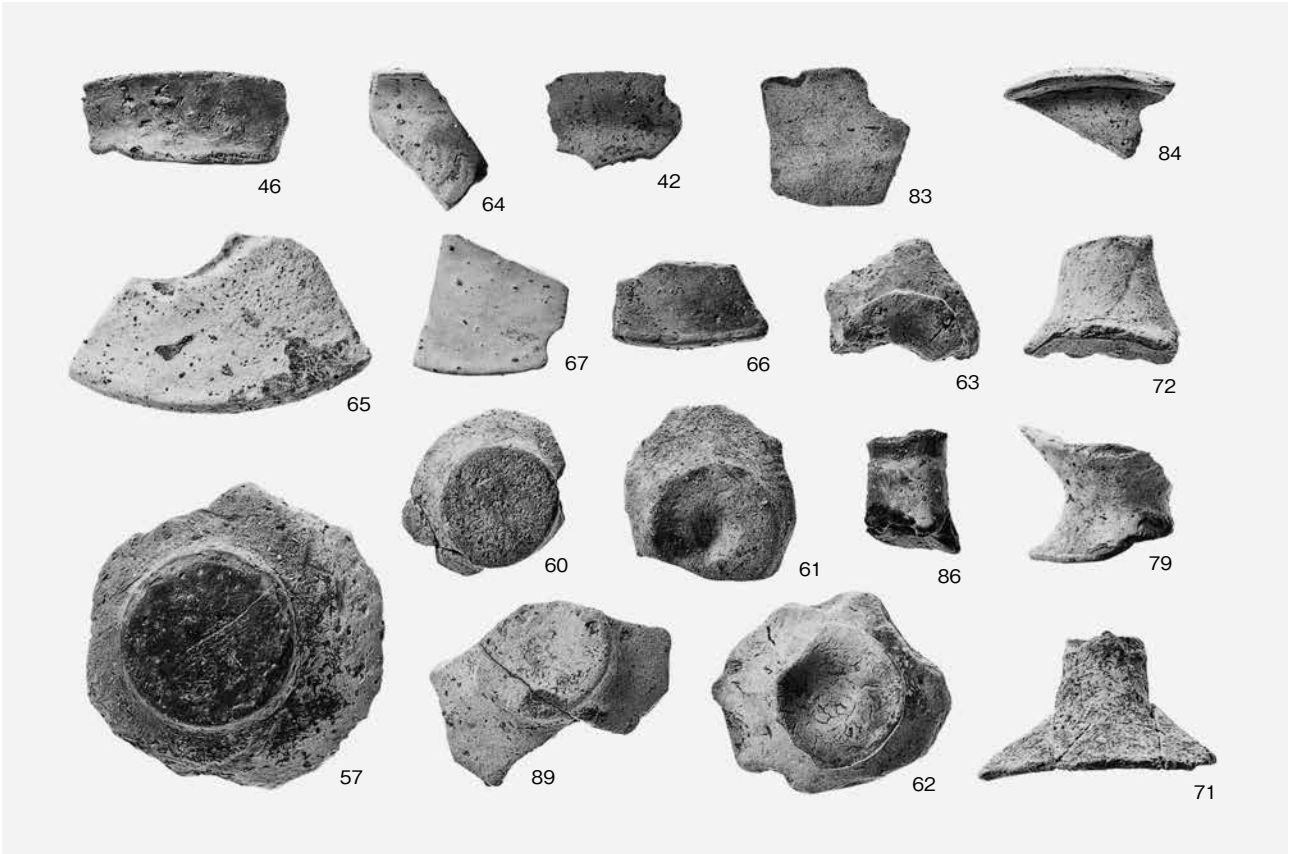




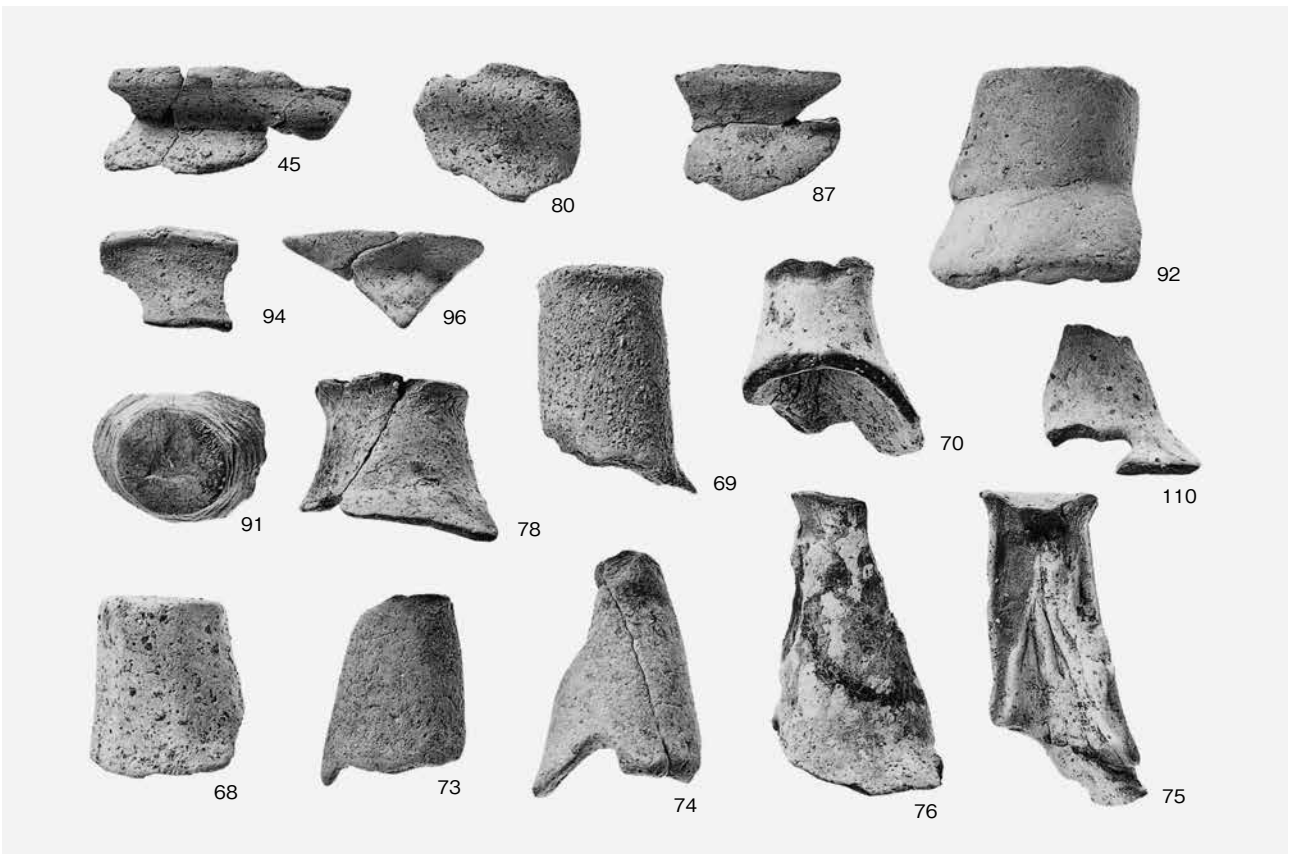
(1) 第17次出土遺物 2



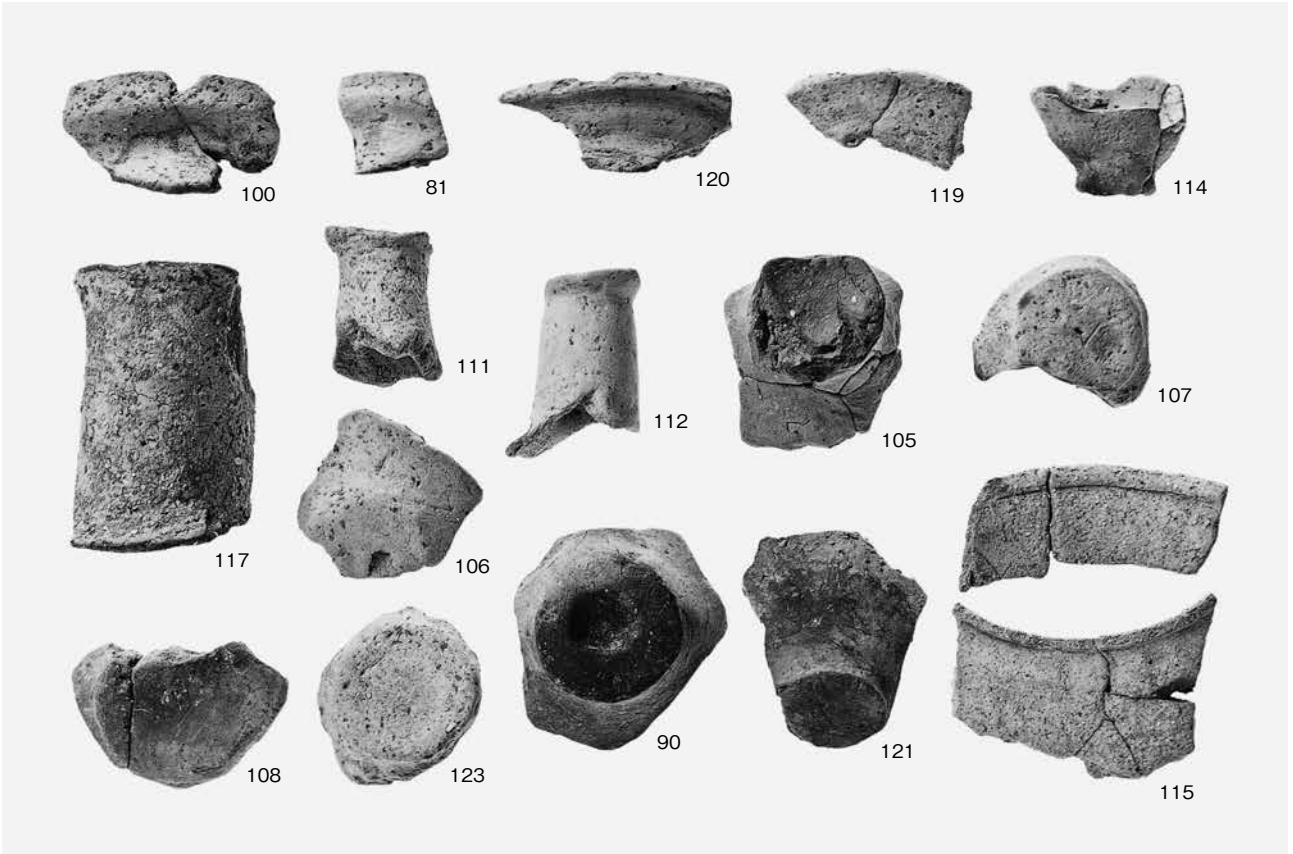
(2) 第17次出土遺物 3



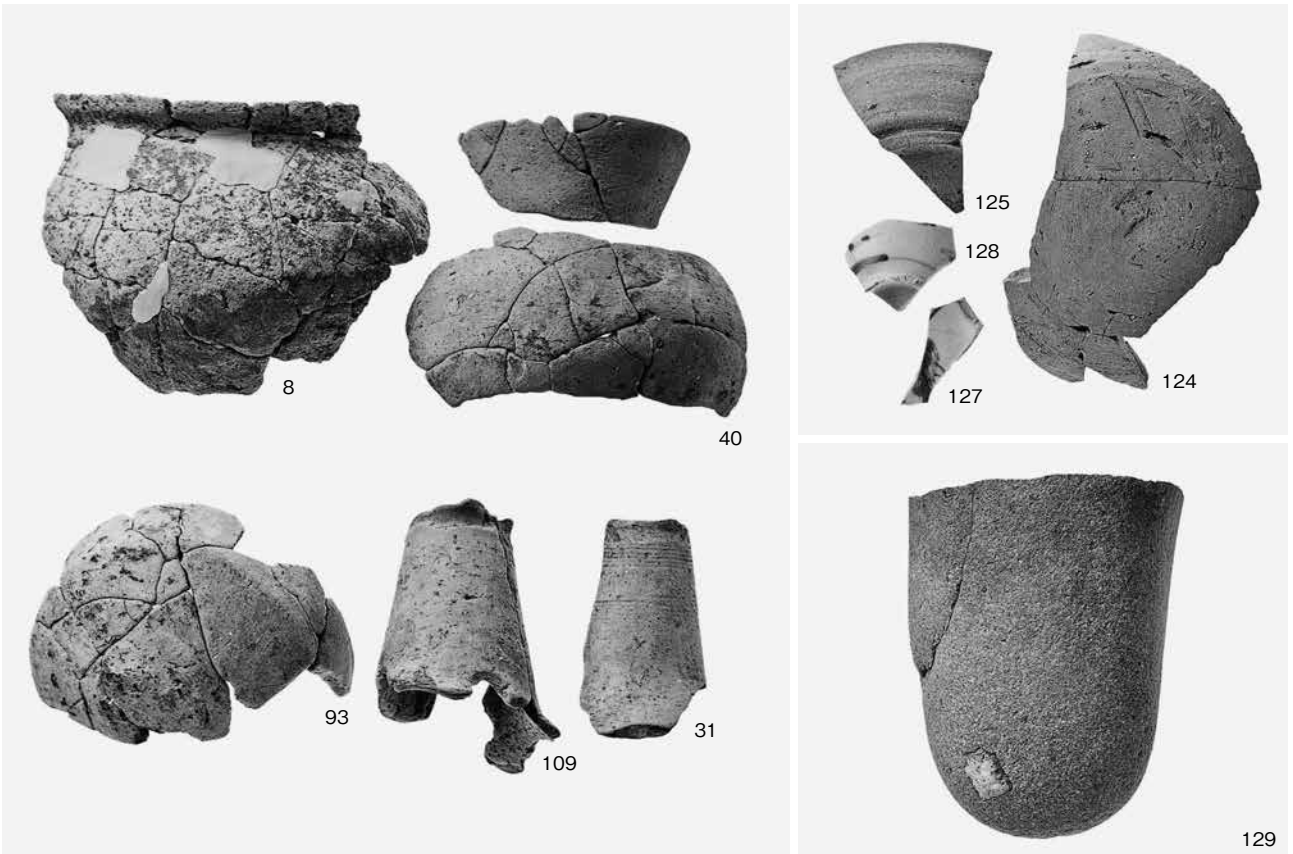
(1) 第17次出土遺物 4



(2) 第17次出土遺物 5



(1) 第17次出土遺物 6



(2) 第17次出土遺物 7



(1) 第19次第1・第3トレンチ空中写真(上が北)



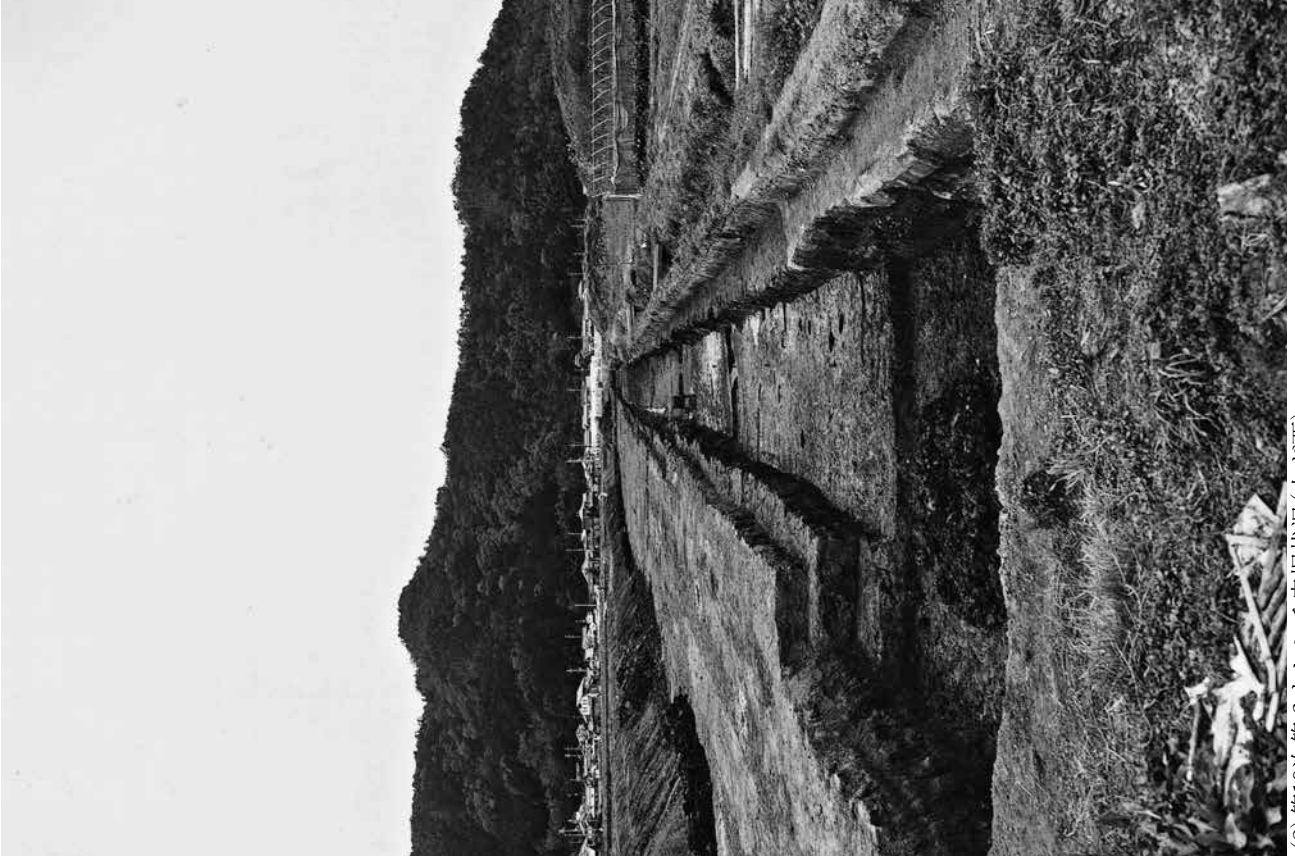
(2) 第19次第2トレンチ空中写真(上が北)



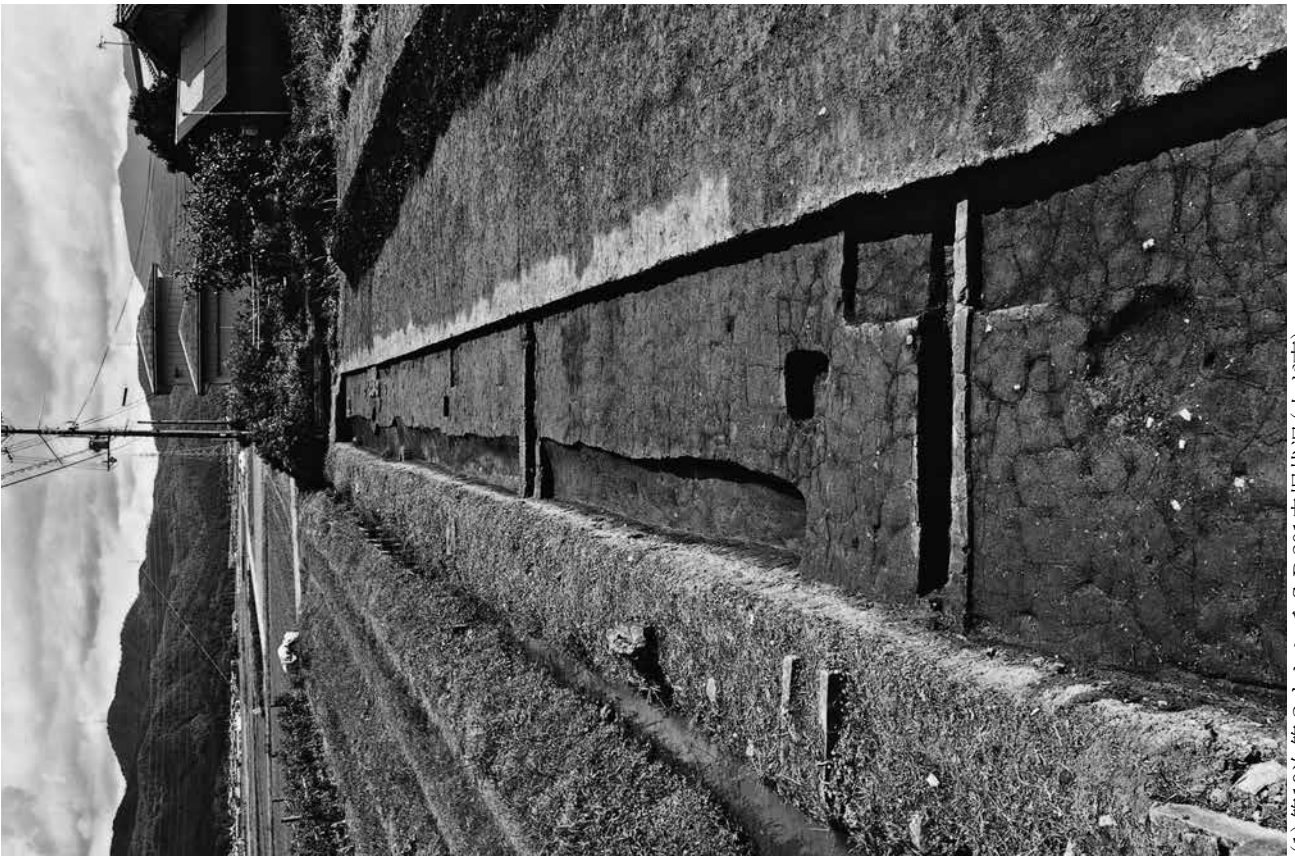
(1) 第19次第4・第5トレンチ空中写真(上が北)



(2) 第19次第4-3トレンチ完掘状況(上が西)



(2) 第19次第6トレンチ完掘状況(上が西)



(1) 第19次第2トレンチS D 201完掘状況(上が東)



(1) 第19次第6トレンチ S D601土層(南から)



(2) 第19次第1トレンチ完掘状況(南から)



(3) 第19次第1トレンチ完掘状況(北から)



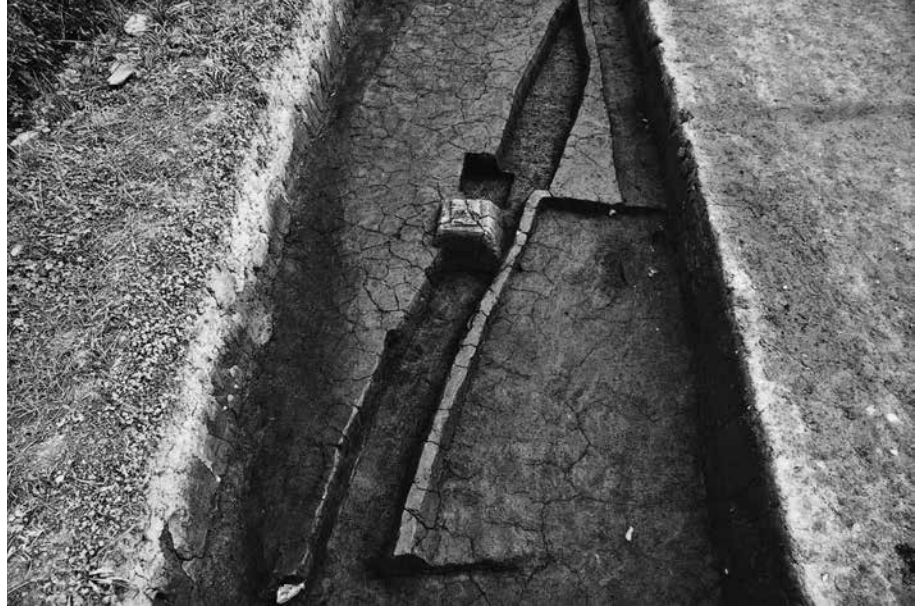
(1) 第19次第2トレンチ
S D201遺物出土状況(南から)



(2) 第19次第2トレンチ
S D203遺物出土状況(北から)



(3) 第19次第2トレンチ
S D202・203完掘状況(東から)



(1) 第19次第2トレンチ
S D208完掘状況(西から)



(2) 第19次第2トレンチ
S D210遺物出土状況(西から)



(3) 第19次第2トレンチ
S D210遺物出土状況(東から)



(1) 第19次第2トレンチ調査区西壁
土層(東から)



(2) 第19次第2トレンチ調査区東壁
土層(西から)



(3) 第19次第2トレンチ調査区北壁
東部土層(南から)



(1) 第19次第3トレンチ
完掘状況(南西から)



(2) 第19次第4-1トレンチ
完掘状況(北西から)



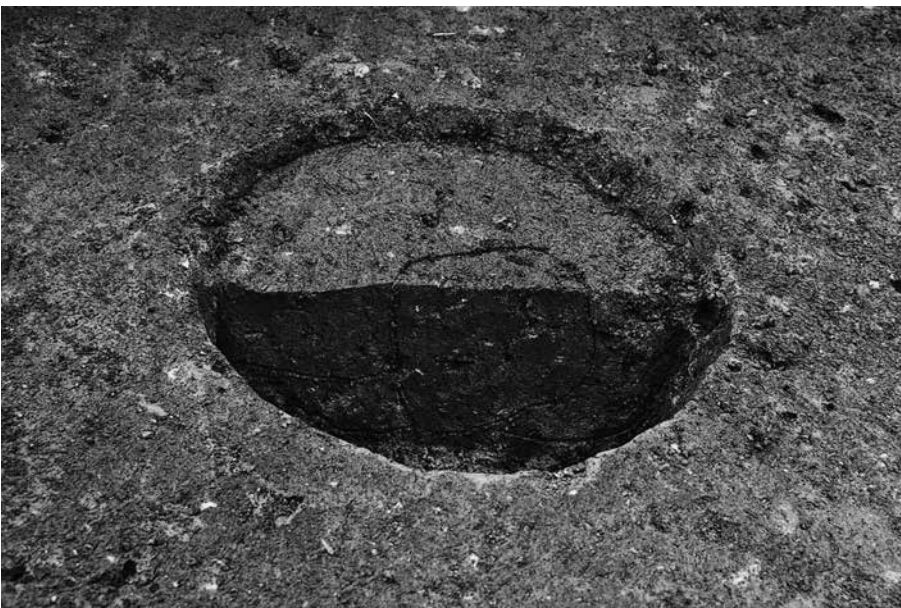
(3) 第19次第4-3トレンチ
S A405半裁状況(西から)



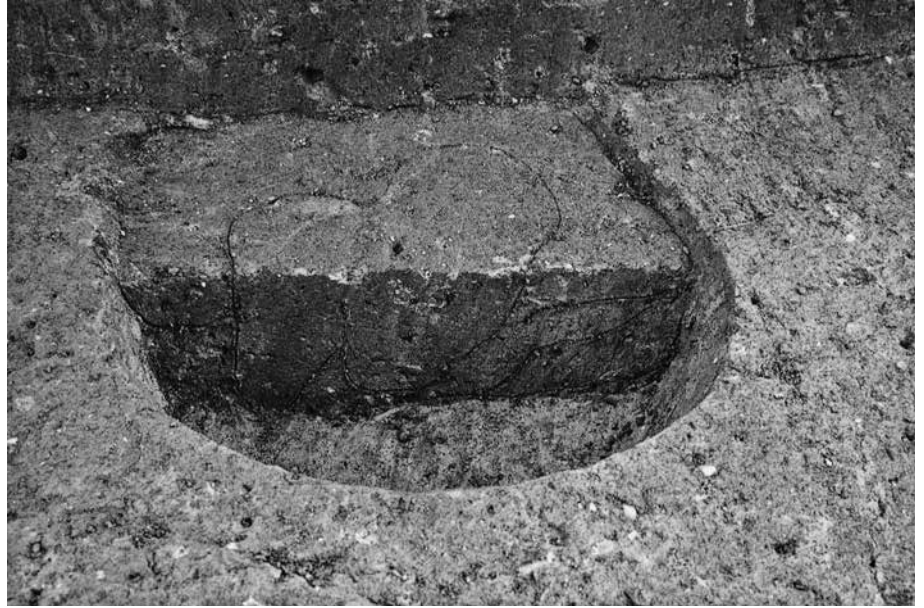
(1) 第19次第4-3トレンチ
S A405 a 半裁土層(北から)



(2) 第19次第4-3トレンチ
S A405 b 半裁土層(北から)



(3) 第19次第4-3トレンチ
S A405 c 半裁土層(北から)



(1) 第19次第4-3トレンチ
S A405 d 半裁土層(北から)



(2) 第19次第4-3トレンチ
S A405 e 半裁土層(北から)



(3) 第19次第4-3トレンチ
南壁中央部土層(北西から)



(1) 第19次第4-3トレンチ
南壁東部土層(北から)



(2) 第19次第5トレンチ
完掘状況(東から)



(3) 第19次第5トレンチ
北壁東部土層(南から)



(1) 第19次第6トレンチ
東部遺構検出状況(西から)



(2) 第19次第6トレンチ
S D601完掘状況(南から)



(3) 第19次第6トレンチ
S D602土層(南から)



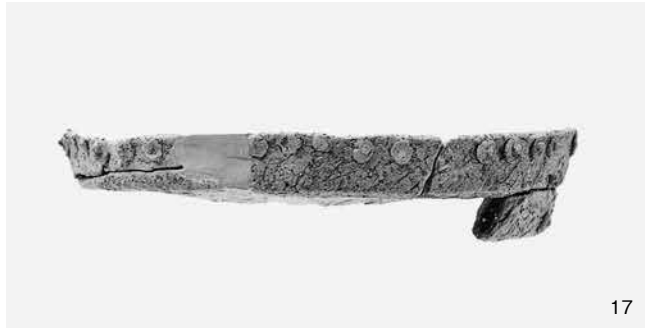
(1) 第19次第6トレンチ
北壁④土層(南から)



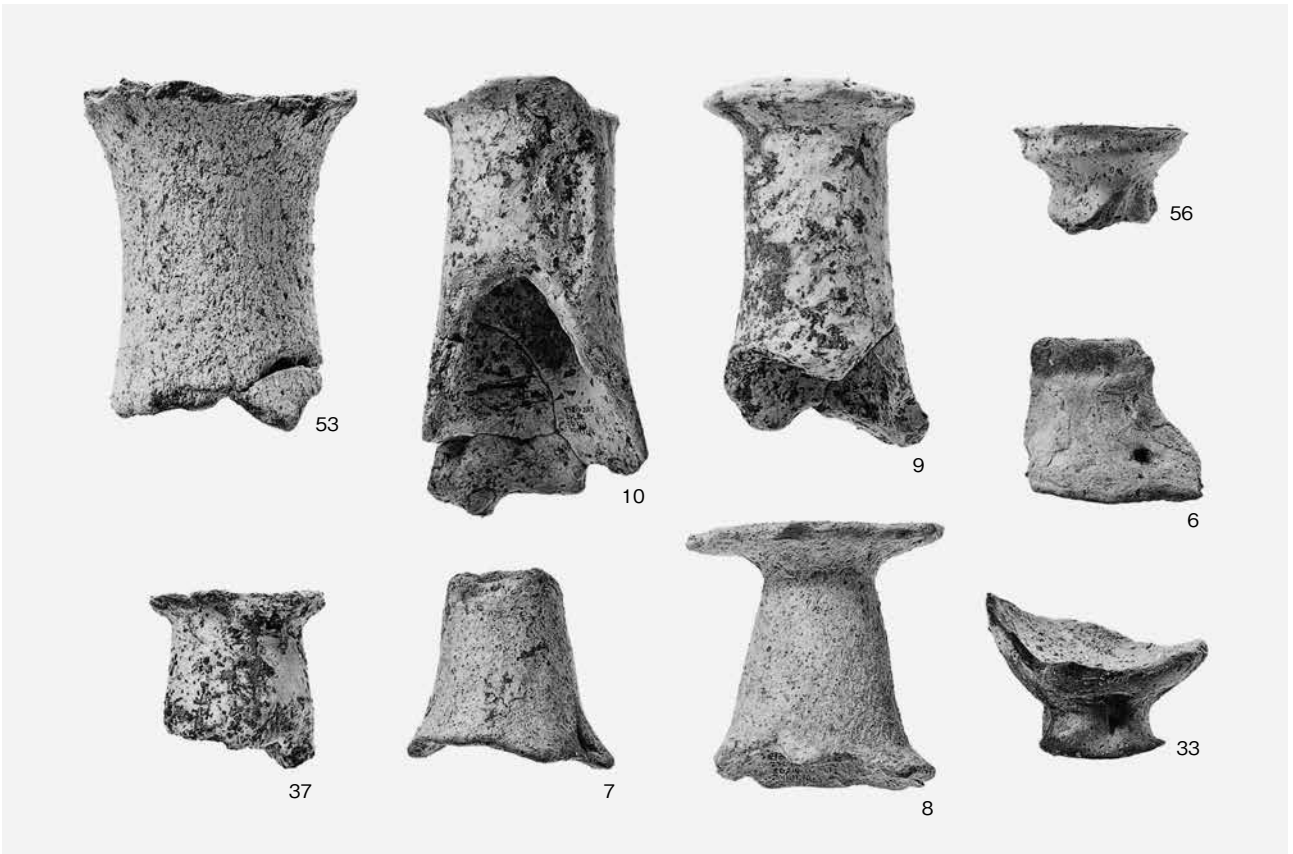
(2) 第19次第6トレンチ
北壁⑤土層(南から)



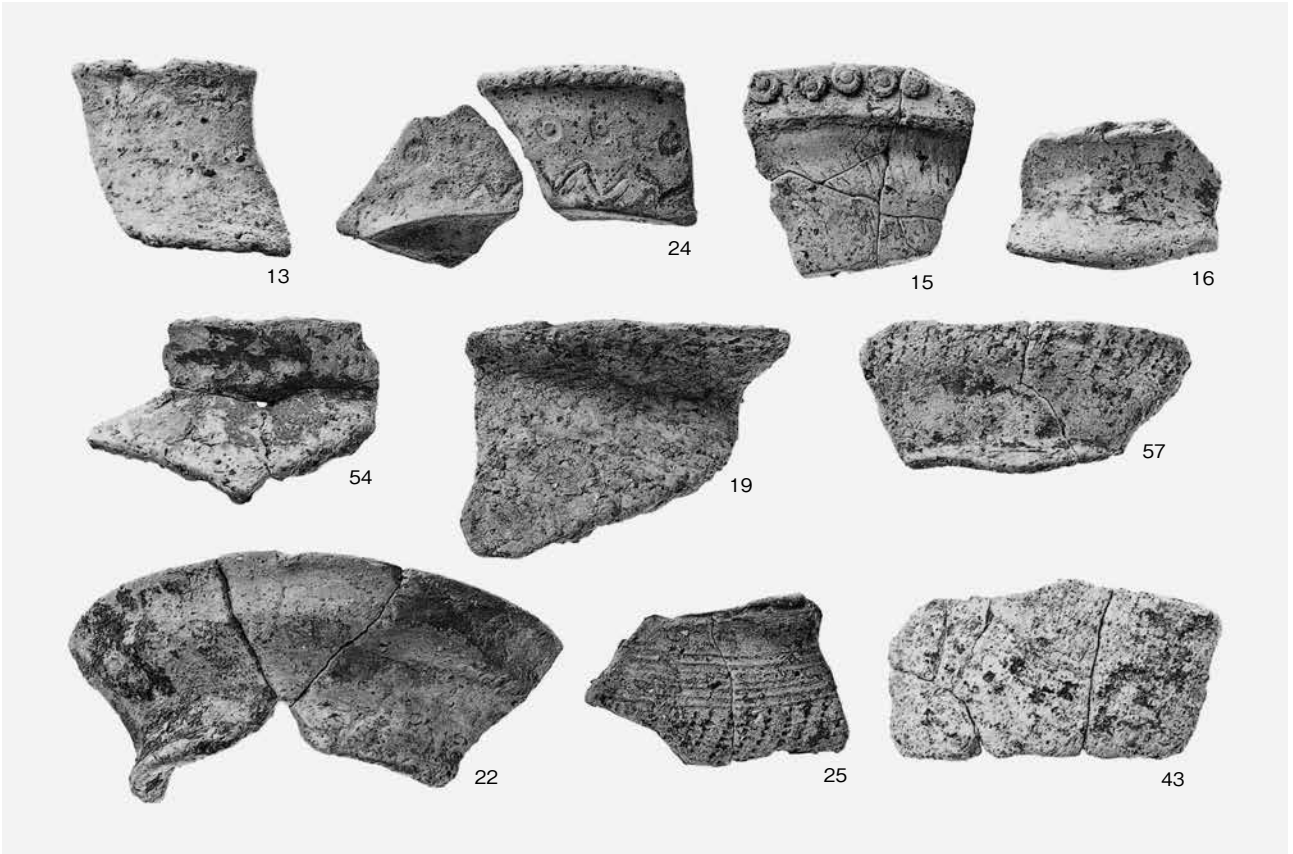
(3) 第19次第6トレンチ
北壁⑥土層(南から)



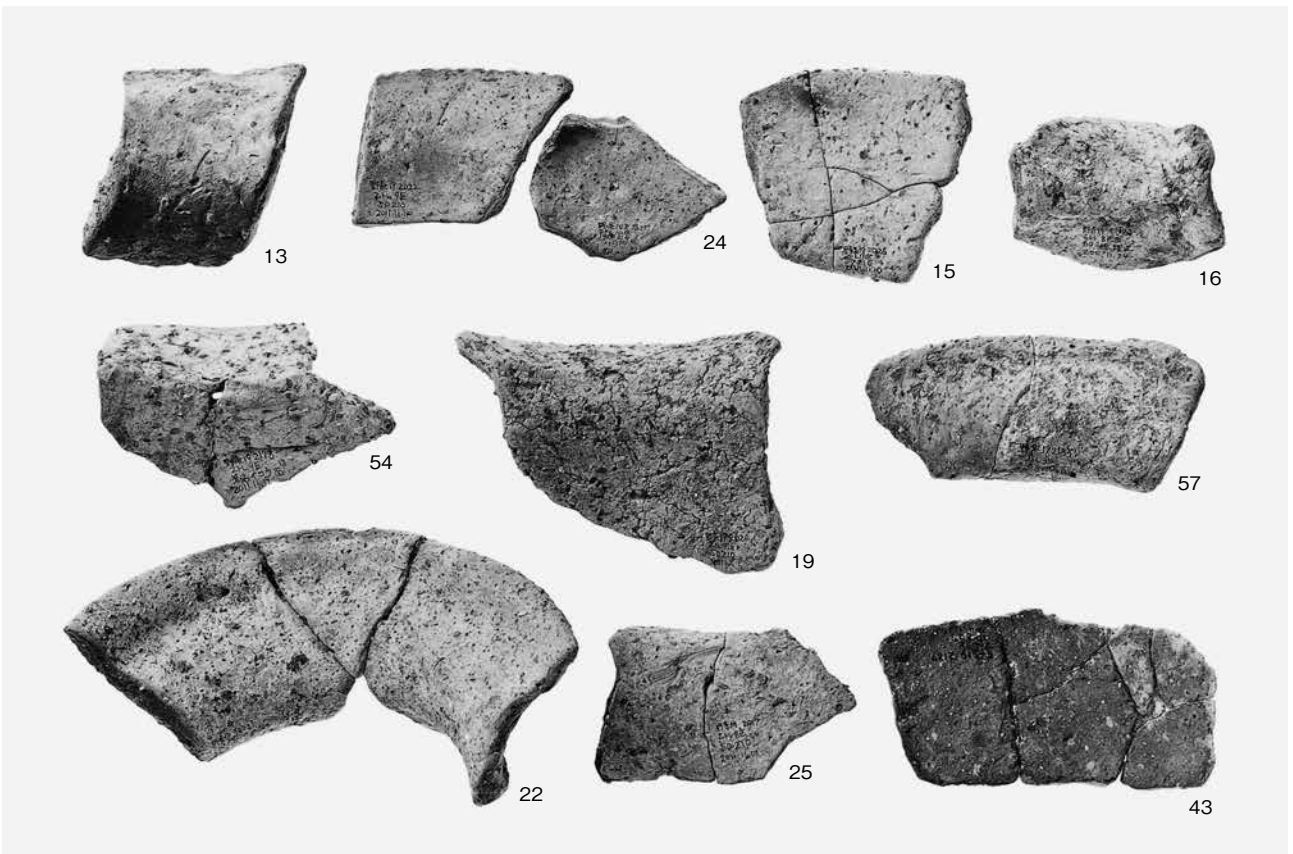
(1) 第19次出土遺物 1



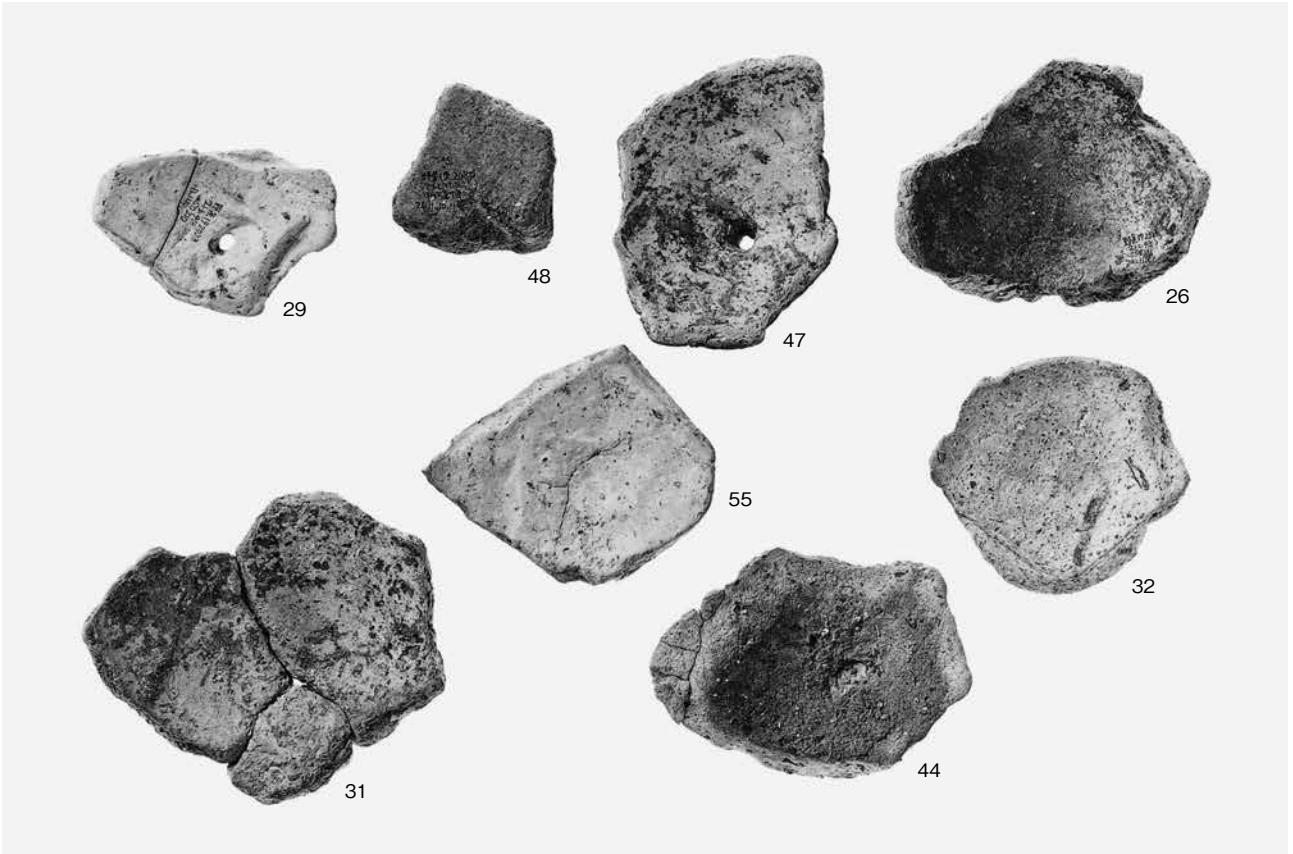
(2) 第19次出土遺物 2



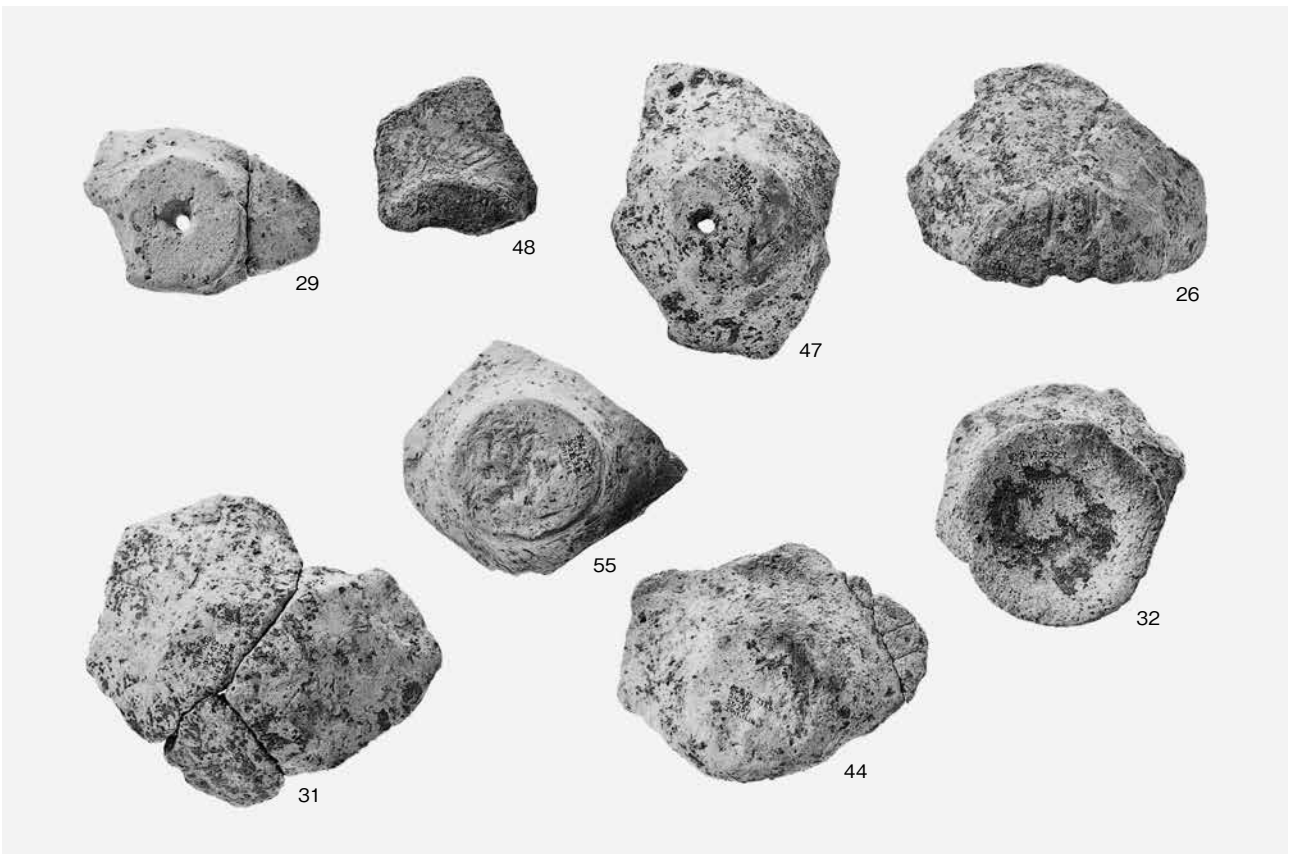
(1) 第19次出土遺物 3 (外面)



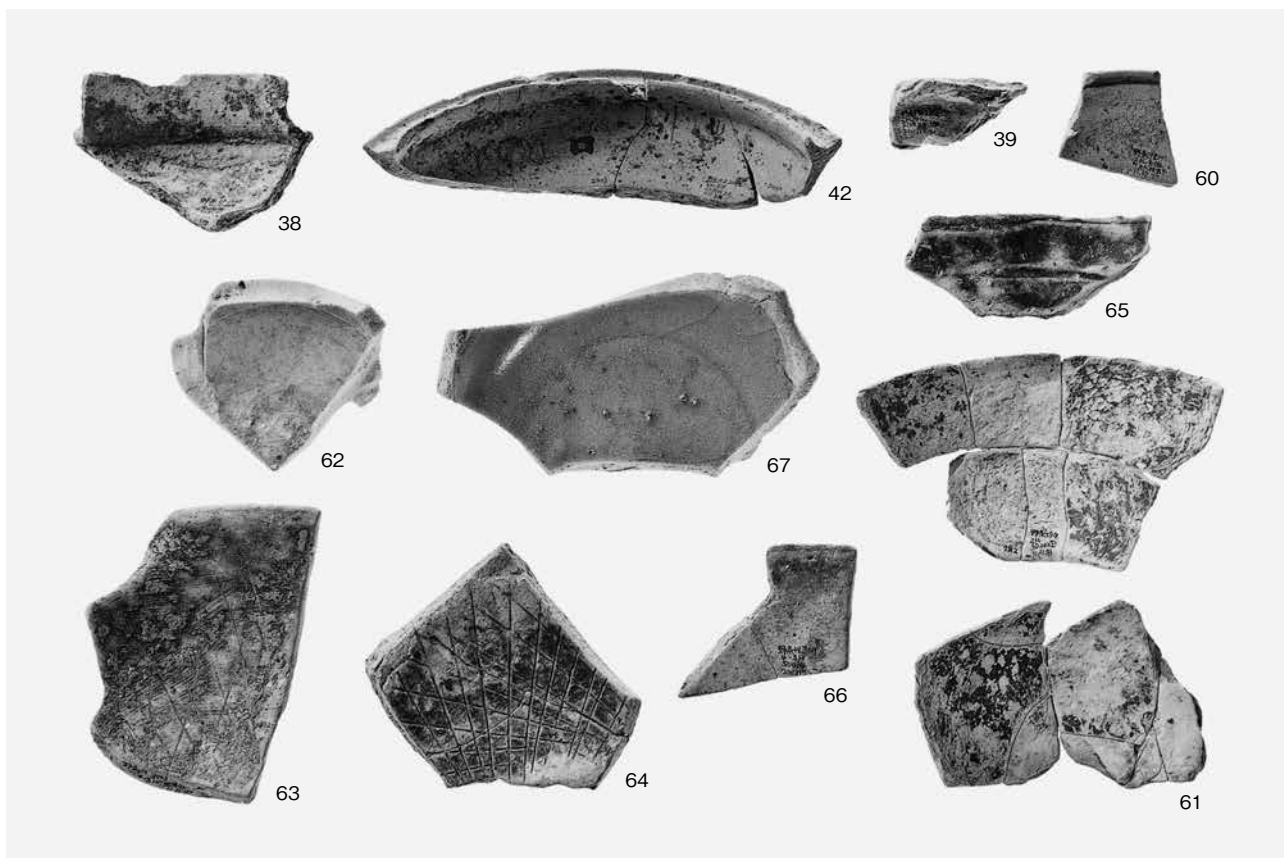
(2) 第19次出土遺物 3 (内面)



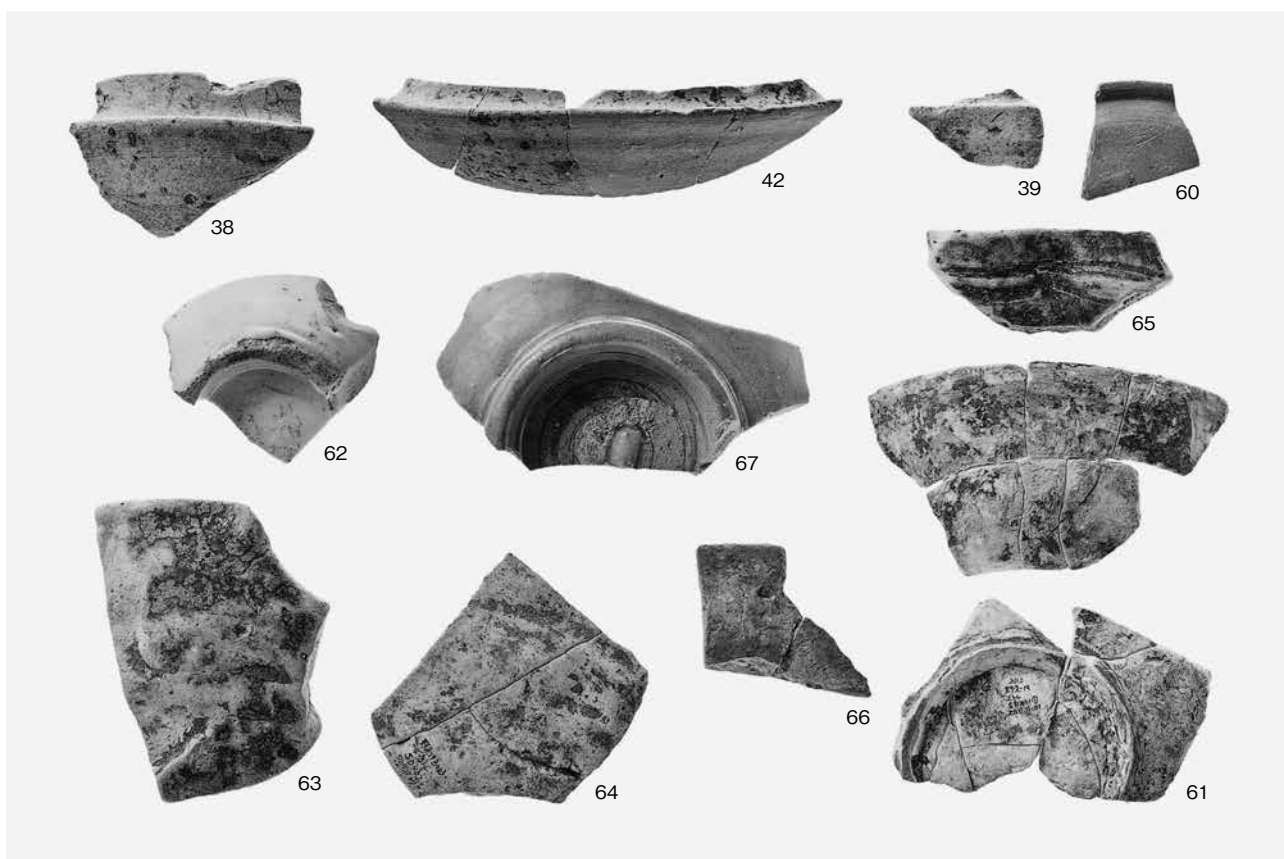
(1) 第19次出土遺物 4 (内面)



(2) 第19次出土遺物 4 (外面)



(1) 第19次出土遺物 5 (内面)



(2) 第19次出土遺物 5 (外面)



(1) A 地区全景(上空から、上が北)



(2) A 地区全景(南から)



(1) B 地区全景 (上空から、上が北)



(2) B 地区全景 (南から)



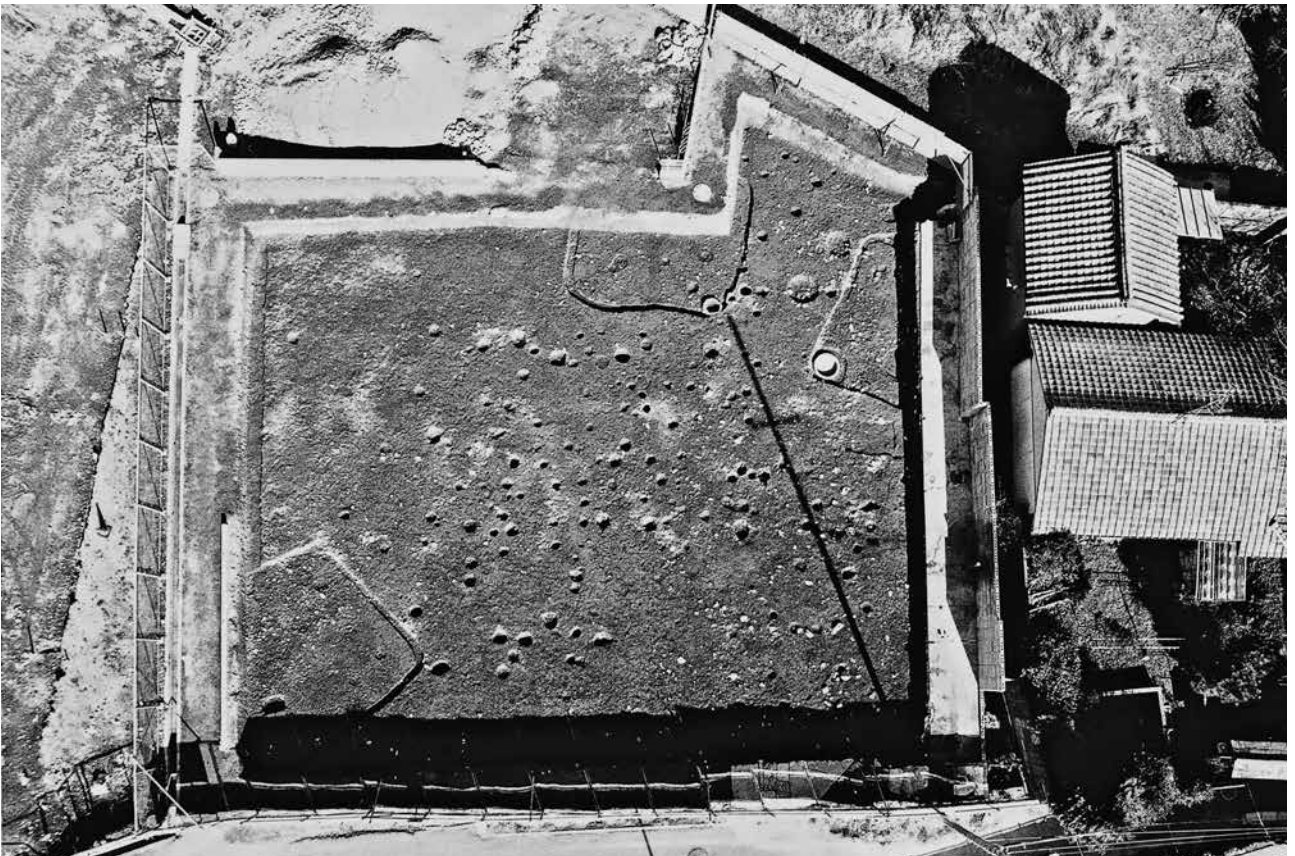
(1) C地区(上層遺構)全景(上空から、上が北)



(2) C地区(下層遺構)全景(上空から、上が北)



(1) E 地区(上層遺構)全景(上空から、上が北)



(2) E 地区(下層遺構)全景(上空から、上が北)



(1) G・H地区全景(上空から、上が北)



(2) G・H地区全景(東から)



(1) J 地区全景(上空から、上が北)



(2) J 地区全景(南から)



(1) A地区竪穴式住居跡
S H121近景(南西から)



(2) A地区竪穴式住居跡
S H121内遺物出土状況



(3) A地区竪穴式住居跡
S H121内遺物出土状況



(1) A 地区竪穴式住居跡
S H121内遺物出土状況



(2) A 地区竪穴式住居跡
S H121内遺物出土状況



(3) A 地区竪穴式住居跡
S H121内遺物出土状況



(1) A地区竪穴式住居跡
S H156近景(南から)



(2) A地区溝跡S D144近景
(東から)



(3) A地区溝跡S D119・132、
土坑S K123近景(西から)



(1) B 地区全景(西から)



(2) B 地区溝跡 S D79 近景(西から)



(3) B 地区溝跡 S D79 内(上層)
遺物出土状況



(1) B 地区溝跡 S D 79 堆積状況
(A-A' 西から)



(2) B 地区溝跡 S D 79 堆積状況
(B-B' 西から)



(3) B 地区溝跡 S D 79 堆積状況
(B-B' 東から)



(1) B地区溝跡 S D79堆積状況
(C-C' 北から)



(2) B地区溝跡 S D79内(下層)
遺物出土状況



(3) B地区溝跡 S D79内(下層)
遺物出土状況



(1) B 地区土坑 S K 125 近景
(東から)



(2) B 地区土坑 S K 125 近景
(西から)



(3) B 地区焼土坑 S K 42 近景
(南西から)



(1) C 地区竪穴式住居跡 S H127
近景(南から)



(2) C 地区竪穴式住居跡 S H127
竈近景(南から)



(3) C 地区竪穴式住居跡 S H350
近景(北西から)



(1) C 地区屋敷跡全景(南西から)



(2) C 地区屋敷跡全景(西から)



(1) C 地区土橋 S X 133 近景
(南東から)



(2) C 地区土橋 S X 133 近景
(東から)



(3) C 地区掘跡 S D 111 堆積状況
(北から)



(1) C 地区土橋 S X 133北石組み
近景(北から)



(2) C 地区土橋 S X 133南石組み
近景(南から)



(3) C 地区堀跡 S D 111暗渠排水
近景(南から)



(1) C 地区掘跡 S D111暗渠排水
近景(北東から)



(2) C 地区土橋 S X133内堆積状況
(西から)



(3) C 地区土橋 S X133内堆積状況
(南から)



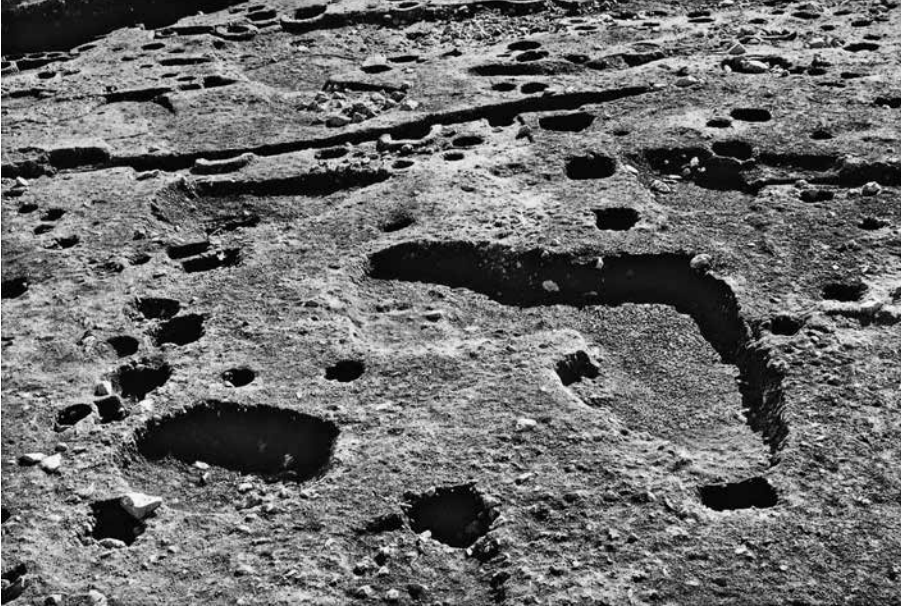
(1) C 地区堀跡 S D 111 テラス部
近景(南から)



(2) C 地区堀跡 S D 111 テラス部
近景(北東から)



(3) C 地区堀跡 S D 111 テラス部
遺物出土状況



(1) C 地区掘立柱建物跡 S B 414
近景(北から)



(2) C 地区近世墓 S X 440 近景
(南東から)



(3) C 地区土坑 S K 394 近景
(北から)



(1) E 地区竪穴式住居跡 S H101
近景(北東から)



(2) E 地区竪穴式住居跡 S H102
近景(南から)



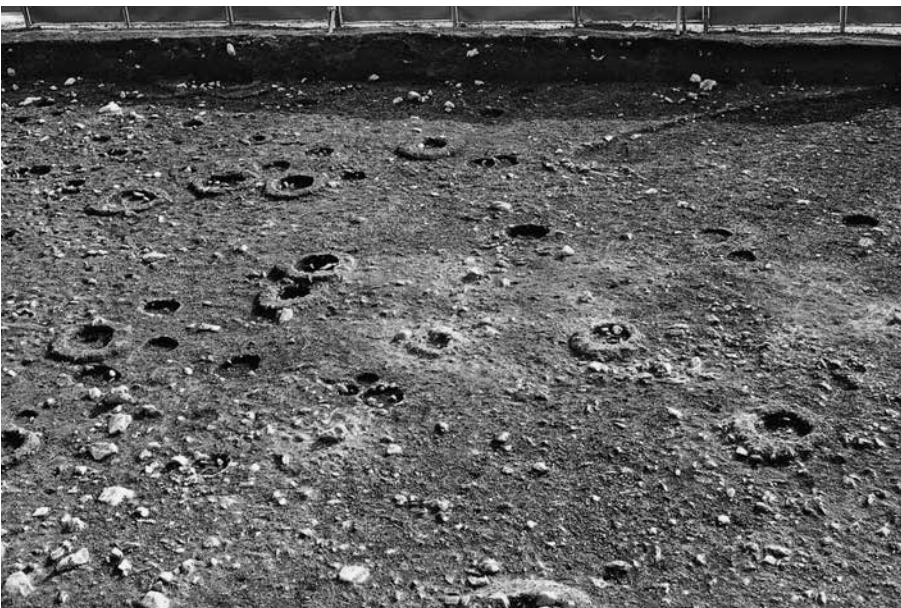
(3) E 地区竪穴式住居跡 S H103
近景(南西から)



(1) E 地区掘立柱建物跡 S B 30 近景
(南西から)



(2) E 地区掘立柱建物跡 S B 46・12
近景(北西から)



(3) E 地区掘立柱建物跡 S B 15 近景
(北から)



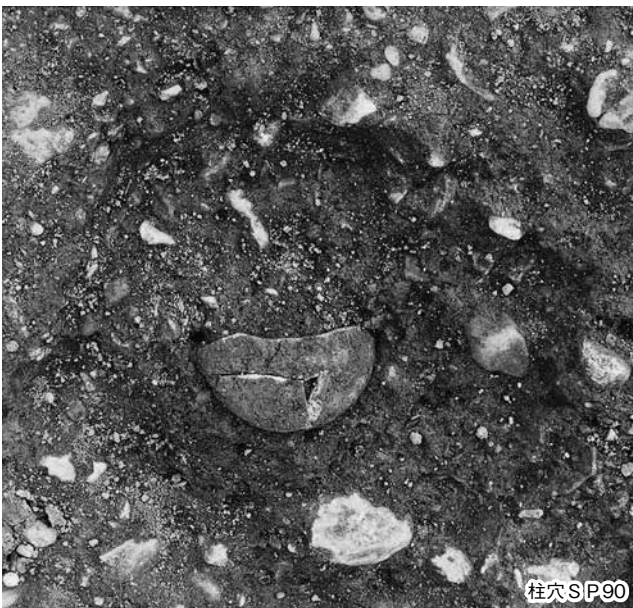
(1) E 地区土壙墓 S K34 堆積状況
(西から)



(2) E 地区土壙墓 S K34 近景
(北から)



(3) E 地区土壙墓 S K34 近景
(西から)



E地区柱穴内遺物出土状況

(1) H 地区堀跡 S D50・
掘立柱建物跡 S B01・
柵列 S A24近景(東から)



(2) H 地区掘立柱建物跡 S B01・
柵列 S A24近景(東から)



(3) H 地区堀跡掘立柱建物跡 S B01
近景(東から)





(1) H地区掘跡 S D50近景(西から)



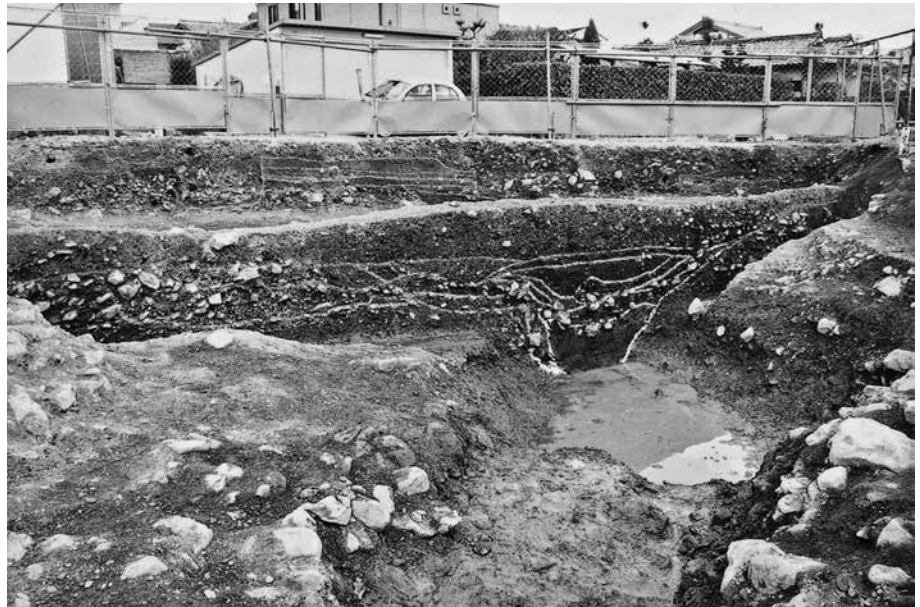
(2) H地区埋納土坑 S K46近景
(南から)



(3) H地区土坑 S K44近景(東から)



(1) H地区堀跡 S D50堆積状況
(南から)



(2) H地区堀跡 S D50堆積状況
(南から)



(3) H地区堀跡 S D50堆積状況
(西から)



(1) H 地区溝跡 S D51 近景 (南から)



(2) H 地区溝跡 S D52 近景 (南から)



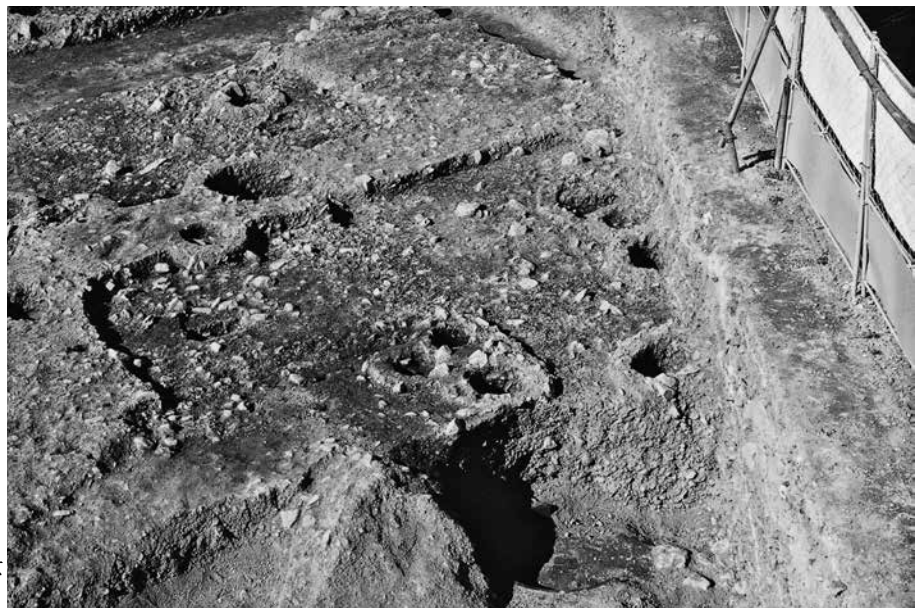
(3) H 地区紡錘車出土状況 (東から)



(1) J 地区竪穴式住居跡 S H80 近景
(東から)



(2) J 地区竪穴式住居跡 S H79 ~
81 近景 (東から)



(3) J 地区竪穴式住居跡 S H81 近景
(東から)



(1) J 地区竪穴式住居跡 S H82 近景
(北から)



(2) J 地区竪穴式住居跡 S H82 内
遺物出土状況(北西から)



(3) J 地区掘跡 S D50・
掘立柱建物跡 S B30 近景
(東から)



(1) J 地区掘立柱建物跡 S B58・
柵列 S A84近景(西から)



(2) J 地区堀跡 S D50暗渠排水近景
(南から)



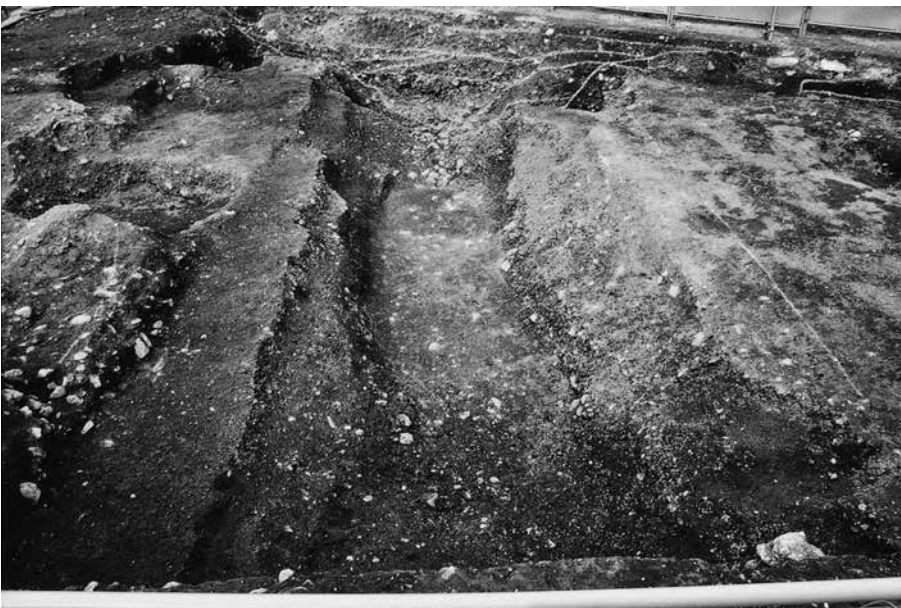
(3) J 地区堀跡 S D50暗渠排水近景
(南から)



(1) J 地区堀跡 S D50堆積状況
(南から)



(2) J 地区堀跡 S D50堆積状況
(北から)



(3) J 地区溝跡 S D21近景(南から)



(1) I 地区全景(南から)



(2) G 地区石列近景(東から)



(3) G 地区堀跡 S D50 近景
(北西から)



(1) F 地区近景(南から)



(2) F 地区近景(南から)



(3) F 地区近景(北から)



14



21



20



36



15

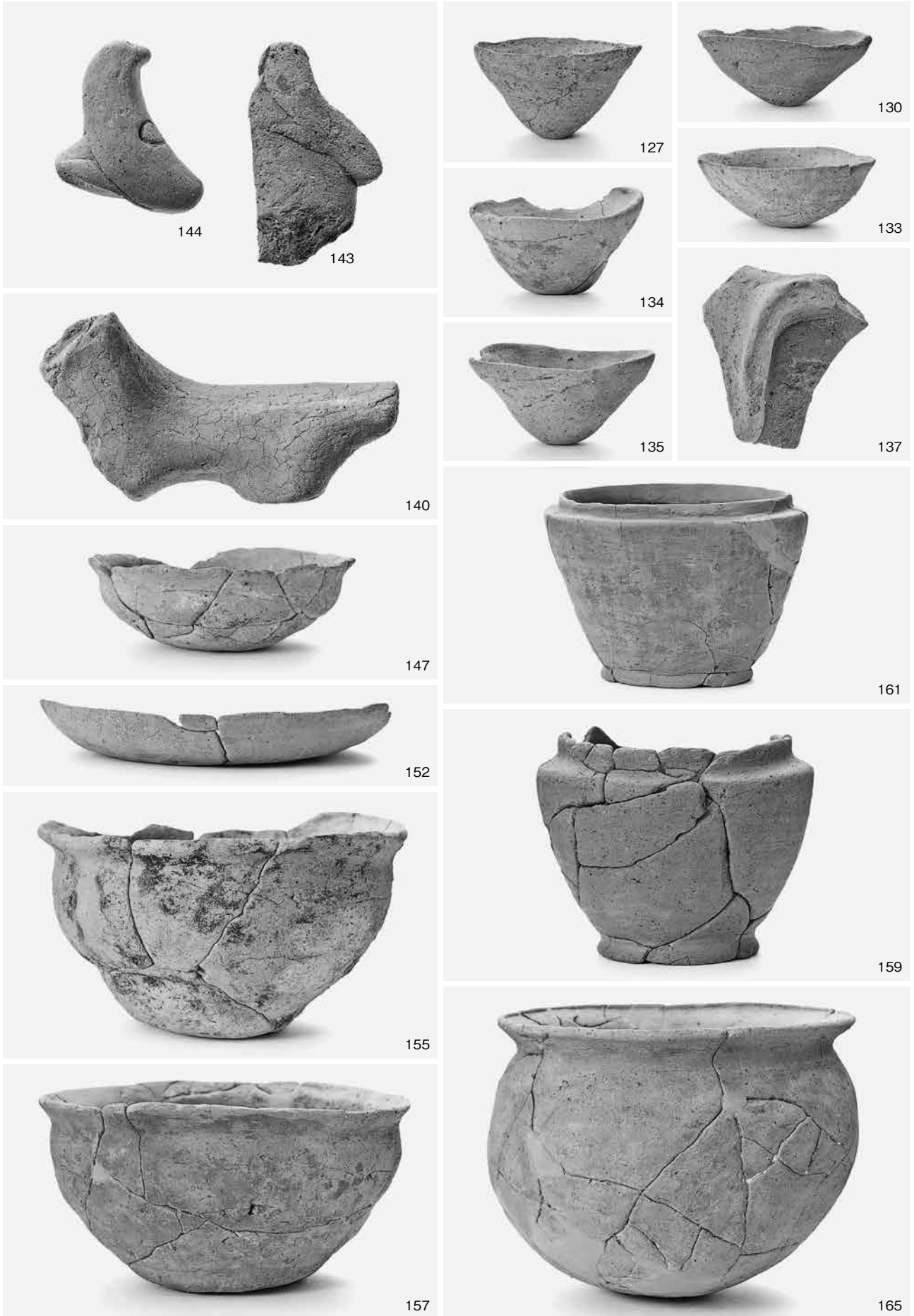


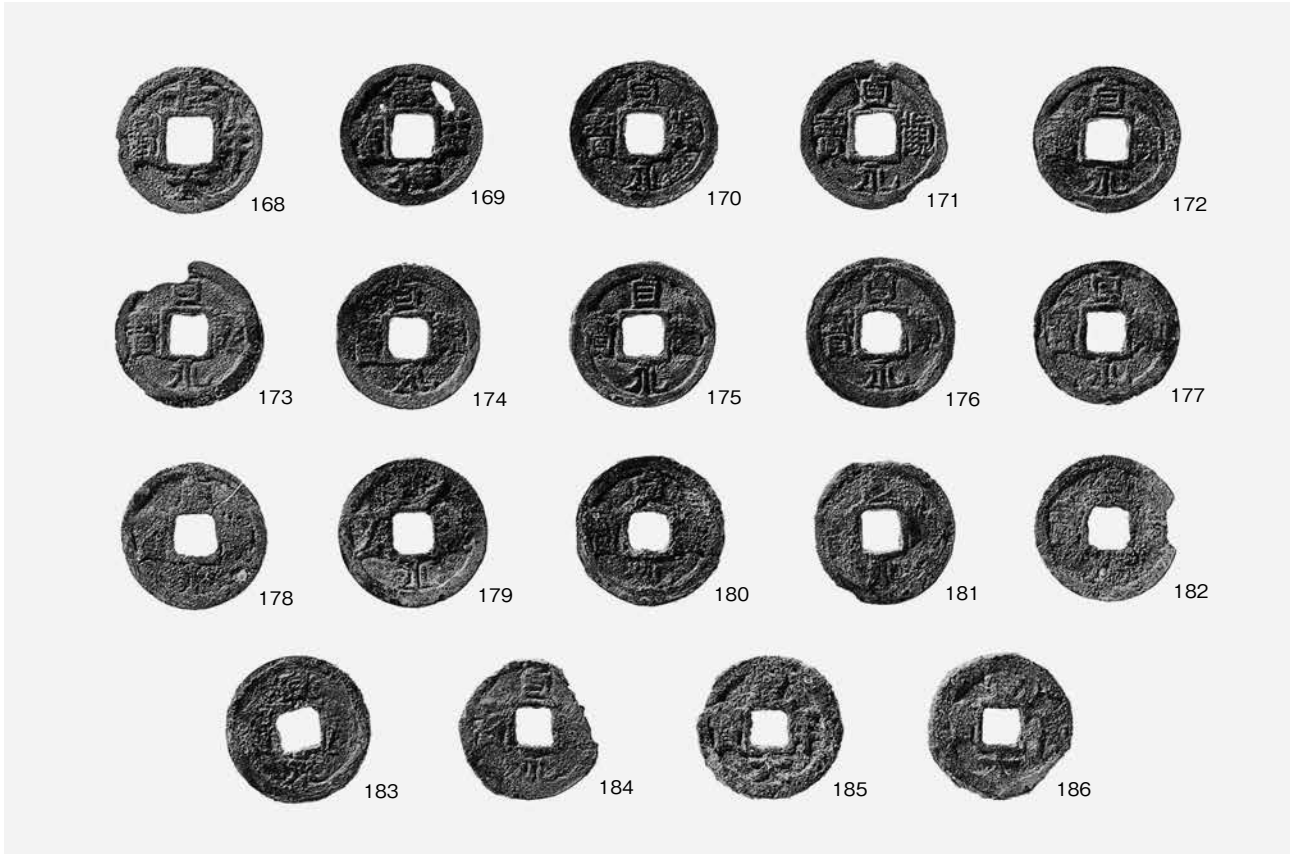
37











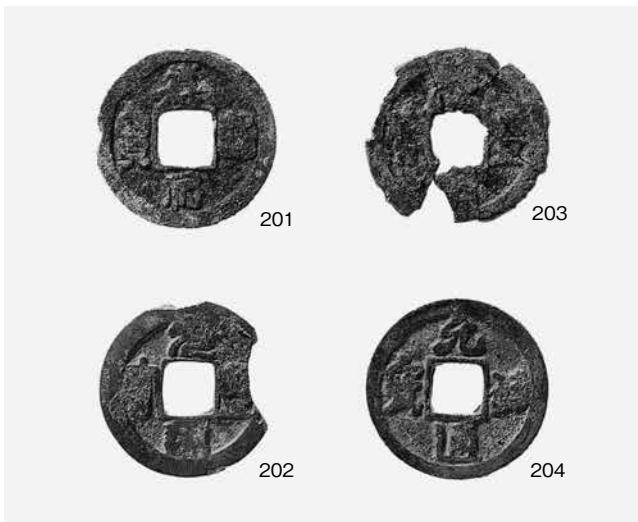
(1) 出土遺物 6



188



205



201

203

202

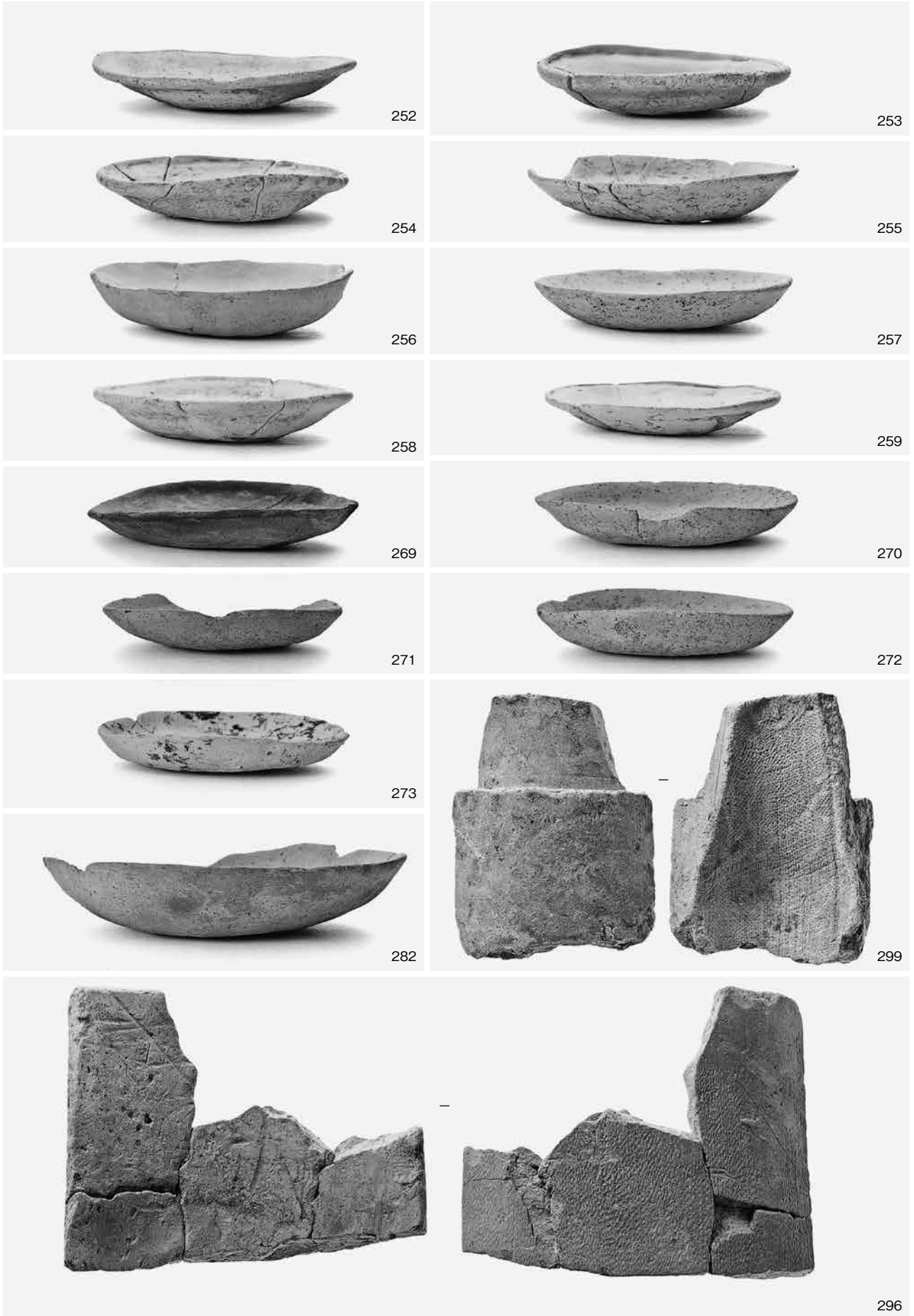
204



210

(2) 出土遺物 7







(1) トレンチ全景(南東から)



(2) トレンチ全景(西から)



(1) トレンチ断ち割り内土層
(東から)



(2) 南側調査区トレンチ掘削状況
(東から)



(3) 南側調査区土層(東から)



(1) 調査区遠景(北東から)



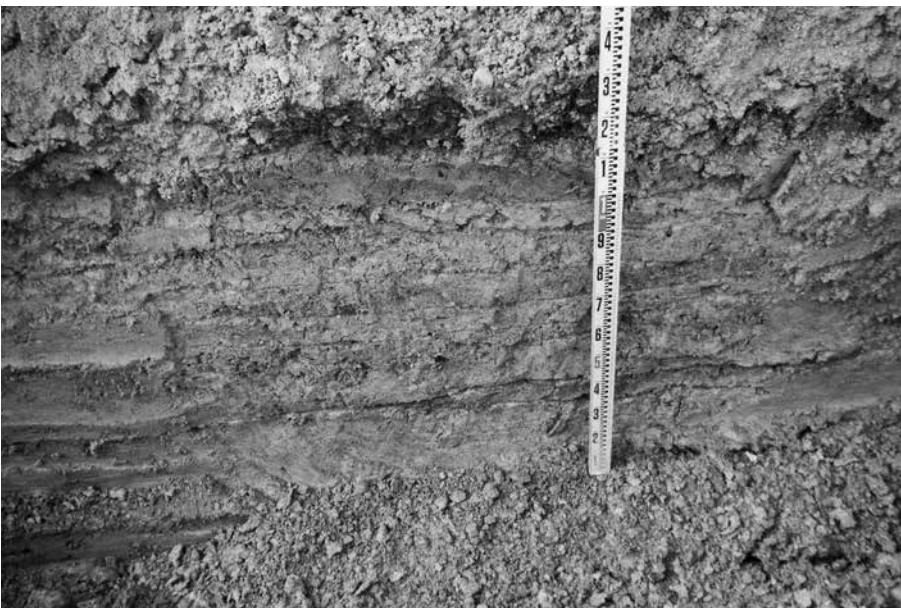
(2) 調査区近景(北東から)



(1) C トレンチ掘削状況(北東から)



(2) A トレンチ土層 1 (北から)



(3) B トレンチ土層 2 (北から)



(1)第1次調査1トレンチ全景
(東から)



(2)第1次調査2トレンチ全景
(北から)



(3)第1次調査3トレンチ全景
(南から)



(1) 調査前風景(東から)



(2) 調査前風景(南東から)



(3) A 2 地区重機掘削作業(南から)



(1) A 2 地区中世遺構面精査作業
(東から)



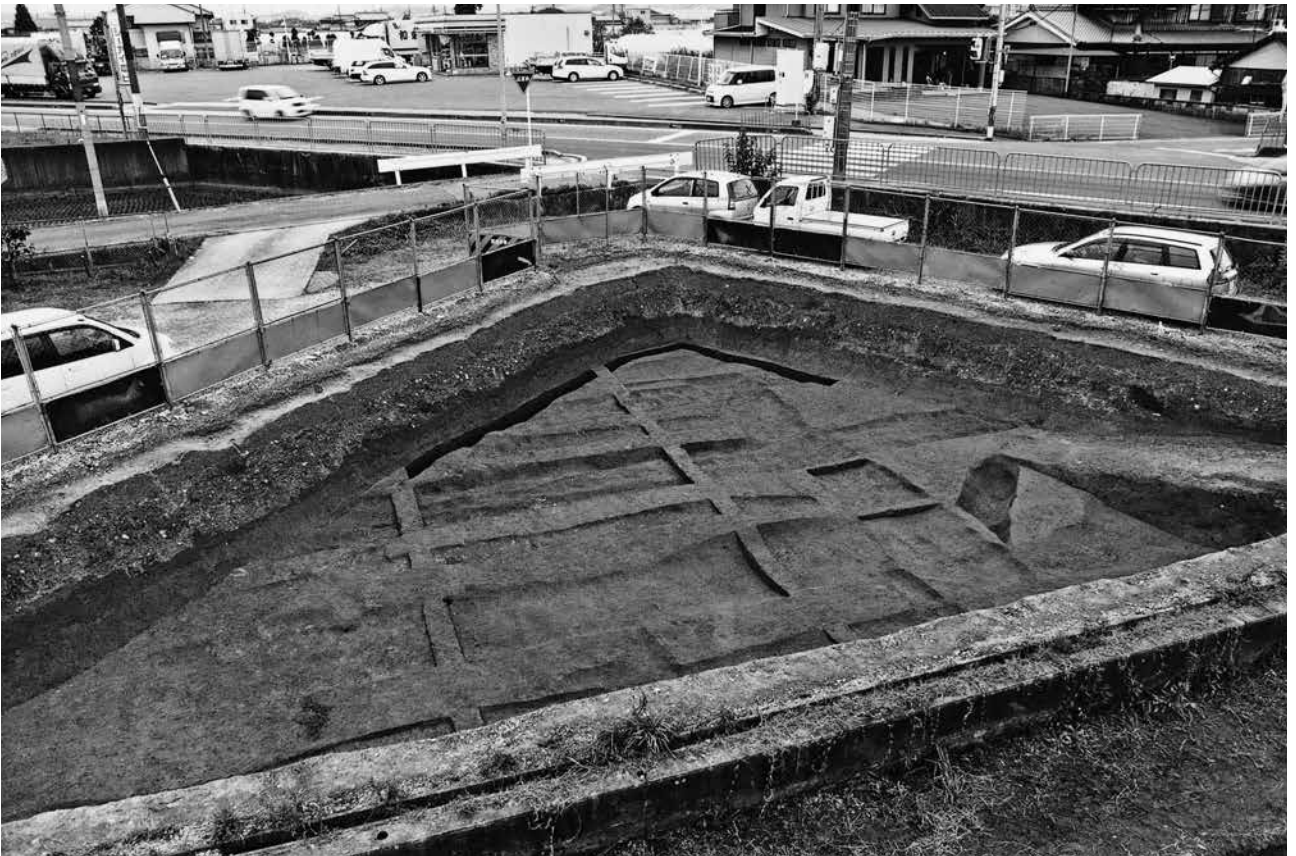
(2) 現地説明会風景(北西から)



(3) B 地区西壁土層断面(東から)



(1) A1地区中世第2遺構面、古墳時代遺構面全景(北から)



(2) A1地区中世第1面全景(北東から)



(1) A 1 地区竪穴式住居跡 S H50
全景(北から)



(2) A 1 地区竪穴式住居跡 S H60
全景(東から)



(3) A 1 地区竪穴式住居跡 S H63
全景(南西から)



(1) A 1 地区土器だまり S X15
(西から)



(2) A 1 地区中世第2面全景
(東から)



(3) A 1 地区掘立柱建物跡 S B06
全景(南から)



(1) A 2 地区古墳時代遺構面全景(東から)



(2) A 2 地区古墳時代遺構面全景(北東から)



(1) A 2 地区竪穴式住居跡 S H281
全景(南西から)



(2) A 2 地区竪穴式住居跡 S H281
カマド全景(南西から)



(3) A 2 地区竪穴式住居跡 S H281
遺物出土状況(南東から)



(1) A 2 地区竪穴式住居跡 S H282
全景(南から)



(2) A 2 地区竪穴式住居跡 S H282
カマド全景(北東から)



(3) A 2 地区竪穴式住居跡 S H282
カマド全景(南東から)



(1) A 2 地区竪穴式住居跡 S H282
カマド前面遺物出土状況
(東から)



(2) A 2 地区竪穴式住居跡 S H282
鉄器出土状況(東から)



(3) A 2 地区竪穴式住居跡 S H283
全景(南西から)



(1) A 2 地区竪穴式住居跡 S H283
貯蔵穴 1 遺物出土状況
(東から)



(2) A 2 地区竪穴式住居跡 S H283
焼土除去後遺物出土状況
(南から)



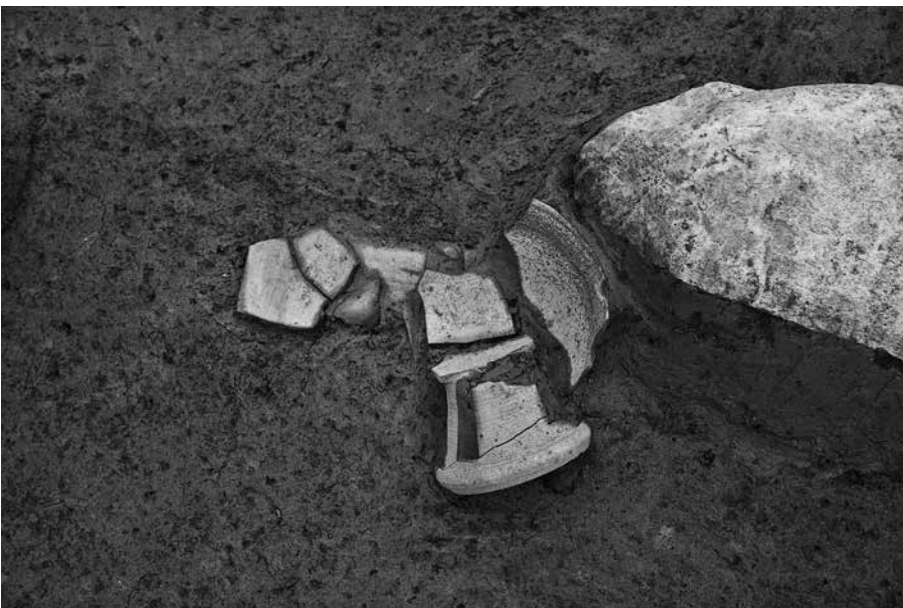
(3) A 2 地区竪穴式住居跡 S H330
全景(南から)



(1) A 2 地区竪穴式住居跡 S H330
カマド全景(南から)



(2) A 2 地区土坑 S K280遺物
出土状況(東から)



(3) A 2 地区土器だまり S X199
下層遺物出土状況(南から)



(1) A 2 地区井戸 S E215 遺物
出土状況(南から)



(2) A 2 地区井戸 S E215
断ち割り状況(南西から)



(3) A 2 地区中世遺構第1面全景
(西から)



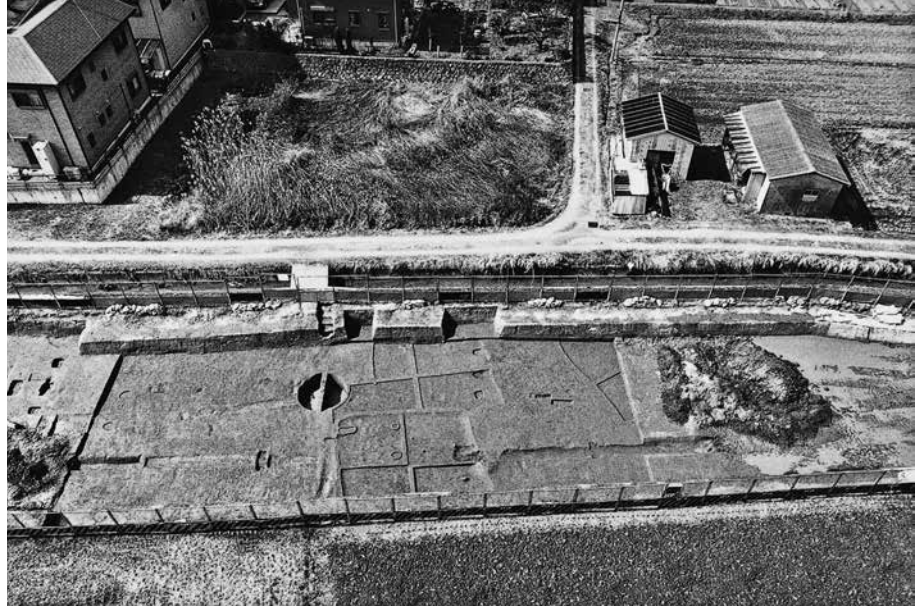
(1) A 2 地区土坑 S K143 全景
(東から)



(2) A 2 地区中世第2面全景
(南西から)



(3) A 2 地区溝 S D24 遺物出土状況
(南から)



(1) B地区古墳時代遺構面(北半部)
全景(東から)



(2) B地区古墳時代遺構面(南半部)
全景(東から)



(3) B地区古墳時代遺構面
断ち割り状況(南から)



(1) B地区竪穴式住居跡 S H99
全景(北から)



(2) B地区竪穴式住居跡 S H100・
111全景(南から)



(3) B地区竪穴式住居跡 S H105
全景(西から)



(1) B地区土坑S K126
遺物出土状況(北から)



(2) B地区土坑S K126
遺物出土状況(南から)



(3) B地区土坑S K91
遺物出土状況(北から)



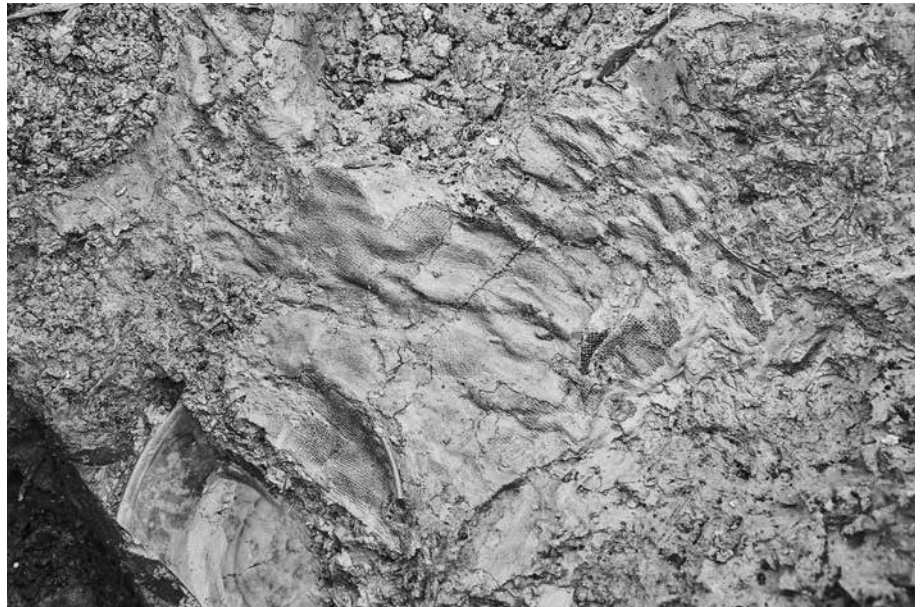
(1) B地区土坑S X96全景(南から)



(2) B地区土坑S X96土層断面状況(南から)



(1) B地区土坑S X96遺物出土状況
(南から)



(2) B地区土坑S X96漆塗り不明
製品出土状況(南から)



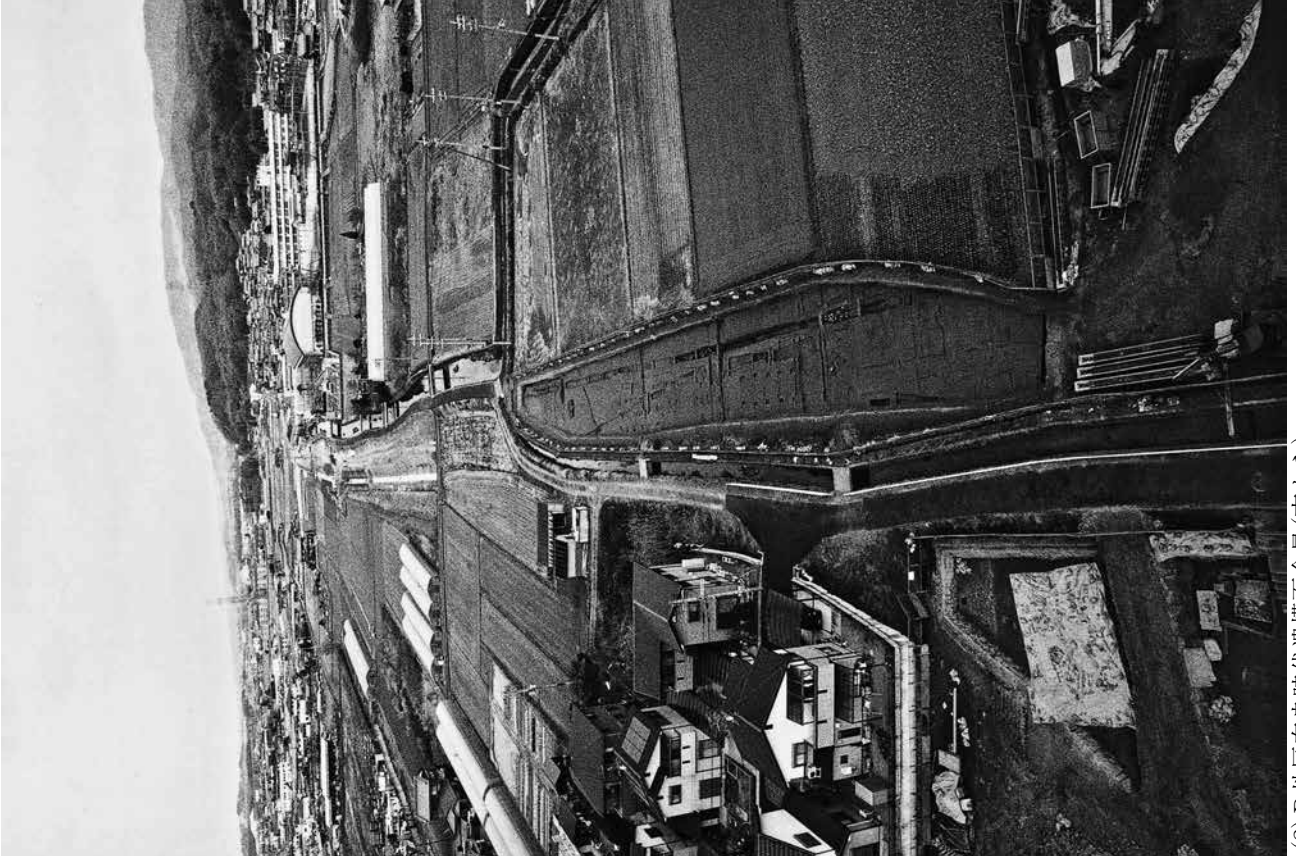
(3) B地区土坑S X96完掘状況
(南東から)



(1) B地区奈良時代遺構面全景(東から)



(2) B地区奈良時代遺構面全景(南西から)



(2) B地区奈良時代遺構面全景(南から)



(1) B地区奈良時代遺構面全景(北から)



(1) B地区溝S D21全景(南から)



(2) B地区溝S D21北部遺物
出土状況(北から)



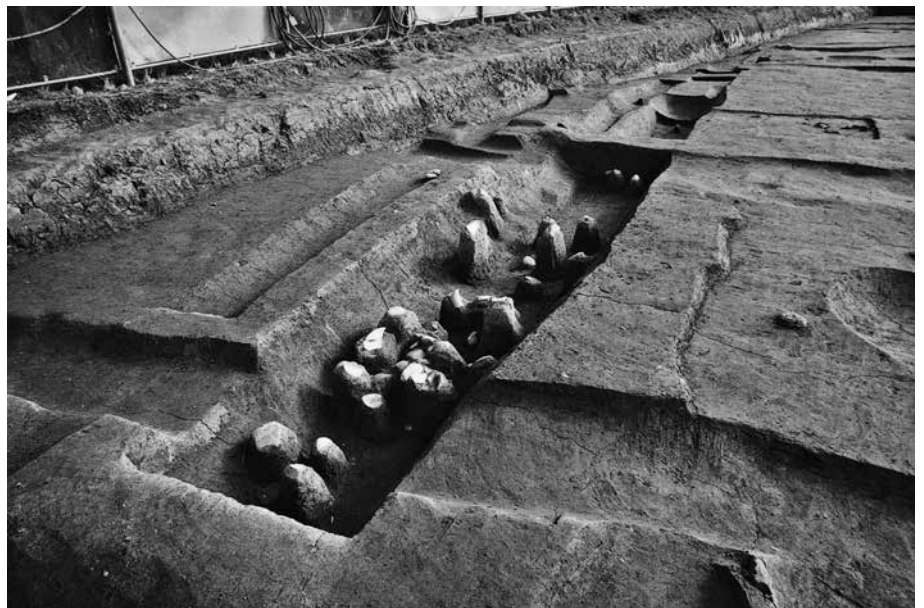
(3) B地区溝S D21北部遺物
出土状況(西から)



(1) B地区溝S D21中部遺物
出土状況(南から)



(2) B地区溝S D21南部遺物
出土状況(東から)



(3) B地区溝S D21南部遺物
出土状況(北西から)



(1) B地区溝S D21南部最上層遺物
出土状況(南東から)



(2) B地区溝S D21北部土層断面
(南から)



(3) B地区溝S D21南部土層断面
(北から)



(1) B地区土坑SK102全景
(西から)



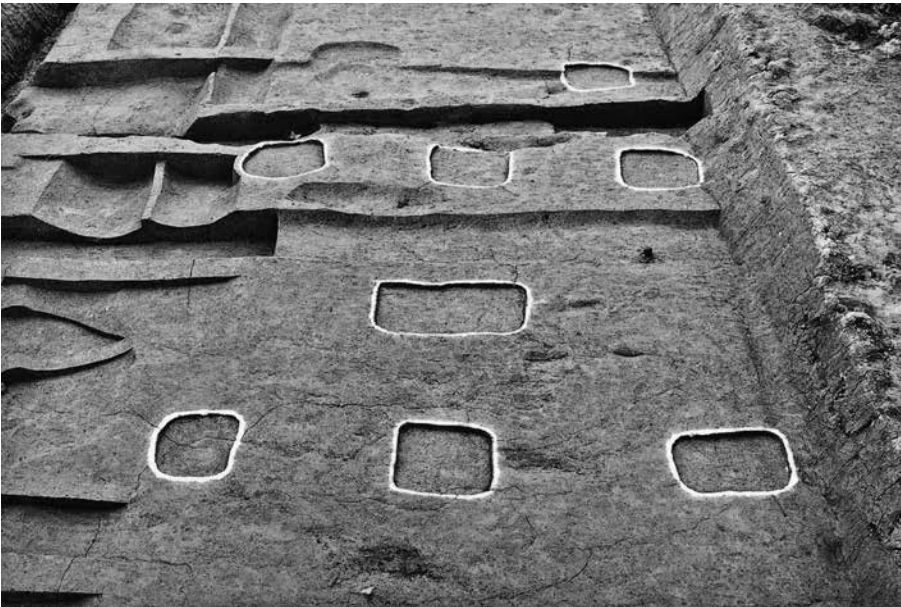
(2) B地区掘立柱建物群全景
(北から)



(3) B地区掘立柱建物跡SB01
全景(北から)



(1) B地区掘立柱建物跡S B01柱穴
S P65遺物出土状況(東から)



(2) B地区掘立柱建物跡S B02全景
(北から)



(3) B地区掘立柱建物跡S B03全景
(北から)



(1) B地区掘立柱建物跡S B04全景
(北から)



(2) B地区掘立柱建物跡S B04
柱穴S P58遺物出土状況
(西から)



(3) B地区軒平瓦出土状況
(北から)



(1) B地区土坑S K32全景(東から)



(2) B地区中世遺構面(北半部)全景
(南から)

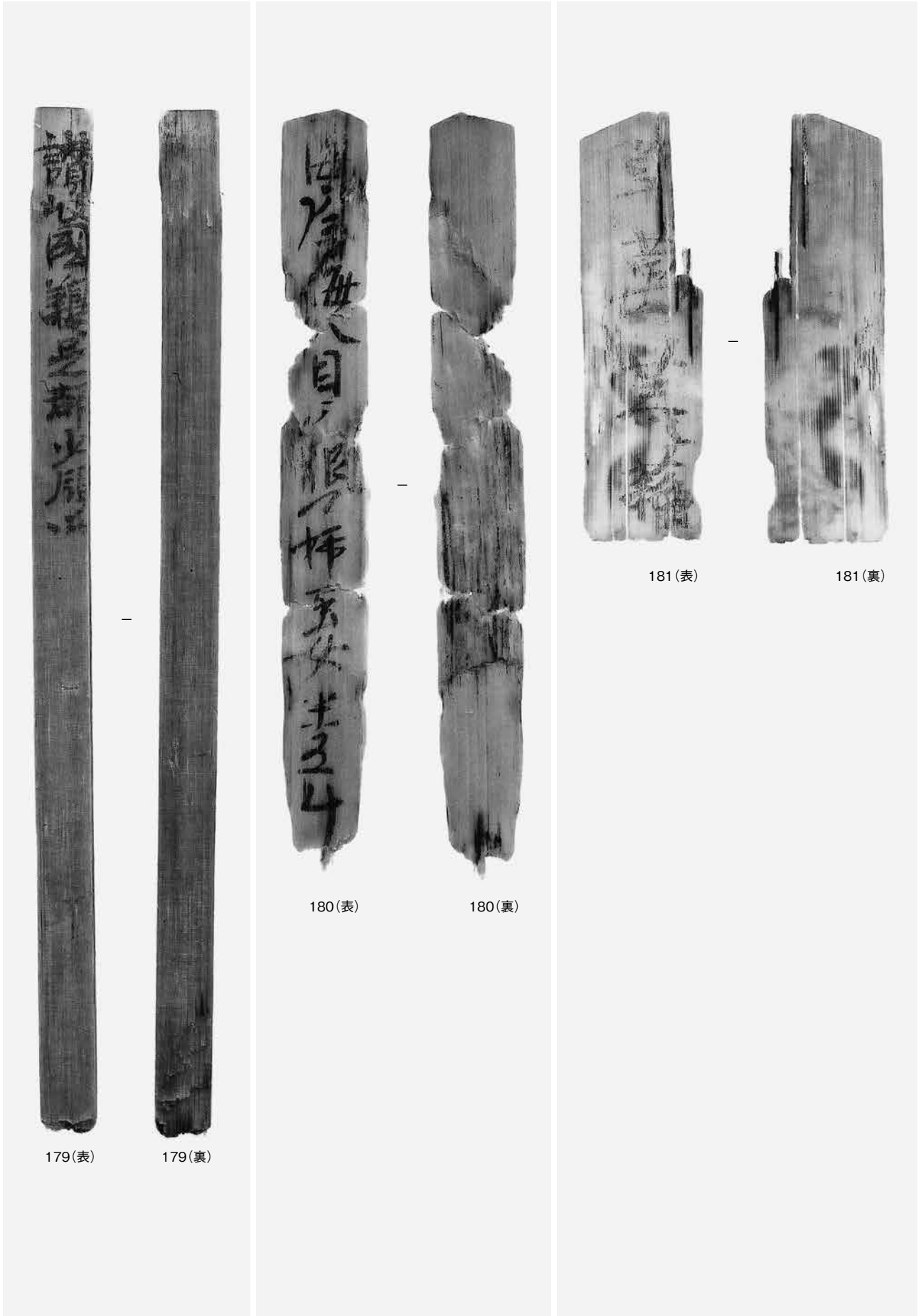


(3) B地区中世遺構面(南半部)全景
(南から)

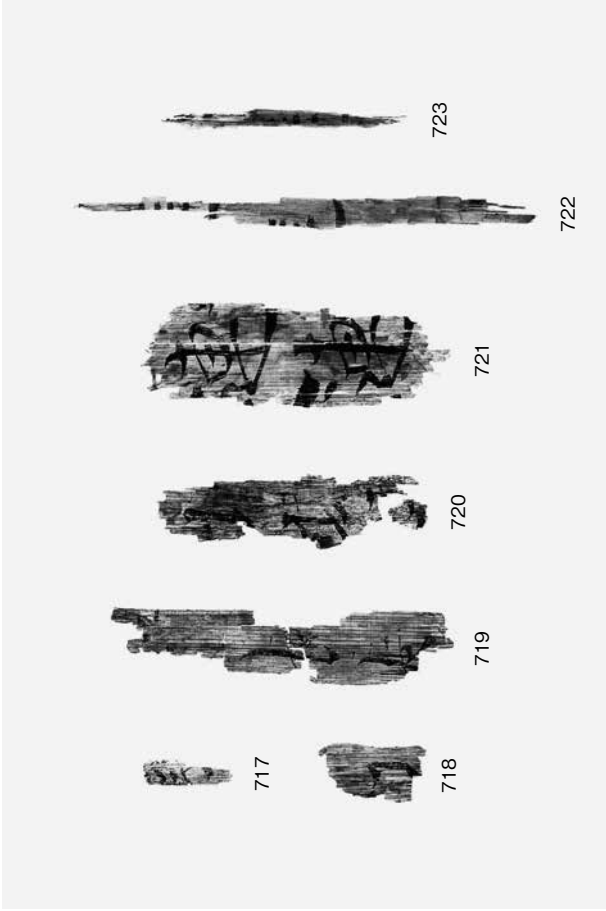




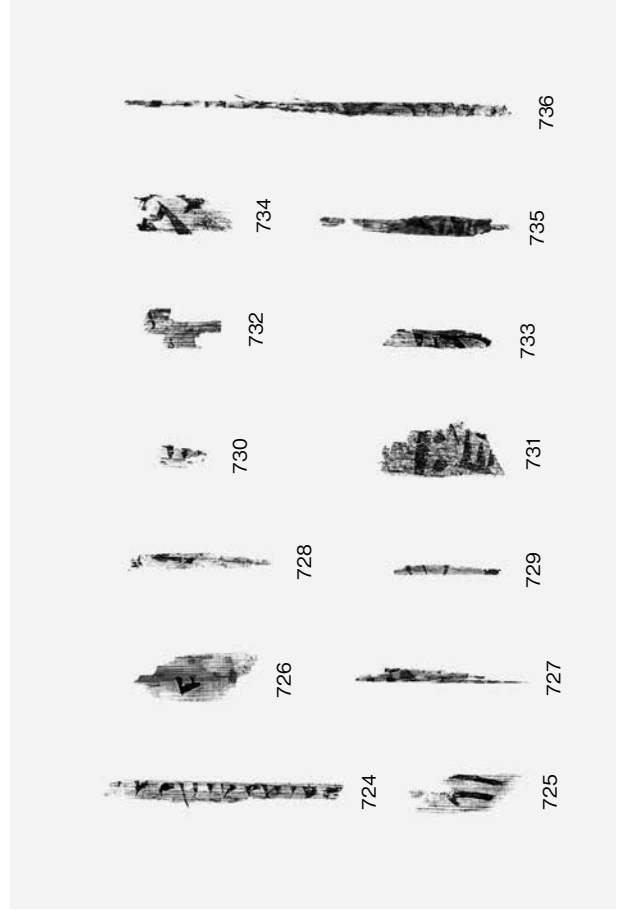




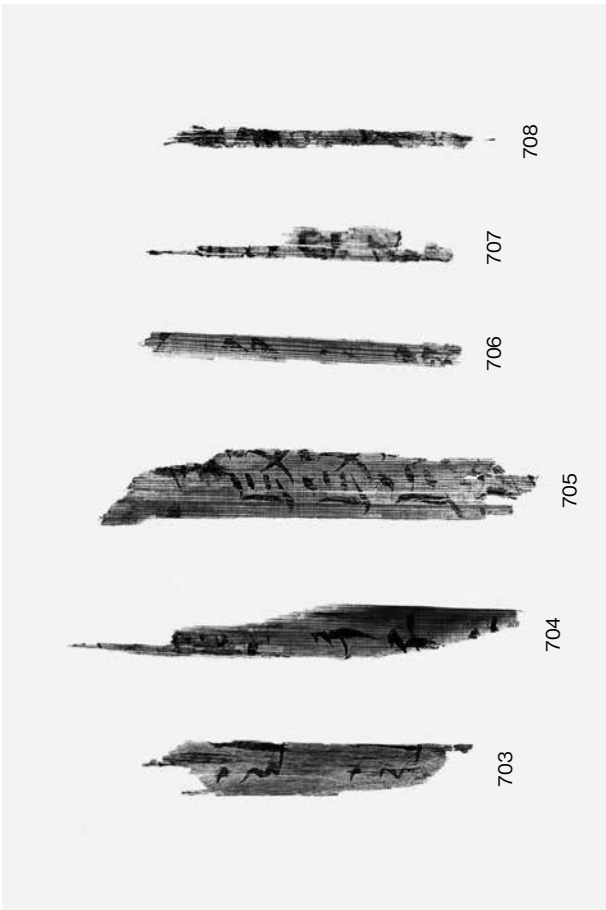
出土遺物 4 木簡



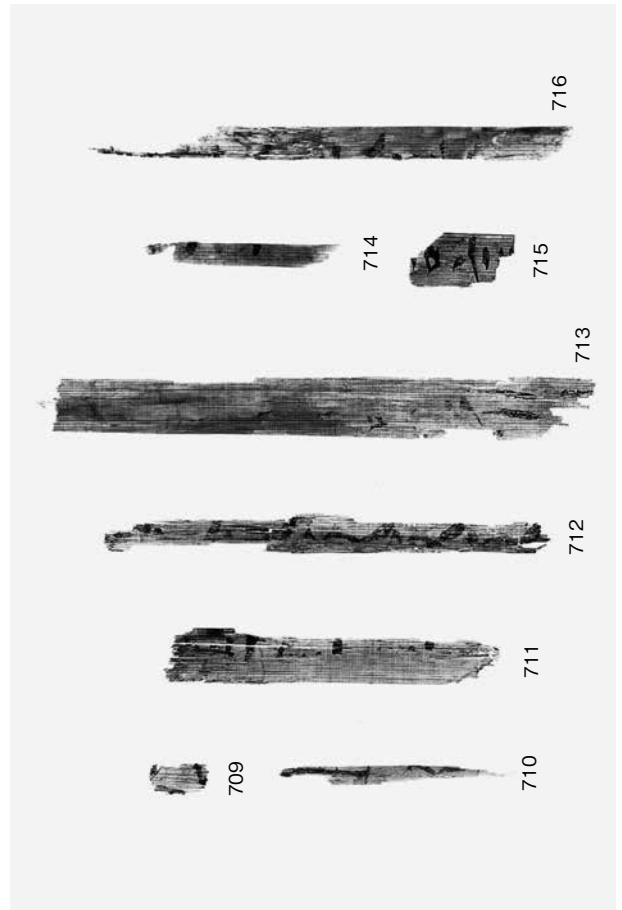
(3) 出土遺物7 削屑



(4) 出土遺物8 削屑



(1) 出土遺物5 削屑



(2) 出土遺物6 削屑



182



186(凸面)



186(凹面)



183



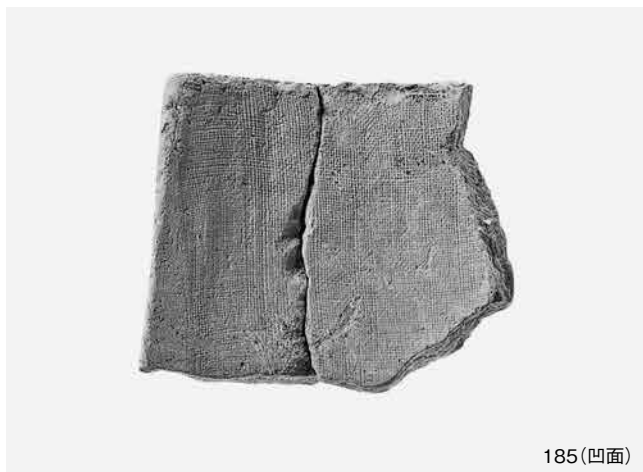
184



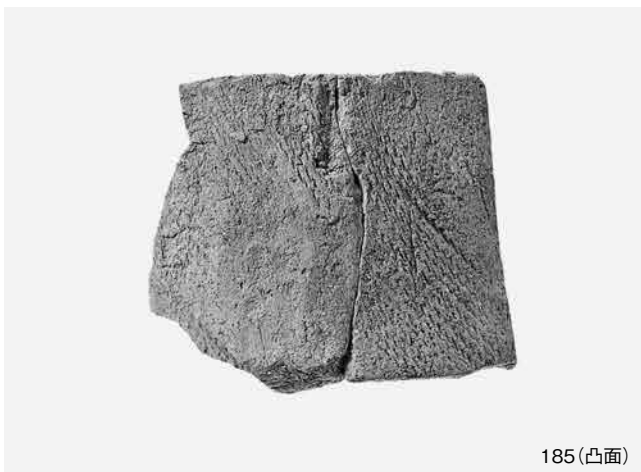
194(凹面)



194(凸面)



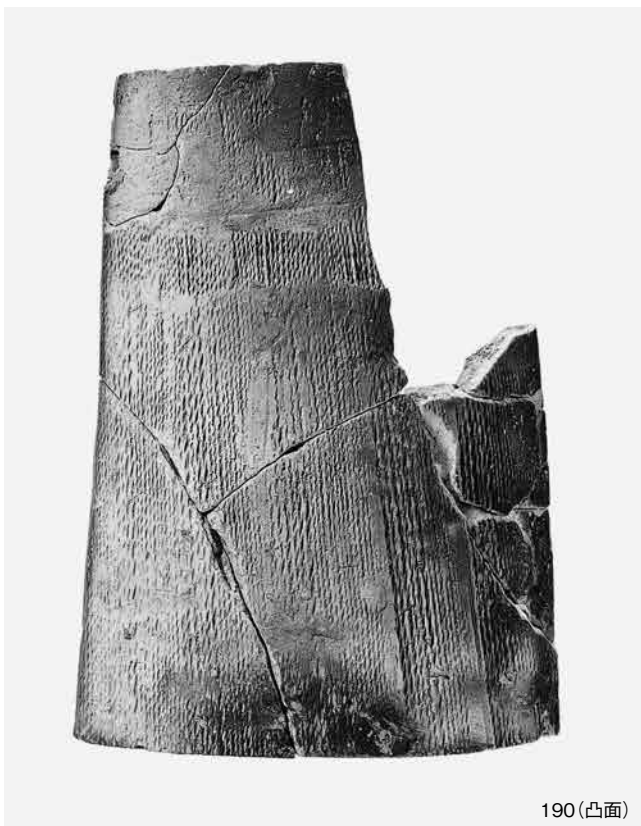
185(凹面)



185(凸面)



190(凹面)



190(凸面)



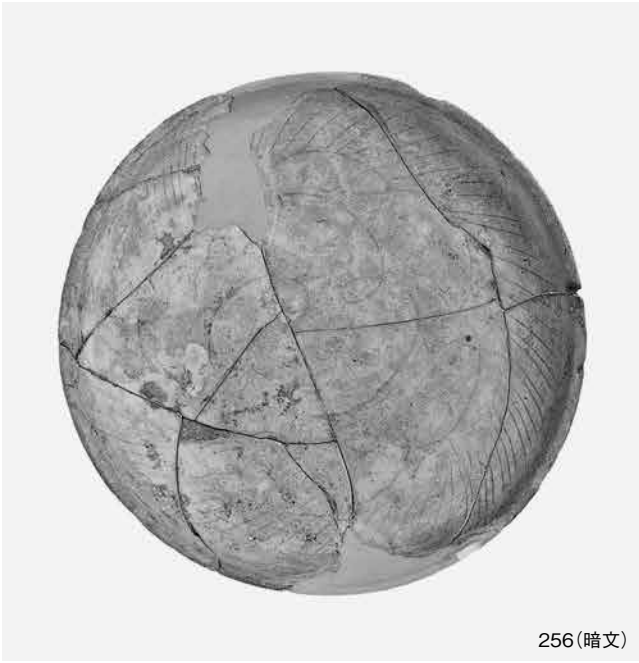
192(凹面)



192(凸面)









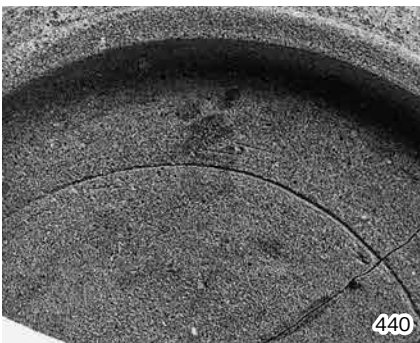
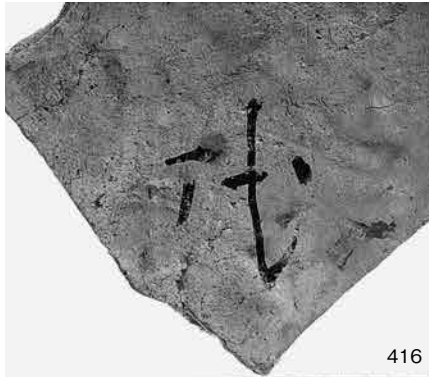
出土遺物14 土坑 S X96出土土師器



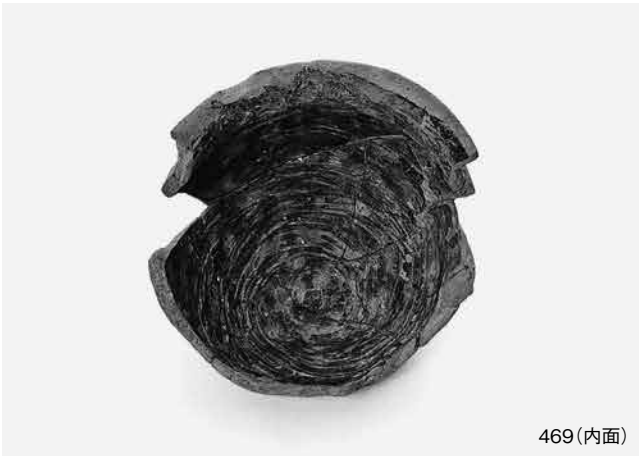
出土遺物15 土坑 S X96出土須恵器

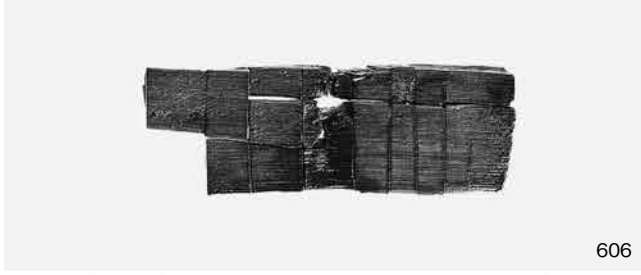


出土遺物16 土坑 S X96出土須恵器

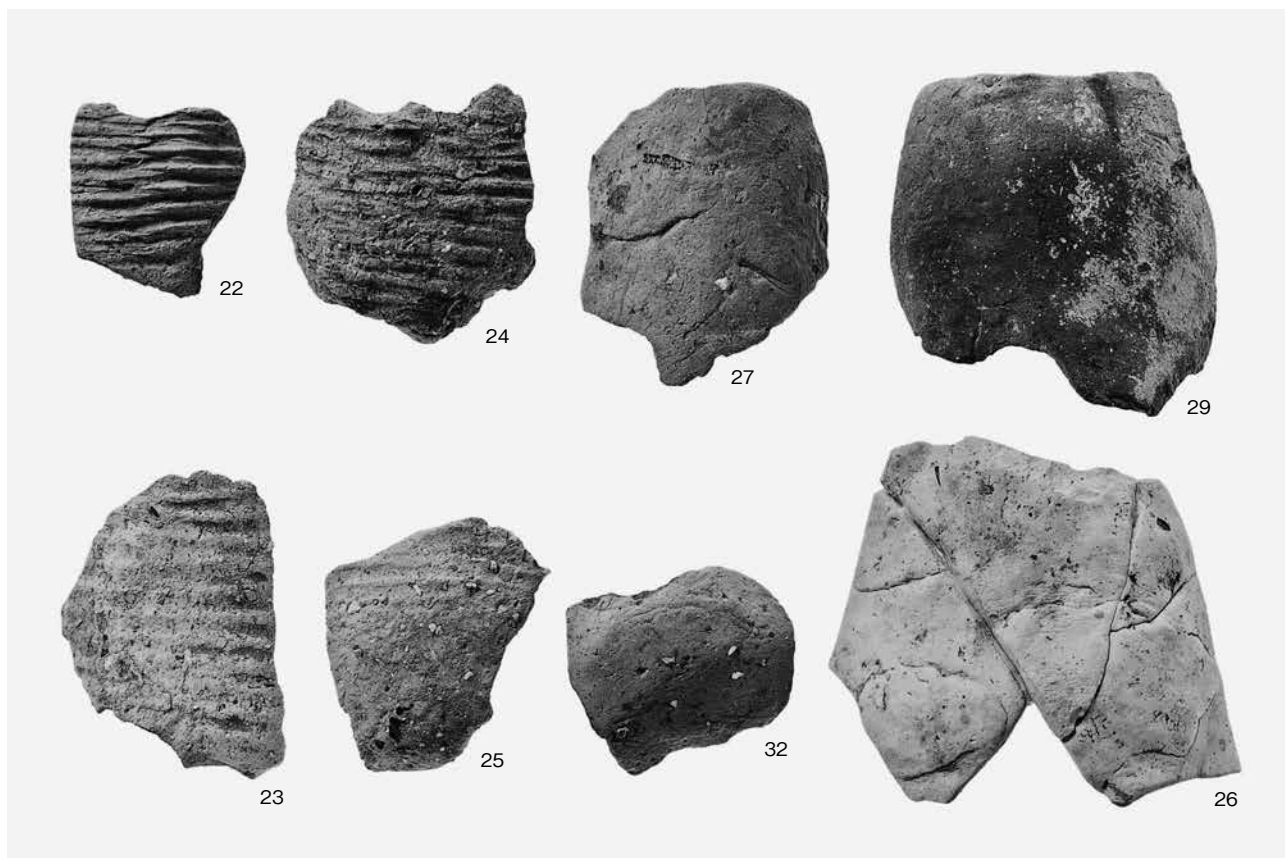


出土遺物17 土坑 S X96出土墨書土器

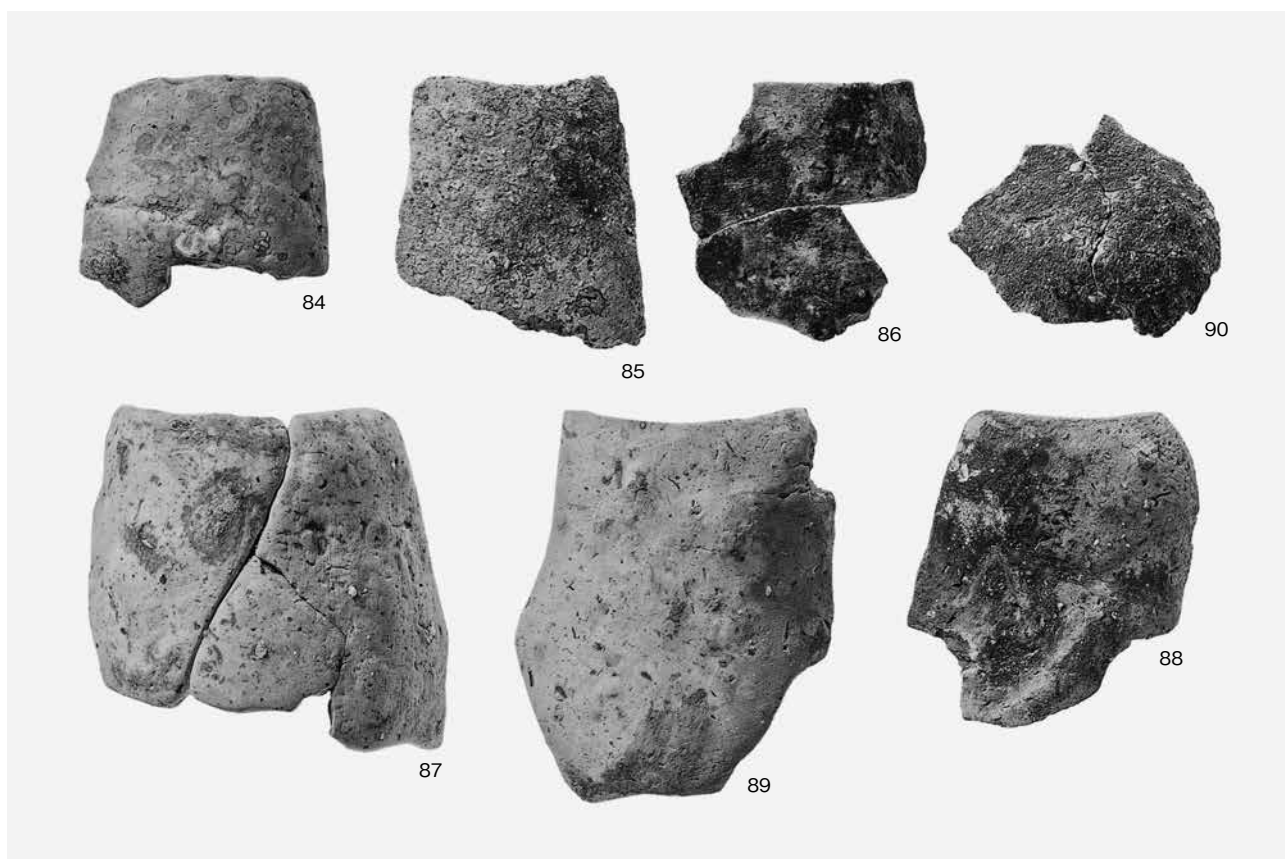




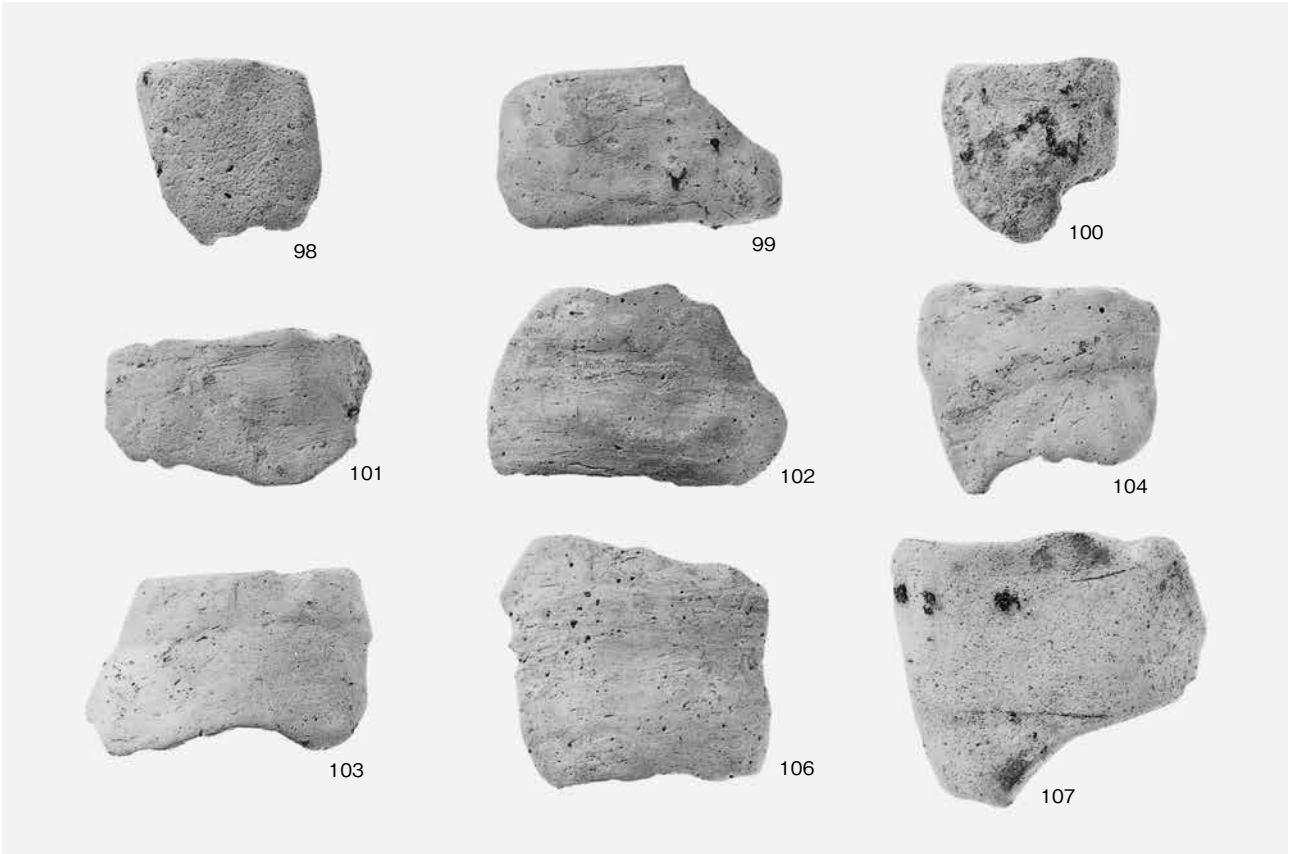
出土遺物19 溝S D21出土土器・土坑S X96出土木製品



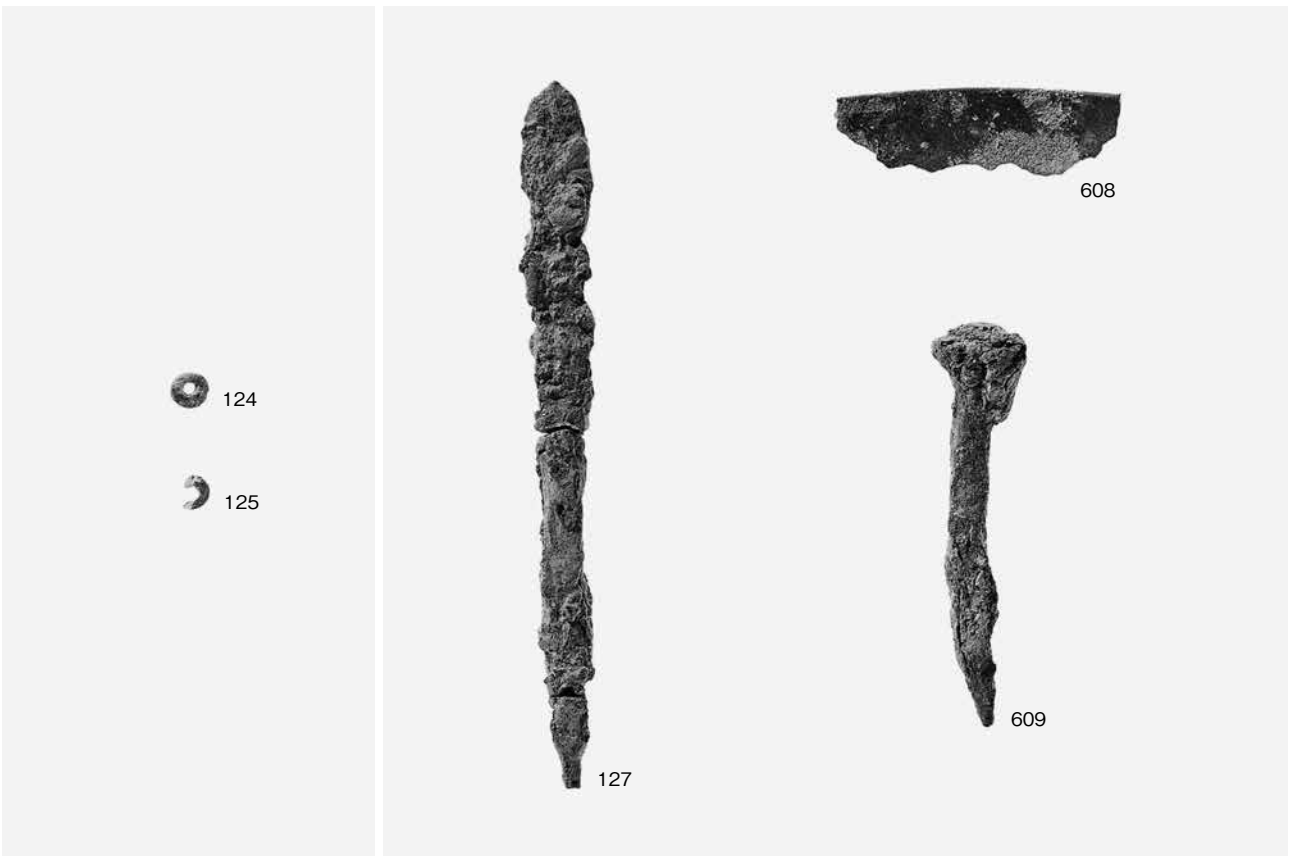
(1) 出土遺物20 竪穴式住居跡 S H50出土製塩土器



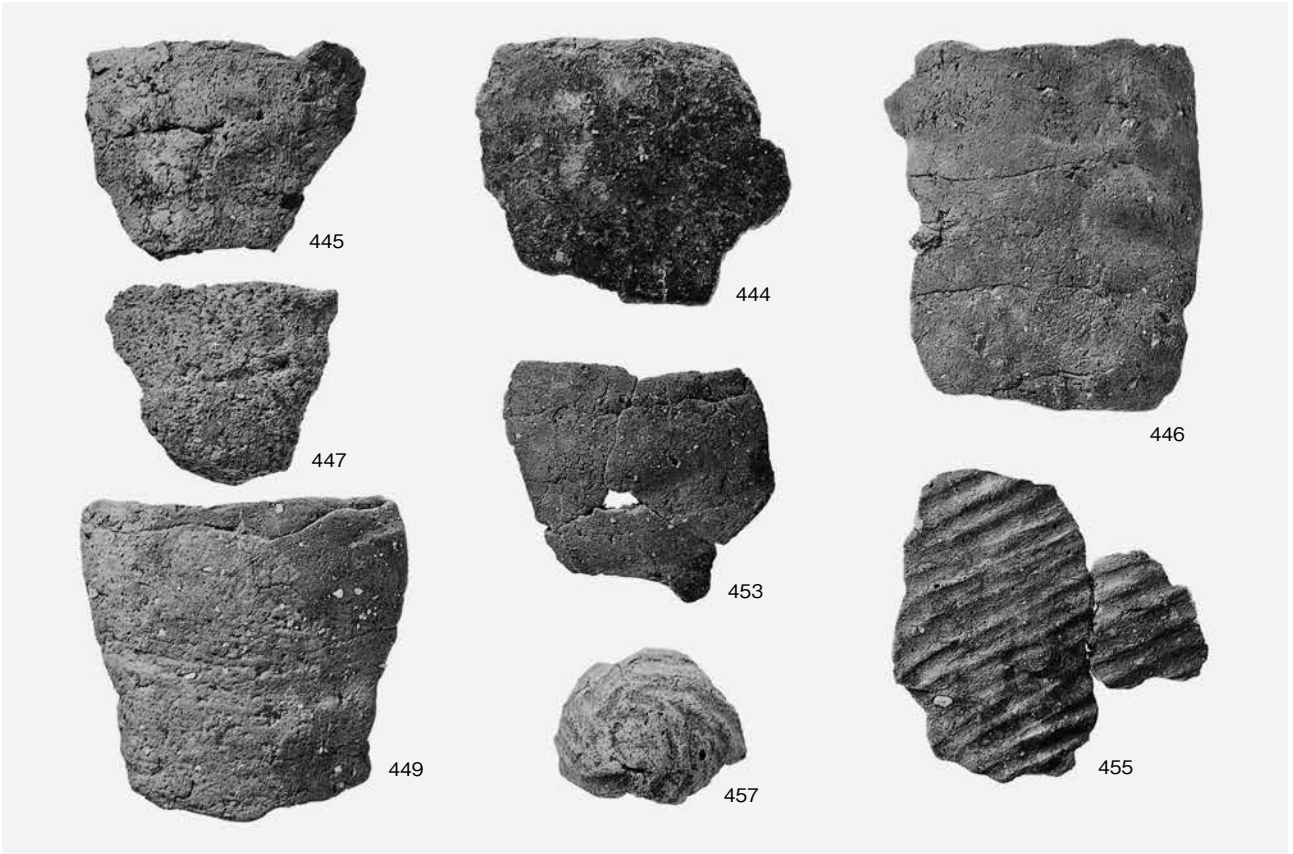
(2) 出土遺物21 竪穴式住居跡 S H283出土製塩土器



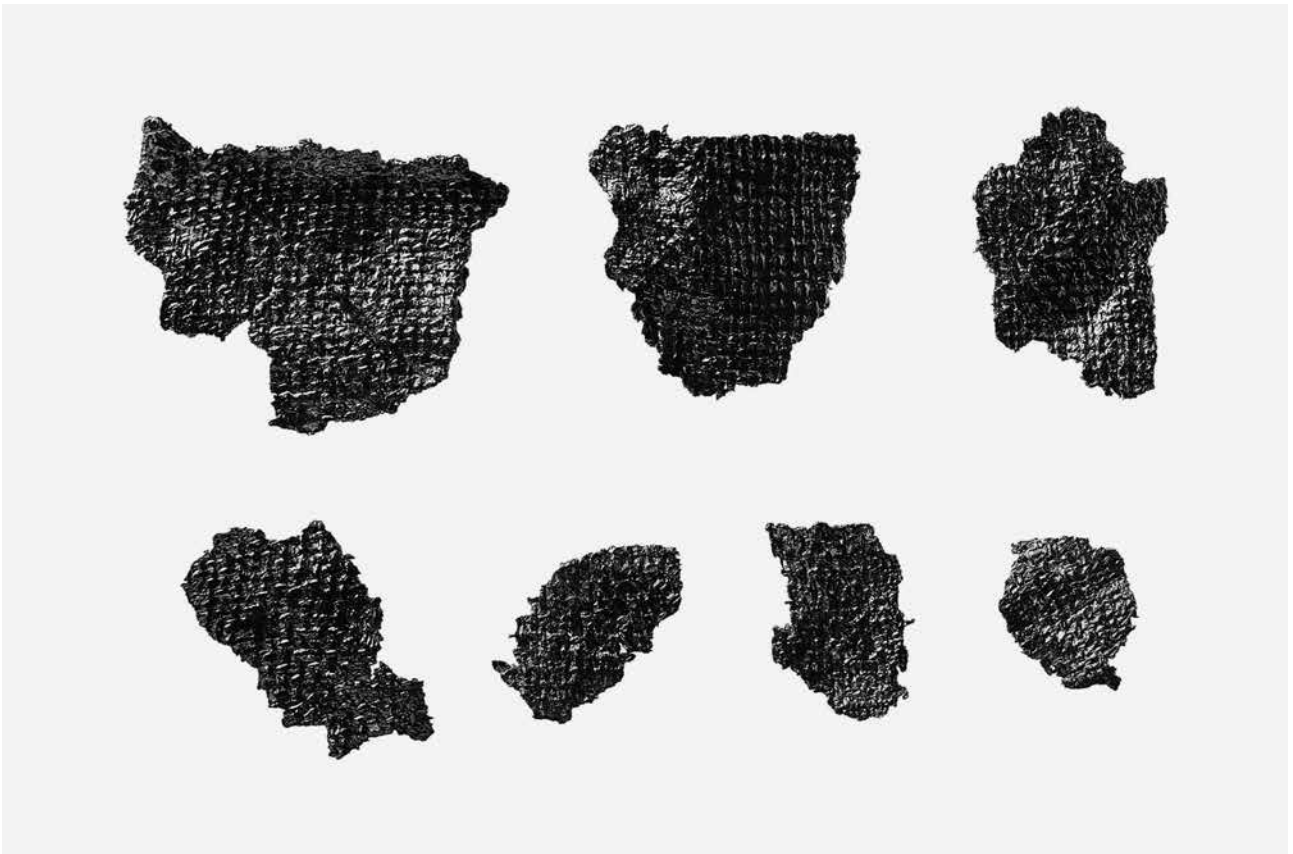
(1) 出土遺物22 土坑S K280出土製塩土器



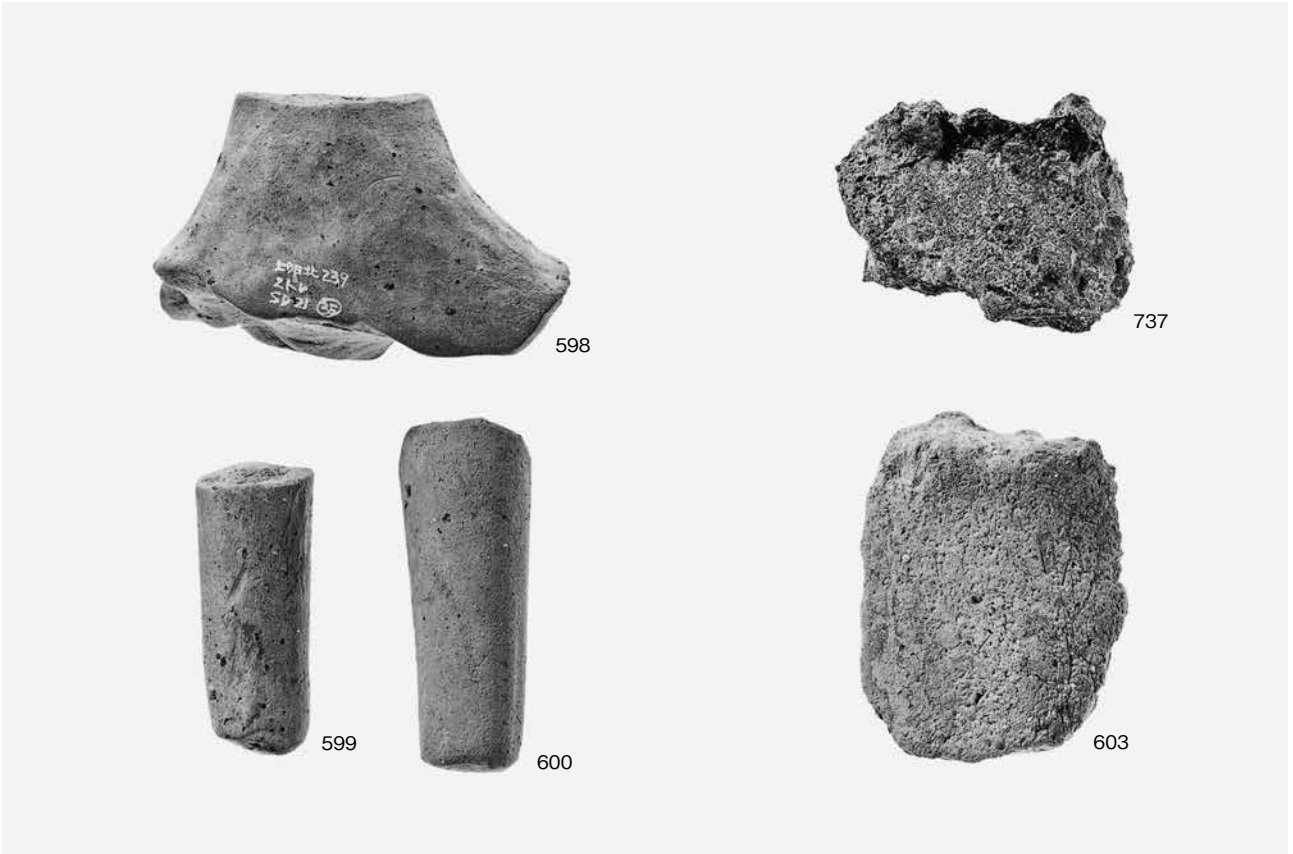
(2) 出土遺物23 各遺構出土玉類・銅製品・鉄製品



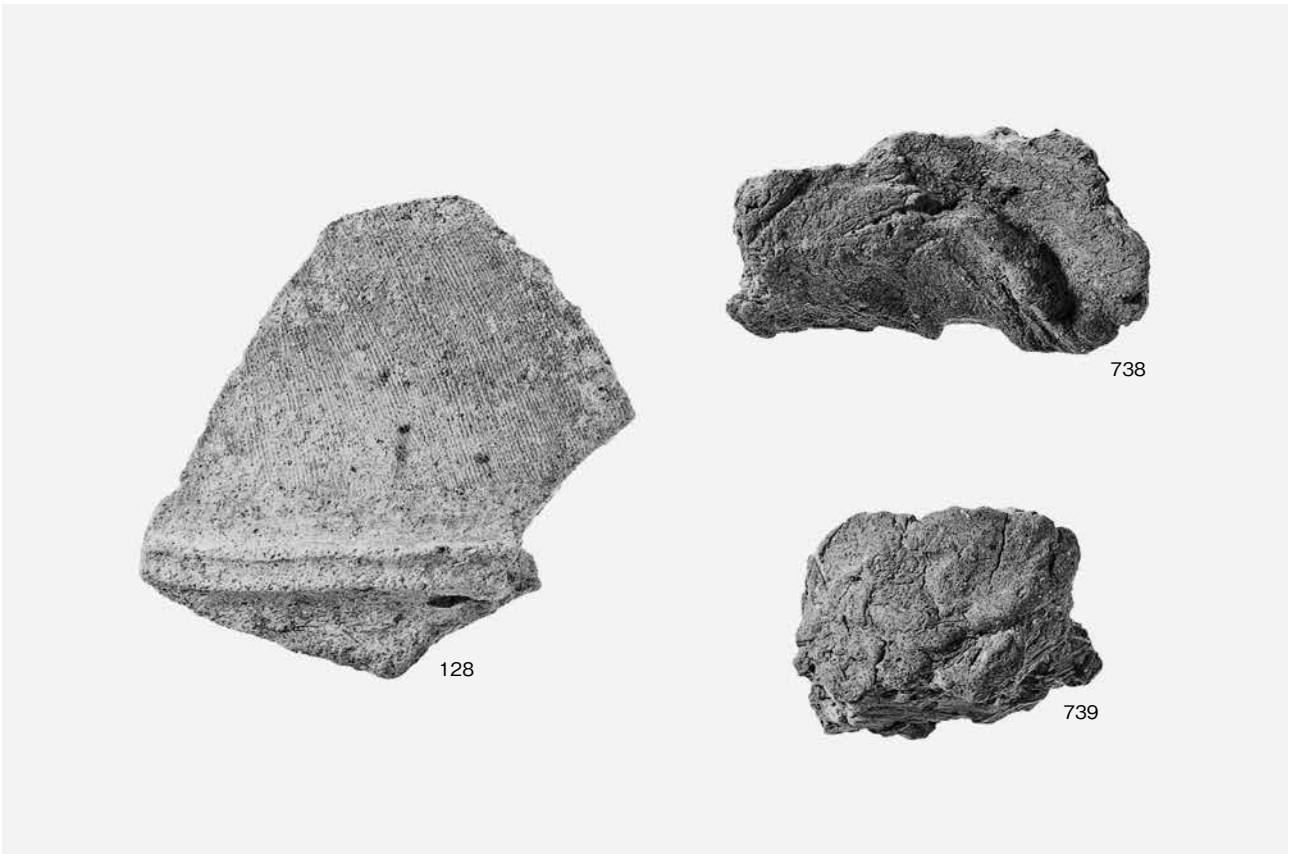
(1)出土遺物24 土坑S X96出土製塩土器



(2)出土遺物25 土坑S X96出土漆塗り不明製品



(1)出土遺物26 各遺構出土土馬・鞆羽口



(2)出土遺物27 各遺構出土埴輪ほか

報告書抄録

ふりがな	
書名	
副書名	
巻次	
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第150冊
編著者名	
編集機関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40番の3 Tel. 075(933) 3877
発行年月日	西暦2012年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
のじょういせきだい じゅうなな・じゅう くじ 野条遺跡第17・19次	なんたんしやぎ ちょうのじょう 南丹市八木町野条	26213	6 59	35° 05' 30"	135° 32' 02"	20100705 ～ 20101203、 20110817 ～ 20111222	1,950 (17次) 1,130 (19次)	ほ場整備
だいにそとかんじょ うどうろかんけいい せき 京都第二環状道路関 係遺跡 ながおかきょうあと うきょうだいきゅう ひやくななじゅう・ せんなな・せんにじゅ うよんじ・しもかい いんじいせき 長岡京跡右京第970・ 1007・1024次・下海 印寺遺跡	ながおかきょうし しもかいいんじに しじょう 長岡京市下海印寺 西条	26209	95 107 95 107	34° 55' 30"	135° 40' 51"	20080617 ～ 20090217、 20090408 ～ 20091222、 20100823 ～ 20101110、 20100118 ～ 20100225、 20100601 ～ 20101028	4,000	道路建設
ながおかきょうあと うきょうだいせんに じゅうよんじ・いが じいせき 長岡京跡右京第1024 次・伊賀寺遺跡	ながおかきょうし しもかいいんじか わむかい 長岡京市下海印寺 川向井	26209	96 107	34° 54' 59"	135° 41' 03"	20111205 ～ 20111216、 20111216	300	道路建設
ながおかきょうあと うきょうだいせんに じゅうよんじ・おく かいいんじいせき 長岡京跡右京第1024 次・奥海印寺遺跡	ながおかきょうし あらほり 長岡京市奥海印寺 荒堀	26209	68	34° 55' 19"	135° 40' 24"	20120112、 20120216	5	道路建設
かみこまきたいせき だいにじ 上狛北遺跡第2次	きづがわしやまし ろちょうかみこま たからもと・にし うらだい 木津川市山城町山 城町上狛宝本・西 浦代	26214	84	34° 45' 13"	135° 48' 56"	20100824 ～ 20110309	1,630	道路建設

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
野条遺跡第17・19次	集落跡	弥生 奈良～平安	溝 掘立柱建物跡・柵列	弥生土器 土師器・須恵器・瓦器	
京都第二環状道路関係遺跡 長岡京跡右京第970・1007・1024次・奥海印寺遺跡・下海印寺遺跡・伊賀寺遺跡	集落跡 集落跡 都城跡 屋敷跡 集落跡	弥生 古墳 長岡京期～平安 中世 近世	溝・竪穴式住居跡 溝・竪穴式住居跡・掘立柱建物跡 溝・掘立柱建物跡・柵列・土坑 堀・掘立柱建物跡・柵列・道路状遺構 溝・土坑	弥生土器 土師器・須恵器・石製品 土師器・須恵器・土馬・緑釉陶器・銭貨 土師器・瓦器・瓦質土器・陶磁器・瓦 陶磁器	平安時代末～鎌倉時代の堀で囲まれた屋敷地を確認
上粕北遺跡第2次	集落跡	古墳 奈良 中世	竪穴式住居跡・土坑 溝・掘立柱建物跡・土坑 ピット	土師器 木簡・墨書土器・土師器・須恵器・銅椀片・ 瓦器・瓦質土器・陶磁器	恭仁宮と同時期の遺構を確認

所収遺跡名	要約
野条遺跡第17・19次	弥生時代後期の溝や奈良～平安時代の建物群を検出した。弥生時代後期の溝は灌漑を目的に掘削されたと推定され、溝の北側に展開する同時期の集落の境界を画する溝であったと考えられる。また、この溝からは集落の境界で行われた祭祀に伴う土器が出土した。
京都第二環状道路関係遺跡 長岡京跡右京第970・1007・1024次・奥海印寺遺跡・下海印寺遺跡・伊賀寺遺跡	弥生時代末～古墳時代初頭および古墳時代後期の竪穴式住居跡を検出した。 また、平安時代末期～鎌倉時代にかけての堀に囲まれる屋敷跡を確認した。屋敷地は一辺約50mの方形に復元できる。堀と考えられる溝には土橋が架けられ、溝の内側には板塀が設けられている。屋敷地内には掘立柱建物群が分布する。屋敷地の時期は溝等の出土遺物から11世紀末頃から12世紀中頃と考えられる。 溝は近世の阿弥陀寺の区画溝として利用されていたようであり、埋土から近世陶磁器がまるとまって出土した。
上粕北遺跡第2次	古墳時代・奈良時代・中世の各時代の遺構を検出した。古墳時代については、竪穴式住居跡を8基検出した。これまで同地域で木津川左岸で未確認であった古墳時代中～後期の集落跡を確認した。奈良時代については、総延長100m以上を測る溝のほか、この溝と同じ計画方位をもつ掘立柱建物跡や建物に先行する土坑を検出した。この土坑からは多量の土器とともに木簡や木簡の削り屑が出土した。これらの遺構・遺物は恭仁宮とほぼ同じ時期であることからこれまで不明であった恭仁京城との関連が想定される。

京都府遺跡調査報告集 第150冊

平成24年3月31日

発行 公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141